

とある無力の幻想郷～紅魔館の佐天さん～

王・オブ・王

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学園都市第七学区、柵川中学校一年のレベル0佐天涙子。

謎の現象により見事に幻想入り、彼女はある一軒家のベランダにひっかかることとなった。

レベル0の佐天さんが頑張って自らの幻想を守りぬく！

時には幻想郷で、時には学園都市で、彼女はどう『自分だけの現実』を守っていくのか！

「貴方がその幻想を殺そうと言うなら、まずその幻想を守りぬく！」

LEVEL0〈紅血痕〉の佐天涙子。

学園都市と幻想郷が交差する時、物語が始まる――。

目次

第一章 紅魔館の佐天さん

1, 幻想郷	1
2, 紅魔館	13
3, 友達	23
4, 希望	36
5, 紅魔の従者	47
6, 紅魔でのそれから	58
7, 遠くて近いそこで	69

第二章 とある科学の学園都市

8, 超電磁砲〈レールガン〉	81
9, 紅瞳〈スカーレットアイズ〉	95
10, 幻想御手〈レベルアップ〉	106
11, 無能力者〈佐天と上条〉	116
12, 超能力〈天才〉	131
13, 魔術結社〈執行人〉	144
14, 幻影殺し〈フアントムブレイカー〉	155
15, 木山春生〈せんせい〉	167
16, 幻想猛獣〈AIMバースト〉	179
17, 不幸〈日常〉	190
18, 特別講習	200
19, 十万三千冊〈インデックス〉	218
20, 幻想殺し〈イマジンブレイカー〉	229
21, 帰還〈帰宅〉	238

第三章 紅魔の佐天さん

2 2,	おかえり	245
2 3,	幻想サイド	251
2 4,	魔術	261
2 5,	家族	269
2 6,	人里の先生	280
2 7,	欠けた月	291
2 8,	開幕は鳥と蟲	299
2 9,	龍の弟子	312
3 0,	人と妖怪と時々半妖	323
3 1,	似ているようで違うもの	332
3 2,	異変は終わるが？	341
3 3,	怖いものは	349
3 4,	異変が終わって	362
3 5,	新しく見えるモノ	371
第四章 とある都市の表裏		
3 6,	学園都市へアンフェア	382
3 7,	武装無能力集団へスキルアウト	392
3 8,	そして、拳が語る	402
3 9,	異変へイベント	416
4 0,	トラブル・マイライフ	428
4 1,	乱雑解放へポルターガイスト	440
4 2,	Voice〈声〉	451
4 3,	神ならぬ身にて	463
4 4,	今、なにが見えていますか？	477
4 5,	守護の力へゲートガーディアン	489

4 6, 吸血殺しヘディープブラッド 502

第五章 とある科学の表裏

◇プロフィール 517

4 7, 落としもの 520

4 8, 佐天病 529

4 9, 平和な日々 540

5 0, これがナンパというものですか 550

5 1, 毒舌シスターと噛み付きシスター 561

5 2, アイテム 568

5 3, 無能力と第四位 579

5 4, 命をかけられますか? 592

5 5, 自分の意思 601

5 6, 亡き者の意思 609

5 7, Dear My Friend 624

第六章 新たな一步の裏表

5 8, 踏み出す一步と戻る日常 633

5 9, 勉強会 641

6 0, 別れと出会い 653

6 1, フェブリ 666

6 2, 感染拡大 673

第一章 紅魔館の佐天さん

1, 幻想郷

超能力が科学として認知？

そりや使つてればそうはなるでしょうけれど、やはり私にとっては超能力なんて摩訶不思議だ。別に超能力が嫌いなわけでもなければ気持ち悪いと思っっているわけでもない。

むしろ超能力には憧れてるし、じやなきや薬物投与やら頭に電極をぶっさされて弄られたりなんてしてやるわけがない。それでも、それだけでもなんの能力ももってない私なわけだけれど、いつか能力は宿るものなのだ！ そう、主人公としてはあとからものすごい能力を持つのが当然の摂理なわけで、もちろんヒーローはあとからやってくるわけで……。

「佐天涙子、能力判定レベル〃0〃です」

うはあくこりや手厳しい。えっ、エラーとか出て『なんだこれは！』みたいな展開とかないの？

ちよつと待つて先生、いや、そんな手でシツシツ、てやんないで……も一回！ もう一回チャンスを!!

結果、やはり私「佐天涙子」のレベルは0であり、能力の片鱗すら見えない状況。

やつてられないってレベルじゃありませんことよ！ と言つても誰かがツツコんでくれるわけもない。

私の親友こと初春はレベル1であり私の周りも全員レベルは低くとも能力がある。

ほんつと、なんで私みたいなのが学園都市にいるんだろつて……やっぱり思つちやうのよね。

「私つて————いらん子なんじゃ……」

そんな風についつぶやいた瞬間、私の体の感覚がふと無くなる。

失神だとか未現物質だとかそんなチャチなもんじゃ断じてない。

もつとおそろしいものの片鱗を……お？

突然、景色が変われば視界には緑が映った。確かに見えるのは森。なぜ？ why？ まさか能力者の仕業!? おのれ能力者!!

「いいいいいやあああああつ!!」

私はただ森へと落ちていく。

ああ、レベル0でなければどうにでもなったのだろう……たぶん。そう思いながらも、私は森へと落ちていくのだった。

◆◆◆◆◆

あたいは氷の妖精チルノ。

みんな私をバカと言うけれど、そんなことはない。私はさいきよーなんだから!

なんたつて他の妖精たちも私を恐れて近寄らないほど……完璧にさいきよーね。さいきよーとは常に孤独を背負うものなのよ。

たしかそんなことをこの間誰かが言ってた。

このチルノ、今日もまたさいきよーとしての自由を感じながら自宅で起き上がるのよ。

ちなみに自宅は親友の大ちゃんと一緒に木で頑張つて作ったのよさ。

「今日は天気かな?」

なあんて思つて我が家のカーテンを開けば、そこには昨日大ちゃんに干してもらつた服でもリボンでもなく、人間……。ん? 人間?

なんで人間!?

馬鹿^⑨な、このさいきよーであるあたいにわけがわからないことがあるなんて!

冷気を操る程度の能力、れれれ冷静になるのよあた……。

「あんたはなんで家の物干し竿に引つかかつてるのさ?」

「こ、こんな木々があるばしよになんで物干し竿が……まあ助かったけれど、それより降りていいですか?」

目の前の人間がそう言うのでとりあえず頷くと、あたいの家に土足

で踏み込んで、靴を脱ぐ。

軽く見回した後に玄関まで歩いて行ってそつと靴を置くと、戻つくる。

そしてあたいの前に座ると『どうぞ』と言ってあたいの家ででかい顔を始めた。こいつは相当の馬鹿だと思ふのよさ。

「えつと、私佐天涙子！」

「あたいはチルノ」

おそらくさいきよーの私を狙う「しきやく」の一人に違いないので私はいつでも氷が出せるようにしておく。

さいきよーとはいついかなるときも狙われる立場なのでしっかりと準備をしておかなきゃいけないって、誰かが言ってた。

目の前のさてるいことか言う女の子はあまり危なくない気がするけど。

「チルノって……外国人？ いやでもここ外国じゃなくて日本だね。畳だし……」

ああなるほど、このあたいだからこそ理解できたわ。

「あんたは『がいらいじん』ってわけね」

わけがわかんないって顔をしてるわね、しょうがないから説明してあげることにする。

「とりあえず、ここは幻想郷」

そして無言の佐天涙子にあたいは話を聞かせることにした。

面倒なことは覚えないうことにしているあたいだけどころへんのことぐらいはよく覚えている。

まあ自分が住んでる場所なんだから当然よね。

とりあえず幻想郷ってのはこのことで、妖怪とか妖精とかがいる場所ってことだけは伝える。つてか伝わったわよね？

「妖怪？ 妖精？ またまたあゝ」

笑う佐天の目の前にいるあたいをなんだと思つて……つて見せればいいのか！ あたいつたら天才ね！

「あたいは妖精なのさー！」

軽く飛んで天井に手をついてみると、佐天が固まる。

ん？ どうしたの？

「げ、ゲエツ！ 空を飛んだーッ！」

なんか突然顔を変えてそう言う佐天だけど、あたいにはわけがわからない。

外来人って空飛べないの？

ああ〜なんか誰かがそんなこと言ってた気がしないでもないわね。でもこれでとりあえず信じるよね？

「いや、あるいはただの科学である可能性も」

なん……だと……？

「なんでわかんないかな、とりあえず幻想郷ではなんだっけ……あれ、幻想郷では……そう、あれを捨てなきゃダメなのよ！」

「あれってなにさ？」

その程度もご察しできないとは相当の馬鹿ね。

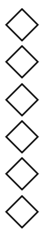
さて、もうそろそろ大ちゃんが来るころね……二回説明するのは面倒だから大ちゃんに頼もう。

こんな馬鹿は相手にできないっての。

「チルノちゃん！」

ほら来た。さすが我が親友と言わせてもらおう！

さあて、あとは任せた！



結局結論を言いますと、私佐天涙子は大妖精こと大ちゃんの説明でようやく色々と理解できました。

いや、わけがわからないということが理解できたのだけけど……。

とりあえずここは幻想郷、言わば世界として違うらしい。

妖怪賢者とか呼ばれてる人が作ってうんぬん。まああまり覚えていても意味がないだろうと思って覚えてない、まあ気にしないでいいよね！

どうやらここは学園都市しかり、異能を持った人たちが集まる場所みたいだね。もう異能っていうか人間じゃないらしいんだけど……。

「どこからどう見ても人間にしか見えないよねえ〜」

「ちよ、佐天さん!」

私があちらこちらから大妖精こと大ちゃんを見ていると、さすがに怒られた。

まあ、ドロワなのが残念だよね。

とここはかたなく初春と似たような雰囲気があるし……。

「とりあえず理解完了ですよ大妖精ちゃん!」

「あつ、大ちゃんでもいいですよ。チルノちゃんもそう呼びますし」

「じゃあ大ちゃんです!」

これからも仲良くやって行こうと思うけれど、帰らなきや不味いんじゃないかね? とか思ったり。

そうだよね、初春だつてアケミだつてむーちゃんとマコちゃんだつて心配するよね。行方不明になったら実家にも連絡行くだらうし。

帰らなきやなあ、学園都市に……。

「大ちゃんただいま!」

いつの間にやら出かけていたチルノちゃんが帰ってきた。

まあ自分が同じ話をして、もう一回聞くのも酷だよね。うん、わかる。

どうやらチルノちゃんはまた一人、新しい人を連れてきたみたい。

「あつ、魔理沙さん」

「よ、外来人だつて?」

そう言つて現れる黒と白の衣装を着た少女。

魔女みたいな帽子をかぶつて箒を持つてるつてことは、まじで魔法使いつてことかな?

別に妖怪とかいるんだから不思議じゃないとは思うけど……やっぱり不思議だ。

「あつ、佐天涙子です。よろしく」

「あたしは霧雨魔理沙、普通の魔法使いさ」

なあにを言っているのでしょうか?

普通の魔法使いつてなにさ、レベル5の超能力者が『私普通です』つて言っているようなものですよ。それは!

「とりあえず外来人ってことは戻ることもできるけど、経緯はたぶんミスただけだろうしな。あんたみたいなやつが不要とされることもないだろう」

なんだか喜んでいいのかどうしていいのか、しっかりとした幻想入りというやつではないということとは理解できるんだよね。大ちゃんって説明うまいから。

それに比べてチルノちゃんは……まああれだね、ご察してください。

魔理沙さんは『帰れる神社まで連れて行ってやるよ!』と気前よく言ってくれた。

「ありがとうございます!」

お礼を言うと魔理沙さんは『おう』と親指を立てた手を私に向ける。姉御肌というか気前がいいというか、なんだかい人だ。

帰る前に大ちゃんがどうやら朝御飯を作ってくれるらしい。

大ちゃんマジ天使。

とりあえず、四人で一緒に御飯を食べることにした。付け足すなら純和風の御飯なんて久しぶりで実に美味なり!

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

魔理沙さんの箒の後ろに乗せてもらって、やって来たのは神社で一緒に飛んできたチルノちゃんと大ちゃん、私は三人のあとをついていく形で神社の縁側へとやってきた。

わあ、純和風の家なんて初めてみた。学園都市じゃまずお目にかかれないよねえ。

え、縁側から入っちゃっていいの? ああ、なんかおいでって感じだし……。

「お、おじやまします」

靴を脱いで縁側から入ると、三人のあとを追って襖を開いて先に進む。

三人と共に入ったのは居間で、そこには一人の巫女さんが座っていた。しかも腋が開きたいやらしい感じの巫女、これはエロい。

幻想郷から去る間にこんなものが見れるなんて私ったら幸せ。

「あんたたちはまた、玄関つてものが家にはあるのよ」

やっぱり怒られてるし、でもお茶すすりながら言うぐらいだしそこまで怒ってないのかも？ 私が初春のスカートをめくる時よりは怒ってないのは確かみたいだけど……。

大ちゃんは常識人なので苦笑いしてる。チルノちゃんは『窓にぶら下がってるよりはマシね』なんて耳が痛いようなことを言う。

「玄関も縁側も変わんないってそれより霊夢、外来人だ。帰してやってくれ」

「無理よ、結界に異常があつてね。どうにも外来人を帰せる状況じゃないの……どっかの『管理側』がなんとかしてくれるだろうけれどそれまでは結界から入ることも出すこともできないわ」

つまりは、どういうこと？

「その子には悪いけど、帰るのは諦めなさい」

え……。

「ええええええええええつ!!?」

あまりの驚きに大声で叫んでしまう私。

耳を押さえるチルノちゃんと、直撃を受けて耳を押さえる魔理沙さんと巫女さんと大ちゃん。

ああ、ごめんごめん！ てかこういう時の行動早いねチルノちゃん。

「ま、まあ気持ちかわからないわけじゃないけどな、そりゃ叫びたくもなるさ」

「なにもずつとつて言ってるわけじゃないのよ。結界がどうにかなるまでつてこと」

巫女さんは私のことも気にせず冷静にお茶を飲んでる。

淡白っ！ どこまでも淡白っ！ くそおくどうすれば良いんだ私
っ！

「まあとりあえず自分の暮らすところでも探しに行くのね」

ひどっ！

「そう言うなって霊夢、それに佐天は正式な幻想入りじゃないだろう

からいろいろあるだろ」

魔理沙さんがたしなめると、ため息をつく巫女さん。

チルノちゃんと魔理沙さんが『帰れ』という巫女さんをよそに座布団の上に座ると、立っているのは私と大ちゃんだけになる。唯一の常識人って感じだよ、人じゃないらしいけど。

巫女さんは目を細めて私を見たあとに、軽くため息をつく。若干失礼だ。

「座りなさいよ、暇つぶしにあんたの居たところの話でも聞かせなさい」

そう言っただち上がった巫女さんがどこかへ行ってしまった。

大ちゃんと私が座って、かの巫女さんこと霊夢さんを待っていると隣りに座っている魔理沙さんが耳打ちをしてくる。

「あれでも佐天に同情してんだよ」

「何言ってるのあんたは」

そう言っただけ現れた霊夢さんを見て、魔理沙さんは『やべっ』とすぐに耳打ちをやめる。

お茶を配る霊夢さん……案外優しいし本当にそうなのかな？

一見淡泊な人にも見えたけど、そんな感じの人だっているよね。

「あたい知ってるよ、霊夢みたいな人のことをツンデレって言うって！」

「チルノも黙ってなさい！」

そう言っくと、霊夢さんが座って再びお茶を飲む。

おせんべいまで用意して、聞く気満々じゃないですか！

「で、どんなところなのよ？」

「ではお話ししましょう、この佐天涙子が居た科学の宝庫学園都市の実態を！」

そして私は話を始めることにした。

みんな外の世界が興味深いのか食い入るように聞いてくれていたので嬉しい。

いやはや、私の話がここまで注目を集めるとは、私が注目を集めるのは初春のスカートをめくった時ぐらいですよみなさん？

とりあえず、長々と二時間ほど話をする事になるけれど、お茶がなければ喉カラツカラになるっての。

話し終わると、全員が若干なりとも『ようやくか』という表情を見せる。聞いてきたのはみんななのにどこか理不尽だ。

まあいいけど、聴いてる間は少なからずみんな目を輝かせて可愛かったし。

これでドロワじゃなければ佐天さんは満足でした。

「あのさ、直球で言うよとあんたなんでそんなとこにいるの？」
うわくお、思ったより直球。

「それは、能力が使いたってのが」

「でもそんな才能しかものが言わない場所にいられたの？ あたしには到底理解できないわね……」

「そ、そんな言い方……」

そんな言い方はない。私だって能力が全然でなくて落ち込んだ。でもスキルアウトになるような度胸も無いし、私はただ頑張ることしかできないし、それでもパーソナルリアリティとか言われてもわからなくて、それでも頑張ってたのに。

ああもう、なんでこんな風に、霊夢さんはなんでそんなこと……。

そしたら突然、魔理沙さんが顔を上げた。少し表情は険しい。

「才能がなんだ、努力をするしかないんだよあたしたち凡人は」

どうしたんだろう？ やけに熱が籠った言葉に思える。

「なあ佐天、お前しばらくこっちいて良いぐらいだと思うよ私は……」
「なんでですか？」

「お前のためだ。学園都市から少し離れてみな、レベルが低ければ立場が下なんてそんな場所間違ってるぜ、それにレベルが低ければ同じレベルが低いやつらに襲われてもあつさりやられるなんて……」

魔理沙さんが凄い真剣な表情でそう言う。

私は少し戸惑うも、次に口を開いたのは意外にも彼女だった。

「あたしもそう思う、頭の中弄り回されるなんて悪役のしよぎょうね」

魔理沙さんと同じぐらい真剣な表情のチルノちゃん。

二人の雰囲気にか些か圧倒されてしまう私だけれど、そんな緊迫した雰囲気を和らげようと空気の読める彼女が動く。

彼女とはもちろん、大ちゃんのこと。

「と、とにかくどちらにしる佐天さんは幻想郷にしばらくとどまるしかないんだしどうですか？　しばらく私たちと一緒に幻想郷で力をつけるというのは……どうやら結構危ない場所も多いみたいですし自分の身を守るためにも……」

「よし佐天あたしが鍛えてやる！」

名乗りを上げる魔理沙さん、なんでこの人こんなにやる気満々なんだろうと思うも、少しばかり能力開花のためになるんじゃないかと楽しみにもなる。

例の弾幕勝負というやつもできれば戻った時に能力認定されるかもしれないし！　でも『程度の能力』っていうのは超能力と関係あるのかな？

もしかしてそれが能力だったり……。

なんて私はなんだかんだで心の中のワクワクが止まらなくなってきた。

「オラ、ワクワクしてきたぞっ！　て感じね！」

「チルノちゃんなんで知ってるの？」

「天狗から漫画を見せてもらったのよさ！」

幻想入りなわけじゃないだろうけれど……迷い込んだのかな？

ドラ○ンボール……。

「とりあえず暮らすところとか考えないとじゃ？」

ちよつとした大ちゃん言葉に、頷く私と魔理沙さんとチルノちゃん。

どうしよつか、どうすればいいんだろう……。

魔理沙さんがチラツと霊夢さんの方を見る。

げっ、という表情を浮かべた後に私を見るのでだいたい意味がわかった。

「いえいえ、お願いなんてしませんよ！」

「当たり前よ、お願いされたってごめんだからね」
そう言うのと彼女はお茶を飲む飲み。

「とりあえずチルノの家にも暮らして、紅魔館でも行けば？」
一言、そう言った。

「まああたいの家までは良いわ。でも霊夢は馬鹿ね、吸血鬼が初見の人間を通すわけじゃないじゃない。首を吹っ飛ばされるのが目に見えるわね」

チルノちゃんは霊夢さんの提案に肩をすくめてやれやれと笑う。

「あんたにだけは言われたくないわよ、ていうかあんたとか魔理沙が頼めば良いじゃない。結構仲いいんでしょ？」

そう言った霊夢さんを魔理沙さんとチルノちゃんが見た後、二人して顔を合わせてまた肩をすくめる。

しかも今回は明らかに挑発的というか『やれやれ霊夢は』みたいな顔だ。

それが逆鱗に触れたのか二人の顔に御札が二枚ほど飛んで、二人は顔をおさえてうづくまる。

これはダサいと佐天さんは思ってしまうのです。

「と、とりあえずレミリアに頼んだってしようがないだろ！ あいつ絶対佐天のこと吸い尽くすぜ！」

なにそれ、貞操の危機なんだけど……。

「それにアイツ、あたしとお茶してる時もちよくちよく首見てくるし、てか霊夢も前そう言ってたじゃない」

やばい人じゃない？ 私やばいんじゃないですか？

「じゃあ三人で頼めば良いんじゃないですか？」

そんな言葉に、霊夢さんとチルノちゃんと魔理沙さんが顔を見合わせる。

ああ、これは不味い。佐天さん大ピンチ、さよなら私の青春。

こんなことなら私の相棒こと金属バットさんを持ってくれば……。

「面倒だけど、行きましようか」

「おお、霊夢が優しい！」

「明日は大雨のあげく、光る雲を突き抜け fly away ね！」

そんなSparkling! しなくても……。

「じゃ行こうぜ佐天!」

「行くわよ佐天!」

「行きましようか佐天さん」

「しっかり空を飛ぶこと覚えなさいよ佐天」

ああ、みんなが私を呼んでいる。

私のために動いてくれるなんて嬉しいよ、レベル0の私のためなんかに……。

でもこれからおつそろしいレミアとかいう人に会いにくわけであって、一言だけ心の中で言わせて欲しい。

感謝もしてるし恩義も感じてるよもちろん、でも一言だけ……。

——不幸だっ!!

2、紅魔館

私、佐天涙子は森を抜けて、紅の館へとやって来ていた。

その名も紅魔館、悪魔が住むと言われている館でその不気味な雰囲気から人里の人々から恐れられている。

そういう私も前まではかなりビビリながらここに来ててたっけ。

私は寝ている門番の横を抜けて門を通り庭を通り、館の中に――

「お邪魔します〜！」

入れば迎えてくれるのはもちろん銀髪の瀟洒なメイドさんこと十六夜咲夜さんである。

彼女の後を着いていき二階のテラスへと出れば、そこには明るい空の下日傘の下紅茶を優雅に飲む“幼女”ことこの紅魔館の主“レミア・スカーレット”がいた。

カリスマ溢れる笑みを浮かべながら、彼女は私に向かって微笑んだ。

目の前の吸血鬼や刃物メイドさん、この人たちにも幻想郷に来てからの“二ヶ月”ですっかり慣れてしまった。

「レミア様どうも！」

「来たわね涙子、貴女ぐらいよ私を様と読んでくれるのは」

「私たちも呼びますよ」

「お前たちは従者だもの」

なんだか格調高き吸血鬼がこうなると佐天さんもさすがに同情しますよ。

まあ同情で『様』をつけているわけじゃない。仮にも彼女は私の『修行』に協力してくれているし、バイト先であるこの紅魔館の主でもあるのだから付けざるをえない。

魔理沙さんとか霊夢さんとかチルノちゃんは『レミアはレミアでよくね?』と言うけれどさすがに……480歳以上上なわけだしね。

一年前まで小学生だった私がそんな吸血鬼に馴れ馴れしくするな

んて。

「美鈴はまた居眠りね、まったく……涙子、悪いけど美鈴を起こしに行ってくれる？ ついでに寝起きに相手してもらいなさい」

咲夜さんの言葉に頷いて、私は降りることにした。

さすがに二階から飛び降りるような真似はまだできないから、階段をせいぜい10段飛ばしで降りるぐらい。

一階へとつくとそのまま私は門へと向かわず曲がる。

すれ違ふ「妖精メイド」たちと軽く挨拶を交わしながら私は一室に入った。

はい！ 着替え完了！ これが伝説の佐天さんスーパーチャイナモードなのだ〜！

と言ってもツツコンでくれる初春も居ない。まあこれはこれでここ二ヶ月で随分馴れてしまった。悲しいことに……。

とりあえず私は走って館を出ると庭を抜けて門から出ると先ほどから寝ている門番こと紅^{ホン}美鈴^{メイリン}さんに声をかけます。

ちなみに私の服とほぼ変わらない感じなのはこの服を用意してくれたのが美鈴さんだからで……なんてどうでもいいか。

「起きてくださいよ美鈴さん！」

「ん……ふあゝ、ああ！ おはよう、涙子」

「とりあえず、隙有り！」

私は美鈴さん直伝の拳を放つが軽く受け流されてしまう。

うう、最近強くなってきたと思っただけどやっぱり近距離なら咲夜さんとか霊夢さんより強いや。

「こら、勝手にはじめちゃいけませんよ。それでも涙子では私に一撃当てるのも難しいけど」

「あははっ、でもそう言っただけのも今のうちだけですよ！」

美鈴さんが軽く足で地を蹴って離れると、拳を構えた。

毎日の一回以上の日課と言っただけいい美鈴さんとの手合わせ、もれなく70連敗中の私だけど、最近は中々持つようになってきたと思う。

学園都市に帰ってもへんのスキルアウトには負けないつもり。

魔理沙さんが言った意味、最初は良くわからなかったけど今ならわかる。

努力をしても才能が関わってくるもので、死ぬほど努力しても努力する方面によっては何も変わらない。だからこそ学園都市で言うスキルアウトって人たちは減らない。

同じように私もこのまま続けて実が出ないより当面の身の安全の確保、そして少しでも誰かを守れるようにと修行を本気でやることにした。

「いい拳ですー！」

美鈴さんの言葉、私の鋭くなった拳は呆気なく受け流されちゃったけど、ここで終わるほど単純じゃない。

こんなので終わってたら二ヶ月は無駄な時間になっちゃうから……。

私は腕を素早く引くと、片足を上げてそのまま頭より高く持つていき美鈴さんの顎を狙う。

「おつといい足です。成長しましたね」

そう言っつて褒めてくれる美鈴さん。

こう言っつてもらえると自分がしつかり成長してるのだと、強くなっているのだと実感できて嬉しい。

学園都市じゃ『まったく成長がない……』って感じだったしね！

二ヶ月前幻想郷にやってきて、霊夢さんの家からここ紅魔館へ。

来たときはレミリア様に睨まれてその威圧感に結構ビビったりしてたけど、いざ話してみると良い人だと思うし、子供っぽいところもある。

レミリア様のことはともかく、霊夢さんと魔理沙さんとチルノちゃんがレミリア様に頼んでくれたおかげでここで鍛えてくれることになったわけだし、ついでにバイトも始めさせてくれたわけだし、感謝してもしきれない。

チルノちゃんの家で暮らしているから大ちゃんにも結構お世話になつてるし、どこかで恩返ししようと思えばバイト代もまだ使つてない……

いや、使うところがない。

なにかみんなにあげたいんだけどなあ。まあないのだから仕方がないのだけど、とりあえず私的にはなにかアクセでも買ってあげたところなんだけど……。

「ほら隙だらけですよ！」

「え、ひゃっ！」

考え事をしたせいで美鈴さんにあっさり拳をつきつけられる。

寸止め出来る人で本当に助かった。助かりました。これで霊夢さんあたりだったらもれなく顔面にパンチ&鼻血流し放題になってたところでした。

いやあ、弾幕だつて私も初心者の初心者。

普通の妖精や妖怪以上ではあるけど、約二ヶ月特訓していた割には普通である。

まあチルノちゃんや大ちゃんに勝てるわけがないんだけどねえ。

「やっぱり涙子は『接近戦』の才能があると思うわ」

「才能、ですか」

あまりその言葉は好きじゃない。あると言われれば嬉しいけれど、あまり好きじゃない言葉だ。

今では学園都市のことが良くわかる。多く分かる。今なら別の視点で学園都市を見れる。

すぐく運のいいことだつて、レミリア様は言ってた。二つの視点で物事を見れるのはそう経験できることじゃないつて、やっぱりわからないけど。

「美鈴、ご苦労さま」

「おや咲夜さん」

現れたメイド長こと咲夜さんに美鈴さんは軽く手を上げて挨拶。

咲夜さんもおだやかな表情をしているが、ここで寝ていれば間違いなく美鈴さんの頭にはナイフが刺さることになる。別に痛いだけだろうけれど。

「涙子、パチュリーさまが呼んでたわ」

「あつ、はい！」

これから弾幕を教えてもらおうというわけだ。

もしかしたら幻想郷からこのまま出られないなんて可能性も無きにしもあらず。と霊夢さんは言っていた。

そうなればかなり困る。困るといってももう落ち込むだろうけれど、その時のために、それに帰る前に自分の身を守るためにも今の私には紅魔館のみんなが必要。

とりあえず、私は美鈴さんとの修行用の服からメイド服に着替えて走った。

駆け足でパチュリーさまの部屋へと向かう最中、レミリア様が向こうに見える。

ついでに横にはイタズラ対象！

「ちくるくの〜！」

名前を呼びながら、その背後から思いっきりスカートをまくった。

ほお、今日はドロワじゃなくしましま……良いね！

バサアつとまくれ上がったスカート、きつと今頃チルノちゃんったら真っ赤な顔を……おお、赤い赤い。

「や、さ、や……！」

なんか知らないけどレミリア様はため息をついて大ちゃんまで真っ赤な顔で鼻を押さえている。

振り返ったちるのちゃんは真っ赤な顔のまま自分のスカートを押しさえて、片手を私に向けた。

「佐天の馬鹿！」

「うわっ、あぶない！」

チルノちゃんの手から放たれた無数の氷の弾幕をここ最近で覚えた飛んだり跳ねたりな避け方で避ける。

そこらの妖精やらとは桁違いの弾幕の数だけど避けるぶんにはなんの問題もない。

少し弾幕を避けていると、チルノちゃんは息を荒くしながらやっぱり赤い顔で私を睨む。

「馬鹿佐天！」

そう言うチルノちゃんだが私はそんな「馴れた」状況に軽く笑う。レミア様が肩をすくめ、大ちゃんが鼻を押さえて片膝を地面にっいている。

まったくもってからかい甲斐があるなあ、と思う。少しばかり初春の顔が見たくなってきた。

そのままレミア様と、私に『よくやった！』という顔をしてくる大ちゃんと、少し怒っているチルノちゃんの三人と一緒に図書館へとやってきた。

大きな図書館は紅魔館の自慢の一つであり、私の「サボリ場所の一つ」でもある。まあ咲夜さんに見つかってげんこつを入れられるんだけど。

巨大な図書館に並ぶ数々の本、そして机に座って本を読んでいる引きこもり少女こと『動かない図書館』さん。

「涙子じゃない、またサボリ？」

「ちよー！」

動かない図書館ことパチュリー・ノーレッジさんの言葉に、私が焦ったが本人はまったく気づいていない。

そして私の後ろのレミア様を見てようやく気づいたのか少しだけだが私を見て息をつく。

ため息をつきたいのは私ですけどね？

「いいことを聞いたわ涙子、今度からはさぼれると思わないことね」

うう、新しいサボリ場所探そう。

とりあえずパチュリーさんのそばに歩く私。

今日はなんですか？　なんて聞かなくてもわかってる。

この日をずっと楽しみにしていたのですから！

「今日は貴女についてわかったことを話すわ」

「はー！」

いつもは弾幕勝負での戦い方や弾幕を大量に展開するときのことなどを押してくれるんだけど、今日はここ二ヶ月の資料を元に私の「才能」の分析結果を出してくれるらしい。

まあだからレミリア様やチルノちゃんや大ちゃんがここに着ているわけだけど……あつ、咲夜さんと美鈴さんも来た。

「お待たせしました〜」

本の整理を終えたパチュリーさんの使い魔こと“小悪魔”さんも来たようだ。

これで紅魔館の主なメンバーは揃った。

パチュリーさんが手元の資料を見ながら……何も言わない。

あれ？　なんてみんなで少し混乱してみたが、すぐに理解できた。

「おうパチュリー、遅れて悪い」

「まったく、面倒ね」

魔理沙さんと霊夢さんも来てくれて、これでようやく私のために色々してくれた人たちが集まったということ。

つまりこれにて発表。

ああ、なんか能力判定よりも緊張する。みんながいるっていうのもあるんだろうけど、緊張する！

私はスカート裾をぎゅつと握ってパチュリーさんの言葉を待つ。

「涙子、貴女には……」

ゴクリ、と喉が鳴ってしまう。

一目私に目を配ると、パチュリーさんは手元の資料を読む。

「正直、弾幕の才能はないわ」

「……へ？」

えっ、今なんと？　なにになに『なにか特殊な力が』的な展開じゃないんですか!?

ほらほら、霊夢さんが『うつわあ〜』つて目で見てきてますし！

やだ、これが天才との差!?!　その視線が痛い!!

こんなつ、不幸だあつ!!

「る、涙子……」

レミリア様ですら同情しているのがわかる。

これは、どうしましょうね。ほんと。

魔理沙さんも私の肩に手を置くなって、どこまで同情されるの私ったら。

「待ちなさい、まだ弾幕の才能がないって言っただけよ。私が色々調べたんだからそれだけなわけないでしょう」

マジですかパチュリーさん!?

「涙子はどちらかというと接近戦を鍛えたりしたほうが賢明ね、弾幕は今以上はあまり期待しないで……あと能力は正直ピンと来ないから、まだ能力が発現する可能性はわからないわ。とりあえず涙子、貴女には格闘術やらの“才能”がある……」

才能があるなんて言われたのはじめてですよパチュリーさん！

いやあ、この私にもようやく運が巡ってきましたかあ、世界中の不幸のみなさんごめんね！

チルノや大ちゃんも嬉しそうにしてくれてるし、魔理沙さんも親指を立てた手を向けてくれる。

「貴方は向こうの世界で“無能力”ってことでコンプレックスを抱いてたみたいだけど、安心なさい。“そこ”でなんと言われようと、貴女には才能があるわ」

珍しく饒舌なそんなパチュリーさんを見て、私は感動するというように笑ってしまった。

なんて不器用な人なんだろう。素直に『落ち込むな』って言えば良いのに、ただ紅魔館の人は美鈴さんと小悪魔さん以外みんなこんな感じだろう。

霊夢さんだってたぶんそうだ。まったくこの幻想郷は素直じゃない人が多い。

だけど、こんな幻想郷が私は大好きだ。

「まだ帰れるまで時間があるんだから、幻想郷にいる間はここにいなさい涙子」

そう言ったのはレミリア様で、カリスマ一杯の不敵な笑みを浮かべるがそれもすぐにチルノの笑いにかき消されてしまう。

「ハハッ、似合わないわねレミリア。素直に数少ない友達だから仲良くしてって言いなさい」

「チルノ、それ以上は禁句よ」

何を言っているか聞こえなかったけど、チルノが咲夜さんに後頭部

にナイフを突きつけられてる。

「オーケーよ咲夜、さいきよーのあたいは無限に再生を繰り返すけど、痛いのは嫌なのよね」

「それ妖精が最強になっちやうよチルノちゃん」

大ちゃんの言うとおり、妖怪に勝てる妖精はチルノぐらいなんだから……。

というよりなんでチルノはナイフ突き立てられてるの？

「と、とりあえず佐天！」

レミリア様に呼ばれてそちらを見ると、顔をどことなく赤くしている。

「貴女はバイトとは言え紅魔館のメイドなんだから私たちが責任もつてきつちり面倒を見るから……安心なさい！」

へ？

「お嬢様があんなこと言うなんて珍しいですね」

美鈴さんがそう言っているが、ほんとに私もびくりしている。

事実、今言葉が出ない。なんていうか、レミリア様がそんなことを言うなんて絶対に思わなかったから……。

だから、なんとか私は笑顔を向ける。

「うん、これからもよろしくお願いします。レミリア様」

あつ、図書館から出て行っちゃった……。

それをはじめとして、咲夜さんと美鈴さんも出ていき、小悪魔さんも仕事に戻る。

それぞれが仕事に着くと、パチュリーさんとチルノと大ちゃんと私だけになった。

まだ話すことでもあるのかな？ 資料を見ている。

「いきましよう佐天さん」

えっ、もう行くの？

私はびくりしてそつちを見ていると、チルノが笑う。

パチュリーさんの方は私たちの方を見ることなく資料を見ていた。

「パチエは佐天のために資料を読んでもらうだけね——おぶっ！」

飛んできた分厚い本がチルノの後頭部にぶつかる。

投げたのはもちろんパチュリーさんで、後頭部に思いっきり分厚い本を投げられたチルノにかけよる大ちゃん。

後頭部を押さえながら立ち上がったチルノが肩をすくめてため息をついた。

「素直じゃないねパチエは、まあいいや、とりあえず行こうか大ちゃん」

「うん、それじゃ佐天さん頑張ってください!」

「わかった。じゃあまたね、晩御飯期待してるよ♪」

チルノと大ちゃんに手を振って、私は図書館に残る。

さて! とりあえずここで一休みするとしましょ!

……え、咲夜さんどうしたんですか? えっ、いや、さぼろうなんて、えっ……助けて! 助けてパチュリーさん! 無視しないでえ! ももおおおっ! 上げて落とすなんてえ!

学園都市のこともあるけれど、今はこの大好きな幻想郷で大好きな人たちという。

だから大丈夫だよって、伝えたい。

「涙子、次の訓練相手は私だから、全力で弾幕を避けなさい」

えっ、私怨入ってますよね? ね?

さ、殺人ドール!?

わあああつ!! 不幸だああつ!!

3、友達

あれから一週間ほどが経過した。

今のはかの「紅霧異変」からおおよそ3ヶ月ほどであり、外来人こと佐天涙子が来てから二ヶ月と一週間ほど。

ちなみに、紅霧異変と言えばレミリア・スカーレットが起こした異変である。

それから博麗神社の紅白巫女やら白黒の普通の魔法使いと友人と呼べるような関係になり「昔からそこそこ仲の良かった」チルノと大妖精もよく来るようになった。

彼女の友人が魔法使いということもあり、白黒の魔法使いは特に良く来る。それもよくわからない外来人と連れてきたりもするほど……。

そしてその外来人こと佐天涙子の話に戻ると、所詮は一週間、佐天涙子は変わらず無能力であり紅魔館のメイド（バイト）であった。

そんな佐天涙子だが彼女の天性の能力かなにかか、紅魔館のメンバーからはかなり好かれている。

そして、今日は彼女の運命を変える一日となった。



私佐天涙子はほぼ毎日紅魔館でバイト。

やっぱりみんな優しいというか気さくで心地いい。ある意味能力者だらけの学園都市より居心地は良い。

幻想郷でもみんな異能を持つてはいるけれど、別にそれで何かが変わるわけでも決まるわけでもないし……ああ、あえて言うならあったほうが便利ぐらいかな？

とりあえず、私が無能だって思い知ることはない。

「今日もお疲れさまです、差し入れですよ美鈴さん」

私の「格闘」の師匠でもある美鈴さんに咲夜さんから預かったバスケツトを渡す。

中身はサンドイッチで、差し入れらしい差し入れだった。私も一度門番を任されたときももらった。

美鈴さんと私は二人で門の前に座り込んで話をする。

「咲夜さんも大きくなつたな〜」

「そう言えば小さい頃にここに来たんでしたっけ?」

レミリア様がちらつと言っていた気がする。『昔と違って』とかなんとか……。

そのあとににんにく紅茶を出されて盛大に吹き出してたけど。

やっぱりドジやつてた頃とかって思い出したくないのかな?

「うん、昔は『めくりくん』って言って可愛かったんだけど、一児の親の気分」

「ははっ、そんなこと言ったら怒られますよ?」

「そうですよねえ〜あれ、なんだか頭が痛い」

「ナイフ刺さってますもん」

「そっかあ〜」

すぽつとナイフを抜くと血が吹き出るがすぐに止血してつてずいぶん手馴れてる。まったくもお、ここにいると学園都市に帰った後が怖いなあ。

それにしても私もここ二ヶ月ほどでずいぶん成長したと思う。

心が……もう少し学園都市でも落ち着いていられそうな感じがする。

いざとなつたらスキルアウトでもアンチスキルでも、無能力でもどうにかなるところが山ほどあるしね。

能力開発は頑張るつもりだけど、少なからず今まで以上には……。

「そういうえば涙子はフラン様に会ったことあるんだっけ?」

「フラン……?」

「あつ、知らないなら良いの!」

美鈴さんは明らかに『やつちやつた〜』という顔をしているが、誰なんだろう?」

気になる。でもたぶん美鈴さんは言わないだろうから、そうだ!

「じゃ、私はこれで!」

仕事仕事！ と見せかけてレミリア様の部屋へとダッシュ！

まだ昼間だから余裕で起きてるだろうし、私はやると言ったらやる女なのだ。この佐天さん、紅魔館の主の一人や二人……。

きつとれみりや様の秘密が！

とか思っている間に部屋の前について、止まって身だしなみを取りあえずは整えてから、扉をノック。

「入りなさい」

許可の声が聞こえて扉を開けて入る。

そろそろ板についてきたメイド服のスカートがわずかに揺れる感じがした。

制服がロングスカートだから新鮮さが否めない。

私が部屋に入ると、少しばかり主っぽく椅子に座っていたお嬢様から霸氣的なものが無くなる。

「なんだ涙子か、カリスマ出して損したわ」

「これは酷いですね」

「で、どうしたのかしら？」

レミリア様は紅茶を飲みながらそう言う。

片手で優雅にティーカップを傾けて飲むと、口を離して私を見た。

私は笑顔のままテーブルをはさんでレミリア様の向かいに座ると、じつとその顔を見て本題に入る。

「フランって誰ですか？」

その言葉にレミリア様の目が一瞬見開かれたが、次に目を閉じた。

なんだか話しかけちゃ怒られそうな気がして黙っていることにする。そう言えば怒られそうと言えば咲夜さんには『美鈴に差し入れ持って行ってあげて』としか言われてないからたぶんこれがバレたら怒られるんだろうなあ、と思って少し気分が沈む。

まあこの佐天さん、やればできる子ですから仕事はきっちりできま
すよ！

ふと、レミリア様が目を開くといつも私に向けるような目とは違う
雰囲気の色を向ける。

最初に会った頃を思い出す鋭く威圧感のある眼光。

「不用意にフランのことを知りたがるのはやめなさい……」

「えっ、なんで——」

「貴女、死ぬことになるわよ?」

そんな言葉をかけられて、私には黙っているしか道が無かった。いつもの幻想郷では夜の森は危ないなど言われてもそんな気がしない。

けれどこの眼で、この口調で言われて初めて幻想郷で私は“死”を感じた。

私の雰囲気を感じたのか、レミリア様は威圧感をフツと弱める。

「っ……あ」

小さく呻いて、体中の力を抜く。

「それで良いわ涙子、貴女も死にたくないわよね」

それもそう、目の前の悪魔の少女を見て、私は初めて本心から死にたくないと思った。

やはり私のご主人様（仮）は凄いなって思う。

これがきつとみんなが慕って着いていく理由の一つでもある。

とりあえず気分を害したのは私だから『すみませんでした』と一言だけ言って部屋を出ることにした。

さあ、仕事仕事!

結局午後6時頃に上がった私は三十分もかからず家へと帰ってきた。

あくまでもチルノの家だけど、今では私の家でもある。

二人で住んでるのだから当然、一週間に3回ぐらい泊りに来る大ちゃんも大概だけど……。

そろそろチルノの家からは離れないとなあ、とは思うけれど人里にも空き家があるわけじゃない。

レミリア様は『紅魔館に来たらどう?』と言われるけれど、それはそれで厚かましい気もする。チルノの方と違ってやはりあそこは一つの家庭だからだろうか?

人の家庭に土足で踏み込めるほどさすがの佐天さんも自由人じゃ

ないですよ。

「ただいま〜」

帰ってきたのはチルノと大ちゃんの二人。

軽く肩を回しながら帰ってきたチルノはこの時期だから、人里で氷の安売りかなにかかな？

相変わらずとんでもない商売方法を考えると思う……大ちゃんは。

まあそのおかげで三人無事に食べてけるんだけど、一応私のバイト代だってあるんだからね？

「さて、あたいが人間共に『さいきよー』と敬われながら今日も終わったわけだけど」

「人間を目の前にしてよくその言葉を」

「あつ、佐天は別ね」

「取ってつけたように言うなら最初から言うな〜」

そうやってチルノのスカートを捲る。

なんだ、今日はパンツじゃなくてドロワか……やけに損した気分になるので大ちゃんの方をめぐろうとしたら首にクナイが突きつけられる。

突きつけてるのは笑顔の大ちゃんで……怖い、怖いので私は大人しく後ろに下がることにした。

まったくもう、大ちゃんって時たま凄く怖いんだよねえ。

「ほらほら、晩御飯があるから座って座って」

とりあえず私は大ちゃんから感じる威圧感を消させるためにそう言う。

それでわかったのか大ちゃんとチルノの二人が私と一緒に畳の上に敷いた座布団の上に座る。

私が作った料理が食卓に並ぶが、なんていうかこの世界に来てから色々科学のありがたみを知った。

ほんと便利な世の中だったんだなと思うけど、一ヶ月ぐらいで慣れたしたぶんなかったらなかったで人間、たくましく生きることだろう。

咲夜さんってほんとたくましい。

「さて、いただきます——」

そう言つて手を合わせて宣言しようと、した瞬間、扉が勢い良く開いた。

ビクツと驚いて誰も食前の挨拶を済ますことなくそちらを見る。

そこには、一人の妖精。その子を私は知っていた。

「あれ、どうして——」

——きたの？　なんて言おうとした言葉を言う前に、その妖精ごとあーちゃんは必死の形相で言う。

「フランドール様が！」

またその名前か、どうしたんだろう？

その言葉に目を見開いて驚くのはチルノ、でもその顔を見ればわかる。

“相当不味いことなのだ” だって、こんな顔してるあーちゃんを見たことないし、チルノと大ちゃんの表情も切羽詰まってるのがわかるから……。

そしてあーちゃんはまったく私を見ていない。

「佐天、留守お願いね！」

「いこうチルノちゃん！」

チルノと大ちゃんとあーちゃんが飛んでいってしまった。

私はラップを持ってきて二人の御飯を保存、私は食事をはじめ。

いただきますをいうのを忘れてたけど、まあいいや。

食べながらも、中々どうして飲み込むのに時間がかかる。

たぶん、引っかかっているからだと思う。

——あーちゃんの体に血がついていたのは確かで、あれが血であるのに間違いはない。

あーちゃんだってチルノや大ちゃんほどじゃないにしろ妖精の中では強い方だって聞いた。そんな彼女が怪我をしてこつちまで助けを求めに来るってことは、咲夜さんや美鈴さんじゃどうにもできないってことだ。

……。ただ私が頼られることはない、能力者でもなんでもないから……。

ああ、結局こんななんだ私は……でも、それでも、能力がないからって何もできないって決まったわけじゃない。

なにかの役に立てるかもしれない……だから！

私は家から出て走り出した。

◇◇◇◇◇

紅魔館の広い庭にて、レミリアに似た金髪の少女がいた。

ボロボロの花壇の上でその少女は狂ったような笑みを浮かべる。

楽しそうな笑み、そして彼女の前方では、この館の主であるレミリア・スカレットが膝をついている。

所々焦げた服をして、いつもの帽子も吹き飛ばされたレミリアと、その背後にはそんなレミリアよりも傷ついた従者。

咲夜は片腕を押さえて足から血を流している。その横の美鈴は頭から血を流しながらも、なんとか立って拳を構えている。

レミリアの友人たる少女、パチュリー・ノーレッジは咳をしながら苦しそうにしている、従者である小悪魔もボロボロの姿で自らの主の側にいた。

戦況は最悪であり、まともに動ける者は一人もおらず、まだ戦えるのはレミリアと美鈴ぐらいだろう。

「アハハハハッ！ どうしたのよ、逃げないの？ 死にたくない」とか言って命乞いをしないの？ もしかして私の気分が良くて見逃してあげるかもよ？」

そんな風に言って挑発する少女 “フランドール・スカレット” を視界におさめながら立ち上がるレミリア。

彼女はレミリアの妹であり、495年の生のなかほとんども地下で引きこもって過ごしていた少女だ。

あまりに強大な力を前に、彼女たちは手も足も出ないでいた。

いや、彼女たちが真に本気を出せばここまでボロボロにされることもないだろう。確実に手心を加えているからこそ、こんな状況になる

のだ。

フランドールからの提案にレミリアは鋭い視線だけで応える。

「逃げる？ 死にたくない？ 私がそんなことを言うと思うのならはお前は相当ね」

そんなレミリアの言葉に、フランドールは明らかに表情に怒りを見せた。

「ふん、じゃあ死んでよ」

放たれるのは紅の極太レーザー。

人体などであれば直撃して一分足らずで蒸発するだろう。

瞬間、レーザーの射線上に壁が現れ、それはレーザーを防ぐ。

周囲にはレーザーにより“蒸発”した壁の水蒸気、それは霧となりフランドールの視線の先のレミリアたちを消す。

舌打ちをする彼女がもう一度レーザーを放つために手を前に出す。

だが瞬間、真っ白な霧の中から水色の槍が飛び出しそれはフランドールへと伸びるが、フランドールは横に体を逸らしてその“氷の槍”を避けた。

そもそも急所に当てる気は無かったようで当たってもせいぜい腕だっただろう。

フランドールはその氷の槍に右手を触れて、なにかをつぶやく。

——瞬間、氷は粉々に砕け散り、その破片はダイヤモンドダストの如く輝く。

「来たわねー」

狂気、否——狂嬉と言ったほうだ良いだろう。

その喜びをわかっているかいまいか、霧の中に影が見える。それは間違いなく少女であり、その霧が徐々に晴れていき少女が誰かをわからせる。

水色の単発をなびかせた少女がそこには立っていた。

その少女は自称“きいきよー”の馬鹿^⑨は少し冷めたような、だけど嬉しそうな、それでいて悲しそうな表情。

「チィィイルノチャアアアアンツ!!」

歪に笑う少女がその名を叫び、笑う。

まるで旧友に会ったような嬉しそうなフランドールはまだまだ笑う。

「まあ、懲りずに止めに来たってわけ!? 毎回やられてるのに懲りないなア、チルノちゃんはあるあつ!!」

目の前に新たな敵が居るにもかかわらず、まったく余裕そうだ。

「……今までは地下だったのに外までくるなんて、フランも今回は本気ってわけか」

「だってズルいじゃんか、 “あの人” たちばつか遊んでて」

その “あの人” というのは、間違いなくレミリアのことだろう。

彼女は閉じこもって、そして閉じ込められてきた。それも生まれてからほぼずっと……。

時々こんな風に “衝動” に身を任せて暴れることもあったけれど、それでも外に出るほどでもなければここまでするほどでも無かった。

なのに今日はこれだ。つまりは本当に彼女はレミリアたちを殺す気なのだろうと、チルノはため息をつく。

「さいきよーのあたいたい対さいきよーのフランってことね、まったく……あれ、なんて言おうと思っただったかなあ?」

「アハハハツ、馬鹿ねチルノはア! こういう時はこう言ってあげればいいのよ、アリーヴェデルチってねエ!!」

フランドールの右手がチルノに向けられるのと同様に、チルノもフランドールへと右手を伸ばす。

お互いの手がお互いに向けられるのはほぼ同時だった。

それでもフランドールの方が圧倒的に強いと簡単にわかる。

所詮妖精であり、レミリアの足元にもおよばず咲夜にも勝てないのだ。

それでフランドールに挑むことは片腹痛く、何度でも死ぬるからという前提があるからである。

「フラン?」

「なアに、チルノオ?」

「まさかその程度で——最強を倒せるなんて思ってないでしょうね?」

フランドールに向けた拳を握り締めるチルノ。

「来なさい——最強！」

そう言つて笑みを浮かべたチルノの足元から、フランドールへと向けて地面を氷が走る。いや、そう見えるだけで氷が張つて言っているだけだ。

チルノのすぐ後ろにいるレミリアがチルノの背にむけて叫ぶ。

「下がちなさいチルノ、貴女がフランにかなうわけ！」

「ほんと、あの人の言うとおりのねチルノオ！」

笑いながら、フランドールは言う。

嫌いなレミリアの言葉でも、事実は事実だとチルノを笑う。

「フラン、あたいは……みんながいるから『さいきよ』なのよさ」

そう言つて笑うチルノ、直後フランが目を見開いて背後を見る。

そこには銀色の刃、直撃コースだがそれはフランドールが動かなかつたら——という話だ。

だがそこで止まりっぱなしなほどフランドールは馬鹿でもない。だからこそ彼女は体を逸らして攻撃を避ける。

避けて見てわかることはそれが『クナイ』ということだ。

「あら大ちゃんも一緒なのね」

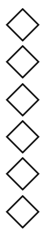
「不意打ちでもダメなんだね」

チルノと大妖精の二人はフランドールを挟むように立っている。

弾幕にもするクナイを両手に持っている大妖精と、その反対には両腕を組んで仁王立ちするチルノの二人。

そして戦いは始まる。

この幻想郷にて最強クラスである最凶と、この幻想郷にて最弱クラスである『さいきよ』の戦いだ。



私は走る。結構疲れてきたけど、それでも紅魔館の人たちと修行してただけあつてかなり早くできるし、かなり体力も持つ。

こう体で実感してようやく私は力がついてきた気がするけれど、チ

ルノや大ちゃんに及ばないのは事実だ。

あーちゃんやチルノや大ちゃん、それに紅魔館のみんなの無事を祈りながら走って、ようやくついた紅魔館。

だがその庭に入って、私は初めて「絶望的」ということを知った。

膝をつく美鈴さん、パチュリーさんと咲夜さんは動けるような状況じゃなくて、小悪魔さんは二人の止血と応急処置を行っている。

大ちゃんもいるけれど、彼女の腕は肩あたりから——なくなっていた。

切れたとか千切れたとは違うと思う、これはたぶん中から破裂したような、そんな感じ。

吐き気がこみ上げてきたけど、それを飲み込んで私はなんとか咲夜さんの方へといく。

「なっ、涙子貴女！　なんでここにッ！」

「そんなことはどうでもいいですから、どういうことですか！」

「そんなことより」

「咲夜さん！」

私は必死にその名を叫んで状況の説明を頼む。

なんでもイイから、なんでみんながこんな風にならなくちゃいけなかったかの状況を教えてもらう。

渋る咲夜さんにもう一度呼びかけようと思った時、話してくれたのは意外な人だった。

「私が説明するわ」

「パチュリーさん？」

「貴女は知る必要があるわ、紅魔館の一員として……けれどこの事実を知ったからには貴女が私たちから離れるなんてこと許されないわよ？　これは紅魔館の問題なのだから」

「私は紅魔館の一員です！」

無意識に放った自分の言葉に驚くより前に、微笑するパチュリーさんが咳き込みながらも少しづつ話していく。

話を聞きながら、私は自らの中でフランドール・スカーレットという少女のことを理解していく。

考えても考えても聞いても聞いても出る答えは一つだけれど、どこかに違和感を感じる。

空で戦っているフランドールとレミリア様とチルノの三人。フランドールは紅魔館のメンバーと大ちゃんとチルノで戦つてようやくダメージと疲労が出ていているように見えるがまだ余裕そう。

ところどころ怪我をしている本気のレミリア様と、同じようにボロボロのチルノの二人とでようやく互角。

「フランドール……」

瞬間、彼女の手に見れた巨大な剣がレミリア様を襲うけれど、そんなレミリア様をかばおうと前に飛び出したチルノが吹き飛ばされ一緒にレミリア様とチルノが地上へと落ちる。

フランドールも片手の剣を消して、地上に降りた。

レミリア様は上体を起こして自分をかばったチルノをゆるする。くそつ、なんでこんな時に動かないのよあたしの足はあつ!!

「チイルノオオ！ その人をかばったせいで負傷するなんて、死なない妖精だからできるのかなア!？」

「チルノ！ 起きなさい！ チルノお！」

目を覚まさないチルノ友達の名を必死に叫んでゆるするレミリア様、フランドールは笑つて……ん？

少しきになつたけれど、やっぱり狂つたような笑みを浮かべているにすぎない。

その表情を見てさらに怖くなる。

チルノはレミリア様をかばつて倒れて、目をさましたみただけでもうフランドールは二人に手を向ける。

——動け動け動け動け！ 私は変わったんでしょ！ 早く動きなさいよ！ 友達一人助けられなくてなにか友達よつ!!

私は震える足を動かして、立ち上がる。

あとは口を開け！ 早く！ できる。私ならできる。そうでしょ、こんなところでもしないなんて御免でしょ！

ねえ、佐天涙子！

「それ以上、二人に近づくんじやないわよ！ 三下あツ!!」

そして私は、目の前の最凶フランドールに宣戦布告をした。

4、希望

フランドール・スカーレット。

紅魔館の主こと自称ヴラド公の末裔、レミリア・スカーレットの実妹である。

姉は驚異的なカリスマ性を用いて数々の従者を下につけて、その強大な力で人々に恐怖を与えた。

それでも、圧倒的にフランドールは驚異的で狂气的であった。彼女のその力は数々の狩人を呼び、やってきた人間を倒すためにレミリア・スカーレットの従者たちは死んでいったのだ。

妹を守るため、そしてこれ以上従者を失わないためにもレミリア・スカーレットはフランドール・スカーレットにとうぶん『地下にいてほしい』ということを伝えた。

その提案を飲んだフランドールは自ら地下へと潜り、その間にレミリア・スカーレットは紅魔館を幻想郷へと移した。

それから、彼女は湖上の氷精チルノや大妖精たちと友人関係を築いた、そしてなぜかこの幻想郷に来てから、フランドール・スカーレットは暴れだしたのだ。

幾度となく地下から出ようとしようとする彼女を紅魔館のメンバーや二人の妖精で止めていた。いやむしろ、満足して止まってくれたのだ。

だからこそ、いつもそんな感じだと誰もが思っていた。

だが今回は違う。

彼女は「本気」なのだ……。

◇◇◇◇◇

「それ以上、二人に近づくんじやないわよ！ 三下あ！」

大声で啖呵を切った私だけれど、決して無駄ではないと思う。

そのおかげである、フランドールの手が止まったのがその証拠……。

足の震えはもうない。これ以上はないのだ、もう目が合っているんだから。

「貴女、何様なのわけ？」

私はそんな言葉に怯まない。

たぶん、もう感覚がおかしくなってるんだと思う。

後ろで私を呼ぶみんなの声を無視して、私がレミリア様へと目配せをする。と一度だけ頷いてチルノを抱えフランドールから離れる。

大丈夫、私は死なない。死なない——初春やママだって待ってるんだから！

「……へえ、貴女おもしろいね。だったら私を殺してみなさいよ三下アツ!!」

フランドールが片腕を私に向けるけれど、パチュリーさんに聞いたとおりなら私が「破壊」される。

だから彼女に捕まるより先に私は走って横に移動した。あの手に「掌握」されれば破壊されてしまう。

不思議と私は冷静。なんでだろ？

でも、チルノとレミリア様を今助ける方が先決で、ここで私はどうすれば良いか考える。

「アハハハッ、貴女は能力者かしら？　だったらあんな啖呵切ったんだから私を殺せるの!？」

笑うフランドールは私を見ながら笑う。

けどそんな時、足をもつれさせてしまった。

——そんなっ!?

倒れる私は、両手で顔面から地面に当たるのをなんとか防いだけど、止まってしまった。

見てみればフランドールは私へと手を伸ばしている。

「さよならア—」

私は咄嗟に左腕で自分を守ろうとしたけど、破壊されるということに意味はあったのかって疑問を持った。

でも、意味はあった。おかげで私の体や顔や足に一切攻撃は当たらない。

その代わり……私の視界にはフランドールのどこかつまらなさそうな表情が見える。

「あ……あ……」

私の左腕が、肘から先が無くなっていった。

◇◇◇◇◇◇◇◇

彼女、佐天涙子の肘から先が無くなっている。

驚いたような顔をした彼女の顔から、どんと血の気がなくなっていく。徐々にその表情は変わっていく。

右手で左腕を掴んで、なくなった部分を視界にしっかりと入れている。

「アアアアアアアアアアアアッ!!」

「涙子おっ!!」

レミリアの声が聞こえるが涙子はそちらを気にしている余裕もない。

叫びながら地面に倒れ伏す目の前の少女に、レミリアは戸惑うのみだ。

どうすれば彼女を助けられるかなんて想像もつかない。

「アハハハハハッ! なるほどねエ、その三下が紅魔館の新しいメンバーってわけ!? 私のことを隠して楽しんでたんですかア、お姉さまア!!」

「フアアアアアアアアアアアアッ!!」

「なに叫んじやってんのよ、遅い遅いおっそい! その三下を殺すのはお姉さまだよ、この私を放置した!」

笑うフランドールの視界に映るレミリアと叫ぶ涙子、その二人へと手を伸ばしたフランドールだったが、突如彼女の視界が暗闇へと変わる。

不意の状況に、フランドールは『え?』と素っ頓狂な声を上げ、周囲を見渡す。

自らの視界は暗闇であり、まったく何も見えずにいた。

一方フランドールから離れたレミリアの視界の先、フランドールの居た場所を中心に半径3mに黒い球体。

そして叫ぶ涙子の側にいるレミリアの視界に映るのは金髪をなびかせた『宵闇の妖怪』こと『ルーミア』だ。

彼女はただその闇でフランドールを包んでいる。

「私が時間稼ぎできるのはせいぜい数分だから」

そう言うが、数分で何ができるのかとレミリアは冷静ではない思考で考えた。

「レミリアどきなさい！」

レミリアを押しつけたのは、他でもない先ほどレミリアをかばい背中を斬り裂かれたチルノだ。

彼女は焦ったような表情で涙子の左腕の肘を見る。断面は間違いなく『破壊』された後で、ダメージを喰らうということに慣れていない涙子には苦しいものだと言ってきた。

大妖精とチルノはフランドールと何度も戦っているから喰らうことには慣れているだろうけれど、他人にはどうにも言ったところだ。

「佐天、ごめん！」

そう言ったチルノは全力で冷気を涙子の左腕の断面に集め、断面を凍らした。

痛みを麻痺させるためにそうしたのだ。結果余韻の痛みで悶える涙子だがそれ以上はどのようにでもなっている。

チルノが涙子からフランドールの方へと目をやったが、闇から逃れてルーミアを吹き飛ばした。

自らの友人が吹き飛ばされたチルノは顔を歪めながらも立ち上がる。

「ありがとうルーミア、こんどお礼するから」

「そーなのかー……期待しないで待ってるわ」

それだけ言うと、ルーミアは脇腹を押さえて少しづつ下がっていき、

肋でもやられたのだろうか？

闇から出たフランドールの右手が再びレミアアへと伸ばされるが、レミアアとフランドールの間氷の壁が出現する。

彼女の視界を遮ったことにより、握られた拳が破壊するのは氷の壁だ。

「チルノオッー！」

「レミアアッー！」

フランドールがチルノの名を叫ぶのと、チルノがレミアアの名を叫ぶのはほぼ同時だった。

破壊された氷の壁の向こうから、投擲された紅の槍がフランドールへと迫るが、フランドールが動くことはない。

だが動かずとも、その槍はただフランドールの左腕を掠るだけにすぎなかった。

笑うフランドール。

「せっかくチルノがつくったチャンスも台無しね！　なあに、私を攻撃できないのかしら？」

「くっ……」

レミアアが拳を地面にぶつける。膝をついた彼女はすでに諦めたような雰囲気だ。

最弱の「さいきよー」が行った行為もすべて無にきしてしまった自分になにができるというのかと、レミアアは自らを呪う。

昼間彼女が涙子にフランドールのことを教えなかったのはそれを知れば涙子が死ぬ「運命が見えた」からだ。

なのにそれを阻止できなかったと、悔しそうに歯ぎしりをしてフランドールを見た。

「さよならお姉さまア？」

向けられた手から、放たれるのはレーザー。

「させると思わないことねフラン！　こっちにはさいきよーがいるのよさー！」

そう宣言して、チルノはレミアアの前に立ちすべての力をもってして氷の壁をつくった。

レーザーとチルノが作り出す壁は均衡しているが、あくまでもフランドールが片手で軽く撃ったレーザーにすぎない。

それでも、どこにそんな力があるのか紅魔館のメンバーでは妖精以外に勝つこともできないチルノはフランドールのレーザーを防いでいる。

痛みが引いてきたのか、涙子が上体を起こして唾然としながらつぶやく。

「なんで、勝てるわけがないのに……」

そのつぶやきはチルノに聞こえたのか、彼女はニツと笑う。不敵で「さいきよー」らしく……。

「佐天だつてさつき勝機もないのにあたいたちを助けようとしたでしよ！ それと同じよ、あたいはねえ、馬鹿って言われるのは大嫌いだけど勝てない戦いだからって友達を見捨てて逃げるなんてことは絶対にしない！ ……ぐっ、それをすれば、本当に「さいきよー」じゃなくなるもの、私は「さいきよー」って言われてる……でも、友達を見捨てるぐらいなら、そんなならねえツ!! あたいは馬鹿[㊤]って言われてたいつてのツ!!」

氷の壁が砕け散ると、フランドールのレーザーが消え去るのは同時だった。

チルノは守った。幻想郷にて最弱と言われる妖精の中で最強のチルノは「さいきよー」として友達を守ったのだ。

そんな彼女の姿に、佐天涙子は心打たれた。——けれど、チルノの体に穴が空くまで時間はいらなかった。

「……ッ」

立っているチルノの、人間で言えば心臓部分に開いた穴は歪な形をしている。

口から血を吐き出すチルノ。そんな彼女を見て、佐天涙子は声ひとつ出すことができなかった。

右拳を握りしめて笑うフランドールは疲労している雰囲気がないわけではないけれど、傷はない。

叫ぶレミリアが立ったままのチルノの胸に空いた穴からフラン

ドールを見る。

「アハハハハッ！ 立ったまま死んだのねチルノちゃアンツ!!、やっぱ面白いわ、ほんと貴女が “死なない” 妖精で良かったア!!」

無言で、佐天涙子は立ち上がり “一回休み” となったチルノの体に触れるが、その体は光の粉となって消えた。

明日にでもなれば復活するのだろうか、そういう問題ではないのだ。

佐天涙子はフランドールへと体を向ける。

左腕は肘から先は無い。それでも凍らせてもらったおかげで痛覚は死んでいた。

「なアに、私を殺してくれるのかしら!? ねえ、三下ア!!」

佐天涙子は顔を上げる。

その表情は特になにも思っていないという、フランドールにとって初めて向けられる表情。

それに戸惑うも、すぐに平静を取り戻す。

「やっぱり、貴女……死にたいんですか?」

その言葉に、フランドールは固まる。

「はア?」

露骨に不快感を現すフランドールを相手に、涙子は表情を変えることはない。

「さっきから、パチュリーさんの話を聞いたときからの疑問がようやく消えました。貴女は殺して欲しかったんだ、でもレミリア様たちを殺すこともできないから、自分でいろいろな人に危害を加えてレミリア様たちに自分を殺してもらおうと思った。たぶん貴女のことだからチルノちゃんが私の傷を塞ぐとわかってて私の腕を潰したんでしょ? 最初から貴女が私を殺すことなんてない」

うつむくフランドールに、さらに涙子は続ける。

「貴女は自分の力が恐いんだ、きつと私だってそんなあらゆるものを “破壊” する能力を手に入れたら手に余るところじゃない、恐くない」

「ふ、ぎ、け、る、なアアアアッ!」

叫ぶのはフランドール・スカーレット。

顔を上げて、その狂気に染まった眼光で佐天涙子を射抜くが、彼女がひるむことはない。

腕の痛みも完全に無くなったからだろうか？　しかし、それでも佐天涙子が先ほどと同じ人物だとは思わなかった。

「何も破壊したくないのに破壊しなくちゃいけない、この衝動ッ！　お前みたいなの三下になにがわかるってのよ！　なんの能力もなく、なんの苦しみも知らないあんたが！」

「知ってる、私は能力を得られない苦しみを知ってる！　でも生まれてからずっとその力を持ってた貴女にも私の“力が欲しい”って気持ちもわからない。誰だってわからないことがあるよ！　だから私たちは相手を理解する“言葉や気持ち”があるんですよ！　私にはわかる、貴女は紅魔館の一員としてみんなと一緒にいたかったんだ、だけど自分の力が恐くてずっと地下に居た。破壊衝動に飲まれないためにもずっといて、だから貴女は自分を殺してもらおうと思ったんだ！」

フランドール・スカーレットは後ずさる。

そこでハッ、と気づいた。

——なんで自分が後ずさる？　なんのちからも無い、ただの“人間”相手に……。

わなわなと、拳を震わせる。

どうせ目の前の女に自らを殺す力など無い。だがその言葉は自分を殺させなくさせるに充分だ。

レミリアはおろか、美鈴や咲夜やパチュリーや小悪魔が聞いていく。なら、この優しい紅魔館の誰が今の言葉を聞いて自分を殺してくれる？

「でも紅魔館は自分を殺してくれるはずもないことに気づいた。だから貴女はこの幻想郷で自分を殺してくれる人を探そうとしたんだ！」

「そうでしょー！」

「黙れ……」

「貴女は誰も殺さないし……誰にも殺されない、殺させない！　貴女

が紅魔館の一員だというなら私の友達だから、だからもう少し頑張ってみようよ！ チルノちゃんだつて大ちゃんだつて貴女のためなら頑張ってくれる、生きることを諦めるな！ まだまだこの世界には希望があるんだから！」

佐天涙子はポケットから一つの「お守り」を出した。

一緒に幻想入りしてきたときから持っていたそのお守りはかつて母にもらった大事なものだ。

——大丈夫、私は死なない。フランドールに誰も殺させない。

「この世界に希望なんてない、そんな希望は幻想どうせ私が「殺す」んだから!!」

「なら私が教えてあげる！ この世界には、まだまだ救いがあるんだつて!!」

右拳に握ったお守りをもう一度ポケットにしまうと、佐天涙子は地に足を強くつけて、走り出す。

彼女の死の運命を知っているレミリアですら、今手出ししようとは思えなかった。

涙子の邪魔をするわけにはいかない、それに……ダメージがきたのか動くのに時間がかかる。

走る佐天涙子に、わずかに後ずさりながらフランドールは手を向けた。

「救いなんてないつて言つてんでしようがッ、三下アツ!!」

フランドールの手から放たれる弾幕。それらは文字通り弾幕というにふさわしく、数々のそれを見て涙子は紅魔館で鍛えた修行を思い出し、避けていく。

皮肉なことに、片腕が無くなりバランスが取りにくいがそれでも当たる部分が少なくなっている。

だがかすらないということにはさすがにできずに、涙子の体がどんどんと傷ついていくが、そんなものは気にならない。

アドレナリンが極度の興奮状態に作用して、痛覚を麻痺させているのだ。

「あんたでもイイから、あたしを殺しなさいよオツ!!」

「させるかあああああつ!!」

涙子は叫びながらも、目の前に迫る避けられない弾幕に向かって右手を向けた。

この紅魔館に来てつけた誰も当たり前のように持つてる力を振るう。涙子から放たれた弾幕がフランドールの弾幕のいくつかをかきけす。

だが涙子の放った弾幕は弾幕というには情けない弾幕でいくつかは涙子の体を傷つける。

ボロボロの姿のまま迫る涙子に、フランドールは再び後ずさった。「なんで、なんで私に構うのよ! 早く殺しなさいよ! わけわかんないわよ!!」

フランドールまでの距離はもう無い。

それでも、向けられた右手は佐天涙子を破壊するだろう。

迫るボロボロの涙子には数メートルを詰めるのすらかなり辛い。

フランドールの眼には佐天涙子の破壊する頭がしっかりと捉えられていた。

「あたしは紅魔館の一員なんだから、同じ紅魔館の『友達』を助けるのは当たり前だアアアツ!」

視覚で捉えた頭を握りつぶす瞬間の言葉、動揺したのか目標がずれて、拳を握りしめて破壊できたのは佐天涙子の左目だけだった。

それだけで今の涙子がひるむはずもなく、フランドールへと近づいていく。

今日会ったばかりの人間がなぜそんなことを、と思うけれど……残った右目を見て理解できた。

彼女は――。

「貴方がその希望^{幻想}を殺そうと言うなら、まずその希望^{幻想}を守りぬく!」

そんな宣言に、フランドールが攻撃の手を止めた。

完全に理解したのだ。彼女のその目は間違いなく――。

「ヒーロー……」

佐天涙子はヒーローになりたかった……いや、今でもなりたい。

でもフランドールの眼には、レミリアと大妖精の眼には、咲夜や美

鈴やパチユリーや小悪魔の眼には、すでに佐天涙子は自分たちを救ってくれる主人公に見える。

そして、佐天涙子の右拳はフランドールの左の頬を打つ。

吹き飛んだフランドールが地面を転がる。

戦いの終わり。

同時に——佐天涙子の意識も暗闇へと消えるのだった。

5、紅魔の従者

私が目を覚まして視界に入ったのは、見知らぬ天井だった。

でも天国じゃないと思う……だっていつもの“左半分”は見えないわけだし……。

上体を起こして、周囲を見回すとようやくここがどこだかわかった。

——紅魔館だ。

そして私は視線を下ろして自分の体を見ようとしたが、それより先に視界に入ったのは私の横で寝ている人。

「……ぴ、ぴぎやああああああつ!!」

つつい奇声を上げて驚く私だが、そんな大声を出すもんだから隣の子は起きてしまった。

金髪をなびかせて、赤い服の少女が起き上がる。姉とは違う形の羽についた14個の宝石。

綺麗だなあとか思っちゃう私はたぶん、安心してる。

「あつ、起きたのね三下!」

「さ、三下って呼ばないでほしいなあ〜」

目の前の少女、フランドール・スカーレットはあの夜見れなかった“笑顔”を私に向けた。

なるほどね、レミリア様も殺せるわけないよね。

こんな純粋な子……でもきつと、純粋だからあれだけ悩んだんだと思う。

「じゃあ涙子ね! 私のことはフランって呼んで!」

「うん、改めてよろしくねフラン」

そう言っ私は右手で金髪を軽く撫でる。

少しだけ顔を赤らめてくすぐったそうにするフランを見ると、いつの間にやら入ってきていた人が一人。

見慣れた其の人を見ると、あの日から一夜とは思えないほど……あれ、なんで私は一夜しか経ってないと思ってるんだろう?」

「今はいつですか?」

私の右腕につけられた点滴を見ながら聞いてみる。

「あの日から三日と数時間かしらね、丁度お嬢様も起きたところよ」
そんな咲夜さんの言葉に、私は頷いて納得。

三日間も寝ていたというのは以外と堪える。その間にながかったのか、咲夜さんもフランを見て何も思っていないみたいだから安心できるけれど、ほんとどういう状況なのか……。

自分の服装を見れば、入院する時に着るような服装で、私の左腕は……ある。

骨折したときのように包帯でぐるぐる巻きにされているが、私は左腕に感覚を感じた。

「そのままが良いから、立てる?」

「まあなんとか……」

私はフランに手伝ってもらいながら包帯を首にかける。

それにしても様つけとかしたほうがイイのかな? なんて考えながら三日ぶりに靴に足を通して、立ち上がった。

やっぱり少しふらつくけどそこでフランが支えてくれる。

「ありがとうね」

「うん、私のせいだから」

そんな風に言うフランの頭を右手で軽く撫でたあと、点滴装置を持って移動する。

咲夜さんのあとを歩く私だけど、咲夜さんは気を使ってくれているのかゆつくりと歩いてくれていた。

たぶん咲夜さんが手伝わないのはフランの邪魔をするからだろう、そんな気を使えるところは私は好きだ。

通路に置いてあった鏡を見てみると、フランはやはり写っていない。吸血鬼は映らないのは知っているけれどやっぱり違和感があった。

私は自分の姿を確認してみる。

入院服はともかくとしても頭と左目に巻かれた包帯、そして左腕にも包帯が巻かれているけれど、そこ以外はあまり目立った怪我はなさそう。

「どうしたの涙子？」

「ん、なんでもないよ」

私はまたフランに支えてもらいながら歩いていく。

咲夜さんのあとを追って着いたのはレミリア様のお部屋で、扉を開けてもらって入るとお嬢様はベッドで上体を起こしている。

そこには美鈴さんもいる。

気になることも山ほどあるけど、私は咲夜さんが用意してくれた椅子に座る。隣りにフランも座ると、パチュリーさんと小悪魔さんの二人もやってきた。

お嬢様が上体を起こしているベッドの横に座る私とフラン、ベッドをはさんで向こうの椅子には美鈴さんと咲夜さん、そしてパチュリーさんと小悪魔さんも今座った。

「まず伝えておかないといけなことがあられるけれど、貴女の左目と左腕だけねど……」

レミリア様の言葉に、私は少しだけ違和感を持つ。

「包帯を外しなさい」

その言葉に、私は左腕動くの？ と思いつつながら恐る恐る右手で左腕の包帯を外す。

あれ、普通にあるし、動く……どうなってるの？

そんな素朴な疑問もなんの意味もなく、私の今までの腕通り動く。次に頭の包帯を取って目に巻かれた包帯も外すけれど、全然異常はないように思う。

咲夜さんが隣りに現れて私に手鏡を渡すので、それで私は顔を見てみる。

「え？」

私の左目は、右目のように黒くはない。真っ赤なその色はなんだか綺麗だ……まるでレミリア様みたいな……ッ!?

「まさかっ！」

私は「左目に包帯」を巻いているレミリア様の方に目を向ける。

それで悟って、次は美鈴さんに目を向けた。美鈴さんが左腕が「無い」それはフランとの戦いでかと思つていただけ、思い出せばあの時

は確かにあった。

それでも腕がないのだとしたら……。

私は左腕を見た。私の体に馴染んでいるこの腕は……。

「私の左目と美鈴の左腕……自然と馴染んだのはパチエの治療のおかげね」

「治療魔法なんて二度と使いたくないわ」

どこか疲れた様子のパチユリーさんは、たぶん魔法のせいだろう。

私の体に馴染んでいるこの腕と目は二人のもので、目や腕を失った二人を見る。

どうすればいいかなんてわからないから、何も言葉を出すことができない。

「なに、私の片目ぐらい持って行きなさい。両目が無くなったなら美鈴がまだいるもの」

レミリア様の言葉に苦笑している美鈴さん。

結局、終わったと思ったら私が迷惑をかけている。

やっぱり私はこんなだと思いきらされた気分。

「あのね、涙子」

そんなレミリア様の言葉に、私はレミリア様の方を見る。

「貴女はあの夜言ったわよね、紅魔館の一員だって……なら貴女は私たちの仲間なんだから、片目と片腕ぐらい笑顔で受け取っておきなさい」

そう言われても、と思いつながら私は膝の上に置いた手鏡と左腕を見る。

これはレミリア様の目と美鈴さんの腕。それを奪ったのはほかでもない私で、迷惑をかけているのも私だ。

「でも、私は結局レミリア様と美鈴さんに迷惑をかけて、返せるものもなにも無くて……」

「涙子、私とお嬢様は見返りが欲しくてやったわけじゃないわ」

美鈴さんの方を見る。彼女はいつも通りの笑顔で笑っている。

変わらず笑顔を向けてくれる彼女たちに申し訳ない気持ちが溢れてきて、自分の情けなさを痛感した。

どうすればいいのかわからない。だから美鈴さんの言葉の続きを聞く。

「これは私たちからのお礼、フラン様のことをわかって理解して、真正面からぶつかった貴女へのね?」

お礼……?

「私はお礼を言われる資格なんてっ」

「そうね涙子、ありがとう」

咲夜さんも……。

「これで問題が解決したわけだしね、ありがとう」

「はい、こんなことでも無ければ治療魔法なんて使う機会ありませんからね。ありがとうございます」

パチユリーさん、小悪魔さん……。

「ありがとう涙子、貴女は私の主人公だよ!」

フラン……。

「佐天、自分を卑下するのはやめなさい。フランを含めて私たちは貴女に救ってもらったんだから……」

レミリア様は頬を掻いて、顔を赤らめる。

「貴女がまだ私たちのお礼に『資格が……』なんて言うなら、貴女の名前を今日から涙子・スカーレットに改名するわよ!」

そう言っつてビシツ、と私に指を向けるレミリア様。

その姿がおかしくて、でもどこか嬉しくて、私は笑ってしまった。

他のメンバーも同じようでおかしそうに笑う。

レミリア様は顔を赤らめてわなわなとしている。

「ハハハハっ、涙子・スカーレットっつてダサすぎますよっ、ぷっ」

「ああもうそんなに笑うことないじゃない!」

ベッドの上で枕を抱いて顔を埋めるレミリア様。

「まったく、佐天は酷いわね」

そう言っつて窓から入ってきたのは青い妖精。

このメンバーの中に違和感なく入れる良くわからない妖精で、彼女のお付きと言っつてもいいもう一人の妖精も入ってくる。ついでに宵闇の妖怪もだ。

その三人を紅魔館のメンバーは笑顔で迎え入れるのは、仲間と言つていいからだと思う。

——暖かいなあ、なんだか……。

「チルノに大ちゃんにルーミアちゃん……」

ルーミアちゃんはチルノと大ちゃんと一緒に遊ぶから結構仲が良いい、三日前のあの時はびっくりしたけど。

「レミリアのプロポーズを笑うなんて」

「え？」

なに？ プロポーズ？

腕を組んでいるチルノが少し難しい顔をしてる。

「そういうことじゃないの？」

「違うわー！」

チルノの顔面にレミリア様の枕が直撃する。

ずるっ、と落ちる枕、チルノはやれやれと頭を振った。

相変わらずマイペースな感じで、そのペースを崩す術と言ったら一つしかないけどここは自重。

レミリア様はベッドの上で立ち上がって枕を投げたポーズのまま荒く呼吸をしている。

そんなに焦んなくても……。

「まったくー！」

恥ずかしそうにして、レミリア様はベッドの上に座ってため息をつく。

「レミリア様、あとみんな」

私は視線を集める。

こうして、こんな機会だから私は言うべきだろうと思う。

この私でもこの紅魔館を変えるきつかけを作れたなら、なんの能力もない私にだって誰かを変える力があるなら、こんな私でも必要としてくれる人がいるなら、私は居場所を少しだけ変える。

「私、紅魔館に住みます」

その一言。

レミリア様の方を見れば笑っている。

他のみんなも同じように笑っていた。

「ようやくね、今までも来なさいって言ってたじゃない」

「まあそうなんですけど、改めて……って感じですよ」
拒絶されているような雰囲気はない。

私はチルノの元へといく。笑ってくれるチルノを見て、私も笑う。
この子は私の新たな門出を喜んでくれているみたいで相変わらず
の表情でふふん、と笑うのみ。

相変わらず腕を組んで偉そうに、というより無防備でいるものだから私は悪戯心をくすぐられる。

悪いのはチルノだからね？

「はいっ！」

私はチルノのスカートを捲り上げた。

おお……今日はまた青と白のします。子供っぽくて良いね、私は好きだよ。

スカートがふあさつ、と下りるとワンテンポ置いてチルノの顔が真つ赤になる。ふむふむ「さいきよー」に可愛いよチルノ、私が男なら惚れてたね。

ん、これはあのパターン。

「佐天の馬鹿！」

一つだけ弾幕が放たれ、その氷の弾幕を軽く避けた私。

まあそれが悪くて……。

「むきゅ!？」

私の後ろにいたパチュリーさんに弾幕が直撃。

額に当たった弾幕のせいで倒れて、後頭部を床に打ち付けて後頭部を押さえながら転がりまわる。

ああ、合掌。

「パチュリーさまー！」

小悪魔さんがパチュリーさんに近寄ろうとするが転がりまわっているパチュリーさんに躓いて、小悪魔さんが咲夜さんを押して、倒れた咲夜さんが座っている美鈴さんの足の上にポン、とおさまる。

「あははは、咲夜ちゃんは甘えんぼですね」

昔を思い出したのかそう言つて咲夜さんの頭を撫でる美鈴さん。

直後、咲夜さんの顔が真っ赤になって立ち上がると同時に美鈴さんの顔面にパンチを一発。

「美鈴のあほ〜!」

椅子ごと倒れそうになる美鈴さんが倒れる時、机の上にあつた皿を手で弾く。

その皿が回転しながら大ちゃんの頭に直撃して大ちゃんが倒れ、さらに皿の上に乗っていたフォークがルーミアちゃんのこめかみに突き刺さる。

「チルノちゃんマジ天使ツ!」

「べ、ベアクローだ……と?」

倒れる大ちゃんとルーミアちゃん。

ラーメンマンみたいになつてから今後多分、おそらくモンゴルマンとして帰ってくるはず。妖怪だから問題なさそうな気もするけど。

気づけばチルノと小悪魔さんが争っている。

「これはパチュリーさまのぶん!」

「当たらないのよさ、オオラオオラオオラオオラオオラオオラオオラオオラオオラオオラオオラアツ!!」

「無駄アツ!!」

拳と拳をぶつけあう熱いバトルを繰り広げるチルノと小悪魔さんのせいで部屋が大惨事に……。

そして咲夜さんは自分で殴つてしまい気絶している美鈴さんをゆさぶっている。

パチュリーさんは今だに転がりまわっていて、大ちゃんはずっと『チルノちゃんマジ天使……』とぼそぼそつぶやいてる。マジ怖い。

ルーミアちゃんの方はこめかみから流れた血で『犯人は中国』と書いている。

なにこれ、まさか私がスカートをめくっただけでこんな状況になるとは……。

「楽しそうじゃないか、あたしも混ぜてくれよ!」

そう言つて窓から現れたのは魔理沙さん——瞬間、魔理沙さんの方に向けて轟音と共に極太レーザーが二本放たれた。

魔理沙さんは『え?』という顔をしていて、その二本のレーザーを見て全員が動きを止める。

そしてレーザーが放たれた方を見れば、そこにはこの館の主たち、かのスカーレット姉妹が並んでいた……。

「全員、正座」

◇◇◇◇◇

ボロボロになったレミア・スカーレットの部屋にて、松葉杖片手に立っているレミアと同じく立っているフランドール。

二人は不機嫌そうな顔で目の前に正座した面々を見ていた。

佐天涙子を中心に並んで正座している。

右には恥ずかしさゆえか真っ赤な顔をしている咲夜、その隣りには良くわからないという表情で数秒前まで昏睡していた美鈴。さらに隣りにはボロボロの小悪魔で、その隣りには大きなたんこぶをつくつて倒れているパチュリー。

そして反対側、涙子の隣りに正座している小悪魔との激闘でボロボロの姿をしたチルノ、その隣りにはフォークが刺さっただけでなにもしていないはずのルミア、そしてその隣の魔理沙。

なぜだか魔理沙がガクガクと震えているが先ほどの攻撃だけのせいじゃない、その隣りに座っている大妖精が問題なのだ。

「チルノちゃんマジ天使、チルノちゃん可愛いよ、私の勧めで最近パンツ履いてるけど佐天さんにめくられるのにドロワじゃないチルノちゃん可愛い、私以外にパンツ見せたくないんだよね。じゃあ顔面騎……」

打ちどころが悪かったのか先ほどから虚ろな目でそれしか言っていない。

だが正座を崩すことも動くことも許されないこの状況、苦笑する佐天涙子だったが、目の前にレミアが立っている。

彼女は松葉杖を付きながら涙子の目の前に立つ。

「貴女はなにをやっているのかしら？ その目はチルノのパンツを見るための目だったのかしら？」

「ああいえ、その……なんといいいますか私なりのいつものテンションに戻ろうとしようとしたというか」

パンツの話をしてからチルノは顔を真っ赤にしている。

いつものチルノからしたら想像できないが、逆に涙子だけがあのチルノを引き出せるのだ。それほどのメリツトが無ければ大妖精がチルノを辱める涙子を「生かしておく」わけがない。

「る〜い〜こ〜？」

レミリアの顔に近い。左目の包帯は涙子に片目を渡したせいだ。

その事実を再認識して、レミリアの右目に映る自分の左目を見る。

彼女と美鈴は涙子の五体満足のために体の一部をやったのだ。

「ご、ごめんなさい……」

素直に、今にも泣きそうな表情でそういう涙子を見てため息をつくレミリア。

横を見ればフランまで少し気まずそうにしている。

この悪循環に、心底面倒そうにため息をつくレミリアは、正座していて自分より身長の高くなった涙子の頭を乱暴に撫でた。

「わわっ、わわわっ!？」

頭がわしゃわしゃになった涙子がレミリアを見るが、彼女は少しだけ赤い顔でそっぽを向く。

「何度も言わすな涙子、お前は自分を紅魔館の一員だと言い「私たちが」はお前を認めてるんだ。 気負うな」

「……レミリアさま」

「ただしスカートめくりはしないこと、私がせっかくあげた目なんだから……」

なんとというツンデレ。なんて声がどこから聞こえてくる。

だが気にすることも無い涙子とレミリア。二人でなにか主従か親友かわからない微妙な空間を築いているので、全員正座をやめて自由にしていた。

それを見て『やれやれ』と笑うチルノ。

大妖精はフランに強烈なビンタをされて正気を取り戻し、美鈴はルーミアのこめかみに刺さったフォークを抜いて気で治療。

咲夜はというと、小悪魔と一緒にパチュリーの怪我を看ている。

魔理沙はすでに帰った。気の毒なことに……。

「よし、今日は涙子が紅魔館に来た記念として宴よ！」

レミリアの言葉に即座に反応する全員。

完全に先ほどの怒りを忘れていているということなので安心していいのだらう。

「ならば私は準備を」

「なら私もお手伝いします」

咲夜の言葉に美鈴が手を上げる。

片手なのに大丈夫？ とか色々心配する言葉がなげかけられるが美鈴のことだ、なんだかんだ言って平気なのだろう。

後頭部に氷嚢を置いたパチュリーと小悪魔は準備が終わるまで図書館に引きこもるつもりだろうだ。

「じゃあ涙子、私たちは人里に遊びにいきましょう！」

「えっ、でも準備を」

フランの言葉に咲夜と美鈴を見る。

「行つてきなさい、これからたっぷり働いてもらうから問題ないわ」

そう言われると、涙子は苦笑しながら頷いた。

レミリアもついていく気であるようでアップをはじめ。

ハイテンションで楽しそうな彼女を見て佐天はボロボロの部屋を見ると、案外片付いていた。

瓦礫も集められているし……。

「じゃああたいはこのまま掃除をしてるわ。終わったら寝るから咲夜、起こしに来なさいよ」

そう言つてチルノはものをどかしていく。

その姿を見た面々はそつとつぶやいた。

——チルノちゃんマジ天使。

6、紅魔でのそれから

私佐天涙子、宴会のことは覚えていない。

お酒を勧められて断って、だけど少しだけ飲んだら止まらなくなつて、結果……覚えていなかった。

起きたときには隣りに小悪魔さんとチルノが寝ていた。半脱ぎだった理由は知らないけれど、たぶん酔ったパチュリーさんとか大ちゃんがセクハラまがいのことをして避難してきたんだと信じたい。

その朝はいろいろとおかしくて、妖精メイドの子達がなんだかよくわからない敬礼をしてきたり、『第四波動が……』とかつぶやいてたりだ。

私は何もしていない。はずだけど……。

あれから二週間、バイトしているときとたいして変わっていない。変わっていることと言えば紅魔館に私の部屋があることぐらいじゃないかな、と思う。

でもやっぱりチルノの家に住まないと若干なりともチルノの貞操が気になるのは大ちゃんが旦那だから……いや、ほんとに大丈夫かなと思うけど大丈夫だって信じてる。

大ちゃんだって無理やりやったりはしないとと思うし。なんて、私は紅魔館の廊下を歩きながら思う。

すっかり慣れたメイド服で私は歩くも、たまに幻想郷に来たときの制服を見てみたりする。

また着る機会なんてあるのかな？

むしろ帰れても私は帰らないかもしれない。初春と家族には悪いけど……。

「涙子〜！」

そう言つて私に背後から抱きついてくるのはフラン。

なんだか『さま』を付けたら『るウウウイこちチャアアアアンツ！』と怒られたのでフランはフランにしている。

まあこうやってフランが背中に抱きついてくるときは、レミリア様

が寝ているか優雅なひとときを過ごしているか、はたまたあの薄情巫女のところに行っているかで暇なんだろう。

「けど今日は佐天さんも暇じゃないのです」

「ええ〜」

「ごめんね、今から美鈴さんと修行だから」

そう言うと、フランが目を輝かす。

見てく気満々だなあ、と思うけどまあ問題は無いと考えても良いんだと思う。

そう言えばここ最近で私の身体能力がかなり上がっている。理由はやっぱりレミア様の眼と美鈴さんの片腕のおかげだと思う。

私の体にはわずかながらもレミア様の血と美鈴さんの血が混じっているんだから、純粋な人間とは言えないけどなにも深く考えていない。だって紅魔館の一員なんだから少し人間じゃないぐらい、なんだと言うんだろう。

チャイナ服に着替えて、庭についた私はフランに傘を渡して美鈴さんを呼びに門まで向かう。

「美鈴さ〜ん」

「来たわね涙子」

美鈴さんと私が庭へと移動して、お互いが少し離れてから構え合う。

片腕を私にくれた美鈴さん、そして私は身体能力と動体視力が上がっている。

だがそれでも殴り合いならば美鈴さんの方が上だ。こうしているとどれだけ弾幕勝負というものに人間が恩恵を受けているかわかる。

殴り合いの開始の合図なんて、どこも変わらない。

「ハアッー」

私が足を踏み込むと同時に真っ直ぐ拳を打ち込むが、かるく片手でいなされて、蹴りでの追撃をしてくる。

軽く地を蹴って後ろに下がった私は足を振り上げた美鈴さんに蹴りを入れようと思ったけれどその攻撃も軽く片腕で防がれる。

足を素早く下ろして私は拳を打つ。

けれどやっぱり防がれた、今度は受け流されて私は前に倒れそうになる。

「一撃、いただくわよ！」

美鈴さんがくるっ、と体をまわして私の腕の下に体を忍ばせると背中を私に向ける。

——つて不味ッ！

「ハァー！」

鉄山靠、背中というか肩というか、その一撃を受けて私は吹き飛ばされた。

なんとか両足を地面につけて倒れるのを防ぐけれど、胸の辺りが痛い。

でも体も温まってきたし、次は一撃入れさせてもらう気でいく！

「行きますよー！」

私は受け流されることを考えながら、感覚を研ぎ澄ます。

わずかながらに先ほどよりも素早く動けて、美鈴さんの動きも先ほどよりも見やすい。

能力ではないけれど、これもわずかながら混じっている “スカーレット 紅 ”
の血のおかげ。

先ほどとは違い美鈴さんへと走って跳ぶ、膝蹴りを放つがさすがにそれは腕で受け流すしかないから私は美鈴さんの防御のために構えた腕を膝で打つと、残った片足でその腕を蹴る。

跳んだ私は美鈴さんの背後に着地して、しゃがむと同時に背後に足払いをかけた。

「っー！」

体勢を崩す美鈴さんは後ろ向き、すなわち私の方に倒れてくる。

「もらったー！」

しゃがんだままの私は倒れてくる美鈴さんの背中に蹴りを入れた。このダメージは大きいはず……。

吹き飛んだ美鈴さんは地面をころがり、すぐに体勢を整える。彼女のトレードマークたる帽子が吹き飛んで、すぐに私を視界に捉える。

けど今の私を相手には——遅いッ！

「なっ！」

驚いた様子的美鈴さん、もう私が目の前にいたことに……かな？

私はすかさず両拳での乱打。二ヶ月前の私から思えば比べ物にならないほどだと思う。

たぶん純粋な殴り合いだけなら幻想郷のひとたちにだって、そうそう負けない！

私の両腕での攻撃を片手でいなしていく美鈴さんだけど、さすがに限界。

「これでっ！」

美鈴さんの目の前で拳を止めると、目を見開いて驚く美鈴さん。

苦笑しながら両手を上げて、私の差し出した手を握ってくれる。美鈴さんを引っ張り上げて立たせると私は美鈴さんの帽子を拾って届けた。

片手で私が払うと受け取って頭へとかぶる。

「強くなったね涙子」

「美鈴さんのくれた腕と、レミリア様がくれた眼のおかげで私はこうしてられるんです」

そう言うと、美鈴さんは笑って私の頭を撫でてくれた。

日傘を指したフランが走ってよってくる。

「かつこよかったよ涙子！」

「佐天さんは強いんだよ〜？」

「そんな強い佐天の実力は気になるわねえ」

そんな声に、私は固まる。

いや、嫌いなわけじゃないんですよ？ ただこの声を聞くと顔面にパンチをもらったときのトラウマを思い出すというか……。

トラウマ度で言えばフランちゃん以上で、トップクラスの鬼巫女。

幻想郷の素敵な巫女さんこと、博麗霊夢さんが私の背後にはいました。

「なにそんな顔してんのよ、顔パンは悪かったって言ってるじゃない」

「いえもう、気にはしてはいないんですけど、というより今日はレミリア様はそちらに行ったのでは？」

「来てないわよ、人里にでも行ったんじゃない？」

ああなるほど、またはチルノのところか……レミリア様の数少ない友達だもんね。

霊夢さんと魔理沙さんも大概友達が少ないと思うけど、レミリア様は引きこもりつてのもついでななあ。

ニヤニヤしている霊夢さんに「超危険」な雰囲気を感じます……。

「おつと霊夢、そこまでよ」

救世主キターー！

「誰かと思えばチルノじゃない」

チルノちゃんマジ天使ツ!! つて——ツ!?

私の隣りから殺気を感じた。横を見ればそこには笑みを浮かべる大ちゃん。

口に出してたら大惨事つてわけだね。

黙って見合うチルノと大ちゃんを見て私は喉をゴクリと鳴らしてしまう。やっぱり二人は違う。

なぜだか知らないけれどチルノは、妙な圧力を持っていた。

「あたいが『さいきよー』たるゆえんつてやつを霊夢に見せつけてやるのよ」

チルノの背中の中六枚の羽がジャキツ、と音を立てる。腕を組んだチルノは表情を不敵に歪ませた。

そんな余裕の表情を浮かべるチルノにさすがの鬼巫女こと霊夢さんも警戒したのか札数枚を取り出す。

そつと腕を上げる美鈴さんが、二人を見て頷く。

「弾幕ファイター! レディイイツ、ゴオオオオオツ!!」

どこのファイターですか!

私の渾身のツツコミも入れる間もなく戦いは始まる。

腕を組んで笑みを浮かべるチルノに、霊夢さんは飛び出した。

今から始まるであろう激戦に、私は心躍らせた——。

「の、だけれど!?!」

倒れているチルノ、ちなみに戦いがはじまってから二分も経たずに

やられたチルノ。

弾幕のぶつかり合いを見ていたと思っただけならすぐに霊夢さんの必殺の右拳がチルノの顔面に突き刺さるハメに……。

なんとこの瞬間、殺具かと思っただけ、まあ仕方ないよね。

あの鬼巫女に勝てるのはフランぐらいだと思う。

それにしてもフィニッシュが右拳っていうのは『幻想郷よ、これが弾幕ごっこだ!』と伝えたいとでも?」

「さて佐天、殺りましようか」

笑みを浮かべて言う霊夢さん。

「いや、なんだかやりましようのときのイントネーションが!」

「あら霊夢、うちの涙子をいじめるのはやめていただきましようか?」

そう言っただけから現れるのは第二の救世主。

その名はレミリア様、学園都市で言えばLEVEL5! 最強にして最凶!

やっぱりそんな御託はいいので助けてくださいレミリア様、いますぐ! 鬼巫女怖い!

地上に降り立ったレミリア様、そしてそんなレミリア様をずっと日差しからガードしている咲夜さん。

「さつきと違って助かりそう!」

「ほお、佐天さんはチルノちゃんじゃ助かりそうもなかったと?」

怖い! 大ちゃん超怖いです! 気絶してるチルノちゃんの上に馬乗りになっている変態とは思えない殺気!

ていうか私はもう殺気を感じるほど感がするどくなってるんだね。少しだけ成長を実感した。

ふと気づけば、霊夢さんとレミリアさんのにらみ合いは終わっている。

「さて、お茶にするわよ。涙子は紅茶を用意しなさい」

最近、私に頼む回数が増えてきたけど、それだけうまくなったってことだよな?」

私はできるかぎり元気に返事をして、大ちゃんから視界を外す。「フラン、チルノをよろしく!」

「任せてー！」

殺氣を向けられれば大ちゃんと同じぐらい怖い紅魔の妹にチルノを任せる。

残念ながら私にはあの子をどうにかするなんてできません……ええ、佐天さんは諦めが悪いけれど、勝率0%の戦いは挑まないのです。

私は早歩きでその場から去る。

できれば紅茶を持って行くときには大ちゃんの「スイッチ」が切れてることを願って……。

チャイナ服からメイド服に着替えるという若干「面倒だった」作業も終わらせると紅茶を持って私は二階のテラスへと向かった。

だが二階へと続く階段を登りきった時、そこには見知らない女性が一人。まさか——侵入者？

とんだ命知らずだとも思うけど、たぶん私はこの目の前の女性に勝てない気がしていた。

「あら、貴女ね……」

うわ、綺麗な金髪……。

笑う目の前の『ヒト』は『萃』と書かれた服のまま私に近づくと、両手がふさがった私の頬を撫でる。

体が動かないのは目の前の女性から発せられる何かに圧つさされているからだ……思う。

びつくりするほど綺麗な目の前の女性は、なにかを含んだような笑みを浮かべた。

「アレイスター・クロウリーから命ぜられてこちらに来たのかしら？

この博麗大結界の異変も貴女のせいと考えていいの？」

瞬間、殺氣を感じた。

だけど——動けない。指一本動かさずにいた私を、ただ見ているだけの女の人の。

私は殺され、る？

「拷問にかけたりしたら、吐くかしら？」

「ッ!？」

声が出ない。出せない、ダメだ、私……。

女性が口元に胡散臭い笑みを浮かべる。

手が震えることもなくて、ただ紅茶を乗せたトレーも震えない。

「紫」

そんな声が聞こえた。

聞き慣れた声に、振返る目の前の女の人は私を見ている時より笑顔を浮かべた。

穏やかな笑顔でまるで旧友にあったかのようなそんな表情は私を見ていた時とだいぶ違う。

そしてそんな目の前の女性に声をかけたのはチルノで、私には今度こそ彼女が救世主に見えた。

ああ——助かった……。

「あらチルノ、どうしたの？」

「久しぶりじゃない、何十年振りよ。それよりあたしの友達に手を出すのはやめてくれないかしら？」

「吸血鬼の眼を持つてる友達なんて相変わらず個性的な友達つくるのね」

「ちよつと前まで佐天は人間だったわよ。佐天はフランのために眼と腕を犠牲にして、その佐天のためにレミリアと美鈴は眼と腕をあげたの」

そんなチルノの言葉に、女の人、紫さんは私を見てため息をつく。

眼にはもう殺気はこめられてなんていないけれど、さっきのこともあつて少し怖い。

チルノはこの人とどういう関係なんだろう？

「またねチルノ、今度もしつかり覚えていてね？」

「またね」

そうチルノと挨拶を交わす紫さんは、私の方を見た。

「またね……えつと、佐天？」

「あつ、は、はいー！」

楽しそうに笑うと、紫さんは突然消える。

目の前であった不思議なことを信じられない私だけど、この幻想郷

で常識なんてもっていてもしかたない。

そんなものかなぐり捨てて私は平静を保つために深呼吸する。

侵入者なんて、レミリア様が許すのかな？

「知り合い？」

「うん、幻想郷の……あれ、なんとか関係の八雲紫。偉いらしいよ、さいきよーのあたいにはかなわないうって言ってるからあたいよりは弱い」

そんなことがあるはずがないけど、とりあえず頷くことにした。

一応私の命を助けてくれたわけだから大人しくしとく。

「チルノはさすがだなく」

「褒めてもなにも出ないのよさ」

震えもおつた私と、チルノちゃんは二人でレミリア様の待つテラスへとついた。

テーブルを囲むように座っているレミリア様と美鈴さんとフランとチルノと大ちゃん、そこに鬼巫女こと霊夢さん。

それぞれのテーブルの上に皿とカップを置いて紅茶を注いでいく。

おかわりは咲夜さんが行くだろうからここで一休み。

「ふふっ、涙子も紅茶を淹れるのが上手ね。咲夜と違ってこれはこれで好きよ」

「じゃあ涙子がお嫁さんに来ればいいのよ！」

フランが可愛いことを言ってる。まあ子供のうちは『くく』と結婚する！』というのは良くあることだよ。

弟もちっちゃい頃は言ってたしね……ていうか、495歳児だけどもまあ冗談だよな。

ていうか紅茶が美味しいだけで結婚って、子供は可愛いなあ。

レミリア様、紅茶こぼしてますよ。

「げほっ、げほっ！ がはっ！ ふ、フラン貴女なにを言ってる！」

なんだか言い争いしてるフランとレミリア様だけどシスコンなレミリア様のことだから嫉妬してるんだと思う。子供のそう言う言葉に一々反応してちゃダメですよお、吸血鬼の主ともあろう者が……。

「というか大ちゃんもスイッチ入ってない時は結構行儀正しい普通の子なんだね。」

「ふう、おいしいです佐天さん」

可愛い。うん、私の唯一の可愛さでの癒しかもしれない。

フランも結構可愛いけどやんちゃで、なんというかこういう癒しは必要だよ。同時に恐怖もかねそなえてるあたりさすが大ちゃん。

チルノは、ふーふーと紅茶を冷やしている。熱いの苦手だもんね、さすが氷精。

そう思っていたら咲夜さんがため息を吐いて、瞬間、チルノのカップに氷が一つ。

「ふっ、さいきよーのあたいは気づかぬ間に氷を召喚してしまったよ
うね」

笑う咲夜さんだが、レミリア様の「数少ない友達」を心配しているのだと思う。

「うん、おいしいわ」

そう言っただけで飲んでもくれるチルノだけど、なんで自分で冷やさなかったのかと思う。

相変わらずどこか抜けているのはチルノらしい。

先ほど紫さんから私を救ってくれた人と同一人物と思えないのだから。

まあ、なにはともあれ平和が一番。あの人がもう私の目の前に現れないでいてくれたらそれで平和なのだ。佐天さんは心の中で思ってみたり……。

ああ、そういえば学園都市のこと忘れてたあつ!!

すっかり紅魔館の一員ですよ佐天さんは……。

「はあ」

「あら涙子、どうしたの?」

レミリア様のふとした言葉に、なにもないですよと笑いかけた。

今は学園都市のことを考えても仕方ないって思うけど、もう二ヶ月以上も経ってるんだしいろいろ諦められてたりするのかな?

ここから帰れる保証もないので構わないけれど、私はとりあえずお

かわりをほしそうにするチルノのティーカップに紅茶を注いだ。

咲夜さんの用意したスコーンを食べる。

学園都市に帰ることもできないけど……。

——ああ、不幸じゃない。

私はそう思えました。

7、遠くて近いところで

夜、紅魔館の見回りをしている私は人多り見回りを終えたあとに、制服に着替えて部屋に帰る。

寝巻きはあまり派手なものも慣れないので人里で適当にみつくるつたタンクトップのシャツとハーフパンツだけ、夏場には丁度良い。でもなんだか今日は疲れたから制服のまま寝ちやう！

とりあえず、部屋のベッドに横になった。

明日は久しぶりの休日だし、ゆつくりしようと思うも行くところと言えば霊夢さんところ？ ……いや微妙だ。

まあ、色々な人に会うだろうし一日なんて早いでしょ！

さあて、おやすみなさい！



佐天涙子、彼女が紅魔館にやってきた日。

彼女が幻想郷にやってきてから数時間の出来事であり、彼女は博麗霊夢の住む博麗神社から霧雨魔理沙の箒に乗せてもらいやつてきていた。

紅魔館の前に降りるのは涙子と魔理沙と霊夢、そして後に同居人となるチルノと大妖精だ。

涙子は目の前の真つ赤な大きな洋館に心奪われた。いや、心奪われたというより、魅了されたという方が正しいだろう。

恐ろしい雰囲気気が気のせいでないということは後に知る。

「行くわよ」

霊夢が歩いていくのでそのあとをついていく涙子、霊夢の隣に魔理沙がつき、涙子の両隣にチルノと大妖精。

なんだか守られているようにも思えるけれど、飛べないのも自分一人なのだから仕方ないと涙子は納得した。

大きな門の前に、一人の女性が立っているのが見えて涙子は少し驚いた。

長身で女性らしい凹凸のついたボディを持つ女性は赤い髪で中華風な服装をしている。

「よお美鈴^{メイリン}！」

魔理沙が片手を上げて軽く挨拶すると美鈴は苦笑した。

理由は簡単、彼女が侵入にやってきた日はろくなことがないからだ。

だが今回は美鈴の主人たる「彼女」の友達も着ているようで笑顔を浮かべた。

「いらつしゃいチルノ、大ちゃん」

「扱いが違いすぎるんじゃないか？」

「全部魔理沙が悪いんじゃない」

そう言うと、美鈴は門を開けて「五人」を通す。

一瞬だけ彼女は涙子の方を睨んだが、チルノが片手を上げると何も言わなかった。

それだけチルノが「彼女の友達」であることが大きく、信頼を得ているのだろう。

少しだけ感じた美鈴からの「敵意^{視線}」を、涙子は気のせいだと思いつのまま霊夢と魔理沙のあとをついていく。

「えつと霊夢さん、ここで私が？」

「ええ、悪くないわよ案外」

涙子は苦笑しながらも庭を歩き館の中へと入る。

入ればすぐに、一人のメイドが現れた。銀髪の女性は無表情のまま涙子を一瞥する。

その射殺するような視線に息が詰まった涙子だが、涙子の前にチルノが立つ。

「……上でお嬢様がお待ちよ」

射殺するような視線を外され、佐天涙子は激しく呼吸をした。

先ほど美鈴から向けられた視線よりもよほど「本気」であったのは確かだ。

チルノたちがいなければ今頃どうなっていたかわからない。

「大丈夫ですか佐天さん？」

「あつ、うん……大丈夫だよ大ちゃん」

心配する大妖精に笑顔を向けて、涙子は三人についていく。

先頭を歩くメイド、十六夜咲夜は五人を他の部屋とは少し違う扉の前へと案内して、横に立つと軽く手をやり入ることを促す。

霊夢は扉を開けて中に入る。

魔理沙と涙子もチルノも大妖精も続いて中に入ると、そこには椅子に座る一人の少女がいた。

涙子よりも年下な、小学生ぐらいの少女。

なにを偉そうに、と思つた涙子だったがすぐにその認識を改めることになる。

「レミリア、この子は外来人なんだけど話を聞いてあげてくれない？」

「……いいわ、その娘、要件を聞いてるわ」

その圧倒的なカリスマを感じた佐天涙子は、わずかに後ずさりそうになるもこらえて前に出た。

少女の前で、涙子は口を開き話を始める。

「あの、私は佐天涙子って言います。幻想郷で言えば外の世界からきました」

できる限り丁寧に言う涙子は目の前の小さな少女に圧倒されているからだ。

当初は作り物かと思つていたその背中の「悪魔の翼」とその赤い目は「無能力者」たる涙子を圧倒するに十分な圧力がある。

チルノが少しだけ前に出て涙子の隣りに並ぶ。

「佐天が外来人つてのは本当なのよさ、あたいの家のベランダに吊れ下がつてて幻想郷からも出られないからあんなたちを頼ろうと思つたわけ」

「あら、『さいきよー』の貴女が私を頼るなんて珍しいわね、それとも御飯をたかりにきたのかしら？」

「今回は頼りに来たのよさ、この涙子をあんなのところで鍛えてほしい」

その言葉に、少しだけ息をつくレミリア。

なにを馬鹿な。と笑っているようにも見えるが実際にそうなのだ

ろう。

外来人を何が楽しくて鍛えなくてはならないのか……。

だがただ目の前の少女をはねのけるというのもおもしろくない。

「貴女はなにを持って私たちから力をつけてもらいたいと思うの？」

レミリアが立ち上がり、言葉を放った。

力強いその言葉を受けた涙子は、グッと手を握って口を開く。

目の前の人ならば、自分の気持ちを受け止めてくれる気がした。

「力が無いからって見下されたりしないように」

levelだけで決まってしまう立場に負けない自分。

「誰かを守るために、力が欲しいんです」

友達である初春飾利も風紀委員ジャッジメントとして人々を守っている。

「でも今の私には、自分を守る力すら無い」

だからこそ、涙子は能力というものに憧れていた。

当初の能力への好奇心はすでに憧れへと変わっているのだ。

あの最高の科学を有した、最悪の治安の学園都市にて、自分が誰かの為に。

その憧れは周囲の人間が能力を得たりlevelをあげたりする度に思う。

「だから私は、この手が伸びる範囲でいい。自分が見える範囲でいい。それだけの人でも自分の力で救いたい。だからここで私に力を、力をください！」

頭を下げて懇願する。

そんな佐天涙子をレミリア・スカーレットは少し驚いた表情で見た。

だかそんなレミリアもすぐに表情を整えてから、笑う。

「悪いけれど、タダというわけにはいかないわ」

そんな言葉に、頭をあげた涙子は冷や汗を流す。

嫌な汗が頬を伝うのは、おそらくレミリアの不敵な表情故だ。

彼女が何を考えているのかはわからないが、タダでないなら今現在にも持っていない自分はどうすれば良いんだろう？

「貴女、家で働きなさい」

「え？」

そんな反応をした涙子だったが、その反応をしたのは涙子だけではない。

涙子の背後にいた霊夢も魔理沙も、大妖精もだ。レミリアを見てチルノだけは『やれやれ』と肩をすくめる。

笑うレミリア・スカーレットは涙子へと近づいて軽く頷いた。

なにを一人で納得しているのかと疑問を抱くが、少しばかり安心する。

「はい、是非！」

「決まったわね……でもね、貴女の望み。誰かを守りたいというのはそう簡単にできることじゃないわ」

レミリアの言葉を、涙子は黙って聞く。

「だからこそ、貴女をここで強くしてあげるわ」

悪魔の少女を目の前に、佐天涙子は頷く。

「その代わり全力で私を楽しませない。貴女には期待しているわよ……佐天涙子」

したこともなく、漫画の中でしか見ないような、片膝について頭を下げるなんて行為をしてしまう。

それはきつとレミリアのカリスマゆえなのだろう。十六夜咲夜ですらも片膝をついている。

こうして、佐天涙子は吸血鬼レミリア・スカーレットの従者となることになった。

それからは色々な住人に顔合わせだ。

咲夜とは目的の場所に行くまでに軽く自己紹介をすました。

仲間となったせいかわ、咲夜は先程までと違い笑顔で涙子に接する。

当初はレミリアを「狩り」に来たのかと思われたが、そうでもないかわかったこともあるのだろうか。

「さて、パチエ〜入るわよ！」

そう言って扉を開けば、そこには見渡す限りの本棚。

涙子は思わず感嘆の声を上げる。どこを見ても本、本、本。

レミリアが向かった机には本を読みふける少女が一人。少女が振

返ると、面倒そうな表情で面々を見るも涙子に視線を合わせて止まった。

軽くお辞儀する涙子。

「レミイ、この人間は？」

「佐天涙子、紅魔館で働かせるわ」

「……好きにしていいわよ」

「貴女も弾幕とか教えてあげてね」

レミアアのそんな言葉に、本を読んでいる少女ことパチュリーは露骨に面倒そうな顔をする。

どうせその佐天涙子を連れてきたであろう魔理沙とチルノを見た。

面倒事を、と思うもレミアアが認めたということはなにかの「運命が見えた」か、ただ彼女を認める理由があったかだ。

どちらにしろこの館の主人が認めたのだからパチュリーだって目の前の人間には興味がある。

「私はパチュリー・ノーレッジ、魔法使いよ」

「改めまして佐天涙子です。これからよろしくお願いします！」

軽く頷いてから、本に目をやる。

弾幕は教えるつもりだが必要以上に話す理由もない。

なんて言いながらも、いつかは楽しく話す仲とかになっちゃおうのをパチュリーは知らない。

無愛想なパチュリーに『失礼なことした？』と思う涙子がレミアアの方を見た。

「気にしない方が良いわ。とりあえず行くわよ」

レミアアがそう言って出て行く、魔理沙はここに残るようなので霊夢と大妖精とチルノもレミアアについていく。

これからお世話になるので、涙子は最後に軽く一礼して出て行く。

パチュリーは本棚へと走っていき自らの使い魔へとちよつかいを出しに行った魔理沙を見て、大きいため息をついた。

面倒なことに『動かない図書館』が動くときが来たのだ。

図書館にてひと騒動起きそうな時、レミアアの後ろを歩いていく

面々。

道を歩く妖精メイドと呼ばれるこの屋敷のメイドたち、だが今日涙子と顔合わせて紹介されるのは紅魔館の幹部クラスだけのようだ。

妖精メイドたちには明日一斉に紹介してくれるらしい。

館を出て門の前まで行くと、そこには最初会った女性。

「これ、寝てるわね」

チルノのつぶやきに『まさかあゝ』と思いその女性の少しうつむく顔を見るが、目を閉じて涎を垂らしている。

寝ているのを確認すると、なぜだか立ったまま寝るといふ暴挙に走った女性に尊敬さえ覚える。

絶対身につけたくない術だが立ったまま寝るといふのは純粹に凄
い。

「置きなさい美鈴、私のナイフがそんなに好きなら仕方ないけど」

「起きてますよ！・ 起きてますよ！・」

一瞬で起きた女性に驚く涙子。

女性の方は目の前の面々を見て、キョトンとした後、すぐに表情を
キリツと引き締める。

ため息をつくレミリアとやれやれと首を振るチルノ、大妖精は苦笑
していて、霊夢はおかしそうに笑う。

とりあえずと、レミリアが咳払い。

「美鈴、紅魔館に新たなメイドが来たわ」

「ああなるほど、その子ですか」

美鈴が先ほど見た佐天涙子の方に視線をやる。

「佐天涙子です。よろしくお願いします！」

「私は紅美鈴、よろしくね」

手を差し出す美鈴の手を、握手で返す涙子。

お互いが手を離すと、納得したようにレミリアが頷いた。

「じゃあ美鈴、貴女はこの子の教育係ね」

こんなところで寝てた人物が教育係かと、少し不安に思いながら話
を聞く涙子。

頷くチルノと大妖精は何か知っているのだろうか？

「またメイドさん教育ですか」

「咲夜を育てた貴女ならできるわ」

レミリアがそう言っただけで、咲夜はすでに居ない。なるほど、と頷く涙子。彼女が自分の教育係になればそれなりに使えるメイドになると思ったのだろう。

あのすごそうなメイドを育てたのだから、目の前の紅美鈴は教育係として凄いに違いない。

そんな風に思っている涙子をよそに、霊夢は『あの咲夜がねえ、これはいいネタ仕入れたわ』と何やらブツブツつぶやいている。

「さてこれにて一通り挨拶をすましたわね」

レミリアが頷くと、涙子の方を見る。

「改めて佐天涙子、貴女をこの紅魔館に迎えるわ。だけれど私以外の住人たちにも認めてもらえるかは貴女しだいよ」

頷く涙子が、レミリアの話を聞く。

「励みなさい。貴女ならできる……あの意思を見た私が言うんだから信用なさい」

「はいっ！」

こうして佐天涙子は紅魔館へとやってきた。

そして、この紅魔館を少しずつ変える。

認められないわけがないと、ここでレミリアが確信していたからこそ紅魔館は救われたのだ。

495年の呪いも解けた。

紅魔館のメイドである佐天涙子の始まり……。



まるで夢みたいなことばっかだったなあ……。

学園都市じゃ『底辺』のLevel 0が誰かを助けられるなんて、誰かに頼られるなんて。

幸せだったし充実してた。まあこれからもそんな日々が続くんだろうけど……。

でも学園都市にいた初春たちや家族も私をきつと心配してる。

二ヶ月以上もいないんだもんね。

さして、そろそろ起きますか！

まぶたの上からでも、まぶしいのがわかる。

「ん……」

起きてから体を伸ばす。

なんだか背中が痛いのは、なんでだろ？

起き上がれば、見知らぬ場所。

「あれ？」

「おお、起きた？」

男性が一人、いや五人ほどいた。

柄の悪そうなその姿は、見覚えが嫌というほどにある感じ、ああ、そういうことね。

なんていうか、この感覚はなんだろう。

ていうか私は……。

「ていうか君中学生？ 全然見えないわあ、てかまあ俺たち年齢は気にしないし」

ああ、今いつだろ？

「さつきあんな道端で寝てたら危ないな〜と思って俺たちが保護したんだけど、そのお礼に」

「今はいつですか？」

「あ？」

少しながらイライラした表情で聞いてくる「スキルアウト」のお兄さん。

「七月十五日の朝だよ、もういいだろ？」

そう言つて、男の人は私の右腕を掴んだ。

ああ、あ、結局夢だったのか、私が「幻想郷」に行ったのは前日なわけだったし。

そういえば明日も身体検査システムスキャンだったつけ、ていうかあの日、いや昨日は私が機材とか運ぶの手伝って先行で一回だけ身体検査してくれて頼んだわけだし……。

じゃあ普通に明日が身体検査なわけだ。

やだな、全部夢だったのかな？ まあありえないよねあんなこと。たぶん痛みも夢だったんだと思う。痛かったって夢で思っただけ。

「さて、じゃあ失礼して……」

男の人が私の左腕に触れようとする。

瞬間、私の体は無意識に動いてた。

膝で男の横腹を蹴ると同時に、寝ている地面を確認してから両手を頭の横に置いて、足で地をけると同時に腕に力を入れて跳ねる。

男の人たちから少し離れた場所に着地してから、私は五人のスキルアウトを視界にて捉えた。

大丈夫、五人ぐらいなら美鈴さんや咲夜さんに教えてもらった……あれ、でもあれは夢で……ああ、よくわかんない。頭ん中おかしくなりそう。二ヶ月全部夢だったのに今みたいなことできたのは、やりかたを体がおぼえてるだけ？

モウ、ワケワカンナイヨ……。

「お、オツドアイなんて珍しいねえ！」

——え？

「ほんとだ、しかも片目が赤なんてな」

——ハッ、ハハハハッ！ アハハハハハハハッ！！

「なんで笑ってんの？」

——二ヶ月もいたのに！ いたのに！ たった十数時間!?

「おかしくなっちゃった？」

——ほんと頭おかしくなりそうだよ。だって二ヶ月が数ヶ月!?

「つでめ、え、えっ！ 俺を蹴りやがっでっ!!」

——でも確かに動いた。体が動いて！ それで私の目は赤で、この腕も美鈴さんののだ！

「ふざけんなあああっ!!」

男が私に殴りかかってくるけど、遅い。

その腕を避けてから、そのお腹に思いつきり拳を叩きつけると同時に足払い。

一回転して地面に背中から倒れる男の人。

こういう時のために、私は力をつけたんだ。
紅魔館の、一員として！



佐天涙子は、寮の部屋に帰っていた。

ただ洗面所の鏡の前に佇む彼女はただ呆然としているように見える。

扉が開く音がして少し駆けるような音が聞こえると共に、少女が一人洗面所に入ってきた。

少女は驚いたような、安心したような表情を浮かべた後に涙子へと歩み寄る。

「よかった、佐天さんのカバンが昨日道端で見つかって、心配したんですよー！」

「あつ、初春……」

涙子が少女、初春飾利の方に顔をやると彼女は驚いたような表情で佐天のそばによった。

「その眼は……」

「あつ、これはね……」

そう言われてから、涙子の瞳からは涙がボロボロと流れ出る。

泣いている涙子を見て焦ったように両手をわたわた振る飾利だが、もうすでに涙子は地面に膝をついて泣いていた。

飾利は地面に膝をついて涙子のことを見ている。

「ぎ、佐天さん！」

「よかった……よかったよおっ……」

なにが良かったのか、初春飾利にはまったくわからなかったけれど、とりあえず佐天涙子を抱きしめた。

泣いている涙子は初春の服を掴んで泣き続ける。ずっと『よかった』と言いながら泣き続けている

詳しく聞くべきなのはわからないけれど、彼女のことだ。
なにかがあつたら言ってくれるはず。

とりあえず今は彼女をなだめるのが先だと、頷いた。

——こうして佐天涙子は、この『学園都市』へと帰ってきた。

第二章 とある科学の学園都市

8, 超電磁砲へレールガン

私、佐天涙子が幻想郷へと行った日は七月十四日、そして私が帰ってきたのは七月十五日の朝だった。

たった数時間の出来事になってしまったことだけれど、確かに私はあそこにいた。

確実に私の過ごした日々であり、その証拠もしっかり私の目や腕にある。

たぶんあれが夢だったら、私は立ち直れなかったと思う。

初春には心配されたけどなあなあに済まして、今日、七月十六日にはいつもと変わらず過ごす。

「まあ、だろうね」

結局、今日の身体検査システムスキャンの結果はレベル0だった。

確かに突然に運動神経と反応速度が上がったとなっているけど、結局は超能力扱いではない。

やっぱり残念だし、結構傷つくけどね。レベル0ってのは。

このイライラどうやって晴らすべきか、なんて考えてたら無防備に歩く頭に花飾りをつけた女の子。

「う〜い〜は〜る〜!」

思いつきリスカートをめくる。

校門前だけど、まあ初春だし大丈夫大丈夫!

「へ……ヒイツ!」

素っ頓狂な声上げる初春。

「お〜今日は淡いピンクの水玉かあ〜!」

大声を上げて、叫ぶ初春について身構えちやったりもするけど、安心。チルノならもれなく氷の弾幕が帰ってくるからね。

リアクションは二人してたまらなくおもしろいけど。

「いきなり何するんですか佐天さん!!」

まあとりあえず今日は初春に良い物を聞かせてあげようと思った

んだった！

もう一回ほどスカートをめくって私たちは移動することにした。
初春、疲れてるけどどうしたんだろ？

明らかに疲れたような表情で、ため息をついている初春。

さすがにやりすぎちゃったかなあ？

「ごめんごめん、調子に乗っちゃって、変わりに私のパンツ見る〜？」
どうせ『はい』とは言わないとわかってるからこう言える。

見るなんて言われた日には……全力で抵抗しよう。

初春は呆れたように拒否してくる。まあそりゃそうだ。

「あつ、そう言えばどうだった？」

「どうってなにがですか？」

「身体検査だよ」
システムスキャン

ちなみに私は案の定レベル0。

秀でているのは運動神経と感と反応速度だけど、それでも超能力とも言えない。

まあそんなもんだって……でもちよつと残念。少しは期待してたしねえ。

「ああ、全然ダメでした。相変わらずのレベル1、小学校の頃から横ばいです。担当の先生からも『お前の頭の花は見せかけか！ その花の力で、お前の能力値も咲き誇れ！』って……」

どういうこと……？　なんてことを言いたいけれどここはひとまず。

能力がレベル1で悩むなんて贅沢だなあ。

ま、とりあえず初春を励ましてあげるとしますか。

「ま、元気だしなよ。レベル1ならまだいいじゃん？　私なんてレベル0、無能力者だよ？」

やば、初春が暗い顔を！　あちやくやつちやつたなあ。別に気を遣わす気はなかったんだけど、笑ってくれるわけないかあ。

前ほど無能力を気にしてないんだけど、初春にとっては数日だもんね。

とりあえずフォローしなきゃ。

「そんなの気にしてないからさ、私は毎日が楽しければそれでOK♪」
「なんだか幻想郷の生き方が身に付いてるせいかな、今が良ければそれがいいなんて……いや、いつか。」

私ってなんだか幻想郷に生きるべきって感じの性格だよねえ。

OKサインを出して言う私を見てから、顔をうつむかせて『佐天さん……』とつぶやく初春。

フフツ、ういやつよのおく。

「ほら、これ聞いて元気出しな？」

まあ私が初春のテンションを下げてしまったからには、上げてあげようじゃない。

イヤホンを一つ取って、音楽プレーヤーで曲を聞かせてあげる。

うん、気づいたみたいだね。

「あつ、これって「ひとつはじ」！」

「うん、DL版だからこれから一緒にCDを買いに行くよ！」

せっかくだから埋め合わせでもって思っただけ私はこう言った。

「あつ、でも今日は白井さんと約束が……」

ああ、よく話に出てくる風紀委員の白井黒子かあ。

確か同じ年でしかもかの有名な常盤台中学でっていうエリート中のエリート。白井黒子のレベルも4の大能力者。

大体にして常盤台なんて学園都市に7人しか居ないレベル5のうちの二人もいるエリート校中のエリート校、ほんとどうかしてる。

ああ、初春はどっかにトリップしてるし……ん、御坂美琴に会う？

「常盤台のレベル5ウ？」

噂の電撃姫にい？

「どうせまた能力を笠にした上から目線のいけすかない奴なんですよ？　しかも常盤台のお嬢様だなんて……」

「いいじゃないですかお嬢様！」

初春のセレブへの憧れがまた……これが始まると長いんだよねえ。

お、今日は早めに帰ってきた。

「この際だから佐天さんも一緒に！」

「いや、嫌だから」

明確に拒否してやる。

「こんな機会めつたにないですよ！ さあ行きましょう！」

あつ、いつの間にも私の左手をつ！ この小娘え！

待て、待って！ 初春、やめてええええ！ レベル5になんか会い
たくなあい！

ああもう——不幸だあつ！！

結局歩いていれば、面倒なことにファミレスにていちやく女子中
学生が二人。

まあ常盤台の制服を着てるあげく、初春がそつちを見てるし……た
ぶんツインテールの方が白井黒子。

はあく面倒。

そして、とりあえずファミレスから出て四人揃って紹介にうつると
いう話になった。

白井黒子さんがまずは初春と御坂美琴さんをつなげる橋……しか
して私はここに必要なのか、なくんて思うも紅魔館に行つたときもこ
んな感じだったよねえ。

まずは自己紹介つてことで、白井さんが初春を御坂美琴さんに紹介
する。

そして『それからあく……』と言葉がつまる白井さん。

まあレベル5も4も無能力者を見下してることでしようから、さつ
そくレベル0だと教えて鬱陶しそうにしてもらいましょう。そして
帰ろう、うん！

「どうも、初春のクラスメイトの佐天涙子です。初春に言われてつい
てきました、レベル0の無能力者ですのでお話にはついていけないと
思いますけど」

うん、咲夜さんに教えてもらったスーパー嘘笑顔でお辞儀。そして
嫌味の無いような言い方で相手の気分を害さず……まあ鬱陶しそう
にしてくれた方が助かるんだけど。

帰れるし！

うん、初春も特に心配してないようだし……って驚いてる？ どうして？

いや、失礼なことはいつてないよねうん、あ、御坂さんがなんか言おうとしてる。

「初春さんに佐天さん、うん。私は御坂美琴、よろしく」

あれ、気さくな感じ？

「よ、よろしく」

「お願いします……」

あれ、あれ、なんか思ってたレベル5と違う。

白井さんが何かを言おうとしたら、その脳天に拳が直撃。痛そく。

「とりあえずゲーセンいきましょー」

ゲー専？ いや、違う違う！ てかゲーセンですかお嬢様！

まったくわからない。なにレベル5って、初春も呆気にとられてるし。

まあいいかということでも四人で歩くことにした。ゲーセンまでそんなに距離もないし丁度いいね。

正直お花とかお琴とか言われるよりはずっとマシだよ。てか白井さん言ってるし、勘弁してください。

「佐天さん、さっきのどうしたんですか？」

「さっきの？」

「なんだか凄い綺麗なお辞儀してたじゃないですか、まるで繚乱家政女学校のメイドさんのようでしたよー」

「ええ、あの上流階級のメイドになる生徒たちが通うがっこうのメイドみたいにく？ あははっ、冗談はよしてよ初春く」

ハハハッ、スカーレット家の方が全然上流階級だから。いやマジで。

なんてたつてレミリア様の家なんだから当然だよね！

別に過大評価をしてるつもりもない。

前を歩く御坂さんを見て、私はふと思ったことをつぶやいてみる。

「なんだか全然お嬢様じゃないね」

「上から目線でもありませんね」

うっ、痛いところをつくじやない初春。

ん、もらったチラシなんて見てどうしたの……クレープかあ、ゲコ太ストラッププレゼント？

なにこのやっすいキャラ、昔薬屋の前に立ってたカエルにそっくり。

なあんて横を向いて話ながら歩いてたら、ぶつかった。

「っ、すみません」

あれ、なんか話聞いてないし……ああ、なるほど。

目の先を見てみればわかる。欲しいのはそのゲコ太と……。

生のカエルって大丈夫なんですかねえ？

まあとりあえず、行く流れなようで……。

クレープ屋に並んでいると、クレープの屋台がある公園は子供達で溢れかえっていた。

学園都市ツアーと言ったところだろうね、ていうかガイドさんが言ってるし。

変なタイミングできちやったなあ。

ここは席をとってくるためにこの三人から抜け出して……。

「佐天さん、私たち席取ってきますから買つといてください！」

「お金は後でお支払いしますわ〜」

白井さんはともかく、おい初春！ 私とレベル5を二人きりにするとはなにもものかあ！

これは蛇に睨まれたカエル、ならぬマングースに睨まれたハブ！

ちくせう……。

ていうかなんか、イライラしてる？

「あの、順番変わります？」

「えっ!？」

あっ、嬉しそう。

「べ、別に順番なんて、私はクレープさえ変えたらそれだけで良い……」

騒ぎながらゲコ太のストラップを持って走り回る子供達。

それを見て羨ましそうにする御坂さん、まさか……人気あるの、ゲコ太？

ふと話題が欲しくなった私だけどころもありませんとも、大体にして無能力者と超能力者の共通の話題とか……。

悪い人じゃないのかもしれないけど、どうにも……。

「わっ！」

「きやつ」

左からやってきた男の子とぶつかる私、倒れそうになる男の子の手を掴んでなんとか体勢を整えさせる。

危ない危ない。

「大丈夫？」

「うん、ごめんなさい！」

「ごつちこそばおつとしててごめんね？」

そう言っって頭を撫でて上げると、頷いてから走っていく。

やっぱり片目で生活するのは慣れないなあ、すごい不安になるし。

御坂さんが私を見てるけど……。

「どうしました？」

「あのね、最初から聞いていいのかわからなかったんだけど……その片目はどうしたの？」

片目とは多分私の「左目」のことを言ってるんだと思うけど、その左目は初春以外は知らない。

「なんだって左目に私は「眼帯」をつけてるんだから……いやはや、包帯にしようかどうか悩んだんだけどねえ、なんだって包帯かつこいいし。」

あれ……なんかこういうのってなんかで「なんとか病」って言うって見た気が……。

「まあ色々あってですね」

御坂さんは『そう』とだけ言っって終わらせる。

ああ、今回は私のせいで会話が……む、無念。

眼帯をつけてる方の目が吸血鬼の眼、なんて言えないしねえ。美鈴

さんの腕と違ってなじまないんだよね。

というより色が違うからなあ。

「お待たせしました〜」

さてさて、初春と白井さんと私の分を頼んど……よしっ！

あつ、ゲコ太ストラップはいらないけど、うん。もらつとこう。

「最後の一個ですよ」

「どうもって最後!?!」

背後でドサツと音がする。振り返ればそこにはレベル5と言う名の屍。

声をかけてみれば、涙目の御坂美琴さん、猫みたいな眼しやがって……。

「よかつたら、これ……」

恐るべき速度で私の右手を掴む御坂さん。

危うく反射で投げ飛ばすところだった。死ぬ、私死ぬ。まあセーフだけど。

「いいいい、いいの!?!」

「え、ええ」

「ありがと〜!!」

まあいいか、とりあえずこれはあげよう。

御坂さんがクレープを買うと、私と御坂さんは初春と白井さんの元へと行くことにした。

なんか遊んでるし……。

まいつか、とりあえずレベル5さんが楽しそうだなによりです。

一口、ああ、案外おいしい。

私の隣りでクレープを食べてる初春もおいしいのか無言で食べ続ける。

問題は私たちの前で騒ぎながら食べている二人……フランでも大人しく食べるのにこの人たちは……。

違う、フランの方が481年ほど長生きしてるんだった。

私はなんという場所にいたのかと今思うと気が遠い。

「よかつたですね」

初春が喋った。

「御坂さん、お嬢様のイメージとはちよつと違つたけど、思つたよりずつと親しみやすい人で」

まあ、確かにそうなんだと思う。

私だつて幻想郷で他人を見る目は養つたし、御坂さんが悪い人じゃないことはわかるけど……。

やっぱりレベル5とはそう簡単に馴染めないわけだよ。だつて電撃姫だもの、攻撃系の能力者でろくな相手に会つたことがないことだけあつて余計だね。

なんて思いながら御坂さんを見ると、私の視線に気づいたのか近づいてくる。

これはあれだね『なにガン飛ばしてくれてんだあくん?』っていうパター——。

「はい」

……はい?

「見てたでしょ? 一口どうぞ、さっきのお礼」

そんなことやると……ほら、白井さんが大声上げてる。

まああくんとか一口どうぞ的なのは幻想郷でもよくやってたし別に不思議なことじゃないけど……。

レベル5にやられるとさすがに恐縮というか、なんというか。

間接的なベージュって……。

「あんたの友達とはうまくやれそうな気がする」

大ちゃんのことを思い出しながら初春に言つてやると、苦笑してから突然不思議そうに背後の方を見る。

それに気づいて私もそちらを見た。

どうしたの? なんて聞くと不思議そうに言う。

「いえ、あそこの銀行なんですけど……なんで昼間からシャッター下ろしてるんでしょうか?」

なんで、おかしいこと……いやいや、昼間に銀行がシャッターを下ろすって普通じゃないでしょ。

とか思っていると突然シャッターが歪んで、爆発した。

また爆発か！ もう幻想郷で見飽きたっつての！

すぐにベンチにカバンを置いて地を蹴ってから銀行の方へと体を向ける。

「初春！ アンチスキルへの連絡と怪我人の有無の確認！ 急いでくださいな！」

白井さんは私の背後から走ってベンチを台にして大通りへと飛び出す。

初春と白井さんの二人がすぐに風紀委員ジャッジメントの腕章をつけた。

「黒子！」

「いけませんわお姉さま、学園都市の治安維持は私たち風紀委員ジャッジメントの仕事。今度こそお行儀よくしててくださいな」

そんな言葉に笑みで返す御坂さん……てかレベル5なんだから動こうよ。

ああ、でもだからダメなのかな？ うゝむ難しいね。

まあレベル0の私が動いたら怒られそうだから止まってよう。

銀行から出る黒煙の中から出てくる三人……それに相対する白井さんは……白井さんの能力は空間移動テレポルトだったっけ。数少ない能力だったっけ。まあレベル4だし負けることはないと思う。

って初春の方はなんか大騒ぎだし、行くんですか御坂さん。ていうかガイドさんじゃん。

「男の子が一人足りないんです！ 少し前にバスに忘れ物したっつて言っただっけり！」

なんてタイミングの悪い！

「初春と御坂さん、男の子を探しましょう！ 初春はバスの下とかで御坂さんは中をお願いします。私は周辺を探しますので！」

私は走ってから跳ぶ、公園の柵を足蹴にしてもう一度跳ぶと公園の外に出てまず地をはいつくばる。

子供だから草むらにかくれてたり爆風で中に入っちゃったりとかも考えられるしね！

御坂さんと初春も探しに来たみたい。

って、犯人が男の子を！

「御坂さ——」

まだバスの中、これなら私が言ったほうが早い！

犯人の車の近くだけど、って強盗もう一人!? てかさりやそうか、車を出す人ぐらいいないとダメに決まってるっての！

男の子を連れてこうとした強盗と車から出てきた強盗が入れ替わるけど……って、なんか手に大量の鉄の弾!? テレキネシス エアロハンド 念動力か空力使いっ！

鉄の弾が私に飛ぶ……って当たらないよそんな攻撃！

伊達に弾幕ごっこやってない。よしっ!!

この距離は——！

「あたしの距離だアっ！」

能力者の懐に入ると同時にその胴体に右肘で肘鉄、その流れで腕を上げて顔面に裏拳、そして左手でその顎にむけて掌底を打ち込む！

気絶する犯人、だけど私の左目が見えないのが悪かった。

左側から衝撃が来て、そちらを見ればさつき車に戻ったかと思った強盗犯。

「くっ」

蹴りの一発ぐらい……。

もう一回蹴ろうとしてくるので避けようと思ったけど、避ければ今能力者から助けた男の子に蹴りが直撃する。

たく、不幸だっ！

私はすかさず男の子を胸にたく。

脇腹からくる衝撃に耐えるけど、すぐに背中を蹴られて地面を転がるハメになった。

「痛っっ！」

「お姉ちゃん大丈夫!？」

「あゝ余裕余裕」

痛い痛いです。

初春と白井さんの声が聞こえるけど、ああ車走り出しちゃうし。

なんとか上体を起こして男の子を見ると怪我はないようだなにより。

ってえ? 帰ってくるとか馬鹿なの? 逃げれば良いのに……

まあ、電撃姫はなにがあつたのかご立腹のようです。
終わったね。

コインを弾く御坂さん、そして落ちてくるコインを——さらに弾いた。

音速を超えたそのコインは車を吹き飛ばして……落ちる。

「すっぴん」

生きてるの犯人？

アンチスキルが到着して、犯人たちが護送車に入れられる中、なんか私はお礼を言われてる。

まあ悪い気はしないよね。お母さんと男の子の二人に笑顔を向けて手を振ってさよなら。

脇腹痛いけどとりあえず二人が見えなくなってからにしよう。

見えない、よね？

「痛っ、ああもう、女子中学生に蹴りいれるなんてどういう神経してんのよっ」

フランとの戦いで腕潰されたりとかしたけどあの時と今は別、痛いものは痛い。

ああもう、結局最後はご機嫌斜めの御坂さんがトールの雷のごとく噂の「超電磁砲^{レベルガン}」って……まあそこまで気にすることでもないか、役にたたなかったわけじゃないし。

足音が聞こえてきて、顔を上げれば目の前には今頭の中にいた電撃姫ごと御坂さん。

「お手柄だったね、佐天さん」

レベル5に褒めてもらうことになろうとは私も予想外……。

「すごくかつこよかったよ……」

な、なにになになに！　なんか恥ずかしい！　てか、嬉しすぎて二ヤケがつ！

「御坂さんも——」

悔しながらやはりレベル5はカツコイイので素直にそう返そうかと思えば、声が聞こえる。

大ちゃんの顔が出てきたけど白井さんだ。御坂さんに抱きついてまた大騒ぎしてるけど……。

「佐天さん！ お怪我大丈夫ですか!？」

初春も心配してくれてるのね。

「大丈夫大丈夫!」

返事をしてから、目の前で騒いでいる二人に目を向ける。

楽しそうでも……でもレベル5の御坂さん相手に口に出すのはやはり気が乗らないのであの言葉の続きは言わないことにしよう！

まあレベル0に褒められてもね？ だから心の中でだけ言う。

——御坂さんも、すっごいかつこよかったですよ！

「佐天涙子ちゃん!」

ん、アンチスキルの人が呼んでる？ これで今日の大騒ぎは終わりの気分だったんだけど？ もしかして犯人をボコボコにしたから私は逮捕とか!?

呼ばれてとりあえずアンチスキルの人元へと向かうと、護送車に乗る前に先ほどまで私に気絶させられていた能力者の人がそこには居た。

「俺が出所した時にはまた勝負してくれ！ 今度は正々堂々と、あんなを倒してみせるぜ！ 今度はレベルを一つ上げて4になつてからなあ!」

そんな清々しい顔で……まあこの人を倒した時は誰も見てなかったみたいだから良いけど。

ていうか私に^{レベル0}レベル4で挑むつもりですか？ なんでライバル認定されちゃったの？ ていうか“女の子”がそんな言葉使うもんじゃありません。

とかそんな言葉の数々が頭に浮かんで消えていき、いつの間にか護送車に乗せられてあの人もGO。

「どうしたんですの佐天さん?」

「アンチスキルの人が何か用?」

「どうとう私のスカート捲りが実刑判決されるんですか?」

とりあえず白井さん、御坂さん、初春の三人からの言葉は受け流す。
「はあ〜」

——不幸だ。

9、紅瞳へスカーレットアイズ

今日も今日とて学園都市は平和であったのでした。

私、佐天涙子は初春を探して風紀委員第一七七支部へとやってきたのだけれど……。

やっぱり眼帯をしているせいで左半分が見えないから少しばかり不安だけど一日目ほど神経を使うこともなくてたぶん数日もすれば慣れる。

第一七七支部の扉を開けると、そこには眼鏡をかけたおつきなおっぱいの女の人、多分高校生だと思うけど、これは気まずい。

「あら貴女は確か初春さんに写真見せてもらったことあるわ、そう……確か佐天さん」

なにやっつてんの初春。まあいいか。

「初春いますか?」

「ああ、今日はたまたま居ないのよ。少しあつてね」

そう言つてつぶやいてから笑う目の前の女の人。

まあ私には関係ないことだからさっさと帰るとしましよ。今日はどこ寄つてこうかなあ。

なんて思つてたら個法先輩はパソコンをいじつてた。帰つて大丈夫かな?

「丁度良かった、貴女は今暇?」

「えっと……」

暇ですと言いたいんだけど、どうなんでしょうか?

笑顔のまま威圧感たつぷりの目の前の「先輩」を見ているともう動けるわけもない。

なんかつい昨日こんなことがあった気がした。今回はカメレオンに睨まれたコオロギつてところかな?

まあともかく……。

「暇です」

なんて言つてしまった。

ああこのパターンは。

「なるほど……ちよつと手伝ってもらいたいことがあるんだけど？」
ですよね。まあそんな気がしてましたよ私は……なんたつてこの
パターン幻想郷で何度かあったから。

何度パチュリーさんの図書館に必要以上に駆り出されたことか、も
う腕がパンパンになつちやつて……つて、ほんと断れば良かった。
とりあえずそんな大変なことは任せられないでしょう。

それにしても、これ断れないよね？ はあくしよがないかあく。

「はい、手伝います」

「じゃあ待つてね、少し着替えてくるから」
なぜ？ まあともかく一言……不幸だっ！

まあ結局、私はお人好しというか押しに弱いというか……。

先ほどの女性と一緒に学舎の園へとやつて来ていた。理由はただ
単に頼まれたから、というだけ。

案内されたソファに座る私と先ほどの先輩こと「個法美偉」さん。

二人してなんでこんなデートみたいなことしてるかっていうと、あ
る事件を手伝って欲しいらしい。

「フッフ、ジャッジメント風紀委員は学園の生徒たちの情報を多少なりとも得ること
ができるのよ？ 初春さんは身近だからこそ貴女のことを調べてな
いみたいだけど、私は気になつたからさつき調べてみたの」

そう言つて笑う固法先輩、恐い、なんか怖いっす先輩。

「特に、先日はレベル3の強能力者を倒したつていうのはすごいわよ
ね」

笑顔で言う先輩だけど、ああなんだかもうどうにでもなくれな感
じ。

とりあえず初春に言わないでとだけ伝えてから、もう一度固法先輩
を見る。

初春から話は聞いていたけど、まさかここまで「仕事熱心」な人だ
とは思わなかつたつての。

「わかりました、手伝いますけど私に期待しないでくださいよ」

「まあ一般人である貴女を巻き込むのは悪い気がしてるんだけど……

白井さんと初春さんは他の事件を担当してもらってるし、だから貴女に手伝ってもらおうと思っただけ」

「で、それとその常盤台のコスプレとなんの関係があるんですか？」

今現在、私の目の前に座っている固法先輩はもれなく常盤台の制服を着てるけど、そのダイナマイトボディで中学生の服を着れば胸の部分がやけに盛り上がりつつあったりして、つまりなにが言いたいかと言うとやましい雰囲気がいじみ出ている。

あげくにソファ状の席で私の隣りに最初は来ようとするもんだから……。

まあとりあえず理由を聞くところからはじめよう。

「ああ、これなんだけど……これ見てくれる？」

私に携帯端末を渡す固法先輩。

それを受け取ってから内容を見ていくと、なるほどと納得できた。

謎の『連続まゆげ落書き事件』が今回の件らしい。

まったくもってバカバカしいけど、これされたら当分学校にいけない。しばらく消えないらしいし。

襲われているのは常盤台の生徒ばかり、だからこそ固法先輩は今現在常盤台のコスプレをしているらしいのだけれども、お前のような中学生がいるか！

「とりあえずこれではしばらく一緒にいてくれる？ 貴女を誘ったのは私なんだけど、実際は犯人を捕まえるというより犯人を「見つけて」欲しいの、被害を受けても命に関わるわけでもないから気にするほどでもないわ」

意味はわかる。姿の見えない相手からの攻撃らしいけれど、スタンガンで一発で気絶させて後は『まゆげ』と……。

「これはいわゆる囃作戦、止めるべきなのかもしれないのかもしれないけど私って、ジャンジャンメント風紀委員じゃないし。

「まあ楽しくやりましょう……」

まあいわゆるデートって奴ですか、まあこれが今さつき会ったばかりの話だけに聞いてた人じゃ無ければ良いんだけど。

とりあえずおごりらしいので私は飲み物を頼むことにした。

こうして高校生と話す機会なんて無いから新鮮で、案外楽しい。
風紀委員の仕事の話なんて楽しくないと思っただけど、能力のことを
離さないのが気になった。

気を使ってくれてるのかな？　なくんて。

少しして、固法先輩が席を立った。

いやほんと常盤台の制服の個法先輩たまらないですよほんと、さつきまでいやらしいとか言っでごめんなさい。

すっかり価値観を変えられた私はそう思う、思います、思わせてくださいの三段活用。

「少し外すわね」

そう言ってから固法先輩はトイレの方へと向かっていった。

さてさて、3分ほどしたら私も動きますか。

軽く肩を回してから、私はコップの中の飲み物を飲み干した。

立ち上がったから固法先輩が向かったトイレへとそっと向かって、扉がわずかに開くのを確認してから私もあとを追って入る。

固法先輩の背後に立つ少女。

「まったく甘いなあ、姿を晒すなら獲物をしとめて撤退するまでって……知らなかった？」

私がそう言った途端少女が驚いたように私の方を見る。同い年か少し上か、ツインテールの少女。

さっきのリストに乗ってた子だよね？

レベルは2ぐらいのはずなのに姿を消した？

固法先輩も驚いて振り返っているけれど、女の子を捕まえようとした瞬間女の子が消えた。

「やばっ！」

固法先輩が小さな発信機を投げた後に少女を追って出て行ってしまふ。

まあここは風紀委員が行くのが正解なんだろうけど、私だって仕事を頼まれたからには最後までやらなきゃね。

じやなきや咲夜さんにナイフ刺されそうになりそうで恐いつて。

「固法先輩早っ！」

なんて思っておつていこうとしたら、肩を掴まれる。

「お客様？」

ゴゴゴゴゴツ、なんてオノマトペが私の肩を掴む。『店員』さんから聞こえる。

おごつてもらはずだったのになぜこんなことにつ……。

固法せんぱうい！

◆◆◆◆◆

少女を追っている固法美偉は、先ほどの少女を追っていた。

重福省帆。記憶を手繰って思い出せば、確か関所中学校の二年生で能力は視覚^{タミーチエック}障害だったはずだ。

見ているということ^{タミーチエック}を障害できる精神操作系の能力だが、逃げる彼女に対して発信機をつけた美偉は携帯端末にて彼女を確認して追っている。

走りながらやはり考えてしまう。レベル2の視覚障害がなぜ『姿を消す』ことができるのか？

彼女が一つの倉庫の中に入ると、美偉も省帆を追っていく。

「っー」

倉庫に入ると、重福省帆の姿が晒されていた。

理由は簡単なことで、ただ彼女が一人の男とぶつかったときに思わず解除してしまったのだ。

尻餅をついた彼女の腕を掴む男。

重福省帆はというと小さな声で『ひっ』と悲鳴をあげるのみ。

「風紀^{ジャッジメント}委員です。その子の身柄を引き渡してください」

腕章を見せてからそう言う美偉だったが、その瞬間背後から何者かに羽交い絞めにされた。

気づかなかったと思っただが、おかしな気もする。

場馴れしているはずの自分がこんなに簡単に捕まるわけがない。と思っていた。

「俺の能力は気配遮断のレベル2、大したもんだろ？」

レベル2なわけがないと思うが、どうしようもない。羽交い絞めにされたまま、二人は近づけさせられる。

さらに男たちが増えていき、二人のことを見ていやらしく笑う。

このパターンはやばいと思う美偉がせめて隣りの省帆だけでも逃がそうと思ったがこの状況ではとてもじゃないが動けない。

この男たちから逃げて、閉められた倉庫の扉まで走って開けてなんて真似ができるわけがない。

そう思いながらも、扉の方を見ているとその扉が開かれた。

現れるのは人影。

「まったく、なんでこんなところに逃げてんのよ」

黒い髪をなびかせて、白い眼帯を左目につけた少女が現れる。

先ほどまで個法美偉と共に居た少女、“佐天涙子”は余裕たっぷり“不良”たちの前に現れた。

自分のカバンを軽く放ると、佐天涙子は軽く男たちの数を見る。10人。

「さて、いくよ？」

彼女の右目が鋭く尖ると同時に、走り出す。

あきらかにそこらの学生よりは速く、陸上部などでもトップクラスのスピード。

第一印象としてそれほど警戒しなかった少女の動きに、彼らは動けない。

まず最初に狙われたのは一番近くにいた男だ。

佐天涙子の拳は的確に相手の急所を捉える。

「美鈴さん直伝！」

一歩踏み出すと同時に拳を、男の鳩尾に叩き込み、もう一方の手で顎に掌底を打ち込んだ。

それにて気絶する男。ガタイの良い男一人が倒れて、佐天涙子は立っている。

余裕の笑みを浮かべる彼女を見て、個法美偉は驚いた。ただ単純に先ほどと違いすぎているからだ、のほほんとした雰囲気佐天涙子、

先ほどまで一緒に話をしながらお茶していた彼女とは違いすぎる。

「さて、あと9人」

「舐めんじゃねえ！」

良くあるセリフと共に襲いかかってくる男たちを、涙子は右目だけで確認する。

そしてまず目の前で腕を振り上げる男の顎を足を上げて蹴った。さらに足で地を蹴ると宙に浮いてから背後の男のこめかみを蹴る。

こめかみを押さえて声をあげる男、着地した涙子は右からせまる男に対して軽く体をひねってから回し蹴り。

倒れた男を確認することもなく、涙子は次の相手を確認しようと男へと目を向けた。

「はあっ！」

男が叫ぶと同時に、涙子が吹き飛ばされた。

なにが起こったかわからないが吹き飛んだ涙子が大量につまれた荷物へと吹き飛ばされ、砂煙が涙子を隠す。

「佐天さん！」

叫ぶ美偉だが、無事かどうかはわからない。

「はっ、俺の空力砲エアロバズーカの威力はどうだよ。レベル2だけどな！」

「まただ、レベルと威力が見合っていない。」

「なにかがおかしいと思う美偉だったが、いまは涙子が心配だ。」

「砂煙を見る残った7人の男。」

「だが7人中二人が美偉と省帆を掴んでいるので五人。」

「痛く、昨日から痛い目にあうなあ」

「そんな声と共に、体についた砂煙を払いながら現れるのは佐天涙子。」

「彼女はそう言うと、大きなため息をついた。」

「やっぱり片目隠してじゃ難しいかあ」

「そう言うと、涙子は白い眼帯に手を当てて外す。」

「黒髪黒眼の彼女の左目、眼帯の下はまるで血のようなスカーレット紅だった。」

「その瞳をただただで男たちはわずかに後ずさる。理由はわからないが、女子中学生一人に自分たちは怯んだのだと理解した。」

気づいた男たちは苛立ちを露にする。

「お、俺たちはスキルアウトだ！」

そう言つて奮い立たせたつもりなのだろう。

だが、佐天涙子は笑つた。

呆氣にとられる男たちと、美偉と省帆の二人。

「なにが武装無能力集団ですか、無能力者「私たち」と貴方たちみたいなヤツを一緒にするな！」

その一言を受けた直後、男の一人が先ほどと同じく空力砲を放つが、空気が見えているかのようにその攻撃を避けて走る佐天涙子。

まずその男にたどり着く前に、涙子を襲おうと前に出た男は顔面にパンチ一撃をもらつて倒れる。

再び放たれた空力砲を避けて、立っている男の一人を跳ぶと同時にその顔をジャンプ台にしてもう一度跳ぶと、また一人の男に飛び蹴りを放つ。

「おっ、良い物持つてるじゃん！」

そう言つと、今蹴つて倒した男の持っている物を取る。

また空力砲を避ける涙子に、その紅い眼をした少女に男は怯えたような声を出す。

「なんで俺の見えない空力砲を！」

「辺りの砂埃がね、舞つてるんだよ？」

そう言つて笑う涙子は、本当の笑顔でないのが簡単にわかった。

震えながら空力砲を連射する男。だが演算も適当なのか避けるのになんの問題もない。

先ほど言つた空力砲の弱点をここでなんとかする方法はなかった。

そして涙子は男へと呆氣なく近づき、足を使って回転すると同時に回し蹴りで男を地面に叩きつけ、固法美偉と重福省帆を捕まえている男たちを睨む。

「佐天さん！」

美偉の叫び声、涙子の背後からナイフを振り上げて襲いかかる男。

美偉と省帆を捕まえている男を除けば最後の一人。

だがそれに、佐天涙子が気づいていないわけがない。

軽くカラダを傾けると縦に振られたナイフを避けて、男の喉に軽く手刀を打ち込んだ。

ふらつく男の顔に、肘鉄を打ち込んで倒すと、男が持っていたナイフを取る。

さらに先ほど倒れた男から奪ったナイフを持てば、これで二本。

「お、お前！ それ以上動いたらコイツらがどうなるか——！」

格闘だけで能力者を含んだ男五人、いや八人を倒したのだ。ナイフを持つている今は死の恐怖に値するだろう。

ナイフを持って美偉の首に添える男。それを見て涙子は笑みを浮かべた。

余裕のある表情。紅い眼はしっかりと男を見据えていた。

重福省帆を捕まえていた男は叫びながら、省帆を突き飛ばして逃げていく。

「一人だけだね」

「うるせえ！ 近づくんじゃねえぞ！」

そう言う男を見て、涙子は軽くナイフを持つ手を振る。

何度か振るそぶりを見せた後に、涙子は軽く言う。

「ナイフって、切る」だけじゃないんだよ？」

そう言うのと次の瞬間、男の手にはナイフが刺さっていた。

最初は気づかないが見てから激痛に襲われて美偉を掴むことをやめてもだえる。

涙子は追撃としてもう一方の手にも「ナイフを投擲」して刺す。

美偉は放された途端、男の腕を掴んで背負い投げ。気絶した男は叫ぶことはなくなった。

尻餅をついている重福省帆、男たちが全員戦闘不能になっているのを確認する固法美偉、そして眼帯をつけ直す佐天涙子の三人だけが、その場でまともに動けるメンバーだった。



アンチスキルを待つ間、倉庫の不良たちを縛って固法先輩は重福さ

んに軽く聴取を行っていた。

とありあえず私はナイフを刺した手の応急処置をして話を聞く。聴き終えてみると、なんてことない恋のもつれ。

「眉毛つて、それぐらいで」

つぶやいた固法先輩、すると重福さんはそつと前髪を上げた。

「ぶつ……」

後ろと向いて口を押さえて、拳匂にぴくぴくと笑いを我慢する固法先輩。

私は苦笑いしか出てこなくて……確かに特徴的な眉毛だった。まるでたくあんのような太い眉毛は顔を隠す理由に値する。

眉毛以外はかなり高レベルな容姿、それだけで嫌う男も男だねえ。

涙目になる重福さんにフォロワーを入れるため、私は口を開いた。

「か、可愛いと思うよ、個性的で！」

グツ、と親指を立てて言うと、重福さんはうつむいてから両手でスカートをギュツと掴んで、それから黙ってしまった。

え？　なんか私おかしいことやっちゃった？

「罪な女ね佐天さん」

「フアッ!？」

なんだかわからないけど私はなにかやらかしたらしい。

まさか、私ナイフ投擲の罪で捕まる!？　アンチスキルってそんなに厳しい人たちなの!？」

てか連日関わっちゃってる私、大丈夫だよな？

それから数分してアンチスキルがやってくると、私が逮捕されることはなかった良かった。

なんかアンチスキルの人が『またあんたか』みたいな顔してる。

不良のみなさんが乗せられるのに興味はないので、私はとりあえず重福さんを見送ることにした。

そんな悪いこともしてないから大丈夫だと思っけど……。

「佐天さん、手紙書きますね」

「あつ、うん。待ってるね」

戸惑ったけど笑ってそう言うと重福さんは嬉しそうに笑ってくれ

た。

護送車に乗せられて、扉が閉まる。

「昨日から犯人と仲良いじゃん?」

「まあ、そうですね」

「頑張れ少女! じゃん!」

じゃんじゃんうるせえ! とは言えないので黙っていることにします。

アンチスキルのみなさんが去つたのを確認してから、私は背を伸ばして固法先輩の方を確認する。

固法先輩は常盤台の制服のまま、私のカバンを持ってきてくれた。

「ありがとうございます」

そう言つてカバンを受け取ると、固法先輩は笑う。

「こちらこそ、今日は色々助けられたわありがとう」

「いえいえ、私無能力者^私程度の力で良ければいくらでも……
風紀委員ジャッジメントの役にたつとは思えませんけどね。普段は白井さんとか初春もいるみたいです」

笑いながらそう言っていると、固法先輩は少し驚いた表情をした。

「なんだか今別人みたいだったわ、繚乱のメイドさんみたいな」
なんですかそれ、って笑いながら私と固法先輩は歩き出す。

とりあえず今は一七七支部に移動つて感じかな?

初春たちには私のことは話さないでほしいなーとか思ったり。

まあ一日、風紀委員ジャッジメントのお手伝いも悪くなかったなあ。

「でも白井さんや初春さんがいても、貴女を誘うこともあるかもね」
そう言つて笑う固法先輩。

なになに、私変なフラグ立てた? 巻き込まれフラグつてやつ?

ああとんでもないことになる予感! 確かに風紀委員とか憧れてたけど、こんなことにつ……。

楽しそうに歩く固法先輩のとなりを歩く私。

うん、願ったり叶ったり〴〵だったけど〴〵前まではそうだったけど、
現状……。

——不幸だ!

10、幻想御手へレベルアップ

昨日、ジャッジメント風紀委員の仕事を手伝ったあと、私は初春と白井さんと御坂さんの三人とお茶をした。

まさか御坂さんまでのジャッジメント風紀委員の仕事手伝ってたなんてねえ。

ついでにさっそく昨日重福さんからメールが来た。とりあえず手紙がないからメールでって思ったけど……あの子すんごいぐいぐい来る。

そして昨日は昨日、今日もつまらない能力者に関する授業があった。

まあつまらないとは言えちゃんと習わないとしようがないんだけどねえ。

今まで能力についてまったく勉強してなかったこともあって中々どうしてついていけない。

これで能力習得につながれば良いけど……大体能力つてある意味では『妄想力』の力でしょ、あたしにその才能があるかどうか、それに関しては才能しだいだしなあ。

能力つていうのは『パーソナル・リアリティ自分だけの現実』によって人それぞれ変わる。だからこそマルチスキルつてのはありえない……とか色々と覚えたんだけど。

つまりは私が『火を出せる』って本気で思えばそれはできるということなんだけど、ただの思い込みと能力を得る思い込みでは格が違う。そう思えばやっぱり私つて才能ないのかなあ。

「あつ初春、AIM拡散力場の名称つて『An Involuntary Movement』で良いんだよね？」

「そうですね……最近佐天さん変わりましたね」「え？」

私は思わずそんな声を出した。だって初春ったら変なこと言うんだもん。

変わったとか……まあ変わっただろうけどどういふふうにか少し気になる。

だって、移植した眼帯のこととか腕のこととかで少しでもバレたら……眼が紅いのはバレてるって移植したのがバレたら。

「なんていうんでしょう、前より前向きになりましたよね。能力に対して」

そうかな？ なりふり構ってらんなくなっただけな気もするけどねえ。

まあ確かにそうかもしれないけど違う部分もある。表にそれを出さないで卑屈になったつてもあるし……前よりレベルが高い人に対しての第一印象も良くない。まあその分其の人を知れば私だって心を開くけど、第一印象は良く思えない。

相変わらず私って頭硬いなーとか思ってもしょうがないものはしょうがないよねえ。

初春は今日セブンスミストに行くらしいけどとりあえず断つとした。

御坂さんと行くらしいけど、私は補修回避のために勉強しなきゃだし……まあある種の暇人。

まあ暇なことは良いことだね。私から言わせてもそうなんだから風紀委員にとつては暇つてことはとても良いことなんだろうと思う。

さてさて、そんな平和な私はさっさと帰って勉強しますかね。

「困った……」

なにやら困ってる人発見、て美人だなあ……いやクマすごつ！ 目の下黒いじゃん！

どうやったらああなるんだろ、普通寝るよねそうなる前に……。

大丈夫かなあ、まあ暇だし付き合っても大丈夫か！

「あのくどうかしたんですか？」

「ああいや、そのだね……研究所のカギを無くしてしまつて」

「研究員の方ですか、なんてことはともかくとしてカギですかあ」

少し頭をひねって考えてみる。そんなの私がわかるわけないじゃん！

でも声をかけてそのまま放置っていうのも後味が悪い夢見が悪い。ならしようがない。幻想郷でY e s ウーマン佐天と言われたこの私に任せなさい！ 言ったの霊夢さんだけど。

とりあえずなくしたものを見つかるかあ、こんな時能力が欲しいなあ。

ああ、でもこれなら文字通り『なくしたものを見つける程度の能力』とか欲しいななんて。ないかそんなの。

「とりあえず今日行った場所とかわかりますか？」

「ああ、セブンスミストに行つた」

「なるほど、じゃあ……行きますか」

そう言うと、少し驚いたような顔で立ち止まっている女性。

ああ、忘れてた忘れてた。

「私、佐天涙子です。中学一年生ですけど……たぶんほかの中学一年生よりは濃ゆい人生歩んでます」

それだけの自信が私にはある。うん、だって一回死にかけてるし。

だけど目の前の女の人は動かない。なんで？

「ああすまない、まさか手伝ってくれるとはな。私は木山春生、研究者だ」

「よろしくお願いします、えつと……木山、先生？」

研究所のカギを持つてるぐらいだし主任とかそんな立場かと思つて先生なんてつけてみた。

笑つてツツコミでも入れてくれれば良かったんだけど、少しだけ木山さんが驚いて、そのあとに笑う。

頷いてるけど、これつきりですよ？ いやいや、そう何回もネタで言ったこと、しかも受けなかったことを言うなんてどんなDMですか。

というごとで行きましょう！

「木山さん！」

「ああ、そうか……」

なんで若干しよんぼりしてんですか!?

ごめんですよ!?

「ちよつと熱くなってきたな」

そう言つて突然スカートの下を脱ぎ下ろす木山さん……ちよつと待つてくたさい、あんたが脱ぎ女か！

というより待つてえ！ 都市伝説さんストップ！ いやストリツプしないで！

「落ち着いてくたさい、冷たいものとか買つてきますから！」

だけど止まることなく次は上着を脱いでシャツのボタンを外しました。

ああ、ピンク色のブラなんて可愛い下着してますね。じゃなくて！

突然木山さんがボタンを外す手を止めた。およう？

「せ、先生と呼んでくれるか？」

「……冷たいものを買つてくるから待つてくたさい木山 先生」

「ん、わかつた……その、君に 先生」と言われるのは他のものたちに言われるのとは、その別の感じが……」

ん？ 『わかつた』までは聞き取れたんだけどそのあとがボソボソと言つてるので聞き取れない。

まあともかく、ボタンを付け直してチャックをあげる木山さん。

まったく、なんだなんだよなんですかの三段活用！ くっそお、私つて最近こんな感じだなあ。

必ず一癖ある人に絡まれるというか、でも幻想郷でもこんな感じだったし……まさか私幻想郷から変のもんでも憑けて帰つてきたかなあ……。

——不幸だつ！

そのあと二人でアイスを食べながらセブンスミストに行くことにした。

そう言えば御坂さんたちがいるんだっけ、うつわあ会つたら気まずいけと言ひ訳はなんとかなるよね、困つてる人を助けてますなんてなんかカツコイイ！

どうしようかな、木山先生は後ろを付いてきてくれるけど、ようやく冷房の効いたところに来たからか、ちよつと安心。これで脱がなくて

なるし、うん。

「ところでどこら変に行きました？」

「新しいスーツが欲しかったからそれを買って、あとは食事をしたな。それとCDショップにもよってみたりした」

なるほど、ならばそこらへんを探せば良いか、たぶん食事ならどこでしたかわかるはずだし、スーツを売ってる店だって3階のあそこしかないしね。

CDショップは少し広いけどまあそんなに大変でもない。

よしっ！ さつさと見つけて帰って補修回避のための勉強だあ！

「さ、行きましようか木山先生！」

「あ、ああ」

少し元気に言いきぎたのか、ちよつと驚いてる木山先生。

まあ良いか、さつさと見つけてさつさと帰りましよう！

まずはスーツを見に来ました。とりあえず店員さんに聞いても見つかっていないみたいなので、後は探すだけ！

それにしても下を覗き込むつてのもあれだなあ、優雅じゃないなあ……ハッ！ すっかり紅魔館的な優雅さを求めるように、私としたことが！

さつさとみつけよ！

私は這い蹲りながらカギを探した。ちなみに木山先生は服も持たずに試着室に入ってた……涼んでんなあの人。

次は食事をしたファミレス。店員さんに聞いても無かったみたいで探してもらっても無かったみたい。

じゃあ残るはCDショップぐらいかな？

「木山先生、そう言えばポケットとか確認しました？」

「ん……そう言えば……あ」

あ、じゃないよ！ なにこのパターン、あるやつじゃん！ これあるパターンのやつじゃん！

「あった」

「あったじゃないですよ！ どのドジっ子だ可愛いな！」

「か、可愛いなんて言わないでくれ」

なに顔赤らめてるんですか！ もお、右目見開いて探してた私とは一体。なにこれ、私様からの加護とか最近はねのけてんじやないですか？

てかそうでしょ、吸血鬼に仕えてたし……。

まあ、木山先生みたいな楽しい人といえるのも悪くはないけど、けど……なんか違う気がする。

「とりあえず、どうします？」

「私は帰るよありがとう、とりあえず今度お礼をしたいから……その、め、メールアドレスを交換しないか？」

「お礼なんて良いですよ！ それよりそのクマ、今度会うときまでに直してきてくださいね、不健康そうで見られてられませんよ」

「ああ、うん」

とりあえず携帯端末を出してから、赤外線でお互いのメールアドレスと電話番号を交換して、終わり。

嬉しそうにしてる木山先生を見て私も少しだけ嬉しくなったり。

「それでは、メールさせてもらおうよ」

「いつでも待ってますね。せんせっ♪」

そう言うのと嬉しそうに笑って木山先生はセブンスミストを出て行った。

まあそれはそれで良いんだけど、さくして私はCDでも見てこっかなあ。

さあて……ってあれは初春、と御坂さん！ あちやあ、てまあ良いか……。

「お〜い」

そう言っって手を振ると驚いた後にあの初春が走ってくる。

「佐天さん事件です！ 今すぐ避難を、御坂さんが避難誘導をしてくれてるので——」

「待った初春！」

少しぐらい整理させてよ。とりあえず事件、木山先生は逃げたよね？

さすがに抜けてるあの人でも大丈夫だとは思うけど、心配だ。

「避難誘導ぐらいなら手伝うよ」

「ダメです！」

「初春、今は一般の方を逃がすのが優先でしょ！」

強い口調で言うのと迷った後に、渋々頷く。

私も頷いてから初春の背中を押して店員に知らせるように言うのと御坂さんのもとへと走った。

とりあえず御坂さんとお互いの動きを決める。

私の方が運動神経は良いからとりあえず私が店内を見回るから御坂さんがお客さんの誘導。

「お願いします。ではまた後で！」

「佐天さん、気をつけてね！」

「了解です！」

とりあえずエレベーターで屋上に行って、後は走って見回ってから階段を降りて、さらに下の階も見回る。

まったくもおどろくなつてんのよ！

そういやどんな事件なのか聞いときや良かった。まあ大概のことなら逃げきれ自信はあるけどね。

走りながら携帯電話を取り出して御坂さんに電話をする。

「御坂さん！」

『佐天さん、一体どこに！』

「気にしないでくださいすぐ出ます。御坂さんはどこに?!」

『私は……っ』

走っていると、先に初春が見えた。さらに先には御坂さんとツンツン黒髪の男の人。

ていうかあの子の持つてるの、なんか危険な「予感」が……急がなきや！

私が走っていると、初春がその子の人形を持って後ろに投げた。

「逃げてください！ あれが爆弾です！」

——聞いてないっての!!

私が走っても御坂さんの方が近かった。初春の前に出てきた御坂さんが超電磁砲レールガンを打とうとするけど、コイン落とした！

もうどうにでもなれっつてのおおおっ!!

私は急いで御坂さんの前に立つと両手を広げて女の子と初春と御坂さんの壁になるように爆弾に背中を向けた。こんな時に能力がない自分が忌まわしい!

だけど私の背中に大きな感触が触れる。

さっきの男の人の背中———？

「なにやってー!」

「ウオオオオッ!」

男の人の叫び声と共に、爆弾は巨大な爆発を起こした。

後々にレベル4に近い3クラスの爆発だとわかることになるこの爆発だけれど、その爆発による人的被害は0人。それは直撃すれば人が死ぬクラスの爆発だったけれど、それでもその爆心地付近に居た4人はカスリ傷一つなかった。

理由なんて誰も説明がつかないだろう。

ただ殺したのだ。自分だけの現実によって現出させたその幻想を、ただ、殺しただけ。

その夜、私はただ道を歩いていた。

あの爆発を「殺した」あの男の人はすぐに去って行ってしまったけれど、御坂さんによればあの人はレベル0らしい。

あれが都市伝説の『どんな能力も聞かない男』ってわけだ。今日だけで都市伝説二つ制覇って私ヤバイなあ。

……それにしても今日は御坂さんのお説教すごかったな。なんていうか、心が痛かった。

力を言い訳にか、確かにそうかもしれないけど……一概にそうとも言えない。私から言わせれば力が無ければダメだと思う。御坂さんだって力を盾にして今まで不良たちをやっつけてきたんだもん、あの力がなきゃどうなったかわからない。

たぶん、御坂さんは能力で行き詰まったりする人のお説教は向いてないんだと思う。御坂さんが嫌いというわけじゃないむしろ好きな方だけど、そこだけは違う。

「私もあの人に一言ぐらい言っておけば良かった」

そう、無能力者だからってこの学園都市で決まることがすべてじゃない。

外に行けば能力を持ってなくてもどうにでもなる。でも、能力判定が微妙でもこの学園都市を出ないのはきつとまだ自分に希望があるからだ。私もそう、自分にまだまだ希望を持つてる。

私だけの現実、それは一体どんなふうな力なんだろう？ まだまだわからないけど、使えたら嬉しいな。

レミリア様たちに能力だけがすべてじゃないって教えられたけど、無いよりはあった方が嬉しいし！

「っと、鳴ってる」

音を出す携帯端末をポケットから出して開くと、重福さんと木山さんのメールが入っていた。

ああ気づかなかった。しかも今は……御坂さんから!?

なんだろうと思って開いてみるとなんでもないようなメール。今日の男の人が何か言っていなかったか、とか。

御坂さんまさかあの人のこと、ああくなんとなくわかる気がする。

御坂さん好きそうだね。

たぶん高位の能力者とかよりああいう人の方が好きそう。

「普通じゃないねえ、学園都市」

さすがと言わざるをえない。

とりあえずは帰ってメールを返してだなあ。

それにしても今日は色々あって疲れた。

ていうか爆弾って、低レベルの能力者ができることじゃないって絶対。

「今回は役に立たなかったなあ」

そう思うとやっぱり羨ましいなあ、能力。

まあ欲しいなら頑張れってことかね！ さあ、帰って勉強勉強！

ん……って電話？

「もしもし」

『佐天さん、固法だけど』

知ってます一応表示を見たので。

「ところでどうして？」

『ああそうだったわ、貴女に少し調べ物をお願いしたいのよ。貴女って交友関係深そうだし《噂》も結構入ってそうで……』

ああ、楽なことならいいけど。

『能力レベルを上げるアイテムや能力、その他のこと、噂だけでも良いから調べてくれない？ お礼は今度するから』

「はい、承りました」

あくまで風紀委員のお手伝いのためであってお礼に惹かれたわけじゃないということ自分を言い聞かせる。

うん、私はそんな安い女じゃないんだから！

電話の向こうの固法先輩の声は気のせいか嬉しそうだ。たぶん少し楽になるからだと思う。

それにしてもなるほどね。

「調べあげたことは後々にメールでまとめて送りますね」

『うん、それじゃあね佐天さん！』

通話を切ってから、私は携帯端末をポケットにしまう。

中々どうして面倒な気もするけど確かに私も興味をそそられている。たぶん前の重福さんの件もそうだと踏んでいい。聞いてみる？

いや、それは最後の手段にしよう。あなり重福さんにそう言うことを聞くのも気が引ける。とりあえず初春頼みだね。

まさか本当にあるとはね、幻想御手^{レベルアップ}、てつきり都市伝説とばっかり思ってたから意外だったよ。

さて、頑張って調べますか——明日から！

11, 無能力者〈佐天と上条〉

なんとということでしょう！

この佐天涙子の不覚、まさか初春がこんな日に休みだなんて、ほんと勘弁してよく。

大きいため息をついてから先生の話に耳を傾ける。ここで私が隠された能力を持つレベル5ぐらいなら『教師は今日もくだらない雑音をたれながしている……』とか言えたのに。

てか紅魔館行ってから私は人の話を聞きながらほかのことを考えることができるようになった気がする。

なんとという微妙な才能。

「佐天！」

「はい」

私は反射で紅魔館に居た頃のように返事をして立ち上がってしまった。

まるでレミリア様相手にやっていた時のように、凜々しくしてしまったものだから先生はおろか教室中のクラスメイトたちも私の方を驚いた顔で見ている。

ああ、つい癖で……最近帰ったら紅茶汲んじやったりとかもう癖が抜けなくて抜けなくて。

どうにもクラスメイトたちの視線が気になる。

「ああ、えつと、今の話を簡単に」

「え、自分だけの現実とは世界と自分に生じる僅かな認識のズレを――」

私が喋りはじめた途端、チャイムが鳴った。

「じゃあ佐天は最近真面目に能力の授業を受けているようだから今回はこれぐらいにしておくでしょう。では」

そのまま授業は終わって、ついでに六限目であったこの授業が終わったので帰れるというわけなのだ！

ああ、ダルイ〜！

昨日勉強してて助かったあ。それに量子力学とかシユレディン

ガーとか聞いてもパチユリーさんが軽く話してくれた思い出があるから少しだけ思い出すし、余裕だねこれ！

とりあえず初春に色々届けなきゃいけないし、行こつと！

あつ、木山先生と重福さんからまたメール入ってる。

初春の家に行く途中、御坂さんと白井さんと会ってかき氷を食べたりした。

それにしても白井さん関節キスがしたかったなら別の味にすれば良かったのにほんと、まあ私は間接キスがしたかったから別のにしたわけでもないんだけど……フランは同じもの食べてるのにあーんしたがつてたなそう言えば、まあ495歳児だしそんなよこしまなことは考えてないと思うけど。

なんて考えてれば初春が住んでるマンションの初春の部屋の前に来てた。

そう言えば入ってって言ってたっけ？

「お邪魔しま〜す！」

礼儀として私がそう言うと、御坂さんと白井さんも一緒に家へと入る。

とりあえず初春に軽く片手を上げて挨拶をした後にキッチンを借りることにした。二人にお茶を出して、冷たいタオルをつくって持って行く。

居間に戻ってから体温計を出すと二段ベッドの上に寝ている初春の体温を計った。辛そうな顔をしている初春。

「まあ微熱だね。もうお腹出して寝ちやダメだよ初春？」

「佐天さんが毎日スカート捲るからですよっ」

おっとこれは良い返し。

「そりゃ私は親友として毎日初春がちゃんとパンツ履いてるか気になるじゃないですか、ねえ？」

御坂さんと白井さんに同意を求めると苦笑して顔をそらす。

いやいや、白井さんと大ちゃんにだけはこの話はその反応を受けない。侵害である。

「ちゃんと履いてます！ 毎日っ！」

「はいはいわかったから、ほら、病人は大人しく寝てなさい」

御坂さんにそう言われたけどどこか納得いかなさそうに初春が横になった。

「とりあえず、晩御飯作ってきてあげるね！」

私はそう言ってから二段ベッドに上るための階段から降りてキツチンへと向かう。

居間の隣りだしお互い姿も見えるからネギを切りながら私は初春と白井さんと御坂さんの会話に聞き耳を立ててみる。

どうやら初春はグランビトン虚空爆破事件のことが気になるみたいで白井さんと話をしてるみたい。

まあそれに関しては私は「それほど」関係ないので口を出さない。あの犯人がレベル2だということに関して話をしてるみたいだけど……なるほど、レベルを上げるアイテムがあると思った固法さんが私に情報集めをもちかけたのはまだまだ確信が持てなかったからというわけですね。

うかつにそのことを白井さんや初春さんに話すわけにも行かず私に話したと、なるほどなるほど……でもそんなことせずとも二人は感づきそうですけどね。

レベルアップ「幻想御手とか、ですかね？」

まあとりあえず私が話を切り出してみることにした。たぶん初春に頼んだほうが速いだろうと思ったからこそ、だ。

ネギを切り終えて土鍋にお米と水と具を入れていく。

向こうから白井さんの『レベルを上げる？』という声が聞こえてきた。

「まあ都市伝説なんですけどね、噂の中身もバラバラなわけのわからない都市伝説。一番信憑性のない都市伝説だと思ったんですけどね。まあ最近の事件は多いですよ。登録レベルと事件内容が食い違った」事件っていうの？」

「佐天さん、勘がよろしいのですね。って思い出しましたわ！ 問い詰めようと思ったのですけれど固法先輩が『今回は佐天さんに協力を

頼んだから』って言って言っていましたがいつの間に知り合っただんですの!？」
ひゅ〜あの人も面倒なことしちやつて、ああくどうしよつかかなあ
〜。

初春も起き上がって驚いた顔してるししようがないか、とりあえず
前回固法先輩と一緒に重福さんを捕まえた話をする。

あくまでも重福さんを捕まえた話だけで不良を倒した話まででは
ない。したくない。

個人的に戦力にカウントされるようなことをしてないし御坂さん
や白井さんの方がもつとうまくやっただろうし。

「なるほど、だから知っていたのですね。それにしてもなんで佐天さ
んを……」

「そう言えば幻想御手レベルアップを使った人が書き込みをしてる掲示板があると
か!」

そう言うのと、初春がなにやらパソコンをいじりだした。

白井さんは私を問い詰める気満々のようなので早くして欲しいけ
ど、つてもうできたのか速い。

「これじゃないですか!？」

「それ!」

素性はわからないけど溜まり場はさぐれたようで、つてジヨナG
じゃん!

たぶん来るのは夜だよな。それまでは張り込みしてればイイのか
な?」

無能力者だけど足でまといにはならない自信あるし!

「ありがとう初春さん! 行ってみるわ! お大事にね!」

そう言っ走り去ってしまう御坂さん。

「お姉さま、んもお! 佐天さん、この件はまたしっかりと問い詰めさ
せていただきますわよ!」

面倒だなあくとか思ってたら白井さんも離脱。

とりあえず私はため息をついてから立って、エプロンをつけておか
ゆを見る。

大丈夫そうかな? つて初春ベッドから降りてきてるしい。

「固法先輩とそんなことしてたなんて」

「まあ一昨日に初春を迎えに行っただけど居なくてねえ、それで」

「……最近佐天さんが変わったのって、その左目は関係あるんですか？」

……初春って変なところで鋭いよね。

私はそつと眼帯を外して、机の上に置く。

紅い左目が初春には見えてるんだらうけど、私にはまったく変わりがわからない。

その左目で見る初春は少しばかりさみしそうにも見えた。

「なんだか最近、少し距離を感じちゃって……」

風邪だから多分人肌恋しくなってるんだよね。

そつと初春の手を握る。驚く初春だけど、私も案外暖かい初春の手にびっくりした。

といより熱いってことは、やっぱり熱が少し上がったんだと思う。

「大丈夫だよ、この眼はちよつと酷い充血だから」

ごめんレミア様、まあ勘弁しといてください。

「御飯作ったら私も行くね」

そう言ってから手を放すとおかゆを仕上げることにした。

少し具材を豪華にしてみたりして、あとはもう一度初春と色々話をすることにする。

どうせジョナGに集まるのだった夜だから、その時にあの二人に合流すれば良いからね。

しばらくは初春と一緒に居ようと思った。

夜、私はジョナG周辺を見てあの二人が居ないことを確認すると中に入ることにする。

とりあえず中学生だとバレないようにタンクトップのシャツとジーンズ、それに薄いタンクトップのジャケットを着てきた。

最大限気配を消しながら入って店員さんには『待ち合わせしてる』と言ってから、そつと周囲を確認。

とりあえず白井さんを見つて白井さんの隣りに座った。

「なっ、佐天さ——むぐっ！」

「シーツ……御坂さんは、交渉中ですか」

私は白井さんの口を一度塞いでからそっと御坂さんの方を見る。
うつわくすっごい演技派なんだな御坂さんって、お兄ちゃんって……ぶふっ、やばい笑いそう。

ここは我慢して後ろの話に聞き耳を立ててみる。

「佐天さん、貴女は一体なにを考えてますの、とくに固法先輩から頼られるほどのことが貴女にはっ」

「だから静かにしてくださいって、というより御坂さんは大丈夫でしようけど……寮の方は大丈夫ですか？」

そう言うと、一瞬で顔を青くする白井さん。すこし恨めしそうに私を見る。

おおこわいこわい。とりあえず白井さんをなんとかしなきゃならない。あの人たちから幻想御手のことを聞いたためには、ね。

白井さんがお金を私に渡した後、テレポートで店内から出て行く。

一方の御坂さんは、ほお正義のヒーローとは意外……てか例の上条さんじゃん！

ああ、男の人がトイレからいっぱい出てきて、逃げたあっ!?

男の人たちも上条さんを追って出て行く、そして御坂さんも追って出て行く。

ファミレスの席に残った男の人が一人、あの人数分払うのかあ……たく、しょうがないかなあ？

「あのくお兄さん？」

「えっ、あ？」

少しガラが悪くてこういう人は苦手だけど、しょうがないなあ。

「さっき幻想御手の話してるのが聞こえて、そのことで教えてくれませんか？」

「ダメダメ、さっきへんなのに当たったばっかだし！」

むう、普通にガードが硬いなあ。まったく！

じゃあここは佐天さんもねばっちゃいますよ。

「私、無能力者でレベル0の烙印を押されて……だから少しでも強

くなりたいです。ここのお代半分持ちますから！」

最後の一言で、男の人はぴくつと反応した。ふふふつ、体は正直よのく。

少しだけ気まずそうにして男の人は私の方を向く。

大丈夫ですよ。私は無害ですよ。

「わかった。ついてこい」

そう言っただけで私にお代の半分を出させた拳句話題の一つも上げずに黙ったまま私と男の人は路地裏へとやってきた。路地裏と言っても少し広くて集まるには丁度良いんだと思う。

ついたそこにいたのはさつき上条さんを追って行って拳句に御坂さんにおわれていた不良の方々、たぶん無能力者じゃないからスキルアウトとは私は呼ばない。

そんな不良の方々は私を見て露骨に嫌悪感を現す。

「さつきのJCみたいに能力持ちかテメエ、なんのつもりでできた？」

「私はただのレベル0ですよ、ほんとですよ！」

「……」

さつきが感情を込めて本気で訴えてしまった。ただそれだけ余計に悪かったのかもしれない。男の人の一人が近づいてきて私の左腕を掴んだ。

そのせいで、私はつい敵意を持っていたその相手に対して右腕でその相手の腕を掴んで足に蹴りを入れてしまった。勢いそのまま回転して、その男の人は倒れた。

ああ、ヤバ……。

「てめえ！ さつきの女はレベル4クラスぐらいだから負けたけど、てめえみたいな『無能力者』に負けるかってんだ！」

……。

「今の私は、少し危ないですよ？」

片目だけで、充分。一瞬で片付ける。

無能力者だって、努力してここまでできるってことを見せて上げるっての！

結果、私は全員を片目で片付けた。

結構体力を消耗したけどレベル2から3クラスの人たちを倒せたんだから充分って言えると思う。

さすがに幻想御手レベルアップバーを使って強くなっただけあって攻撃は単純だけど威力は確かだね。御坂さんからのダメージが残ってたようだなによりでしたと佐天さんは安心してみたり。

よし、後はこの人たちにレベルアップの事を聞けば良いんだけど……。

「随分と地味にやってくれたじゃないか」

女の人の声と足音が聞こえて、そちらに視線をやる。

「あ、姉御……」

「おい、お前たち、あんな嬢ちゃん一人に相手に何やってんだ？」

うわあ、怖いっす。

「イライラしてたからって女に当たろうとしやがって……」

「で、でもっ」

言い訳しようとした人を引っ叩いた。

超恐いですよ姉御さん、さすがの私もこれ以上はご遠慮願いたいね。ていうか最初から見ってたならその時に止めてくれればいいのにつ。

口答えかいつて、いつの時代のスケバン。てか埋めるってリアルに怖い。

そろそろと男の人たちが立ち上がって、座り込む姉御さんの背後に並ぶ。

「あの、悪かった」

「そうじゃねえ！」

もうやめたげてよお。

「本当に、サーセンしたー！」

「サーセンしたッ！」

並んで謝ってくる男の人たち。

頭を下げるその姿はもう、勘弁してやってくださいという感じだ。

私もちよつとした『発現』にイラツとしてやりすぎちゃったし。

「これでけじめはついたろ？ 許してやってくれ……お前ら！ もう

帰んな!!」

いやほんといつの時代よ、男の人たちはたったか帰っていく。てか笑えば結構可愛いのにどうしてそんな仏頂面……とか思ったり。

少しづつ私に近づいてくる姉御さん。

聞こうと思つてたことを忘れてたので、私は話を続ける。

「貴女があの人たちのトップですよ、レベルアップ幻想御手のこと教えてもらえませんか？」

私はできる限り紅魔館に居た頃のように丁寧な言葉で聞いてみる。

いや、紅魔館に居たときでも滅多にしなかった。紅魔館で教えられた社交的な笑みと態度で聞いたみたというだけ。

「そんなことより、あたいの舎弟を可愛がつてくれたんだ。覚悟はできてるんだらうね?」

「へ、覚悟つてあの……さつき謝つてくれたんじゃ?」

「あれはあれ、これはこれ、借りはきつちり返さないかね……」

まったくもお、面倒だなあ!

「いくよ!」

来なくていいから!

地面に手をつく姉御さん、つまりは能力は地面を伝ってくる系か地面を操る系。

そして手の周辺からわずかに波紋のようなものがアスファルトを伝ってくるのを理解できた。

地面の感触が少し変わった!?

「もおっ!」

地面を蹴つて真上を通つてるパイプに両手で捕まると、真下のアスファルトが波打っているのが見える。

さつき男の人の一人が落としたアクセサリが地面に飲み込まれた。つまりは地形操作つてことで、呑気に地面にいなかったのは正解つてことなわけだ。

しょうがないか……。

私は両手で上のパイプを掴んだまま両足を振つて振り子の原理で

勢いをつけてから、クルンと回ってパイプの上に立つ。片手を壁についてないと落ちそうだからそうしておく。

「やるじゃないか、無能力者とは思えないよ」

「お褒めの言葉ありがとうございます」

私は軽く飛んでから少しひらべったパイプに降り立つ。足場が安定しているので少し安心だ。

「あたいの能力は表層融解！フラックスコート アスファルトをコントロールすることができのさー！」

「(丁寧)にどうも」

でもどうすれば良いか、こうなれば私ができるのは遠距離攻撃とわずかにあるタイムラグを利用してまだ融解させられてない背後を取るということだけ、でも姉御さんと私の距離は5メートルほど、ここからジャンプで彼女の背後を素早くとって攻撃を加えるなんてことは、できないよね。

じゃあどうするか、ジャンプという選択肢を消しても見つかる選択肢なんて、いや一つだけないことはないけど、成功率はかなり低い。

「ああもう、面倒だなあ〜」

「ハッ、じゃあ負けを認めるんだな」

「私が勝ったら幻想御手のこと教えてくださいね？」

そう言うてから、私は片目の眼帯に手を当てて、外す。

ポケットにその眼帯をしまつてから、同じくポケットの中に入っているお守りをギュツとにぎった。

おまじない。大丈夫、私は勝てる。

「なるほどね、その目は見えるのに隠してたってわけか？」

そう、この綺麗な紅を隠すっていうのはレミリア様に悪く思うけど私を心配する人がいるから私はこれを隠すしかない。

調べられでもして厄介なことになるのも大変だから、だからこそ私はこの眼を見せたくない。

でもそんなことを言ってられる状況でもない。

「それで勝てると思われてたんじゃ、あたしも舐められたもんだね！

この黒鉄クロガネの意思、砕けるもんなら砕いてみな！」

私は不思議と口の端をつり上がってしまったのがわかった。

こう正々堂々した人は嫌いじゃない、むしろ好きな方で楽しくてしょうがない。

そう、この手の人に手加減は侮辱にあたるし、この人は筋の通った人であるのは確かで……。

なら私が本気で戦う以外、あの人を倒せることはない。

「ならば私もこの紅魔の魂を持ちいて全力を持ち貴女を倒しましょう！」

ジャケットの前のボタンを開けた。このジャケットには少し改造がくわえてあつてですね……内側にポケットを作ったんですよ。

それもナイフを収納できるようにね！

職務質問されれば一発でOUTなそのジャケットの内ポケットからナイフを一本出して投げる。

「なっ！」

姉御さんは驚きながらもアスファルトの壁を出して私のナイフを防ぐ。

やはり！ ならこの勝負は私がいただきましたよ姉御さん！

私はアスファルトの壁へと飛んでから刺さっているナイフの柄を掴む。

そのままアスファルトの壁を蹴ってからもう一度パイプの上に立つ。

壁が地面へと沈むと、姉御さんは私を面白そうに見てくる。

「ハッ、さつきと全然違う感じだね。気迫だけで充分あんたが実力者だつてわかるよ」

そう言っていただければ光栄ですわ姉御さん？

さあ行くよ……でもその前に次の攻撃を待つ。

姉御さんが地面にもう一度手をつくると、パイプの真下のアスファルトから黒い筒が飛び出してくる。私は鉄パイプを右に移動してその黒い筒を避ける。

笑ってる姉御さんを見て、なんとなく理解した。

左目の眼帯を外してて良かったと思った。左の鉄の筒から私の方

にのびる筒をさらに避けてから、跳ぶ。右横の壁を蹴って、左に跳びながらジャケットの内側にあるナイフを何本も投擲した。

でも姉御さんはアスファルトの壁を出してナイフはすべてアスファルトの壁に突き刺さる……私の勝ちだね。

空中で勢いだけで体の方向を変えてから、さらに左横の壁を蹴ってからアスファルトの壁の方へと向かう。

すぐにアスファルトの壁にささったナイフの柄を、足で蹴る。そのまま刺さったナイフの柄を蹴って壁を登っていく。

あたいつたら天才ね！ あつ、そういや姉御さんつてチルノ思い出す、ねっ！

壁に刺さったナイフの柄を使って壁を乗り越えた私は、ジャケットの中にある最後のナイフを持って姉御さんに背を向けたまま背後に着地、そのままクルツと身をひねってから私は姉御さんの首元にナイフをそえた。

「チエックメイトです」

「……あたいの負け、か」

こうして、私は路地裏をボロボロにして姉御さんに勝つことができた。

代償はここにつくまでに払ったあの人たちの食事代半分。

ナイフはとりあえず回収させてもらおうとしても、とりあえず^{レベルアップ}幻想御手のことも聞かないとね。

その後、私は^{レベルアップ}幻想御手のことを聞いてからナイフを回収して、最後に『笑ったほうが可愛いですよ』とだけ言って帰ることにした。うん、私なりのフォローだ！

これで今度会った時も恨まれることはないと思いたい。まあ姉御さんはそんな人じゃないだろうけど……。

帰り道の途中、前の方から走ってくる上条さん。

「どうしたんですか？」

「あつ、君はあ……デパートでビリビリと一緒に居た」

「佐天ですよ。佐天涙子」

そうだそうだ。と思い出したように言う上条さん、とりあえずどうしたか。

「ああビリビ……御坂に追われてるんだかくまってくれ！」

あの人ももうちよつと素直になれば良いのに、と思いつながらしようがないので私は上条さんの手をとって目の前のマンションみたいな寮へと入る。ていうかこの「停電」も御坂さんのせいか……派手にやったね。

御坂さんもさすがにここまで追ってこないだろう。私はそのまま階段を上がって自分の部屋の前に立った。

鍵、鍵つと……あれ、普通に来ちゃったけど。

「あつ、ごめんなさい。ほぼ無意識のまま連れてきちゃいました」

上条さんまで私の部屋の前にいた。

まったくの無意識、これ御坂さんに知れたら私殺されるんじゃないかなだろうか？

というより考え事とかもあるんだけど、まあ良いか。

「上がって行きます？」

「え？」

「お茶ぐらいだしますよ、夜中ですし晩御飯ぐらい作りますけど……」
そう言うのと、悩むような様子の上条さん。

しかし結果的に上条さんは誘惑に負けて私の家に上がっていくのだった。

座っている上条さんに紅茶を出してから、私は晩御飯を軽く作る。

今日の晩御飯は麻婆豆腐。煮えるまで暇なのでポケットにしまったアレを出す。

眼帯はすでにつけているのでポケットにお守りの他に入っているのは私が先ほど姉御さんからもらった「レベルアップバー幻想御手」レベルアップバーだけだ。

まさか音楽プレイヤーごとくれるとは思わなかったけど……とい
うか幻想御手が音楽とは思わなかったけど……

「これがあれば、私にも能力が……」

なんてつぶやいてみる。

「なあ佐天さん？」

「わひやあつ!？」

驚きながらそつちを見ると、上条さんがこちらを見ていた。

「いや、上条さんにも手伝えることあるかなって……」

「あ、あはははっ、大丈夫ですよ後は煮えるのを待つだけなので!」

「そうか?」

「はい、お客さんなんだから待つててくださいよ」

それから、私はレベルアップのことは一旦忘れて上条さんと晩御飯を食べてから色々話をしていた。

例の「停電」のせいで明かりは少ないけど、話をしているとつい無能力者あるあるで盛り上がってしまう。

厳密に言えば上条さんはただの無能力者じゃなく、私も最近はただの無能力者じゃないけどレベル0という立場でどういう扱いかは大体同じ。

話が盛り上がり、時は過ぎていき12時を超えていた。初春とでもこうならないよ、たぶんレベル0の人と話すのが久しぶりだったから私が勝手に盛り上がったただけだろうけど……。

そうこうしている内に時間は12時ぐらいになった。

「やべ、そろそろ帰らないと」

「別に泊まつてつても構いませんよ? 布団出しますし」

問題としては御坂さんに殺される可能性があるだけだ。

「いやいや、さすがにこの上条さんだって一人暮らしの女の子の部屋に泊まるのはつてことぞ」

そう言うとお上条さんは玄関へと向かう。

私もさすがにこの時間まで話し込んでしまったのは悪かったので玄関までは見送ることにした。

「じゃあ、おやすみなさい」

「うん、それじゃあまたな佐天さん」

そう言うつて上条さんは帰つていった。

まあ私としても無能力者仲間なんて周りには初めてだからつい嬉しくなつちやつたんだと思う。

男の人と話してここまで仲良くなつたのは初めてだけど、上条さん

だし問題ないとか思ったのはたぶんあの人には妙な安心感があるからだ。

とりあえず幻想御手レベルアップのことについても色々なことについても明日考えれば良いよね。

じゃあ、寝ますか！

あつ、上条さん財布忘れちゃってるし……後で連絡しよ。

◇◇◇◇◇

そしてこの時の「私たち」はまだ知らない。

明日、どんなことに巻き込まれるかも、知らない。

まだ科学の真実はおろか「魔術」すら知らなかった頃の私や上条さん。

そして、この学園都市がどういうものかまだ知らない私や御坂さん。

魔術と科学が交差する時——物語は始まる。

12、超能力〈天才〉

朝っぱら、私は外に出ていた。休みにもかかわらず私が朝から外に出ていた。

理由は簡単で昨晚家に来ていた上条さんが財布を忘れていったから届けるから、それとどこかの誰かのせいで私は死ぬほど暑い思いをしてしまったからの二つ。

まともに信号も動いていないせいでジャッジメント風紀委員は駆り出されてる。

学園都市の電気系統をほとんど不能にさせてしまったのはおそらく、私の友達で若干申し訳思いながらも私は昨日連絡して確かめた上条さんの住んでいるマンションの上条さんの部屋の前へとやってきていた。

とりあえず一度ノックをする。

——イヤアアアツ!

突然叫び声が聞こえて、私は思わずドアを開けて入ってしまった。

鍵かけてないなんて無用心だなと思うけど、そんなことに構っている暇はない。

なんて思いながら上条さん宅に入ると、そこには……。

「ぜ、全裸の外人ロリに、か、上条さんが全裸で……」

「ぎ、佐天さん!?! いやこれは違うんですよ、上条さんは——つてギヤアアアアツ!」

全裸のロリが、上条さんに噛み付いた。

これが私とインデックス禁書目録との出会いで、同時に魔術というものとの出会いでもあった。

大体の話を上条さんから聞いて理解できた。

そもそもあのロリっ子ことインデックスが上条さんのベッドの上で布団をかぶっているのは、あの子の着ていた『歩く教会』という霊装を上条さんがその右手で破壊してしまったらしい。

霊装というものが紅魔館の書物で読んだそれと同じかはわからなけれど、とりあえず上条さんの右手で破壊できるということはその

「魔術」というものは本物ということが証明された。

パチユリーさんの使う魔法とはまた別のもの、と考えて正解なのかな？

「できたー！」

そんな声が聞こえてそちらを見れば、そこには布団から出て腕を腰に当てているインデックス。

ドヤ顔で破けた服を安全ピンにて修復したようだけれど、なんか危なっかしい気もする。

ていうかデカ過ぎでしょ安全ピン。

「なんだそのアイアンメイデン……」

「ごもつとも」

私の同意に、インデックスは落ち込んで膝をつく。

そうこうしていると上条さんが携帯を見て驚いて声を上げる。

補習があるようで、ってさっき話を聞いたけどどうするんだろう。

インデックス……。

そう思っていると上条さんがインデックスの方を見た。

「俺これから学校行かなきゃなんないんだけど、お前どうすんの？

ここに残るなら鍵渡すけど」

おお、優しいね上条さん。モツテモテだね！

だけどどこかさみしそうな顔をしたインデックス。

「いい、出てく。いつまでもいると連中ここまで来そうだし」

連中というと魔術結社ってやつだよな？ ていうか本物？ いや

でも幻想郷まで行っておいて私が今更そういうことを信じないとい

うのも微妙な気がする。

ということこれでこれは信じてもいいと思うけど私が絡むことで厄介

なことになっても不味い。

それに何かがあっても無能力者レベルでなんの才能もない私が役にたつ

とも思えないし……。

「君だって部屋ごとと爆破されたくはないよね？」

「ちよつと待って、私の電話番号教えとくから、困ったら電話して？

隠れ家ぐらいなら用意できるから……」

とりあえず上条さんの使ってなさそうな紙に電話番号と住所を書いて渡す。

この子が悪用するとも思えないし構わない。

頷いたインデックスは『ありがとう』と言って玄関の方に走る。

「おい、ちよつと待ってー!」

上条さんがインデックスを追いかけられるけど、途中でこけそうになつて携帯を落とす。

挙句に携帯電話を踏んでしまい……粉砕!

相変わらず不幸だなあ、私の1, 5倍は不幸だと思う。

「君の右手、幸運とか神のご加護とか、そういうものをまとめて消しちゃってるんだと思うよ?」

それは不味いというかなんというか……。

上条さんはわかっていない。

「その右手が空気に触れてるだけで、バンバン不幸になつていくつてわけだね」

頭を抱えながら、上条さんがうなだれた。

そりやそうだよねえ。その右手があるだけでもう不幸決定だもん。

私の自前の右手がそれじゃなくて良かったよほんと、これ以上不幸になつたらさすがに死ぬし。

インデックスはもう『生まれてきた不幸』とか言っちゃやうし。

「お前、ここを出て行く宛でもあるのかよ!」

上条さんが突然インデックスにそう聞いた。

やっぱり困ってる人を放つていられないたちらしい。

「ここにいと、敵がくるから」

「敵?」

私の問いに、インデックスが頷く。

「この服は魔力で動いているからね、それを元にサーチかけてるみたいなんだよ。でも大丈夫、教会まで逃げ切れれば匿ってもらえるから」
「ちよつと待てよ、それがわかつて放りだせるかよ」

そんな上条さんの言葉に、少し嬉しそうに、さみしそうに笑うインデックス。

私の頭の中にも色々と言葉が生まれては消える。

あの日、フランと戦ったあの日にチルノが言った言葉が頭の中をループしては消えた。

「じゃあ、私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？」

私と上条さんは声を出すことができないでいる。

まるで『ついてくるな』というようなその問いに、二人して黙っていることしかできない。

少しだけ微笑んで、身を翻すインデックス。

「それじゃっ」

ドアが締まると上条さんと私が同時にドアを開けて去っていくインデックスの背に声をかける。

「困ったことがあったらまた来ていいからな！」

「困ったことがあったらウチ来ていいからね！」

お互いが同じようなことを声に出すと、インデックスは笑いながら手を振ってきた。

「うん！ お腹減ったら頼りに——ひゃあつ！ なにこれ!？」

掃除ロボに追われて去っていくインデックスを見送ると、顔を見合わせて笑う。

直後、上条さんの表情が変わった。

補修を忘れてたんだと思う、急いで家の中に入る上条さんを追って私は家に入ると靴を履く。

とりあえずは私も初春との待ち合わせ場所に行くとしましようか！

上条さんと別れた後に私は初春との待ち合わせ場所に向かう。

少しばかり遅れたので暇そうに携帯電話とにらめっこしている初春の背後から気配を消して近寄ると、私は思い切りそのスカートをめくりあげた。

「今日は青のストライプかぁ！」

初春が真っ赤な顔をして殴ってくる。

まったく可愛いなあ……チルノ相手だったら私弾幕ぶち込まれて

るところだもんね。

しかも回避すれば大惨事になるしねえ。

さてさて、とりあえず出かけますか、白井さんは色々忙しいみたいだけど……。

「なんだか佐天さんと遊ぶのずいぶん久しぶりな気がします。そんなことないけど」

私にとっては初春と二人で遊ぶのって久しぶりなただけどねえ……。

前は御坂さんと白井さんの二人もいたし。

とりあえず出かけますか！

私と初春はとりあえずショッピングでも楽しもうと、歩き出すことにした。

初春と二人で一通り遊んで、お昼をどこで食べようかという話になった私と初春。

とりあえずいつ何があっても良いように昨日と同じく私服の上から「例のジャケット」は着てる。まあ初春と二人でいてなにかあるとも思えないけど……。

辺りを見回して昨晚の「謎の停電」のせいで閉まっている店の中から、空いている店を見つけるがそれといって良い場所も見つからない。

「中々お昼食べれそうな場所ないですねー」

初春の言葉に、頷く私。

確かに言いたいことはわかる。というよりごもつともって感じだよねえ。

でもこういう時風力発電様々で、電力をそこまで使わない店なら空いている。

さてさて、どうしよつか……ん、電話？

携帯端末の画面を見ると、そこには木山先生という表示。

「電話ですか？」

「うん、少し待ってね初春……もしもし？」

通話ボタンを押してから端末を耳元に当てると、向こうから聞き覚えのある声が聞こえた。

『佐天くん』

「ん、どうしました？」

『隣の女は誰なんだ？』

こわっ！　なんだなんだよなんですかあの三段活用！

てかどこよ、どこから見てるのよ！

ていうか！

「貴女は私の彼女かなんかですか!？」

このツツコミは正解だと思う。

『か、彼女だなんて、私は異性はもちろん同棲とも付き合ったことは――』

「んなことはどうでもいいですから！　どこですかアッ！」

おっとついつい変な喋り方に、紅魔館のことを思い出すんだ私。

そう、落ち着いて優雅に……それと行ってあっちでも落ち着いてなかった気がするけど。

まあともかく落ち着く。

隣の初春も驚いてるし。

「で、どこにいるんですか？」

『左を見たまへ』

そう言われて私は左を見る。

そこには飲食店、そしてガラス張りのそこには、木山先生がいた。

しかも向かいの席には御坂さんと白井さんというおまけ付きだ。

やつべえですよこれは、佐天さんも今回ばかりは白井さんから逃げきれぬ気が……。

「ぎげんよう初春……それと、佐天さん？」

これはこれは白井さん、突然隣りに現れ――あつ、いつの間にか店の中に、白井さんと初春に挟まれてるし。

てか狭い！　御坂さんと白井さんと私と初春の四人は辛い！

白井さんは私を掴まないでえっ！

「君たち、そちらに四人は辛いだろう」

「そうですよね！　ということではそちらに！」

軽く白井さんの手を払ってからテーブルの下をくぐって木山先生の隣りに座る。

すっごい白井さん私のこと見てるし、ほらほら御坂さんが隣りにいるのにほかの女にうつつを抜かして良いんですか？　てか初春まで不思議そうにしていますし。

ああもう、面倒なことになりませんように……って遅いか。

とりあえず店員さんと呼んで昼ごはんを頼む。

そして口を開いたのは御坂さんだった。

「ところで佐天さんと木山先生は知り合いだったの？」

「まあなんというか」

「前に脱がされ」

「誤解をうむ！」

うつわあぐって目で見てきてる御坂さんに、白井さんには深く頷かれる。貴女にだけはそんな顔されたくなかった。

てかなんで初春は若干腑に落ちないような顔してんのさ、木山先生もしてやったりな顔だけはしないですよ！

なんだこれ！　くっそ〜！

思わず机を叩いてしまう私、飲み物が倒れて木山先生のストッキングに掛かってしまった。

終わったあ……。

「ご、ごめんなさい木山先生！」

だからお願い。絶対に脱がないで！

「気にしないでいい、かかったのはストッキングだけだから脱いでしまえば」

じゃあスカートは脱がないでくださいよ！　いやどっちもダメだけど！

イエス、ストップ！　ノー、ストリップううう。

瞬間、白井さんが雷を落とした。御坂さんじゃなくて白井さんであってる。

「だからあく！　人前で脱いじゃダメだと言ってますでしょう

「があああつ！」

さすが一部を除けば常識人な白井さん、信じてましたよ！

カンカンの白井さんと真つ赤な顔をしている御坂さんと初春、うぶよのお。

まあ私も女の人の裸なんて、ああ美鈴さんとお風呂に行つたとき……へっ、久しぶりだったよ、あんな敗北感は……。

「しかし、起伏に乏しい私の体を見て劣情を催す男性がいるとは……」「趣味思考は人それぞれですよ！ それに殿方じゃなくても、歪んだ情欲を抱く同性もいますのよ！ ねえ!？」

白井さんは常識的な人だなあくまあ、ブーメランのごとく言葉の数々は白井さんを的中だけどね。

ていうか木山先生なに私のこと見てるんですか？

ストッキング弁償は勘弁してください……お金はないんですよ、レベル0なので奨学金もなしで。

「佐天くんは私の起伏の乏しいからだをどう思う?」

なん……だと……? ていうかなんで私に聞くんですか。

「綺麗だと思います。野外で脱いじやダメです」

少し考えるような素振りそ見せた後、木山先生は頷いて座った。

ん、なんで私に聞いたんだろ? まったくわからない……。とりあえず木山先生が脱ぐ手を止めてスカートを履いたので良しとしましょう。

落ち着いた状況でようやく私と初春の昼ごはんが運ばれてきたのでそれを食べながら話を聞くことにした。

とりあえず木山先生のことを初春に紹介。

「へえ、脳学者の方なんですか……やはり白井さんの脳に異常が?」

「幻想御手の件で相談しましたの」

さすが初春、毒舌。というより科学者つて私には言わなかったっけ? まあいいか。

私はここで幻想御手を出すべき、かな?

いやまだ早いよね……いや、これはどうするべきなんだろ。

無能力で悩んでいる人がスキルアウトになることも減るかもしれ

ないこの機械を、渡す？

「黒子が言うには、レベルアップ幻想御手の所有者を保護するんだって」

「どうしてですか？」

「まだ調査中ですのではつきりしたことは言えませんが、使用者に副作用が出る可能性がありますの……それに、容易に犯罪に走る傾向が見受けられました」

その気持ちがわからないわけじゃない。

今まで無能力者、低能力者で虐げられていた側からすれば高位の能力者に反撃したい気持ちは芽生えると思うし……。

私がどうするべきなのかを考える。

紅魔館で教わったのは『自分の信じた道を進め』ということ……。

なら今すぐ渡すのは早計だと思うし、これが本物のレベルアップ幻想御手だという確証もない。

あと一人からでもレベルアップについて聞ければ……重福さんを頼るか……。

あれ？ いつもメールを打ったら1分以内にメールが来るはずなんだけど。

すでに夕日が登っている外に出て、私たちと木山先生は分かれることになった。

白井さんが一礼。

「今日は、お忙しい中色々教えていただき、ありがとうございました。いや、こちらこそ教鞭を振るっていた頃を思い出して、楽しかったな」
教師やってたんだ。だから先生って呼ばれたがって……ん、なんで私にあんな先生って呼んで欲しかったんだろ？

別に白井さんや初春でも変わんないと思うんだけどなあ。

微笑んでから軽く一礼する白井さんと初春。

「教師をなさってたんですか」

「昔ね……」

相変わらずの雰囲気をもとのまま片手を上げて去っていく木山先生。

私も手を振り返した。なんだか前と違う感じがするのはなんでだろ、さみしそうな雰囲気……ていうかクマのこと言うの忘れてた。

せっかく可愛いのもつたいないじゃないですか。

さて、私はさっさとここから離れよつと幻想御手のことバレたら面倒だし。

私は踵を返してから少し早歩きでその場を去った。

やっぱり渡した方が正解なのかな？

副作用、それがどういうものか聞けば正解だったのかもしれない。

でもこれが本物の幻想御手レベルアップバーという保証もないし、なにより私がこれをどこで手に入れたか聞かれれば答えに困る。

白井さんからの質問はすべて受け流したけど、今度ばかりは御坂さんも聞いてくるはずだ。

どうすればいいのかなあ。

「佐天さん」

噂をすればなんとやら。

「御坂さん、どうして？」

「だって急にいなくなるんだもん、心配するでしょ？」

ハハっ、なんか変なところで感が良いなあ。

素直に嬉しい。刺がある考え方ももしれないけどレベル5の超電磁砲レベルガンに“友達”として心配してもらえるのは……。

それでも私は紅魔館で教えられた“仮面をつける”ということをやる。本当は戦闘のときとかに良いんだけどね。昨日の姉御さんとの戦いも仮面をつけるといふことで余裕に見せてたし、でもまさか普通にしてて役にたつとは思わなかった。

私はその仮面をつけて、いつも通りの笑顔で笑ってみせる。

「だって固法先輩に頼まれたからって事件とか関係無いじゃないですか私、ただの無能力者の女子中学生ですし」

あくまでも刺が立たないようにつつがなく言う。

私はポケットの中でお守りを握り締める。

友達相手に“演技”をするっていうのは意外と精神的にダメージ

が大きくて、罪悪感が膨れ上がっていく。
心が痛い。

学園都市に来るのを反対してたけど、最後は許してくれたお母さんのくれたお守り、それを握りしめて私は御坂さん^{友達}相手に自分を偽る。「そんなこと言わないで？ 私や黒子を含めて、初春さんはいつか佐天さんが能力者になれるって信じてるから……」

「わかっています。けれどその期待が重いときもあるんですよ。いつまでたってもレベル0ですし」

少しづつ、偽りの佐天涙子が剥がれていく感じが私にはわかった。

ダメ——〈今日だって能力があればインデックスを助ける気になっただかもしれない〉——考えちゃダメ——。

「レベルなんてどうでもいいことじゃない?」

笑っていう御坂さんに、私は笑い返せなかった。

踵を返して御坂さんに背中を向ける。

ハッ『レベルなんてどうでもいいこと』なんて、努力して、必死で努力してレベル5になった人の言葉とは思えない。

イヤ、何考えてんのあたし、御坂さんは私に気を使って言ってくれたんじゃない……。

「佐天さんだって頑張れば『レベル5』になれるわよ。ううん、誰だってなれる。努力すれば才能なんて——」

「ちよつと黙れ」

つい、口にだしてしまった。私らしくない言葉。

御坂さんの『え?』という一言が聞こえてきて、私は走ってその場を去る。

走りながら私は唇を噛む。

——最低だあたしって!　なんで、私を慰めるためにあそこまで言ってくれて、追ってきてくれた御坂さんにあんなことっ!　ああもう、私ってなんにも成長してないじゃん!

悔しきで涙すら出てきそうになるけど、絶対に泣かないっ……私は泣くわけにはいかない。だって紅魔館の誇り高いメイドなんだから人前で泣くなんて……

10分ほど走り続けたかな、私は引つ込んだ涙を自覚してから頷く。

さて……どっか行こうかな。なんか、まだ帰る気分じゃないし。

——はあ、最低だ。

「おくい佐天さん！」

聞こえてきた声は、昨日今日で聞き慣れた声だった。

振り向けば背後からせえせえ言いながら走ってくる上条さんが見える。

どうしたんだろ？

「なんか走ってたから心配になってさ」

まったく気が利く人というか、ほんと御坂さんが惚れるに値する人だと思う。

レベル0でもこの人ぐらい爽やかな生き方をしていると同じレベル0としてなんだか嬉しい。

ともかく、私は上条さんに軽く挨拶。

さっきのことは一旦忘れることにしよう。

「そうだ、俺の住んでる寮近くだから晩御飯でも食べてってくれよ」

昨日とは真逆の上条さんからの提案に、私は頷くことにした。

上条さんとは初春とはまた違った親友になれそうな気がする。

日常、とは違うんだろうけど……恋愛対象でもなさそうだけど、なんだらう。妙に安心するのは同じレベル0だから、かな？

二人で一緒にマンションのエレベーターに乗って上がる。

今日二回目のこのマンション。そしてエレベーターから下りると、私たちは上条さんの部屋の前を見て笑う。

まったくもう、また行き倒れて……てか清掃ロボにたかられてるし。

「なんていうか、不幸だ」

嬉しそうに言う上条さん、なんか他人とは思えない言葉。

「おいインデックス、こんなところでなにやってんだよ」

「電話して良いって言ったのに」

私たちはインデックスのそばに行く。

インデックスの体を揺らす上条さんだが、中々起きない。

ん……この匂い……。

「こんなところで寝て……」

「上条さん、これって」

インデックスの背中には真つ赤な液体がこびりついていた。

同じく、上条さんの手にも真つ赤な血がついている。たぶんイン

デックスの体を揺すったからで……。

唾然とする上条さんと、同じく言葉を出せない私。

腕を破壊され、左目を破壊された私だけど今だに大量の血つていうのは慣れない。

インデックスの意識を覚まさせるために大きな声で名を呼ぶ上条さん。

「どこのどいつにやられたんだ!？」

そして、背後から足音が聞こえて私と上条さんは同時に振り返る。

そこに立っているのは、黒いローブを着た赤い髪の男の人、身長が上条さんより全然高く、耳にいくつもピアスをしていてタバコまで吸ってる。目の下にバーコードをつけていて、なにかのフアッシュョンなのかなんなのか知らないけど、私は即座に動けるようにした。

「はあ? 僕たち、魔術師だけど?」

インデックスを襲ったのは目の前の魔術師と名乗った青年だった。



こうして私と上条さんは魔術と出会う。

こうして私たちを取り巻く世界は変わっていく。

そして、科学と魔術が交差した――。

13、魔術結社〈執行人〉

目の前の「魔術師」と名乗った男の人はタバコをくわえたまま私たち、佐天涙子と上条当麻を見下すような表情を浮かべた。

ダメだ。この人には勝てないって私の勘が、本能が警報を鳴らしている。

絶対に能力開発なんてしてない目の前の人だけど、パチュリーさまみたいに魔法のようなものが使えるとすれば私が勝てるはずなんじゃない。

上条さんと魔術師が話をしているけど、私はそちらに意識を向けることもできずに逃げる方法ばかりを頭の中で思考する。

「それを斬ったのは僕じゃないし、神裂も血まみれにするつもりは無かったんじゃないかな？ その修道服、歩く教会は絶対防御なんだけど、なんの因果で砕けたのか」

笑いながら言う魔術師に、私は歯を食いしばる。

一発でも入れられれば話は別なはず。上条さんが相手の気を引いてるうちになんとか……。

ん、10万3000冊の本……何言ってるの？

「あるさ、その頭の中に……一度見たものを一瞬で覚えて、一字一句を一生記憶し続ける頭を持つてるんだ」

そして持ち出すことが許されないものを一瞬で覚える。

だからこそ『保護』する？

「保護だよ保護、それにいくら良識と良心があつたって薬物と拷問には耐えられないだろ。僕たちだってそんな奴らに女の子の体を渡すのは、心が痛むだろう？」

「っ……」

待って、まだ動かないで上条さんっ！

「てんめえっ！ 一体なにさまだよっ！」

その拳は目の前の魔術師を打とうとするけれど、軽く避けられる。

魔術師は私なんか気にもせず私に背を向けて上条さんを見た。

「ステイル・マグヌスと名乗りたいところだけど、ここはFortis

931と言っておこうかな日本語では『強者』と言ったところか……魔法名だよ」

その聞きなれない言葉を、ステイル・マグヌスは懇切丁寧に教えてくれる。

曰く昔からの風習で、殺し名であるということ……。

なら、上条さんはっ！

「炎よー！」

捨てられたタバコから溢れる炎が、ステイル・マグヌスの手のひらに集まる。

タバコの残り火から溢れ出したとは思えないほどの炎は辺りを高温にした。

私のナイフもジャケットから晒して彼に投げようものならそのままに溶けて落ちる。

「巨人に苦痛の贈り物お！」

そう叫ぶと同時に、ステイル・マグヌスの手から放たれる紅蓮の炎。でも大丈夫、上条さんの手には「アレ」がある。霊装と呼ばれるあれを破壊できた右手なんだから、確実にできるはずだよ！

逆巻く炎に包まれる上条さん。

ステイル・マグヌスは後頭部を書いてため息をつく。

「やりすぎたかな？ それじゃなんどやっても勝てないよ」

なんでもないように言うと、次は私の方を向いた。

「誰が」

そんな声に、私は笑みを浮かべてステイル・マグヌスは驚愕を浮かべる。

炎の中から現れる上条さんには傷一つない。

「誰が、何回やっても勝てないって？」

そしてもう一度放たれた炎を、上条さんは打ち消す。

あの右手の力に私は言葉一つ出せずに、今はインデックスと上条さんと共に逃げることも同時に考える。

だけど、またステイル・マグヌスの腕には炎が宿った。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ。

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。

その名は炎、その役は剣。

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ！」

炎はより一層燃え上がり、その姿を変えていった。

私の視線にはその巨大な炎は死を呼ぶ何かに見える。

その存在により一層あたりの温度は上昇していく……。

「魔女狩りの王イノケンティウス、その意味は…… 必ず殺す！」

魔女狩り、なんて不吉な言葉だろう。

私の嫌いなワードの一つだ。パチュリーさんが魔女だから、余計に嫌いだ。

火炙りなんて御免。

その炎の巨人が腕を振るい上条さんを襲おうとするけれど、上条さんは片手でその巨人をかきけす。いや、正確には片手だけがその巨人を消せるんだけど……。

「邪魔だ！」

上条さんがそう言って消した炎は、再び集まりその背後で再び巨人の姿を形作る。

あれじゃ魔女も苦戦するはずだ。

パチュリーさんの本当の力というのは見たことはないけれど、不死の炎の巨人はさすがに……。

上条さんが背後からのイノケンティウスの攻撃をその右腕で防ぐけれど、消しては集まるその炎に一見つば競り合っているように見える。

だけど上条さんがかき消してもまた生まれているというだけ、それだけでも一方しか防げない上条さんにとっては不利としか言えない。目の前の魔術師に近距離戦を挑もうものなら焼き殺されるかもしれない。ナイフに関してはお出して彼に近づけた直後に溶ける。ならどうすればいいの!?

そんな時、インデックスが突然ルーンのことを話始める。別人格と

考えて良いんだと思う。

「ふん！」

突然近寄ってきた魔術師は私の目の前でインデックスの顔を踏んで黙らせた。

カツ、と頭に血が上った私はそのまま立ち上がると同時に魔術師の腹部に左拳を打ち込む。顎は高く狙えない、なら！

さらに追撃として膝蹴りをその腹に打ち込むと、ステイル・マグヌスは上条さんの背後まで転がる。

これでも気絶しないなら、やっぱり並ではない。

「ちっ！ 君も面倒だなあ！ 灰は灰に、塵は塵に……」

両手に集まる炎。

確実に私だけを殺る自信があるということ、私も背筋に悪寒を感じる。

殺される。あの銀行強盗の時や、不良たちの時や、虚空爆破事件、姉御さんとの時だって死は覚悟しなかった。

けれど今回ばかりはあれに当たれば確実に死に至るという感がある。

「吸血殺しの紅十字ー」

私に迫る紅十字の炎。

咄嗟に廊下の柵を超えて5階の高さから落ちる覚悟をする。

途中でナイフを出して壁に突き刺し、なんとかぶら下がると三階の廊下に入ってから体を横にしたまま大きく深呼吸をした。

死ぬ。殺される。今度こそ殺される……。

さつきからステイル・マグヌスは妙に私の身内を殺そうとする技ばかり、そのうちメイド殺しと龍殺しと悪魔殺しでもやるんじゃないかなろうかとドキドキする。

私は上条さんの声を聞いてとつさにそちらを見ると、4階ほどの高さから落ちていく上条さんの姿が見えた。死なない辺りさすがだなと思う。

「佐天さん！ はやくマンションを飛び降りろ！」

そんな声が聞こえて私は思わず飛び降りてしまう。

三階と言えど私怪我しますよねこれ？ でも仕方ない、なんの考えもなしにあの人がそんなこと言うはずがないんだから！

飛び降りる私の下にスライディングしてくる上条さんは、見事両手で私をキャッチ。さすがつす先輩。

でもそんなふざけてる暇もなく、私は上条さんにおろしてもらった後に上を見る。

イノケンティウスは私の先ほどまで居た場所で吠えた。

「ルーンの刻印ってやつを見つかるまではしたんだけど……：そーいや携帯持ってない!？」

上条さんのは今朝踏み潰したもんね、と思つて電話を開くと、充電が切れる。

くそっ！ なんでこんな時につ……！

上条さんは『公衆電話』と言つて立ち去ろうとしたが、止まった。

たぶんインデックスのことを思つてるんだと思う。逃げたいけど、そこで逃げないのが上条さんだ。

「佐天さん、俺と一緒に……：アイツを地獄から引きずり上げてくれるか？」

一人で大変なら二人で、か。

私としてはなんの問題もない。こんな私でも誰かの役に立てるなら、やってみせる。

上条さんと私は頷いて、案を出す。

まず、火災警報を鳴らしてスプリンクラーを起動させる。

ビショビショになるのは構わない。二人でエレベーターを降りて、ステイル・マグヌスのいる廊下へと立った。これですべての項目がクリアされたはずと言つていい。

私も上条さんも、これで本気でアイツを殴れる！

ステイル・マグヌスは本気で私たちがスプリンクラーでイノケンティウスを殺すと思つていたらしい。とんだ間抜けだ。

そして私たちの目標は紙を溶かすことでもない。私たちの背後に現れるイノケンティウス。

「殺せ」

ステイル・マグヌスの言葉により動き出すイノケンティウスも、こうなればただのウドの大木。

上条さんの右手が炎の巨人をかき消す。

「コピー用紙は破れなくても、水に濡れりやインクは落ちちまうんじゃないか？」

重福さんがまゆげ事件で使ってた油性ペンは一週間は落ちないらしいけど、自前かな？

ほんと書くものが違ってたら私たちが死んでたわけだ。

消える魔女狩りの王。

上条さんと私は一緒に第一歩を踏み出す。

魔術師は焦りながら私たちを殺そうと両腕を構えるけど、遅い！

「灰は灰——ガッ!」

魔術師の手に刺さるのは私のナイフ。

ナイフ投げ選手権があれば一位決定だねこりや。

走る私と上条さんが右手をふりかぶる。

拳はまっすぐステイル・マグヌスの顔面をとらえて、二人の拳で彼を一発でKOした。

マンションから出たあと、私はコンビニにてビショビショのまま止血剤を買って上条さんとインデックスのもとに急いだけど、それも無駄だった。

あと数十分の命しかないインデックスを救う方法は上条さんでも私でも無理で、能力開発をしてない大人しかできないものだった。そして私たちは上条さんの担任の教師である小萌先生のもとへとやってきた。

何度もノックして出てもらった直後に凶々しくも上げてもらった私たち。

幼女みたいな先生だけど、間違いはないみたいだった。

ていうかこんな幼女みたいな先生にまでフラグ建ててんですか上条さん……。

インデックス、いや自動書記ヨハネのペンが上条さんを追い出したので私も同じく外に出ることにした。

いやあ、ほんと上条さんが居てくれて助かったというか……。
はあ、私だけだとダメだなあ。

でもなんとかできるはず。いや、なんとかしたいんだ私は。
私と上条さんがアパートの敷地内から出てブロック塀に寄りかかる。

「ごめんな佐天さん、とんでもないことに巻き込まれてしまった」

「いえ、それは私も同じようなものですよ」

なんとか笑みを作って笑う。ほんと今日は厄日としか言い様がない。

携帯端末を見て時間を確認した。

まだ時刻は夜の8:30か……寒いなあ。

「上条さん、私着替えたいんで一度帰りますね」

「あ、ああ……」

少し驚いた顔をしてる。そうだよね私がここで帰るとは思えなかったんでしょ？

でも悪いけれど私は帰らせてもらおう。真の無能力者には真の無能力者でやることがあるんだから……。

魔術やらなんやらの話を聞いているなんて、私の頭はパンクしてしまふ。ただでさえ能力開発で頭が一杯一杯なんだから勘弁してほしいよねほんと……。

私は軽く上条さんに手を振ると走ってビルに目を向ける。

視線を感じたのはあのビルからのはず、私は全力で走った。

でも走ってる途中で私は異変にすぐ気づく。

「人が消えた……ああ、俗に言う人払いの結界ってやつですか？」
「なぜわかるのです？」

私の前に現れる黒髪ポニーテールの日本刀を持った女性。

「簡単じゃないですか、ライトノベルで良く出てきますよ」

そう言って笑うが相手の女性はわけがわかっていないようだし、まあ魔術結社の人だもんね。

しかも明らかに強い。さすがに私も死ぬ覚悟をしないとダメかな。なあ〜んて思いながらも死ぬ気はない。

レミリア様たちにもらった命を粗末にするなんてこと絶対しない。「上条さんとインデックスには指一本触れさせない！」

私は叫んでから、眼帯をむしるように取る。

ゴムが切れて勢いよく外れた眼帯を放り投げると私は走った。

相手の女の人も刀を持ち構える。

「フッ！」

鞘のついた刀をそのまま振る女性。確かにそのスピードは早いけど、美鈴さんの拳ほどじゃない！

私はしゃがんで避けると女の人の懐に入って拳を打つ。

驚いた様子の女の人だけど、私の拳の方が早——っ!?

私の拳は確かに女性に直撃した、けれど女性はその場で踏ん張っている。

「ぐっ、ただの女子中学生だと思って甘く見ていましたね」

私の右拳、女の人の腹部にめり込む右腕を掴む。

先ほどのステイル・マグヌスと同格に扱ったのは私のとんだ計算ミス。

桁違いなほど接近戦が強い。吹っ飛んだ方が圧倒的にダメージをおさえられるのにそうしないということはそのということと考えて問題ない。

私は右腕を掴まれたまま左腕をその顔面につき出すけれど、首を横に傾げるだけでよけられた。

「神裂火織と申します。貴女のような人がこの学園都市に居たとは……」

レベル0でも戦う私のことを言ってるんだと思うけど、この状況は全然嬉しくない。

神裂の膝が私の腹部に直撃した。吹き飛ぶ私は地面を転がるはめになる。

「がっ、えほっ！」

久しぶりの打撃の感覚に頭がクラクラするけど、打撃ならまだなん

とかなるかもしれない。

希望は持つ。けれど同時に絶望感もある。私はたぶんこの人を倒すことはできないと心の中で思ってしまったから……。

それでも希望だけは捨てない。

どこかに勝機があるかもしれないって信じて……。

「ま、まだまだっ」

ステイル・マグヌスの戦いで消費した体力が未だ回復しきっていないのは確かで、しんどい。

まったくこの痴女は強すぎっ。

私は再び接近して拳を叩き込む。

何度も拳を打っていると、ようやく私の拳が神裂火織の腹や鳩尾にはいつたりする。

初撃にくわえてこれならまだいける！　と思っていたら神裂さんは私から一旦距離を取る

「圧倒的に私が不利だ……」

そう言つて笑うと、神裂火織は相変わらずの無表情で私を見据えるのみ。

「でも私に数度当てるといふのは並ではありませんよ。貴女は強い」
「嘘ばっか、手抜いてるくせに……」

私の言葉に、神裂は静かに目を伏せた。

まったく手を抜かれてもねって感じだよほんと。

「……七閃！」

放たれ他言葉と共に刀がわずかに抜かれる。

その瞬間、地面を削つて何かが私に迫ってきた。

これは目にも見えない斬撃とか、そのたぐい!?

とりあえず迫る未知の攻撃を回避するために私は横に転がって避け、走る。

避けた後は走り続けて神裂へと接近しようとするが銀色の線が見えて私は止まった。

「良い眼をしています。私の七閃を喰らわずに見切れるとは」

なにが七閃よ！　ただのワイヤーじゃんか、って!?

目の前で鞘のついた刀を振る神裂、その刀は私の腹に直撃して私を吹き飛ばして地面を再び転がす。

痛みと勢いで肺に空気を送れなくなる。呼吸の困難になりそうになりながらも私はなんとか息をしようとする。

ならしようながない。私は私がやるべきこと、やらなきゃならないことのために——今を全力で戦う。

「はあっ、上条さんと二人で、っ誓ったんです……あの子を、ぐっ、インデックスを……地獄から引つ張りあげるってねえっ!!」

私は両耳にイヤホンをつけたまま立ち上がる。

そのイヤホンから流れる曲は独特で、なんとも言えず、独創的な雰囲気をかもしだす。

神裂は私を見て怪訝な顔をするけどすればいい。これが私の切り札なんだから……。

お願い。

私の能力、私に……。

「私にみんなを助ける力を！」

叫んでから私は神裂を紅の左目でしっかりと見据えた。

「見える……見えますよ……」

私は笑みを堪えられずにいた。

だって当然、私にはようやく念願の力を手に入れたんだから……副作用がどういふものか知らないけど、重福さんがメールに出なかった時点で薄々感づいてはいるつもりだ。

意識不明か最悪死ぬか、どっちでもいいけど私は今、インデックスと上条さんを助けたい！

幻想御手レベルアップバーによって手に入った力を私は振るう。

「なにが目的で——ッ!?!」

神裂は何かを感じたのか地面を蹴って今居た場所から離れる。

正解だけど、悔しい。一撃で決めることができなかつた。

私の私だけの能力。

仕切りなおして、この視界に映る“ソレ”を私は“掴む”。

「なっ!?!」

驚いたような表情をする神裂だけど、もう遅いよ！

だって貴女は——もう私に壊されるんだから。

私は立ち止まったまま左手を前に出す。

そしてその紅の眼でしっかりと「視覚」してその腕でしっかりと握る」と、私は口元に笑みを浮かべたまま引く。

地面が抉れて、私を引き裂こうとした神裂の『七閃』ことワイヤーはすべて地面にたれる。

「なにを……したのですか？」

見ての通りワイヤーを「引き抜いた」だけだ。

ようやく焦ってくれた。所詮拳一撃でダメージを与えたと言っても神裂にとっては「その程度」にすぎない。

なら「キュツ壊としてドカーンす」しかないよね。

ここからが本番、能力者になっただけの私にどこまでいけるかわからないけど……。

上条さんとインデックスを守る。助ける。

インデックスを地獄の底から引き上げるって言ったんだ。

私は絶対に——私の能力で！

14、幻影殺しへフアントムブレイカー

最初、イヤホンをつけて立ち上がった佐天を見て神裂火織はなにを血迷ったのかと呆れた。

少しだが期待していたと言えば嘘ではない。彼女は佐天涙子という超能力の街でもあまりにも物理的に強い少女に「興味を惹かれた」のだ。

それでも恐怖か何かで血迷ったことをしだした佐天涙子に内心落胆の気を隠せなかった神裂。

ただ涙子の口から発せられた『インデックスを助ける』という言葉だけはまだ気になっていた。少しでも期待してしまう自分がいる。天才と呼ばれるステイルを倒したという上条という少年と目の前の佐天涙子という存在。

だから聞きたくなかった、なぜインデックス禁書目録を助ける気になったのか……。

「なにが目的で——ッ!?!」

瞬間、妙なざわつきを感じてその場から退避すると佐天涙子は口元に笑みを浮かべていた。

その紅の左目は間違いなく自分を狙っている。聖人と呼ばれる自分を僅かにでも警戒させる目の前の人間は、やはり超能力者なのだ実感した。

目の前の少女、涙子は左手を前に出してから、何かを掴む動作を見せる。

妙な違和感を感じれば、張り巡らせていたワイヤーがなにかに掴まれたかのようにひとまとめにされていた。

「なっ!?!」

驚愕する神裂。

左手を引く涙子、同時にひとまとめにして「掴まれている」ような神裂のワイヤーは引かれて、力なく地に垂れる。

これでただ踏まれるだけの糸となったわけだ。

神裂は狼狽している。

「貴女を侮っていたようです」

少しばかり眼を鋭くしてから神裂火織は佐天涙子を睨む。

外側はそこまでダメージを追っているように見えないが内部はかなりダメージを追っている佐天涙子。

神裂火織は勝ちを確信していた。

佐天涙子の自分だけの現実パーソナルリアリティは、幻想郷に行き過ぎたことでだいぶ変わったと言っている。

そもそも能力を持っていないのにそれはあるのか？ 答えは是だ。言うなれば考え方が変わったのだから当然と言って良い。

一度自分の持つ「現実」という世界を砕いて「幻想」というものに触れた今だからこそ能力はこれであるが、もし幻想郷に行っていない彼女が幻想御手レベルアップを使っていたら能力はまた変わっていただろうけれど、所詮はifもしもの話だ。

今彼女がどんな能力を持っているにしろ、やることは変わらないのだから……。

◇◇◇◇◇

私なら勝てるよ、言い聞かせてから再び私は自分の紅い眼で神裂を捉えて左手を向ける。

けれど神裂はそれがわかってか走り出した。さっきまで同じ場所で立っていた彼女がそこまで動くというこは私の能力をずいぶん評価してくれているのだと思う。

フツ、能力を得たらやっぱり気分が変わるよね。レベルはいくつなんだろ、やっぱリーカかな？

でも、インデックスと上条さんを助けられるならそんな小さなことはどうでも良い。

レベルなんてどうでもいいこと！

走り続ける神裂を視覚で捉えて左手を向けると、握る。

瞬間、神裂と私の間にある信号がミシツ、と音を立てて「潰れる」。

失敗ッ！

さすがだ、さっきのステイル・マグヌスを凌ぐ魔術師なのは確かで、今の自分に勝てる可能性は万に一つもないことぐらいわかっている。

それでも、それでも――。

「それでも女にはやんなきゃいけないときがあるのよ！」

能力ばかりに頼っているわけにはいかない。私の紅魔館で得た力も使ってあいつを倒す！

左手を開いた後に私は走り出す。

それに気づいて神裂も同じく私に向けて走り出した。

「潔くて結構です――七閃！」

神裂はそう言うってから刀を抜く振りをしてワイヤーを飛ばすけれど、私は左手を前に出して握る。

ワイヤーが止まってそのまま私が引けばそれですぐに驚異は去ってまだ近づいてくる神裂に向けて私は能力を使わない。前動作が必要な私の能力は神裂に向いていない。

だからこそ、私はジャケットの内ポケットに手を入れてナイフを出す。

いつも投げるものよりも大きめのサバイバルナイフを右手で持ち、左手の人差し指と中指と薬指と小指の間に計3本のポケットナイフを挟む。

「ナイフで戦う相手が初めてというわけではありませんが、変則的ですね！」

そう言うのと神裂は鞘付きの刀を縦に振る。右手のナイフでその振り下ろされた刀を受け流す。

受け止めるよりは理性的で正しい戦い方と咲夜さんは言っていた。『力の無い人間』が力の強い者と戦うためには力技よりもテクニクが求められる。

呆気なく受け流されたことに驚いている神裂、まあナイフで刀を受け流すなんて並じゃできないと思うし、神裂の刀を振るスピードは並じゃなかった。けど――咲夜さんのナイフに比べればまだ遅い。

私は左手を振るう。

神裂は即座に背後に逃げたので致命的なダメージは与えられない

かったけど、その右上腕に三本の切り傷が走った。

「ようやく、ダメージがしつかり通りましたね」

そう言って笑みを浮かべてみる。

紅魔館での咲夜さんの教えを思い出し、いつも余裕を持つということとを大事にしてきた。

それだけでも十分なタクティクスアドバンテージを得れるし、なによりも自分を錯覚させることができる。

目の前の神裂は私の余裕を見て動揺しているようなふしがあった。右手のサバイバルナイフを空中に投げてから、私はジャケットの中に右手を入れてバタフライナイフを出すと軽く振って刃を展開し、それを口にくわえてから落ちてくるサバイバルナイフを持つ。

「……本当に初めてです。貴女のような相手は」

そう言うのと神裂が刀を腰に構えて走り出してくる。

私も同じく走り出すと神裂が横に刀を振るう。跳んで回避してから神裂の背後を取って、右腕のサバイバルナイフを振った。

けれど神裂は鞘付きの刀を軽く振るって背後を向いたまま私のサバイバルナイフを受け止める。

だけど私には左手がある。左腕を振るおうとした瞬間、私は感じた違和感に背後に跳ぶ。

瞬間、私の正面に銀色のワイヤーが走った。

迫ってくるワイヤーを見極めて、当たる寸前で体をひねってなんとか回避して、また神裂に近づく。

意外だったのか驚いた表情をしながらも私に右手首を切られる前に神裂は左手で私の右手首をおさええることで防いだ。今度は左腕を振るうけれど私の攻撃は神裂が右腕に持っていた刀と鞘で防がれた。だけど私の口には、くわえたバタフライナイフがある。

首を振ってくわえたバタフライナイフで首を斬ろうとしたけど軽く回避される。殺すまではしないけど病院にすぐいかなきゃいけないぐらいにはしてやるつもりだった。

なのに——浅かったっ！

「はあっ！」

私が蹴りを出すのが神裂は表情を変えるも特に大ダメージをくらったという感覚はないようだ。

神裂が左手を離れた直後、私はサバイバルナイフを神裂の肩に突き刺そうとしたけれど神裂はそれより早いスピードでその左手で私の腹に掌底を打ち込む。それによって吹き飛んだ私はなんとか両足地面に着地するけれど思った以上のダメージに咳き込みそうになる。

ナイフをくわえている口からポタポタと血が出ているのは、たぶん内臓に傷がついたせい。

先ほどとスピードもパワーも違いすぎる。なにがあつたのかなんて簡単だ。

本当に本気を出した……。

神裂の首から少しばかり血が出ているがもうすでに止まっている。

「貴女は凄まじい、ええ……今まで私が戦ってきた相手とまるで違う」でも私にはわかる。ただ相性がいいだけ、遠距離タイプの相手だったなら私は呆気なく死んでいた。

ステイル・マグヌスより神裂が強いのはわかるけれど、たぶん神裂の方が戦い易い。ステイル・マグヌスだったら私は一瞬で消し炭にされてるだろうと思うしね。

それでも今回は負けるわけにはいかない。上条さんと神裂では相性が悪すぎる。

「だからこそこの名を、名乗ることはないと思っていた名を名乗りましょう……」

腰に刀をつけると、居合の構えを取る。

「Saiveree000!!」

凜と放たれたその言葉と共に刀を抜いて神裂は走り出す。

私は私で走り出す。振るわれる刀を右手のナイフで受け流したけど、なんだか異常に重い。

口にくわえたナイフを使って神裂の首を狙うが受け流した刀を流れるような動きで私の足を狙う神崎、軽く飛んでから空中で横回転。

サバイバルナイフと三本のナイフでの回転攻撃だったけれど、それらを回避してしまう神裂。

「ふっ！」

着地した瞬間、私は神裂の蹴りを食らって少し動きが鈍る。

これが命取りだったのだと思う。神裂は刀を一度鞘に収めると――
引き抜いた。

一瞬の抜刀。

私の口から落ちるナイフ、両手のナイフも落としてしまう。

「っ……」

「聖人たる私に “唯閃” まで使わせた。それは誇ってもいいことです」

私の腹部から血が一度吹き出る。

口からも血が溢れ、力が出ずに両膝を地面についてしまう。

まだっ、こんなところで終わるわけにはいかない！ いかないんだ！
私は、インデックスと上条さんをつ！ せっかく、能力者になったのにこんなことでえっ！

血がぼたぼたとお腹から落ちていく、視界がかすむ。

それでも目の前の神裂に向けて私は左手を向ける。驚いたような顔をする神裂。

私は手を握り締める。

瞬間、神裂がしゃがんだ。手は神裂も魔術師もない場所と掴んで、そのまま私は――。

◆◆◆◆◆

佐天涙子が気絶したのを確認してから立ち上がる神裂火織は怪訝な顔をした。

まさか一般人に唯閃を使わされるとも思わなかったが、それよりも佐天涙子はやけに能力を使うタイミングを押さえられてなかったのを疑問に思う。

格闘、ナイフでの戦いは凄まじいものだったが、能力の使い方をいまいちわかっていないようにも思える。

しかし、それ確かならばとんでもないことだ。

火織が振り返れば、そこには崩れた3階ほどあるビルが見えた。

「あれを自分にされたらと思うだけで……ぞつとしますね」

目の前の血を流しながら倒れてる佐天涙子を見ながら、彼女はため息をつく。

自分も怪我をしているけれど、目の前の少女を放って帰るといのは寝覚めが悪いのだ。

神裂火織は基本的に困っている人をほうっておけないタイプで、それはどこか上条当麻と似ていると言って良いだろう。

彼女は佐天涙子を背負って歩き出した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

次に眼を覚ましたとき、私の視界には天井が映った。

「病……院？」

体を起こすけどあの大量の血が出ていた場所から感じる痛みは僅かで、なんでだろう？

傷は深かった気もするが、誰が病院に運んでくれたのだろうと疑問を浮かべるがそれも気絶していたのでわからない。

どうしようかと考えながら、私は周囲を見回す。

「どうやら起きたみたいだね」

そう言っに入ってきたのは……。

「リアルゲコ太」

「ん？」

「いえいえなんでも」

カエル顔のお医者さんだった。

「昨日の夜中、黒髪の女性が君を運んできてね、なにがあったのかまでは知らないの一点張りだったけど」

神裂が私を運んだってこと、なのかな？

なんで魔術結社の人間が私にそこまでしたのか、殺すのは面倒になるからとか？

でもステイル・マグヌスを見てた限り殺すのに躊躇はないはず。

じやあなんで私を助けたのか？

わけがわからないけど、インデックスの10万3000冊の本を狙う組織の一員なんだからロクな人間じゃないと思う。でもあの人は私を病院に……。

とりあえず横にある時計を見て、今が昼過ぎだということを確認すると妙にお腹がすいてきた。

「……すみません、食堂とかありますか？ あと廃棄するものとか」「まあ食堂の方は下にあるね、廃棄するものというよりいらぬものならついさつき出なくなったボールペンがここにあるけど、どうするのかな？」

じやあ大丈夫だよな？

私は医者からそのボールペンを受け取ってから、軽く投げて先にある棚の上に置く。コントロールは完璧だしいつも通り、ただここからが私なりの実験だ。

左手を前に出して、眼でしっかりとそのボールペンを見据える。私の眼がしっかりとそのボールペンを狙うと、感覚だけでそれを「掴める」ことがわかった。

左手をゆっくり握りしめてから、手を持ち上げてもボールペンが持ち上がることはない、ただ感覚だけがある。掴んでいる感覚だけが……。

だから私はそのボールペンをベッドの上から上体を起こしたまま握りつぶした。

「っ!？」

カエル顔のお医者さんは驚いたような顔をしてるけど、私の方がぶっちゃけ驚いている。

能力を得たというのは気のせいじゃなかった。つまりは幻想御手を手に入れたという現実は確かにあると言えるわけで……私は自分の左手を握り締める。

遠くのを握りつぶす、これは？

「それが君の能力かい？ 念動系と見て……良いのかはわからないけれど空力系でもないのは確か、やはり念動力かな？ うくん、さつぱ

りわからない」

そう言うと、彼は何かを思い出したかのように手をポンと叩いた。
なに？　と思つて見ていると人差し指を立てて言う。

「起きたら退院しても平気だよ」

え、そういうの大丈夫なの？

様子見とかで数日間入院が続いたりするもんじゃないの？

でもまあ、その方が都合が良いんだけど、食堂とか行かないですむし、自宅で御飯食べれるし……。

とりあえずと一言で私は患者服のまま病室から出て携帯端末にて電話をかける。

発信先は白井さんだ。もちろん理由は空間移動テレポルトで服を運んでもらうため、説明をするのが余儀なくされるけど致し方ないよね。

なあんて考えてたら電話が繋がる。

『もしもし、佐天さん私あまり電話ができるような場所ではないのですけれど？』

「ああ私もです。それよりもお願いがあつて」

「ちなみにお願いを聞けるような状態でもありませんのよ、佐天さん？」

「えゝそんなあ、白井さんの空間移動テレポルトでちやちやつと！」

「あら佐天さん、なら色々と聞かせてもらえるんですの？」

さつきから電話から声が聞こえてくると同じに二重に反対側の耳からも声が聞こえてくる。

私の能力の一部!？」

なあゝんてそんなわけないよねえ。と思ひながら声のした方向を見ればそこにはおなじみのツイントール。

風紀委員ジャッジメントの腕章をつけた白井さんがそこに立っていた。

ふうゝやれやれ。

「なんですのその表情は？」

白井さんはジト、とした目で私を見てくるけど気にしないことにする。

「どうせ呼ぶのなら一緒ですわよね？」

まあ確かにそのとおり、だけど得が待っているのと待っていないのではわけが違うつてわけだよ。

最近白井さんとの絡みが妙に多いのは気のせいじゃないと思う。大概固法先輩のせいな気がしないでもないけど……。

白井さんは私の腕をギュッと掴んでいる。

逃がさない……というわけだ。

「わかったよ、話す話すよ話しますー！」

三段活用で言うよ、白井さんは頷く。

ところでなんで白井さんもここにいるんだろう？

まあとりあえず解放してもらうために話ながらも、初春に服を持ってきてもらうためにメールを打った。

腹がバツサリな服なんて着たくないもんねえ。

とりあえず白井さんには私は昔から武闘派だということをお伝えした上で、固法先輩と一緒に不良たちをボコボコにしたことなどだ。

結局この怪我はスキルアウトと戦ってボコボコにされたということにしたわけだけど。

確実に信じてない。咲夜さんにも身内に嘘をつくのが下手って言われた覚えがないでもない。

「まあ、とりあえず今はこれで許してさしあげますわ」

意外、と思っているとベンチにて隣りで座っている白井さんがため息をついた。

「いつかはしっかりと話してくださいませね？」

初めてというのは失礼だけど、まだ出会って一週間も経ってないのに妙な親近感というか友情を感じてしまった。

白井さんが御坂さんにあそこまでして、御坂さんが白井さんを信頼している理由がなんとなくわかる。

それに初春だって白井さんの親友で相棒だもんね。

「白井さん、見直しましたよ」

そう言うよ、白井さんは照れくさそうにして『とうぜんですよ！』という立ち上がった。

どうやら怪我の検査結果が出たようだ。振り返った白井さんに軽く手を振って私は自分の病室へと帰る。

戻ればそこには昨日ぶりの頭がお花畑な初春。相変わらず咲き誇ってるねえ。

「佐天さん、どうして怪我なんてしたんですか！」

そんなに怒られてもと思うけど、今回ばかりは私の全責任つてもんだよね。

「ごめんなさい」

「なにかまた危ない道を通ったりしたんでしようけど、佐天さんは自分が絡まれやすいってことを自覚するべきです！」

なんだか胸が痛い。またって、またって初春……。

だけれどすぐ危ない道を通ろうとする私が絡まれる確率は普通じゃないということとはわかってる。

今でこそ自分の身は自分で守れるけど少し前までだったら危なかったと思う。

それでも今回ばかりは引くわけにはいかない戦いだっただ。

「ほんと心配かけてごめん、あと荷物ありがとね」

「……幻想御手事件について調べなきゃいけないことで一杯なんで、私これで帰りますけど、今度しつかり事情は聞かせてもらいますよ！」

夏休みがはじまったばかりなのに、面倒な予定がどんどん増えてく
なあ。

まあ事情を聞くなんて言いながらも遊ぶだけになるんだろうけどね。

初春は心配そうに私を見ているので、私は軽く手を振って答えた。

少しだけ笑ってから、初春は手を振って答えてくれると病室を出て行く。

「はあ……」

罪悪感に押しつぶされそうになる。

私は自分が親友と称した初春に誰よりも嘘をついていた。

色々知っていて気軽に話せる初春だからこそ、初春にはつくべき嘘

が多すぎる。

ほんとに疲れるけど、仕方がない。

私は着替えを済ますと色々と済ませて病院を出ることにした。

目的はインデックスで、夏休みに突入した今日からなら一日中上条さんやインデックスといられる。

私は初春の持ってきてくれた服で、カエル顔のお医者さんに『物騒なもの持ってるね』と言われ返されたジャケットとその中身をしっかりとその上から着て走った。

私は目的地こと上条さんの担任の先生である小萌先生の家に向かう。

眼帯も付けずに走って、時間短縮のために路地裏を駆け抜けようとしたけれど、やはり私は不良たちに道を塞がれた。

不幸だ！

「へへへっ、こっから先は通行料を払ってもらわないとなあ、わかるだろ？」

男の一人が能力で廃車を持ち上げた。

その「程度」なら私の能力でもなんとかなるってものだ。

私は左手を廃車に向けて——握りつぶした。

段々と慣れてきた。ただ昨日の神裂との戦いでもっと自身の能力に慣れていればと思わされたりもする。

とりあえず上条さんとインデックスの身が心配で、私は道を駆け出しました。

七月二十一日、私は不思議な能力を手に入れた。

15、木山春生へせんせい

真つ赤な廊下を歩きながら、私は何をするんだったかと思いつく。することはいくつかあったはずだけどどうにも思いつかないので、私は一体なにをすれば良かったのか……。

確か、なんだったっけ？

「涙子……」

声が聞こえて振り向けば、そこには咲夜さんがいた。

私は手にトレイを持っていて、その上に三つのティーカップがあるので思いつく。

そうだ、レミリア様と美鈴さんとパチュリーさんがお茶をしてる時にチルノと大ちゃんとルーミアが来たんだった。

咲夜さんの手にはトレイとティーポット。

私と咲夜さんはテラスへと歩き出す。

「なんだかボオつとしてたけど平気なの？ 最近頑張りすぎだし休んだほうが良いんじゃない？」

「平気ですよ。これでも元気なだけ取り柄なので！」

そうやって胸を張ると、咲夜さんから若干殺気を感じるのはいだど信じたい。

なんで怒ってるんだろ前にお風呂一緒に入ってた時もなんか気を抜けないような殺気出してたし……。

まあいつか！

「お待たせしました！」

テラスについて私はチルノと大ちゃんとルーミアの前にティーカップを置く。

その中に紅茶を注いでいく咲夜さん。結構大きめのテーブルを囲うレミリア様と美鈴さんとパチュリーさんとチルノと大ちゃんとルーミア。

フランはまだ、寝てるのかな？

紅茶を一口飲んで、チルノが笑みを浮かべる。

「アールグレイね」

「キツシムよ」

見事に間違えるチルノだけれど、まあ相変わらずの澄ました顔で笑った。

椅子に座ってなければスカートめくれたのに、とか私は思ってみた。

ルーミアはため息を吐いて大ちゃんは苦笑。

パチユリーさんの背後に立っている小悪魔さんもクスクス笑っている。

「るいこ〜！」

背後からの声に誰かなんて簡単にわかること。

振り向けば金髪を揺らしているフランがいて私はそんなフランの頭を軽く撫でる。

テーブルの方を向けばいつのまにやら椅子と飲み物が用意してあり、さすが咲夜さんと圧巻のメイド力を見せられたことに私は戦慄した。

メイドとして咲夜さんを超えるぐらいを目指してる私としてはまず時間停止を覚えるあたりから覚えたい。

無理だね、うん！

「さて、今日も元気に——」

修行でもと言おうとした瞬間、そこには上条さんとインデックスが立っていた。

血まみれのインデックスがその場で立っている。

周囲を見回しても誰もいない。

違う、御坂さんが居た。

「なんの努力もせずレベルを上げて、そんな力を得て満足？」

違うんです。これはっ、でもこの力さえあればインデックスを救えて！

「誰も救えてねえじゃねえか」

上条さんっ！ 違う、これは！

「違うわけじゃないよね、結局涙子は何もできてないんだよ？」
インデックス、貴女を助けよう！

でも、結果的には何もできなかった。神裂に勝てなかった時点で私
がいてもいなくても対した意味はない。

それでも私は誰かのためにつ！

「ああああっ!?!」

私は勢い任せに上体を起こす。

つまり、寝ていたということだ。全て夢、安心して——いや、安
心というのは少し違うのかな？

とりあえず横を見ればそこには見慣れた顔があった。

いや、見慣れたというには早すぎる気がするけど、なんだか最近や
けに見ている顔だ。

「木山、先生……」

「ああ、良かった」

そう言うと、木山先生が立ち上がる。

ここはたぶんだけれど木山先生の研究所とかそんな感じだと思う。

私はソファに寝っていて、服装は入院患者の着る服。またこの服かと
思いながらも、なにがあったか思い出す。

そうだ、私は上条さんに神裂のことを知らせるために小萌先生の家
に向かって……あれ、上条さんと会ったあとどうしたんだっけ？

「君は倒れていたんだ。レベルアップの副作用で……」

え？ 大事なことも伝えられるずにな!?

「私が寝てからっ、な、何時間ですか!?!」

起き上がって私が聞くと、苦々しい顔をする木山先生。

どうしたの？

「三日、今日は七月二十四日の昼過ぎだよ」

そんなつ、上条さんやインデックスが危険だっていうのに私は呑気
に三日も寝てたつての!?!

ふざけんな! 私は何にやってたのさ!

幻想御手の副作用がこれだってなら私はなんてことを、どっちにし
る負けるなら使わなきゃ良かった!

クソツ!

「すまない……」

「なんで謝るんです?」

私は心の中にある苛立ちと焦りをひとまずしまつて聞いてみる。

「私が作った幻想御手の副作用のせいで君に……」

何を、言ってるんですか……?

待つて、勘弁してください。もうインデックスや上条さんや魔術のことで頭が一杯一杯なのにこれ以上問題を起こさないでください! わかってる、なんでもかんでも首を突っ込む私が悪いのはわかっているけど、聞いたらなにもせずにはいられないんですから、やめてください。

なのに、なのに――。

「詳しく聞かせてもらえますか?」

私は聞いてしまった。

「……君が倒れたと知ったのは昨日の夜だった。二十一日の昼過ぎに君は男子高校生に担ぎ込まれたらしい、原因不明の意識不明により幻想御手の副作用だと断定されて、それからをれを知った私は一時間ほど前、病院で寝ていた君を連れ出し家に連れてきてワクチンを聴かせて”今にいたる”

なんとなく理解できた。私は神裂のことを話す直前でその幻想御手の副作用で意識不明。

上条さんにわざわざ迷惑をかけた挙句それから呑気に寝てて、私が知り合いだからか木山先生は私を起こすためにここに連れてきたと……つまり助けられるけれど助けたのは私だけ。

ほかのみんなには悪いし、正義の味方っぽくもないけれどありがたいと思ってしまう。

それで充分だ。私は一刻も早く上条さんたちを……。

「私はたぶんだが、今日中にアンチスキルに追われることになる」

突然の告白に、私はついていけなかった。

「なんでですか?」

「事情を話しながらにしよう、私の車が下にある」

今すぐインデックスのもとへと走り出したいけれど、こんな”さみ

しそう”な木山先生を放って行けるほど私も薄情じゃない。

心の中でアドリア海よりも深いため息をつけて私は木山先生のあとをついていくことにした。

詳しくは話してはくれなかったけど、これ以外にその”目的”を達成する方法は無く、全てが終わった暁にはみんなを元に戻して自首するつもりだったらしい。

でも私は木山先生を責めることなどしない……その恩恵を得た一人である私は彼女を責める権利も無ければ、責める理由もないからだ。

三日寝ていたのだから本来”得ることのできない”能力を得るということをできた副作用。三日寝るに値する経験は出来たと思う。まあやっぱり三日は大きい気もするけど……。

「感謝もしていますよ」

マンシヨンのエレベーターから降りて私がそう言うと木山先生は『えっ?』と少し驚く。

私でも驚いてる。幻想御手のせいで三日寝てしまったのだ、私ならば身勝手に木山先生を怒ることぐらいしただろうに、でも私はしていない。なんだか上条さんとインデックスは大丈夫という気がしているから。

根拠のないことだっただけでわかってても私は二人が無事な気がするんだ。

木山先生がカバンを渡してくる。部屋を出るときから持っていたカバンだけど、なに?

「その中には君の服と携帯端末、財布が入っている」

え、そういうのは早く言ってくださいよ!

眼帯をつける私。

「時間がなくてね、悪いとは思わなければ車の中で着替えてもらえるかな? 後部座席なら外から見えない……あとジャケットの中身のこととは触れないでおくよ」

なら良いんですけど、とりあえずこれで確認も取れるし……って!

木山先生の車と思われる車の助手席には、初春が座っていた。私と同じように、初春も私を見て驚いている様子だ。どういうこと？

木山先生の車は現在道路を走っている。私は後部座席で着替え終えてから初春にことと次第を聞いた。

どうやらことの実実に気づいて、拉致られたらしい。さすが察しがいいねえ。

私は親友の優秀さに鼻が高くなるけど、こうなってる時点で少し抜けてるんじゃないかと思う。

まあ状況的に仕方なかったのかもね。

そして木山先生の話が次に始まった。

「ツリーダイアグラム設計者の演算データと同等クラスのものが必要で、そのために一人の人間の頭を使って……」

でもそれが終わればみんな解放されるとなると、別に良いんじゃないかと思うんだけどねえ。

いや、ダメなんだろうけど「私たち」は結局良い目を見せてもらっただんだしね。

「アケミさんたちも意識不明になったんです」

それは予想外、でもどこで手に入れたのか知らないけどアケミたちだってすぐ起きるわけだから、大丈夫だとは思う。

それにアケミたちがそれで相当なショックを受ける性格でもないのは知ってる。

それより夏休みが減る方が私にとってもアケミたちにとっても痛いだろう。

木山先生は初春に、先ほど私に聞かせた幻想御手をアンインストールするプログラムを渡す。

「……そういえばー」

初春が突然大きな声を出すもんだから、木山先生と私はビクツ、と驚いてしまう。

運転中の木山先生が心配だけど、大丈夫なようになにより。

「佐天さんはなんであの日怪我してたんですか！ 幻想御手を使ったこともなんでか聞きたいです。副作用はあるって知ってたはずですけど？」

「ああ、どうしても必要だったんだよ。まあ意味は無かったけど」

そう、意味もなく幻想御手を使って、なんの成果も出せず能力を無くした。

まったく、私はどこまで空回りするんだろうってぐらい空回りしている。

それでも何もせずにはられないあたり、私ってタチ悪いんだろうなあ。

「そう言えば木山先生はなんで私だけ助けたんです？」

ふと聞いてみた。

「あ、いや……それは……」

「佐天さん、それ本気で聞いてんですか？」

木山先生は言葉を濁して、初春もなんか凄い目で私のこと見てくるし……なんで？

ていうか最近初春が冷たい。

ああ、とりあえず怪我のこと話さないかね。どうやって説明しようか。

「怪我の方なんだけど——」

話そうとした直後、急ブレーキにより前に飛び出しそうになる私。

なんとか耐えて前を見ると、そちらには大勢のアンチスキルの人たちが立っていた。

木山先生はアンチスキルに皮肉を言うと、前のめりになっていきさつを見る。

私と初春も同じく、下手に手を出せない状況だ。まあ初春は文字通り手を出せないんだけど……。

初春と木山先生が小難しい会話を話してから、私を見る木山先生。

「面白いものを見せてやろう」

笑みを浮かべてから、車を出る木山先生。

見ていると突然、アンチスキルがアンチスキルを撃った。焦っている

るようなそのアンチスキル。

——まさか能力!?

木山先生が手を突き出すと、風がうずまき爆発が起きた。

いや、多重能力デュアルスキルとでも？ でもそれは脳の負担が大きすぎて無理だつて……じゃああれが幻想御手レベルアップのもう一つの力、と？

一瞬で全滅するアンチスキル。車の方も激しく揺れて、初春は気絶してしまう。

私は車を出てその影に隠れた。それも全部御坂さんが現れたから……今会うのはさすがにね。

見ていると、御坂さんと木山先生の戦いが始まった。

片目が赤くなっている木山先生を見て私は笑ってしまう。たぶんこれが普段なら木山先生は『おそろいだね』とでも言うんだろう。

くそつ、能力者同士の戦いとか勘弁してよつ。私じやなにもできないじゃん。

高速道路の一部が崩壊して下へと落ちていく御坂さんと木山先生。私も近くの非常用階段を使つて下に降りる。

見ていれば御坂さんはどこぞの蜘蛛男のように壁に張り付いていた。

「電撃を防いだけで、いい気にならないですよ！」

そう、良く見る能力である電撃エレクトロマスター使いのレベル5はただ電撃が強いというだけではない。

その本質はその電撃の使い方にある。つてネットには書いてあった。

コンクリートの一部をくりぬいて、それを木山先生に投げる御坂さんだったけれど木山先生はビームサーベル的なものを出してそれを切り裂く。

さすが、これが多才マルチスキル能力か……。

御坂さんを圧倒するその力、これがあれば魔術師にも……。

「もうやめにしないか、私はある事柄について調べたいだけなんだ。それが終われば全員解放する、誰も犠牲にはしない」

「ふざけんじゃないわよ！ 誰も犠牲にしない？ あれだけの人間を

巻き込んでおいて、人の心を弄んでおいて、そんなもの、見過ごせるわけないでしょうが!？」

御坂さん、その気持ちは確かに嬉しいですけど的外れです。能力の成長が伸びないでいた人たちのことはわからないけど、私のような無能力者はただ能力が得れただけで充分嬉しかった。

別に弄ばれた気もしない。ただ、能力が無くなったのは痛いけど。次に木山先生は脳開発についての疑問を綴っていく。確かに感じないわけではない、幻想郷に行ってから余計に感じている。

頭の中を弄るといふ行為。

再び始まる戦闘だけれど、結局木山先生の優勢は変わらない。お互い殺さないように戦っているのはわかるけど。

空き缶を爆発させる木山先生。大きな爆発と共に視界は塞がれた。物陰で隠れて見ている私に二人とも気づいていないのはお互いが戦っているからだろう。

私の方の視界が晴れた時、すでに御坂さんは木山先生の腰に抱きつくような形をとっていた。

「零距离からの電撃、あの馬鹿には聞かなかったけど、まさかあんなとんでもない能力は持ってないわよね!」

御坂さんの電撃を零距离から防ぐなんてどこの馬鹿だとは思いうけど。

でも木山先生の目を見ていればわかる。隠そうとしてるけど感でわかった。今の木山先生を止めさせるわけにはいかない。

だからこそ私は飛び出していった。

私が走り出すのは早かった。木山先生が御坂さんを引き離すより早く、御坂さんの電撃が木山先生を襲った。でもそれより私が御坂さんと木山先生を引き離そうと二人に触れる方が早かった。

一瞬の差。それに反応できなかった御坂さんの電撃は私と木山先生の体に激しい電撃を浴びせる。

「っ——あああああっああっ!?!」

私と木山先生が痛みに声を上げた。

驚いた様子の御坂さんがすぐに反応できずに、電撃を止めた時はす

でに木山先生はダウン。くたつ、と体から力が無くなる木山先生を御坂さんと共に支える。

すると突如、頭の中に声が聞こえた。

これはっ——電気によって木山先生の記憶がリンクした!?

流れ込んでくる記憶たち。

木山先生の——先生の記憶、すべてを理解した私と御坂さん。

そして御坂さんは木山先生を離した。私はすぐに木山先生を抱きとめてからそつと地面に寝かせる。

御坂さんの方を見れば、私を気にする余裕が無いぐらい動揺しているように見えた。

起き上がった木山先生が頭を押さえながら見られたことに驚いていた。

御坂さんと木山先生が実験の内容に話を始める。

私は頭の中で幻想郷で言われたことを思い出す。

学園都市のおかしさやバカバカしさ。23回というツリーダイアグラム樹計図の設計者申請の許可の却下回数から学園都市がわざわざしくんでいたことだということ。

統括理事会がグルで、味方一人いない状況の木山先生。

たった一人で敵ばかりの街で……。

「だからってこんなやりかた!」

「君に何がわかる!!」

確かにそうだ。これ以外のやりかたなんてない、木山先生から感じていた雰囲気の原因はこれだった。

必死な木山先生から感じた殺気のようなものなんだろうと思う。

記憶で見た「あの子」たちをただ太陽の元走らせてあげたい。そんな小さくて大きな願い。

「あの子達を救うためなら、私はなんだつてする! この街の全てを敵に回しても、やめるわけにはいかないんだあつ!!」

叫ぶ木山先生にかけよって、私はそつと木山先生の頭を自分の肩に乗せる。

そのまま木山先生の背中に手を回して私は無意識のうちに木山先

生のことを抱きしめていた。安心させるようにその背中をさすって、私は言う。

「私が、私が味方です。だから大丈夫です……木山先生は一人なにかじゃない」

私は体を離してから木山先生の顔に両手を当てる。

そつとその両頬を触ってからその頬に伝う涙を拭う。

大丈夫、絶対にそんな統括理事会の自由にはさせない。絶対に救う方法があるはず。

そう目で訴えかけてみる。

「さ、佐天く——つ……がああああっ！」

突如叫ぶと、私を突き飛ばす木山先生。

背後で御坂さんが受け止めてくれる。あの時の話とかは、今するべき状態じゃないのは確かだ。

話した後で、今は木山先生がなんで叫んでいるか、なんで苦しそうか……。

私たちが木山先生を見ていると『ネットワークの暴走』という言葉を言ってから倒れる。

「なにがっ」

木山先生の背中から、突如白いなにかがとびだした。

それは水々しい音を立てながら空中に浮かび上がると、一つの姿を産みだす。

気持ちが悪く不気味なそれを、私と御坂さんは見ている。

御坂さんはそんな化物が現れるなんて信じられないという表情だ。

「胎児……っ？」

正しくその姿は胎児と言える。

天使のような輪を頭の上につけたその姿とは見合わない恐ろしい容姿に、私は後ずさる。

瞬間、その眼が開かれた。

紅の目玉がギョロリと動くと、双眸は私と御坂さんを見る。

「ヒッ——」

御坂さんの小さな悲鳴。

目の前の化物はそれとともに、大きな鳴き声を上げた。
私たちは今から、この化物を相手にするのだ。
ハハっ……不幸だ。

16、幻想猛獣へAIMバースト

眼前で空を飛んでいるのは化物。

私が今まで見てきた異質な、幻想的な者たちよりもよほど幻想的というかなんというか、妖怪らしい妖怪、怪物らしい怪物だ。

胎児——御坂さんは横で『メタモルフォーゼ肉体変化』と言っているけれど、たぶん違う。

だけどこれはなんだって言うんだらう？

レベルアップ幻想御手の暴走って言ってたけどどういう原理で……。

「——!!」

もう一度叫び声を上げる化物、それとともに衝撃波が辺り一帯へと広がり、御坂さんは電撃で私と自分の前にコンクリートの障壁をつくる。

「助かりました!」

そう言ったは良いけれどやはりその衝撃波に壁は破壊される。

破片が飛び砂埃が舞う中、御坂さんが片手を振って電撃で胎児に攻撃した。

意外にもその攻撃は直撃して、私と御坂さんは一緒になって素っ頓狂な声を上げてしまう。

「これは意外ですね」

「ほんと……あれ?」

胎児の背中が砕けて、肉が見えているがその部分の肉が蠢きだして傷を塞ぎ新しい腕が現れた。

気持ち悪さならトップクラス、正直吐き気すら催しそうなその姿。

そして鼓動のような音がして、その化物が一回り大きくなった。

「巨大化した!?!」

私が叫んだ瞬間、化物が私たちに視線を向ける。

嫌な予感がして私は身構える。次の瞬間、化物の周囲に氷の塊が出るし、それは私たちへと飛来した。

能力、チルノを思い出すけれど関係ない。そしてついにつけくわえるなら、氷弾なんて私は避け慣れてる!

身を翻してから、私は御坂さんと共に走る。

御坂さんも運動神経は良いようで、私ほどではないにしろスムーズに避けて化物から反対方向に走った。

「御坂さん、佐天さん！」

初春の声が聞こえてそちらを見れば、やはり初春。

そんな初春を心配してか御坂さんは振り向くと氷弾をすべて電撃で蒸発させた。

水蒸気爆発のようなものが起きてあたりに衝撃がいくけれど三人とも無事だ。

「初春さん大丈夫!? 佐天さんも」

御坂さんは私の方を見て頷くと初春の方を見る。

「はい！ あ、あの——」

「ダメじゃないこんなところに来ちゃ！ ていうか佐天さんもよ！」

まあそう言われるよね、心配してくれているようで少しだけ嬉しくなったり。

でも私は自分に関わり合いのある人が苦しんでいるのを無視して逃げるなんてできる人間じゃない。

面倒だとは思うけど、それでフランだって助けられたんだから。

「でもー」

「良くわからないけどそこから出ないで！ 佐天さんもあっちへ！」

御坂さんは化物の方に体を向けて電撃を腕に奔らせた。

「やるってんなら相手に——追ってこない？」

確かにそのとおりだった。

化物はただ腕をどこかに向けて叫び声を上げるのみ。

初春がつぶやいた。私もそう思う『何かに苦しんでるみたい』だど……あれが幻想御手の暴走だとしたら、あれは幻想御手使用者と関係がある？

たった一人ワクチンで助かった私も無関係じゃない。

だからこそ、目を離せなかった。

さらに化物は大きくなると、さらにその体からは触手が伸びる。

アンチスキルがあつた化物を引きつけている隙に、私は御坂さんと初

春と共に木山先生のもとへと走った。

「……もうおしまいだな」

アスファルトの柱に寄りかかりながらそうつぶやいた木山先生。

「諦めないでください！」

そして私たちは木山先生にあの化物の正体を聞くこととなった。

約1万人のAIM拡散力場にて発生した生物。本来AIM拡散力場というものは簡単に凝縮されるようなものではない。けれど幻想御手^{レベルアップ}にて束ねられたことによりネットワークが暴走し、思念の塊として生み出されることとなったらしい。

木山先生はあれをAIMバーストと名付けた。

マイナスと負の感情の塊、もれなく私はあの中に取り込まれるはずだった人間。

「私が何を言っても君たちは信じ——」

「何度も言わせないでください木山先生、私は貴女の味方です」

そう言うと、少し驚いた様子の木山先生。

少し顔が紅い気もするけど気のせいだと思う。

「それに子供達を助けるのに木山先生が嘘を言うはずがありません」

私に続いて初春も言った。

「先生のこと信じてますから」

とどめ、というわけじゃないけど迷っている木山先生の後押しとして私はそう言った。

すると木山先生は笑って、話を始めた。

AIMバーストは幻想御手^{レベルアップ}のネットワークが生み出した怪物、だからネットワークそのものを破壊すれば止まるかもしれない。絶対とは言いきれないけれど、だからこそ治療プログラムを持っている初春に——任せることにした。

私？ 私はもちろん……。

「い、いやー……ないでー！」

アンチスキルの眼鏡さんが馬鹿みたいに目をつむって銃を撃つ。

それによりAIMバーストの触手が切れるけれど、やはり再生した。

しかも弾切れって！

「さっさと動いてよ！」

私は悪態をついてからその触手をジャケットの中から出したサバ
イバルナイフで切る。

再生する前に私は眼鏡のアンチスキルを蹴って触手から離させると後ろに下がっておく。

御坂さんも登ってきて私の隣りに立つ。

「佐天さん貴女っ！ 後で事情聞かせてよっ!？」

「はいはい、了解です」

軽く言うと、御坂さんは腑に落ちなさそうな表情をした。

眼鏡の女の人は私たちを見る。

「い、一般人がこんなところでなにしてるの!？」

そんな言葉に御坂さんは嫌だったのか文句を言うけれど、眼鏡の女
の人が御坂さんに言葉をかける。

呑気な二人を見て私は笑いそうになるけれどすぐに悪寒がして正
面を見ると触手が近づいてきていた。

すぐにナイフを投げると触手の先の目玉に直撃、触手は離れたA I
Mバーストの元へと戻る。

あゝびっくりした。

「逃げるのはそっち！ あいつはこっちが攻撃しないとよってこない
んだから！」

「それでも……」

別の声が聞こえてそっちを見る。

あつ、いつものアンチスキルの人。

「ああ、またあんたかい、事件に巻き込まれる体質じゃん」
余計なお世話です。

「それよりも、こっちも撤退するわけにはいかないじゃん？」
苦しそうにしながら指を指すアンチスキルの女の人。

あれは、なに？

「原子力実験炉じゃん？」

洒落になんないよそんなの！ ああもう、好きじゃないんだけど

しようがないかあ。

私は急いで辺りを見回す。砕けた高速道路の向こうで階段を登っている初春を見て一悶着あるみたいだけどそちらに構っている暇はない。

御坂さんが説明してくれてるし問題ないと……思う。

アンチスキルに事情を説明している御坂さんを一目見てから、私は気づかれないように走り出す。

どうせ電気を使って私より早くAIMバーストの方に行けるんだから問題はないでしょ！

私は更地を走ってAIMバーストの背中をしつかりと捉えて——トリガーを引く。

それと共に慣れていない反動リコイルに私は舌打ちをする。

私が両手に持っているのはアンチスキルのマシンガン……ちよつと拝借してきちゃったじゃん？

なあんて、私が両手のマシンガンを撃つ度に大きくなっていくAIMバーストだけれど、こうでもしなきゃ立ち止まらせることもできない。

そしてAIMバーストが触手を伸ばそうとした瞬間、黒い刃がAIMバーストを切り裂いた。

咆哮、そして私の隣に降り立つレベル5第三位。

「大丈夫!？」

「余裕でしたよ」

私は近づいてくる触手を撃ち落とす。同じく御坂さんは砂鉄の刃で触手を切り裂いた。

だが触手での攻撃が止まると同時に、黄色の光弾が私と御坂さんに放たれる。二人して別方向へと避けたけれど、あれ何の能力の応用？

そして同じ能力なんだろう、拡散するように放たれたその光弾の一発が初春の方へと跳んだ。

「初春ッー」

反射的に名前を叫ぶけれどその声が届くこともない。

私は光弾を避けながら初春の方を見るけれど、無事なようだ。

さすが風紀委員だね。つてまた!?

再び初春の方へと行く流れ弾、そちらを見れば初春はアンチスキルの二人が守っていた。

「佐天さん!」

「やばっ!」

よそ見していた私は触手に捕まり空に持ち上げられる。

——なんて力つ、息がつ!

しかも、AIMバーストはその頭上に光弾を撃つ準備を始めていた、けれど瞬間、その頭に雷が直撃し同時に私の触手も切り裂かれる。地上に着地して激しく咳をしてから、御坂さんの方を見る。

「みつともなく叫んでないで、私の方を見なさいよ!」

盛大に啖呵を着る御坂さん。それをわかってかわからないでか、触手を伸ばすAIMバースト。

けれど御坂さんはそこら中の砂鉄にて巨大な剣を作って、触手を切り裂き同時に光弾を防ぐ。

これがレベル5の本気……。

けれどAIMバーストの再生能力はその上に行く。

「たく、なんで原子力発電所なんかにかかってんのよ! 怪獣映画かっつての!」

まあリアルに怪獣映画みたいな感じなんですけどね。

そろそろ私も仕事しないと!

マシンガンを連射するけれど、ものの数発で弾も切れた。

触手に足を掴まれる御坂さんだけど、その触手をナイフで切り裂く。

「ありがとう佐天さん!」

「でもっ、このままじゃー!」

そうしていると、突然音楽が流れた。

どこことなく幻想御手の曲に似ているような気がする。

そっか、これがワクチン。私が起きるときに聴いた曲ってことだ……。

再び伸ばされる触手、私はジャケットから三つのバタフライナイフ

を左手の指に挟み、サバイバルナイフを右手の中で逆手に持ち、走る。
御坂さんに伸ばされる触手に跳んで、左手を振るってその触手を切り裂いて、もう一本の伸ばされた触手は右手のサバイバルナイフで切断。

「ッ！ 再生しない!？」

御坂さんも大きな触手を電撃で切断した断面を見る。

私の切り裂いた触手も同じように再生しなかった。

さすが初春！

「ならー！」

御坂さんが今までよりも一層強い電撃を放ち、AIMバーストを黒焦げにした。

「はあ、間一髪ってやつ?。」

「そうですねえ」

「気を抜くな！ まだ終わっていない!。」

いつの間にかやられていた木山先生が叫んだ。

私と御坂さんがビクツと反応して、AIMバーストをもう一度視界に入れる。

起き上がるAIMバーストは、蠢きながら叫び声を上げた。

「確かにネットワークは破壊したがあれはAIM拡散力場が生んだ一万人の思念の塊、普通の生物の常識は通用しない!。」

「話が違うじゃない! だったらどうしろって——っ!。」

「どこかに核があるはずだ! 力場を固定している核のようなものがない! ！ どこかにあるはずだ、それを破壊すれば……!。」

天使の輪っかのようなものをつけたそのAIM拡散力場の化物を前に、私はつばを飲む。

瞬間、声が聞こえた。

レベル0やレベルで悩んでいたのみんなの声……。

私と同じように、なにかのために幻想御手レベルアップバーを使っただろうみんなの声。

アケミやむーちゃんやマコちゃんの声もする。

あれ、姉御さんと、重福さんや銀行強盗のときの人の声も……。

御坂さんと木山先生が話をしているけど、私はそちらの声の方に意識を取られていた。

「そっか、みんな苦しかったよね。でもその苦しみから逃げ出そうとして……私も同じだから、その中にいるべきだったのに、私は」

声は私を責めるものじゃない。ただ自分の苦しみを叫ぶ声。

「みんな、ごめんね？」

私は振り返ってから御坂さんと目を合わせて頷く。

レベルで苦しんでたみんなをレベル5の手で救わせるっていうのは残酷な気がするけど、ごめん。

それでも私じゃ助けられない。

でもね、レベルの低い貴方たちでも……少し違うかもしれないけどレベル5を苦戦させられた。

それは凄いことだと思う。ごめんね、全然励ましになんないよね。けど、御坂さんはレベルが低い人たちにちよつと気が利かないかもしれないけど……私たちを見下したりなんてしない。そういう人も確かにいるんだよ。

木山先生の膝裏と首の後ろに手を回して走る。

電撃の火力が上がったのが背中を向けててもわかった。

ある一定の範囲まで離れてから木山先生をおろして、私は御坂さんの方を見る。

木山先生のように御坂さんの電撃を防ごうとしているけれど、異常な火力に防御の上から体が焼かれていた。

触手で作った巨大な手は、砂鉄に切り裂かれる。

全く動かずにすべての攻撃を防いでいく姿は、「超能力者」と呼ぶにふさわしい。

「ごめんね、きつと貴方たちを虐げていた人たちだけじゃない。私みたいな気の使えない人の言葉にも貴方たちは傷ついてたんだよね？」
御坂さんがコインを片手に持ち、悲しそうな目でAIMバーストを見る。

「ごめんね、でも頑張ってみようよ……こんなところでよくよくしてないで、前を向いて——もう一度ツ!!」

放たれる超電磁砲。

その衝撃により地面は抉れて、レベル5という力を思い知らされる。

清々しい顔をした御坂さん、けれど私もきつとそうだ。これから学園都市で何年も過ごすんだから、それまでにきつとこんな力を手に入る。

まだまだ頑張れる。そう、がんばろうよみんな！ もう一度！

こうして幻想御手事件は終了した。

けれど完全解決とまではいかないのが当然で、私たちの幻想御手事件はこれで終わりじゃない。

事件っていうのは何事も始まりがあつて、その始まりを知っているのは私たち。

アンチスキルの護送車の前で、手錠をつけられた木山先生が立っている。

御坂さんは電池切れ状態で、私が支えて立っているという状況だ。

「どうするの、子供達のこと」

御坂さんが聞くと、木山先生は振り返って微笑した。

「もう一度やり直すさ、刑務所だろうと世界の果てだろうと……私の頭脳はここにあるのだから」

少しカツコイイと私は思った。

けれど言わないことにする。ここで茶化すのもあまり空気が読めてない。

「ただし今後も手段を選ぶつもりはない、気に入らなければその時も止めに来たまえ」

「私は多少悪いことでも協力しますからね！」

味方がいるとわかったから嬉しそうに笑ってから頷く。

アンチスキルの、黄泉川さんが少しばかり怪訝な顔でこちらを見てくるけれど愛想笑いしておく。

さすがにアンチスキルの前で言うべきじゃなかったかなあと思う。

護送車は木山先生を乗せて走っていき、これで終わり。

「やれやれ、懲りない先生だわ」

「私は好きですけどね」

「ホントですか佐天さん!? 胸ですか!? 脱ぐのが! 脱ぐのがそんなに良いんですか!?!」

「いや初春なんでそんな」

詰め寄る初春に若干ながら恐怖を感じてその額を手で押さえてこれ以上近づいてくるのを防ぐ。

なんか白井さんみたい。なんて言ったら初春が自決しそうなので言わないでおく、うん、私ったら正解ね。

なあんて思ってたらタクシーが一台やってきて、そこから出てきたのは噂をすればなんとやら……白井さんだった。

「お姉さまあ〜ん」

抱きついて、押し倒してマシンガンのごとく言葉の数々を放つ。

そしてワントンポ置いて、白井さんが初春と私の方を見る。

超ビックリって顔をしてる白井さん。

「なあんで佐天さんがここにいますの!?! え、なんで起きてますの!?!」

「まあ木山先生がよくわかんないけど助けてくれて」

「よくわかんないって本気で言ってますの佐天さん?」

白井さんがすっごい目で見てくる。わけがわからないよ。

「ところで、結局佐天さんって何者なんですの? 固法先輩に聞けば最初目をつけた理由はあの銀行強盗の時能力者の一人を倒したからだって言いますし」

言っちゃったのね固法先輩、まあ良いんだけど。

それよりも私個人としてはそれをこの場で話すということ、別に問題はないと思うんだけど。

「能力者に立ち向かえるように頑張ったレベル0ということでは」

そう言う白井さんも御坂さんも、初春すらも『仕方ない』というような表情で笑った。

わかってくれたようであり。

そして御坂さんは白井さんを退けて立ち上がると私のことを真っ

直ぐ見る。

その視線に少しばかり緊張する私。

「佐天さん、ごめんね。あんなこと言っちゃって」

申し訳なさそうに言う御坂さん。

「いやっ、いやいやいや！ 全然、私が悪いんですよ。気にしないでくださいよ！」

白井さんはわかっているようだが、初春わかってない様子。

それでも御坂さんは私にしっかりと謝罪する。でもするのは私の方だ。

「こちらこそ、気を使ってくれたのにごめんなさい」

お互い頭を下げて、あげたら二人して笑う。

これでこの件はおしまい。それで良い、それで良いんだ。

お互い悪意なんてあるわけじゃなかったし、それに御坂さんとはまだ出会って一週間も経ってない。

だからこうして喧嘩の一つもするべきだって、私は思う。

タクシーで助手席に私が座って後ろに三人、すっかり三人は寝ちゃってる。

「さて、無事だと良いけど……」

私は上条さんとインデックスのことを考える。

あの二人が無事だという連絡はまだ取れていない。

小萌先生の電話番号ぐらい聞いておくんだっただと思うけど今じゃあとの祭り。

とりあえず早く上条さんと合流しないと。

疲れきってるけれど一度首を突っ込んだんだから中途半端でやめるわけにはいかない。

私はポケットに入れているおまもりを握って頷いた。

17、不幸へ日常へ

すっかり日が暮れてしまった道を走って、私は小萌先生の自宅へと向かった。

二階への階段を登ってから扉をノックすると、何度か声がしてまるで小学生のような女性が出てくる。

これで二十は過ぎると言うんだから詐欺も良いところだと思う。

「佐天ちゃんでしたか」

覚えていただいていたようでなによりなのですが、今はそこじゃない。

「上条さんはどうしてますか？」

あの人の携帯端末が壊れているのはわかっているので、電話なんてできない。

だからこそ今頼れるのは小萌先生だけなのだ。

「上条ちゃんはインデックスちゃんと一緒に銭湯へと向かいましたよ」

銭湯、ここら辺では一つしかないはずだ。

だけれどここら辺と行ってもそこそこ離れている。

とりあえず私は小萌先生に一礼してから走ることにした。

初春と白井さんと御坂さんの追求を振り切つてようやくのこと小萌先生のもとへと到達して見つけた上条さんとインデックスの手がかり、ここで無駄にするわけにはいかない！

走りながら、私はジャケツトの中を確認する。サバイバルナイフが一本とバタフライナイフが一本、それと左手持つ、投擲に使えるナイフが三本。これ以上のナイフの消費は笑えない。ならば私ができるのは接近戦だけ。

上条さんならステイルは倒せるけど、神裂相手じゃ相性が悪すぎるのことを早く上条さんに神裂のことを伝えないと！

走って走って、たどり着いた場所は大きな道路の交差点。

そこで私が見たのは、体中に怪我をしたまま倒れている上条さんだった。

私は人だかりを抜けて上条さんの側に寄って手首に手を当てて脈を確認。

——脈はある。大丈夫！

急いで上条さんを背負うって……重いっ！

けどそんなこと言ってる暇もないから、走る。

AIMバーストとの戦いのこともあって体が悲鳴を上げるけれどそれを無視して走った。

上条さんを背負ったまま走って、小萌先生のアパートの前まで来たけれど、足が重い。

階段を一段一段踏みしめるけれど、体中が悲鳴を上げているのが良くわかる。

まったく勘弁してよね。

階段を登りきってから、私は小萌先生の部屋の前まで来て、その扉を蹴る。

両腕が使えないんだからしょうがない。

「はいはい、って佐天ちゃん——上条ちゃん!」

「は、早く入れてくださいっ!」

そう言う和小萌先生はドアを大きく開いてくれる。

私は重い足でなんとか歩いて上条さんを小萌先生の布団の上に寝かせてから、横に倒れこむ。

足が痛くてしょうがないけど、とりあえずは上条さんだ。

「もお、家は病院じゃないんですよ?」

少し焦りながらもそう言っつて、小萌先生は上条さんの応急処置のために救急箱を出す。

私はとりあえず体を引きずって壁に背中を預ける。

こりやあ足が疲労骨折してても無理ないわ……。

「佐天ちゃんは大丈夫です?」

「あっ、はい……ごめんなさい」

小萌先生はなんで謝る? という表情をしながら上条さんに応急処置をしていく。

「小萌先生の生徒じゃないのに色々」と

「学園都市の学生はみくんな私の生徒です」

そんな言葉に、私は少し安心できる。

ふと、意識が飛びかけるけれど寸でのところでなんとか意識を保つ。

玄関から音がすること、インデックスが帰ってきたのがわかった。

私はだいたい痛みが引いた足で立ち上がってから帰ってきたインデックスの方へと歩く。

「ただいま、ってとうま!？」

驚愕と共に上条さんのそばへと駆け寄ろうとするインデックスを止める。

「今応急処置してるから、ね?」

なだめるように言うと、インデックスは頷いて近くに座る。

上条さんは体中に痣と切り傷を作っていて、見ているだけで痛々しい。

不安そうな表情で上条さんを見守るインデックスは『自分のせいだ』と言わんばかりの表情。

上条さんはインデックスを救いたいと思ってるんだから——それは違う。

「どうしたの?」

「道路の真ん中にね、倒れてたんだ」

たぶん相手は神裂、私の報告が遅れたのが一番悪い。

また私は誰も助けられなかった。なんの役にも立たない……。拳を握りしめて、自分への怒りを押さえる。

「くそっ……」

なにもできなかった。また私は何もできなかったんだ。

結局はただの役立たずで、私は紅魔館に行ってもまるで成長していない。

もっと早く上条さんの元へと着いていたら、上条さんを助けることができたんじゃないか?

そんな風に思って、私は唇を噛む。

「すみません、今日は帰ります」

「佐天ちゃん、もう夜は遅いですよ?」

確かに完全下校時刻はとつくに過ぎているし、外もまっくらだ。

それでも今日は帰って一人で色々考えていたい。

だから私はここで頭を下げて、一人で帰ることとした。

小萌先生の静止の言葉なんて聞かずに私は夜の道を走って自分の住んでる寮の部屋まで行く。

扉を閉めて、私はそのままベッドへと倒れ込んだ。

今日、AIMバーストとの戦いでも役に立たなければ、上条さんの役にも立たなかった。

これなら居てもいなくても変わりにない。私はなんのために力を手に入れたんだろう?

理由なんて決まってる。大事な人を、この手の届く範囲の人たちを守りたいからだ。でもそれもできずに、私はこうしてのうのうと元気でいる。三日も呑気に眠っていた。

なにが正解で、何が失敗なんだろう……。

考えても私にはわかるわけがなかった。

晩御飯を食べる気力もなく、眼帯とジャケットを放り投げて私は私服のままベッドに入った。

すぐに眠気は襲ってきて、すぐに私の意識は闇に沈む。

朝、起きて急いで時計を見てみれば時刻は午後12時——つてヤバ! 完全に遅刻じゃん!

急いでシャツとハーフパンツを脱いで制服に着替えようと思った直前で、気づいた。

いや夏休み中だよ、今……。

私はしようがないからそのままシャワーを浴びてから着替えてテレビを付けて御飯を作る。

上条さんが起きているかどうか気になるところだけれど、とりあえ

ずしつかり準備をしていかなければ、いざ」という時が危険だ。

だからこそジャケットの中のナイフの数を確認して、しつかりと着込んで外に出る。暑いけど、いたしかたない。

「さて、とりあえず小萌先生のところかな」

昨日と違って状況の整理もできて、心も落ち着いた。

しつかりと上条さんに謝ろう。

私は軽い駆け足で小萌先生の家へと向かうことにした……。

「えっ、上条さんがまだ起きない!？」

私はついつい小萌先生宅の前で大声を出してしまった。

小萌先生は『しーっ』と人差し指を口に当てる。まあ確かに教師が一生徒を自宅で寝かせているなんて、知られて良いことじゃないとは思う。

それにしても、上条さんが起きないっていうのは不味い。

でも私にできるのは上条さんが起きるのを待つことだけだ。

「佐天ちゃん、自分のことあまり責めちゃだめですよ?」

「え?」

小萌先生は、小さな体で私のことを励ましてくれているのだと、思う。

「そうだよるいこ、それよりもありがとう。とうまを背負ってここまで……」

いつの間にやら小萌先生の後ろにいたインデックスも私にそう言う。

そう言ってもらえるのが嬉しいような、でもどこか惨めな気持ちで、私は今できる笑顔で精一杯に頷いた。

少しだけおじやまして、上条さんの様子を見てから私はすぐに小萌先生の家を出ることにする。

結局、行き場もなく道を歩いていく。

とりあえずセブンスミストにでも行って……。

行ってもどうしようもないんだらうなあ。

「見つけましたのよ佐天さん!」

背後からの衝撃に後ろを見れば、そこには白井さん。

背中に抱きついてくる白井さんは御坂さん相手の時のような優しいというかいやらしい感じは一切なく『逃がさない』ということだけを思っているとわかる。

なあんか白井さんって最近妙に絡んでくるなあ〜とか思っても、私が悪いんだと思う。うん。

「今日という今日は逃しませんわよ、事情やら貴女のことやらをなんやかんや色々と教えていただきますのよおおっ！」

大声を上げながら私の背後にくつついている白井さん、そのせいで周りからの視線が痛いけれど今はそんなことを言っている状況じゃない。

「ちよっ！ 白井さん、勘弁してくださいよおっ！」

「いいえ、のらりくらりと私をかわしてきたぶん私に付き合ってもらいますのよー！」

「こら白井さん！」

そんな時、私に救世主が現れた。

ほかでもない、その巨大なおっぱいを持つのは私の知っている中で二人だけ、しかももう一人と違ってきっちりとした服装をしてるぶんよほごいいい。

現れた救世主は固法美偉先輩。もう一人のおっぱいは露出魔痴女だから、やっぱり固法先輩素敵です！

「そんな、素敵だなんて佐天さんったら」

固法先輩は頬を赤らめてよそを向くけど、ついつい口に出しちゃってみたいだ。

まあ赤くなっただのは褒められたのが気恥ずかしいだけだと思うけど。

とりあえず力を緩めた白井さんを力技で引き剥がすことに成功する。

「佐天さん、色々つもる話もあるのだけれど今から私たち風紀委員のジャッジメント仕事なのよ」

なんだ、少し気分転換に付き合ってもらおうと思ったんだけど……

でも白井さんに聞かれたら少し面倒なことになる。

やはりここは大人しく帰ろう。

「わかりました、では私はこれで」

踵を返して帰ろうと思った瞬間、私の腕ががっしりと掴まれる。

「え？」

右腕を掴む固法先輩と、左腕を掴む白井さん。

笑顔の二人に私は愛想笑いを浮かべることしかできない。

「え？」

「私たちこれから——」

「風紀委員の仕事がありますの——」

いやそれは私には関係ないし……。

「わ、わかりました、私はこれで」

二人から逃げようと思ったが失敗。

回り込まれたとか以前に、離してくれない。

「私たちこれから——」

「風紀委員の仕事がありますの——」

なにこのロールプレイングゲームの村人、同じ会話しかないじゃん！

くっそお、不幸だあつ！

結局、私はなんの関係もない風紀委員の仕事を手伝っていた。

さすがに今日は一つというわけにもいかないようで、街の見回りで見つけたトラブル、猫探しやら不良の溜まり場になるような場所、あとゲームセンターとかを見て回って、夕方になったら休憩。

貴重な一日がこんな風になるなんて……。

まああのまま返事をしなければたぶん、固法先輩の透視能力クレアポイアンスでもれなく脅迫されていたに違いない。

「佐天さんはコーラで良かったんですの？」

「ああ、ありがとうございます」

本当に疲れた、白井さんにドリンクバーから持ってきてもらったコーラを飲んで背もたれに思い切りよりかかる。

猫探しに関しては異常に走らされるし、ていうか基本的に走らされたり、跳んだりさせられたり。

なるほど体力勝負ですかと……ていうか透視能力クレアポイアンスと空間移動テレポルトがあれば大概の事件が余裕だと思っただけ。

「今日はありがとう佐天さん、貴女のおかげでだいぶ楽になったわ」

固法先輩の言葉に、私は苦笑で返す。

私もだいぶ楽になりましたとは言えない。

「それはそれとして、佐天さん？」

白井さんの顔が少しばかりこわばる。

やだなあ、来るとは思ってたけどさ。

使ったことに関しては謝る以外に道が残されていない。

「貴女は本当に何者ですか？ とても無能力者とは思えないのですけれど……」

「真正正銘のレベル0ですよ、私は……」

そう言うがどこかふに落ちなさそうな白井さん。

だから私はわかりやすいようにやんわりとそのふを落とそうとしてみる。

「みんなは能力という才能がある。それと違って私は格闘、近接戦闘に才能があっただけです」

平凡で凡人な私が能力以外で強くなるためにはそれしか手がなかった。

「それだけであそこまでできますの？」

できている。ただ師匠とその周辺の人が異常だったけれど、確かに私はただ鍛えただけだ。

確かに左腕もこの眼帯で隠している左目も“人間”のものではないけれど身体能力もなにも変わっていない。

私は私で、ただ前よりも踏み出す勇気をもっただけ。

「あそこまでできても、私は弱いままです」

「でも私を助けて、スキルアウト相手にあそこまで」

固法先輩の言いたいこともわかる。

自分で言うのもアレだけれど、強能力者レベル3相手にあそこまでの立ち回

りができる人間は少ない。

けれどあの「程度」の攻撃一つに当たるほどやわな鍛え方を私はしていないかっただけ。

なんとたつて、霊夢さんと魔理沙さんとチルノと大ちゃん、その面々からの攻撃を避ける訓練だてしたんだから。

「本当に私はただ「喧嘩がうまい」だけの中学生ですよ」

笑っていうと、白井さんと固法先輩は少し迷ったような顔をしたあと、頷いてくれた。

そう、鍛えたことよりも私が変わっている原因は幻想郷での生活で世界観が変わったこと、それと踏み出す勇気を得たこと。

ただそれだけだ。

「さて、気分転換にデザートでもー」

私が言うのと白井さんと固法先輩も笑顔でメニューを一緒に見る。

とりあえず固法先輩にはおごってもらおう、白井さんに色々漏らしたいね！

うん、先輩なんだから当然だよね！ さあて、デラックスジャンボストロベリーサンデーといきましょう！

——— 少しでも、私は元気になった気がした。

だけど私の気分は、自宅に帰ってからまた沈むことになる。

携帯端末からかかってくる電話のせいだ。

知らない番号だけれど、とりあえず出てみることにした。

「もしもし」

『佐天ちゃんですか？ 小萌です』

「小萌先生!?!」

少し驚いたけれど、誰から電話番号聞いたんだろう？

『レベルアップバー幻想御手を使った皆さんに緊急ですが明日特別講習です。他の方にも電話は行っているでしょうけれど佐天ちゃんとはこれからも連絡する機会も増えることもあるから電話番号を聞いておいたというわけです』

なるほど納得、でも^{レベルアップバー}幻想御手使用者を集めるってことはつまりお説

教とかそんな感じ？

小萌先生は内容について話すつもりはないようで、とりあえずこれで連絡を取り合うのが楽になったってわけだ。

とりあえずアケミたちも一緒になるだろうし連絡しとこう。

「わかりました、じゃあまた明日」

『ちなみに講習場所はポストに入ってると思うです。上条ちゃんが目を覚ましたらまた電話しますね』

「はい、ありがとうございます！」

『では、おやすみなさい』

通話が切れて、私は携帯端末に充電器をつないでとりあえず晩御飯を作ることにした。

右手で軽く食材を切っていくけど、私も刃物の扱い上手くなったなあと思う。

咲夜さんと美鈴さんに教えてもらったナイフ術と格闘術を組み合わせた我流、結構対人戦には役に立つんだけどどうにもAIMバーストのような相手には使えない。

やっぱり遠距離攻撃、あの能力が欲しくなるけれどそれも今は叶わない。

「はあ……頑張れ私！」

自分で自分を励ましてから、ついつい肉じゃがのじゃがいもが千切りになっていたことに気づく。

今日の肉じゃがはじゃがいもが溶けてなんだかわからない肉料理になってしまった。小皿に乗せて一口味見してみれば、案外いけるしこれはいつか紅魔館で作ろうと頷く。

明日のことを思うと若干気が重いけれど、補修が終わったあとに存分に遊んでやろうと思う。

肉じゃがもどきをよそってお米を茶碗によそおうと炊飯器を開けて、ため息が出た。

「やばっ、お米炊くの忘れてた」

——はあ、不幸だっ。

18、特別講習

朝、久しぶりに制服を着て学生カバンを持ち、寮を出る。鍵を閉めてから私は歩こうとして、私服のポケットから出したお守りを落としたのに気づく。

私はお守りをポケットに入れてからとりあえず特別講習の場所である『高校』に向かうことにした。

途中でアケミたちと合流予定だけれど……。

しばらく歩いて高校の階段を上って昇降口に行くと、完全に閉まっている。

「お〜い涙子！」

そんな声が聞こえてそっちに行けば、そこには見知った顔。

いつの間にやら幻想御手の被害者になっていた知り合い三名。

「アケミ、むーちゃん、マコちゃん」

むーちゃんとマコちゃんの二人はあの階段で疲れたのか座り込んでいる。

まあ朝からあの階段はキツイよね。

とりあえず来客用の入口から入ってくださいと書いてある紙を見て私とアケミたちはそちらへと歩いていく。

後ろで色々ぼやいている三人だけど、なんとなくわかる。

ちよつと急すぎる。

「涙子もさあ、ほんとならういはるんと遊びに行く予定だったんでしょっ。」

「まあ、しょうがないよ」

立ち止まって言う。そう、しょうがないんだ。

幻想御手レベルアップを使っているんな人たちに迷惑をかけて……私も初春や白井さんや御坂さんや、木山先生に心配をかけて……。

それで上条さんにもインデックスにも小萌先生にも迷惑をかけた。

少しトーンが低くなつちやうのは、たぶん無意識。

でも三人は後ろで気を使ってくれた。

「もおく諦め良いなあ涙子は」

「そうそ、そういう女は幸せになれんぞ〜」

少し難しいけど、笑顔を作りながら私は振り向く。

「もお、嫌なこと言わないでよ〜」

そう言えば今まで人を好きになつたことつてないなあ〜。

恋に恋するお年頃だし、それそろそういう人も作つてみたい気がするけど、まあ今はいいや。

とりあえず色々と終わらせて……つて何考えてんだか、はあ〜。

少しだけ元気にしてくれたアケミたちに心の中で感謝しながら、私はアケミたちと一緒に教室へと向かう。

教室につけば少ないとも多いとも言えない人数の人たちがいた。

でもたぶんマコちゃんがいうように居眠りはできないと思う。まあしないけど……。

なんだか紅魔館で居眠りしたらナイフが飛んでくるつていうトラウマが植えつけられたというか、なんというか……。

「どいつもこいつもしけた面してんなあ！」

聞き覚えのある声、そちらを見て私はもれなく全力で目をそらした。

やっぱあ、姉御さんにあの日倒した不良のみなさんじゃん。

突然静かになつたので私がそちらの方を好奇心故に見てみると、好奇心に殺された。

姉御さんはこちらを見ていて、不良のみなさんも私を見ている。

「お前っ！」

やばっ、と思つたけれどこんな時にくるのが私の救世主。

「はいはい、さっさと中へ入っちゃってください」

さすが救世主、私を助けてくれると信じてましたよ。

ていうかあれが先生というのは信用ならないと思うよ、ほんとね！

笑顔で『舐めた口聞くと、講習時間伸ばしちやいますよ』なんてえげつないことを言う月詠小萌先生は、全員を大人しくさせて椅子を使って黒板に名前を書くのだった。

お説教かと思っただけだけど、最初は自分だけの現実から、初心に戻ってらしい。

さして、頑張りますか！

昼の休み時間に入ってから、むーちゃんはアケミにマッサージしてもらっている。

ババくさいなんて言えば怒るけれど、実際ババくさい。

「じゃあ私はアケミでも揉んであげようかあ〜？」

「ちよつと涙子ジジくさい」

これは痛い。

まあ初春にいわれなれてたりするけど、ああ白井さんみたくこれを快楽に変えられれば……いや、やっぱ嫌だわ。

私は大人しく座りなおす。

再び会話が始まる。午後は体力測定らしい、あんま資料見てなかったから覚えてないや。

アンチスキルもやってる先生ってどんな先生なんだろ、筋肉ムキムキ、マツチヨマンの変態だったらどうしょ。

「帰ってえ〜」

三人一緒に同じことを言うけれど、私はやはりそういう風に思えない。

「まあ腐つてもしょうがないし」

マコちゃんがそう言った瞬間、三人が固まり言葉が止まる。

私も三人が見ている方向を見れば、そこには姉御さん。

あちやあ〜と思いつながら私は愛想笑いしてみる。

「おい、昼飯付き合えよー」

これは意外な展開、でもお昼ご飯だけで済むとも思えないので、私は思い出した言葉を口にする。

「お弁当忘れた」

「なにやってんだよー」

姉御さんはそう言って弁当を片手に舎弟のみなさんと教室から出て行く。

え、マジでお昼誘いに来ただけ？　というか可愛いですねそのお弁当箱。

少しばかり姉御さんへの見方が変わったところで私は昼ごはんを探しに、ということとで食堂へと行ってみる。

けれど――。

「はあ、そりや休みだもんねえ」

うん、当然と言えば当然。

とりあえずアケミに電話をかける。

「あつ、もしもし、やつぱやつてなかったわ外に買いに行ってくる。食べてて良いよ」

それだけ言ってから私は電話を切る。

面倒だけど全力疾走すれば数分で着くだろうし、こんな天気な日には丁度良いかもね。

さて、と思った瞬間、背後に気配がした。

「佐天さん」

声でわかる。

「っ、重福さんっ!?!」

「お久しぶりです。重福です」

そりやそうか、幻想御手レベルアップバーを使った人たちのことを考えれば重福さんだっているはずだ。

とりあえず気づかなかったことに謝るけれど、重福さんは自分が

『影が薄い』という。

まあそれを否定するようなことは私にはできない。気づかなかつたし……。

「あの佐天さんっ」

顔を赤らめて近づくと重福さんと同じように私は距離をジリジリと取る。

「いつも私のメールにお返事をくれてありがとうございます！」

まあ確かに昨日も、一昨日も昏睡から覚めてからすぐに送ってきたみたいだし。

「でも、今度は佐天さんから先にメール欲しいなあつ、なんて！」

いやあ、これは私完全に惚れられてますわ。ここまで露骨にしているのに気づかないなんてありえない。

うん、白井さんに『罪な女ですの』なんて言われたけれど私は重福さんの気持ちに応えるような覚悟もなしし、ううくん。

とりあえず『気が向いたら』とだけ答えた。

「私、佐天さんからのメール毎日楽しみにしてるんです。夢の中でもあえるように携帯を握って寝たり」

すっごい。すっごいよこれ、百合とかいうよりこれはガチですわ。

「でも今日は来て良かった、佐天さんに会えるなんて……こんな講習気が重かったけど」

私はそれを聞いて少し愛想笑いが途切れる。

たしかにこんな講習に呼ばれたのは自分たちが幻想御手レベルアップを使ったせいだ。

インチキでレベルを上げようとした自分たちへの罰。

「あの、そうだ！ 良かったら一緒に弁当食べませんか!？」

「いやあ私お弁当忘れてきちゃって」

「私沢山作ってきちゃったから、佐天さんもどうぞ!」

「えっ、でも……」

そんな時、ついつい私のお腹は鳴ってしまふ。

くっ、まったくエレガントじゃない。確実にレミア様なら『無様な鳴き声が聞こえたわよ』ぐらい言ってくる。まあ変わりに紅茶の中にんにくの絞り汁を混ぜてやったり。

なんてトリップしてる場合じゃない。

是非いただきますよう!

中庭の木陰にあるベンチで私たちは座っていた。

二人でお弁当をつつきながら、話をする。

重福さん、最初はガチな人かと思ったけど、いやガチだけ思ったよりも良い人みたいだ。

同じガチでも白井さんみたいな感じじゃないし、新鮮と言えば新鮮。

「私、教室にいるとなんだか息苦しくて、なんか、責められてる感じがして……」

「なんでよ、みんな同類じゃん」

わからなくもないけれど、私は励ましてみる。

「ええ、みんな同類だから同類ばかり集められて……こういう講習、この先もあるんですかね」

「さあ……でも、もしそうだとしても仕方ないと思う」

私は空を見上げる。

才能とかじゃなく、努力してる人たちもいる。だけれど私たちはインチキをしようとした。

それこそチートを使おうとしたんだから仕方がない。そう考える他ない。

——仕方ないんだよ。

昼休みが終われば全員が体操服で校庭に集合した。

姉御さんの舎弟がボヤけば、姉御さんが怒る。案外真面目な人だよねえ。

また怒られてるよじゅんたさん。

アケミがやっぱこええつてさ。

「そう言えばあの人と涙子知り合いだったの？」

まあ昼の流れを見ればそう思うよね。

でも理由を話すわけにもいかないし……なんて考えてたら教師がやってきた。

「はい、注目！ 体力トレーニング講習を受け持つ黄泉川だ！」

「げっ」

「げってなんだ佐天涙子お？」

そりやげって言葉ぐらい出てくるつて。

ここ一ヶ月で会うの何回目よつてぐらい会ってる気がする。

というよりこの人も私がここにいる理由は知ってるんだろうと思う。

アケミたちも姉御さんも後ろの重福さんも『知り合いかよ』つてな

感じになっている。

「とりあえず、よろしくじゃん?」

気だるそうだったたり真面目だったたり、みんなそれぞれ挨拶は一応する。

「よおし、じゃあさつそく持久走いってみようか!」

ざわざわと騒ぎ出す面々。

「へっ、限界にチャレンジじゃん?」

なあんて言いながら黄泉川先生は私に近づいてリストバンド四つを渡してくる。

「はい?」

「手足につけな」

そう言われて持つ——ってなにこれ重い!

そこそこ重いそれを手足につけて、私は気だるさを感じる。

アケミたちは私を見て黄泉川先生を少し鋭い目を見た。

「涙子が生意気言ったからってこれはどうなんですか?」

「ん、そんなつもりはないじゃん、あんたらと一緒に普通に佐天が走ってたらずつと終わらないからハンデをつけさせたんだよ」

アケミたちは幻想郷に行ったあとの私のことを知らないからこそ、こう言う。

けれど姉御さんもその舎弟さんも重福さんも頷く、なにこれ私脳筋フラグ……。

というより私このまま走るの?

結局このまま走ることになった。

走れ走れと野次を入れる黄泉川先生、ダメだと思ったら手を上げろなんてことを言いながらさつき手を上げた太つちよさんが走らされてる。

アケミたちには悪いけどペースを早めさせてもらう。

黄泉川先生にも同じペースで走ってたら完全に手を抜いてると思われるだろうし、疲れるためには走るしかない……。

だけど案外手足につけたバンドが体力を削る。

「っはあ……はあっ……!」

アケミたちや姉御さん、重福さんも全員ダウンしているけれど私ももう限界だ。

足が痛くてしようがないしフラフラする。

手を上げて私も走れないことをアピールしたけれど、黄泉川先生が隣りで走るのみ。

やっぱり拷問ですかあ？

「ギブアップか？ そのバンドつけてるわりにもったじやん？」

もう上げてる手も痛いですよ。

「はいっ……もうっ、もうっ」

「よし、最後一周ダッシュじやん！」

うええ!?

つついっい声に出してまで驚いてしまうけれどよこの黄泉川先生はすぐに顔をこわばらせた。

「ダッシュユー！」

仕方ないので手足をさらに限界に追い込んでスピードを上げる。

あれ、案外行けるもんだね。とりあえずさつきよりは早く走れるのは目標が目の前だからだと思う。

そしてラスト一周を終えた瞬間、私は膝が笑って地面に座り込んでしまった。

「いいじゃん！ いいじゃん！ じゃ、もう一周行こうか！」

「っ……無理です」

私は顔を上げて言う。

「立て」

真っ直ぐとした声、その声は怒るようなものでも誰かを虐げるようなものでもない。

それぐらい紅魔館の末端だった私でもわかる。

けれどその真意まではつかめない。

「あと一周頑張れ」

くそっ！ やりますよっ、やってやりますよ！

心の中で悪態をついて立ち上がろうとした瞬間、声が聞こえた。

「んなのトレーニングじゃねえ！」

黄泉川先生に噛み付いたのは姉御さんだ。

私を一目見た後に黄泉川先生を睨みつける。

「トレーニングじゃん」

あつけからんという表情で言う黄泉川先生。

「どこがだ、ただのしごきだろうが、ええっ!？」

黄泉川先生の胸倉に掴みかかる姉御さん。

「ほんとのことを言ったらどうだ！ 罰なんだろう、この講習はあたいらに罰を与えるためのもんなんだろう!？」

その怒鳴り声は私たちには痛いほど通じるといふもので、私たちの疑問だ。

この講習は幻想御手レベルアップを使ったことへの罰、私もそう思う。

だけでももう一つわかるのはここにいるあの量子変速シンクロトンの人だつて姉御さんとその舎弟さんだつて、みんな幻想御手レベルアップを使ったことが悪いことだと思ってる人たちばかりということ。

だから甘んじてこの講習をみんな黙って受けている。

「勘違いじゃん」

でも黄泉川先生はそれでも罰じゃないと答えた。

「じゃあこの持久走にどんな意味があるのか説明してみろおっ！」

「限界を超えることに意味があるんじゃない？」

その意味がわからないほど私も馬鹿じゃない。

いや、幻想郷に行っていないなければ馬鹿の一人だったけれど、限界を超えて私はフランを助けることができた。

限界を超えることに意味はある。

けれど限界を超えてもまた新たにある限界に、それに挑めるほど私はは強くない。

「ほらアイツ」

黄泉川先生が指を向けた方には最初の方に限界と言った太つちよさん。

「真つ先に手を挙げたくせにまだ走ってる、もう無理だつて諦めたらそこで終わる。自分でもわからない力がまだあるかもしれないのに」

自分でも、わからない力……。

「こいつだって」

黄泉川先生は次に私を見た。

「もうダメだって思ってから一周走ったじゃん、しかも重りを持って……その一周した力ってなんなんだろうな？ 能力開発も同じことじゃん、自分で自分の限界を決めちまったらだめじゃんってこと」

圧倒的正論、その雰囲気、生徒を思う一教師としてのその姿に私は圧倒された。

「屁理屈、言ってるじゃねえ！」

姉御さんが殴りかかったけれどその拳はあっさり受け止められて、流れて片足を蹴られ、そのまま背中から転ばされる。

流れるような手さばきに私は内心ワクワクしたものを覚えるけれど、黄泉川先生とそんなことをしたってしようがない。

それにしても今時生徒に手を出して怒れる教師なんて……グレートティーチャー黄泉川じゃん。

「姉御、大丈夫ですか!？」

「てめえ、教師だからって容赦しねえぞ！」

「講習は終了じゃん」

そんな言葉に、私は驚いた。

黄泉川先生は空を見上げる。

「時間なんだよ」

そんな言葉とともにあんなに晴れていた空は曇り、雨が降り始める。

レミリア様ならもれなく激痛に身をよじることだろう。

吸血鬼が弱いのは流水……なんて考えてたら雨は本格的に降り始めてて私はそんな中座っていた。

「行きましよう佐天さん、濡れてしまいますよ。まあ濡れた佐天さんは佐天さんで……えへへ、ふひっ」

私はほぼ無意識のままたって校舎に向かっていた。

たぶんあの声は重福さんだと思う。更衣室である教室で着替えをする面々、貸し出されたタオルを頭の上に乗せて私は再び考えに浸

る。

わかってた。能力がすべてじゃないってわかってたのにどうして使ってしまったのか……。

守りたかった人がいるから、だけ……でもそれは大きな理由になると思う。

けれど幻想御手レベルアップを使う、というのは……。

「諦めたらそこで終わるじゃん！」

むーちゃんが黄泉川先生の真似をしてる。

マコちゃんは似てると苦笑したあとに携帯の画面を眺めた。

「でもそれって綺麗事だよな」

「それよか、あの不良のお姉さんが言ってたみたいに、やっぱこの講習って——」

「罰だろ！」

アケミの言葉を引き継ぐ形で言う姉御さん。

苛立ったような言葉にアケミたちは少し怯えたような表情を向けるけど、そこまで怖がる相手……か。

今の私は力があるからそれほど怖くはないけれど多分力が無ければ怖かっただろうし。

「たくつ、意識不明になるわこんな講習受けさせられるわ、踏んだり蹴ったりだ！ やり方が陰湿だよ、講習なんて言わずに素直に懲罰って言えばいいのによおっ！ たく、あたいらのどこが悪いって言うんだよ、簡単にレベルが上がるなら何使ったって良いよなあ」

「そうですね〜」

姉御さんの言葉に、アケミたちはただ愛想笑いをしながら頷く。

だからこそ、私は黄泉川先生と小萌先生のことを誤解させないためにも言っておきたかった。

「でも、そこで色々な人に迷惑をかけたんだから罰を受けて当然だと思おう」

私の言葉に、姉御さんは瞳を鋭くする。

後ろでアケミたちは私の名を呼ぶけれどそれで引き下がりはしない。

「ああ、気に食わないね。あたいから幻想御手レベルアップを奪うだけの力があつたあんたがなんであんな教師の言うことを聞いてんだよ、お前なら簡単にアイツのことボコせたる？」

その言葉に私は否定せずに頷く。

黄泉川先生も所詮は人間の範疇だ。妖怪や人外に近い巫女を相手にしてきた私とで差があるのは当然。

それでもただ鍛えている人間の中ではトップクラスに強いと思うし苦戦もする。

ただ勝てるという問題でもない。論点は罰ならば受けなくていいかということ、それとこれが罰なのかということ。

「でもこの講習に来た人たち、みんなわかってたはずだよ。なんで呼ばれたかなんて、それでも来たってことは後ろめたい部分があつたはずなんだ、貴女だってそうでしょう？」

凶星なのか、少しばかり姉御さんはひるむ。

「悪いことだってわかってるけど、どうしても今すぐ力が欲しくって幻想御手レベルアップを使った。それ自体はそんな悪いことだとは思わないんだ。私も」

自分を正当化しているかのような私の物言いに、私自身としてもあまり快くはない。

けれど自分のためじゃなく、姉御さんの、みんなのために言いたいことでもある。

「けどそこで努力をやめちゃダメだって、楽しんで能力がレベル上がったからってそこでゴールするんじゃないかって新しい限界を乗り越える。いつだって目の前にあるその壁を乗り越えるんだって、黄泉川先生は言いたかったんだと思う。確かに綺麗事だけど、これは事実だし私だって限界を乗り越えてレベル0でも能力者と充分戦える力を持つんだ」

姉御さんとの距離を詰めていく。

「だから元の場所に戻ってきた『私たち』がズルをして得た場所に再び上がるために、この講習はあるんだと思うし一時でも得た『あの場所』へと這いずってでも上がりたなら……罰は受けなきゃいけない

いんだ」

姉御さんが一步下がるけれど私が一步を踏み出す。

「幻想御手レベルアップを使ったのには好奇心もあるだろうけれど、ここに来た人たちは後ろめたいことや罪悪感を感じてここに居る」

壁へと背をつける姉御さん、私はそんな姉御さんの前に立つ。

「もし貴女がこれから目の前のハードルを越えようとして、それがダメで誰かに笑われて、それから自分を守ってまだ頑張ることをやめないなら……その時は私が、幻想御手レベルアップなんかじゃなくて私が——」

私は心からの笑顔を姉御さんに向ける。

「まずはその幻想を守りぬく」

訪れる沈黙。最初に動いたのは姉御さんで顔を赤らめて私から逸らすと教室を出て行ってしまふ。

まさか今の私の台詞が長くて臭かった!?! いやいや、なんかそう考えてたら恥ずかしくなってきたっ!

ああ〜今頃笑われてたらどうしようお〜!!

「る、涙子このおバカ! 怖いもの知らず!」

アケミが背後からそう言うけれど、姉御さんにあまり恐怖を感じたことはない。

最初は凄いや眼力だったけれど、レミリア様や咲夜さんにおよばないし、途中から少し弱まった気もする。

「一度倒した相手に、油断はしないけど恐れまでかく必要は無いよ」
そう言って笑うと、アケミたちはキョトンとしている。

「なんか涙子変わったね、いやダメってことじゃなくてさ、良い!」
マコちゃんがそう言うけれど、私自身そこまで変わっているという気がしなかった。

身体能力や動体視力がダンチなのはわかるんだけどなあ〜。

私はそう考えながら体操服を脱ぐ。

「涙子、線入ってる!」

お腹のことを言ってるんだと思う。

確かに、きにしなかったけど縦に線が入っている。

「あまりガチガチすぎるのはどうかと思うけど一本線入ってるぐらい

ならセクシーだよねえ」

なんか妙にマコちゃんもむーちゃんも触ってくるけど、なにアケミ顔逸らしてるの？

まあとりあえずくすぐったいからやめてほしいなく。

とか思いながら私は制服に着替えるのだった。

再び教室内で授業を受けている最中、小萌先生が話を始める。

「勘違いしているようなので念押ししておきますね、この講習は^{レベルアップ}幻想御手使用者を罰するものではありません。確かにレベルを上げるために安易に^{レベルアップ}幻想御手に手を出したのは褒められることではないですよ、ですが、それを必要以上に悔いたり自分を責めたりする必要はありません。罰ということであれば皆さん意識不明の重体に陥るといふ辛い経験をして、すでにその身をもって贖っているのです。だから今度はその経験を活かすべきだとは思いませんか？」

みんなが、じつとその話を聞く。

姉御さんも重福さんもアケミたちも、黙ってじつとその話を聞いている。

私ももちろんその中の一人。

「皆さんは、^{レベルアップ}幻想御手を使ったことで本来持っていた能力よりも、上のものを経験しましたね？ つまり黄泉川先生言うところの『自分が持つてる限界を超えたじゃん』ってやつです。それじゃ、最後の講習に入ります！ その感覚を思い出してください。目を閉じて、集中して」

みんな目を閉じるけれど、私は目を閉じなかった。

私の知っている小萌先生と違いすぎて戸惑っているというのもあるけれど……。

「できるだけ細かく、使ったときのことをイメージしてみてください！ 皆さん、それぞれの自分^{パーソナルリアリティ}だけの現実を獲得、あるいは強固にする足がかりになるはずですよ」

小萌先生が私の方を見て、微笑む。

私はなんとか笑顔で返してから目を閉じる。

——私の、私だけの現実……。

神裂と戦ったときに得たあの力。

握りつぶす、わからないけれどあの時得た能力は確かに私のもので、私だけの現実だった。

上条さん、インデックス、御坂さん、白井さん、木山先生……そして初春。

私の周囲で、私が守りたいと思った人たち。

『でも頑張ってみようよ……こんなところでよくよしてないで、前を向いて——もう一度ツ!!』

思い出していると、突然の光に私は目を開く外からの夕日だった。

——うん。

最後の能力テストが終わって、私はアケミたちと一緒に昇降口にいた。

アケミたちは能力値が上がったって言ってるけど私はいつも通りのレベル0なんて状況。

レベル0だけど、ちよつとづつ数値は上がってる。けれどレベル0。

「そうだ、このあと特別講習終了パーティーしようよ!」

「ねえ、涙子もいくでしょ?」

マコちゃんからの言葉に、私は考えながら下駄箱を開ける。

そして私は苦笑した。

「ごめん、私ちよつと用あるから行っちゃってて」

下駄箱に入った手紙を見ながら、私は笑ってしまう。

三人と分かれてから階段に座って手紙の封を切り、中身を開く。

やっぱり重福さんか……。

『今日は雰囲気を変えて手紙にしてみました』

最初にそんな文字を見て笑ってしまう。

ハートのシールなんて、いやあちよつとびっくりしたよ。

『今日は佐天さんと再開できてほんとに良かったと思います』

私も重福さんと再開できたのは悪い気はしなかった。

あんなことがあつて、二人して幻想御手レベルアップを使った仲だからこそ、ほかの私の友達にはわからない気持ちと共有できる。

少しばかり知らないタイプのそんな友達は私にとつてもいい刺激になつたんだと思う。

『黙々と持久走を走る姿や怖い不良の方々に堂々と意見する姿を見て何やら勇気づけられた思いです』

あんな独りよがりな説教が誰かのためになるなら嬉しい。

『今後は佐天さんを見習つてうじうじ後悔せず、強く生きていこうと思えます』

——強くなんかないよ……。

所詮、強かつたとしてもそれだけだ。心までは強くなれない。

私は能力検査でもらつたカードを見てみるけれど、書いてある数値に上昇が見られても所詮はレベル0。

「はあ、そんなうまくいくわけないか……でも」

『また頑張ろう！』

私以外に声の一つ。

そちらを見れば、そこには持久走で最後まで走っていた太つちよのお兄さん。

根性がある人は嫌いじゃない。

お兄さんが気恥かしそうにお辞儀するので私も気恥ずかしくなる。

立ち上がって、私はお兄さんの方を見て笑った。

「またどこかで会う機会があれば」

私はそのまま小走りで階段まで行くと、下に三人見知った顔が。

「佐天さくん！」

「お迎えにきましたよ〜！」

「まったく、なかなか出てこないからもう帰ってしまったかと思いましたがわ！」

わざわざ三人揃つて私が出てくるのを待ってたど？

まったくなんて人たちだろう。私がアケミたちと遊ぶつもりだったらどうしたんだろ……まあそれよりも考えることは山ほどある。

私は一歩一歩階段を踏みしめて下りていく。

「佐天さんがいないと話が一つも進まない状態なんです！」

階段の下から少し大きな声で私に言う初春。

「一体なにがあつたの〜？」

私は駆け足で階段を降りて三人の元へと走る。

いつも通り、四人揃つて道を歩いていく。

「ねえ佐天さん、映画が良いですわよね？」

「は？」

話が進まないって——。

「それより、セブンスミストの屋上でイベントやってるのよ！ 楽しそうじゃない？」

御坂さんが興奮気味なので、大体察しがつく。

「そんなにゲゴ太がご覧になりたいんですの？」

「違うって言うてるでしょ！」

違くないでしょうそれは！

そう言えば重福さんからの手紙以外にもう一枚何か入ってたなあ。

言い争いしている二人を置いて私はもう一枚の紙を見る。

『またレベルが上がったりしたらお前にリベンジしてやるからな！』

そんな短文と共に姉御さんからのメールアドレスと電話番号が送られた。

まったく、なんか眼をつけられちゃったなあ。

今夜あたりでもなんかメールを送つところ、向こうにも登録してもらわないといけないし。

「で、二人の意見が分かれていままでずつと？」

初春に聞くと、苦笑しながら頷いた。

なるほどなるほど、これは私にかかっているということ……。

「で、あたしに決めろと？」

三人揃つて頷きやがりましたので、私はへの字に口を歪めて考えてみる。

「映画ですわよね？」

「あつちよつと黒子ずるい！」

しょうがないので、私は手を上げてこの混乱状況をもつと混乱させ

てやることにした。

「は〜い！ 私プールがいい！」

「ええ〜！ そ、そんな佐天さん！」

初春がなぜ火に油ましましたのかと言いたいばかりの表情をする。
なぜってこれが楽しいからなのだ！

前も言ったでしょ、あたりは楽しければオツケーって！

「それじゃ初春、やっぱり貴女が決めなさい」

「じゃあプールで」

「やったー！」

「即決ですの!? 意義を、意義を申し上げますの！」

「私に任せたくないですか」

「まあとりあえず行きましようよ。」

「ていうか今からじゃ無理じゃないですか？」

その言葉に、全員が沈黙する。

結局残された道は……。

「じゃあ佐天さんの家に行きましょう！」

「そうね、黒子良いこというじゃない」

「これは酷い。」

「じゃあ行きましようか佐天さん！」

「仕方ないなあ！」

とりあえず全員が私の住んでいる寮への道を歩き続ける。

お菓子やらなんやらを買って家でくだらないことを話して、私かな
ぜか不幸な目にあつたり。

そんな不幸日常が嫌いでない……。

いつか上条さんやインデックスも混ぜて一緒に遊びたいな、なんて
!

19、十万三千冊へインデックス

あの特別講習から二日、七月二十七日。

今日もまた私は小萌先生の家にて上条さんの様子を見に来た。私の責任なんだから当然だと思う。

お昼時、私は小萌先生に台所を借りて食事を作る。

あまり散らかすわけにもいかないしここはパンとか軽いものにしてようと、まな板の上でパンを切る。

ハムやらチーズやらレタスやらをはさんで結構な量を作っていると、インデックスの声が出た。

「上条さん!?!」

私が急いで居間の方を覗くと、上体を起こした上条さんがそこには居た。

「さ、佐天さん、あれから無事だったのか、良かったあ」

この人はっ、自分のことより他人のこと心配なんてしなくて良いのに!

それよりも謝らないと、私をもっと早く上条さんに神裂のことを伝えておけばって言わなきゃいけない。

「その」

「神裂と戦ったんだって、佐天さん?」

そんな言葉に、私は少し驚いて頷く。

「いやあ佐天さんでも勝てなかったなら上条さんが勝てるわけもねえか」

そう言っって笑いながら後頭部を掻く上条さん。

私の言いたいことがわかってるのかな?

まあどちらにしろ、この人は優しいってことだけはわかる。

「だから気にすんな、事情があつたんだろ佐天さんも」

「あははっ……」

その優しさがちよつとばかり苦しい気持ちもあるけど、嬉しかった。

「じゃあとりあえずお昼作っちゃいますね! 沢山食べてください

♪」

私が台所に戻ると居間の方から声が聞こえてくる。

インデックスも色々考えてたみたいで、上条さんに色々と話をしていた。

ヨハネのペンだっけ？ あれのことに関しても色々とおあるみたいであまり突っ込んで欲しくないらしい。

とりあえずサンドイッチを沢山作って居間へと持って行く。

「病み上がりには大丈夫ですか？」

「ああ、全然平気だぜ！ エプロン姿の佐天さんを見て上条さん大満足……」

なにいつてんですか、ほらあインデックスも怒ってるし。

ほんと鈍感な人って……はあく。

とりあえずテーブルを出してそこにお皿を置いた所で、玄関から音が聞こえた。

「はあく！ 小萌かな？」

インデックスが嬉しそうに言う。

短い間にずいぶんなついたりみたいだ。

玄関の外から小萌先生の『あれ、家の前でなにやってるんです？』なんて小萌先生の声が聞こえて、私はすぐにジャケットを上から着る。

いつでもエモノを抜けるように準備するが、最初に扉を開くのは小萌先生。

「上条ちゃん、佐天ちゃん、なんだか知らないけどお客さんみたいです！」

そう言つて扉を開く小萌先生。

インデックスが私より前、玄関の廊下に出てしまったことを焦るけれどももう遅い。

見覚えのある二人がそこに立っていて、大男ステイル・マグヌスは不敵に笑う。

立ち上がる上条さん。

「テメエら、今更なにしに！」

「ふうん、その体じゃ簡単に逃げ出すこともできないみたいだね」

私の方はエプロンつけっぱなしの上からジャケットなんてわけのわからない格好だ。

上条さんは顔をしかめる。多分私も無意識に同じような表情をしているに違いない。

なるほど、上条さんをエサにしてインデックスを安全かつ確実に保護するってこと、くっ！

「帰って！　お願いだから、私ならどこにでも行くから！　私なら、なんでもするから！」

インデックスに駆け寄る上条さん——つてそんな怪我でっ！

私はインデックスと上条さんの前に立つ。

神裂は能力が無くなったことを知らないはずだからこそ、神裂に手を向ける。

「お願いだからとうまとるいこを傷つけないでっ！」

ステイルが、僅かに眼を細める。

「っ、リミットまで残り12時間と38分、逃げ出さないかどうか足枷の効果をみてみたかったんだけど予想以上だったね」

足枷？

「そのおもちゃを取り上げられなくなかったら、もう逃亡の可能性は捨てた方が良く、わかるね？」

出て行くステイル・マグヌスと神裂。

私たちは若干ながら警戒心を緩めて構えも解く。

リミットって何なのかまったくわからない。

「大丈夫だよ、私が取引すれば……とうまとるいこの日常はこれ以上壊させない、これ以上は絶対に踏み込ませないから平、気——」

意識を失って倒れるインデックス。

上条さんはそんなインデックスを抱えて先ほど自分が寝ていた布団へと運ぶ。

私はその二人を見ていることしかできない。なんだかんだ言っつて男の人ほど力があるわけでもない。

無力なこの手で、一体どれぐらいのものが救えるんだろうか……。

「佐天ちゃん」

「はい？」

小萌先生からの声に驚きながらそちらを見ると、小萌先生は微笑む。

「先生は何かあれば相談に乗るです」

「……どうも」

嬉しき半分、顔に出てたつてことで少しばかり反省。

さしてきて、とりあえず上条さんに聞かなきゃいけないことも沢山あるからこそ、上条さんの隣りに立つ。

しゃがんだままインデックスを見ている上条さんの表情は心配と言わんばかりだ。

それと、何かを悩んでいる。

「上条さん、病み上がりですが少し買い物に行きませんか？」

「え？」

何言ってるのでしょうか？　と言わんばかりの顔をしている。

だから事情を話してもらおうためにここから離れようって言ってるんですよ、言わせんな恥ずかしい。

「察しが悪いですね上条ちゃん、女の子から買い物のお誘いなんてデートに決まってるじゃないですか！」

小萌先生もなに言ってるんですか。

「インデックスちゃんのこととは任せて、息抜きもたまには必要です！」

「あついやね佐天さん、上条さんも非常にその言葉は嬉しいんですけど、そのこの状況で」

私は上条さんへと寄って耳元でボソボソと話す。

「良いから……それにリミットのことを小萌先生の前で聞いていいんですか？」

そう言ってからようやく現状を理解したのか、頷く。

魔術師たちもまだ私たちやインデックスに手を出すことはないよ
うなので問題ないはず。

じやなきや絶対にあの場で私たちを逃がすはずがないから……。

私と上条さんの二人で小萌先生のアパートから出て、歩きながら話を
をする。

病み上がりに悪いから、近場の喫茶店に入ることにした。
包帯を巻いてる上条さんと眼帯をつけてる私、中々どうして目立
つ。

席に案内してもらってすぐに飲み物を頼む。

「えっと、俺はコーヒーで……」

「私はカフェ・オレで」

店員さんはたった二つの商品を業務的に確認するとすぐに席から
離れていく。

そして私は上条さんの方に視線を向けた。

私が聞きたいことはいくつかあるけれど、一番聞きたいのはイン
デックスのことだ。

「リミットってなんですか？」

そう聞くと、上条さんは少しバツの悪い表情をする。

「俺がもつと早く起きてれば良かったんだけど、実はインデックスを
追ってる魔術師っていうのがインデックスと同じイギリス清教の奴
らだったんだ」

「どういうことですか？」

場合と状況によつてはこの問題はもつと大きいものになる。

上条さんの話によると、インデックスが持っている10万3000
冊の本っていうのは、完全記憶能力によつてということ、その完全
記憶能力とはどういうわけか脳の中が一杯一杯になるほど沢山ある
らしくきっかり一年で魔道書の記憶以外の記憶を消さなければ、イン
デックスは「死ぬ」らしい。

けれどそんなことはありえるの、かな？

都市伝説ハンターこと私は、都市伝説を調べているうちに特殊なこ
とを知る機会も度々ある。

サヴァン症候群……。知的障害のある人がまれになる症状、その中
には完全記憶能力というのものもあるけれど、それによつて死に至ったと
かいう話は私も聞いたことがない。

「それ、本当ですか？」

「ああ、神裂が言ってたんだ。とても嘘ついてるようには見えなかつ

た」

それは本当のことなのか、なんて聞く必要も無い。

上条さんの眼を信じるならば……でも上条さんも神裂も、ステイル・マグヌスも全員納得したの？

なんで記憶のしすぎで死ぬなんて、まさかこの人たち——馬、いやそんなことはないはず。

とりあえず私はこの可能性がわからないからこそ、席を立った。

「私は少し調べてくることがあるので、インデックスのことお願いします。お金は置いときますね」

「えっ、ちよつと佐天さん!？」

私は上条さんの声も聞かずに走って店を出た。

こういう時、いや頭や脳関連であればあの人に聞けば間違いないはずだ。

あそこまでの執念をひきずってずっとやってきたんだからそういうことにも詳しいはず。

そして私は、二時間ほどしてそこにいた。

「やあ、来てくれるなんて嬉しいね」

私の目の前で、ガラス越しにそう言うのは木山先生。

ネットで調べるなんかよりこの人の方がよっぽど信頼できる。

今回に限っては『勘違いでした』なんかじゃ済まされないことなんだから当然だ。

私は木山先生に真面目な表情で一礼してから言う。

「聞きたいことがあるんです」

「ん、なんだい？ 私に答えられることなら答えようじゃないか」

少しだけ微笑みながらそう言う木山先生に私は頷く。

「記憶のしすぎで人が死ぬということは……ありえますか？」

いたって真面目に、私はそう聞いた。

向かいに座っている木山先生は笑う。

「いたって面白いことを言うな、君は……」

そして答えが今出される……。

私はひたすら走っていた。

けれど、結局目的は達成できない、しかたがないと私は小萌先生の家へと戻った。

ノックは必要ないと聞いたからこそ、私はそのまま扉を開けて入る。

——私は運がいいのか悪いのか……。

「佐天さん、今神裂から」

良いです上条さん、私は今すぐその「馬鹿」に言わなきゃならないことがある。

私は上条さんに手を向けると、上条さんは察したのか私に受話器を渡してきた。

「もしもし」

『神裂火織です、貴女がまた敵となるのは厄介なのですが……』

敵？ 私が敵に回るって……違う。私はただインデックスの味方なだけだ。

「上条さんから聞いたよ、インデックスのこと」

『なら話は早いんじゃないですか？』

当然というようにそう言う神裂。

私はその愚かさに歯ぎしりをして、拳を握りしめて声を最大限押しさえて言う。

残酷だが現実だ。

「人間の脳は140年分溜めきれないようにできてる。人間の脳は記憶というのはいつの場所に入ってるわけでもない」

『なにを、言ってるのですか？』

「脳医学上ありえないんですよそんなものは、人間はどんなに記憶が溜め込まれても死ぬことなんてありえない。そんなことも調べずに誰かの言ってたことを鵜呑みにしてたんだよ貴女達は！ このツ、ド素人がツ!!」

怒りをこらえきれずに私はそう叫んでいた。

向こうから、動揺したような言葉にならない声が聞こえてくる。

私が嘘を言っていないことがわかってるからこそ、だと思っ

「嘘をついてたのは貴女達の上司、教会がインデックスが一年周期で記憶を消さないと死ぬっていう小細工をしてインデックスが裏切らないようにした。今すぐこっちに来てください！ ステイル・マグヌス連れてね！」

そう言っ

あ、二人の顔を思いっきり殴ってやりたいけれど、そんなことより今はインデックスのことだ。

この苦しんでいるのはなんのせいなのか、なんて考えても仕方ないことばかりだけどとりあえず今はあの二人を呼ぶ所から始めなければならぬ。

インデックスの体に細工がしてあるとすれば、どこ？

「人の目の届かないような場所、だな」

「……ッ」

へ、変なことを考えちゃったよ。

いやその可能性は少ない。絶対ない、というか個人的に寝てる相手の了承なしに体中を調べるなんていうのは……。

上条さんは右手の包帯を外していき、バツと外して笑みを浮かべた。

「俺たち二人でヒーローになってやろうぜ、佐天さん！」

私にもなれるかな？

いや、『なっ

なれるかじゃない、なると言う上条さんの確証のない言葉。

私はとりあえずインデックスの体に細工がありそうな場所を頭に浮かべていく。

「まだ上条さんが触れてない部分」

背負ったりしてきたんだから、上条さんの触れてない部分なんて……。

「どこ見てるんですか」

「えっ!? いやいや、上条さんは別につ！」

動揺しすぎですよ。てい

ああもう、大事な場所でなんでこんなことやってるんだか！
とりあえず深呼吸をしてから私はもう一度考える。

上条さんが口の中を覗く……なるほど、その発想は無かった。

「ん？」

何か見つかったの!?

「佐天さん、見てくれ」

言われて私はインデックスの口の中を見る。

確かにそこには細工と思しき謎の印のようなものがあつた。

これが本当にそうだとしたら……。

いや、本物だろうがそうじゃなからうが、今は上条さんに破壊してもらうしか道はないんだ。

私は黙って上条さんを見て頷く。これが終わればすべて平和に終われる。

「佐天さん、これを終わらせる前に、こんな時だけ言いたいことがあるんだ……」

「なんですか？」

少し驚きながら私は上条さんの方を見る。

私は突然両肩に手を置かれてビクツとしてしまう。

上条さんは私を真っ直ぐ見ながら、口を開いた。

「好きだ。これが終わったら付き合ってくれ」

……ふえ？

「いや、突然なにをと思うかもしれないけど本当だ。佐天さんと一緒にインデックスを救おうと誓う前から俺は佐天さんに惹かれてた、だけど今は本当に好きだ。真っ直ぐなその気持ちでインデックスを救うために全力な佐天さん、今の驚いてる佐天さん、俺は本気で——」

……いやいやいや、えっ？ ほ、本気っ……。

背後で、扉が開くような音が聞こえた。

「——佐天さんが好きだ！」

そう言った上条さんが私の方を見て少し驚いたような表情をする。

けど私は落ち着く訳もなく返事をした。

「ごめんなさい！」

私の返事に上条さんは燃え尽きたような表情をする。

いや、見ているのは私の後ろ？

その視線を辿って後ろを見れば、そこには神裂とステイル・マグヌスの二人。

「クツ、ククククツ、無様だなっ」

「う、うるせえよ！」

「その、ごめんなさい」

「謝んじゃねえ、余計惨めだ！」

笑うステイル・マグヌスと謝る神裂を怒鳴って、上条さんはため息をついて私の肩から手を離す。

落ち込んでる上条さんを見て、私はまだ言えていない言葉をつけたすことにした。

魔術師たちがいるから恥ずかしいけどしかたない。

「あの上条さん、私はただ付き合うのがまだ無理っただけですよ」

「え？」

「その、私はまだ誰かと付き合うとかいう気はないし好きな人もいないから……」

ああもう恥ずかしいなあ！　なんで私がこんなめにつ、不幸だっ……いや、不幸ではないけど。

「と、友達からはじめてっ、私を惚れさせてみてください！　まだ出会って間もないんですから、上条さんが言ってくれたらデートだってしますし、だから上条さんのその、その、その気持ちはまだ終わってもないというか、そのっ……」

うわあっ！　顔絶対赤い、ああもうっ、こんなことになったのも全部インデックスのせいだ！

今度ご飯作ってあげる予定があったら唐揚げ一つ少なくしてやるから！

上条さんは嬉しそうな顔してるし……。

「おう、俺頑張るからな佐天さん！」

返事をしても多分どうにもぐだぐだになるだろうから、私は黙って頷いた。

本当に上条さんは好きだけれど、恋人にとかいう感情じゃないのは確かだ。

けれどこれからも上条さんやインデックスも私の友達だ。上条さんとの関係は変わるかもしれないけれど、二人と一緒にというのはこれからも変わらない。

だから、私は頷く。

「まったく、インデックスが苦しんでいるのに呑気なものだね。で、結局インデックスを助ける術はあるのかい？」

ステイル・マグヌスも希望を抱いているのだろう。

だからこそ、声が僅かにはずんでいる。

上条さんが頷く。

「さあ、やってやろうぜ！」

私は両の頬を叩いてからキリツと表情を引き締める。

上条さんがインデックスの口の中に手を入れて、それに触れた。

瞬間、吹き飛ばされた上条さんに押される形で私も倒れる。

「なに!？」

私は声を出してインデックスの方を見た。

インデックスは黒いもやもやをまといながら起き上がる。

その両の眼には六芒星の模様が浮かび上がり、衝撃波が部屋をぐちやぐちやにした。

私と上条さんはすぐに起き上がり、後ろの神裂とステイル・マグヌスは驚いた表情のままだ。

「警告、第三章第二節、第一から第三までの全結界の貫通を確認。再生準備、失敗。自動再生は不可能。現状十三万三千冊の書庫の保護のため、侵入者の迎撃を優先します。書庫内の十万三千冊の魔道書による、結界を貫通した魔術の逆算、失敗。該当する魔術は発見できず」

上条さんと私は起き上がってなにが起こるともわからないその状況に構えた。

始まる。

なにが？

簡単なこと——決戦だ。

20、幻想殺し（エイマジンブレイカー）

起き上がったインデックスは私たち四人をその無機質な目で見据える。

上条さんが私の前に出て、右手を構えた。

私も私ができることを、最大限やらなきゃいけない。

目の前にいるのは、いつだか見たインデックス、自動書記だ。ヨハネのペン

「術式の構成を暴き、対侵入者用のローカルウエポンを組み上げます。侵入者個人に対して、最も有効な魔術の組み合わせに成功しました」
紅の巨大な魔法陣がインデックスの前に展開される。

「これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動。侵入者を破壊します」

黒い何かインデックスの前に展開された。

危険だと頭の中で本能が叫んでいるけれど今、ここを引くわけにはいかない。

「そういや、一つだけ聞いてなかったっけか……超能力者でもないテメエが、どうして魔術を使えないのかってわけ」

そんな言葉にもインデックス、いや自動書記ヨハネのペンは表情一つ変えることなく、突如輝いた。

インデックスが顔を少し曲げると、上条さんの方に視線を向けて光線を放つ。

弾幕ごつこの時にみるようなそれに似ている気もするが、こちらの危険度は比じゃない。

「ぐうっ！」

上条さんはその右手で光線を防ぐ。そう、壊すことはできないのはたぶん放出し続けているからだ。

右手の異能殺しが、処理負けしてる。

後ろの動いていない二人、私は上条さんの体を後ろから支えた。

じやなきや後ろに吹き飛ばされそうだから。

「まさか……」

「なんであの子が、魔術を……」

「決まってるんだろ！ 教会が嘘ついてたっただけだろうが！」

上条さんの叫びに、わかってはいてもわからないとしていた二人は驚愕した。

自分たちのいる組織が自分たちを裏切っているなんて考えたくないものだと思う。

私も紅魔館が私を裏切っていたら……いや、自殺ものだわマジで。

「上条さんがインデックスの頭の中の魔術を破壊すれば、インデックスはもう記憶を失う必要はないんです！」

「聖ジョージの聖域は侵入者に対して効果が見られません。ほかの術式に切り替え侵入者の破壊を継続します」

瞬間、放たれる光線の音が変わった。

放たれる光線の出力はさらにあがり、私と上条さんは徐々に押されていく。

上条さんも右手が殺しきれずに血が吹き出す。

こんなのっ、どうしようもないっ！

「Fortiss931！」

叫びと共に私のさらに後ろから手が伸びてきて、上条さんの背中に手を当てる。

それはステイル・マグヌスで、部屋中にルーンの描かれた札が貼られていた。

「曖昧な可能性なんていらない、あの子の記憶を消せばとりあえず命を助けることができる。ボクはそのためなら誰でも殺す、いくらでも壊す、そう決めたんだ。ずっと前に」

上条さんはそんなステイルの言葉を聞いて、インデックスの方を向きながら言う。

「とりあえず、だあ？ ふぎけやがって、そんなつまんねえ事はどうでも良い！ 理屈も理論もいらねえ、たった一つだけ答えろ魔術師!!」

「——— テメエは、インデックスを助けたくないのかよ！ テメエら、ずっと待ってたんだろ!! インデックスの記憶を奪わなくて済む、そんな誰もが笑って誰もが望む最っ高に最っ高な幸福な結末^{ハッピーエンド}ってやつを！」

上条さんの手からまた血が出る。

「今までずっと待ち焦がれてたんだろ、こんな展開を！ 英雄がやつてくるまでの場つなぎじゃねえ！ 主人公が登場するまでの時間稼ぎじゃねえ！ 他の何者でもなく他の何物でもなく！ テメエのその手で、たった一人の女の子を助けてみせるって誓ったんじゃないのかよ!? ずっとずっと主人公になりたかったんだろ！ 絵本みてえに映画みてえに、命を賭けてたった一人の女の子を守る。そんな魔術師になりたかったんだろ！ だったらそれは全然終わってねえ!! 始まってすらいねえ!! ちつとぐらい長いプロローグで絶望してんじゃないねえよ!!——手を伸ばせば届くんだ。いい加減に始めようぜ、魔術師!!」

だが上条さんの手がブレていき光線が私たちを襲うかと思ったとき——。

「Saiveree000!!」

背後から声が出たと同時にワイヤーで畳を返してインデックスの体を動かす。

私はその瞬間、上条さんから離れて走る。そして走りながら眼帯を外して投げ捨てた。

あの光線のぶつかる部分がずれて上条さんも楽になっているから、この隙に私は！

目的は上条さんがインデックスの頭に触れること、なら私がやるべきことはこの手でそれを全力でサポートすることだ。

「数日前までは殺し合いをしていたこの場のみんなが今一緒になって、幸福な結末を望んでるんだ！ みんなのために、上条さんがインデックスの絶望を殺すのなら！ まず私が、その希望を守りぬく!!」
私は全力で走ってインデックスのそばまで寄ると拳にてインデックスの顎を打つ。

——ごめんっ！

でもこれで気絶でもしてくれれば、とも思うけれどそうはいかないだろう。

拳でインデックスの顎を打った結果、小萌先生の家の屋根を吹き飛

ばすことになったけれどまあ、頑張つて謝る。

「ん？ なにこれ……」

後ろの方で上条さんも口にしてる。

「これは、竜王の息殺つ!? 伝説の聖ジョージにあるドラゴンの一撃と同義です！ これに一枚でも触れれば、大変なことになる！」

破壊された天井の残骸なんて降ってくることもない。

天井の破壊された破片などはすべて綺麗な羽へと変わっていた。

私はそれに魅入りそうになるも、自制してインデックスの方を向く。

しっかりと羽へと気を配りながらインデックスの方を見れば、再びインデックスは上条さんへと光線を向ける。

やっぱり気絶はしてくれないかっ！

「イノケンティウス！」

現れた炎の巨人が、上条さんを守る。

私も私でもう一度インデックスの攻撃の射程をずらすために拳を構えた。

「行け！ 能力者！」

走り出す上条さんだけれど、インデックスは少しずつ後ろに下がっていく。たぶん右腕から逃げるためだけれど……。

私はそんなインデックスを背後から羽交い絞めにした。

これで上条さんからは逃げられない。

「佐天涙子の接触を確認。現状最大の障害となる上条当麻接近を防ぐため佐天涙子を破壊するため、防御魔術を発動します」

瞬間、インデックスの体から雷が放たれる。

「ああああアアアっ!!」

まさかっ、これも十万三千冊の魔道書の一つの力。

ただどこかでインデックスを離すわけにはいかない。ここで離せば全部ダメになってしまうっ！

イノケンティウスがインデックスの攻撃を防いでくれている。

まだまだ、上条さんが今来てる。

「あああっあッ！」

電撃が私の体に流れるけれど、まだだ。まだ！

走ってくる上条さん、もう手が届く範囲っ！

「神様、この世界があんたの作ったシステムの通りに動いてるって言うんなら……まずはその幻想をぶち殺す！」

——上条さんの手がインデックスの頭に触れた。

音が止み、すべての攻撃が止まり、私も電撃の拷問とも言える状態から解放される。

まったく白井さんじゃないんだからそんな趣味ないっていうのっ……。

インデックスから力が抜けて、私は悲鳴をあげる体を使ってインデックスを支えた。

ブツブツと何かを言った後、ヨハネのペン自動書記は活動を止めた。

「終わった……」

私はインデックスを上条さんに預ける。

膝が笑ってるのは、緊張の糸が途切れたのと、ダメージのせい。

降り注ぐ幻想的な羽……ッ!?

「早くそこから逃げて！」

神裂の声に、私は上条さんを蹴り飛ばす。

つまり抱えているインデックスも一緒に吹き飛ばすわけで、羽が降り注ぐ場所にいるのは私だけ。

危なかった、危うく上条さんの頭に羽が触れるとこだった。

ふう、力抜けちゃったなあ。もう「立てない」や……。

上条さんの叫び声が聞こえるけど、もう無理……。

私は横になって空から降り注ぐ羽を見る。

綺麗だなあ……。

今から私を破壊するであろうそれを見ながら、私は目をつむった。壊されるなら、最後に居眠りぐらい良いじゃない。安らかな顔で死にましたってねえ。

フツ、インデックスや上条さんとゆつくり過ごすのも夢見てたんだけど、相変わらず私ったら不幸だなあ。

でも、まあいつか……そんな不幸も悪くないって思ってたし、ね？



ん、ここはどこだろう？

私は目を覚まして周囲を見渡す。真っ白なこの部屋は病院に間違いない。

というより数日前に私はここに……あれ、私は生きてる。

体は……。

「痛ッ」

体中が痛む。

「無茶はしない方が良いと思うね、ボクは」

つい最近見たばかりのカエル顔の医者がそこには居た。

名前は知らないし、知る必要もない。なんで私が生きてるのかなんて聞かなくてもいい。

この人は神裂にぶった切られた私のお腹を傷一つなく治した化物医者だ。

「体のいたるところに火傷があったんだ。あと右肩が疲労骨折していたよ、傷一つなく元に戻したけど……それよりもその腕は他人のものだね？」

そんな言葉に、私は静かに頷く。

深くは聞くことはないのがあるがたい。

そう言えば病院に運ばれてきたのは私だけ？

「上条当麻って」

「いるよ、今はここから十部屋向こうの部屋だけど、もう少し時間を置いてからが良いんじゃないかな？ 君も彼も怪我をしていたわけだからね」

そう言っつて、カエル顔の医者は病室から帰っていく。

私は部屋で一人少しだけ考えていたけれど、すぐに立ち上がった。体が痛むけれど知ったことじゃない。

私は上条さんとインデックスに会いたいんだ。一刻も早く二人の笑った顔が見たいんだっ。

「はあっ、っ……」

スリッパを履いて、壁に寄りかかりながら、体中の疲労感と戦いながら歩く。

病室から出て倒れそうになるもこんなところで倒れたらもれなく自室へ強制送還だ。

私は壁を伝って上条さんの部屋の前へとやってきた。

十部屋つて遠すぎだっのっ！

ようやくもうすぐつてとき、上条さんの病室から声が聞こえた。

「君、ほんとは何も覚えてないんだろう？」

私は止まった。呼吸すらも忘れそうになりながらも、私は扉の向こうの会話に耳を澄ます。

「確かに、あの事件のことは二人に聞いたままに伝えただけ……」

えっ、なにを言ってるんですか？

「俺、なんだかあの子に泣いて欲しくなくなって思ったんです、そう思えたんですよ、この感情がどういものかわからないし、きつと思いつくこともできないけど」

上条さん？

私は病室の前から動けないでいた。

「確かに、そう思うことができたんです。案外、俺はまだ『憶えてる』のかもしれないですね」

「君の思い出は脳細胞ごと死んでる。脳には情報が残っていないはずなんだけど……なら、一体どこに思い出が残ってるんだっというんだい？？」

カエル顔のお医者さんの言葉が聞こえる。

脳細胞ごと死んでるっていう上条さんの思い出記憶というのは、どういうこと？

「そりゃあ、決まっていますよ……心に、じゃないですか？」

その声が聞こえてから、会話が止まったのを感じて私はその場から先ほどよりも早く立ち去った。

自分でもなんでこんなスピードで動けるのかわからないような速度、だけれど病室までもう少しのところまで体勢を崩して、私は近くのベンチに座ることになった。

やばい……うそ、そんなっ……。

「あつ、るいこー！」

聞き慣れた声にどこか安堵を感じながら私はそちらを見る。

「るいこの病室がわからなくて変なところに行っちゃったんだよ」

「と、遠いからね。そう言えば私……」

聞かなきゃ、私が聞かなきゃ。

「私はどうなったの？」

「私も聞いた話なんだけど、とうまが右手の『イマジンブレイカー幻想殺し』で涙子に降りかかったた羽を全部破壊してただけど、間に合わなくて涙子をかばって頭を打ったんだよ。だけどひどいんだよとうま、わざと記憶喪失のふりして私を騙して……」

インデックスの話が続くけれど、私にはそれに構っているほど余裕は無かった。

「ごめんインデックス、少し体調が悪いから病室にもどるね」

「あつ、うん。明日も来るね！」

「ありがとう」

私は再び全速力で壁をつたい、病室へと入った。いや、倒れ込んだといった方が正しいかもしれない。

後ろで扉が閉まる音を聞いてから、私は口を押さえた。

「うっ……」

吐き気と共に、吐き出したのはただの胃液。

逆流して流れ出たそれなんて気にもならず、私はベッドの方まで這う。

私のせいだ。ただ、私のせいだっ！

なにが守るだっ、私がっ、私が守られて、結局なにもできずに、結局被害を被ってるのは他人だけじゃなか！

「わたしはっ、役立たずの無能力者じゃなかっ、結局っ……」

私があそこにいようがいまいが結果は変わらなかったはずだ。

それぐらい私は役立たずで、何も出来ていない。

いつそのこと死ねれば良かったっ、なんで私なんかが生きて上条さんが「死ぬ」必要がある!?

「アアアアアッアッ!!」

大声で叫びながらベッドを何度も叩く。

「うっ、わ、だじっ……はっ、なんでっ」

いつもこうだ。私が自分で良くやったって思っても、私を助けて何かを失うのはみんなばかり。

レミリア様も、美鈴さんも、上条さんもだ。

なんで私なんかのためにみんな大事なものを投げ売ってまでそんなことするのか、私にはまったくわからない。

この一日、私はずっと泣いていた。誰もお見舞いに来なかったのが、唯一の救いかもしれない。

このちっぽけな腕で、一体なにが守れるっていうんだろう。

私は答えのない問題を考えながら、泣き疲れて眠ってしまった。

21、帰還〈帰宅〉

私が起きた翌日。昨日のことで涙なんて枯れ果てて、私はただノートPCをいじっていた。

昨日の夜から記憶喪失について良く調べたつもりだけど、ダメだ。脳細胞が完全に死んだケースなんてどこにもない。

夜見回りに来た看護婦さんに怒られたけど、まあそんなことを気にしているわけにもいかなかった。

私はブルーライト遮断眼鏡の位置を少しだけ整えてまたページを開く。

突然、ノックの音がした。

私はびつくりしながらも、どうぞと口にすると思扉が開く。

「佐天さん！」

入ってきたのは初春で、私は驚いた。

だって誰にも伝えてないから、私が入院したってことは誰にも話したくなかったから。

それも全部、私にとってはただの恥だ。

私が居て、一体何が起きたって言うんだ。

「大丈夫ですか佐天さん!?!」

私は意識をこちらに戻す。

初春のほかにも後ろには白井さんに御坂さんまで。

「あら佐天さん、眼鏡なんて珍しいじゃない?」

御坂さんの言葉に、私は確かに珍しいと思ったけど自宅でパソコンをやるときは最近はこうしてる。

調べ物が多いから余計にかけることも多いしね。

とりあえず私は『そうですね』とだけ答えた。

「案外お似合いになるのですね。まあっ！ まあっ！ お姉さまがかけたらもっとお似合いになると思っふっぎいっ！」

電撃を浴びる白井さん。

「ごめんね佐天さん、騒がしくて」

「いえいえ大丈夫ですよ」

私は眼鏡をつけたままそう言って笑う。

「ああ、佐天さんこれをどうぞ」

即座に回復してきた白井さんは私のベッドの隣りのテーブルに小さな箱を置く。

中身はケーキかなにかだと思う。私は軽くお礼を言ってから三人を視界に入れる。

なんだか、羨ましくなった。

別に、魔術に関わったことに後悔してるわけじゃない。インデックスを助けることができたというのは確かだしね。

だけれど関わることなんて無かったらな、なんてことを少しだけ思ってみたりする。

きっと私はただただ普通に御坂さんたちと日々を過ごしているに違いない。

「佐天さん、大丈夫？」

御坂さんの言葉に、私は首をかしげた。

「何がですか？」

「いや、少し無理してるように見えるから」

さすがに敏感に気づいてくる。

少しばかり仮面の付け方が甘かったということもあるんだろう。

色々と心の中に溜まってもやもやしてるせいもあるのかな……。

だって仕方ないじゃんか、結局上条さんの病室にも一度も行けてないし、ああダメだネガティブなことばっか考えちゃうや。

私はパソコンを閉じて眼鏡を外す。

「あれ、固法先輩も居たんですね」

「失礼ね、ケーキだって私のおごりなんだから」

そう言って笑う固法先輩。

四人で来てくれるなんて嬉しいなと思う。

それでもやはり心の中にあるソレは取れないし、忘れることもできない。

「ありがとうございます。このあと食べさせてもらいますね」

別に食事制限とかもされてないし、問題ないはず。

「ところでどうして私が入院したってみんな知ってるんですか？私、誰にも言っていないはすですけど……」

「月詠先生から聞いたんです」

小萌先生、なんで私の友達知ってたんだろう。

ともかく後で小萌先生にはお礼の電話でもしておこう。

「で、怪我のことですけど？」

「ノーコメントで」

即座に返すが四人が四人とも微妙な顔をして私を見てくる。

でも魔術だとかの話はこの四人にするわけにもいかないし、この四人を魔術のことに巻き込みたくもないしね。

私は怪我のことを伏せて三人と軽く雑談と洒落込むことにした。

少しだけけど、気持ちも楽になりはしたのは確かだ。

「佐天さん、私たちとあったときから怪我してばっかな気がするんだけど、昔からこう？」

ついつい御坂さんが怪我の話題を掘り下げた。

少し驚きながらも、私は仕方がないので答えることにする。

「最近かなあ、やっぱ私って不幸だ」

そう言うのと御坂さんがピクッと反応した。なんかあったかな？

まあ良いや、とりあえず私は軽く左腕を握る。

感覚はしつかりとあった。

「そう言えば佐天さん、昨日は寮にも帰ってなかったですよね」

「お泊り!? お泊りなの佐天さん!？」

うわっ、胸倉掴まないで固法先輩っ！

「ち、違いますよ！ 昨日の夜に私は病院に運び込まれたんですから！」

「夜遊び!? 私は許さないわよ佐天さん！」

「なにこれ鬱陶しい!？」

怪我してるんだからそつとしいてよって思うけど、こうしていると忘れることができるし悪くない。

私の肩を掴んで私を思いっきり揺らす固法先輩を止めようとする御坂さんと初春。

なんか白井さんは怪しんでるしく。
はあく不幸だあ。

なんだか良くわからないけど暴走する固法先輩を連れて帰った御坂さんと初春と白井さん。

私は気崩れた服を整えてからまたパソコンで調べようと思ったけれど……やめた。

やっぱりどうしようもないと頭で整理がついてるんだ。

「るいこ〜！」

大きな声と共に扉を勢いよく開けて入ってくるのは、もちろん彼女だ。

「病院内ではお静かに、じやなけりやインなんとかさんとか呼ばれちやうよ」

「むう、私の名前はインデックスなんだよ〜！」

「わかってるから、病院内ではお静かに」

そう言うと、インデックスは笑顔で頷いた。

私はそつとインデックスの頭を撫でてから、どうしたのかという疑問を口にしようと思った。

けれどそうはいかずに、その前に私の声が出なくなる方が早い。

「よお」

そこに居たのは姉御さんと重福さんの二人だ。

ああなんていうかめんどくさいことになりそうな予感。

「どうしたどうした、お前がなんでそんなことになってんだ？」

姉御さんはニヤニヤしながら私のベッドの横に立つ。

正反対に重福さんは心配そうに私を見てくれる。

なんなんですか姉御さん。

「変なこと首突つ込んでやられたんだろ」

くしくも姉御さんの言葉通りだ。

「佐天さん、大丈夫ですか？ お怪我はありませんか？ もし佐天さ

んの身に何かがあったら私はっ、私はっ」

うん、友情が重い。

「なんでこの二人が？」

「涙子の寮の部屋前に居たんだよ！」

「なんで私の家に行ったのさ。」

「かおりからの手紙を入れたんだよ」

なるほど、神裂から手紙とはていうか私に渡せば良かったんじゃない、なんて言うのも野暮か。

きつと私の家で読まなければならぬこともあったんだと思う。

とりあえず私は二人にありがとうとお礼を言う。

そもそも私の家の前にいたのはなぜかというのもなんか怖いからやめとく。

「その、あんま無理すんなよ。無能力者^{レベル}なんだし……高位の能力者には勝てないだろ、さすがに」

その言葉に、当然のようなその言葉に、私の穏やかだった心が陰る。

「わかってるよー！」

つい、怒鳴るように言ってしまった。

数秒してすぐに、私は自分が何を言ったのか理解して口を塞ぐ。

驚いてる三人、そしてすぐに姉御さんは涙目になる……え？

「お前なんかもっとポロポロになれば良かったんだ！ ばーかー！」

それだけ言うと姉御さんが走り去ってしまった。

「わ、私もこれで失礼します。また来ますね佐天さん」

重福さんもそそくさと帰っていった。

せつかく来てくれた二人に対してなにやってんだろ私。

ため息すら出てくるけれど、今はインデックスの方を見ることにした。

驚いていた表情は一転、心配するような表情だ。

さすがシスターだと、私はインデックスのシスターたる片鱗を見た。

「今は下手なことは言わない方が良いつて、私は思うんだよ」

うん、そうだね。

「また明日来るね、あの二人にも今度謝ろう？」
うん。

「じゃあまた明日」

インデックスはそれだけ言うのと部屋を出て行った。

私ってやつは一体なにしているんだかあ。完全に八つ当たっちゃったよ！

ごめんね姉御さん。

もお……なんていうか不幸というより今回は自業自得だなあ。

私はとりあえず今度会ったときになんて謝ろうと考えたり、上条さんへの罪滅ぼしのことを考えたりしながら眠りについた。

◇◇◇◇◇

少し明るい光のせいで、私は自然と眼を覚ました。

見慣れた天井を見ながら起き上がって、私は怪我をしているの思っ出して痛む体に気を使いながら起き上がる。

痛まない部分の体を伸ばして、窓を開く。

整えられた庭は私のお気に入りでもある。

「さて……あれ？」

バツ、と私は周囲を見渡す。

髪の毛のセットぐらいにしか使わない化粧台。

私の制服を入れていたクローゼット。

スタンドライトの乗ったテーブル。

「……は……」

「あああああつ!!？」

叫び声に、私はそっちに視線を向ける。

そこには真っ赤な瞳をした金髪の吸血鬼女の子が一人。

見慣れた少女を見て私は嬉しくなる半分、驚き半分だ。

「涙子〜！」

「げふうっ！」

思い切り抱きついてきた「フラン」を受け止めそこなった私。

腹部に直撃したフランにダメージを受けて、さらに倒れた反動で壁に頭をぶつけてダメージ。

合計のダメージは私の最大HPを突破して……帰宅帰還の喜びを噛み
締める暇もなく意識を飛ばした。
——まったく、最初から不幸だ。

第三章 紅魔の佐天さん

22, おかえり

ふと、私は眼を覚ました。

そこは見慣れた天井で、私はデジヤヴを感じながら起き上がってベッドから起き上がろうとした瞬間、私は固まった。

私のベッドの隣りで、上半身をベッドに預けた状態で寝ているのは、小悪魔さん。

まあこの館でまともな治療技術持つてるのなんて咲夜さんと小悪魔さんぐらいなもので……。

「つていうか私、紅魔館に帰ってきたんだった!?!」

ついつい大声を出してしまった私、そして私の声によって小悪魔さんが起きる。

「はっ！ 起きたんですか涙子さん!?!」

そう言った直後、小悪魔さんは部屋から駆け出て行った。

これは大騒動の予感。

まあ、嬉しくないわけじゃないけど。

「起きたのね涙子!?!」

そう言って入ってきたのはフランだった。

私を気絶させた張本人ことフランは再び私に飛びついてくるけれど、今度はうまく受け止めることに成功。

ベッドで状態を起ここしてる私の上に乗って嬉しそうに笑っている。次に入ってきたのは咲夜さんだった。いや、入ってきたというより

私の視覚では突如現れたように見えるんだけど。

「涙子、元気だったかしら?」

「はい、ナイフの投擲役にたちましたよ」

「なら良かったわ」

そう言って静かに笑みを浮かべる咲夜さん。

ドタドタと音がして、現れるのはレミリア様を肩車している美鈴さん。

お茶会でもしてたのかな？ あっ——。
入ってくる時扉の枠にレミリア様が頭ぶつけた。

「うー」

久しぶりの再開でさっそくカリスマがブレイクされているレミリア様を、美鈴さんはおろして私の方を見る。

私にくれた腕は相変わらず無い。

気にしないなんてことはできない、また私は他人に迷惑をかけてしまったから。

頭を押さえていたレミリア様が立ち上がって私の方を見た。

レミリア様は左目に眼帯をしていた。

「どこ行つてたのかしら、涙子？」

「そんなふうに言わないでもいいんじゃないですか、いなくなつてからずいぶん心配してたのに」

「うっさい、この馬鹿門番！」

なんだか懐かしいこの環境。

ん、また音がするから、今度は図書館の……でもこんな走つてるつてことはパチュリーさんじゃない？

小悪魔さんかな？

扉が開けば、そこには紫色の動かない図書館って——。

「パチュリーさん!?!」

「か、帰って、ハアツ……来たつてつ、ゲホゴホゲホゲホツ!!」

「ぱ、パチュリーさああんっ!?!」

今にも倒れそうなパチュリーさんを駆けつけた小悪魔さんがなんとかしようとする。

なんだか相変わらず騒がしいというかなんとか……でもこ
うあるからこそ、私は上条さんへの罪も少しの間だけ忘れられる。

ホント、こうやってふとした瞬間に思い出しちゃうと少しだけ落ち込みそうになるけど、それがバレたらみんな心配する。

「まったく、佐天が帰ってきたと思つたらもうこんな大騒ぎとはね」
久しぶりの声でした。

レミリアさまたちが家族だとしたら、この声の主は初春と同じぐら

い大事な親友だ。

開かれた窓の縁に両足で立ち腕を組む少女。

彼女は僅かな冷気を漂わせながらその場で笑みを浮かべる。

「吸血鬼としてはもつとえれがんとに振舞うものじゃないレミイ？」

「うるさいわね馬鹿妖精」

「馬鹿じゃなく天才だって言ってるでしょ、フツ」

見ていれば天才に見えないこともないけどその本当の姿は……ただの馬鹿。

彼女は軽く跳んで床に足をつける。

「チルノ、久しぶり」

私は親友ことチルノにそう言っただけで笑みを向けた。

彼女も私に笑いかけてくれる。だから私はやらずにいられたかった。

迷わず私は手を伸ばして、そのスカートをまくり上げる。

——今日は白に水玉、実に妥当。

「っ!!」

チルノはすぐに顔を真っ赤にしてスカートを押さえ後ろに下がる。

「なになっ、なにやってんのよ佐天！」

怒るチルノだが私はベッドの上で笑うのみ。

ああ、いきなり動いたから体が痛くて痛くて……。

でもたぶんこの痛みは、フランが私の腰の骨をガツガツと殴ってるからだと思う。マジで痛い。

てかなんで殴られてるのさ私っ。

「佐天、帰ってきてきて早々この暴挙とは許さないわよ！」

「チルノみたいに可愛い子に許されなくても怖くないよ」

そう言うと、チルノは怒った表情を緩めてからそっぽを向いてしまった。

「じゃあ佐天さん、私が怒ります」

それはめっちゃくちゃ怖いです。

「だ、大ちゃん」

チルノと同じように窓から入ってきたのは大妖精の大ちゃん。

すっごい表情で私を見ている。

いやもう怒ってるとかそういう次元じゃなく、ただただ恐怖を感じるこれは、なんでしょうか？

咲夜さんや美鈴さん、小悪魔さんはおろかパチュリーさんとレミリア様も大ちゃんの気迫に負けて何も言えずにいる。

「(私の)チルノちゃんにナニしてるんですか佐天さん？」

「えっとね、その……チルノだし良いかなって」

「チルノちゃんだから(性的なこと)しても良いんですか!? 見損ないましたよオっ！」

恐ろしい形相で迫る大ちゃん、一体私にどうしろというのか……。

しかしスカートめくりをやめるということは私に死ねと言うのと同義、あまりにもつ、あまりにもそれは酷な頼みっ！

でも、大ちゃんの恐怖と比べればだいぶましかも……。

遅れて入ってきたルーミアちゃんが、私を見て困った顔を見ると大ちゃんへと近づく。

「大ちゃん、そのへんで——」

声をかけたルーミアちゃん、それが不味かった。

この状態の大ちゃんは言わばデューク東郷、それに等しいなにか、不用意に近づけば……狩られる。

大ちゃんは今まで見たことのないような動きで回転して手に出した「弾幕として使うはず」のクナイをルーミアちゃんのこめかみに突き刺してそのまま回転力を失うことなく私の方をもう一度見る。

「桃白白タオバイバイ……かつっ！」

倒れるルーミアちゃん、たぶん流れるにはそのうちメカになって帰ってくるはず。

まあ当面の問題として私にハイライトのない目で迫ってる大ちゃん、この子をどうにかするのが問題。

やばい、大ちゃんのプレッシャーで紅魔館とレミリア様のカリスマがヤバイ。

「大ちゃん、も、もう良いよ」

現状にチルノもやばさを感じたのか大ちゃんを押さえるようにす

るけれど、大ちゃんは凄い勢いでチルノの方を向く。

「良いの!?! 本当に良いの!?! 私チルノちゃんのためなら佐天さん殺せるよ!」

友達が遠くに行ってしまいました。そして友達に殺せる発言されたのは始めてです。

「だ、大丈夫だから大ちゃん」

「そう、そっか」

大ちゃんから発せられる威圧感が無くなり、全員が安堵のため息をつく。

力量がどうかという問題じゃなく、ただ単純に大ちゃんの威圧感は恐ろしく、もはや全生物のDNAに働きかけてくるほどの恐怖に違いない。うん、そうだ。

さもなくてレミア様たちがビビるわけがない。

落ち着いたことで、レミア様が軽く咳払いをする。

「なにはともあれ、とりあえず佐天が帰ってきたので宴会でも開きましょう!」

そう言つて後に『わーい!』と喜ぶ美鈴さんやチルノちゃん。

まあ私はまだ体の調子が完全に回復してるわけじゃないし、やっぱりダルイからあまりはしゃがないようにしましょう。

でも、いざ宴会場に言つたらはしゃいじやいそう。

倒れているルーミアちゃんを見ればこめかみの血で『犯人は腹黒妖精』と書いてある。

下手に詮索するところらの命もやばくなるので見てないことにした。

「宴会を開くんじゃ久しぶりに霊夢さんや魔理沙さんに会えますね!」

私がそう言うのと全員笑顔を浮かべてくれる。

「じゃあ、宴会の準備はしておくからゆっくり休みなさい」

レミア様がそれを言うのと安心したのか、みんなが順番頷く。

「あと涙子、おかえり」

そう言つたレミア様、それを機にみんなから「おかえり」という

言葉を送られる。

一通り言うと、みんなが病み上がりの私に気を使つて部屋を出ていく。

パチュリーさんと咲夜さんが出て、美鈴さんとフランが出て、レミリア様とチルノと大ちゃんが出て行つた。

そして部屋に残つたのは私と意識不明のルーミアちゃんと、小悪魔さんの三人。

「大丈夫ですか？」

小悪魔さんの言葉に私は内心ドキツとしたけれど、仮面を付けて私は笑みを浮かべる。

「何がですか？」

「いえ、大丈夫ならこれで失礼します」

出ていく小悪魔さん、私は黙っていることしかできずにいた。

今の言葉で自分の心の中にある負の感情、闇を認識してしまつてまたその罪が頭の中に溢れる。

私は『結局』とか『私のせい』とかそんな並の言葉ばかりが頭の中を一杯にしていく。

やだっ、思い出しちゃダメだっ、紅魔館でこんな姿を見せたらみんなが私を心配しちゃうっ。

少しでもこの苦痛を紛らわしたくて、私は地面に倒れてるルーミアちゃんをベッドの上に入れて、その小さな体を抱きしめて目を瞑る。

他人のぬくもりがあるというだけで気持ちがいぶ変わってくるのがわかる。

その安堵に、私はすぐに意識を失ってしまった。

23, 幻想サイド

彼女、宵闇の妖怪ルーミアは静かに目を覚ました。

最後にあった記憶は大妖精を止めようとしたらこめかみを刺されたことぐらいだ。

大妖精をぶつ○したいところだけれど、いつものことだと諦めることにした。

それよりもルーミアとしては現状の方が先ほどよりよほど危険に思える。隣りで寝息を立てて寝ているのは間違いなく自らの友達である佐天涙子。

彼女のことはチルノに紹介してもらったが、この性格故すぐに友達として好きになれた。だけれど彼女を自分より好きな人物は山ほどいるこの紅魔館、見つければ先ほどと比にならぬほどの苦痛が待っているのは間違いないだろう。

「これは、まいった」

ため息をついてから、そつと上体を起こした。だが自分の足に涙子の足が絡みついていてことに気づいて汗が流れてくることを自覚する。

これでは脱出できない。

おのれ佐天涙子と思いながら脱出方法を考えていると、ドアが開く音がした。

「まず……」

ルーミアがつぶやいてドアの方を向くと、そこには自分と同じく金髪の吸血鬼。

彼女は啞然とした表情で自分を見ている。

ならばどうするかとルーミアは思った。が、思いつかない。

「ルーミア、涙子と一緒に寝てたのね！」

そう言っただけで笑いながら近づいてくる「フランドール」にルーミアは安心した。

もう遅いが涙子の足から抜け出してベッドを下りると、笑うフランに笑い返す。

「こ、殺されるかとおもったわ」

心底安心するルーミアに、フランは変わらず笑顔でそばに寄る。

「涙子と一緒に寝るだけで殺すわけないじゃない」

またあのパターンにはならない。

ルーミアは気を抜けば叫んでしまいそうならい嬉しかった。

「なんて言うと思った？」

笑顔のフラン、気を抜けば出そうな叫びは意味を変える。

「そ、そーなのかー」

気を失う直前、ルーミアが見たのは自分と話をするフランドールではなく、フランドール・スカーレット”だった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ん、やば、どんぐらい寝てたんだろ。

私は体を起こしてまずベッドの横で寝ているであろうルーミアちゃんを起こそうとする。

けれど、そこに居たのは同じ金髪でもルーミアちゃんじゃなくて。

「おはよう涙子」

「あれ、フラン？」

「今ベッドに入ったばかりなのに起きるの早いんだね」

そう言われてから外を見ると日が暮れそうな感じ。

起に来てベッドに入ったのかな？

あれ、じゃあルーミアちゃんは……ん？

なぜか私の部屋の中央にクレーターができていた。そしてその中心で倒れているルーミアちゃん。

「る、ルーミアちゃんー！」

私は飛び起きてルーミアちゃんに駆け寄る。

まるでヤムチャのように倒れているその姿を見ると、なぜか悲しくなってきた。

ルーミアちゃんはヤムチャなんかとは違うと言いたいけれど、目の前で倒れているルーミアちゃんは間違いなく、かませ犬のおいがし

たから。

とりあえずゆすつてみるけれど、起きる気配がない。

「ルーミアを起こさないで、死ぬほど疲れてる」

疑問も感じるけれど、とりあえずフランもベッドから出たのでヤム

——ルーミアちゃんをベッドの上に乗せた。

とりあえず体はだいぶ楽になった。

「じゃあ涙子、パーティーの準備ができたから行こっ！」

そう言われて私はルーミアちゃんが良いの？　と思うも死ぬほど疲れてるみたいだからそつとしといてあげようと思った。

私はとりあえずフランと一緒に更衣室に向かって自分のロッカーからメイド服を出して着る。

「よしー！」

紅魔館メイドこと佐天涙子復活！

パーティー会場こと大広間に向かうことにしましょう！

広い紅魔館を歩いて大広間の扉を開くと、大きな音に私はビクツと驚く。

『お帰りー！』

なんてシンプルでいて嬉しい言葉だと私は内心泣きそうになる。

鳴らしたクラッカーを持っている面々の顔を見て私は笑顔を向けた。

「ただいまー！」

紅魔館のメンバーことレミリア様やパチュリーさんや美鈴さん。

咲夜さんに小悪魔さんに、チルノと大ちゃんもいる。

その後ろには霊夢さんや魔理沙さん。

とりあえずみんなが知っている限りの私の知り合いを集めてくれたみたいで、私はまた嬉しくなった。

「久しぶりだな佐天！」

「はい、魔理沙さんもお元気そうで」

「まったく、咲夜にお酒が出るって呼び出されてみれば佐天が帰ってきただけね」

「お騒がせしました」

手元にあるクラッカーを投げる動作、私は見逃してませんよ。

いやあ、相変わらずのツンデレ、クーデレ？ いただきました！

「半年近く居なくなつて、どんだけ探したと思つてんの」

ぼそつとつぶやいた霊夢さん。

「ん、半年!」

私は驚いた。霊夢さんも驚いた。

いや、みんな私が大声を出したことで驚いていた。

「いやつ、別にさがすつて言つてもついででアンタを探すのをメインにしてたわけじゃ」

え？ なんだつて？

というよりそれよりも私的には半年という方がびっくりだ。

まったく気にしてなかったけれどそう言われて始めて気づいた。

「私が幻想郷に来た日と、幻想郷から向こうに帰った間の時間つてわずか数時間のことだったはず、なのに私はあつちに半月もいたのにこつちでは半年?」

完全に時間の経過のしかたがおかしい。

ズレているといっても整合性がない。規則というのがあつてもいはずなのにそれすらない。

まったく頭がどうにかなりそうならいだ。

おかしい。

「まあいいじゃないか涙子、あたしから言わせればこつちに帰つて来ただけでも充分だろ!」

そう言いながら楽しそうに背中を叩く魔理沙さん。

まあそう言われればそうなんだけれどどこか納得がいかない。

私は渡されたお茶を飲む。お酒は20になつてから、ということ飲まない主義なのだ。

一回無理やり飲まされたけどそのあとの記憶がない……なにがあつたんだろ。それから霊夢さんが妙に優しくなつた気がしないでもないけど、まあ考えても無駄なのでやめよう。

「そーいや学園都市に帰つたんだろ佐天、向こうはどうだつたんだ？」

前と違って見えたか？」

そんな言葉に、私は頷いた。

けれどあまり嫌なことは考えないようにする。こんなところで辛気臭くなっても良くない。

「はい、おかげさまで沢山変わったことがあります」

笑顔で言うと、周りのみんなは同じように笑顔で頷いてくれる。

私のことを自分のことのように喜んでくれるみんな。

「佐天、そう言えば帰ってきたって伝えたら今度来て欲しいってけーね」が言ってたわよ」

「ん、慧音先生が？」

私はチルノからの懐かしい名前に聞き返した。

横からレミリア様が顔を出してくる。

「そのけいねって誰なの？」

なんでちよつと声にドス効いてるんですか。

「人里の寺子屋で先生をやってるのよさ、てか霊夢と魔理沙も知らない顔してるじゃん」

チルノはため息をつきながら二人を見る。

あれ、咲夜さんもちよくちよく人里言ってるんだから知ってても不思議じゃないんだけど……。

霊夢さんも魔理沙さんも咲夜さんもチルノから目をそらす。

何かに気づいたのか、チルノがぽんと手を叩く。

「ああ、三人ともコミュニケーション障だか——」

瞬間、大ちゃんもチルノの口を塞いだ。

さすがの大ちゃんでも鬼巫女の相手だけは避けたかったんだと思う。言えば地獄を見ること決定だもんね。

とりあえずなんとなく言いたいことはわかった。

霊夢さんはたぶん話しかけられても淡白な返事で返すだろうし、相手の顔も覚えてない。

魔理沙さんは普段人里の空を飛ぶばっかだろうし。

咲夜さんは人を寄せ付けないオーラを漂わせている。

うん、三人が知らないのも無理ない。

「で、涙子とその慧音とかいう奴はどういうつながり？」

フラン、奴なんて言っちゃダメでしょ。

「まあ人里に買い物に行く時に、話するぐらいの間柄かな？」

毎週2、3は話すし話せば結構長話になるから仲は結構良いけど。

とりあえずそんな感じだしね。

「なら良いんだ」

悪い間柄だと思ったのかな？ 心配してくれるなんて可愛いところあるじゃん。

私はクスツと笑ってチルノの方を見る。

口を押さえていた大ちゃんが離れているのを確認してから話の続きに移る。

「で、なんで慧音先生は私を？」

「手伝って欲しいことがあるんだって」

なるほど、と納得してから頷く。

とりあえずレミア様の方を見ると軽くため息をついてから『許可する』という顔をした。

「なんで一回ため息ついたんですか。」

「涙子はやっぱり涙子ってことだね」

美鈴さんが笑って言うけれど私には意味がわからなかった。

私は私？ なんか変わってると思ったのかな……。

「変わりませんよ私は！」

「そこも問題よね、何人目よ？」

何人目って、何を基準にカウント？

さつきからわけがわからないことばかりなんだけれど、これが半年のブランク。ってわけじゃないだろうし。

まあいずれわかるかなあ、なんて思いながら返事を返す。

「ああ、そう言えばみなさん。イギリス清教って知ってます？」

私がそう言うと、少しばかり会場の空気が変わった。

ああ〜やっちゃいました？ 空気を読んだ発言ができないことを後悔しながらも私は黙っていることにした。

やばいなあ〜。なんとも言えない空気を出しているのはレミア

様とパチユリーさんと小悪魔さんと美鈴さんの四人。

最初に口を開いたのはパチユリーさんだった。

「あの馬鹿な女の作った宗教、まだやってたのね。涙子、後で部屋にきなさい……違うのよみんな、私はそういう意味で言ったんじゃないの」

なぜか必死で何かの弁解を行うパチユリーさんだけど、なにを疑う必要があるんだろうと疑問にも思う。

とりあえず私は『はい』と答えることにした。

なぜだかフランがパチユリーさんにやけに迫っていく。

私は近くにあったお茶を飲んでから外に出ることにした。もうみんな楽しくやっているので私が出て行ってもそれほど気にしないはず。

それに外の空気も吸いたい気分だし。

私は外に出て満月を見ながら軽く体を伸ばした。

「涙子さん」

背後からの声に振り向けば、そこには私と同じように会場から出てきた小悪魔さん。

どうしたんだろう？　と思いつつながら小悪魔さんを見ると彼女はとてつもない口を開いた。

「無理、してますよね？」

その言葉に、背筋が凍るような感覚を覚えた。

私の触れられたくないところの核心を突いてきたからだ。

しかも、なにかに落ち込んでいるということじゃなくて、仮面をかぶっているということについて。

それがなぜバレたのか、レミリア様ですら気づかなかつたのに……。

「ほら、私つてこれでも悪魔ですから、その……人につけこむためにそういう落ち込んだりすることに敏感で、それを隠してるなんてこともすぐわかつちやうんです」

なるほど、なんとなく理解できた。

「だから——」

「無理しないでっつて？ 無理ですよ。小悪魔さんは気づいてるから言っておきます……私が弱いせいで、私がなにもできないせいで人が一人……死んだんです」

そう言うと、小悪魔さんは口に手を当てて後ずさる。

事実だ。私は「上条当麻」を殺した。

あの人はもう上条当麻じゃない。

「勝手なことかもしれないけれど、私たちは涙子さんに元気でいてほしいほ思ってます」

「ほんと勝手です、私には無理です。こんな状況で元気にだなんて、きつとあの人は私を恨んでいます」

もはや恨むという心すらなくなっているだろうけれど。

私は怖いんだ。死んだ上条当麻という人格がもしかしたら自分を恨んでいるんじゃないかって。

あの人はそんな人じゃないってわかっている。けど怖い。

脳では理解できても気持ちが悪く整理できない。

「その人は涙子さんを庇って、とかですか？」

小悪魔さんは見事に凶星をついた。

「それも悪魔の力ですか？」

「私の感です」

なんでわかったんだろ。

「紅魔館の皆も、涙子さんになにかがあれば庇ったりすると思いますから」

そうだ、私はいつもみんなに庇ったりしてもらってばかりで……。

まともに誰かを助けることなんてできなかったことがない。私がいなくなってきたと上条さんはインデックスを助けることができただろうし、私が居なくなつてみんなどうにでもできたはずだ。

小悪魔さん……それでも私はっ。

「それでも私はっ……」

握りこぶしに必然的に力がこもり、爪が手の平に食い込む。

痛みなんて忘れて、私は唇を噛みしめた。



学園都市、窓の無いビルと呼ばれるビル。

そのビルの中には、大きなガラスの筒に入った男が居た。

ただ一人、そこで逆さまのまま入った男は目を開いて目の前の青年を見据える。

「佐天涙子、という少女を知っているかい？」

「いきなりなんだ、お前が気にするほどの相手なのか？」

イマジンプレイヤー
「幻想殺しの次ぐらいには」

その言葉を聞いた青年は付けているサングラスの奥の眼を細めた。

男の言葉には普段から仮面を付けている彼でさえ動揺せずにはいられなかったということだ。

イマジンプレイヤー
「幻想殺しとは上条当麻、そして佐天涙子はその次に気に止めるべき人物。」

青年は口を開いた。

「柵川中学一年佐天涙子、調べてみるといい」

男がそう言うと、さらに青年は訝しげな表情を浮かべる。

「ただの女子中学生一人、しかも強い能力者がいるわけでもない中学の生徒一人……一体なにを持ってるんだ？」

「……幻想郷だよ」

「幻想郷だと？」

「彼女だけだよ、学園都市では幻想郷と関わり合いを持った者は」

青年は明らかな動揺の色を表情に浮かべた。

男の方は話す側だからかまったく動揺することも無い。

いや、そもそも『佐天涙子が幻想郷と関わった』ということを知ったところで男が驚いたかどうかとも怪しいのだが……。

それでも幻想郷というのはそれだけ「今現在」重要なことなのだ。

「ここ数十年は幻想郷に行ったという情報が入ったことはない」

「そう、それに問題はその佐天涙子が幻想郷を味方にしかねないということだ」

「幻想郷を味方にするなんて可能なのか？」

「すでに幻想郷の一勢力を味方に行っているはずだ、見ていればわかる。その眼と腕をね」

目の前の男の言っていることは「相変わらず」意味がわからないことを言っていると青年はため息をついた。

露骨にため息をついても目の前の男はまったく、眉一つすら動かさない。

男、「アレイスター・クロウリー」の口元だけが、ゆっくりと歪んだ。

この学園都市にレベル5と呼ばれるトップ7人よりも、「アレイスター・クロウリー」にとつては幻想殺しイマジンブレイカーの方が重要であり、その次に重要なのは佐天涙子なのだ。

奇しくも、佐天涙子は憧れていた超能力者レベル5、しいては御坂美琴を超えていた。

それが喜ばしいことなのかどうかはわからないが、彼女はある意味ではレベル5第一位すら超えている。

だが「驚異性」という意味では、学園都市第一位だった。本人すら知らない、真実だ。

24、魔術

私、佐天涙子は小悪魔さんとの話のあと何食わぬ顔でパーティーに参加して、パチュリーさんと途中で出た。

とりあえずパチュリーさんは私を図書館に連れてきて、いくつかの本を出してきたようだ。

日本語、英語、どれも読めないことはないと思う。

こう見えて英語は柵川の一年生の方じやトップクラスにできる方だ。メル友にイギリスのジーンズ売りの人がいるから英語は自然と覚えた。

ということとで英語の本を読むことは読める。

「この手の本は山ほどあるのよ。ほら、魔術つて昔からあるものだしね」

そう言っつていくつかの魔術の本と別に、なにか本を用意する。

「学園都市で超能力を開発してるって意味がようやくわかったわ。人工的に「原石」を作り出そうなんて考えたものね……」

パチュリーさんは超能力を知っていた？ というより「原石」つてなんなんだろう。

「そもそも魔術は「超能力者」のように才能無いものが才能あるものと同じようになるために作られたもの、魔法の方が使い勝手もいけれどその代わり魔術なら詠唱や物の配置などをしっかりしていれば素人でも使える」

それは知ってる。小萌先生がインデックス、いや自動書記ヨハネのペンに教えられて使っていた。

でも話によれば学園都市で能力開発を受けている人間は魔術を使えない。

もう少し早く魔術に出会いたかったなとか思ったし、覚えている。

「そう言えば馬鹿女の作ったって言ってましたけど、イギリス清教のトップをパチュリーさんは知ってるんですか？」

「現在イギリス清教がどうなってるか知らないんだけどね、ただまあこの発端はローマ正教で、あれの世界支配を逃れるために作ったん

「だけど、あいにく私は当時のトップである人間が嫌いだったのよ」
そう言うとパチュリーさんは話の軸がブレたのに気づいた。

「オホン、で魔術はその気になれば涙子にも使うことができるわ。ただ準備ということを考えれば涙子の場合殴ったりしたほうが早そうだけど」

「それが私が『戦った』魔術師は炎の魔術で近づけなかったと言いますか、イノケンティウス魔女狩りの王なんてものを使う奴で」

「戦ったの!?! 魔女狩りの王を使うほどの魔術師と!?!」

「ふえっ!?! は、はい!」

突然大声を出すパチュリーさんに私は驚きながら頷く。

喘息で倒れないか心配だけど、まあ大丈夫そうなので安心半分、あと驚き半分だ。

「良く生きてたわね」

その言葉に私は少しばかり表情を曇らせてしまった。

すぐに笑顔になってパチュリーさんの顔を見れば、気づいていないようで安心。

とりあえず私は上条さんのことを少しだけ話すことにした。

すべての異能を打ち消す右手の話を……。

「いや、もう驚いたとかいうレベルじゃないわ。聖ジョージのドラゴン・プレス竜の息吹まで打ち消すなんて本当に超能力なの? 原石とも言えないわ……」

そんなに凄いものなのかなって気持ちもするけど、冷静に考えれば凄まじい。

確かに物理的なことは防げないけれど、異能であれば全て打ち消せるというのは異常だ。

私の、幻想御手で手に入れた力だって簡単に打ち消されると思うし……。

「確かに、そう聞くととんでもないかも」

「でしょ、で魔術を能力者が使えないってというのは本当かどうか気になるところなのだけど」

「試してみます? まだやったこと無いんです」

そんな私の言葉に、パチュリーさんは頷いて一冊の本を開いた。

「単純な風力操作の魔術でも試してみましようか」

パチュリーさんは立ち上がるとチョークをもって図書館の床に魔法陣を書いていく。

私は良くわからないのでそれを見ていることしかできずに、ただ促されるままに完成した魔法陣の上に立つ。

魔法陣の中に刻まれた六芒星に六つ物を置くと、パチュリーさんは魔法陣から出て本を開く。

「涙子、私に続きなさい」

「は、はいー」

これで魔術を行使することができれば、上条さんを助けることはできなかつたけれどほかの人を助けることができる。

インデックスだって、ほかの人たちだってこれから守ることができると。

だから私は気を引き締めて、集中する。

「風を操る様を想像するのよ。そうね、私の帽子を吹き飛ばすぐらいの気持ちで……じゃあ私の詠唱を復唱して」

「はい」

私は目をつむってパチュリーさんの声に耳を済まし、復唱している。

「世界を構築する五大元素の一つ、大いなる自然の力風よ。我が身を守りてその身にて——飛ばせ！」

瞬間、風が巻き起こりパチュリーさんの帽子が吹き飛ばす。

すぐに風は無くなり、あたりの飛び散ったものも静かに地面に落ちる。

私は心底震えた、私は扱うことができたんだ。魔術をつ……。

「やつ、げほっ！」

あれ、咳がっ……あれ、血？

「る、涙子!？」

パチュリーさん……なるほど、これが魔術を能力開発した学生が使えない原因。

これは凄い副作用ですねほんと。
さすがにキツいつ。

「がはっ」

ぼたぼたと血が流れ落ちて、私の右腕や頭からも血が流れる。

一度魔術を行使しただけでこれっつのは、さすがに不0味い
……ッ。

やば、意識がっ。

「涙子っ！」

またか、また私はっ……ッ。

ふと起きれば、見慣れた天井。もう何回目よこの件……。

私は状態を起こして痛みへのうちまわりそうになる。

横を見ればパチュリーさんが座っていて私を驚いた表情で見ている。

「ああ、おはようございま——」

「涙子ッ！」

そんな声に、外でドタバタと音がして扉が開く。

まただよこの展開、まあ嫌いじゃないんだけど……今回は結構キツ
イ。

みんな心配しているような表情で、魔理沙さんと霊夢さんもやって
来た。

ああ、まったくまたいろんな人に迷惑かけて、私はほんと。

「無事みたいだから良かったわね、でも二時間ぐらいで起きるなんて
驚きよ」

霊夢さんがそう言って溜息をつく。

「ああ、ごめんみんな、心配かけちゃって」

そう言って笑う涙子に、全員が驚いた表情をする。

「魔術を使って倒れるなんてホント情けな——」

瞬間、パアンと音がした。

みんなの方を向いていた顔が別の方を向いて、頬に痛みがヒリヒリ

と伝わってくる。

私が私の頬を叩いた誰かの方を見ると、そこには小悪魔さんが立っていた。

全員驚いているように見える。

「誰のせいでも無いことまで自分のせいにするなんて……どうかして
ます」

「なっ、なにをつー!」

「涙子さんを庇ったというその方も、きつと今と同じことを言います
よ」

小悪魔さんに何がわかるって言うんだ。

いつもいつも他人に迷惑をかけてばかりで何も返せない私の気持ち
がちがつ!

「先ほど話していたときにいずれこうなるとは思いましたがさすがに
早い。これは私の個人的な意見です、貴女は……正直、気持ち悪い」
今まで私が見たことのないような目をして、私を見たあとに小悪魔
さんは部屋を出て行った。

啞然としていた。

私も、紅魔館のみんなも、霊夢さんも魔理沙さんもチルノも大ぢや
んも、いつのまにかいるルーミアちゃんもだ。

誰も小悪魔さんが怒って、あんなことを言うなんて思わなかったか
ら……。

「でも、小悪魔の言いたいことがわからないわけじゃない私も」

そう言ったのは霊夢さん、全員そちらを見る。

私は小悪魔さんが言っている意味がわからなかった。

ただ……なんで? という気持ちだけだ。

「ここは『普通』なら理不尽にパチュリーを責めるか、誰のせいにも
しないかの二択しかないはずよ。それをよりにもよって自分のせい
にする? 普通の人間なら自分のせいではないって思うものよ。確
かにそれは……気持ち悪いわ」

「気持ち悪いって……」

さすがに私だって花の女子中学生だ。そんな何度も気持ち悪い気

持ち悪いって言われても……。

「ちよつと霊夢、涙子のことをそんな言うなんて許さないよ」

フランが怒るけれど、霊夢さんはいつも通りのクールな表情。

何者も恐れないその態度を私はこんな状況だけど羨ましく思う。

彼女は腕を組んで壁に寄りかかりながら私を見る。

「私はただ小悪魔の言いたいことがわかるって言ってるの……大したもんよ佐天が何か抱えてるってわかって、それに今のを身内として言えるっていうのはね。少し悔ってたわ」

なにがどういいうことか私には理解できないけど……。

「何も叩くこと——」

「あるわよ、あの子にとつてはそれだけのことなのよ。いえこの連中全員にとつてもそういうことだけれど、悪魔だからかしらね小悪魔の感受性は異常よ。だからこそ佐天を叩いた……理解できたら謝ってきなさい、そしたら理由を話してくれるんじゃない？」

そう言うと霊夢さんは部屋を出て行った。

魔理沙さんは後頭部を搔いて『相変わらずなに言ってるのかわかんない時あるよな』とか言つて部屋を出る。

なんだか良くわからないけれど、私は叩かれるだけのことがあったらしい。

難しい顔をしているレミア様が軽く『お大事にな』と言つて出て行くと、咲夜さんや美鈴さん、大ちゃんとルーミアちゃんたちも一言だけ言つて去っていく。

なんだか帰ってきたばかりなのに重苦しい空気になっちゃったなあ。

「なんだかなあ……」

魔術を使っただけでこんな大事になるとは思いもしなかった。

パチュリーさんとフランとチルノの三人を見ると、まだ心配そうに私を見ている。

「大丈夫ですよ。ただもう少し実験したいんです……魔術の規模によつてこの副作用のダメージは大きくなるのか、とか」

「なつ、涙子！ 魔術の中でも基礎もいいものでそこまでの副作用な

のよ!？」

正気か、と言わんばかりに声を張り上げるパチユリーさんだけど、私は正気だ。

異能を手に入れなければこの先、上条さんや御坂さんたちを助けるためにならないのは確実。

御坂さんや上条さんのように私は異能を手に入れる才能に恵まれなかった。なら私はここで、死ぬ気で「努力」してでも異能の力を手に入れなきゃならないんだ。

だから私はパチユリーさんをしっかりと見据えて言う。

「お願いします。パチユリーさん、レミリア様たちにも私がしっかりと許可をとりますから、手伝ってください」

頭を下げる。沈黙が続くけれど私はただ待つ。

「まあ、イイんじゃない？」

最初にそう言ったのはチルノだった。

フランですら喋らずにいたのに、先にチルノは言葉を口にする。

それは何者をも恐れずどんな空気も読めないチルノだからできること。

「死ぬ気で頑張るっていうのはあたかも嫌いじゃないわ、ただそこで……いや、ここから先はあたいが言うべきじゃないってね」

チルノはそう言うのと踵を返す。

「ただあたいは協力してやるだけの価値が今の涙子にはあるって言ってるのよさ、それだけのしんねんは並大抵の覚悟じゃ持てないからね。特に苦痛を味わったあとなんかは」

部屋を出ていくチルノ。

頭が良くないチルノだからこそ他人の言葉を決して理屈や建前などではなく、感覚や相手の心を読み取ることで理解する。

たった今チルノは私の本心をわかってくれたんだと思う。

この手で誰かを守りたい。なんで小悪魔さんが私を怒ったのかはわからないけれど、私の純粋な気持ちは誰かを守りたい、しいてはこの紅魔館のみんなを守るだけの力がほしい……。

「なにがいけなかったんだろう」

「あたしにはわからない」

フランがそう言いながらベッドで上体を起こしていた私の足の上に乗る。

だよね、私にもぜんぜんわかんないよ。

仕方がないので私はこの話をやめて今までのことについておさらいをした。

つまりは私がない間の幻想郷についての話。

私がない間の約半年で、幻想郷では異変が起きていたらしい。

春に冬が終わらない異変があり、そこでは色々で大変なことがあつたらしく、幻想郷の大御所がでばつてきたとかいう話も……なんとレミリア様500歳よりもよっぽど年上の方々がいたようで、無礼な口をきくと殺されるそうなのであまり余計なことはいわないことにする。

それにしても、其の人たちに教えてもらえれば私もかなり強くなったり……なわけないか。

だったら御坂さんに色々教えてもらった時点でパワーアップできてるって。

さて、治りしだい魔術の実験を……って先に小悪魔さんと霊夢さんの言ってたこと考えないとなあ。

25、家族

あれから三日、パチュリーさんに治療の魔法をしきりにかけても
らったおかげで私佐天涙子は快調である。

これでようやく私も動けるつてもんだよね。さて、とりあえずレミ
リア様にしつかり話をしとかないと。

なんてことを私は窓ふきをしながら考えた。

ささつと仕事を終えた後に私はレミリア様の部屋へと行く。

「レミリア様ー」

二度ノックすると、扉の向こうから『良いぞ』との声がかかるので
扉を開けて中に入る。

少し驚いた。そこには咲夜さんとチルノと大ちゃんがいたから
……。

もちろんレミリア様もいたんだけど、四人でお茶をしている。

私がテーブルの近くへと行くと、レミリア様は少しだけ溜息をつ
く。

「……私は反対したい」

言うまでもなく返事をもらった。

多分未来を見てこれを察することができたんだと思う。

「わざわざ、またボロボロになる必要は無いだろう」

「それでもっ」

「次の魔術でまたこうして大丈夫だという保証もないだろう、次は手
や足がダメになったらどうするつもりだ？ また私たちがやること
だって構わないが、それでもこれ以上お前の体に変化することは私に
とってもお前にとっても喜ばしいことじゃないぞ？」

そんな言葉に、私はぐうの音も出せなかった。

レミリア様の言うことはごもつともだけれど、それでも私は……。

「全員頭が固いわね」

そう言ったのは、チルノだった。

咲夜さんもわずかばかりにチルノに鋭い目を向けた。咲夜さんも
反対のようだ。

まあそうだよね、危険だしみんなに迷惑かけちゃうし。

「良いじゃない、レミリアが見た未来では『最悪の状況』になることは無いんだし、手も足も無くなったらいくらでもあるあたいがあげるつてのよ。少しは⑨（ガカ）になつて考えてみるのが一番イイつてのよさ、力が欲しいつてあの苦痛を味わつてなお言うんだからあたいたちがやつてやるのは佐天がどうなつても助けてあげるつてことだけつてね」

そう言いながらチルノはずずつ、と冷えた紅茶をすすする。

レミリア様と咲夜さんは苦い顔をしていた。

大ちゃんは見私を見て軽くウイंक。

一息ついてから、私は気持ちを落ち着かせてレミリア様と咲夜さんを見る。

「二人共、多分迷惑とかかけちゃうと思います。また怪我をします！けれどもお願いします。私はみんなを守る力が欲しいんです！」

月並みの言葉だと思う。ありがちな言葉だと思う。

けれど私にはこうしてありのままを言葉にすることしかできないし、これ以上どう言つていいのかもわからない。

だからこうして頭を下げることにしかできない。迷惑を沢山かけるけれど、それでも力がほしい。

申し訳ないとも思うけれど、それでもっ。

「はあ、そんな頭を下げられて断れるわけないだろ。ただパチエにも許可をしつかりもらうことだな。あと咲夜はどう思う？」

「私も賛成です」

「ありがとうございますー！」

私はしっかりと頭を下げてお礼を言う。

これで私は魔術を覚えることができるということだ。

失礼しました。と言葉を残して私はレミリア様の部屋を出て図書館へと向かう。

とりあえずさっさと庭掃除とかやつちやわないとね！

庭に出た私は箒をもって素早く掃いていく。

「涙子ずいぶん気合入ってるんだね」

そう言つて現れたのは美鈴さんだった。

「寝てないなんて珍しいですね」

「言うね〜」

苦笑して後頭部を掻く美鈴さんが、軽くテラスに目を向けて手を振る。

そこにはレミリア様と大ちゃんが居て、あれチルノはどうしたんだろう？

まあいつかと私は掃除を再開することにした。掃除をしながらだつて本題は切り出せる。

「私、また魔術を使おうと思うんです」

そう言うと、美鈴さんの表情が少しだけ変わった。

「涙子は、それで良いのね？」

「はい」

私は静かに頷く。

「レミリア様と咲夜さんが了承したなら私が何か言う必要なんてないけど、学園都市に帰ってその力は必要？」

そう言われれば確かに使うかはわからない。

けれど使えれば誰かのためになるかもしれないのは確かだった。

上条さんがこれから何かに巻き込まれないとも限らない、魔術やインデックスと関わっているのだから当然だつて思う。

でも上条さんだけじゃない、色々な人たちを守るために必要になるかもしれない力は持っておきたいんだ。

「……涙子が決めたならそれで良いと思うよ私は」

そう言うと、美鈴さんは門の方へと歩いていく。

私は急いで掃除を再開した。

そして掃除を終えると私は紅魔館の中を走る。

後はパチュリーさんと小悪魔さんの二人だ！

「パチュリーさん！」

私は図書館の扉を勢いよく開いた。

ビクツとなったパチュリーさんが私の方を見て少しジト目をする。

驚かせたことに少しご立腹のようだけれど、今の佐天さんはそんな

ことで止められるほどじゃないのだ！

「魔術の本を貸してください！」

「嫌よ」

パチュリーさんは凄まじいスピードで断った。

なぜだか問いただすことも忘れて私はポカン、としてみまう。

よもやここで断られるのは予想外というかなんというか、ここ最近魔術の話題も出してないから余計にびっくりした。

なんでだろ……なんて考えてもらちがあかない。

「そ、そこをなんとか」

「嫌なの」

パチュリーさんにしては珍しく、子供がというような幼さを感じさせるような声でそう言った。

少し混乱気味の私、だから私は理由がわからないからこそパチュリーさんから離れて図書館の奥へと入っていく。

軽く駆けるようにして探しているのは小悪魔さんだ。

あの人ならわかるかもしれない、あの人なら私に何かを言ってくれるかもしれないと期待している。

「あつ」

けれど探していて見つかったのは小悪魔さんではなく、チルノだった。

なんで活字嫌いのお馬鹿⑤がこんなところにいるのか、チルノはカーペットの敷かれた床に座り込んで周囲に本を積んで本のページをめぐっていた。

なんの本を読んでいるのか気になり、私は近づく。

「どうしたの？」

「佐天、あたいにはすべて理解できないわ」

あつ、うん——だろうね。

「なんとなく感覚ではわかるんだけどねえ、どうにも……つてそんなことはどうでも良いのよね。それより探しものよ」

「何を探してるの？」

そう聞くとチルノは自分の前においている小さな紙を私に渡す。

紙というより小さなメモの切れ端で、その字は女性らしく綺麗で気が品が漂っている。

そしてそのメモの切れ端に書いてある単語『博麗大結界』という一つの単語。

文字を覚えることをしないチルノだけれど、メモを渡して書いた単語が載っている本を探させようと言うのだ。まさに妖精電子辞書、チルノを使っているのは誰だろう？

なんて考えても仕方ないことだった。

「まったく、紫も面倒なこと頼むわ」

「ああ、あの紫さんからなんだ」

前回幻想郷に来たときに一度だけ会ったあの妖怪だろう。

あまりいい印象は持っていない。殺されそうになったしね。

「あたいにはわかることしかわからないから、わかることはわかる奴だけやれば良いのよ」

いつそそういう考え方もありなんだろうとは思う。

でも知ってしまったら、少しでもそれを知って自分のわからないことでも困ってる人がいればそれを知ってでも助けてい。

わからないことを放棄して、そしてそれで困って、助けを求めている人も放棄する。わかることだけを他人に任せるなんて私には……。

「もつと柔軟にならないと、佐天がつぶれるわよ？」

なぜだか知らないけれど私の方を見ていたずらが成功した子供のような笑みを浮かべるチルノ。

まあ確かに意表をつかれたという意味では間違いではない、チルノにそんなこと言われるなんて思ってたなかった。

チルノはすぐに本へと目を移す、メモの文字を覚えて本を見るを繰り返す。

そのままに、チルノは言葉が続ける。

「あたいだって流石に『紅魔館』のことに口を出す気は無かったけど、佐天ってほんと馬鹿なんだもの」

「馬鹿に馬鹿って言われた」

少しだけ落ち込む。

「馬鹿じゃないってなら小悪魔に聞いてみなさい、あいつも絶対佐天は馬鹿だつて言うわよ」

気持ち悪いって言ってた人に近づくのって結構勇気いるけど、まあ最初から小悪魔さんそこに向かってたんだし良いか……。

「そこにいるんじゃない?」

チルノが指差した方向に私は歩いていく、本棚を二つほど通り過ぎてから私が見たのは本棚に本を入れている小悪魔さんだった。

本棚の影に隠れてから、私は深く呼吸をする。

大丈夫、ちよつと怖いけど……人間讃歌は勇気の讃歌だつて誰かが言つてた。

——よし!

「こ、小悪魔さん!」

私が声をかけると、驚いたように私の方を見る小悪魔さん。

本をまとめると、彼女は少し気まずそうに私の方を見てくる。

お互い気にしてるって感じになっちゃった……とりあえず私から切り出さないとね。

「その、少しお話しませんか?」

気恥かしさから私は後頭部を掻きながら視線を逸らしてそういう。

小悪魔さんは少し驚いてから、静かに頷いた。

二人でとりあえず近くの椅子に座る。

「……」

「……」

会話がまったくくない。私から切り出さないといけないんだけど、うまく言葉が見つからない。

焦って焦って、結果出たのはさつきチルノが言つてた言葉だけだ。

「わ、私ってそんな馬鹿ですかね!」

ついそんなことを言つてしまった。

私の中で小悪魔さんが言いそうなことを色々予想してみる。

辛辣な言葉も来るかもしれないのでそれもまた予想、『気持ち悪い』なんてまた言われたらショックだ。

小悪魔さんはキョトンとしてから、口に手を当てて唇の形を変え

た。

「ぷつ、フフフツ……ハハハハッ」

突然笑いだす小悪魔さん。

「えっと、こ、小悪魔さん？」

私はどうしたんだろうと心配してみる。

けれど小悪魔さんは私に『待った』と手を差し出して笑うのみだ。

一分近く笑っていただろう、その間私はただわけがわからなかっただけ。

「すみません、あまりに突拍子の無い事でしたから……そうですね佐天さんは相当のおバカです」

ガーン！ 正直シヨック！

でもなんでそんな馬鹿馬鹿言われてるんだろう、あたし。

「真面目な話になります……物事を知ろうとするのは悪いことじゃありません、そもそも人間に知恵というものを『与えた』のは悪魔なわけですからね。まあ物事を知るのが悪だなんて今時絶対にありませんから特にこの点で文句を言う必要はありません、強すぎる好奇心は猫を殺すとも言いますが」

そう言つて苦笑する小悪魔さん。

人間に知恵を与えたのは悪魔、そう言えば聞いたことがある気がする。

あれだよね、聖書つてやつだよね、詳しく読んだことはないけど。

「ただ私が言いたいのは、涙子さんって責任を感じすぎなんです。まだわかってないようなのでしつかり言っておきますけどあの魔術を使った事件は誰のせいでもありませんよ、言うなれば責任はパチクリー様にあるでしょう。目上であり魔術を佐天さんより知っているんですから」

「それはおかしいです」

「おかしくなんてありません」

凜とした声で、私の反論に反論する小悪魔さん。

「悪魔のように醜いヒトは誰かのせいにするでしょう、天使のようなヒトはすべてなかったことにするでしょう、普通のヒトは相手も自分

も傷つけないようにフォローするでしょう。でも貴女はどれも選ばなかった。ただ自分のせいと言った。それがおかしくなくてなんなんですか？」

小悪魔さんの言葉に、私は何も言えなかった。

彼女はさみしそうな悲しそうな顔をして私にちらつと視線を送るのみ。

言葉が出ない、なんて言えばいいの？

「あの、その……」

「自己責任が強いなんてものじゃありません、理解できましたか？自分の異常性が……」

確かに理解できたけれど、私が責任を負うことで誰も傷つかないならそういたい。

誰かのために自分が傷つくことなんて厭わないから誰にも傷つかないでほしい。

紅魔館のみんなには特にそう思う。

「貴女はその性格でパチュリー様を傷つけました。全てを自分のせいにするということ……いえ、パチュリー様だけじゃなく、色々な人が心のどこかで少しばかり傷つきました。それはなぜかわかりますか？」

まったくわからなかった。私がいみんなを傷つけた？

でも私はいつもみんなに迷惑をかけて、上条さんだって私のせいで……。

結局、私は迷惑をかけるだけの存在なんじゃないの？

だからせめて責任ぐらい自分で取れるように……。

「でも私は『みんなのため』にっ」

小悪魔さんの表情が険しくなる。

「家族なのにつ、なんでそんなことするんですか！」

そう言っからうつむく小悪魔さん。

まるで弾丸を受けたかのような衝撃だった。

家族、その一言はそれだけの威力がある。

「涙子さんがそう思っなくて、私たちは家族だと思っってますっ」

「わ、私だって」

そう思ってる。第二の家族、この幻想郷でイレギュラーである私を受け入れてくれた大切な家族。

だから傷つけない、泣かせたくない、悲しい思いをさせたくない。

なのになんで私はっ、小悪魔さんを今泣かせている？

「ならなんで、自己犠牲を簡単に“みんなのため”だなんて言えるんですかつ、辛いんですよ……家族として信用されてないみたいで」

そんなことはないかと否定したいけれど、私は目の前で泣く小悪魔さんにわたわたしてしまっ言葉が出ない。

「迷惑をかけられても良いつて、責任なんて誰のせいでもないって、家族なんだから全部一人で背負い込む必要はないのにつ」

理解できた。小悪魔さんが怒った理由はこれだったんだ。

「みんな不器用って感じで、誰も本当のことを言わないっ涙子さんみたいな人がそんなこと気づくわけないのにつ」

はははっ、これは手厳しい。

それにしても、なるほどね。みんな気づいてたわけだ。

だけど私を信用して言わなかった。けど、小悪魔さんに言われなきや私はたぶんずつと同じことを繰り返してただけだと思う。

はあ、ほんととんでもない。

「ごめんなさい」

私はそう言っ小悪魔さんを胸に抱く。

こんぐらいしか私にはできないし、仕方ないよね。

「涙子さんは家族なんですっ、もう紅魔館の一員でかけがえのない人なんですよお……」

「ごめんなさい」

私はようやく意味がわかって、どれだけ自分が馬鹿だったかわかって謝ることしかできなかった。

小悪魔さんを抱きしめながら私は本棚の方へと視線を向ける。

そこにはチルノがいて、私たちを見ていた。

ちよつと恥ずかしいかも。

「……フツ」

チルノは軽く笑うと踵を返して姿を消した。

ああ、なんか今回は完全にチルノにしてやられて感じだなあ。

まあ結果的には言うことなしだけど……今回はありがとうって素直に思つとく。

10分ぐらいしてから、小悪魔さんが完全に落ち着いたのを見計らってパチュリーさんの元へ行った。

少しだけれど意外そうな顔をしたパチュリーさんだが、すぐに視線を本へと戻す。

いやはや私のこと怒ってるのも当然かあ。

「ごめんなさいパチュリーさん、それでも私には魔術が必要なんです。私は沢山迷惑をかけるかもしれない、誰のせいでもなく、魔術の副作用が出てまたみんなを心配させるかもしれない、それでも私は……紅魔館のみんなを、家族を守る力がほしいんです」

「……ほんと馬鹿なんだから、小悪魔に言われてようやく気づいたんでしょ?」

こちらにジト目を向けるパチュリーさん相手に、私は『はい』としか返事はできない。

今回ばかりはなんと言われても反論のしようがないというものだ。これで当分小悪魔さんにも頭は上がらないなあ。

それにしても私や紅魔館のみんなのためにあそこまで怒ってくれる、なんて優しい。

小悪魔さんマジ天使。いや悪魔だけど。

「とりあえず使ってみたい魔術を本を見て選びなさい。そしたらみんなを集めてやってみましょう……家族として全力でカバーしてあげるから」

そう言うときパチュリーさんは私たちから顔を背けて本を読むばかり。

だけれどこういう台詞はパチュリーさん自体あまり言うこともないからか、耳まで真っ赤になっている。

そんな可愛らしい私の家族を見て、私はパチュリーさんが事前
に用意してくれていたんであろう積んである魔術関連の本に目を通す
のだった。

絶対魔術をものにしてみんなを守るんだ！

今度は間違わずに、絶対！

26、人里の先生

あれからざっと二週間が過ぎた。

使用したい魔術も決定してそれを使って……まあなんやかんやあつて二週間なわけです！

私、佐天涙子は今日もいつもどおり館の掃除をしていた。

「佐天さん、こんにちは」

一人で掃除をしていれば現れたのは大ちゃん。大ちゃんは軽く私に手を振る。

「こんにちは大ちゃん」

相変わらず『普段』は普通におしとやかで大人しい女の子なんだけれど……。

チルノが関わるとほんとに性格が変わるといいうか人が変わるといいうか、全然違う感じに、とりあえずガチ。

危険度で言えば白井さんの上に行くこんな恐ろしい妖精さんも私の友達。

「今日もチルノちゃんったら紫さんのお願い聞いて図書館に行つて……ふふふつ、どうでしょう……ふふふつ」

怖い！　ここに、怖い怖い！

「そそそそつか！　私掃除の続きあるからまた！」

「あれれ、もう終わってるんじゃないですか？」

ギクツ、まさか見られていた？

だけどもまさか掃除している間ずっと見られていたとか？

「佐天さんはいつも最後にここを掃除してますからね」

あつちやく。

こうなつたら私があると逃げ出す術は、無い。

ならどうしましょうか、佐天さんとしてはこの状態の大ちゃんには関わり合いたくないんだけど……。

逃げる？　逃げれば完全に殺られる！

これは逃げられない、だったら仕方ない。行こうか大ちゃん……。

私は大ちゃんと共にレミリア様のところに行くことにした、死なば

もろともですよ。

いや、たぶん死ぬまではならないと思うけど。

レミリア様の部屋にて、私と大ちゃんとレミリア様の三人でテーブルを囲んでお茶をしている。

メイドとして同じ席に着くのはどうなのかなあ？　と思うけどまあ良いみたい。

今現在、静かに咲夜さんがレミリア様の後ろに立っているけれどその前に座っているレミリア様の紅茶を持つ手は震えている。

全然カリスマありませんよレミリア様、咲夜さんもなんか冷や汗かいてるし。

「だ、大妖精はどうしたの？」

あ、聞いちやいます？

「チルノちゃんが最近紫さんのお願いですぐに紅魔館に行っちゃうんですよ、私はチルノちゃんの仕事をお手伝いするって言ってもチルノちゃんったら『こんな面倒な仕事大ちゃんも付き合う必要ないよ』なんてかっこいいこと言って私を気遣うんです。チルノちゃん可愛いマジ天使、でもチルノちゃんったら昔からの馴染みだからって紫さんをお願いを聞いて夜遅くまで図書館で本を読みあさって私はお家で一人晩御飯を作ってまつてるなんてどこの夫婦ですか！　やだチルノちゃんと私が夫婦なんて嬉しい。ああ話が逸れましたね大体にして私とチルノちゃんと言ったらセット、二人の名前は枕ことば、なのになんで私とチルノちゃんが引き離されてるんですかねえ？　八雲紫がなんだか知りませんが今なら私なんでも殺れちゃう気がするんです。でもしません、チルノちゃん友達がいなくなったら悲しむもんね。ということでは今は今少しでもチルノちゃんのそばに居ようこの紅魔館へとやってきていますわけです。まあレミリアさんたちもいるし退屈しませんけどチルノちゃんの姿が見えないのが唯一の苦痛ですね。それと……」

こ、怖い。ていうかまだ喋ってるし。

レミリア様なんか震えてるし咲夜さんは……おのれ逃げたな。

この状況下で大ちゃんをどうにかできる人間、いや妖怪、いや神様なんているんだろうか？

多分並の神様なら大ちゃんの威圧感にやられる気がする。

なあんて考えてたら外から一迅の風と共に開かれた窓から誰かが入ってきた。

「あやや、これはこれは面白いことになっていきますね」

これはこれは『文々。新聞』の記者兼編集長である「射命丸文」さん。

彼女は度々訪れる新聞記者。

結構鬱陶しいのがポイントで霊夢さんやレミリア様から結構信頼度は薄い。

ちなみに烏天狗なので幻想郷でも強い部類に入るとかなんとか……。

「天狗、なにもないわよ？」

「いえいえ、今日は佐天さんにお問い合わせがありがとうございました」

「私ですか？」

いつもレミリア様や咲夜さんばかりを取材している射命丸さんにしては珍しいと私は少し驚いた。

レミリア様も驚いているのかキョトンとした表情をする。

大ちゃんはいまだにブツブツと言ってるので怖いからとりあえず放置。

下手に関わると私の命があぶない。

「そろそろ佐天さんの取材もしないとなあ、と思いましたがですね！」

今回は取材しようと思った矢先に消えてしまいましたし」

まあ確かに……と私は頷く。

でも今現在としては私は紅魔館の使いなわけだから、レミリア様に聞かなきゃ。

「でレミリアさん、どうでしょうか私に佐天さんを取材させては？」

射命丸さんの提案に、レミリア様は少し悩むような表情を浮かべる。

咲夜さんも帰ってきて射命丸さんは笑みを浮かべると咲夜さんの

方にも向かう。

「どう思います咲夜さん？」

「……別によろしいかと」

その言葉に、レミリア様は渋々といった様子で頷く。

「どうせなら紅魔館の新メンバーを幻想郷に知らせておく必要があるだろう、良いぞ」

そう言われた直後、射命丸さんは私の眼前に近づく。

「顔が、っ近いです！」

グツとよつてくる射命丸さんを押しつけて私は立ち上がる。

なにこの烏天狗、と思いつつも漫画とか貸してもらっているのであまり文句は言わないでおく。

結局しばらくは射命丸さんが情熱大陸みたいなことをするらしい。夜はお互い家があるので普通に帰るらしく、結局取材と言っても私についてくるだけだった……。

ついてくるだけ——なんだけど？

「買い物まで一緒に来るんですか？」

「もちろん、なんとって密着取材ですからね！ 紅魔館の食料なども気になりますし」

なんかプライベートが吹っ飛んできそうで怖い。

とりあえずいつもどおりで良いってことだし私は今現在射命丸さんを隣に人里への道を歩いている。

なんだかんだでしばらく歩いてもう近くまできている。

射命丸さんが飛んで連れてつてくれればいいのに『普段の姿を取材したいんです！』なんてことを言うせいであるくことになった。

「それにしても佐天さんは不思議な方ですよ、能力も無ければ魔法も使えず弾幕もほとんど撃てないに等しいのに紅魔館の一員になれるなんて」

「別に紅魔館のみなさんは悪い人たちじゃありませんから、お互い歩み寄る気があるんですからある程度仲良くなるのは苦労しませんよ。信頼されるのは並の事じゃないと思いますけど」

そんな言葉に射命丸さんはふうん、と何度か頷く。

紅魔館のみんなは比較的に排他的とは言いがたい性格ばかり、確かに人あたりの良い方じゃないから少し相手が警戒するけど怖い人じゃない。

ただ下手に気に入られると……フランが怖いかも。

でも確かにチルノとか霊夢さんとか魔理沙さんとかも最初は結構警戒が強いみたいないメージ持ってたみたいだけど、あれチルノって馴染みじゃ、ん？

「ああ佐天さん、私には敬語は使わなくて良いですよ。そのほうがやりやすいでしょう」

突然の射命丸さんの言葉に少し私は驚いた。

別に敬語がだいぶ慣れちゃってるしやりにくいとかは無いんだけど、そのほうがフレンドリーかな？

「じゃあそうさせてもらおっかな」

「はい♪」

なんだか元気な人だなあ、と思う。

まあ嫌いじゃないけれどチルノとかフランとかレミリア様とかのパンチラを狙うのはどうにかしたほうがいいと思う。

咲夜さんは鉄壁のスカート故に一回も撮れたことがないって射命丸さんは言ってたけど。

そういえば美鈴さんってあんなスリットすごい服着てるけどどうなってるんだろう？

「そういえば佐天さんは霊夢さんや魔理沙さんとも仲がいいんですよね？」

「うん、幻想郷に来てから良くしてもらってるし」

「いやあ大したものですよ、魔理沙さんはともかくあの霊夢さんが一人の人間にここまで肩入れするのは珍しい」

そう言いながらメモ帳のページをめくっていく文さん。

結構良い人たちな気がしないでもないんだけど、どうなんだろう？

チルノも確かに『コミュ障』って話をしてた気が……。

「佐天に、追いついたわよ」

そう言つて現れたのはチルノ。

「どうして？」

「あたかも人里に用があつて、本の方は一旦中断つてわけね」

なるほど、佐天さん的には大ちゃんがどうなつてるのか気になるけど、聞くのはやめとこう。

とりあえずチルノは私の隣に降りると氷の六枚羽をハタハタと震わせる。

射命丸さんは妙にテンションが上がっていた。たぶんロリが現れたからだと思う。

「チ、ル、ノ〜！」

私は迷わず隣にいたチルノのスカートをめくる。

ほおほお、今日は水色一色のリボン付きと……これはこれはその道の人はかなり――。

「ヒヤッハー！」

射命丸さんはここぞとばかりにチルノの両足の間に頭を滑り込ませて連続でシャツターを切る。

これはヤバイ、迷わず通報決定だよ。

チルノはスカートを押さえた後に射命丸さんの頭を踏んで私を真つ赤な顔で睨む。

ふむ、やはり久しぶりともなるとたまらないねえ……私は射命丸さんと違ってロリコンじゃねえから！

「さささ、佐天！ またやったわね、今度という今度は許さないわよ！」

ふふふつ、可愛いやつよのお。

純粹無垢つてほんと癒される、スカートめくらられただけでこれとは初春並に楽しいわ。

大ちゃんに知られたら殺されかねないけど。

「幼女に踏まれるというのもこれはこれで」

変態新聞記者、酷く汚い射命丸はぶつぶつと言ってるので放置。

私はチルノの頭を軽く撫でてから人里の方にあるくのを再開した。

「こ、こら佐天！ いいかげんにしないとあたいの堪忍袋のなんとか

が！」

堪忍袋の緒ね、それ。

最近はチルノにしてやられたりしてばっかだからたまには反撃ぐらい許して欲しい。

私だってやられてばかりじゃないってことを見せないとね！

とりあえず買い物行かないと。

後ろで騒いでるチルノと射命丸さんを置いて私は人里の方へと歩くのだった。

私は人里に着くとすぐに第一の目的地へと向かった。

そこは私の知り合いというか、初めて人里に来たときに色々教えてくれた人のお家なわけなんだけどね。

その人の家が見えてすぐ、私は走って彼女の家の前に立って扉を開ける。

「慧音さん〜」

玄関で声を上げると、奥からどたばたと音がして「上白沢慧音」さんが現れた。

人里の寺子屋で先生をやっていて妖怪たちから里を守ったりもしているのかなんとか……。

まあなにはともあれ優しいお姉さんって感じかな？

「おお、久しぶりだな佐天！」

慧音さんは軽い笑顔で迎えてくれる。

「チルノから話は聞いてたんですけどどうにも来るのが遅くなってしまつて」

「いや気にするな、とりあえず上がってくれ……後ろの二人も」

そう言われて私が振り返ると、そこには射命丸さんとチルノの二人がたつていた。

先ほどのことをまだ怒ってるのかチルノは少し不機嫌そうな顔をしている。やっぱ初春思ひ出すんだよねえ。

射命丸さんの方は『お気遣いなく』と言いなながらメモ帳片手にペンを走らせる。

何を書いているのやら……。

「じゃあ、お邪魔します」

「慧音、邪魔するわよ」

私とチルノが二人で言うのと、射命丸さんはメモ帳に文字を書き終えたのか軽く慧音さんに会釈。

そして肩からかけているポーチから小さな紙を取り出すとそれを慧音さんに渡した。

あれは……名刺？

「こういうものです、以後お見知りおきを」

「ああ、天狗がわざわざ」

慧音さんは不思議な天狗こと射命丸さんに訝しげな表情をしながら会釈を返す。

私たちは慧音さんに連れられて居間に入って四角い机を囲むように座る。

慧音さんはすぐに居なくなって数分して帰ってきた時にはおぼんにお茶を四つ乗せていた。

その四つを四人が座る前にそれぞれ置いたところでようやく慧音さんは座る。

「話というのはまあ大したことじゃないんだが、お前に提案があつてな」

「私にですか？」

「紅魔館の連中にはすでに話を通してあるんだがうちの寺子屋で授業をしてみる気はないか？」

へ……あたしが？ 授業？

「ええ!？」

「いやいや断つてくれてもいいんだけど、最近手が空いてなくてな少しだけで良いんだ。お前は向こうでは結構な学び舎に通っていたらしいじゃないか、だから少しだけ子供達の相手をして欲しいんだ。ついでに私も教え方なんかを見ておきたいなど」

「私じゃなくてもっと適任が」

「子供とすぐ仲良くなれそうなお前だから頼んでるんだ」

いやはやそんな風に見てもらっているのは光栄なんですけど、私だって中学一年生でつい最近まで小学生だったわけで……つてずいぶん昔に感じるなあ。

なんて言ってる場合じゃない！

弟もいるし確かに子供の扱いは慣れてはいるんだけど、さすがに大人数の子供たちを相手にするとまでは……。

「いや、他の者も考えたんだが適任が居ないんだ」

そう言われると、私だって力になりたい。

紅魔館に話を通してあるって言ってるし確かに私が頷くだけで良いんだらうけど……。

少しばかり考える時間が欲し……。

「その話引き受けましょう！」

ちよつ、射命丸さんなにやってんの!?

「いやはやこれは取材のしがいがある！うちの新聞に佐天さんのコーナーを毎日載せても良いぐらいですよ！」

「いや私まだ考えてるから!？」

「こんなチャンス滅多にありません！」

まあ確かに言われてみればって感じもする。

こうしてみても初めて気づくこともあるかもしれないし、悪いことじゃないのかな……。

でもやっぱり自分が先生をやるなんて少し抵抗がある。

「我が文々。新聞のために頑張ってください！」

「おい天狗」

そう言ってみたものの、少し考えて私は頷くことにした。

たしかにこんな機会そうあるものじゃないし、人助けにもなる。

慧音さんの助けになるならやつても良いって思えるしね。

「分かりました引き受けます、少し不安ですけど」

「本当か！ 助かるよ」

そう言って笑みを浮かべる慧音さん。

子供達の相手ってそんなに大変なのかなあ？

寺子屋に通うような子供達ばっかだしきつとやんちゃな子なんて

……はあ、私に舵取りができるのか。

少し不安になりながらも頷いた私は話が終わったのかと立ち上がろうとする。

けれど慧音さんがまだ口を開いた。

「あと一つだけ話がある、こちらは佐天のためというのもおかしいが実のある話だ」

そんな言葉に私は立ち止まらずにいられなかった。

私に実のある話って？

「この件で紅魔館に話をしに行った時に学園都市、というやつ話を聞いた。佐天が本来いた場所だ」

別に話されて困ることでもないので頷く。

それがどうしたのか、と私は座りなおしてお茶を一口飲んだ。

射命丸さんは新しいネタを今か今かと待っている状態。

「『原石』を人工的に作る科学都市と言ったが、この幻想郷にも原石がいる。能力ではなくはつきりとした原石を持つ『人間』がな」

……え？

私は脳を揺さぶられた気分だった。

憧れの超能力者、開発で生まれた者ももちろん私にとっては憧れだったけれど、本当に憧れた超能力者がいる？

その人に会えれば何かが変わるかも知れない……。

どういう人なんだろう、やっぱり普通の人と変わらない感じなのかな？

「原石って、その話は本当なんですか？」

突然射命丸さんが放った言葉に私はそちらを見る。

私は見たことがない真面目な表情で慧音さんを見ているが彼女は頷く。

それを見て驚いた射命丸さんはメモ帳に素早く何かをメモしていった。

原石とは、それほどのものだということがわかる。

学園都市で開発された超能力者どう違うのかはわからないけれど、一度で良いから会ってみたかった。

「どこに、どこにいるんですか!？」

「待て佐天、明日まで待つてくれ、どこにいるか私もわからないから今日中に探して帰ってくる」

そんな言葉に、私は無言で頷いた。

一刻も早く会いたい、私はいつあちらに返されるわからないし……。

とりあえず明日まで幻想郷に祈るか私にはできないってことで、今日はとりあえず慧音さんのお家をお暇することになった。

慧音さんの家から出て買い物に向かう道中、私の服のすそを誰かが引っ張った。

誰かってそんなことするのはチルノしかないんだけど……

「焦ることはないんじゃない？ あんたは目の前のチャンスをつかむことを考えて〴〵もし帰ってしまったら〴〵なんて暗いことを考えるのはやめなさい。いつもみたいにかみたく元気じゃないとあたかも調子狂うって」

そう言つて笑うチルノは先ほどスカートをめくられたことを忘れていたようで……。

元気づけてくれているチルノに私は笑い返した。

横の射命丸さんは私たちを見て意味深そうに頷く。

なんだか気恥ずかしくなってきたので私はチルノのスカートをめくった。

何人かの通行人がチルノのパンツを見る。

「またやってくれたわね佐天！」

チルノがしつかりパンツを履いてるか確認しただけだって。

射命丸さんはさすが〴〵自称幻想郷最速〴〵というべきかすばやくチルノの下にもぐりこんで名人もびつくりのカメラのボタン連射を行っていた。

騒ぎになっていっているうちに私は少しばかり気恥ずかしい気持ちを抑えるために両の頬を軽く叩いた。

せっかく手に入れたチャンスなんだから、絶対役に立ててみせる！
私の戦いは始まったばかりだ！

27、欠けた月

私、佐天涙子は現在射命丸さんとチルノを連れて人里を歩いてる。

さつきまでぷりぷりと怒っていたチルノだけれど飴を買ってあげたら落ち着いた。

ニコニコ嬉しそうにしながら、飴を口の中で転がしているチルノを激写しまくるド変態こと射命丸さん。

私はそんな二人を後ろに買い物を一通り終えて歩く。

「佐天、飴もうないの?」

「無くなったらあげるから」

私は買い物袋を両手に抱えてチルノに言う。

射命丸さんは相変わらずチルノをローアングルから撮ったりしてみたいけど、私の取材なんだよね?

仕方がないので後方の二人を放っておいて、私は少しながら学園都市のことを思い出してみた。

思えば色々あったなあと思う。

幻想郷から帰ってからはLevel 15である御坂さんとその友達である風紀委員でありLevel 14の白井さんと出会った。

それから銀行強盗を倒して、初めてそこで黄泉川先生とも会ったんだっけ。

次は固法先輩と『連続まゆげ落書き事件』を追って、それで重福さんを見つけて……そこで変なのに絡まれたりした。

それから、木山先生に出会ったんだよね。車の鍵を無くしてたあの人の鍵を探して、そこから木山先生と仲良くなったんだ。

その後にはセブンスミストで虚空爆破事件に巻き込まれて、そこで私は——上条さんと出会った。

それから幻想御手のことに関わって、同時に魔術とも関わるようになった。

今思えばすごく忙しい日々ではあったと思う、姉御さんと遭遇のも

あの時だったよね。

インデックスと出会って、ステイルと戦って、幻想御手を使って神裂とも戦った。

それから幻想猛獣と戦ったり特別講習をこなしたり……。

それが終わったかと思ったら次はインデックスと魔術師のことに戻ったんだった。

上条さんから話を聞いて、神裂とステイルが嘘をつかれていたことを話して、上条さんに告白された……。

なんか思い返すと恥ずかしいこと言ってたなあ。

そして自動書記と戦って私をかばい「あの上条さん」は死んだ。

けれどいつまでもメソメソしてられない、そんなの上条さんは望んでないと思うから……。

「佐天さん？」

射命丸さんの声には私は思考を止めて現状を確認する。

いつの間にやら紅魔館の前、無心で帰ってきたのか私、完全に歩きなれた道だもんね。

ボオツとしていたことを射命丸さんとチルノに軽く謝って私は紅魔館へと入る。

……なんで門番寝てるんですか。

「ただいま」

そう言って両手の荷物を降ろした瞬間、荷物は消える。

消えたと同時に現れるのはその荷物を気づかぬうちに持っていくしまったであろう咲夜さんだ。

「おつかれ、三人とも上でお嬢様が待っているわ」

そういうと再び消えてしまう咲夜さん、どんだけ便利なんですかその能力。

正直敵なしだと思っし……。

「行こっか二人とも」

「了解です！」

頷くチルノと返事をする射命丸さん。

ほんと射命丸さんって元気だよねえ。

階段を上ってテラスへと行くとそこにはテーブル、レミリア様とフランの二人がそこで紅茶を飲んでいた。

用意されている椅子に私と射命丸さんとチルノの三人が座る。

瞬間、目の前に紅茶が並べられて咲夜さんが立っていた。

「おかえり、ところでチルノが追ってった理由って結局なんだったの？」

「人里でね、阿求に用があったのよ」

そういえば途中でチルノが別行動するって言ってたなあ。

その間にその阿求さんって人に会いに行ったのかな？

私とフラン以外の全員が知ってるって顔してるけどたぶんすごい人だよな。

「今度会いに行ってみませんか!? 良い記事、もとい良い経験になると思いますよあの方とお会いになるのは!」

思いつきり私情だよな、まあ良いんだけど。

みんなが知ってるなら私も気になるし、今度曇りの日にでもフランを連れて行ってみよう。

ああそういえばフランとどこも言っていないなあ、まあ吸血鬼ともなると行ける場所って限られてるんだけど……。

「そういえばレミリア様、天狗ってみんな射命丸さんみたいのなんですか?」

「みたいのって」

射命丸さんが落ち込んでる風にするけど、いやどうでも良いか。

「天狗が全員この変態ロリコン天狗と一緒にだと思ったら大間違いよ」

ですよな、天狗みんなが射命丸さんみたいだったらもう幻想郷は大惨事ですよな。

確か少し離れたところにある妖怪の山ってところに天狗たちが住んでるって言ってたっけ、幻想郷は小さな子が多いから心配だなあ。ていうかやっぱ射命丸さんってロリコンだったんだ。

「ロリに痛烈な言葉とはっ、効きますね……でも訂正させてください。私はロリだけが好きなんじゃないやありません、美少女でも美女でもっ」

「あや、息が荒いわよ気持ち悪い」

「チルノさんまでっ、これはたまらないっ！」

良いんですか天狗がそれで！

とは思ってもここは幻想郷だし、と思うとどうでも良くなってくるふしはあった。

吸血鬼も拍子抜けするほどカリスマブレイクするし、魔法使いはひきこもりだし、妖精は純粹じゃないし。

ああ普通だ。なんだか妙なところで幻想郷っていうのを垣間見た気がする。

「ふう……佐天さん、ところで普通に戦ってるのかなども見たいのですが修行とかは？」

なんで突然真面目に!?

「今日はないですね、明日あたり霊夢さんがやろうって言ってましたけど……はあ」

憂鬱だっ、だって殺されかけるし、手加減上手な美鈴さんや魔理沙さんと違って霊夢さんって冷徹といつかかなんというか……。

まあ嫌いじゃないんだけど敵に回したらヤバいというか。

ていうかレミリア様が負けた人に私が勝てと!?

よくよく考えるとすごい人と訓練するんじゃないかなろうか……。

「前回の異変でも霊夢さんは大活躍でしたからねえ」

私が居ない間の『春雪異変』だっけ？

確か西行寺幽々子って人が春を集めてそのせいで春が来なかったとか……って私なにを普通に春を集めてとか理解してるんだらう。

完全に幻想郷に染まってるよ。

咲夜さんと霊夢さんと魔理沙さんがその異変解決にあたって八雲紫さんとも戦ったんだよね確か。

その後になんだったか三日おきに宴会を開いてたとかいう平和っぷりの中、異変が起こったとか……鬼がどうたらって話を聞いたけど、まあよくわからない。

「三人とも私の知り合いつて、なんか良いですね！」

「幻想郷は狭いんだから大概知り合いになる。というより咲夜に関し

ては身内だろう」

そんなレミリア様の突っ込みに私は笑って返す。

「そうだよねえ、私の周りってすごいよねほんと、御坂さんとかもだ
けど！」

幻想郷にいるっていう原石の人たちとも仲良くやりたいな！

「でもパチュリーが動き出したときはまた雪が降るかと思ったわよ」

なんて言ったのはフランで、それに同調して首を縦に振る五人。

いや本当にパチュリーさんが動くなんてよっほどのことだと思う。

大抵の場合動かないんだから。

驚いている状況じゃなかったけどフランが暴走した時もパチュリー様が動いてたっていうのはもって驚くべきだった。

チルノが言葉を続ける。

「ほんとにね、あのパチュリーがでかい尻を上げるなんて」

「重い腰でしょ、おしこいようで掠りもしてないわよチルノ」

レミリア様の流れるようなツツコミ、二人が結構仲がいいとわかることだ。

馬鹿の相手とか一見しななさそうに見えるけどレミリア様は一度友人と認めたら大概なんでもするし……。

友達少ないからね、しようがないね。

この間、射命丸さんが記事に書こうとして怒られてたなあ確か。

「でもひきこもってますからねえ、パチュリーさんって案外ムツムツチかもしれませんよ！ 良いですね、性的で！」

もうこの天狗はだめだ。

私は冷たい目で射命丸さんを見た。

「ああ、佐天さんそんな冷たい目でっ！」

どうあってもこれか！

私は深い深いため息をついて紅茶を一気に飲んだ。

そして美鈴さんが居眠りしていることも伝えた。

今日も、紅魔館は平和だ！

だけれど、その日は私が初めて「ソレ」と出会う日だった。



夜、私は晩御飯を食べた後レミリア様たちとテラスに出ていた。おかれたテーブルの上には相変わらぬ紅茶、お腹たぶたぶになりますってと思いながらもおいしいので文句は言わない。

射命丸さんも夜まで密着する気はないようで今はいない。テーブルを囲むように座る私、レミリア様、美鈴さんとパチュリーさん。

そしてそれぞれの主人の後ろで立っている咲夜さんと小悪魔さん……いや、私も立つべきだとは思うんだけど、ゆっくりしたい！

フランに関してはもう寝てしまった。早寝早起きがいいね、吸血鬼的には微妙だけど。

「……ん？」

レミリア様が突然目を細めた。

「どうしたんですか？」

「今日は満月だ」

そんな言葉に私が空を見上げるけれど、そこには少し欠けた月。でも月って欠けてるかどうかって見極めにくいんだよね。

満月を意識したのもこっちに來てからだし……。

「欠けてますよ？」

「お嬢様の言うとおりで今日は満月のはずだけど、あれ？」

美鈴さんは首をかしげた。

「やっぱり欠けてる。」

「満月のはずなんだがな……これは」

「異変、ですね」

レミリア様の言葉に続いて咲夜さんがそう言った。

これが異変……月が欠けてるなんて意外とたいしたことないんだなとか思ってしまう。

「完全な満月じゃないと妖怪にとっては死活問題な者もいるんですよ」

小悪魔さんが耳元でボソッと教えてくれる。

なるほど！ さすが小悪魔さん、天使です！

とりあえずこれが異変かと思いなながら月を見上げてみる。

見てれば確かに欠けてる。

「涙子、異変解決だけど今回は貴女に任せるわ」

「はい……って、ええっ!?!」

私が異変解決ですか!?

それは少し難しい気もするんだけど……。

「咲夜もつけるから安心なさい」

それなら安心、とも言い切れない。

妖怪の相手って紅魔館のヒトたちとしかやったことしかないし。

正直霊夢さんと魔理沙さんには勝てないし、チルノに勝ててもそれ

で並みの妖怪に勝てるかどうか。

「女は度胸、なんでもやってみるものよ。後魔術はまだ試験段階なん

だから使ってはダメよ?」

「……わかりました。行つてきますー!」

パチュリーさんからの言葉に私は頷く。

魔術はともかく、色々試行錯誤してやってみるのも悪くはないかな

と思う。

確かに度胸が足りなかった気もするし、せつかく佐天さん大復活な

んだから頑張っちゃいますよ!

頷くと突然、レミリア様とパチュリーさんが立ち上がった。

「涙子、あなたにプレゼントがあるから来なさい!」

楽しそうにいうレミリア様に私はついていくために立ち上がる。

「それと、大切な話がある。今回の異変を解決するのに必要になるこ
と……今の涙子なら教えてやろう」

レミリア様の表情は今しがたしていた楽しそうな笑みではなかつ
た。

どこか嬉しそうだけれど、どこか不敵な、そんな吸血鬼の笑みがそ
こにはある。

私は生唾を飲んでからその瞳にさらされながらも静かにうなずい
た。

そしてこの日、今このときより――。

――私たちの“永夜異変”が始まる。

28、開幕は鳥と蟲

パチユリー様曰く、いや魔理沙さんからの言葉らしいんだけど……曰く『女は度胸』らしい。

なんとなく言ってた意味が今ならわかる気がする。

まさか私が突然こんなことをさせられるとは思ってもみなかった。何の練習もなしに、なんの訓練も教えもなしに……。

「なんで私はバイクに乗ってるんですかねえ？」

そこそこ大きめのバイクに私は上体をほぼ横にして乗っていた。

森の中を走りながら私は大きいため息をつかざるをえない。

「乗れてるんだからいいじゃない？」

私の横を飛ぶ咲夜さんがそう言う。

まあ乗って数分で慣れてしまった私も大概だとは思うけど、向こうでやったらもれなく犯罪だなどか思い出す。

無免許だけどどうにかなるもんだね、人とかも少ないし道も広いし。

まあ飛べないんだからしかたもないんだけど……。

とりあえず私はアクセル全開でレミリア様の『人里の方が怪しいわね』を信じて人里への道を行く。

「——止まりなさい涙子！」

そんな声に驚いて私はバイクを止めた。咲夜さんの目を見て私はそのバイクから降りる。

なんだか不穏な空気を肌で感じてから、私は衣装を軽く整えた。

衣装と言っても戦闘しやすいようにって小悪魔さん（天使）が見繕ってくれた服。

白いワイシャツに黒いベスト、その上からジャケットを羽織って下はデニム生地ホットパンツに黒いオーバーニーツ、ロングブーツ。柵川の制服やメイド服より断然動きやすい服装。

「まったく今日は厄日だわー！」

そう言っただけ降りてきたのは鳥の羽をもった女の子。

夜雀、と咲夜さんが横でつぶやくのを聞いて私はオープンフィン

ガーの手袋の裾を引っ張りしつかりと手にフィットさせる。

その女の子とは別に、新しく現れる女の子。

緑色の髪と二本の触覚を持った女の子はため息交じりに私たちを見据える。

「今日は人間のお客が多いみたいだよミスチー」

「またあ!? 今日で三人目よ勘弁して! こうなったら先制よりグル!」

ミスチーと呼ばれた少女が私と咲夜さんを睨む。

それに頷いたリグルっていう女の子まで私たちを睨んだ。

これは間違いなく戦闘になる予感!

咲夜さんはどこからともなくナイフを取り出し私は静かに拳を構える。

「行くわよ!」

「虫をなめるなよ人間!」

「舐めたくもないけどね!」



涙子と咲夜、リグルとミスチーミスチーに開始の合図はいらなかった。

いや、戦場ともなれば開始の合図なんて自分で察するものだ。

圧倒的にスピードが高いの咲夜が夜雀ことミスチーの方を相手にする。

それを察した涙子には余った蛍ことリグルを相手にすることにした。

リグルは涙子が近づいてこようとするのがわかるとカラフルな弾幕を放つ。

「面倒なっ!」

涙子はその弾幕の雨を慣れた様子でかいくぐる。

伊達に博麗の巫女や普通の魔法使い、それに紅魔の妹の遊び相手をしているわけではないというわけだ。

弾幕を体を翻したり跳んだりしながら避けていく涙子は案外あつ

けなくリグルを至近距離まで追い詰めた。

リグルが後方に下がろうとするも涙子の拳のほうが早く、まっすぐリグルの腹に直撃。

軽く飛んだリグルが地面スレスレにて体勢を整える。

「ごほっ、今日は人間離れした人間ばっかだなあ」

咳き込みながらそうつぶやくリグルだったが涙子にそれは聞こえてなどいない。

彼女は軽く拳を空に振るうと再び動き出す。

そしてまたしてもリグルはカラフルな弾幕を張った。

「甘い甘い！ 弾幕ごっこは遠距離戦だけじゃないよ！」

飛んで弾幕の中を潜り抜けると、リグルの背後に涙子は着地した。

即座に背後を向く涙子だがその視界にリグルは移ってはいない。

意表をつかれて少しばかり呆けそうになるが、すぐに意識を戦場へと戻す。

「なにをよそ見してるんだってのー！」

声の下方方向をみると、自分と同じく跳んでいたリグル。

確かにリグルは涙子と違って「飛べる」だろうが、今リグルは「跳んで」いたのだ。

重力と自分の力によってリグルは佐天へと向かって行く。足を向けて落ちてくるリグルを見ながら佐天は回避を選ぼうとした。

だが……。

「ひっ!?!」

周囲を囲む無数の「虫たち」に佐天は思考を停止させられた。

それ故にリグルの高速で落下してくる蹴りは佐天へと直撃する。

「リグルキィィィック!!」

吹き飛ぶ佐天は二メートルほど飛んでから地面にぶつかり停止した。

綺麗なフォームで着地したリグルは軽く両手で体を叩く。

そんなリグルの視線の先の佐天は、起き上ろうとするもかなりのダメージに咳き込む。

「(っ……まさかこんなにつ、ダメージがキツイっ)」

この弾幕ごっこ（物理）の状況、自分が圧倒的に不利。だがそのルール上死ぬような攻撃はされない。ならば多少の無茶は効くと、涙子はその顔に笑みを浮かべて起き上る。

両手を地面についてそのまま立ち上がると、黙って拳を構えた。

「もう食べないから帰ってくれないかなあ、巫女とか魔法使いとか辻斬りとか勘弁してほしいんだよね」

二人ほど聞き覚えのある言葉が聞こえていたが、涙子はここでこの弾幕ごっこをやめるわけにはいかない。

自分のデビュー戦であるのだ。意地でも勝って咲夜を安心させてやりたいという気もした。

だからこそ涙子は両目を鋭く細めた。

「私の蹴りを食らってよく立ち上がったけどどこまでだよ！」

リグルはポケットから一枚の札を取り出す。

そう、スペルカードルールと呼ばれるこの弾幕ごっこの神髄はここにあった。

「蠢符「リトルバグ」!!」

スペルカード宣言。

つまり今までの弾幕とは格が違う技が来ると言うこと。それが接近技なのか弾幕なのか、知るすべは涙子にはない。

リグルの周囲を巡る白い弾幕、小さな弾幕は横と前から襲ってきた。

涙子は舌打ちをしてからその弾幕の弾道をすべて見極める。

今後の戦いのことを考えればこんなところで体力消耗というのも御免こうむりたい。

「ふう、仕方ないね……」

涙子はつぶやいてからジャケットの中に手を入れる。

そこから出したサバイバルナイフを右手に持ち、左手に小さなバタフライナイフを持つ。

紅魔館の美鈴とも、咲夜とも、ましてやスカーレット姉妹や魔法使いたちともまったく違う戦い方。

彼女が紅魔館で生み出した彼女の戦い方、それがナイフと近接との

ハイブリットであり、まったく誰も知らない戦う形。

涙子の真横に迫る弾幕、それが当たる寸前涙子は頭を下げ避けると同時に走り出す。

姿勢を下げて走る涙子の前方から迫る弾を涙子は軽くジャンプして避けると次々と弾を避けながらリグルへと詰め寄る。

それが彼女のアクロバティックな戦い方。

数か月前までは誰がこの少女がここまでになると予測できただろうか？

いや、これも才能の一つだ。

「蠢符「リトルバ——」

スペルカード宣言をするより、佐天涙子がリグル・ナイトバグに接近する方が早かった。

リグルが動揺していて宣言が遅れたというのもあるが、それでもこの緊迫の状況下における佐天涙子の能力の上昇率の異常性。

彼女のナイフはリグルの腹部を切り裂いた。

切れた服、腹を押さえるリグル。

「ぐっ……血が、でてない？」

痛みは確かにあったにもかかわらず血も出ない。

涙子はすでに少し離れていた。

両手にナイフを持ちながら彼女は口を開く。

「家の魔法使いさん特製のバトルナイフ……魔法によって加工されている。つまり服も切れるしダメージもあるけど死なないし怪我もないうってこと、ある種の拷問とも言ってたけどそれも使い方次第ってこと、見せてあげるよ！」

そういうと同時に涙子が動き出した。

リグルはその『蠢を操る程度の能力』にて自分の周囲に蠢の盾を作った。

先ほどの反応からして蠢は苦手とふんだのだろうけれど、今の佐天涙子にそれも無駄だ。

周囲に張った虫の盾の右部分が切り裂かれると同時に右腕に鋭い痛みが奔った。

これでは意味もないと蟲の盾を解いて回避に専念しようとするが、周囲を見渡しても涙子は見当たらない。

「どこだ！」

「ここだっ！」

上を見れば、落ちてくる涙子が見えた。

気づいた直後に切り裂かれるリグル、落ちてくる時に肩を切られる。やはり怪我はない。

涙子はその手にあるナイフをすぐに持ち替えて逆手持ちにする両腕を振る。

二撃の斬撃、しかしやはり怪我も出血もない。

すぐに涙子は背後に飛んだ。

「……これ以上やる？」

リグルは片膝をついて、その顔に強がりの笑みを浮かべた。

「勘弁かな、さすがにこれ以上は分が悪いし……」

そういつて涙子の背後を見るリグルに合わせて涙子も背後を見た。そこに立っているのは咲夜で、その腕の中にはミステリア・ローレライがいる。

まるでアニメのように目を回しているミステリアを見て、佐天はバタフライナイフを軽く振って刃をしまうとサバイバルナイフ共々ジャケットの中になってしまう。

リグルはミステリアを咲夜から受け取りおぶるとため息をついて背を向ける。

「なんで今日は、ミスチーじゃないけどほんと厄日だっていうの……そもそもミスチーが喧嘩なんて売らなきゃ」

その愚痴が涙子たちに聞こえていたのかどうかはともかくとしても、戦うことをしなくても良いのは確かだったようだ。

盛大なため息をつくりグルを背に、涙子は再びバイクにまたがった。

咲夜もすぐに飛ぶ。

バイクを走らせる前に咲夜に聞きたいことがあった。

「ところで、結構時間かかりました？」

「そうでもないけれど、あの程度の相手はすぐに倒せないとね？」
まだまだ課題点というところだろう。

ため息ついでもう一度、彼女は今さっきのことを思い出してみた。

咲夜はともかく、自分は蟲が苦手なのだ。

あまりにも恐ろしすぎる、でもこの程度のことでは驚くぐらいできないと涙子は自らの女子力（ ）をどこかに無くしてしまうと思った。

蟲でビビるぐらいが丁度良いのだ。

咲夜のようにふり構わずになりたくないなど、頭のどこかで考える。

「今失礼なこと考えなかった」

「うえへっ!!? ま、まさかあつ!!」

そう言うことでさら否定してみせ、動揺するなど心の中で連呼する涙子だったが、咲夜の視線に緊張してハンドルをおかしな方向にきりそうになる。

おそらく咲夜の方は感づいてはいるのだろうけれど、危なつかしい涙子の運転が心配になって睨むのをやめた。

まったく、と思う咲夜。

別に佐天涙子という少女の方ではなく、レミリア・スカーレットというわが主にだ。

このバイクを主が持っているのと知ったのも数日前、というより紅魔館の大事な貯金を使ってあの『香霖堂』から買ってきたらしい。

どうやら自分の留守中にわざわざ片腕しかない美鈴に運転させて自分は後ろに乗って帰ってきたらしいけれど、なぜ自分が今まで見つけられなかったか——それは間違いなくパチュリーの仕業だろう。どうせ透視の魔法みたいな便利なものを使ったに間違いはない。

数日前に見たとき、まさか今日という日に突然涙子に見せて突然乗せるなんて言った時はなにをトチ狂ったのかと思った。可愛い主のことである、タイミングを逃したと考えるのが妥当だろう。

そしてさらにわけがわからなかったのはその場で名前を付ける議論になったということだ。そのせいで一旦場所を変えて大広間に集

まっつて近年稀にする『紅魔館大家族会議』が始まった。

時は遡ること数時間前……。

紅魔館の大広間にて、レミリアをはじめとする紅魔館の幹部である面々と妖精メイドたちが集まる。

ちなみに今では佐天涙子もすっかり幹部であった。

まあなにはともあれその幹部たちがあつまっていたのだ。

ただ「佐天涙子のバイク」の名前を決めるためだけに、あの悪魔の姉妹も夜遅くまで起きていて片方はわざわざ起こし、あの動かない大図書館もわざわざ動き、寝すぎる門番は起きていて……。

「まず私の案だったか……」

レミリアがテーブルの下からフリップボードを出した。

「『スカーレット号』疾走する紅魔館』これでどう!？」

(センスが一ミリも感じられませんかわお嬢様! だいたい「くく」って聞いていないんじゃないか?)

思いつきりツツコミたかったが咲夜はこらえた。

「センスが一ミリも感じられませんかよ! だいたい「くく」ってなんですか!」

似たようなツツコミを入れた涙子に咲夜は少しシンパシーを感じた。

不服そうな顔をした悪魔の姉の方は本人に否定されたせいとおとなしくボードを下げる。

次に出したのは最近動くようになった気がしないでもない大図書館。

「本当にだめねレミィは、私はこれよ『サイレント賢者の石フレア』!」

(ああ、月火水木金土日……って)

「月火水木金土日……ってやかましい! もっとカッコい名前ないんですか!」

パチュリーは『えっ、カッコよくないの?』と少しばかり、否かんなり世間から外れた名前に疑問を抱く。

ため息に包まれる大広間だが、一番ため息をつきたいのは自分であ

る自信があつた咲夜。

それでもなお我慢できる彼女の器の大きさというか我慢強さは幻想郷トップクラスであろう。

その次に出したのは美鈴、自信満々の顔だ。

「佐天さんのことをまったく考えてないですね二人とも、これは佐天さんのバイクなんです。佐天さんが乗って名乗るに恥じない名前を出すべきでしょう」

(良いこと言うわね美鈴!!)

「これです! 『ホイール・オブ・佐天号』!」

(前言撤回よ美鈴!!)

「なんだか惜しい! てか自分の名前つけたくないです!」

「こんなこともあるのかともう一品『666^{オーメン}・ウロボロス・佐天号!』」

「私の話聞いてないよ!」

ツツコミ疲れたのか肩で息をしながら座ってしまった涙子に咲夜は心の中で合掌した。

しかし咲夜自身ここまでツツコミを入れない自分をほめてあげたいと思う。

明日はレミリアにニンニクスープを出すことで気持ちを押しさえようと決める。

とりあえず次はフランドールのようだ咲夜は腹筋に力を込めた。下手をすれば崩壊もまぬがれないだろう。

「次は私だね!」

夜中に目を覚ましてもなお楽しそうなフランドール・スカーレットがボードを晒す。

『^{スカーレット} ^{チェイン} 蓮 ♪ 進む紅 ♪』っていうのはどうかしら!」

「ふふおっ!」

思わず吹き出してしまう咲夜だが時間を止めてギリギリセーフ。皆が止まっている空間でただ一人だけ腹を抱えて地面にうずくまった。

まずい、このままでは自分がキュツとされてしまうと考えた咲夜は自らに強烈な腹パンを打ち込んで冷静さを取り戻すと時間の経過を

元に戻した。

「てかその『』と『』はどうやって読むの!? 姉妹そろって同じことをやる!? ていうか普通にカツコ良い名前ないんですかあ?!?」

さすがに涙子も自らの愛機になるであろう子にそのような名前をつけたくはなかった。

痛いを通り越してもう字面でしかわけがわからなくなっている。

なんだかまともな名前はないものかと模索する紅魔館のメンバー。正直これ以上は時間の無駄だとは思う咲夜だったがそれよりもこの大喜利の行く末を見てみたいという好奇心のほうが強い。

けれどそれも時間の問題。

スツ——と手を挙げたのは涙子の紅魔館での良心こと小悪魔だった。

「じゃあ、悪魔の館のよしみってことで、少しあれかもしれないが『フェンリル』というのはどうでしょう?」

そんな名前を聞くとレミリアとフランからは『地味』と、美鈴からは『佐天という名前が入っていない』と、パチュリーからは『五行を入りたい』と色々と注文が入る。

咲夜はそんな中自分なりに名前を考えようとしていたが面々の名前が頭の中をよぎり時間を止めて笑いを止めるので精一杯だ。

「なるほど、小悪魔さんはやっぱり良い名前出してくれますね」

先ほどのツツコミラッシュのときと比べるとおとなしく頷く涙子に紅魔館の面々は美鈴以外不服そうな顔をした。

それに気づいてか少しばかり冷や汗を流す小悪魔。

「どうしてそんな名前にしようと思ったのかしら? 私たちはそれぞれ由来もあつての名前よ、カツコいいなんて理由だけじゃないでしょうねえ?」

なんでそんなに怒っているのか、とも思う小悪魔だがおとなしくレミリアの言葉に従うことにした。

理由を述べるために少しだけ自分のペースを取り戻そうと咳払い。

咲夜は先ほどから少しも喋らない、否喋れない。

「やはり早く走る獣ということでフェンリルというのものもあるんですが、別名の訳が『悪評高き狼』と言いまして紅魔館のメイドである涙子さんの“足”にはぴったりかなと、それにかの上顎は天にも届くと言われた狼の名前をというのもの」

さらに次々と答えていく小悪魔に、最初は不服そうだった紅魔館の面々は徐々に納得した顔になっていく。

これぞ悪魔の話術、人々を惑わすかの種族の話術……だったらよかったのだが今回はただ紅魔館のヒトがチョコロイだけである。

涙子は小悪魔の言葉に何度もうなずいて、結果そのバイクの名前は『フェンリル』となった。

ちなみに佐天涙子曰く『チルノに乗せたらなんか似合う気がする』である。

現在に至る経緯の一部はこれである。

つまり、巫女や魔法使いに遅れてこの二人が異変解決に当たりだしたのはバイクの命名が大きな原因でだ。

そもそも涙子が飛べないというのも原因の一つではあるのだが、普通の人間は飛べない。

佐天涙子の常識はおかしくない。

「そろそろ、人里が見えてき——あれ？」

涙子の声に咲夜は頷く。

バイクに乗った涙子と咲夜は人里へと入るのだった。

事故が起きないようにゆっくりとバイクを走らせる涙子と合わせ飛ぶ咲夜。

だが何かがおかしい。いや、間違いなくおかしいのだ。

普段人里がある場所に人里がない。

そんな時一つの影が二人の前に現れる。

「お前たち！」



「お前たち！」

そんな声に私、佐天涙子と咲夜さんは止まる。

いやあ聞きなれた声だけど……。

咲夜さんはナイフを構えるけれどそれも杞憂だと思う。

「つて佐天と紅魔館のメイドか？」

「その通りですよ慧音先生、それよりもこれはなんですか？」

私はバイクこと『フェンリル』から降りることなくそう聞く。

慧音さんは私のまたがっているそれを見てから訝しげな顔をして咲夜さんを一目見る。

その後私の方を向いて頷いた。

「いや、今宵の異変が気になってな……満月が出ないし月も動かない。人里を守るために一時的に消しているというわけだ」

いやいや、『一時的に消している』じゃないっすよ先生。

常識からずいぶんぶっ飛んだ学園生活を送ってるって自負してたつもりの佐天さんも驚愕です。

でもあまり驚かないでいられる自分に一番びつくりしながら私は『そうですか』と返す。

横の咲夜さんを見れば何も言わずに頷く。

「えつと慧音さん」

「今宵の異変の犯人なら……たぶんあつちだ。心当たりがないでもない」

人里の方つてことしかわからなかったから慧音さんに会えたのはずいぶん幸運だったと思う。

とりあえず私は人がいないともわかったことだしとハンドルを握って慧音先生の方に視線をやった。

初見ということもあって少しばかり興味深そうに私のフェンリルを見る慧音さん。

「今度じっくり見せに来ますよ」

「ほ、本当か、楽しみにしておく」

そう言っただけか頷く慧音さん。

私はアクセル全開で慧音さんが指さした方向へと走り出す。

咲夜さんは時を止めたのかいつのまにやら私の後ろに座っている。
無免許、拳銃に二人乗り、今日はじめてのバイクで私ったらだいな
やらかしてるよね。

改めて私は幻想郷で『常識』は通用しないんだなと思わされるの
だった。

そしてこの夜——私は真の非常識を知ることとなる。

29、龍の弟子

人里を出て森の中をバイクフエンリルで走る私、それと咲夜さん。

私「佐天涙子」はふと、学園都市のことをまたもや思い出している。思い出すというよりも思いにふけるとかの方が言い方はあつてるかもしれない。自分がだいぶ変わってきたという自覚がないわけじゃない。あの頃みたいに『楽しければそれでオッケー』と言える考え方じゃなくなってるのも確か。幻想郷に関わっているだけでそうはならなかったから、たぶん魔術と出会ったのが一番の原因。

魔術とであつて私はいつでも命を失うということを初めて実感して……その前のフランとの時とは違う感覚、殺されることが当然という世界。自分の選択一つで誰かが傷ついて誰かが死ぬかもしれないっていう世界。

でもたぶんそれは魔術が関わっている時だけじゃない、幻想郷だつて並の世界とは大きく違う。殺すことをなんとも思わないヒトだっているらしい。

だから私は何かを守るために、強くなる必要があるんだ……。

「涙子、止まりなさい」

咲夜さんの声に私は我に返つてすぐにフエンリルと止めた。私たちの目前には黒い魔法少女が一人。いや、魔法少女は一人だけけれども二人。

「アリスがなんか気配がするって言ってたけど……お前らか」

魔理沙さんと、人形を周りに浮遊させてる女の人……魔理沙さんの口ぶりからしてその人がアリスって人で良いんだと思う。笑みを浮かべる魔理沙さん。箒にまたがって飛ぶ彼女を見て咲夜さんがナイフを取り出した。

——つて、えええ!?

「弾幕ごっこですか!？」

「魔理沙がやりたそうにしてるんだから仕方ないでしょう、お屋敷じゃないだけありがたいわね。掃除が大変だから」

「今日掃除されるのは、お前だぜ?」

そういうと飛び上がる魔理沙さんと、それを追っていく咲夜さん。私はその場に残ったアリスと呼ばれた女のひとを見て愛想笑いをした。

「仕方ないわね、貴女も一応敵になるのだからやらせてもらおうかしら？」

アリスさんが指を動かすと、その指と周囲にとぶ人形との間につながれた糸が動く。そして人形たちは各々武器をもって私の方に向けた。いやはや、これまた不思議な戦い方の人みたいだけど……。

「私も結構不思議な人たちと戦ってるから慣れてるんだよね！」

私はそういつてから踏み出した。おそらくあれは人形を使つての攻撃、火力の高さで言えばスタイルには匹敵しないし、勝つことができないうけじゃない！

予想通り前方から突っ込んでくる武装した人形たち、配置はアリスさんの傍に3で私に突っ込んでくるのが2……これなら！

ランスを向けて突っ込んでくる人形のランスを真下から——蹴り上げる！

「そ、し、てえっ！」

拳をその小さな胴体に叩きつけて、地を蹴って次の人形に飛び蹴りを見舞う。着地すると同時にアリスさんに近づいたためぐさま走る。距離にしてそこまではない。上空からの弾幕がいくつか“私達”の戦場に落ちてくるがそれは、無視するに限るってね！

アリスさんの傍の人形が動き出して弾幕を放ってくる——って！

「わわっ！」

結構意外なことで、私は地を蹴って空中で一回転してから下がる。いやまさか人形から出るとは……。

「あら、人形使いとは初めてって感じね？」

「まあ、向こうでもそうは居ないでしょうからね。人形使いなんてどうやるのか想像もつきませんよ」

私は軽く笑ってからもう一度拳を構える。昔とはずいぶん変わったけど、丁度良いかなとも思う。とりあえず今はこの二人をなんとか

沙と組んでるのに……紅魔館が人間二人で組んでるなんて思いもしなかったわ……しかも飛べない」

「そりゃ、すみませんでしたっ……て、危なっ！」

私は攻撃を食らいそうになりながらも、なんとか掠ることもなく人形たちの攻撃を回避していく。私が蹴り飛ばしたアリスさんだけどもうダメージが薄くなってるみたいで痛そうな顔一つしてない……。こりゃ悔しいから、なんとかする方法を考えてみても上手いダメージの与え方なんてそうそう思い浮かばない。

「こんなところで使いたくは、ないんだけどなあ」

「奥の手があるのに残してるなんてずいぶん悔ってるじゃない、なら……これはどう？」

さらに攻撃スピードが速くなる人形たち相手に私はさすがにこれ以上“回避だけ”で捌ききれないことがわかった。だから私は両手の指に投げナイフを三本づつ挟んで抜き放つと同時に投擲。まっすぐ飛んだ六本のナイフは人形たちに当たる……と言っても当たったのは二体だけでその他四本は見事に避けられて……。

「これはっ、キツイ！」

私は回避しながらさらにナイフを六本投げて刺す。だけどその時点で私は少しばかり抜けていた……。

「そりゃあ、そうだよねえ……」

ナイフが刺さった程度で、人形が動かなくなるわけがない。いやあ、完全に抜けてたとしても言いようがないって感じ？

「ぐっ！」

人形の槍が横薙ぎに振られて私の腹を打つ。小さな体から放たれる十分な威力のそれにより私は大きく吹き飛んで背中を竹にぶつけて、倒れた。

——さすがにつ……ハアッ……強つ……。

肩で息をしながらなんとか立ち上がったけれど、人形たちから放たれる弾幕を見て体を酷使しながらなんとか回避。その場で両足を使って跳ねるけれど次の弾幕が私を待っている。それらは学園都市で“なぜか撃てなかった”弾幕とも言えない弾幕を放っていくつか

を相殺、後は空中で体をひねらせて回避……と同時に片手で三本のナイフを投げる。

「手癖が悪いわね」

クスツと笑ったアリスさが指を動かしてその三本のナイフを人形の武器にて防ぐ。私はアリスさんの視界を覆った人形を確認してから軽く回転してその勢いのままナイフをまた三本投げて追撃をかけた。

「ッ!？」

人形をどかした途端驚いたアリスさんはすぐに二体の人形の体を使ってナイフ二本を止めて、もう一本のナイフを顔を傾けさせて避ける。どうせ当たっても痺れるだけなんだけど……さて、これで決める予定だったんだけどッ!

落下する私に弾幕が直撃して、私は空中で衝撃によってふたたび竹に体を打ち付けてそのまま地面にも打ち付ける。

「上海、蓬萊、っめんね」

私の視界の先にいるアリスさんが自分を守らせた人形二体に謝るのは、やっぱり人形たちが大事なんだろうなあ……。でも私だってせっかくの家族の期待つてもものがあるからね。

「負けないよ」

「まだ起き上がるなんて大したものだわ」

「ありがとうございます」

「じゃあ、これはどうかしら?」

アリスさんがそう言うと、アリスさんの周囲にさらに人形が増える。その数は総じて16体とずいぶんな大所帯で私なんかにはさばききれぬわけもなくて……上から降ってくる弾幕とナイフの数も徐々に減ってきたのを見ると向こうは決着が着きそうなのかな?。

——— だったら私も、ここから先は手を抜けない!

ここから先のことをまったく考えないって言われても仕方ないかもだけど、ここで「コレ」を使う価値は十分!

「妖魔結界——!」

叫ぶと同時に左腕を空へと突き上げる。

「血呪封印、解除！」

左腕から紅い「何か」が溢れるのがわかった。

◆◆◆◆◆

約一時間前、紅魔館にて――。

バイクの名前を決めてすぐの出来事だった。彼女、佐天涙子は恐ろしいまでのツツコミなどで疲れていたがそれを知っているのは咲夜のみであり他の住人は知る由も無く、ただ彼女に真実というより事実を伝えようとしていた。

長テーブルに座る紅魔館の住人たち、名前を付けてそのまま話が続く。

「佐天」

「は、はい!？」

突然真面目な表情をするレミリアに緊張する涙子。

「貴女、実は純粋な人間で無くなることが可能だわ」

「……は？」

「簡潔に言うと、貴女はまだ人間で、貴女の腕と眼はまだ本当に貴女のものじゃないのよ」

涙子は頭の上に疑問符を飛ばしまくりにあつた。

「私たちの腕を貴女に上げると決めた日、実は霊夢が来ていたのよ」

「霊夢さんが？」

「そう、そして博麗の結界術で私たちの腕と眼に宿る妖魔としての血を封印しながら貴女へ移植した」

涙子も徐々に理解の兆しは見せているのだが、やはりわけがわからない点がいくつか存在していた。幻想郷に数か月住んでいる涙子だが向こうの世界とこちらの世界での相違点がありすぎてさすがにすべてを把握できる涙子ではない。そもそもこの技術自体、そうそう知っている妖怪がいるわけでもないのだから当然だ。

「とにかく、貴女の眼と腕にはたしかに妖怪と悪魔の血があるのだけれどまだその力は封印されているの……そして私たちとの繋がりも

まだ貴女の体の眼と腕にある」

封印を施した腕と眼を移植して直、レミリアと美鈴の眼と腕は繋がっている。

確かに佐天涙子の移植は成功しているのだから肉体的なつながりは一切無い、そのはずが見えない何かでまだ繋がっているレミリアと美鈴。霊夢が人間としての佐天涙子を保つたために行った封印が原因だと言っていたのだから間違いは無く、レミリアと美鈴の二人自身も涙子が人間として生きたいというのならば涙子が死ぬまで片目、片腕の生活ぐらいどうということはないと思っている。それでもここで封印のことを話したのは間違いなく——この先、必要になることがあるかもしれないからだ。

いや、涙子には必ず必要になると「能力を使わなくても」レミリアにはわかっていた。

「涙子、使うも使わないも貴女の自由……だから教えておくわ」

——人間の、辞め方。

◇◇◇◇◇◇◇◇

結果——私は辞める方を選んだ。

レミリア様と美鈴さんの眼と腕がこれで治るようになるというところで辞めたとかいう理由が無いとは、言えないかな？

それでも今もこれからこの力が必ず必要になってくる。そんな確信が私にあつたのは間違いなく勘だけど、当たる気がしているのも事実で……学園都市にまた戻っても御坂さんや白井さんや上条さん、それに初春や色々な人たちを助けるためにもきつとこれは今、使いこなせるようになっていた方が良い。だから私はここでこの力を使う！

「『龍』——解放！」

左腕から体中に「力」が流れ込んでくるのがわかる。身に余ると言うにふさわしい「私たち」の力、そして私が道を切り開くための新たな力。みんなを助けるための、守るための力。

「……なるほどね、人間と人間のコンビじゃ無かったわけ？」

アリスさんが笑って言うけれど、私には笑い返すだけの余裕が確かに今はあった。調子に乗っていると思われたらそれまでかもしれない、けどそのぐらいに私は舞い上がっていた。手に入れた力は、私の望んでいた、待ち焦がれていた守るべき力で、誰かの役に立つ力、そしてそれをくれたのは私の最初の師匠と呼べる存在。そして家族。

「ここからが佐天さんの本当の力の見せ所です！」

「来なさいよ半妖！」

「行きますよ妖怪！」

「魔女だけどね！」

なるほど、魔女ですか……魔理沙さんと仲が良いわけだ。

「べ、べべべ！ 別に仲良くなんかないわよ！」

あれ、口に出しちやっつた？ ていうかそうですか、御坂さんと同じくツンツンデレデレ、簡単に言えばツンデレと言うことですかね。私もつくづくツンデレと縁があるというかなんというか、まあどうでも良いや、今はアリスさんを倒すことが目的なんだから！

上だつてそろそろ終わつてるかな、これ以上は咲夜さんに怒られそうだしっ！

「行きますよ！」

「こつちだつて！」

アリスさんが札を掲げる。

「ラストスペル「グランギニョル座の怪人」！」

16体の人形が一斉に動き出し、武器を捨てて弾幕を放ってくる。視界一杯を覆うそれらを見ながら涙子は口元に笑みを浮かべて目の前に弾幕が迫つてから、地を蹴った。

——さつきとは、くらべものにならないっ！

それほどの瞬発力と脚力、体中に流れる紅美鈴ホンメイリンの血はそれほどのことを可能にした。もうすでに涙子に投げるナイフは無く、手元には大き目のサバイバルナイフぐらいのものだが……今の状況ならそれで十分だった。

「よつとー」

走り出した涙子は弾幕を回避しながらアリスではなく、人形へと走る。先に人形をつぶそうと言うのであればそれはかなり骨の折れる作業だ。痛覚のない人形をいくら攻撃したところであまりにポロポロにしない限りいくらでも動ける。だがそれなら人形に走ったのは、別の理由があるからだ。

弾幕をかいくぐり一体に近づくと同時に涙子はその人形に「刺さっていたナイフ」を抜いてから人形を蹴って吹きとばす。ダメージはないが距離を取るという意味では大事だ。

「このっ！」

まだまだ続く弾幕の雨の中、涙子は軽く地面を蹴って軽いジャンプ、そしてそのまま身をひるがえしながら接近と回避の両方を行い、また一体の人形からナイフを抜くとその二本をジャケツトに入れてさらに人形を蹴り、走る。再びアリスではない場所に向かって走るが今回は人形ではなく竹だった。そこに刺さっている二本のナイフを取ると、涙子はそのまま竹に足をかけて——跳ぶ。

「なっ!？」

空中で身をひるがえしながら弾幕を回避、それでいて当たりそうになる弾幕を先ほど抜いたナイフで流れるように捌く。その身のこなしはさすがに人間とは言い切れるものではないと佐天涙子自身も思い、そこでようやく自分が人間からかけはなれた存在だと理解することができると。だが一切の後悔はない、ただ家族と同じ体質になったくらい、涙子にとってはその程度でしかない。

「よっ」とー」

地面に足をつくと同時に自分の視界に入るすべての弾幕の中から活路を見出す。霊夢も魔理沙も人間のまま得た技術だがその才能に特化している者と同じことができるだけ涙子にもそれなりの才能の片鱗はあったということだろう。地を蹴って体を逸らし、弾幕の中をくぐりぬけると再び走り、転がると同時に落ちている自分のナイフをいくつか拾って、再び跳んだ。宙へと体をひるがえす涙子。

——この力が、神裂の時につかえてればまた少し、違ったのかな。向こうでの「もしも」を考えざるを得なくもなる涙子だったがす

ぐに意識をこちらに戻す。弾幕勝負の最中に他のことに集中なんて失礼なことこの上ない。

「さっきとまるで違うわね！」

「アハッ、そういわれると複雑ですが、ねっ！」

跳んで弾幕を避けながら、人形二体を踏みつけて地面に立つ。アリスが上海と蓬萊、と呼んでいた二体の人形を踏みつけながらその二体に刺さっているナイフを抜いてすぐにアリスへと走り近寄る。至近距離の二人、アリスは弾幕を撃つのをやめた。

「この距離じゃ四方からの攻撃はできませんね、アリスさん！」

「ッ！」

わかっていた涙子は腰を落として片足を上げる。そして拳をまっすぐアリスの体にぶつけると同時に足で踏み込む。美鈴に教えてもらった中国拳法の基礎を使った技、それは純粹に相手の体を破壊する攻撃であり人間ならば骨は完全に砕けるだろう。

「がッ!？」

「せいっ！」

涙子の拳の直撃を食らい、吹き飛んだアリスは地面を転がるもすぐに起き上る。インフアイトなんて想定した訓練なんてまったくしていないからこそ今の状況に抵抗する術はほぼ無し。人形も近くにいないければ———そこまで思っただけですぐに人形を引き寄せようとしたアリスだがすでに遅い。

跳んだ涙子はサバイバルナイフを回転させながら投げる。そのサバイバルナイフはアリスの額に直撃、それも柄が直撃。突然による衝撃と痛みのダブルパンチにより背中から地面に倒れるアリス。すぐに起き上ろうとしたが涙子の方から飛んできた投擲用ナイフがアリスの服のあまり部分を突き刺しアリスを地面に釘付けにした。

跳んだ涙子がアリスの脇腹横の地面に両足で着地し、アリスの額を攻撃したサバイバルナイフを取るとアリスの首にあてがう

「……私の勝ち、ですね？」

そう言っただけで不意に笑う佐天涙子は間違いなくあの吸血鬼の館の従者であり幹部であると、アリス・マーカトロイドは認めたくない負け

を認めながら、佐天類子のオッドアイを見ながら、そう思うのだった。

かくして、佐天涙子は人間を卒業した。

30、人と妖怪と時々半妖

アリスが負けを認めたことにより、決着が着き、涙子はアリスを地面に縫い付けたナイフを回収していく。穴だらけになったアリスの服を見ると申し訳なくもなるが赤くなって服を押さえているアリスを見るとなんだかスカートを捲った後の初春とチルノを思い出した。

上から降りてくるボロボロの咲夜と魔理沙の二人を見て、肩をすくめる。

「大したものね、アレを使ったといえど勝つとは」

いつも通りクールに言う咲夜だが、ボロボロの涙子よりもボロボロの咲夜が言うのであまり恰好はつかず、魔理沙は負けたというのにも関わらずおかしそうに笑って、咲夜に時間を止められてから殴られる。頭をおさえる魔理沙が涙子を見て、少しばかり顔をしかめた。

「ああ、私の左腕の美鈴さんの腕の力を使っただけです……でもこの封印を解除できるのも制限時間付きなので、ほら戻った」

佐天が纏っていた雰囲気が変わり、その体からあふれ出る「気」の力も感じなくなる。

「どうなっただ？」

「まあ、簡単に言うると美鈴さんの妖怪の血の力の封印を一時的に解放して能力を上げるんですよ……まあ、解放されている方が本当の力と言った方が良いんですが封印されているとき、つまり普段の私はただの人間です」

「あれで人間、ねえ」

先ほどの封印を解放する前の涙子の動きを思い出しても正直すぎまじいと思うアリス。苦笑して返す涙子にも自分の身体能力がよほど人並み外れているという自覚はあるのだろう。

「ともかく、あまり使い続けるわけにはいかないのよ。解放されていれば徐々に妖怪の血は涙子の血に馴染んでいって、最後は封印の意味がなくなるから」

「別に人間じゃなくなっても構いませんって」

「……」

涙子が楽しそうに言うが、構うのは咲夜たち、つまり紅魔館の住人達なのである。涙子にはまだ理解できていないのだ、人間じゃなくなり妖怪になるというのがどういうことなのか……。魔理沙と友達のアリスにも、紅魔館の住人である咲夜にもわかることだが、涙子にはまだわからない。人間と妖怪では生きている時が違うのだと……

それから軽く話を終えた後、涙子はバイクフエンリルにて咲夜を乗せて走った。どこまでも続きそうな竹藪の中をバイクで走りながら、涙子はどこに向かっているのかと自分でわけがわからなくなりながらも走る。一応、アリスと魔理沙の二人からこちら側に進めばいいと大雑把な説明は受けたのだが、すでに怪しいぐらいの場所であり、そろそろバイクを降りた方が良いのではないかとすら思う。

そんな時、視界の先に銀色の鈍い光が映った。

「……止まりますよ咲夜さん」

「ええ」

止まる涙子の視線の先には、銀髪の少女と桜色の髪の女性。この幻想郷に来てから研ぎ澄まされた本能的感覚が目の中の二人に妙な不安を覚えたが、とりあえず話し合いもせずには戦闘というわけにもいかないし弾幕ごっこをいきなりしかけてくることなんて無いだろう。

二人の女性の視線と涙子の視線が合うが、涙子は相手の力量を見るに逃げた方が得策かと考えた。

「あら、紅魔館の……」

「おさがりください幽々子様、ここは私が！」

少女の方は魔理沙と同じぐらいの強さか、だが女性の方は格が違う。あまりにも危険な感覚がした。

「下がちなさい妖夢、私が少し遊んでみたいわ」

「しかし……いえ、わかりました」

妖夢と呼ばれた少女が下がり、幽々子と呼ばれた着物の女性が前に出てくる。咲夜も涙子が動くまでは動かないようだがいつでも時を止められる準備はしていて、あとは涙子の合図を待つぐらいだろう。しかし、女性の視線にさらされた涙子はどうやって逃げればいいのかわ

からないでいた。

瞬間――。

「あら」

上空から巨大な何かが降ってきた。

「氷塊？」

その一つの氷塊は涙子と幽々子の間に突き刺さり、氷は偽の月光を反射し青白い光を映す。そしてその氷にヒビが入り砕け散った時、中から現れたのは青い髪の毛のワンピース姿の少女。その少女は粉々に砕け散った氷と共に地へと降り、腕を組んで不適で「さいきよー」の笑みを浮かべた。

青い目が幽々子を捉える。

「真打登場って奴よねー」

馬鹿^⑨ここに参上。その少女の名はチルノ、佐天涙子の幻想郷での最初の友達であり親友。周囲の空気を冷気に変えて、背中に六枚三対の氷の翼をジャキツ、と音を立てて展開させる。

「ふうん、まったくフランつたら乱暴な投げ方するわね……まあそのおかげで丁度いい場所につけたってわけよさ」

組んでいた手をほどいて後頭部をかきながら言うチルノは涙子の方を見て笑う。

「チルノー」

「佐天に咲夜、こんな異変「さいきよー」の力を借りれば簡単に終わったのに……それにリグルやみすちーともなんかあったみたいだし」

意外な人物と知り合いであったチルノに驚く涙子、やはりチルノの友好関係やら人脈やはわからないと思っただがさらにわからなくなるのはここからである。

「下がりなさい幽々子」

そう、堂々と相手に宣言するチルノ。普通の状態の涙子とすら互角だというのになぜここまで大見得を切ってあそこまでの存在と同等でいられるのか、涙子にはまったくわからなかった。しかしそれでもその背中は「さいきよー」を語るにふさわしいほど頼りがいのある

ものだ。

チルノの「提案」に幽々子は『ふふっ』と笑いながら答える。

「お断りよ」

「あたいと幽々子の仲じゃん」

「それでも私の楽しみを取り上げないでほしいわあ、それとも貴女の友達の「夜雀」を御馳走してくれる？」

「それこそ無理ってものじゃない、あたいは友達を裏切れないのよ」

「じゃあ私のことは？」

「……こーしよーけつれつってやつね」

チルノが手を地面に付けた瞬間、周囲に冷気が漂いチルノの前から氷の塊が現れそれは幽々子へとまっすぐ飛ぶ。

それを見て動いたのは妖夢だった。すぐに幽々子の前に立ち迫りくる氷の塊を切り裂いたのだが、その視界の先には氷の壁があった。それが攻撃手段でないと悟った時にはもう遅い。氷の壁は壁のように見えて飛び台であり、妖夢たちから逃げる。否、妖夢たちを追い越すためのモノ。

「なっ！」

氷の飛び台から涙子の運転するバイクが飛び出しそのチルノと咲夜を乗せた三人乗りバイクは妖夢と幽々子を飛び越えて「この異変の主犯」の元へと走って行った。

唾然とする妖夢をよそに、笑いだす幽々子。

「ふふっ、ふふふっ」

「どうしたのですか？」

「だって、あははっ、チルノがあんな小細工を覚えたなんて……まあここからは主犯まで一直線でしょうね」

幽々子がそういうと、不思議そうに首を傾げる妖夢。

「紫がチルノを通さないわけじゃないじゃない、まあ私だって本気で通す気がなかったわけじゃないけど」

「なぜ八雲紫や幽々子様のような強力な妖怪がああ程度の妖精を――

――」

「馬鹿だからよ」

そんな言葉に妖夢は再び意味が分からないというように『は?』と言って首をかしげた。妖精というのは総じて馬鹿であるが幽々子や八雲紫が妖精と仲良くしているなど聞いたことも無いので、というより馬鹿が好きという基準ならばこの幻想郷にはバカが山ほどいる。

けれど目の前の自らの主は「馬鹿」チルノ」と言うように馬鹿という言葉を使う。

「馬鹿^⑨じゃなきや私や紫と友達になろうとなんてしないわ」

「友達……ですか?」

「そう、友達よ友達、私たちの数少ない友達だから……絶交は怖いじゃない?」

軽く舌を出して悪戯っぽく笑う幽々子はそのまま涙子たちが進んでいった方へと歩き出す。わざわざ飛ばずに歩くということは考えるまでもなく、チルノたちを見逃したということだろう。なんだか一気にわからなくなった主を思いながら、そして先ほど目のあった佐天涙子を思い出しながら、妖夢も歩き出すのだった。

幽々子と妖夢から逃げ切った涙子たちは、それでもなおバイクをかつ飛ばして三人乗りのバイクは徐々に速度を落としていった。つい一時間ほど前初めて乗ったバイクだがなんやかんやですぐ慣れているあたり涙子の適応能力のすさまじさを知れる。

涙子の腰に手を回して後ろに乗っている咲夜は速度が徐々に落ちてきているのを感じて後ろを見る。チルノがバイクに掴まっていた。自分の氷で足を滑りやすくしていたからついてこれたのだろう。

「さて、次のボスですか……」

そう言った涙子に合わせるようにバイクから降りる咲夜、そしてその隣に並ぶチルノ。涙子はバイクに乗りながらも苦笑。

「あんまり戦いたくないんですけど……特に、貴女たちとは」

三人の先に立つのは博麗霊夢と八雲紫の二人。今回ばかりは逃げ切れないと思った涙子がバイクを降りて残りのナイフ残数を確認。大きなサバイバルナイフが一本と投擲用に使っているバタフライナイフが十二本、悪い数ではないがこの二人相手、いや片方が相手に

も足りないだろう。人間はスペルカードルールがあるから妖怪にも勝てるとは聞いているけれど、霊夢は確実に別格だ。あまりにも最強、圧倒的な最強――。

ただ唯一で孤高の――絶対王者キングと言える。

たしかに先ほどの幽々子の方が強いかもしれない、八雲紫の方が強いかもしれない、フランドールの方が強いのもかもしれない。なのに霊夢の方が強く感じてしまう。

それほど、涙子にとつての霊夢とは絶対的なのだ。なぜだかわからない、生理的なものなのかもしれない。だがそれは隠しようのない動揺となっている。本気の霊夢と戦う――。

「さて、三人まとめてかかってきなさいよ……」

お祓い棒片手に、霊夢は不適に笑う。

「咲夜さん、私と咲夜さんとチルノで、それから私が封印解除して霊夢さんに勝てますか?」

「……五分つてところかしら」

「ッさいきよー」のあたいがついていて情けないわね」

今回ばかりはチルノも頼りにならないと思った。

「はあ、仕方ないわね」

軽く肩をすくめて「やれやれ」と言った様子のチルノにイラツとする咲夜と涙子。チルノは二人の前に出て霊夢と眼を合わせる。だがまったくおびえもしなければ怖気づきもしないチルノに、霊夢はやりにくそうな表情をして肩をすくめる。

「チルノ、どうしたの?」

紫が霊夢の隣に立ってチルノに聞く。

「幽々子はダメだったけど、退きなさいな紫」

「……わかったわ」

「ちよ、紫!?!」

弹幕勝負もせずにあっさり引き下がる八雲紫に霊夢は動揺を隠せなかった。そしてそれは涙子と咲夜も同じであり、涙子は知らないが妖怪賢者と呼ばれるこの幻想郷創設にまで関わった存在の八雲紫が一妖精の頼みで考えを変えるところというのはある意味異変とも呼べなく

ない。

紫は自分の能力で空間に黒い裂け目を作りそこに腰かける。

「チルノの頼みだもの」

「アンタねえ、せっかくやる気を出してんのにあたしをなんだと思っ
てんのよ」

「それでもチルノの頼みだもの」

「……もういいわよ」

呆れる霊夢から戦意が失せたことを感じると涙子と咲夜も臨戦態
勢を解く。とりあえず通してくれるということだろうと察して涙子
がバイクから降りて押しながら霊夢へと近づく。咲夜とチルノも近
づきここに五人が集まったというわけだが、とりあえず。

「あれを倒さないよね」

全員が道の先を見ると、そこにはウサギ耳を生やした少女が一人。
直感で涙子は感じた、目の前の少女は五人でボコボコにして良い少女
ではないと……。

だからこそバイクをチルノに渡して涙子は少女の前に立つ。

「行ってください、私が引き受けます」

この少女とは、一対一でやりたいと思った。目の前の薄紫色の髪を
した少女とにらみ合いになる涙子。それを信用して頷くチルノと咲
夜。

「行くわよ霊夢、それに八雲紫」

咲夜の言葉に顔をしかめる霊夢。

「はあ？ あんなの五人でボコれば」

「佐天が行けって言ってんのよ」

「そしてチルノが行けって言うてるわ」

チルノと紫にも言われて霊夢がそれはそれは深いため息をついて
体を浮かせる。

ウサギ耳の少女の方も他の四人を相手にする気はないのか涙子の
方ばかりにしか視線を向けていない。よって四人はとりあえず先を
急ぐことにしたのだが、涙子は咲夜の方を見てバイクを指差す。

「お願いします、フエンリルを」

「置いてかなくていいの？」

「激戦必至ですんで、巻き込みたくないんですよ」

「あたいに任せなさい！」

チルノがバイクにまたがった。涙子が乗っていた時よりバイクが大きく見えるのはチルノが涙子より一回り小さいのが理由だろう、ともかく運転する気満々のチルノを心配するような表情見る咲夜。さすがに主の友人が事故ったなんて寝覚めも良くなる。

「チルノ、運転なんてできるの？」

「さつき見た、それで十分なのよさ」

そういうとチルノが笑う。

「なら行くわよ、涙子……勝って追いついてきなさい」

「了解です」

咲夜の言葉に涙子が力強く頷く。チルノが勢いよくフェンリルのグリップをひねって走り出すとそれを追うように飛ぶ霊夢、紫、咲夜の三人。すぐにバイクの走る音もしなくなりその場には涙子とウサギ耳の少女の二人になった。

なんだか、似たような空気をお互いに感じる二人。

「紅魔館メイド、佐天涙子です」

「永遠亭が狂気の赤眼、鈴仙・優曇華院・イナバ」

——う、うわあ。

あまりにも痛々しい二つ名を自称する少女に、佐天涙子はドン引きした。だが涙子は知らないだろうけれど確かにそう呼ばれているのだから仕方がない。ともかく、似たような空気を感じたのは気のせいだと涙子は自分に言い聞かせる。自分はあそこまで痛くなどない……。

「まあどつちにしろ私を倒さないと永遠亭にはつかないんだけど……というより聞かないのね、満月のこと」

「そういうの考えるのは私の仕事じゃないかなって、友達からの受け売りなんだけどやれることだけやれてねー」

「そ、まあとりあえずあんたを倒して私は逃げるとしようかな、アイツらが追ってくる前に」

勝つのは自分だと、涙子も笑みを浮かべる。
こうして涙子と鈴仙は出会うこととなった。

この出会いは必然、まさに運命と言うべき出会いが、今ここに起きた。

二人の似た者同士の、戦いの幕が開かれる。

31、似ているようで違うもの

佐天涙子と鈴仙・優曇華院・イナバが対峙する。お互い動くことな
くただ眼を合わせているが、先に痺れを切らして動いたのは鈴仙の方
だった。走り出すと共に両手を涙子に向けて、その手は銃の形を作っ
ている。瞬間、その両手の人差し指から放たれる弾丸のような弾幕に
涙子は舌打ちをして横に転がる。

銃弾が自分の居た場所に突き刺さるが、弾幕勝負で使うものなのだ
から致命的な殺傷性はないだろうが、負けるわけにいかないのだから
当たるわけにもいかない。

「ハッ、さっそくだもんね!」

涙子は笑ってサバイバルナイフを右手で逆手持ちし、投擲用ナイフ
を一本左手で持つとすぐに鈴仙へと走る。鈴仙は鈴仙で涙子への不
意打ちを失敗したことに舌打ちをして今度は下がりながら両手で銃
弾を放つ。

だが涙子とてバカではない。ナイフを見ずに取り出す程度なんで
もなく、そして取り出すのに眼を使わないということは鈴仙の方に眼
を向けていて、その指先を見ているのだから射線上ぐらい読める。

「おっと!」

「避けないでよね!」

「それは無理、いつ!」

地を蹴ると同時に体をひねって鈴仙から放たれる銃弾を避けてい
くも、やはり解放せずして鈴仙に勝つのは無理というものだ。だが切
り札たるアレをそう簡単に使ってしまった方がいいのだろうかという気
もして、その葛藤のうちに涙子は動こうと思った。一度考えるのをや
めて左手のナイフを投擲する。

「わっ!」

鈴仙は驚いて体を後ろに逸らしナイフを避ける。だが涙子はその
隙を見てすぐに走り出し、サバイバルナイフを至近距離で振るうが、
鈴仙は素早く上体を起こして後ろに下がった。

「おっと!」

「避けんなっての!」

「無理に決まってるでしょ、おっ!」

先ほどと同じようなやり取りをして、空いている左手でナイフをさらに投擲する。そのナイフが鈴仙の肩を掠めて、もちろん殺傷能力をパチュリーの魔法で消してあるので痺れるような痛みが伝わるはずなの……だが?

鈴仙は苦痛に顔をしかめることもなく、笑みを浮かべて人差し指を涙子へと向ける。

「バーン♪」

涙子は指の先から逃げるために、すぐ体を横へと逸らすが……弾丸が通ることはない。

「な、んで?」

そうつぶやいた時にはもう遅い。背後から銃弾が涙子の背中へと直撃する。

「が……っ!?!」

倒れそうになりながらもなんとか両足でこらえて、地を蹴って鈴仙から距離を取ると自分が先ほど居た場所

背後を見る。しかしそこに誰かがいるわけなんてなかった。

「本当に、貴女一人?」

「当然……せつかく一対一になったのに水を差させるなんてするわけないって」

笑みを浮かべてそういう鈴仙に、嘘を言っているような気配はない。もしかしたらものすごい嘘が上手なウサギなのかもしれないがそれでも違うとなんとなく涙子にはわかった。ならば話は簡単だ、視線上の鈴仙と違う場所から来た攻撃の正体は十中八九〃程度の能力〃と考えて良い、だとしたら自分はまずその攻撃の正体をさぐるところからはじめなければならぬのだが、まずは様子見。

あと十一本のバタフライナイフから三本を左手の指に挟み、腰を落とす。

鈴仙の両手が涙子へと向けられ、そこから銃弾が飛び出した。

「ッ!」

走りだす涙子は不規則に向きを変更しながら、しかし確実に鈴仙へと近づいていく。

「こいつうっ！」

「そこっ！」

涙子が左手のナイフを一本投げる。それでも鈴仙は横に転がって軽々避けて涙子へと指を向け、撃つ。再び放たれた銃弾を軽く体を逸らして避けた涙子はさらにその鈴仙に左手のナイフをもう一本投げた。そのナイフを避けようとする鈴仙だったがさらにもう一本ナイフは投げられ、一本目を避けた鈴仙の片足を掠る。しかし反応はやはり無く、そのまま再び銃口が涙子へと向けられる。

その射線上から避けた涙子、そして十分な回避距離だが地面を蹴つて上に跳ぶ。

「やっぱり！」

銃弾は涙子の背後から飛ぶ、だが飛んできた砲口を見てもなにも見えないことを思えば……。

着地した涙子は鈴仙を見て笑みを浮かべる。

「幻覚、かな？」

「……すずこ、さっそく見破るとは思っても無かった」

そう言うのと鈴仙も笑みを浮かべて軽く拍手をして見せた。涙子も少しばかり気を緩める。

「そう、その通り幻術だよ！　いつかけたのかって？　そりや最初から、目が合った時からさー！」

鈴仙は赤い瞳を輝かせて、満月をバックに笑う。

「戦いが始まった時から、貴女はもう狂ってたんだよ！」

狂っていた？　と佐天は軽く疑問をぶつけてみる。

「狂気を操る程度の能力。モノの波長を操って狂わせる能力」

なんとなくだが理解できた。つまりは幻術、つまるところはそうだろう、だがそれより涙子にとって幸運だったのはカマをかけて鈴仙が事実をあっさり口にしてくれたことだ。涙子は内心のところ、透視能力“か”幻術能力“か”空間能力“のいずれかだと思っていた。だからこそ運試しに出たのだがこうもあっさり話してくれたことは

幸運以外のなにものでもない。

だが問題はここからだ……。

「でも、それを知ったところで私を倒せるかな？」

そういうと鈴仙は笑って二人になる。いや、正確には片方が姿を現したか、それともまた偽物を作ったか……。

なら自分がこの状況を打破する方法は一つしかなかった。

左手を前に突き出して右手で腕を押さえる。

「妖魔結界！ 血呪封印、解除！」

涙子の左手から溢れ出る紅の妖気。

「龍、解放！」

その言葉と共に涙子の体中から溢れ出る力は間違いなく妖怪のものだ。雰囲気が変わった涙子にわずかに動揺する鈴仙だが、すぐに我に返って二人の鈴仙が銃口指先を涙子に向ける。だがそれも妖怪の力を持った涙子には無駄なことだ。

眼を瞑る涙子が思い出すのは美鈴との修行。庭で妖精メイドたちにも手伝ってもらった修行を思い出す。

『涙子、気を使う程度の能力は上げられないけど、気を掴む能力なら教えて上げれる』

美鈴の言葉を思い出し、ジツとする。

『気を掴むには集中力が必要な。まあ、私みたいな妖怪の方が気を掴むのって楽なんだけど、無理じゃない』

考えるのではなく、感じる。早い話がそういう感覚で良いらしく、当時の涙子にはわからなかったが今ならわかつていた。殺気や敵意を感じるのとあまり変わりはない、ただそれ以上に微妙な気配のようなものを掴む……。

——前の二体はやっぱ偽物、なら本物は……そこだっ！

涙子は振り向くと同時に投擲用ナイフを三本さらに取り出すと同時に投げる。

「っ!？」

そこに感じる気配は間違いなく鈴仙のもので、ナイフが当たったのかどうかはわからないが涙子は走ってその気配を逃さずに蹴りを入

れる。

「なっ！」

手ごたえはあるが、どこに当たったかなんてわかるはずもないので打ち所が悪くないのを信じて涙子はさらにそのまま足を振り切って鈴仙を地面に転がす。さすがに幻覚を作り続ける、つまりは波長を狂わせ続けることもできなくなったのか、涙子の周囲にいる鈴仙の幻影は消えた。

涙子は姿を現した鈴仙をそのオッドアイで捉える。右手のサバイバルナイフを軽く回転させる。

「さて、そろそろ降参しない？」

「……いつも、姫様のわがままに付き合わされてっ」

「……あるある、なんか知らないうちに付き合わされたりね」

固法や黒子を思い出しながら何度も深々と頷く涙子、なんとなく似通った雰囲気を感じた。

「てゐの悪戯にいつの間にか付き合わされていつの間にか師匠に怒られてて」

「ああ、なるほどねえ」

少し違うが、涙子にもなんとなく理解できた。とぼっちりをくっつけているという、貧乏くじを引いているということがわかった。だからこそ同情を感じざるをえないのだが今はお互い敵同士、それでもお互いがお互いに謎のシンパシーを感じて少しばかり感情移入してしまう。そして感情移入したからこそ、ここでお互い退くわけにはいかないと思われる。

「でも今回は、私も私のために“騙さなきゃ”ならない！」

笑みを浮かべながらも、必死さが浮かぶ鈴仙の表情。なんとなく涙子は自分自身を重ねた。

「狂ええっ！」

鈴仙の赤い瞳が輝き、涙子の周囲に鈴仙が先ほどとは桁違いの数現れる。総計するなら二十人は超えているだろう。涙子もさすがに動揺を隠せずにいたが、すぐに眼を瞑り気を掴もうとする。

「赤眼「ルナティックフラスト望見円月」オツ！」

さすがに気を掴む暇なんて無かった。涙子はすぐに叫びを上げられた方を見るがそこから攻撃が飛んでくることはなく、振り向いた時には赤いレーザーが自分を飲み込んだ。

レーザーが消えた時には涙子は大きなダメージを受けて、地面に膝をついていた。だがこの戦い、一瞬のスキが命取りであった。鈴仙が放った銃弾、それを妖怪の動体視力をもつてしてサバイバルナイフで切り裂く。数発を素早く切り裂いてそのまま立ち上がり、走る。だが鈴仙は「笑って」いた。それに僅かに何か嫌な予感を感じるも、涙子には今、迫るしかないのだ。だからこそさらに銃弾を斬る速度と迫る速度を上げるが、銃弾にサバイバルナイフが当たった瞬間、嫌な音がした。

「えっ」

銃弾が、爆発を起こす。それにやられた涙子は爆発と共に吹き飛んで地面に転がった。アリスのように突然の豹変に驚いてくれればもう少しやりようはあったのだが、さすがに相性が悪く、油断もしてくれやしない。

「これでっ……」

大の字で倒れている涙子を見て、勝ったと思った鈴仙だったが……涙子そのまま勢いよく起き上る。まだ続くのかと、さらに赤い眼を輝かせて周囲に分身を作り上げた。起き上った涙子が前髪を軽く掻き上げて紅の瞳を輝かせる。

「妖魔結界、血呪封印——解除」

鈴仙たちが一斉に指を向けるが、どれが本物かはすでにわからない。

「『鬼』——解放！」

飛んでいる咲夜の眼が、わずかに細められた。それに気づいたフェンリルバイクに乗っているチルノが少し不思議そうにする。

「どうしたの？」

「涙子、大丈夫かしら……」

そう言った咲夜を見て笑いながら前方を見るチルノ。

「大丈夫に決まってるでしょ、さいきよーの親友をあまり舐めないことね」

「なっ、そんなこと言ったら家族を心配するのは当然でしょう」

そんなやりとりをしている二人を見て、呆れたという風に霊夢はため息をつく。まったく異変中にのんきなものだと思うが、よくよく考えれば自分や紫も大差ないと頷く。そして飛んでいる視界の先にようやく、黒幕が潜んでいそうな居場所を見つけた。

「永遠亭？」

つぶやく霊夢と咲夜の二人。そして紫が扇子で口元を隠しながらその屋敷を見ていると、チルノがバイクフェンリルから降りて永遠亭の入り口を見つめる。その入り口にいるのは少女であり、チルノと同じ歳ぐらいの兔の耳を持った少女はチルノを見て口元に笑みを浮かべた。

チルノも笑みを浮かべる。

「あたいはここで弾幕勝負ってわけね、さて咲夜、霊夢、紫…… アイツゞらは任せたわよ」

「はいはい、じゃあ行きましようか霊夢」

「な、あんた援護しなくていいの？」

「だってさいきよーのチルノがここは行けって言ってるんだから良いじゃない」

そういうと、紫がスキマを開いてその少女の背後に同じようなスキマを開く。その中に入る三人が少女の背後から出て永遠亭へと入って言った。スキマが閉じると同時に、チルノの背中の中六枚の氷の羽が少し大きくなり、冷気がチルノの周囲を漂う。

夏の日にも関わらず、寒気を感じた少女は耳を震わせる。

「寒い寒い、いつものチルノじゃないみたい」

「悪いわねてる、いつもみたいに構ってらんないのよ」

「……いつも遊ばれてるだけのくせに」

「なっ、付き合ってたのよ！」

クールな表情だったチルノだが、てると呼ばれた少女に挑発されたことによりムキになって言い返す。

「ゴホン……でも遊んでやれないのはホントだから、さっさと片付け

る、わよ！」

今度こそしつかりと決めて、チルノは自分の左右に氷の塊を出現させて……射出する。

「チルノなんか、調子に乗り過ぎなんじゃなくい？」

ケラケラ笑いながら、てゐは軽く横に跳んで氷塊を避けた。だがチルノだって弾幕勝負のベテランであり、さらに弾幕勝負の負け戦の口である。

さらに避けられた場所にも氷の弾幕を放つが、それらを呆気なく避けてき、このてゐと言う少女は真正銘の因幡の素兎であり、幻想郷でのかんりの古参だ。そしてこの少女はとんでもなく――。

「さて、そろそろやろっかな、今だ！ 全員撃てー！」

――腹黒い。

チルノの周囲から大量の弾幕が放たれた。別に弾幕勝負に一对一というルールも無い。ならば当然こういうこともルール違反ではない、ならばこれは正当か？ いや、正当だろうけれど、古参の妖怪としては間違っているだろう。

チルノは舌打ちをして上空へと舞い上がり月を背中に自らに迫る弾幕をなんとか避けた。だがそれでも相手は上空のチルノに弾幕を放ち、チルノは弾幕が放たれる場所をしつかりと確認して氷塊をいくつも作りだす。

「電符「ヘイルストーム」！」

スペルカードの名を叫ぶと同時に、チルノが大きな氷塊と共に小さな氷塊を大量に地に落とす。やはり鈴仙やアリスのスペルカードと比べればずいぶん甘い弾幕だが格下を倒すにはあまりにも十分……しかし兎たちが格下とも限らず、それ以前にチルノの格下なんて異変に関わっていることがあまりにも少ない。チルノは弾幕を放ちながらも相手から放たれる弾幕を避けていく。

「チイツー！」

「私を誰だと思ってるのかなチルノ？」

声は背後からした。弾幕で視界が隠れている挙句に集中してゐるのを見られなかったことが裏目に出て、いやそもそもチルノの視

界を塞ぐことがもともとのてゐるの作戦だったのかもしれない。どちらにせよチルノの背後にはてゐるが居て、そのてゐるはチルノの背後から弾幕を放ちそのまま落とす。

「がっ!?!」

落ちていくチルノは空中で体勢を整え下に落ちる。地面に膝をつきながらもなんとか起き上ろうとしたが、行動が遅い。チルノが顔を上げると掌が目の前にあり、それはすでに目の前にてゐるということに悟らせる。

「ツー」

動こうとしてももう遅い。弾幕が放たれると共に吹き飛んだチルノが地面を転がりうつ伏せのまま倒れる。

少女のような容姿にも関わらず、黒い笑みを浮かべてチルノを笑うてゐる。

「私の大事な幼女に、なにしてくれてるんですかねえ?」

どこからか、そんな言葉が聞こえてきた。てゐるの笑いが止まり、同時に周囲の兎たちがてゐるの背後にドサドサと一齐に落ちる。なぜこんなことになっているのか、なんて考える必要も無くこんなことをやったのは間違いなく今のロリコンである。

てゐるがチルノの方を見ると、チルノの前に一人の妖怪。

「おやおや、幼女だらけ……撮り放題、これは滾りますね」

黒い髪の女が、そこには居た。

「清く正しい射命丸文、幼女^{チルノ}さんのピンチに推参いたしました」

ロリコンの変態とはとても思えないとびつきの笑顔を浮かべ、そこには烏天狗が立っていた。

32、異変は終わるが？

永遠亭の内部、大きく広い廊下にていくつものナイフと弾幕が飛び交う。咲夜が空中でくるくると回転しながら床に足をつけてさらにナイフを数本投げてみたが、それもすべて「矢」にて落とされてしまう。咲夜の背後にスキマを開いて現れる八雲紫がさらに弾幕を周囲に配置して放たれる矢を防いだ。

咲夜と紫の二人が、赤色と青色を半分ずつに配色した服を着る女性と対峙している。

「姫様の元に人間一人を送るなんて無謀なことをするわね」

女性が笑って言うが、紫も反対に笑う。

「良く言うわね。とんだ勘違い女が」

「あら、どういうわけかも言わずに、突然そんな風に言うなんてさぞかし友達が居ないのでしょうね」

二人がキツと睨み合うも、すぐにお互い笑みを浮かべて『オホホホ』と笑い出した。それを見ながら咲夜はこの陰湿な雰囲気漂う空間を一刻も早く出たいと思いつつ、自分と紫を残して先に行った霊夢のことを思う。大体にしてなんでなんの関わり合いもない自分と紫を置いて行ったのか……。

「メイド、さつきとスペルカードを使って倒しなさい」

「なんで私が……」

大概苦勞人だが、せめてもの反抗として言うことは聞かないことにした。

「でも、姫様はあれでも弾幕勝負ならそれなりにやるのよ？」

なんで姫様相手に上からなんだろうと、咲夜は疑問を浮かべる。確実にその姫様とやらより目の前の女がよほど強いというように、女は自分でそう言った。だがなんとなくだが咲夜は感じた、目の前の女がレミリアと同じく、弾幕勝負よりも実戦でこそ真の力を発揮する側だと……。

「先に言ったあの人間は平気かしら？」

「あらなにを心配してるのかしら、心配するべきはその姫様とやら

じゃない？」

紫は笑って女に言う。

「霊夢を倒したくないなら、聖人ぐらい連れてくるのね」

紫が大量の弾幕を展開し、女も弓に矢をつがえて引く。咲夜はここには危険な気がして二人から距離を取ることにした。これで決着が着かないにしろ結果はほとんど変わることは無いだろうし、だからこそ咲夜はその場から距離を取ってとりあえず幻想郷でもトップクラスに力を持つであろう八雲紫と、その紫とまともにやりあえずだけの力を持つ“八意永琳”の戦いを見守ることとした。

佐天涙子は、走っていた。

鈴仙・優曇華院・イナバとの戦いに決着をつけた涙子は、ボロボロのメイド服をまとったまま元気な体で走り永遠亭の前、戦闘後の場所に着く。そしてそこで見たのは信じられない光景であった。自称とはいえ幻想郷最速を言えるだけの自信と幻想郷でも上位の部類に入る烏天狗が――。

「ヒヤッハー！ さすが幻想郷の幼女！ しかも1000年クラスの幼女！」

「や、やめろー！ 私をなんだと思ってるんだあ！ 変態い、誰かあ、誰かあ！」

――変態行為に及んでいた。

正直、射命丸文という妖怪のことはわかっていたつもりだったが、ボコボコにされたウサ耳幼女をローアングルから連射撮影するようなど変態だとは思っていなかった故に、ドン引きだ。どう反応して良いかわからない涙子だったが止めなければと思い一歩出てみるも、涙子の服の袖を掴むものが居た。

「ち、チルノ……」

「あんなんでもあたいの友達なのよ、両方ね」

チルノがあまりにも真剣な眼で涙子の眼を見る。その意志を見て涙子が頷くと、チルノが薄らと笑い涙子は走って永遠亭の中へと入っていく。どちらにせよ文を止めようとすれば今度は涙子が犠牲にな

る、ならば文を止められるのは自分だけだと、チルノは文のそばへと寄る。

「あ、文！」

「おやチルノさん、なんででしょう！」

「この変態天狗！」

射命丸文が振り返った瞬間、チルノはすかさず延髄蹴りを打つも、自称幻想郷最速によっていつの間にもやら避けられ、いつの間にもやら背後に射命丸。その間にとつとと逃げるてるを見て、チルノはボロボロの体で戦闘を終えたというのに綺麗な文と対峙する。

「勝つたら一つだけ、言うこと聞いてあげるのよさ」

「ホントですか!? 手加減しませんよお！」

眼にハートマークを浮かべながら射命丸文は欲望のために戦うことを決めた。もう一つ、ここで新たな戦いが幕を開ける。

チルノの貞操をかけた戦いが始まった頃、涙子はようやく八雲紫と八意永琳の戦闘していた場所へと辿りついたのだが、すでに戦闘は終了して八意永琳と八雲紫は二人して弾幕も弓も構えることなく話をしている。涙子としてはなにがなんだか、という感じで先ほどまで胸の大きな赤と青の女性が敵だったとしかわからない。

「つまり、月からの使者は来ない？」

「そう、この幻想郷は表の世界の月からの干渉も一切遮断する博麗大結界に覆われた閉鎖空間……とりあえず向こうからの干渉は最近で言えば一切ないわ、その佐天涙子という例外以外ね」

「えっ、突然私ですか!?!」

「そうよ、こつちから向こうに干渉できなくなって向こうからこつちへの干渉も無くなったって言うのに貴女だけはこちらの世界を歩き来して、なんなんだかか」

妖怪賢者もお手上げという風のため息をつく。

涙子がその後話を聞いたことをまとめるならば『かぐや姫とその従者が月から来るお迎えを拒否するために月と地上を騙すために偽物の月を作る必要があった』ということだ。たぶん色々隠されてもい

るのだろうけれど重要なのは今、そこではない。

霊夢が一人でそのかぐや姫を襲いに行ったということである。もう戦闘の必要がない。ならば霊夢を止めに行かなければと、涙子、咲夜、紫、永琳の四人がかぐや姫こと輝夜の部屋へと向かった。

——のだけれど……。

「まったく、手間かけさせないでよね」

「え、えいりーん！ 早く来なさい！ この暴力巫女が！」

「うるさいわね！」

涙子の心配は杞憂だった。まったく傷を体に受けずに、霊夢はクルに言うとは後ろ髪を軽く払う。やはりと涙子は生唾を飲んだ、あまりにも最強、あまりにも孤高、それでいてあまりにも無感情。いや、怒ったり笑ったりする霊夢の姿を見たことが無いわけがないのだが、戦闘状態において彼女の焦ったような感情を見たことがない。

それほどの、戦闘センス。戦うために生まれたような存在。失礼ながら佐天涙子はそんなことを考えた。

「大丈夫ですか姫様、とりあえず貴女はうちの姫様の頭の上から足を退けなさい。これ以上パーになったらどうしてくれるの」

「ねえ永琳、私ってパーなの？」

そういう姫様こと輝夜に、永琳はにっこりと笑顔を見せるのみ。

とりあえずそんな楽しそうな二人を置いて、涙子は霊夢をジッと見てみる。霊夢はいつも通り、相も変わらない様子でお祓い棒で肩を叩きながら紫の隣のスキマに腰を下ろす。足を組んでダルそうにしている霊夢を見ると本当に巫女かどうか疑いたくもなる。

「あら、本気の霊夢をみたことが無いのね貴女」

「えっ本気の霊夢さんですか？」

紫の言葉に、涙子は疑問を言葉にする。本気の霊夢、いつも訓練してくれている霊夢は本気じゃないのだろうか？ 手加減ができない巫女ではないということだろうか？ つまり、手加減をした上で霊夢の強さはあれ、ということだろうか？

「佐天涙子、弾幕勝負はなんでできたか知っているかしら？」

「ああ、確か妖怪と人間が戦っても条件を限りなく同じにするように、

尚且つ殺し合いに発展しないように、でしたか?」

「その通り、良く勉強しているわね」

そう言つて紫は涙子の頭をなでる、一瞬ビクツと体を震わせるが撫でられればなんとなくだが暖かい気持ちになる。姉は居ないがいたらしもしくはこんな感じなのかもしれないと思えないでもない。だがつい最近自分を殺そうとした相手になんでこんな気持ちを抱くんだろうと涙子は思った。

それにしても、紫はなにを言いたいんだろうと疑問に思う。

「だけどね、その一つの理由としては先代巫女があまりにも強かつたからなのよ」

「強かつた?」

「そう、強すぎて異変解決の時に妖怪を九分九厘殺してしまうから……だからこそ弾幕勝負を作った。けれど今回の巫女である霊夢は先代以上の逸材だから、弾幕勝負でも圧倒的な強さを誇っているのよ。まさに最強、私が求めた博麗の巫女」

そういう紫を見て、本当に霊夢が最強なのだと理解できた。

「なに勝手にあんたが求めたものになってんのよ、あたしはあたし……先代なんかとは、違う」

霊夢は少しばかり暗い影を顔に差して言うが、それがどういうことか佐天涙子にはわからなかった。

「ともかく、霊夢さんがめっちゃ強いのはわかりました」

「そうね、人間が相手をすれば下手をすれば死にかねないしね」

「(霊夢さん、超手加減してくれたんですね! ありがとうございます!)」

とりあえずそんな衝撃の真実を話され、涙子は何度か頷く。そして涙子は次に八意永琳と『蓬莱山輝夜』の方を見るが、そこには輝夜に事情を説明している永琳がいた。先ほど紫に受けた話より少しばかり難しい話だが、内容はあまり間違っていないように思える。

ともかく、これで今回の異変は終了、だろう。

「あんたたち! この異変はまだ終了ではないわよ!」

そう言いだしたのは蓬莱山輝夜。

「月を戻すも戻さないも私たちの自由、これであんたたちは私をどうにもできなくなつたつてわけ！」

「あんたまだそんなこと言つてんの？ 本気で殺すわよ？」

「まままま、待ちなさいよこの暴力巫女！ ただあんたたちをお願いがあつて！」

「……お願い？」

つい、涙子は聞いてしまった。

「そう、そう！ ある女を退治して欲しいのよ、行つてくれたらその時点で月は返すわ！」

なんでこんな焦っているんだろうというぐらい焦っているけれど『そんなに霊夢さんが怖いのだろうか』と涙子は疑問に思いながらも、トラウマである霊夢との弾幕勝負を思い出す。弾幕を避けられたと思つたら死ぬほど弾幕を撃たれ、拳句に接近戦でボコボコにされる。よくよく霊夢が最強と言う意味を理解しはじめた涙子。

まあなんだかんだで誰かしら行かなくてはならないのならと、涙子は手を上げた。

「私、行きます」

と、いうことで涙子は現在竹林の中をバイクで駆け抜けている。つまりは異変も終了したということ、なんとも呆気ない終わり方だった。

ちなみに永遠亭を出たときにチルノと射命丸文が居なかつたので心配した涙子だが、八雲紫曰く『あの変態ロリコン天狗だつてそこまではない』ということだが本当にそうだろうか？ まあいざとなれば八雲紫あたりが『滅ぼす』かもしれないし、文だつて命は惜しいだろう。

とりあえず隣と飛んでいる咲夜と共に、涙子は輝夜に指定された場所へと向かつていく。

「本当に退治するの？」

「するわけないじゃないですか、事情説明して倒したつてことにしてもらいます。それで輝夜さんも満足でしょうし……つてまだ満月あ

「そこですか」

「夜が止まっていたのだから当然よ、まったく長い一夜ね」

二人でため息半分に笑いながら、目的地の竹藪を抜けた開けた場所へと出た。その開けた場所の中心に立っている少女を確認して涙子はフェンリルから降りると軽く走ってその少女の近くへと寄る。

白い髪、赤いリボン、白いシャツに赤いオーバーオール。そんな少女らしい少女は振り返ると涙子を見て指を向けた。歩み寄るのを止める涙子は、愛想笑いを浮かべて少女にことと次第を説明することにした。咲夜も隣に降りるのでとりあえず、「敵意」を向けられていようとりあえず話をする。

「あのですね、私たちは輝夜さんから貴女を退治するように——」

「涙子！」

咲夜の声が聞こえた瞬間、涙子は条件反射で横に跳ぶ。

「なっ!？」

先に居た場所に炎が上がり、少女の手にも炎が宿っているのを見て涙子は悟る。少女が炎を撃つのだと、そして少女は自分に敵意を向けていて、弾幕勝負をする気なのだ……。だがここで話をする気を放棄する気も無いと、涙子はとりあえず言葉を投げかけることにした。

「ま、待ってください私たちは!」

「輝夜の使いだろ、わかってるんだよ!」

ふたたの少女の手から炎が放たれ、涙子はその攻撃を跳んで避けるがいいかげん面倒になってくる。それほどまでに早く適格な炎での射撃。咲夜も少女からの攻撃を避けるので手一杯という様子であり、強敵なのは明白だ。それこそ霊夢に任せればよかった敵であろう。

「くっ、厄介な能力っ!」

「能力? お前わかってて言ってるならさうとう性格悪いな。まあ良いよ、輝夜が使い程度にあたしのことを教えるとは思えないからな」
笑う少女が両腕に炎を纏わせながら立っている。

「藤原妹紅、『老いる事も死ぬ事も無い程度の能力』だ」

異常、まさにそういうにふさわしいことだと涙子は冷や汗を流し

た。どちらにしろ殺す気なんて無いけれど老いもせず死にもしないなんて、あまりにも辛い。そしてそこまで考えてふと涙子は疑問に思った。

——なら、今出している炎とはなんなのか？

「見せてやるよ、『原石』の力をさ！」

慧音が言っていた、そして自分が探していて、学園都市が求めている『原石』が、今日の前に存在し、立っていた。自分が憧れ、魔術師は目の前のような存在に抵抗するために魔術を手に入れる。そんな大きな存在が目の前にいる。涙子は心底震えた。

これが原石、藤原妹紅との初めての出会い——。

33、 恐いものは

佐天涙子と十六夜咲夜の前に立つのは「原石」と呼ばれる人間。

涙子は考える。そもそも超能力、つまりは学園都市の目的自体が目の前のような存在を作るためのものであり、自分もそれを作るために作られた劣化品だ。ならば、自らの力で目の前の原石を倒せば、自分はレベル5を超えると言うことであり、学園都市を超えたということ……。学園都市の最高傑作がレベル5なら、自分がその上に行くことができれば、レベル0など……。

「涙子避けなさいー！」

「え、わひゃっ！」

横に転がって炎を避ける涙子。余計なことを考えるのをやめて戦闘に集中して、とりあえず残りのナイフ数を数える。大型のサバイバルナイフが一本、そして投擲用に使うバタフライナイフが五本、こんなことならば拾って来れば良かったとも思うがまさか問答無用の戦闘になるなどと誰が予想しただろうか？

いや……。

「蓬莱山輝夜、さてはわかってたなあ？」

恨めしそうに口にする涙子、後で霊夢にチクッてボコボコにしてもらおうと思うもまずはここを無事に帰る方が先決だ。すでに弾幕勝負は始まっている……ならば自分も弾幕（物理）で戦うのが筋というものだろう。近づいて殴るために、左手に意識を集中する涙子。

「妖魔結界！」

「涙子ー！」

咲夜の大声を聞いて止まる涙子、バカでもわかる。『やめろ』ということだろう、咲夜は涙子が変わることをあまり好ましく思っていない……いや、好ましく思っていないという点では咲夜だけではないだろう。アリスとの戦いの時は別々で戦っていたし咲夜も見えていなかったから止めなかったが、近くにいたら止めていただろうし、鈴仙の時に「鬼」まで解放したと知れば相当怒られる。

「私になんとかするから、貴女は逃げなさいー！」

「なっ、私はまだ戦力外って言うんですか！」

「そういうわけじゃなくて、貴女だけはっ」

二人が同時に跳んで距離を取ると、真ん中にひとときわ巨大な火球が飛んでくる。

「仲間割れか、輝夜にないで釣られたのか知らないけど……あたしを倒すなんざ無理だよ！」

火球を手の上に浮かばせながら言う藤原妹紅相手に、涙子は舌打ちをしてからバタフライナイフ一本をくわえて左手の指に三本を挟み、右手にサバイバルナイフを持つ。神裂と戦った時のスタイルだが、喋れないという欠点を除けば最も相手に倒すことに特化したスタイル。

走り出す涙子、咲夜が涙子の背後からナイフにて援護をするが、妹紅はそれらのナイフを火球で燃やす。だが後衛からの攻撃ばかりに気を取られていれば前衛の涙子はすでに至近距離、並ではない移動速度だと察した時にはもう遅い。涙子は妹紅の背後へと走るが、すでに妹紅の腕は切り裂かれていた。

「ぐっ」

痛みはある、服も切れた。だが傷は付いていない。

「なるほどな、大した武器だよっ」

さらに咲夜のナイフの一本が妹紅の足を切りつける。それも同じように傷は作らなかつた。さらに痛みを感じている隙に背後から迫った佐天が妹紅の横を通り再び体へと攻撃を斬撃を仕掛けてきた。二人の猛攻に苦戦を強いられている……ことは無かつた。

油断していたというのが正しいだろう。

「いつまでもっ！」

妹紅の周囲の炎が先ほどの比ではないほどの火力で燃え上がり、妹紅の背中に巨大な炎の翼を作った。

「鳳凰……っ」

つい、涙子は口に出して口のナイフを落とす。鳳凰、不死鳥、火の鳥と言えばその二つだ。左手のナイフ三本をジャケットの中にしまうと落ちたバタフライナイフを拾って左手に持つておく。とりあえず危険な匂いのする炎の翼を纏った妹紅に意識を集中させる。

「殺して良いんだつたら早いんだけどな」

「ハハッ……私もです」

妹紅と睨み合う涙子、先に動いたのはもちろん妹紅であり、炎の翼を羽ばたかせて飛び上がり涙子へと落ちていく。大きく跳んでその炎を纏ったタツクルを避ける涙子だったが妹紅はすぐに地面を蹴りあげて涙子の目の前にまで迫る。

「なっ!?!」

「そんなぐらい読めてないとしても、思った?」

笑みを浮かべる妹紅が腕に炎を纏い、それを涙子にたたきつけようとした瞬間――。

「チツ、ナイフ!?!」

咲夜が投げたナイフが妹紅の前を通り、妹紅に攻撃を躊躇させる。そして飛んできたナイフが妹紅と涙子の間を通り過ぎようとした瞬間、涙子は投げられたナイフを掴みそのまま妹紅の胸に突き刺す。いや、突き刺さったように見えても傷もつかない、ただ痛みだけを感じるだけだ。妹紅は顔をしかめるが涙子はその一瞬の隙について妹紅を蹴って空中で距離を離し、着地した。

妹紅を説得しようとも思うが、今更言ったところで『騙そうとしている』と思われるだろう。

「咲夜さん、やります!」

「やめなさいって!」

「聞きません! 妖魔結界、血呪封印解除!」

左手に意識を集中して言う涙子の前に、妹紅が現れて先ほど刺されたナイフを涙子の腹に突き刺す――だが傷が残るわけではないと涙子はそのままナイフを持っている妹紅の右腕を右手で掴む。

「龍解放!!」

それと同時に涙子の体中に封印された妖怪の血が流れ、同時に妖力も体中を支配する。ナイフが刺さる痛みを感じるも刀で腹を捌かれた記憶だつてあるし電撃で体を焼かれた痛みも覚えていて、今更ナイフが刺さる程度がなんだとそのまま左手を握りしめ、拳をつくる。

「撃符「大鵬拳」!!」

美鈴の業をここにて発動。拳にありつたけの気、妖力を集めての打撃を腹に受けて妹紅は吹き飛び転がる。涙子は静かに息を吐いて拳を構えた。横に現れた咲夜は少しばかり涙子を咎めるような眼をしたが、してしまったものは仕方ないと落ち着く。

咲夜と涙子の二人でお互いの「エモノ」を構える。

「たあ、痛つく！ 輝夜より接近戦よりだな、こいつあ……」

腹を押さえながら起き上る妹紅は口元に笑みを浮かべる。

「ならこつちも接近戦よりの攻撃で行くか！」

妹紅の纏う炎がさらに火力を増す。

「燃え盛れ！ 焼き尽くせ！ 不死「火の鳥―鳳翼天翔」オツ！」

叫ぶとともに妹紅が地面を殴りつける。火柱が妹紅の方から吹き上がっていき徐々に涙子と咲夜へと近づいていく。すぐに涙子と咲夜は動いてその火柱を避ける。だがスペルカードでの攻撃がそれだけの「はずがない」ということを知っている涙子はすぐに妹紅の方を見ると、妹紅はすでに動いていた。紅蓮の翼を纏った妹紅が涙子を吹き飛ばす。

まるで車が人を跳ねたように、涙子は勢いよく吹き飛ばされた。しかも、涙子を燃やしながら妹紅はさらに攻撃を続ける。涙子を跳ね飛ばした直後に地面を蹴って空中の涙子を掴まえると、続いて妹紅は口を開く。

「不滅「フェニックスの尾」オ！」

妹紅から炎が吹き上がり、涙子を襲う。肌が焼けるような痛みだけが涙子を襲うが殺してはダメなルールなのだからそれを守らないわけにもいかない、妹紅が今戦っているのは「普通の人間」なのだから当然だ。だからこそ妹紅から放たれる炎は涙子を痛めつけるだけ。妹紅が蹴り飛ばして地面へと吹き飛ぶ涙子はそのまま体をぶつけて転がるも、すぐに起き上る。

痛みしか感じない故の起き上りの速さ、だが地面に体をぶつけて、擦ってできた傷ばかりはどうしようもないと口の端から流れる血をぬぐう。

「（ステイルより、全然強い！）」

いざ殺し合いとなると今の涙子ではステイルに勝つ確率が無いわけでもないが、妹紅とはとてもじゃないが戦えない。そもそも死なないという能力だけでもチートくさいのに拳句の原石としての力、炎を操る能力だ。

ステイルとの戦いの場合であればイノケンテイウス魔女狩りの王を使われようとする術者であるステイルを叩けば良い、ルーンの紙をなんとかすればいい。だが妹紅は違う、存在そのものがイノケンテイウス魔女狩りの王そのものと言える。「だけどっ」

これは弾幕勝負、スポーツと同じように勝敗というものがある。片方がボロボロになって動けなくなれば負け、つまり妹紅の場合は死なないにしろダウンさせればいいのだ。だったら早い。片っ端から攻撃を避けて——殴る！

「妖魔結界！」

妹紅と弾幕を撃ちあっている咲夜が涙子の方を見た。

「ダメよ涙子！」

だがその言うことは聞けない、今涙子にとって輝夜のお願いを受ける受けないなどどうでも良いのだ。今、自分は藤原妹紅に勝ちたい。その一心で力を解放しようとしている。

鈴仙の時のように異変を解決しようなどという気は一切ない、ただ自分のためだけに、力を使う場所だと感じた。お遊戯ごとのような戦いででも良い、原石というものに一石投じたい、ただそれだけの思い。

「血呪封印——解除！」

左目に意識を集中して叫べば、左腕と同じく力を感じる。燻っている。

「『鬼』——開放！」

瞬間、涙子は体に先ほど以上の力を宿るのを感じた。だがそれは同時に負荷がかかるのも同じ、だからこそ長時間『この状態』でいるのは無理がある。すぐに決める、つまりはそういうことだ。

咲夜の静止もきかず、涙子は地を蹴り跳びだす。

「なっ！」

ほぼ一瞬とも言っていないスピードで妹紅の目の前へと接近した涙

子がすぐに拳を突き出し妹紅を吹き飛ばす。地面を激しく転がった妹紅へと素早く涙子は接近、その顔を掴んで上空へと放る。

地面を蹴り、跳ぶ涙子が空中の妹紅まで接近すると、頭を下にしている妹紅の顔に手のひらを向けて、そのまま弾幕を放つ。つまりは靈力の塊のようなものだ、それを出す才能というのが皆無と言われた涙子だが少しぐらい出せる。問題はそれを当てられるかどうかなのだが、こうしてしまえば問題もないだろう。

「ガッ!？」

痛みに顔を歪める妹紅だが、すぐに涙子に蹴られて地上へと飛ぶ。それでも両手を地面について受け身を取る妹紅はすぐに両足で地面に立ち地上に落ちた涙子に対して炎を放つがその射線上を先読みしていたかのように涙子は避けて、次の妹紅の攻撃先もわかっているかのように避ける。

「お前っ!」

「見えてる」よ、少しだけ!」

涙子はすぐに反撃とばかりに体を回転させて妹紅の腹部に蹴りを入れる。転がる妹紅がすぐに立ち上がり両手に火球を出現させて放つ。だが妹紅の手から火球が離れる直前に涙子はすでに移動していてそのまま走る。

「見えてる」って言うてるでしょ!」

吸血鬼レミア・スカーレットの左目を持ったからかはわからないが、佐天涙子には確かに妹紅が攻撃しようとしていた場所がわずかに見えていた。そんな未来を見ることはできないが数秒先ならば見える。鈴仙だつてそうやって倒した。

鈴仙との戦いでは鈴仙の居場所を割り出すことが数秒先の攻撃を見ることでわかることができた。

戦闘では数秒先の未来が見える、それだけで十分勝機を見出すことができる。

「ちいつ、なら見えても避けれない攻撃にすればいいんだろ!」

拳を地面に叩きつける妹紅、再び火柱が上がり涙子へと迫るがそれも見えていた。すでに回避行動を終了している涙子はすぐに投擲用

ナイフ、ラスト一本を左手にて投げる。妹紅はそれを跳んで避けるが途中で別方向から飛んできたナイフが涙子が投擲したナイフを弾き、妹紅の肩を掠る。

「なっー！」

「二体一だということ、忘れていたのが仇でしたわね」

そう言う咲夜は、いつの間にか妹紅の上にあった。眼をつむったままの咲夜がいつも通りの表情で――消える。

「幻世「ザ・ワールド」」

いつの間にか涙子の隣にいる咲夜が言うと、妹紅の周囲にいつの間にかあったナイフが妹紅を襲う。

「フェニックス再誕」――！」

妹紅が叫びと共に、その身を炎に包む。その炎をナイフが貫くが所詮は炎の塊に過ぎず、炎は形を変え、鳥になると飛び上がり空中を舞う。

「……これが、原石の、力？」

とても言葉にできるような光景ではない。その火の鳥の中から妹紅が姿を現し、炎の鳥の翼と尾を纏ったまま地上に降り立つ。あまりにも圧倒的な力だが、涙子とて伊達に未来視を持っているわけはない。いくら火力が高かろうと当たらなければどうということはないし、それに攻撃を当てるのだから未来視があれば良い。

だが、徐々に見える未来が狭くなっている。数秒先が見えるはずの目はすでに一秒ほどしか見えないだろう。

「ハハッ……まだまだか」

涙子は左目がズキズキと痛むのを感じる。左目を閉じて意識を集中すると、左目から流れた力が無くなるのを感じる。手で封印を一時的に解くことができるのだから、手で封印を元に戻すこともできる。咲夜はそれをわかってか、一歩前に出た。

「お前ら、もう私に関わらないってなら許すから……どっか行ってくれ」

突然、妹紅はそう言って炎を消す。キョトンとする涙子と咲夜の二人だが妹紅はどこか暗い表情だ。突然どうしたのかと思った涙子と

咲夜の二人だが、戦闘が終わるなら別にこのまま去るのも一興かと思った。

だがそんな時、彼女は現れる。

「妹紅！」

知り合いの声にそつちを見れば、涙子の知らない女性が立っていた。いや知っている気がするのだがどこか違う、だって涙子の心当たりのある知り合いは「人間」だったはずだから……。

「佐天、慧音だ。この姿ではわからないかもしれないが……妹紅、お前またこんなところで！」

「うるさいな、あたしが誰と殺し合いをしようがお前の知ったことじゃないだろ！ 特に輝夜とでもないんだし殺し合いなんかしないよ！」

「でも蓬莱山が来れば殺し合いをしていたということだろう、やめろ妹紅！ いくら不死だからと言って心は傷つくし、痛みだって感じるはずだ！」

なぜだかいきなり始まってしまった言い合いに、涙子と咲夜は完全においてけぼりだった。もう二人して自分たちはどこに立てばいいのかもわからずに、髪色が緑になって、角まで生えている慧音を見る。確かに慧音だが、どうにも熱すぎる。そんなにあの藤原妹紅に固執する理由が、彼女にはあるのだろうか？

「こんな場所ですつと一人で、それで良いわけがない！」

「良いつて言ってるんだよ、慧音にだってわかんたら、半妖のあんたなら一人で「取り残される」側の気持ちだ！ だから私は復讐のために、一生アイツと殺し合いをしてる、それで良い！」

「お前を不老不死の蓬莱人にした蓬莱山輝夜がそんなに憎いか！」

「憎いに決まってる！ いや、こうなったのはあたしのせいだけど、それでもあたしはアイツを殺したい！」

走り出した妹紅が慧音へと右拳を振るうが、それを左手で受け止め、そのまま拳を掴む慧音。

「アイツと殺し合う、それだけで良い、憎しみだけであたしは生きてける！」

「ふざけるな！ お前が、人間が一人で生きていけるわけがない！」
「どう生きようとあたしの勝手だ。いや、むしろ殺してほしいね！
殺されるもんならな！」

慧音に左拳を振るうが、それもまた慧音に受け止められる。組み合う妹紅と慧音の二人。瞳一杯に涙を溜めながらも慧音が叫ぶ。

「お前はそう言うかもしれない、けれどせめて私が生きている間だけは幸せでいてほしいと思うからお前をこうして何度も迎えに来てる！ 私がお前を憶えてる、お前が私を憶えてる、それではだめなのか！」

「それが余計なお世話なんだよ、私は一人で……誰の記憶にも留まらず、誰も記憶に留めず、なにも記憶しないで生きていく！」
「ふざけるなああああつ！」

叫び声をあげて、慧音と組み合う妹紅を殴り飛ばしたのは「佐天涙子」だった。

地面を転がる妹紅と、組み合う相手を無くしてキョトンとしている慧音の二人が、佐天涙子を見るがすぐに二人して涙子を睨む。

「おい佐天！」

「黙っててください慧音さんは！ こっからは私の私怨です！」

そんな涙子の威圧感に慧音が黙って、見ている咲夜は驚いた。普段の涙子からそんな威圧感が発せられることもないし、大体にして涙子がここまで怒ること自体が珍しく、ここまで自分が勝手に怒っていると自覚して他人の喧嘩に割り込む人間自体、初めて見た。

立ち上がる妹紅が涙子を強く睨みつける。

「おいお前、関係ないくせに突っ込んでくるんじゃない！」

「関係無いわけではないでしょうが、慧音さんは私の友達です。その友達が泣いてる拳句、あなたはふざけたことを「ぬかした」んだ！」

一歩、一歩と進んでいく涙子。

「貴女がなんで不老不死になったか、殺し合いをしているかなんて知らない。でもこれだけはわかった……貴女はただ恐いだけだ、自分だけが「取り残される」のが！」

瞬間、わずかに妹紅がひるむがすぐに表情を険しくして涙子を睨

む。

「お前になにがわかる！ 慧音とあたし、輝夜とあたしの何がわかる！」

「わかんないよ、でも貴女が誰かの記憶にいることも誰かを記憶することもビビってるのはわかる！」

「デメエツ！」

火球を二つ飛ばす妹紅だが、涙子は体を横に逸らしてその火球の一発を避けるが、もう一発が当たり地面に膝をつく。咲夜は黙ってその光景を見ながら、フランドールの時と似ていると感じた。事情をあまり知らなかったとしても、だからこそわかる目線で戦う。

「それでも誰かを記憶するっていうのは、誰かに記憶されるっていうのは、その人の証になるんだ！ その人が生きてた証に、でもその人を知っている人が誰もいなかったら？ その人が記憶しているものすべてが消えたら？ その人が生きてた証はどこに行くの!？」

涙子は立ち上がり、また歩き出す。

「不老不死っていうのがただだけ苦しいのかわからないけど、それでも……置いていかれる気持ちはわかる。自分も一緒に“ソツチ側”に行きたいのに、それでも行けないでみんなばっかり先に行っておいて行かれる気持ちは良くわかる！」

「い、今さつき会ったばかりの、ポツと出のお前につ……」

「それでも、私ももう置いていく方の気持ちはわからないわけじゃない！」

初春のこと、御坂のこと、それに上条のこと、置いて行くことと置いて行かれること……。

「苦しいけど、それでも自分のことを良くわかってくれてる人がそこにいるんだ。一緒に居て良かったって言えるんだ！」

「自分を置いて、どんどん友達が老いぼれて死んでいく気持ちはお前にわかるか！」

「わかるわけない、そんなことわからない！ けど、それでも今“ここ”にいる貴女」と一緒に居たいって言ってる人がここにいる！」

一步一步、確実にふみしめて近づいていく涙子に妹紅は攻撃という

手段を忘れていた。

「貴女に自分を憶えていて欲しいって、貴女のことを知って、憶えて……逝きたいって人がいる。置いて行かれてしまう貴女と一生懸命歩もうとする人がいる!」

妹紅との距離はもう、僅か……。

「なんにも知らない私だけど、そんなことはわからないわけじゃない! 誰かを記憶するってことがどれだけ大切か、自分を記憶するってことがどれだけ大切か、記憶がある貴女はわからないわけじゃない!」

「あたしは、なにも記憶したく……ないっ、いつか悲しくなるだけの記憶なんてっ! 慧音と過ごしてもその記憶だっとうせっ!」

「貴女の記憶だっつて、先に行ってしまった人たちとの記憶だっつて辛いものだけじゃない! 楽しい記憶だっつて沢山あるでしょ! 最後には別れが来るんだ、それはいつも、誰にだっつて!」

少し前に、突然の別れが来てしまった一人の少年を思い出す。出会ってからの彼との記憶は少ないものだけど確かに楽しいこと、辛いことの連続だった。それぐらい彼との出会いは涙子にとって大きなものであったのだ。

だから、記憶をなくした彼を思うと、妹紅の『なにも記憶しないで』と言った彼女が許せなかった。

「それはっ……」

「まだ貴女に、慧音さんの気持ちに答えようとか! 誰かと一緒に居たいってこういう気持ちがあるなら!」

両足でしっかりと立ち、涙子は赤と青の目で妹紅を真っ直ぐ見る。

「まずその幻想を守りぬく!」

妹紅が動揺した表情で、涙子の目を真っ直ぐと見た。

「そしてっ! まだ貴女が『誰かと一緒にいられない』なんて言うならッ!」

腕を振りかぶり、自分が憧れた上条当麻を思い出す。

「その幻想をぶち殺す!!」

拳が、妹紅を打ち倒した。

倒れたままの妹紅と、立ったまま肩で息をしている涙子。今にも倒れそうな涙子が倒れている妹紅を見ながら爽やかな笑みを浮かべる。「楽しいこともあれば悲しいこともある。もちろん悔いの無い終わりだってある。沢山の記憶がある貴女なら、わかるでしょ？」

涙子は上条当麻の最後が「悔いの無いもの」だったと信じて言った。最近になってようやくそう思えてきたのだ、彼は人を助けるのに命を掛けるのを惜しまない人だったから……。

きつと自分のこともその他大勢と同じように、助けたのだと……。

「いや、もしかしたらちよつと特別かも？」

「ははっ、どうしたお前？」

妹紅に言われて自分が独り言を言っていたのだと気づく。

「あはは、出ましたか」

少しばかり自意識過剰が過ぎるかなとも思ったが、笑い声がどこからともなく聞こえてきた。妹紅が涙子を突き飛ばし距離を離す。

「動けないでしょ妹紅！ そのまま今日は死になさい！」

上空の蓬莱山輝夜が、笑いながら妹紅へと手を向ける。

「蓬莱の樹海！」

視界一杯に弾幕がばらまかれるが、それらはすべて妹紅を狙うもので———拳句に殺傷性もあるだろう。だからこそ今回の「死」を覚悟した妹紅だったが突然誰かに押し倒される。というより誰かに上に乗られて庇われると言った方が正しいのだろう。

「なっ、お前は！」

佐天涙子が、妹紅を庇おうと押し倒していた。

「えへへ、不老不死でも、痛いんでしょ？ なら痛みをやわらげるぐら、いは……」

そのまま気絶する涙子をなんとかして運ぼうと起き上ろうとする妹紅だが、先ほどの拳の一撃や弾幕勝負で使った体力は思いのほか妹紅の体にダメージを与えていて、運ぶのまでには間に合わないとかかった。それでもなんとかして涙子を守ろうと考えるも今は涙子を引きずってでも射線範囲上から逃さねばと思ったが、やはり間に合う気がしない。

ここまでかと妹紅が諦めそうになりながら弾幕を見据えた瞬間――

――そのすべてが、かき消された。

「たあく、面倒なことさせてんじやないわよ……」

ダルそうな声でそうつぶやいた瞬間、蓬莱山輝夜の笑顔は一気に消えて震えだす。不機嫌そうなのは言葉からも口調からも雰囲気からもわかり、それでも妹紅はなにがなんだかわからずに疑問を抱いて小首をかしげるも、今はともかく涙子が無事なことを安心する。

二人を守るように現れて、弾幕をかき消した存在は片手に持ったお祓い棒で肩をポンポンと叩いた。そしてその光景の一部始終を見ることになるであろう妹紅、慧音、咲夜の三人は声をそろえてこの時のことをこう語るだろう。

現れたのは、鬼のような巫女鬼だった。

34、異変が終わって

私は誰か、まあ佐天涙子なんですけど、藤原妹紅さんを蓬萊山輝夜さんから助けて、すぐに私は気を失って今しがたようやく目を覚ましたんだけど……。

目を覚ました時、私の視界に映ったのは信じられないくらい優しい顔をした咲夜さんだった。まあ普段から厳しそうな顔をしているわけでもないんだけど、なんだろういつもと違う感じの優しい表情の咲夜さん。そんな咲夜さんは私が目を覚ましたことに気づくと同時に驚いてビクツ、とする。可愛いところあるじゃないですかあ。

「お、起きたのね涙子」

「後頭部の柔らかい感触、たまりませんね〜」

「おっさんみたいなこと言うのな」

ぐもつともですと、最後に聞こえた声の方を見る。そこには藤原妹紅さんが居た。

私は咲夜さんに膝枕をされている状況から上体を起こして自分の現在の状態を確認する。左目にも問題が無ければ体もほとんど傷はない感じで、妹紅さんとの戦闘の疲れはまだ残ってるものの動く時はそれほど違和感も感じないかな？ 周囲を見てみればそこが博麗神社で、社務所がわかって、今は敷かれた御座の上。考えることもなくわかるのは幻想郷名物こと「宴会」が開かれているってことで、異変の最後はこれって聞いたからそれほど驚くことも無い。

「とりあえず、ありがとな」

そう言って笑う妹紅さん。その隣の「緑色の髪で角がある」慧音さんも嬉しそうに笑ってる。

「慧音さんも妹紅さんも、良かったです」

「ああ、あたしのは妹紅って呼び捨てで良い」

「じゃあ私のことも呼び捨てで」

佐天だろろうが涙子だろろうがどっちでも良いけどとりあえず呼び捨てで呼んでもらえた方が良い。

そう言えば幻想郷って、それほど年齢での上下関係は無いみたい、

地位は別にして……それに比べると学園都市、やっぱり学生だらけつてこともあって上下関係は面倒だなあ。でも御坂さんとも上条さんとも仲良くできてたし、案外私ってどっちでも変わんない？

機会があつたら御坂さんに呼び捨てで読んでもらおう、うんそうしよう！

「佐天はさ、半妖なんだっけ？」

「まあ一応は……人としても生きれるみたいなんですけどね」

「できれば私は人として生きてほしいけど？」

どこから現れたのかレミリア様がワイングラス片手にそう言う……って今、夜なんですか、あまり時間経ってない？

レミリア様が持つているあまりにデカイそのワイングラスに私は『どこのデカ長ですか!?!』とツツコミを入れたいけどここは我慢、偉いぞ私。それにしても咲夜さんにしろレミリア様にしろ私が完全な半妖になるのをそこまで防ぎたいんですかね？ 完全な半妖っておもしろいな、なんか

良いと思うんですけど、強くなれるし……。

「まあその吸血鬼のお嬢様が言いたいことも良くわかるよ。どうせ人間として生きれるなら普通に生きて普通に死んだ方が良い」

「うくん、そういうもんなんですかね？」

「そういうものだぞ佐天、子供たちと過ごしていると実感するよ」

慧音さんもそう言う。私だってまったくわからないわけじゃない、さつき妹紅を説得する時だってこのまま私が半妖になって寿命が延びて、いつか初春たちを見送って私だけ生きて行くなんてゾツとすることを想像できた。というより人間じゃないこと確定したら、もれなくあつちの世界で生きていけるかも怪しいところだよね……。

それでも、妹紅を説得するにはあれしかなかったし、私だって本心からの言葉だった。

「うくん」

「まあまだまだわからないだろうな、佐天は」

そう言っって軽く笑う妹紅相手に私は、やっぱり年上で人生経験も豊富なんだなあと実感する。とりあえず少しばかり睨んでくる咲夜さ

んはやっぱり『力を使うな』ということが無視したのを怒ってるんだと思う。

「咲夜、大概過保護よね」

「お嬢様にはお負けしますわ」

なんだか黒い笑顔を浮かべて何かを言っている咲夜さんに、レミリア様がわずかに冷や汗を流してる。なんの話してるんだろ？

なんて、とりあえず宴会を楽しもうとこの時ぐらしか手を出せないお酒に手を伸ばしたら……上空から私の目の前に何かが降ってきてもれなく私が取ろうとした酒は吹き飛ぶ。

「さささ、さてええん！」

親方！ 空から女の子が！ ってチルノ!?

「どうしたの!?!」

良く見るとチルノは白と水色のずいぶんふりふりした衣装で……ゴシックロリータっていうんだっけ？ まあそんな衣装で私に抱き着いてくる。最後に見た時のクールでカッコいいチルノはどこに行っただのか、半ベそをかきながら抱き着くチルノの頭を撫でる。

とりあえず珍しいものが見れたと、笑いたいところだけれどこの状態だと私が勘違いされかねない。いやされないよね、たぶん……だよ
ね？

黒い羽が空から一枚降ってきて、それと共に地上に降り立つ黒い羽をもった……ジャーナリスト^{変態}。

「さ、佐天さんがチルノさんをつ……こ、このロリコン！」

「アンタには言われたくない！」

射命丸さんからかけられた言葉を全力で否定して、とりあえず私は深呼吸。チルノは私の後ろに隠れて射命丸さんをチラチラ見てる。

「文が勝負に勝ったから言うことを聞くって約束で、それで……」

とりあえずチルノが言ったのを要約すると……勝負に勝った射命丸さんがチルノに『この服に着替えてください！』と言ってチルノが着替えたなら猛スピードで写真を撮りはじめて、それから突然鼻血を出して倒れた射命丸さん、それを恐れたチルノはこっちに逃げてきた。曰く射命丸さんの眼が血走ってて怖かったらしい……。

「なるほど、つまり射命丸さんは帰って」

「酷い！ 悔しい……でもっ！」

「なにが『でも』なの!?! 恐いっ！」

正直恐怖しました。

「とりあえず私はチルノさんを好きにするっていう権利があるんです、よっ！」

そう言っただけで私の方に走ろうとする射命丸さんの顔を掴む者が一人。

「おい天狗、チルノ相手にそんなことするなんざ……烏天狗も落ちたな？」

「あれ、どなたですか？」

「藤原妹紅、不老不死やってる」

「ははは、さすがチルノさん……愉快的友達を持ちなようですねえ」

妹紅が射命丸さんの顔にアイアンクローをかまして、なんか二人して睨み合ってる。ていうか妹紅と友達だったんだね、さすがチルノ、そこに痺れるよ……。

とりあえずその二人が弾幕勝負を始めるみたいだからチルノを慧音さんに渡して私は場を離れることにした。お酒はゆっくり飲みたいもんね……酔うと記憶無くなるけど。

「あっ」

「あっ」

静かな方に行くと、ウサギ耳の少女……じゃわかりにくいけど、鈴仙と会って二人して同じ反応をしました。どちらともなく軽く笑うと御座に座ってお互いで御酌をしながら器をかるくぶつけて一口……うん、嫌いじゃない。とりあえずお互い戦闘した時の印象しかないからなあ……。

「お疲れ様、姫様を倒したのは巫女みたいだけど藤原妹紅を倒すなんてね」

「ん、でも倒したっていうのは少し違う気がするんだよねえ」

「それでも十分じゃない、結局倒したのはあんたなんだし……」

「佐天で良いよ」

「じゃあ私も鈴仙で」

心の中ではもうそう呼ばせてもらってますけどね、とりあえず私は頷く。

「で、なんだったのよアレ」

まあ言いたいのは私が『鬼』を解放した時の話。

「とりあえず何秒か先の未来がわずかに見えるんだ」

「ふうん、戦いながらなんてどうやって見えてるの？」

「なんか次に動く場所にぼわあ、て変な感じに……ううん、表現するのが難しいなあ」

無理して言う必要は無い、かなあ。今後なにがあるかもわからないし手の内をさらすのもあれだし、でも上手く伝えるのは難しいなあ。向こうに帰って止める人がいなかったらバシバシ力を使っちゃいそうかも……。

「ああ〜とりあえずあの鬼巫女に『死なない程度に痛めつけられた』姫様のわがままも当分やみそうかなあ、これからは人里に堂々と薬売りにも行くみたいだけど」

「じゃあ人里で会うかもね、私も結構買い出しに行くし」

「へえ、今度案内してもらおうかな、顔も聞きそうだし」

そう言って笑う鈴仙、私も笑って『隅々まで案内するよ』と返事を返す。

「まあ、涙子に頼むのは正解よ。この娘ったらチルノと同じで誰の心でも開いちやう子だから」

突然現れた八雲紫さんが突然そんなことを言うものだから、私はびつくりした。正直なんだか妙に八雲紫さんが馴れ馴れしい……いや、悪い意味じゃないんだけどなんでこうも好意的なのがわからない。そもそもなんで私のことをここまで過剰評価しているのやら。

「あら、過剰評価じゃないわよ？」

「わひやつ、なんで心の中を！」

センスで口元を押さえながら笑う八雲紫さんに、私はペースを乱されまくりで……。鈴仙の方は啞然としていてなにがなんだかという表情、まあそんな表情をしたのは私の方なだけけどお。

「八雲紫さんはなんでここに？」

「なんでフルネームなのかしら……ああ、そっか、紫で良いわよ涙子？」

なんだかミステリアスな雰囲気のまま笑う紫さんに、私は愛想笑い。とりあえず信用しようにもあまりに素材が無すぎる。チルノがなにか言ってくれたって考えてもいいのかな？

まあとりあえずこれからはもう少し友好的で良いってこともわかったし安心。

「頑張りなさい涙子、これから大変でしょうけど」

意味深な表情でそういうと、紫さんはスキマの中へと入っていく。どういうことだろ？ まさかまた異変、いや正直大変なことなら山ほどあるよね。射命丸さんの魔の手からチルノを守ったり、あとはレミリア様のお供だったり、他にも小悪魔さんの仕事のお手伝いとか……。

学園都市に帰ったら上条さんに会う必要もあるだろうし、ていうかそれ以外にも怪我のこととかも……。

「大変なことだらけじゃんっ！」

「あく、なんかすんごい似たような感覚」

苦笑する鈴仙、私は頭を抱える以外にすることは無い。

「あらあら、鈴仙つたらすっかり仲良くなったのね」

そう言いながら現れたのは青と赤の服を着た……えつと……。

「師匠、そんなんじゃないやありませんよ」

「フッフ、そうかしら？ 佐天涙子さん、私は八意永琳、会うのは一応二回目ということになるのかしら？」

「はい、そうですね。これで二回目です。まあ一回目は会話らしい会話もできませんでしたけど」

八意さんはおしとやかな大人の女の人って表情で笑うと私の前に腰を下ろす。

「そうね、ちよっとした勘違いでとんでもない異変を起こしてしまっただわ」

「……ありますよ、勘違いなんて誰にでも」

そう、誰にだってある。

「博麗の巫女にもお礼を言っておかないとね」

「ああ別に言わなくてもいいんじゃないですか？ そんなもんですよ、霊夢さんって……」

当然のように異変を解決して、当然のように強敵を倒す。可愛い顔してる癖に毒舌で冷徹、どこまでも最強なのにも関わらずそれも鼻につかない、私にとって霊夢さんは目指すべきの一つの形だ。あそこまですべて自分の仕事に忠実に、じゃないにしろ強くはなりたい。確実に強くはなつてると思うし純粋な「殺し合い」ならまだ隠し玉だつてあるし……つて殺し合いのこと平然と考えちゃう辺り私もずいぶんキテるなあ。

なんだか、私って幻想郷側とも学園都市側とも違う気が……。

「……佐天！」

「へ？」

私が意識を戻すと、鈴仙が私の肩をゆすつていた。ボオツ、としてたからかなあまりパツとしないなあ。ていうかいつの間にか霊夢さんまでいるし、今しがた考えてたばつかなのに『噂をすれば影』つて奴かな？

「酔った？」

「涙子が酔ったらもつとタチが悪いわよ、それは保障するわ」

そう言いながら現れたパチュリーさん……つて！

「紅魔館から、出れたんですか？」

「私が紅魔館に封印されてるとでも思った？ バカなの？」

すごいジト目で私を見るパチュリーさんに、苦笑いで返す。小悪魔さんが少し心配してくれているのか、鈴仙とは反対方向の私の隣に座つて私のことを心配そうに見る。さすが私の天使、可愛くて優しいとかどこまで完璧！

「ていうか私、特に具合悪くも無いっていうか」

「なによ、心配させて」

「ほら、こんなに元気。つてあれ……？」

勢いよく立ち上がつてみるもののすぐに体勢を崩しかけるのを小悪魔さんに受け止めてもらう。おう、柔らかいバストでございます

ね、佐天さんもグラッときますよ。さすが悪魔っ娘。

……いやいや、私ったらキャラ変わってるから、なんだろう。

「やっぱり疲れてるんですね」

さすがにあれだけの時間じゃ寝てもしようがなかったってことかなあ。

「部屋、使っても良いわよ」

そう言っただけの意外にも霊夢さん、私はどうすれば良いのかとパチュリーさんと小悪魔さんに目配せを試みるけど、二人は意外そうに口を開けている。やっぱり私にとっても意外なぐらいだから他の人からしたら相当とんでもないんだろうなあ。

「い、意外ですね」

「なあにが意外なのよ、とりあえず今回の異変解決の立役者なんだし構わないわよ……まあ紅魔館からお金は巻き上げさせてもらうけどね。朝御飯付きで格安よ」

「いや、やっぱり良いです。フェンリルで帰ります」

「ダメです、何かあったらどうするんですか！ 私のポケットマネーからでも出します！」

小悪魔さん、なんていう天使ッ！ でも一応、私もお給料もらってるんですよ？

そんな時、レミリア様がやってきて軽く笑う。

「いや、紅魔館から出すわよ。さすがにうちの大事な戦力を減らすわけにもいかないしね」

「殊勝なことを言うわね、悪魔のくせに……じゃあ値段の話だけ」

「あんまり調子乗ったこと言うで一銭も出さないからね」

弾幕勝負の腕はわからないけど、金銭面でのレミリア様の有利さが半端ないことを理解できた。というより霊夢さんの金銭面での状況があまりに酷いのかな？ 異変解決で報奨金とかでないのかな……いや、出るわけないか。

さて、レミリア様と霊夢さんの話も終わったところで、霊夢さんが私の方にやってくる。

「さて、案内するわよ」

私、幻想郷に来て初めての友達の家にお泊りです。まあたぶん布団に入ったらすぐ眠れそうだし丁度良いかな、妹紅と射命丸さんが弾幕打ち合って花火みたいになってるけどみんな楽しそうに見てるし、これを見ただけでも妹紅と戦った甲斐はあるってもんで……。

異変を解決できたからこそできたこと、そんなこともあるんだなあと佐天さんは自分で自分を褒めてみたり？

ともかく、これで私も一つ大きくなったと信じたい。

それが学園都市でもきつと役に立つように……頑張ろう！

35、新しく見えるモノ

人里の寺子屋でいつも通りの授業が行われていた。

授業を受けている子供たちは全員、畳の上で正座をして本を持って教師の言うことに耳を澄ます。だがやはり子供というのはやんちゃで落ち着きが無いものであり、少年二人が何かを話ながらくすくすと笑っている。

教師は少年たちの背後に気づかれないように立ち、両手で持った本から片手を離して軽い拳を二人の少年に軽く落とす。

「いてー！」

「うわっ、なにすんだこのババア！」

子供たちが抗議をする。

「ババアじゃないでしょうがあー！」

大声で怒る教師、だがその瞬間に鐘が鳴る音がした。

「わかったよ佐天先生」

「はい良くできました、今日の授業はここまで！ みんな宿題忘れなようにね、明日は慧音先生の日だから大変だよ！」

「はーいー！」

生徒たちが一斉に返事をして身支度をするそとぞろぞろと帰っていく。生徒たちは『さようなら』の言葉を言って去っていくので、現在教師である佐天涙子もさようならを返して先ほどまで持っていた教科書を脇に抱えて歩いていく。教室を出て少し離れた部屋に入ると教科書を本棚に入れる。

服装は教師ということもありロングスカートと白いワイシャツにベストを着ていた。メイド服やら戦闘服なんて着れるわけもない。

涙子は部屋を軽く片付けて、寺子屋を出る。

あれから、永夜異変からすでに一ヶ月半の時が過ぎた。涙子としても学園都市にそろそろ帰りたい気持ちがあるが、帰り方だつてわからないのだから今は今で頑張つて教師をやるのが自分の精一杯である。

教師と言えば、学園都市の方で小萌にも色々と迷惑をかけたことを

思い出す。主に家の屋根を吹き飛ばしたあたりはかなり申し訳ない。もれなく幻想入りでもしていれば若干でも笑い話になるのだが……。

「佐天ー」

声をかけられて、涙子はそちらを見た。人里の中を歩いている一際目立つ服装、ひいては向こうの世界で言う学生の制服のようなものを着ている少女。片手にバスケットを持ちながら歩いてくるのは鈴仙・優曇華院・イナバだ。

この一ヶ月半の間でお互い人里に顔を出すこともあり、良く会っていた。ついでに言うといきつけの茶屋までできる始末だ。ということ、涙子は教師のバイトを終えるとそこに来る。

「どうも〜」

「ああ、いらつしやい」

茶屋に入って椅子に座る涙子と鈴仙、お互い仕事が終わった後の休憩時間と言ったところだろう。お互いがとりあえず最近メニューに追加された“ホットケーキ”を頼むこととする。最初は『パンケーキ人気にホットケーキが幻想入りした!?!』と騒いでいたがそんなことも無いようでただ料理本を見つけただけという話であった。

お茶を飲みながら話をする涙子と鈴仙の二人、そこに新たな人影があらわれる。

「よう佐天、あと鈴仙、だったか？」

「妹紅、珍しいね茶屋に来るなんてさ」

「あたしだって甘い物は大好きさ」

そう言う妹紅さんは私の隣に座った。

「あの、最近姫様は迷惑かけてませんか？」

「ああ最近ハマったく仕掛けてこないし……ていうかチルノがこの前遊びに行ったら引きこもってゲームやってたらしいじゃんか」

「へえ、こつちにもあるんだ」

古いものばかりあるイメージの幻想郷にゲームがあるとは思わなかったが、良く考えれば幻想入りしそうなゲームだって山ほどあるだろうしおかしくは無いのだろう。だがそれにしても電気はどこから？

謎は深まるばかりであり涙子はとりあえず考えるのをやめた。正直紅魔館も不思議な部分は大概魔法だったりする。

「そういや近くに面白いもんが落ちてきたんだよ」

「幻想入り?」

「まあそんなもんだ、お茶が終わったら見に行こうぜ」

楽しそうに言う妹紅に、涙子は少しばかり楽しみになりながら注文したものを待つのだった。

しばらくしてから、涙子と妹紅は鈴仙と別れて人里を出てから少し離れた場所へと向かう。涙子はバイクフェンリルを押しながらその場所へとつくと、バイクを止めて驚いた。明らかな人工物が幻想入りするというのは珍しくもないのだが、やけにそれは近未来的なものだった。まるで学園都市にあるんじゃないかというコンクリートの塊。

「なに、これ……」

「な、すごいだろ?」

確かに凄いという言葉に同意せざるをえない。目の前の巨大なコンクリートの塊はただのコンクリートの塊というだけでなく窓も原型をなんとかとどめていて、それが建造物の一部だということはまるわかりだ。ならばそれはどこから来たのか? 幻想入りするものは大概あまりにも形をとどめていないゴミか、綺麗に忘れ去られたもののどちらかが多いがこんな破壊されたものが幻想入りというのは、涙子にとってはじめて見るものだ。

「妹紅、こういうのって良く幻想入りする?」

「いやあ、ここまで大きいものも初めてじゃないか? あたしが見る限り」

破壊されたなにか建造物の一部が幻想入りなんてことがあるのだろうか?

そんな巨大な粗大ゴミがあれば間違いなく“忘れられる”前に廃棄されて他の使い道をされたりするはずだ。なら、これは破壊されたそのまま幻想入り?

間違えての幻想入りというのもの中にはあるらしいが、これはあまり

にも不自然な気がした。

「ちよつと調べてみるか！」

「お、良いかもな」

「妹紅と佐天じゃん、なにしてんの！」

その建造物の残骸を調べようとした矢先、元気で聞きなれた声が聞こえる。二人してそちらを見ればそこには氷の妖精ことチルノが居た。やかましく馬鹿だが、確かに頼りになるし、友情には熱く義を尽くす。そこをみれば頼りになるのだがあいにく弱い。

まあ何とかとハサミは使い様、とも言うしそういうことだろう。

「ああ、つい最近幻想入りしたってやつね。調べるなら手伝うわよ……紫にも頼まれたしね」

そう言つて微笑するとチルノがメモを取り出す。

「さて調べるわよ！」

「おう」

「うん、気を付けてね！」

三人が一緒に巨大な残骸の中へと入っていく。崩れた建造物と言つても原型はまだ残っているようで、まだ中に入ることもできるだろう。それが崩れても死ぬような面子でもないだろうからあまり怖がらずに入っているのだろう。涙子だつてあぶなくなつたら妹紅に任せるなんていう考えでもいる。

中に入って妹紅がすぐに炎で明かりを灯すと、周囲を確認。崩れていると言つても結構内装はわかるもので事務仕事を主にやっていたのだと簡単にわかり、壊れたパソコンなどが転がっている。

「これは、まさしくと言つた感じだ」

「いやはや、目新しいもんばっかで楽しいな」

妹紅は周囲を確認しながら楽しそうにモニターなどを軽く弄る。もちろん点かないが……。

「ん、やっぱりこの数の文字があると面倒ね」

紙の枚数じゃなく、文字の数で言うあたりはチルノらしいだろう。紅魔館の図書館で本を探していた時と同じように、チルノはメモ用紙を一枚取り出してそれを見ながら資料を流し読む。

一方の涙子はパソコンなどを調べながら、点くものが無いか見回すがどうにもどれも壊れているような気がするが……それよりも前に誰かがパソコンを持って帰った形跡がある。まあ一番に自分たちが来たわけではないのだからおかしくは無いのだろう。

「ん〜点かないかあ」

何度かパソコン本体を叩いてみるがどうにも点くわけも無い。そもそも電気が通っているわけでもないから当然なのかもしれないが、ならば携帯端末はどうかと周囲を探してみるがやはり無い。軽い物だから誰かが持ち去ったのだろうと、ため息をつく。

「チイルノちゃあん!」

転がり入ってきたのは無論大妖精であり、語るまでも無く相変わらぬの過保護というか愛により……。

「こんな暗がりにはチルノちゃんを連れ込んでなんのつもりですかア!?!」

「こわっ!」

「相変わらずだなこのチルコンは」

「射命丸文と一緒にしないでください!」

あまり変わらないと言いたい涙子と妹紅だったがそこは大人の対応でスルーすることにしておいた。

とりあえずこの二人は置いて行くことにして涙子と妹紅の二人は残骸から抜け出す。大妖精は危険と言えば危険だがチルノの貞操の危機を感じるほどでもないし、まだ大丈夫だろうという判断の元である。日も落ちてきたこともあり妹紅と別れることにした涙子は、そのままフェンリルで紅魔館へと帰るのだった。

さすがに魔力を動力源とする魔力駆動と呼ばれるタイプに改造されていることもあり、燃費の良さは尋常ではなく給油的なこともそうそう必要ではない故に便利さと環境への良さは現実世界を超えるだろう。

紅魔館の門に立っている美鈴、ではなく妖精メイドに軽く挨拶。その後フェンリルを玄関近くに停めてカバーをかけると、涙子は玄関へと入ってただいまを言う。

「おかえり涙子！」

まず最初に突っ込んでくるのはフランドールであり、悪魔の妹のタツクルを何十回と食らっている涙子は受け止めると同時にその衝撃を回転にして発散させるといふ技を覚えてそれを実行する。抱き着いてきたフランを抱きとめてくるくる回り衝撃を消すと、フランを下ろして軽く頭をなでる。

日課ではないがいつもと同じようなものだ。そしていつも通りならばここで咲夜が来るのだが……。

「涙子さん、お帰りなさい」

「あれ、咲夜さんは？」

やってきたのは小悪魔で少し驚いてしまった。

「今はレミリア様と美鈴さんとパチュリィ様で部屋でお茶をしていますよ」

「珍しいですね、四人でなんて」

「まあいつも堅苦しいのも、ね？」

なんとなく理解できて、涙子は頷く。たまにはそういう日があつても良いだろう、とりあえず涙子は部屋へと戻り着替えることとした。もちろん小悪魔とフランは部屋の外であり、涙子はメイド服を着るとすぐに部屋を出ていつも通りだ。

どうせ四人で楽しくお茶会をしているのだからそつとしておこうと、思い三人は晩御飯を作ることとした。

「よし、フランと小悪魔さんはそつちをお願い！」

「うん！ 頑張ろうね小悪魔！」

「妹様、お怪我には気を付けてくださいね？」

咲夜ほど高級感あふれるものは作れないだろうけれども、紅魔館のメンバーがそこまで気にするとも思えない涙子は無難なもので行くことにした。庶民的だろうけれど、あの四人がフランと小悪魔が力を合わせて作ったものを『エレガントじゃない』とか言うわけがないし、それに案外これを気に気に入るかもしれない。ともかく涙子はいっ先日『香霖堂』で買ってきた本を取り出す。

涙子は今日初めて『調合』に手を出すのだった。

晩御飯ができたのはそれから数時間後、食堂で珍しく咲夜は座って晩御飯を待っていた。小悪魔からの『晩御飯は私たちが作りました！』という一言でレミリア、咲夜、美鈴、パチュリーの四人は現在食事を待っているのだ。

涙子に移植したレミリアの片目も美鈴の片腕もすつかり元通りとなり、そこにはいつもの紅魔館が広がっている。ただ違うのはやはり今日の晩御飯を作ったのが涙子とフランと小悪魔の三人ということだろう。

「お待たせしましたー！」

そう言っただけで食堂へと入ってきた涙子とフランと小悪魔が四人の前に皿を一つ置き、さらにサラダの入ったボールを置く。やはり咲夜ほど本格的ではないにしろ、庶民的で親しみやすい料理でもある。

「カレーと温玉のシーザーサラダです！」

比較的楽に作れる料理であり、フランと小悪魔に食材を切ってもらい涙子がスパイスを調整してルーを作った。時間はかかったがフランと小悪魔が下準備を済ますころには調整も終わってテンポよく調理完了、ちなみにフランと小悪魔が切った食材は見てわかるがそれもまた味が出るといえるものだろう。

以外としつかりしたできにレミリアは感心した顔をする。

「自分で調整するなんてやるじゃない」

「へへ、結構大変でしたが」

「本当ですね、涙子さん頑張っていましたよ」

「私も頑張ったよ！」

まあなにはともあれ初めてのフランが手伝った料理ということ、味にも問題はなく好評であった。もちろんそれは妖精メイドたちからも同じく好評で、フランが『また料理したい』と言ったりもして微笑ましい家族のやりとりともなったという話だ。

その後、涙子はレミリアと軽くお茶をすることになった。

「ありがとう、涙子」

「え、なんですか？」

突然のレミリアからの礼に少し驚く涙子。

「フランのことよ、やっぱり貴女が居た方があの子も楽しそうよ」

「それでもレミリア様といるのがつまらないわけではないですから、落ち込まないでください」

「べべべ、別に落ち込んでなんて！」

明らかに動揺しているレミリアを見て微笑する涙子。もう仕事も終わっているので私服でいる涙子は紅茶を飲みながら確かにレミリアとフランはすっかり仲良し姉妹になっているなと思う。なんだから言っただけ色々とフランに教える立場だっただけレミリアが多い。自分はその補足を聞かれる程度だ。

とりあえず、レミリアが心配するような妹が誰かに取られるなんてことあるはずもないので安心してもらいたいと思う涙子だった。

レミリアとのお茶会を終えて、『紅茶を美鈴に届けてあげて』というお願いを聞いて涙子が門に向って廊下を歩いていると、動かない大図書館ことパチュリーと会う。

「こんな時間に歩いてるなんて珍しいですね」

「まあこの時間は大概籠ってるからね」

いつも籠ってるじゃないですか。という言葉を読み込む涙子。

「そう言えば、霊装の件だけど」

「ああ、どうですか？」

「一応『作る』ことも視野に入れるなら良いのができるわよ、こっちは悪魔もいるんだし」

「ん、それってどういう」

「まあ詳しくは小悪魔に聞いて、大図書館にいるから」

涙子の疑問もどこへやら、とりあえずパチュリーは大図書館に戻るようで残された涙子はなにがなんだかと言う風に門へと向かうことにした。霊装、魔術を使用する場合にその動作が必要で無くなるというショートカットアイテム的な物なのだが、涙子にとっての一番の利点としては霊装の中には『能力開発をしても問題なく使える』物もあるということである。それさえあれば高能力者や魔術師相手に遅れをとることもないだろう。

霊装に関してはもつと細かい話をパチュリーにされたのだが、涙子が覚えているのはそのぐらいだ。それ以外は涙子にとって不要な知識だった。

涙子が門へと辿りつくのと、そこには美鈴の他に咲夜もいた。

「美鈴さん、レミリア様からお茶です」

「ああ、ありがとう」

美鈴は涙子がおのまま持ってきたティーカップを受け取る。なんともシユールな光景だがいつものレミリアの気まぐれだろうと、そのまま紅茶で体を温めた。

「咲夜さんはどうして？」

「美鈴が寝ないかどうか見張ってたのよ」

「昔はしょっちゅう一緒に居たんですけどね、最近はめつきり——
——って痛い！」

美鈴の脇腹に手刀を打ち込む咲夜は、顔が赤い。涙子でもわかるぐらいの照れ隠しであり、先ほどの理由もそれを見れば嘘だったとわかる。なんとなく一緒に居たかったのかもしれないな、なんて涙子は察してさっさとここから離れようかと思っているが美鈴が脇腹への手刀が変なところに入ったのか少し蹲っている。

少しやりすぎたかな？　と思っっているであろう咲夜を見て言う。

「咲夜さんって、反抗期？」

「涙子、変なこと言わないで」

だが似たようなものだろうと思った。どうしてもツンケンしてしまうのは咲夜の性格故なのかそれとも反抗期か、だが瀟洒なメイドにも完璧じゃない部分はあるようでそれが美鈴なのだろう。単純に気恥ずかしいと考える良いのか、まあこの二人にも色々あるのだろうと頷く。

「ともかく、ただ話してただけよなにもないわ」

なんだかかそう言われると妙に怪しく思ってしまうのだがなにも無いと本人が言うのだから信じようと、信じることにして紅茶を飲み終えた美鈴のティーカップを受け取ろうとしたのだが……。

「私が片すわ」

そう言つて咲夜が受け取ると、瞬時に消えた。なにか詮索されるのが嫌だつたのだろうかと思ふ涙子だつたが今はそれは良いと思ひながらとりあえず美鈴と少し話をすることにした。なんてことない涙子の生徒たちの話、腕が上がったとかいう話、やっぱり両手の方が便利だという話。結局、両手が戻つた美鈴には勝てないという話。

「咲夜さん、いや咲夜ちゃんも大きくなつたなあつて思うんだよね。つい最近まで私の後付いて回つてたのに」

そう言う美鈴はなんだか懐かしむというより少しばかり切なそう
で……。

「そうですかあ」

「涙子もそうなるのかなあ？」

「本人に聞かないでくださいよ……でも、私つてふつうに自立してる方だとおもいますけど」

美鈴は『それもそうか』と笑いながら頷く。咲夜ほど幼い頃からいるわけでもないので小さい頃の涙子を誰も知らない、けれど昔の涙子と言えど誰かに付いて歩くほどでもなかつたのはやはり下に弟が居たからだろう。考えてみればしばらく家族とも会つていないなども思つた。

「昔の咲夜さんも気になるなあ」

「そうだねえ、パチュリー様に作つてもらおうか、幼児化する薬とか！」

「うわっ、怪しいですねそれ」

二人して笑いあふ。いつも通りのくだらない話、それを終えると涙子は門前から去る。

「それじゃまた明日」

「うん、おやすみ」

紅魔館内に入って小悪魔の待つ大図書館へと足を進める涙子だが、突如目の前がぼやけて膝をつく。それでも目の前のぼやけが晴れることはなく、しかもなんとなくだが目の前の光景が歪んでいるような気もする。なぜこうなるのか、なぜこんなことになっているのかなんてわかるわけもない。

「これ、まずいつ……！」

涙子はそのまま前のめりに倒れる。

「なっ、にが……あっ」

涙子の意識が徐々に刈り取られ——間もなく涙子の意識は飛んだ。

◇◇◇◇◇

暗闇の中、私は意識を取り戻したと自分が感じた瞬間に起き上り、頭を整理。私は佐天涙子、紅魔館のメイドで学園都市の柵川中学一年生……。

よし、なにも不備は無い。私が寝てるのはベッドの上だからとりあえず運んでくれた咲夜さんか妖精メイドか、誰にしるお礼を言うことにしよう。

「……あれ？」

ふと気づけば自分が居る場所が紅魔館で無いことに気づく。

「び、病院？」

窓の外から差し込む日光に私は眼を細める。眩しい……。

「そっか、帰ってきたんだ」

自分の服装を見れば紅魔館に居た時と同じく、シャツとベストとハーフパンツ。それからニーソとブーツなんていうオシャレな恰好、見繕ってくれたのは咲夜さんだけ。

そう言えば服装はそのままなんだなあとか思いながら、私はベッドから降りてカーテンを開く。幻想郷では見れないビルやら「軌道エレベーター」やらが見えるけど、まあどうでも良いかとりあえず……。

「帰ってきたんだ、私」

学園都市へと帰ってきた私を待ってるのはきつと楽しいことばかりじゃないけど……私をもっと大きくしてくれる。それは自信をもって思えることだ。

第四章 とある都市の表裏

36、学園都市へアンフェア

幻想郷から学園都市へと帰ってきた日は佐天涙子が幻想郷へと行った日から数時間ほどしか経っていないこととなっていた。

佐天涙子はカエル顔の医者の前に座っている。一応体のどこをみても異常も無いようでも眼帯をつけると紅魔館から帰ってきたままの服装で立ち上がるとそのまま軽く跳ねる。それを見てやはり驚くカエル顔の医者。

正直、この男の患者になった者は誰しもがこの男に驚くものだが珍しくこの男は驚かされた。

「回復力が尋常じゃないね、それに服とかどうしたんだね？」

「まあまあ気にしないで」

「それは無理じゃないかな、とりあえず退院おめでとう」

その一言にうなずいて、涙子はカエル顔の医者に『また来ます』と言い病室を出ていく。また来ることになるのは目に見えているのでとりあえずそう言ったが、できれば来たくないとは思っている。それでも明らかに怪我をしないというのは無理な話で、魔術師やらと戦えばご臨終の可能性だって捨てきれない。

だけれど涙子は、今はあまり暗いことを考えることはしなかった。

涙子は歩いて数ある病室の中の一室の前に向かってくる。深く深呼吸をしてからドアをノック。

「どうぞ」

そう声が聞こえてから、涙子は部屋に入る。

ここまで一ヶ月と少し経ってしまったけれど、だからこそもう落ち込むことをやめて彼と会うことができた。

「上条さん……佐天です」

そう言うと、話を聞いていたからか『納得した』という表情をほんの一瞬浮かべて笑う。

上条当麻は失った記憶を補うためにカエル顔の医者から話を聞いた

ていた。だからこそその話から自分と涙子のことを聞いて、それを思い出して今話をしようとしているのだろう。だからこそ涙子は上条に欺かれることを理解して、自ら上条を欺くことにした。

「インデックスから聞きましたよ」

「ハハハッ、あいつ怒ってたろ？」

上条当麻が自分に告白したなんてことは神裂やステイルが話すはずもない。そりゃプライベートなことなんだから当たり前で、それでもそれを忘れられてるのは自分がふがいなかったせいだ。でも、だからこそ上条当麻は涙子を庇った。どれを否定しても、あの上条当麻を否定することになる。

だからこそ受け入れる。そう、幻想郷で誓った。

「それはそれは怒ってましたね」

不幸だ。と懐かしい気がする言葉を言って上条さんは頭を抱える。それを見るとやっぱり笑ってしまって、それに合わせて上条さんも笑う。なんてことない、やはり前と変わらない。

「それじゃ上条さん。退院したら連絡してくださいね！」

「ああ、またな佐天さん」

軽く手を振って、涙子は病室を出た。

これで良い、ようやく、あの上条当麻との初まりの地点に立つことができる。リセットされた関係を“他人”と再会する気は無い。しっかりと一つずつ積み重ねて彼と友達になりたいと、今の佐天涙子は思えた。良くも悪くもその純粋な思いが、後にどう影響を及ぼすか、彼女も彼も知ることは無い。

佐天涙子は病院を出て自分の寮へと帰ってきた。寮と言ってもほぼアパートのようなもので、こうして一人で好き放題生きるには丁度良いものだ。

ポストを開いて神裂からの手紙を取ると、ポケットから病院に置いておいた財布を出して鍵を使いドアを開ける。ずいぶん、否、かなり懐かしい我が家に戻ると涙子は大きく背を伸ばして居間に座り、神裂からの手紙を開く。

『良くやってくれました、純粹に今はありがとうという言葉を送らせてもらいます。感謝の言葉を伝えようと思えばこのサイズの紙ではとてもではありませんが伝えきれませんので、インデックスを取り巻く環境を説明しておく義務があると思っただけで書かせていただきます。イギリス聖教はインデックスを取り戻したがったようですが、私たちがだましていたことの説明を求めればすぐに現状維持、ということになりました。貴女と上条当麻の二人にならインデックスを任せることができません。もしかしたら危険も付きまとうかもしれませんが、それでもこちらにいるよりずっと安全です。なので私たちが情報を集めなければならないまで、あの子をよろしくお願いします』
長々とつづられた文章を見て、涙子は軽くため息をついた。やはり魔術師関連のことに巻き込まれることは必須ということだろう。

「不幸だ」

軽く呟くと背中を伸ばして携帯端末を持つ、その直後すぐに携帯端末が音を出しながら震える。

「わわわっ！ はい、もしもし！」

驚きながらもかかってきた電話に通話ボタンを押して出ることにした。

『佐天さん！ なんて病院に居ないんですか、退院時間短すぎでしょう！』

無論、携帯端末の向こうから聞こえるのは学園都市での一番の親友である初春飾利からの声。懐かしいその声にジーンと来るがここで変な反応をするわけにもいかない、とりあえず魔術側と関係の無い飾利を巻き込むわけには行かないと、何度か頷いて涙子は話を逸らすことにする。

「そ、そう言えば！ 最近、ジャッジメントで事件とかあるの!？」

『えっ、別にありませんけどって倒れたばっかです。どうしたんですか？』

「あははくそりゃあ、私手伝おうかと思ってね！」

嘘だ。とりあえず話をそらすための嘘、だったのだが……。端末の向こうでなにやらガサガサとやっている音が聞こえて、すぐに初春飾利とは違う声が聞こえる。

『佐天さん！ 今スキルアウトの能力者狩りが頻繁に起きておりますので、決して人通りが少ない路地裏などにはいかないように！ 特に貴女は！』

白井黒子の声に、涙子は訝しげな表情をしながら端末から耳を離す。さもなくば耳が痛くなっているのは必須、ともかく今現在調べている事件はそのスキルアウト関連のものらしい。能力者狩り、涙子は狩りの対象にならないだろうけどトラブルに巻き込まれないようにと、黒子は心配して言っているのだろう。

だけれど今現在、佐天涙子としては少しそれは気になった。

『どうせレベル0のひがみよ、能力者狩りを狩りに行こうじゃない！』
相変わらずだな、と涙子は黒子の声の向こうから聞こえる御坂美琴にため息をつく。

『さ、佐天さん、申し訳ありませんの』

「いえいえ、大丈夫ですよ。わかりました……で、どこまで搦んでるんですか？」

『スキルアウトのチーム名がビッグスパイダーということとそのボスの名前が“黒妻綿流”くろづまわたるという男ということだけ……って佐天さん！』

つつい口が滑った白井黒子が焦って声を上げるが、涙子はすぐに端末の通話を切って立ち上がる。動いている方が余計なことを考えないで良いと、とりあえず今は善行でも重ねることとしようとうなずいた。まずはそのビッグスパイダーとやらを調べる。今回は自ら事件に飛び込むこととなったが、妙な胸騒ぎを感じた。

いやそれ以上に涙子自身、武装無能力集団スキルアウトに興味があるのだ、同じレベル0としてどうその道を行くことにしたかなど、本当のスキルアウトに興味が……。



「ということ、姉御さん！」

「なななっ、なんでお前がッ！」

スキルアウト、否、私に言わせれば不良のボスこと姉御さんに会い

に来た。突然現れた私に驚いた姉御さんは動揺しまくってるけど、そう言えば前にお見舞いに来てくれた時に怒っちゃったんだよね。いやはや私もまだまだ子供だなあ。

「先日はずめんね姉御さん」

「ま、まあ良いけど……あ、あたしも無神経だったしい……」

最後の方は声が小さくてあまり聞こえなかったけどまあ姉御さんが怒ってないならなんでも良いや、とりあえず路地裏走り回って知った顔の不良さんに会って姉御さんの場所まで送ってもらったただけなんだけどね。私を見て震えてた、うんゴメン。

「とりあえず、座れよ」

この廃墟みたいな拠点に置いてあるソファに座っている姉御さんのテーブルを挟んだ向かいに座ると、不良さんの一人がお茶を出してくれる。烏龍茶、しかもペットボトルから紙コップに注いでくれる優しさに私は少し尊敬しましたよ。まあともかく、私は姉御さんに聞きたいことがあってここに来たことを思い出す。

とりあえず最近起きてる能力者狩りが能力を持つている姉御さんたちのグループの人たちがやっていることじゃない確信があったので安心して聞く。

「最近の能力者狩りのこと、聞いてます？」

「ん、ああうちのは誰もやられてねえけど……狙われてるのはどうも優等生な能力者ばっかだろ？ 最近じゃ常盤台のまで狙われたらしいじゃん、どうやってあそこの生徒をレベル0で狩ったんだろうな」

「ですよ、私も気になってる……」

常盤台の生徒まで狙われたっていうのは、知らなかったや。御坂さんも白井さんも無事だったからあの二人じゃないようだなによりだけど、問題としてはそこじゃない。

「で、情報によるとビッグスパイダーってチームが何か握ってるらしいんだけど」

「……ビッグスパイダーか」

「そのビッグスパイダーの拠点、知っている方とかいます？」

姉御さんは少しばかり表情をしかめた。さすがに同じスキルアウトは売れなかつたりするのかな？

「知ってる奴なら知ってるけど、第七学区に行くぞ」

「はい？」

「知ってるやつを紹介してやるから、悪い奴らじゃないしな」

なんだか嬉しそうな姉御さんと一緒に、とりあえず私は拠点を出ることにした。こういう時はもうちよつと大人数で道を横に広がって歩くのかと思っただけどうやら違うようです。まあなんでも良いんだけど、とりあえずビッグスパイダーが能力者を狩れる理由っていうのも気になる。というより一番気になってるのはそこ。

姉御さんと二人で、途中でお昼ご飯を食べたりしながら連れて行かれた場所は廃墟のような場所。

一本道を歩いていくとやっぱり柄の悪い男の人ばかりで正直……手が出そう。明らかな敵意が向けられればそりや条件反射の一つや二つしてしまいそうで、これもあの殺伐としてそうで平和な幻想郷にいたせいだろう、うん、間違いない。

姉御さんの後ろを歩いて、着いたのは姉御さんの拠点より全然大きい廃墟。

「駒場さんー！」

なんだか、姉御さんが人をさん付けで呼んでるのって新鮮。

ソファに座った男の人が私たちを視界に入れる。

「……なんだ？」

「駒場さん、今のビッグスパイダーの拠点ってわかりますか？」

「ああ、知ってはいるが……」

なんだかゆっくりした喋りの人だなあ、ていうかデカイ。凄いデカイ、そして間違いなく強い。

「そこに連れてってくんないかな、あたしのダチの頼みなんだ」

私を指差して言う姉御さんに少しだけ気分がホッコリとする。姉御さんとはあまり友達って感じがしてなかっただけに向こうからそう言ってもらえるとやっぱり嬉しい、それよりも私の頼みって言うって駒場さんって人は案内してくれるのかな？

「というか、場所さえ教えてくれれば一人でも行くけど……。
「わかった……ビッグスパイダーの拠点を知っている奴に案内させる」

「そう言うと駒場さんは下がって行った。後ろに控室的な物でもあるのかな？ まあそれはイイとして……。」

「姉御さん、付いてこない方が良いかもですよ」

「なんでだよ？」

「ジャッジメント風紀委員とかアンチスキルも来るかもしれないんで、姉御さんってレベルアップ幻想御手の件とかもあるじゃないですか？」

「……わかった」

「うん、姉御さんも私の腕は知ってるだろうし、そうそう負けないとは思ってってくれるんだろう。それにジャッジメント風紀委員とかスキルアウトに見つかっても面倒だろうしねえ、とりあえず私を案内してくれる人にも周辺まで案内お願いをしよう。」

「そう思うと駒場さんと一緒に男の人が一人出てきた。金髪に唇ピアス明らかに柄の悪い。」

「こいつに案内させる……」

「え、俺ですか!？」

「ああ……」

「無言の圧力に、金髪ピアスの人はうなだれて頷く。姉御さんが軽く私の背中を押すので、自然とその人にも案内が必要なのは私だってことはわかるわけで、お互い顔を合わせて……気まずい。」

「たぶん『こんなガキをなんでビッグスパイダーの拠点まで案内しなきゃなんねえんだ』ぐらい思ってるんでしょう。」

「こんなガキをなんでビッグスパイダーの拠点まで案内しなくあなんねえんだ……」

「声に出してるじゃないですか、まあ向こうに着くまでの付き合いなのでどうでも良いんですが？」

「佐天涙子です」

「それでも一応名を名乗るのが流儀というものだろうと、私は名乗る。その男の人は少し驚いたような顔をしてダルそうにまます答える。」

「浜面仕上だ」
はまづらしあげ

「こうして私は、この人と運命の出会いを……なあってことは無い。これっきりの付き合いだと思う。」

私は浜面さんの後をついてそのまま拠点へと向かうことにする。近くも無ければ遠くも無いらしいけど、こんなにかつい人と歩くのを見られるのはあまり嬉しくないなあなんて思うしね。まあともかく私が聞きたいことを聞けならこの人でも良いわけだから、聞いてみようと思った。

「浜面さんのところは、能力者っているんですか？」

「俺たちのチームに能力者はいねえよ、全員レベル0だ」

「なるほど、正真正銘の武装無能力集団ですね」

そう言うのと浜面さんは露骨に疎ましそうな表情をした。この物言いが気に入らない、それは多分私を能力者だと思っているからだと思う。

「能力者狩りしてるやつらのところに行くなんて物好きな奴だな」

「別に良いじゃないですか、私能力者じゃありませんし」

「……いや、マジで驚いた」

「あつははは、レベル0の中学生の身分ですが並のことじゃやられませんかよ」

意外そうな目を私に向ける浜面さん。

「幻想御手って知ってます？」

「まあ噂は聞いた」

「それ、私も使ったんですよ。その時に姉御さんと知り合っただけです」
私が姉御さんを倒してもらったなんてことは伏せる、特に話す必要も無いだろうし無用なトラブルや誤解を起こすだけだもんね。今でこそ仲良くなれたけど姉御さんとの初対面なんてほぼ命がけに近い戦闘だった。それでも余裕を持てたのは、幻想郷での生活のおかげだろうな、と思う。

「私もね、一時期思わなかったことも無いんですよ。全部捨てちゃおうかなとか」

「俺たちみたいにか」

「うんうん、スキルアウトの人たちに絡まれたりしたこともあるけど……その中にも私を助けてくれる人だっていなかったわけじゃない。カッコいいなって思うこともありました」

誰にも言えない秘密だ。スキルアウトに憧れていたことがある。

「だから、能力者狩りをしているスキルアウトを拘束するために能力者たちが能力を使うなんて、私は認めない。無能力者がやったことは、できるなら無能力者がケリをつけたい」

同じコンプレックスを持っていたからこそわかることもあると、だからこそ私は今回の事件解決に参加したかったのかもしれない。

浜面さんの方を見れば、少し驚いた顔をしていた。

「すまん、お前のことただのガキだつて舐めてた……」

「別に構いませんよ、慣れてます」

私と浜面さんが少し変わって、再び歩き出す。目指すべき場所は浜面さんの知っているビッグスパイダーのアジトだ。

程なくして、浜面さんが立ち止まる。

「こっから先に行けばビッグスパイダーの拠点だ、着いて行かなくていいのか？」

「大丈夫です……むしろ足手まといになるので」

「ハッ、言ってくれるぜ、それじゃまたな」

「ええ、またいずれ」

軽くお互い笑って、浜面さんは踵を返して去っていく。最初よりは話をしていたことによりわかりあえた気がするけど、なんだかあの人は不幸の匂いがする。気のせいかな？

まあともかく今は、私は私でやらなきゃならないことをやろう……！

浜面さんの背中が見えなくなったのを確認してから突入するために勢いよく飛び出すと……。

「ん？」

「あ」

ビッグスパイダーの拠点だと言われた場所の前に、御坂さんと白井さんと男の人が一人いた……ヤバいこれは不味い。

「さ、佐天さん!？」

「なんでこの場所にいますの!？」

それはこっちの台詞なんですけど……とは言えない。

向こうは調査、こっちは勝手になわけだしね。男の人が不思議そうにこっちを見てるけど、私と目を合わせてすぐにわかる。お互いがお互いその相手が似たようなものだってことも、ていうか相当強いよね、この人。御坂さんと白井さんがすぐに拘束しにかからないのを見ればこの人が悪い人じゃないってことだから……なに牛乳飲んでるんですか。

「ぶはあ！ やっぱ牛乳は——」

「ムサシノ牛乳」

なんの合言葉ですかそれ、まあ私も同意ですけど……ってこの声！私と御坂さんと白井さんと男の人は四人してそちらに視界を向ける。そこには見知ったメガネをかけた巨乳……いやいや、私、巨乳って表現はどうかと。

「固法先輩!？」

「久しぶりだな……美偉……」

美偉って、固法先輩の名前だよね？

「え……う？ え……う？」

私と白井さんと御坂さんの三人で二人を交互に見てから、眼を見開く。

「ええええええつ!!？」

——学園都市帰還早々、とんだ事件に入り込んでしまったなあ。なんて……自分から巻き込まれにいったし、とてもじゃないが『不幸だ』なんて、言えないよねえ。

37、武装無能力集団へスキルアウト

もはや廃墟のような場所で、私こと涙子と御坂さんと白井さんの三人は口をアホみたいに開けていた。

それも全部、先ほどからいる革ジャンの男の人と固法先輩のせいじゃん……。

「久しぶりだな、美偉」

「先輩……なんで、なんでなんの連絡もくれなかったんです！ 私、てつきり……」

ただならぬ関係の二人だつてことは私でも察しが付く、いやもう御坂さんと白井さんにも察しはついているんだろうけれど、それにしても固法先輩がこんな柄の悪そうな人と知り合い以上の関係だったとは驚きでした。

男の人は固法先輩の腕についた腕章を見る。その視線に気づいた固法先輩がその腕章を隠すようにすると、笑つて男の人は固法先輩の横を抜けて歩いていく。

「安心しろ、すぐに消えるさ」

「先輩……」

振り返つて声をかける固法先輩だけど、やはり追いかけるまではしなかった。仕方ないので私は溜息を付いてからその男の人を追うことにする。三人が私に声をかけようとするけど私は軽く謝るようなジェスチャーをしてその男の人を追う。

私を追つてこないのは……予想通りだ。

たぶんだけれどあの二人は少しばかり体に異常をきたしていた。理由としてはなにかあったんだろうけれどもそれも全部あの男の人に聞けば良い、のかな？

「少し、お待ちいただけますか？」

私は駆け足で男の人に追いつくと、そう声をかけた。

「どうした、ここらへんはお嬢ちゃんのような子が来る場所じゃないぞ」

男の人はそう言つて笑うと、また手に持った牛乳を傾けて飲む。

正直、目の前の男の人が相当強いということはわかるけれど、おかしな感覚だった。負ける気はしないのだけれど勝てる気もしない。やりあうのは相当不毛で、そしてやりあう理由は無い。

固法先輩との関係はともかくとしても聞きたいことは山ほどあるので私は警戒を解く。

「失礼しました、私は佐天涙子。貴方の『知人』である固法美偉さんの後輩にあたります」

できる限り、冷静を保ちながら、棘が立たないようにそう言った。すると男の人は、なにがおかしいのか笑い出す。正直拍子抜けというより、また私は啞然とさせられた。

「はははっ、そんな礼儀正しくできるお嬢ちゃんが……さつきみたいなギラギラした眼をできると思うとやっぱり学園都市っていうのは悔れないな。俺にはそんな畏まらなくていいぞ、ところでお嬢ちゃんはさっきの風紀委員のお嬢ちゃんたちの友達でもあるのか？」

「はい、私はレベル0で風紀委員でもありませんが……じゃなくて、ないですけど」

とりあえず私は少し軽い敬語を使うことにする。

「レベル0でそれってのはさすがに無茶がある気もするが、ほんとなんだろな。奇遇にも俺もレベル0だ」

「私にとつては貴方がレベル0って言う方が信じられませんよ、私なんかよりよっぽど覇気があるじゃないですか」

「覇気、ねえ……ただのスキルアウト、なんだがなあ」

「私だって、ただの女子中学生ですよ」

そう言つて私と男の人は笑いあうと、話す場所を変えることにした。

ともかく、私と彼はお互いがまともに話し合いを行える場所として公園のベンチなんていうものを選択したわけだ。さすがに年中ファミレスってのも私の金銭的にヤバイし、そもそも夏場なら今の時間外にいてもそれほど問題も無いように思えるし、丁度良いか……。

私と彼は少し間を開けてベンチに座り、彼はムサシノ牛乳を、私は

コーヒーを飲む。

「とりあえず俺の自己紹介をしておく、俺は黒妻綿流くろづまわたるただのスキルアウトだ」

「へえ……って黒妻綿流!? それってビッグスパイダーの!」

「それは昔の話さ」

昔の話?

でも今日ビッグスパイダーのボス黒妻綿流の話を聞いたばかりで……たぶん調べたのは初春だし初春の情報網にそんな遅れがあるとも思えない。だったらどちらかの黒妻綿流が偽物、でもその問が出た時点でどちらが偽物かという答えは簡単に出た。

目の前の黒妻綿流は本物の黒妻綿流だ。

「事情は、聞いても答えてくれはしませんよね?」

「まあな……これは俺たちの事情でもあるからな、できれば能力者にも出張ってほしくはねえんだ……美偉にもな」

少しばかり、固法先輩を特別視しているような言い方だった。関わっても良いと思っていないことは無いはずだ、固法先輩はきつと今黒妻綿流を名乗っている人を知っているような気がする。

「あくあ、私ももつと早く生まれてれば、ビッグスパイダーとか入れたんでしようけど、黒妻さんの舎弟とかで」

「ハハハッ、確かに佐天が入ったらビッグスパイダーも昔のまま居られたのかもな」

懐かしむようにそう言う。

「でも、結局変わりたく無くても時間と共に変わるのが人間だろ、どんなに経っても変わらないでいようと思って変わらないのは“形”だけだ」

「そうですね……言いたいことはわかってても、その意味まではわかりませんけど」

「そういう風に喋ってるんだよ」

立ち上がる黒妻さん、たぶんだけれど固法先輩が関わっている。間違いない。

「学園都市で言われるスキルアウトは、碌な人間の集まりじゃないと

されています」

「……そうだな、それでもそいつらは自分たちを武装無能力集団スキルアウトって名乗ってる」

言いたいことが、たぶんまったく間違えずに言える。私はこの人にどこか親近感を覚えていた。

「だけどその中にも、筋を通す奴らだっているってこと……俺は知ってる」

私も知っている。いや、学園都市に入学当初こそ『スキルアウト』っていう集団をバカにしていたし蔑んでもいた。

だけれど今は知っているんだ『能力開発』で挫折して、なにもかも投げ捨てたくなる気持ちや、新たな世界に踏み込んでみたくなる気持ち。それにスキルアウトのみんながみんな、悪い人じゃないってこと、だから私はスキルアウトと一括りに言うことはあっても、出会った人を決してスキルアウトというフィルタを通して見ないようにしている。

目の前の人はスキルアウトだったからこそ、スキルアウトのことがわかるはずだ。

「能力者狩りをしている無能力者をどうにかすんのは無能力者だ。自分のケツは自分で拭く」

そう言って去っていく黒妻さんを見送って、私は缶コーヒーを一気に飲みして空き缶をゴミ箱に投げて入れる。

ブラックコーヒーを飲めてしまうのは、紅魔館に居たせいかな。

私はとある目的地を目指して歩くけれど、生憎目的地と黒妻さんと別れた場所は結構離れていて私は結構な走りをしたこともありずいぶん疲れていた。

バスを使えば良かったんだけど待つ時間が惜しいぐらい私は早くそこに行きたい気持ちなんだからしようがない。そもそもバス代だってタダじゃ無いんだし、無理に乗る必要はない。

走るのをやめて歩いていると息切れもずいぶん収まってきたことだしました走り出そうとした、その瞬間――。

前から歩いてくるのは、巫女さん……だと？

突然、正面から歩いてきた巫女さん相手に私は唾然としているとその巫女さんは何事もないかのように私の横を通り過ぎて……。

やけに甘くて美味しそうな匂いがした直後、私の左目から痛みを感じた。

「ガツ!？」

私は激痛に膝をついてしまう。

「なっ……にっ？」

さっきの巫女服がやったなら魔術師か能力者か……あとは魔法使いぐらいしか候補も無いだろうけれど……。

あれ、治った？

痛みが消えて立ち上がると私は振り返ってさっきの巫女服を探してみるがもう見えなくなっていた、どれぐらい痛みがあったのか覚えてもないけれどまだ少しだけ余韻で痛む。

「ま、とりあえず向かいますか」

「なにが向かう、なのかな？」

そんな声には私は振り返る。

「あ、インデックス」

「あ、インデックス、じゃないんだよ！ 今日お見舞いにいったら居ないし、どうなってるのかなあるいっ！」

「それはまあ、色々あります」

「どうまと同じぐらいボロボロだったはずの涙子がこんな早く退院できるはずがないんだよ！ これは魔術師の仕業だよ！」

いやはや、どちらかというと魔法使いの仕業と言いますか……まあともかく私はインデックスに怒られながらもとりあえず話を逸らす方法を探す。

「そう言えばどうしてこんなところに？」

「お買いものに行ってたんだよ、小萌と！」

「小萌先生と……？」

「はい、そういうわけなんですよ佐天ちゃん」

久しぶりに聞いた声に私は驚きながらそちらを見ると、そこにはち

まっとした先生。つまりは小萌先生が居たわけで……。

「こんな心配をかけておきながらインデックスちゃんに一言もかけないなんて……佐天ちゃんは上条ちゃんと同じぐらいバカですね」

「あの、すみません」

私はぐうの音も出せずに謝るぐらいしか無かった。

とりあえず私は小萌先生とインデックスの荷物持ちをやらされて、そのまま小萌先生の家へと案内される。

今日は焼肉、なんて運がいいんだろう。佐天さんもテンションを上げずにいられないこの香ばしい匂い……なんて思っていると、私が肉を取ろうとした瞬間——消えた？

「るいこ食べないの？」

口に、入っている……だと？

「佐天ちゃん、さっさと食べないとインデックスちゃんが全部駆逐しますよ？」

「は、はい！」

私は忘れていた。焼肉が戦争であると……幻想郷で焼肉を食べた記憶は無い。

さあ、私たちの戦争を始めましょう！

結果、私は惨敗だった。インデックスの食における瞬発力は異常……というより若干焼けてない気がする肉でも行くのは流石に負けるわ。小萌先生はそれとなくとっていくし……でも小萌先生がお腹一杯になったあたりに私も結構食べれたりしたんだけど、とりあえず決めたことはインデックスと食事する時はみんなで食べるようなものはしないってことだ。

食事を終えてから、お腹が一杯になって寝てしまったインデックスに毛布をかけると周囲を見渡す。

部屋の畳は直っていて、魔方阵はしっかりと消してあるけれど天井ばかりはどうにもならなかったのかブルーシートで覆われていた。

「すみません、小萌先生」

「なんのことですかー?」

「その、天井のこととか……」

私は心底申し訳なく思い座ったまま頭を下げる。

「先生は、上条ちゃんや佐天ちゃんのことを良く知っています」

「え?」

「上条ちゃんとは入学当初からの付き合いですから、多少のやんちゃはしても人様に迷惑かけることをしません」

それは、私も僅かながらしか一緒にいなかったけれど知っている。

あの人はそういう人だ。

「それに佐天ちゃんとはずいぶん会うことも多かったし一緒にいることも少なくとも無かったと思います。だからわかります。上条ちゃんと佐天ちゃんはどこか似ているんですよ」

「……はい」

あの人みたく我武者羅に誰かを救うなんてことはできないけれど、それでもそう言われるのは悪い気がしなかった。私としては上条さんと黒妻さんが似ているとも思えないからこそ、私はその二人の似ていないところが似ているのかもしれないと思った。

とりあえず私が今言えるのは、小萌先生はやっぱり『私の先生でもある』ということだ。

その日は、小萌先生の家泊まらせてもらい三人して布団で寝た。

一人暮らしの身としては少し暖か過ぎた気がしないでもないな、なんて……。

翌日——私は朝早くに自宅に帰ってからシャワーを浴びて、髪を乾かして、バスタオル一枚のまま今日はどうするかなんて、深く考える必要はそれほど無い。今日は昨日の事件の続き、偽黒妻綿流の正体を暴くこととそれに通じているであろう固法先輩を探す。ついでに付け加えるなら黒妻さんとの関係を聞いてみたりしないなあ、なんて。

まあ昨日打ったメールの返信が来ないあたり、やっぱ白井さんと初春に頼るしかないよね。

「ふう、ん？ 電話来てるし」

携帯端末をいじると、直後に目の前に誰かが現れた。

「ち、違いますの、これは何度も電話しても出ない佐天さんがっ」
「ひっー！」

私らしくない声を出して、私は白井さんの頬を打ってしまった。ごめんなさい。でも、悪いのは白井さんだからね？ だよ、ね……？

私のビンタを受けた直後、外にテレポートした白井さん。

バスタオル一枚の姿から着替え終わると、玄関から今度ははしつかりと白井さんを迎え入れてお茶を出す。とりあえず当初の目的通り白井さんと接触できたのは嬉しいけど……私の体感時間的には一ヶ月以上初春と会ってないんだよね。

白井さんの赤く腫れた頬に水で濡らしたハンカチを当てる。

「ひゃんー！」

「ごめんなさい」

「ま、まあ……わたくしも悪かったので仕方ありませんの」

確かに、人が電話に出なかつたからってテレポートなんて、私が居留守使ったり白井さんから逃げたりするように見えるかなあ？

「ともかく、わたくしが佐天さんに聞きたいのはあの方との話はいかがでしたの？」

「得るものはありましたが事件解決には役に立たないと思いますし……これはレベル0の問題でもあります」

「能力者狩りが起きた時点でこれはレベル0だけの問題ではありませんことよ」

確かに、正論だった。けれど私や黒妻さんの感情はそれとは違う。「それにお姉様も友達の婚后光子、さんも能力者狩りに会っています。だからこそお姉様はなにがなんでもこの事件を解決しようとするでしょうし『スキルアウトは碌でもない人間の集まり』という印象を変えられることは無いでしょう」

つまり私がレベル0だけで話をつけるには御坂さんを説得する道しかない、そういうことだ。

「友達が傷つけられればそうもなりませんし、構いませんよ」

「……昨日は少し配慮が足らなかつたと、お姉様は反省していましたわ」

「別に良いのに、そのうちレベル5になる予定なんで」

「それはわたくしを追い越してから、ですわね」

二人で冗談を言い合って笑う。

ともかく、昼前にはファミレスに集合するのが予定らしく、その後私と白井さんはジョナGへと向かうこととなった。先に二人で入って雑談をしていると、すぐに御坂さんと……初春が来た。

いや、初春からしたら大したことない、二日ぶりぐらいだし大したことじゃないんだろうけど、やっぱり私としては親友としばらく会っていないというのに変わりはない。

「初春ー!」

「佐天さん、スカートはダメですよ!」

もう警戒されているのか、つまらん!

「あはは、ともかく佐天さん退院おめでとう」

「あつ、そうだったおめでとうございます!」

御坂さんと初春からの言葉に私は素直に『ありがとう』とだけ言って軽くメニューを注文する。私と向かい合っている白井さんの隣に初春が座って私の隣に御坂さんが座った。

今日四人がここに集まった理由は一つだけだ。

固法先輩のこと、それだけだ……。

「固法先輩と黒妻綿流が知り合い! ほんとですかそれ!?!」

「まあ本当なんだなこれが、昨日黒妻さんから裏は取ったから間違いない」

「ていうかまた佐天さんは危険なこととして!」

少しばかり怒る初春だけど、私は軽く論じて話を続ける。

「それですね、私としては固法先輩に直接ことと次第を聞きたいんです」

「でも固法先輩は電話にもメールにも出ませんし……」

「なら、直接足を運んだ方が良さげですわね」

「足を運ぶってどこに？」

「それはもちろん固法先輩の家ですわ」

白井さん、良いこと言いますね。

「……今から？ 来たばつかなのに？」

「もちろん今からですわ」

「と決まれば、行きますか！」

私が立ち上がって言うと、初春が眼を細める。

「ど、どうしたの？」

「少しバストサイズアップしました？」

「やめてよ、ていいうかなんでわかんのよ」

佐天さん正直、ゾツとしましたよ初春？

ていうかあれだね、たぶん幻想郷に一ヶ月以上いたのが来てるね。

やっぱり！

まあなにはともあれこの調子ならわからないよね、成長も……。

さてさて、これも身から出た錆って奴かな？ なんか違う気もする

けど。

ともかくこの事件を解決しなきゃならないもんね。

事情はみんなで聞くけど……解決するのは私の役目だから。

38、そして、拳が語る

ファミレスを出てから、私たち四人は固法先輩の家を訪ねることにした。もちろん固法先輩の家を知っているのは白井さんのみで、寮に着いてからは御坂さんが戦闘で、固法先輩とそのお友達が住んでいる部屋のインターホンを鳴らす。

鳴らして、少しして出てきたのは知らない長い髪の女性。やっぱり固法先輩の友達ってだけあって……大きい、なにがとは言わないけど。

「はい、どちらさま?」

「ああ、あの……」

もしかして御坂さん、固法先輩が出てくるとしか思ってた?

……仕方ない、ここは佐天さんの出番ですかな!

「申し訳ございません、私固法先輩に良くして頂いている佐天涙子と言います。固法先輩はいらっしゃいますか?」

紅魔館で教えられたことを思い出して、ゆっくりと笑い、一礼する。

「あ、ああ! 美偉の後輩? ごめんね、今アイツでかけてるの」

「なるほど、では……黒妻綿流、ご存じですか?」

知っている可能性は無くはない。だからこそ私はそう聞いた。

「……上がって行って」

そう言われて、私は社交性たっぷりの笑顔で『はい』と答えて肩の力を抜く。こうなってしまうばこちらのものだ、必要以上に礼儀正しく必要はない、でもあくまでも無礼なことはいらないようにしないとね。

そう思い、後ろを見ると、三人ともびっくりした顔をしてた、なんぞ?

「佐天さん、何者ですか?」

「ええっ!」

私、そんな変ですか?

部屋に上げてもらいテーブルに着く私たち四人。

固法先輩の同居人こと柳迫碧美やなぎこあのみさんはどうやら事情を知っているようで、固法先輩の愚痴を零しながら私たちにお茶を用意してくれる。柳迫さんは背中を壁に預けて物思いにふける表情をしていた。そろそろ、話を始めるってことですか……。

「黒妻が戻ってきたのね?」

お茶を飲んでいた初春が驚いたのか咳き込むので、私は背中を軽く叩く。

「まさか、生きてたとはねえ」

「黒妻のことご存じなんですか!?!」

「まあまあ御坂さん、黒妻さんと固法先輩のことを聞くのが先じゃないですか?」

そう言つて御坂さんをなだめると、御坂さんはそつと椅子に座る。

「ちよつと待つて、その前にそつちの話を聞かせて?」

まあ、そうですね。とりあえず話すのは白井さんに任せることにした。この状況で一番達観していて尚且つことと次第を荒立てようとせずにいる白井さんは実に頼もしい。

そして話し出す白井さん、最近の『能力者狩り事件』の犯人を見てから少しおかしくなった固法先輩と、能力者狩り事件の犯人のアジトへと向かつていた時に黒妻に会ったこと……。

「そつか、通りでね……」

「あの、それで、固法先輩はどおして黒妻を知ってたんですか、ひよつとして前に黒妻を捕まえたことがあるとか?」

そうじゃない、固法先輩の様子を見ていればわかるけれど、あれはそう言う目じゃなかった。

「違う違う、美偉はね、昔ビッグスパイダーのメンバーだったの」

笑いながら言う柳迫さん、そつか、固法先輩は昔ビッグスパイダーのメンバーで……ああ、若干予想はしてたんだけど実際聞くと……。

『え〜!?!』

まあ、御坂さんと初春が驚くのもわかる。けどほんと白井さんったら今回ばかりはずいぶん大人しい、嵐の前の静けさとは大きく違うけど、なんだろう。本当に固法先輩とこの中で一番長い付き合いのせい

かな、わかってたって表情だ。

正直、心の中で驚いている私よりよっぽど落ちついてる。

初春と御坂さんが信じられないような表情で聞く。

「先輩はジャツジメントですよ!? それがどうして——」

「ああ見えて、昔はやんちゃだったのよ」

「やんちゃって!」

「人様の過去をどうこう言うつもりはありませんけれど、仮にも固法先輩はレベル3の能力者、寄り道ならいくらでもあったでしょうに」
確かにその通りだ、私や浜面さんのようにレベル0では無いんだからやりかたなんて山ほどある。

「なんでよりにもよって無……スキルアウトなんかと?」

いや、今『無能力者の集団』とか言おうとしたでしょ、そんなに気を遣わなくても良いのに。

「貴女には無い? 能力の壁にぶつかったこと、それが中々乗り越えられず、暗い気持ちを持て余したこと」

しよっちゆう、というより現在進行形ですよ。初春ったら心配した顔で私のこと見てるし。

「あの頃の美偉は、どこにいても居場所が無いって感じだった。そんな時……輝いて見える人たちと出会った……」

なるほど、それがビッグスパイダー……。

「スキルアウトって言っても、連中はただ気の置けない仲間たちと馬鹿やってただけ……そりゃ、最初は私も心配したわ。『わざわざ自分が、能力者だつてこと隠してまでいる場所なの?』って、でも……」
ビッグスパイダーは、私が私で居られる場所”美偉は、そう言ってたわ」

「居場所……か」

初春の方を見ると、初春は笑ってくれた。私の居場所も今じゃずいぶん増えた。初春の傍と幻想郷そのもの、この学園都市で居場所ができるってというのは、やっぱり嬉しいことだなんて思いますよ。

「疎外感、自分探し……学園都市に居ると必ずかかる麻疹みたいなものに、あの時の美偉も掛かってたのかも」

「でも麻疹に掛かるのは一度だけです」

「……お姉様」

はつきりと、御坂さんは言った。やっぱり固法先輩がもう一度“向こう”に行つてしまいそうなのが嫌なんだろうなと思う。まあ御坂さんにはわからないことだ。

これは別に馬鹿にするだとか嫉妬するだとかいう意味じゃなくて、御坂さんはレベル5である時代があまりにも長すぎた。いやレベル5になるのが早すぎたと言つた方が早いんだろうと思う。

確かに自分の限界を突破できるほどの“努力”をした御坂さんは凄いい、でも確実にその中に才能が皆無かと言つたらウソだ。才能が無ければ限界の突破なんてできるはずがないんだから、だからこそ御坂さんには……武装無能力集団スキャルアウトのことが、わかるはずが無いんだ……。

帰り際、私たちは道を歩いていった。柳迫さんからは『また来てね』なんて言われたけれど、行くことなんてあるかどうか……高校生の中に中学生とかさすがにレベル高すぎ。

あれ、でも幻想郷つて年上つてレベルじゃない人たちが大量に居た気がする。

まあ、どうでも良いけれど。

「わからない……」

御坂さんが立ち止つて、私たちもそれに合わせて立ち止まる。

「お姉様？」

「固法先輩がスキルアウトだったのもショックだけど、だからつてなんで風紀委員ジャッジメントを休んでるの？　なんか関係あるわけ？」

「ですからそれは」

「昔は昔じゃない！　今は先輩、風紀委員ジャッジメントとして頑張つてるわけじゃない？　私たちに優しくして、でもたまに厳しくて、頼りになって、そんな先輩が好きなのに、なのになんで今更ッ」

「割り切れませんよ、過去は簡単に割り切れない……」

私は、口を出すことにした。これ以上はさすがに御坂さんでもあまりにも残酷な物言いだ。

「過去の自分があつて今の自分がある。それにその過去が大事で特別で、取り戻したいとも心の中で思っているなら、割り切るなんて簡単にはできないし、割り切る必要なんてない……そして私たちの理想の固法先輩を押し付ける理由も、私たちにはないし……って」

「やば、なんか出過ぎたこと言い過ぎた。」

「やつぱり……やつぱりわかんないよ」

「そりゃ、わかりませんよ。私だって幻想郷での出来事があつたからこそ今の言葉が出てきたんだし……。」

「フランも妹紅だつてそうだつたはず、過去は簡単にはわりきれない。だからこそフランは外への憧れを抱いていて、だからこそ妹紅は蓬莱山輝夜との殺し合いをやめられなかった。過去は一生ついて回るものなんだもの……割り切ることは、難しい。」

その後、私はすぐに柳迫さんの元に戻つて固法先輩が出かけたことを聞いてすぐに第10学区へと走つた。ビッグスパイダーのアジトがある学区であり、柳迫先輩の話では固法先輩の思い出の場所。一時期は良く行つていたらしいその場所を見つけて、私はすぐにその廃ビルを上つて屋上へと上がる。

「ただどそこには、すでに御坂さんと固法先輩の二人がいた。」

「佐天さん!?!」

「なんで、ここに?..」

「し、心配したからに決まつてるでしょうっ! ハアツ、ハアツ……」

「とりあえず、まだ重要な話はしていかないようだった。」

「……固法先輩、明日の一斉摘発のこと、黒妻に知らせに来たんですか?..」

「一斉摘発、なるほど……急いで正解だつたつてわけだ。」

「ここは、固法先輩がいるところじゃないと思います!」

「反論もできないほど、正しい答えだった。でも人間の心はそういう風にはできていない。」

「そうね……ここは私の居場所じゃない、でもそれを私に教えてくれたのは黒妻なの……」

そりやそうだろうと思う、黒妻さんはそういう人だ。あの人は誰よりも仲間を大事にする人だって、出会って間もない私にもわかる。そして固法先輩は昔の話を始めた、ここで黒妻さんに『ここはお前の名前を刻む場所じゃないと思う』と教えられたこと、彼が偽黒妻を名乗る蛇谷を助けに行つたこと、罨に嵌つた黒妻さんが爆発に巻き込まれたこと、そして蛇谷も固法先輩もビッグスパイダーの仲間たちも悲しんだことも……。そうして黒妻さんは死んだと思われた。

「そして、今の私がいる」

「でも、だからって、先輩は風紀委員ジャッジメントじゃないですか！ それって——」

御坂さん、私はそれでも間違つてるって思つてないよ。

「ああ、間違つてるよな」

私たち三人が振り返ると、そこには黒妻さんが居た。

この人はそう言うと思つていた、だってこの人は今の固法さんを護ろうとしているから……。だからこそ黒妻さんはビッグスパイダーの名前がおおやけになる前に能力者狩りをしていたビッグスパイダーのメンバーを倒していたんだと、思う。

黒妻さんは話出す。死んだと思われた爆発事件の後、病院に居た黒妻さんは退院と共に施設に送られて出てきたのは半年前。

「この景色も、もう二度と見ることは無いと思つてただけだな。お前にも、合わない方が良いと思つてた……」

ここで口をはさむわけにもいかず、私は御坂さんと二人で固法先輩と黒妻さんを見ていることとする。

「会えばまた——」

「また、一人で乗り込むつもりですか、あの時みたいに」

「ビッグスパイダーを作ったのは俺だ、だから潰すのも俺……アンチスキルじゃない」

固法先輩が、黒妻さんの腕を掴む。

「行かないでっ、貴方はいつもそう！ 自分勝手に人を思いやって、自分勝手に行動して！ 貴方がそんなだから、私はっ——」

「お前だってそうじゃねえか、だからここに來てるんだろ？ じゃ、良

いからもう帰れ、ほら佐天たちもさつきから困ってるじゃねえか」
そりゃ困る、さすがにそんな二人の深い所まで話に突っ込む気は無
い。

「じゃあな、今いるところを大事にしるよ」

今、固法先輩が自分で居られる場所……。

「私も行きます。もう、あんな思いをしたくないんです」

「いい加減にしるよ美偉、昔と今じゃ違うだろう」

なんとなくだけれど、固法先輩と黒妻さんの関係は、私と上条さん
に似ている気がした。別に私は上条さんに恋心を抱いているわけ
も無いけれど、それでもなんとなくだけれど似てる気がした。

「昔とか今とか関係ありません！ 居場所が変わっても関係ありませ
ん！」

これは……きつと気持ちの問題だ。

それから黒妻さんはなにを言うわけでも無く、去っていく。

私たちもそれから何かを言うわけでもなく別れて自分たちの今の
居場所へと帰るしかない。

夜、食事をしながら私は考えてみる。

そしてすぐにこの前に教えてもらったメールアドレスにメールを
送ることにした。

私は、なにを言われようと今回は妥協する気は無い。

だからこそ私は私の全力をもって最高のハッピーエンドを目指す。

「ねえ涙子、これ食べないなら食べて良いのかな!？」

「ダメー！」

とりあえず今は私の部屋で大量に作った晩御飯をバクバクと食べ
ていきとうとう私の食事にも手を出そうとしているインデックスを
止めることにした。

うん、小萌先生ったらインデックスをずっと住まわせていられるな
んて尊敬します。食事代はともじやないけど持たないなと思うん
だよ私は……。

明日で、終わらせる……。頼んだよ、相棒……。

◇◇◇◇◇◇◇◇

その翌日、黒妻綿流はビッグスパイダーの拠点の一つに来ていた。前回涙子たちが居た拠点は今頃一斉摘発に会っていることだろうけれど、ここはまだ平気なようだった。

その拠点の門番をやっていた人間を殴り飛ばし、中に入ると奥に座っている蛇谷を睨む。

「やれえっ！」

蛇谷の言葉に、一斉に動き出すスキルアウトたちだが、誰も一発も黒妻綿流に攻撃を当てられないわけがない。だがそれでも増援こと味方はやってくるわけで、黒妻綿流の背後で「彼女」はスキルアウトを倒す。

全員がダウンした中で、黒妻が溜息をついて彼女を見る。

「佐天、お前なにしてんだよ。それになんでここがわかった？」

「まあまあ、無能力者として今回のことは無能力者か……ビッグスパイダーの中でつけてほしいんですよ、それと私にもスキルアウトの友達が居るので」

だからこそ、佐天涙子は黒妻綿流を味方する。多分一人で十分だとは思っていたけれど今出る必要があったのだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇

私は黒妻さんの隣で軽く手をスナップして手の動きを慣らす。

早く決めなきやだけど、それでもこれには役者が足りない。私は要らないかもしれないけれど、今回ばかりは私自身がこの事件に首を突っ込むと決めた、私が私の望むハッピーエンドのために、なんとしても今回は首を突っ込む。

「やめろ蛇谷、俺たちには勝てない」

「確かにあんたも、そのガキも強え、けどッ、そんなのは能力者と同じだ！ 数と武器には敵いつこねえんだ！」

「待ちなさい！」

ようやく来た……これで役者はそろったってわけだよね。黒妻先輩が驚いたように振り返る。

「美偉!？」

私も振り返るとそこには、赤い革ジャンを来た固法先輩がいた。なるほど、それが制服ですか、私も今ジャケット着てますけどそういう革ジャンも良いかも……。革ジャン佐天さん爆誕、胸熱だなあ。

なんて余裕を言っていると話の流れに置いて行かれそう。

「カツコいいじゃねえか」

「カツコいいじゃないですか」

私と黒妻さんが同じことを言うけれど、今まで私と黒妻さんが見ていた固法先輩は違う。黒妻さんは今初めて風紀委員ジャッジメントとしての固法先輩を見て、私は初めてビッグスパイダーとしての固法先輩を見た。

その顔に笑みを浮かべる固法先輩、私と黒妻さんも同じだ。

「こ、固法さん!？」

「蛇谷君、貴方ずいぶん下種な男に成り下がったわね。数に物を言わせて、そのうえ武器？」

「ツ……うるせえ！俺たちを裏切って風紀委員ジャッジメントなんかになった奴になにがわかるツ!! お前ら、こいつらに俺たちの力を見せてやれ！」

蛇谷の叫びと共に、手下たちが銃を構えるけれど、拳銃すべてに見覚えのある金属矢が刺さる。

……来るよね、そりゃ。

「今度は、直接体内にお見舞いしましょうか？」

さすが、強すぎですよ白井さん。

「だ、だが俺たちにはアレが!」

「アレってどれでしょうね?」

私が笑って言うのと、一緒に来た御坂さんが溜息をつく。

「あの機械に刺さった金属バットって佐天さん?」

「そりゃ私の相棒ですから」

「片目なんだから無理しないでくださいまし!」

眼帯装備の私、というより私が眼帯つけてるの忘れてませんよね？

誰がとは言いませんが……。

「固法先輩の邪魔になると思つたもので」

「あの佐天さん、私たちは？」

「関係の無い人たちは今回、手は出さないでいただきます。今回ばかりは手を出したらたたとえ御坂さんだろうと本当に怒りますからね？」

私が満面の笑みで言うのと、御坂さんは眼を逸らして頷く。

「や、やれえっ！ やっちまえー！」

「固法先輩、これって『風紀委員への協力』にあたりますよね？」

「……フツツ、そうね協力にあたるわね」

「よし、暴れますよ黒妻さん！」

私を見て笑う黒妻さん。これで下準備は完了だ。

「ハハツ、良いぜ佐天、無能力者のケツは！」

「無能力者が拭う！」

「じゃあ美偉、ビッグスパイダーのツケは！」

「ビッグスパイダーが払う！」

私と黒妻さんがまず走り出す。とりあえず、ナイフを突き出す人の腕を取ると同時に身をかがめて背中を向けたままその人の懐に入り、地を蹴ると同時に背中でのその体に衝撃を与える。

美鈴さん直伝の『鉄山靠』^{てつざんこう} って奴、そしてその人を離して、新たに殴りかかってくる相手の攻撃を避けて片足を軽く上げ、すぐに踏み込むと同時にその腹部に肘打ち。

いや、肘打ちと言っても八極拳の『頂肘』^{ていしゆう} と言った方が正しいかも、腕を上曲げるわけだしね。

わざわざナイフも使わずって戦い方、久しぶりだ。

「この、くそがきっ！」

拳銃を私に向けるけれど、この距離なら素人が撃つより私の方が早い。地面を蹴って前に跳ねながら真っ直ぐ拳をその体に突き立てる。またまた美鈴さん直伝の『箭疾歩』^{せんしっぽ} だ。

さすがに鳩尾に入れば、体をくの字に曲げて倒れる。

美鈴さんに習った、といつてもどちらかという食らって覚えたのばっかだからあまり完璧な型でも無ければそんなに詳しくわかるわ

けでもないし、正直純粹な拳で戦うのならば、我流が一番だ。
私もずいぶん世紀末な思考になったなあ。

「よつとー!」

すぐに殴りかかってきた相手の拳を避けて、その胸に掌底を撃つ。
倒れ込んだ相手を見ずにすぐに次の相手を蹴り倒すと、黒妻さんと固
法さんもだいぶ倒したみたいで、仲睦まじい二人を見て私は若干なが
らもこの

戦いに参加したことを後悔しかけた……それでも私自身が作戦に
は必要不可欠だった。

最後に残ったのは、蛇谷。

「さて、どうするよ?」

「へ、へへ……これで勝ったつもりかよ……これを見ろオツ!」

蛇谷が革ジャンを開いて見せてきたのは……ッ。

「ダイナマイト!? い、いつの時代の方ですの!?!」

白井さん、なんか、違う。

「これ以上近づいてみる! みんなドカーンだつ!」

確かに白井さんが言いたいこともわかる気がするよ。蛇谷はライ
ターを片手に笑うけど、その顔には汗が流れる。白井さんは今すぐに
でも止めようとするけど御坂さんがそれを制してくれた。

——少しわかってくれたのかな?

黒妻さんが蛇谷に近づいていく。

「ど、どうしたつ、ビビったか!」

「あああ、めんどくせえ」

黒妻さんは革ジャンを脱いだ。……大きな蜘蛛の、入れ墨。

「く、来るなよ! ダイナマイトだぞ!」

「蛇谷、昔は楽しかったよなあ……」

歩き出す黒妻さん。

「来るな、来るなつて!」

「みんなでつるんで、バカやって……それがどうしちまった?」

「く、くる、な……」

立ち止る黒妻さんが、即座に拳を蛇谷の腹部に打ち付ける。叫びと

共に、すさまじい衝撃と共に、蛇谷の腹についたダイナマイトがバラバラと落ちた。

自分を殺すだけの度胸は、たぶん蛇谷には無かった。

「どうしちまったよ、蛇谷……」

地面に膝をつく蛇谷に、黒妻さんは何をしてもない。

「しよ、しようがなかった……俺たちの居場所はここしかねえっ！

ビッグスパイダーをまとめるにはっ、黒妻が必要だったんだッ！」

胸ポケットに腕を入れようとしている蛇谷を見て、私は叫ばずにはいられなかった。

「やめろ蛇谷いっ！」

「ッ……!?!」

「ダメ、それをやったら……ダメだよ」

私の声が聞こえているのか、届いているのか……蛇谷は胸ポケットから出した大きなナイフを放り投げて立ち上がる。

そして蛇谷が拳を構えるのに合わせて、黒妻さんも拳を構えた。

「あんたが、あんたが俺なんかを助けるからあッ!!」

「仲間助けるのは当然だろうが蛇谷いッ!!」

お互いの拳が、お互いの頬にぶつかる。けれど蛇谷は吹き飛ばされて地面に倒れる。

「蛇谷、居場所っていうのは、自分が自分で居られる場所を言うんだよ……」

倒れている蛇谷が、腕で顔を覆って嗚咽を上げながらすすり泣くまで……時間は掛からなかった。

それからアンチスキルが来て、ビッグスパイダーのメンバーが次々と護送車へと入れられていく。蛇谷も、もちろん連れて行かれたけれど、今度は自分の居場所を自分の力で見つけるか作るかするだろうと思う。

だって、あそこで止まれたんだもんね……やりなおすことだってできるし、黒妻さんとだって一緒にやっていける。

そしてアンチスキルがビッグスパイダーのメンバーを捕まえてい

る間に、黒妻さんと固法さんが話をしていて私と御坂さんと白井さんはそれを見守る……さすがにあそこに出張ることはできない。

「そーいや佐天」

「と思ったら巻き込まれた!？」

「お前やってくれたな、これで俺は協力者って立場になったから最後のは御咎めなしじゃねえか」

「黒妻さんは何も悪いことやってないんですから、当然ですよ」

「ありがとう佐天さん、貴女のおかげで先輩もすぐ出てこられるでしょうし」

そう、私の目的はこれだ。協力者が二人いたということになれば、アンチスキルと言えどあまり強くも言えないだろうとは思う、まあ今回以外のバレてる事件は暴行容疑だろうけれど一応人助けだし長いこと施設に入れられることもないはず……。

ついでに私がジャケットにナイフを入れてこなかった理由もアンチスキルにバレればさすがに不味いからだ。

でも暴行傷害の容疑すべては拭えない。だからこそ一度は手錠をかけなきゃならない。

「ほら美偉、やれ」

「……黒妻綿流、貴方を暴行傷害の容疑で逮捕します」

手錠をかけられた黒妻さんは、笑う。

「似合ってるぜ」

「ん、ああ……」

「でもよ、その革ジャン……さすがに胸キツくないか？」

固法先輩が顔を赤らめる。

「そりゃあ、まあ毎日あれ飲んでましたから!」

「ん、ああ」

二人して笑う。

『やっぱり牛乳は、ムサシノ牛乳!』

二人の声が重なり、そして二人が楽しそうに笑った。

それってあれですよねえ、ムサシノ牛乳のCMの奴。

私が少し下がると、隣の御坂さんと白井さんが不思議そうにする。

「やっぱり胸のことを話しても」

「不思議といやらしくない」

「ああ、確かにね」

三人同時に頷く。

「そう言えば佐天さんはムサシノ牛乳飲んでますの？」

「え、はいもちろんですよ」

「ああ、やっぱり」

「なんですか御坂さんに白井さん、私の胸見ないで下さいよ。まったく……。」

「おおい、佐天ちゃん？」

「げっ、黄泉川先生!？」

「げっ、はないんじゃないか？」

私の肩に手を回してくる黄泉川先生に、正直逃げたい気持ちで一杯です。

「さすがにここまで関わる事件が多いとなあ、ジャツジメント風紀委員でも能力者でも無いのに…….」ということで少し時間もらうじゃん？」

「ちよ、ちよつと待って下さいよ黄泉川先生！」

「黒妻と一緒に少し車で話を聞くんじゃん！」

ちよつ、待って！ ふ——不幸だあッ！

39、異変へイベント

黄泉川先生の聴取と言う名のお説教を終え、私こと佐天涙子は現在一度家に帰ることにした。金属バットこと私の相棒を布で包んで家まで持って帰り、玄関に置いて部屋に入る。

いやあ、それにしても疲れた。一日の始まりにあんな乱闘とは疲労困憊って感じだし……ああ、意図せずまた初春だけ置いてきちやっとなあ。

これでも結構落ち込む、まあ自業自得なんだけど。

とりあえず私は布団でも干そうかと窓を開いてベランダを見た瞬間、私は固まった。

「な、なんで……!」

ベランダに、引つかかっていたのは……人だ。

「人、いやこれ……!」

「なにを見ているのかしら?」

「ゆ、紫さんツ!!」

正直、目が飛び出るほど驚くことってあるんですね。飛び出なかったけど……。

まず私の目と違って「飛べるはず」の紫さんをベランダから引き上げて家に入れると、勝手にテーブルの前に座ったのでまあいいやと思いつながら私は紫さんの正面に座る。なんだか前に会った時と比べるとずいぶん冷たいっていうか敵対心の宿った目で私を見るんですね、はい。

どういふことかな……。

「そ、そう言えば前回の異変のですけど」

「春雪異変の時、貴女はいなかったでしょう?」

「……そうですね」

一瞬で事態を理解できた私を、私は褒めてあげたいと思う。でも幻想郷と学園都市を行き来している私にはわかった、確実に時間の流れがおかしいと思った。前回は今回も変わらずか数時間のことになっけど、

それとも少し違う気がする。この紫さんは確実に永夜異変が起きるより過去から来ていた。

だからこそ、永夜異変の時に紫さんは私にフレンドリーだったと考えるのが正解なの、かな？

それにしてもこの紫さんは余裕が無い気がする……。いや、実際無いか、今まで見てきた紫さんは常になんらかの余裕を持っていた、はずだ。

「どうして学園都市に来たんですか？」

「……あら、なんでだと思おう？ まあ貴女に答えることはないけれど」

「まあ、そうですね」
そう言っただけで、冷たい紫さんは立ち上がって玄関へと歩いていく。

「ベランダから引き上げてくれたことは感謝するけれど、それだけよ」
冷たく言うと、紫さんは部屋から出ていく。なんか勘違いされてるのかな、やっぱりさ……。どうにかできないかなあ、でも永夜異変で紫さんがフレンドリーだったことは仲良くなれるのかな？

いや、でもタイムパラドックスって言葉があるんだから、同じように私が下手なことをすれば永夜異変の時みたいにフレンドリーにはならず、嫌われっぱなしの可能性も捨てきれない。どうすれば、良い？

「ああもうわかんないなあ、ていうか幻想郷からこっちに来たら飛べないのかな……。というよりこっちじゃ弾幕も出せないんだけど、それに関しては紫さんぐらいになると出せたりする？ ああもう、わけわかんないなあ」

まあ、いざとなったら紫さんはどうにかこうにかして帰るだろう……。ん、本当帰ることはできるの？

私は一度も自分の意志でこちらに来たことがない、同様に紫さんも自分の意志で来れなかったとしたらやはり内心では結構焦っていたりするはずだ。どうにもおかしなことばかりだ……。

もう、なにがなんだか！

「とりあえず、出かけようやっぱり！」

もやもやする心を振り払うために出かけることにした。

とりあえず家を出てから初春と待ち合わせでもしようかと思っただけで能力者狩り事件が終わったと言っても忙しいらしく遊ぶことはできないって言われた。じゃあ誰と暇つぶしをするか、姉御さんや重福さんでも誘おうかな……。

なんてことを思ってから少しばかり、紫さんが心配になった。

巫女さんとか平然と歩いている学園都市だけれど、あの服装はありなのだろうか？ というか幻想郷に帰るならあの場で例のスキマを開いて帰れたはずだ。

「ああもうー！」

気になってしまったものはしようがないと思うんだけど、やっぱり私って不幸を呼ぶ性格してるのかなあ。

はあ、私の家からまだそんなに離れていないはずだから……。

路地裏を通っていくと案外、すぐに紫さんは見つけられた。

「貴方たちやめておきなさい」

「ひゅー！ コスプレブロンド！」

「はははっ、能力者だろうが、こいつを食らいな！」

どこからか聞こえる甲高い音、これは確か能力者に効くっていう奴だけれど、紫さんに効くはずもない。ヤバイヤバイヤバイ、早く早く早く！

男が手を振り上げた瞬間、私は地を蹴って跳ぶと、紫さんに手を出そうとしている男を蹴り飛ばして着地する。少し驚いた表情をしている紫さんと、めちやめちや驚いているスキルアウトのみなさん。

たとえ弾幕が出せなからうが、妖怪の力ならスキルアウトのみなさんは見事に死にかねない。

「私もこの人もレベル0なんで早々にお引き取り願います！」

私は私の顔は見えないけれど、多分相当切羽詰まった必死な形相で言っているに違いない。

だけれどそんな私の提案を、仲間を蹴り飛ばされたスキルアウトの人が聞いてくれるはずもなく、腕を振り上げて私を殴りかかろうとする。腕を振り上げるなんて素人かっつての。

「関係ねえよ！」

「私にあるんだっての！」

軽く体を回転させて、その勢いのままスキルアウトの人の顔側面を蹴って地に伏せさせる。左目が見えないのも随分慣れたなあ、なんて思いながら残り人数を確認——あと三人。

「こんの野郎！」

「野郎じゃないって見てわかるでしょうがっ！」

走りかかってくる男の人。私は背後に跳んで背後の壁を蹴るって宙に舞うと、ジャケットからバタフライナイフを二本取り出して展開させると投げる。掠るナイフだけれど幻想郷からセットで帰ってきたものだから魔法の力が残ってるのか痛みと服が切れるだけで実際の怪我は無い。

非常に便利、公の場で使うと色々と問題になるから出せないけど。倒れる男の人を確認して、私はバタフライナイフをすぐに拾うとジャケットの中に入れ、サバイバルナイフを逆手で持って構える。

「まだ、やりますか？」

「わ、悪かった……か、帰るぞ！」

そう言うと、男の人はしつかりと倒れている男の人を拾って戻っていった。ついでにあの音が鳴る元を断っておきたいところだけれど今現在はそんな状況じゃなく、私はすぐに紫さんの方を向いてサバイバルナイフをジャケットの中にしてしまう。

紫さんは相変わらずコスプレかと疑われそうな服装でいるけれど……とりあえず私を睨むのをやめてほしい。

「あのですね紫さん、とりあえず幻想郷に戻れるかだけ聞かせてくれませんか？」

私はできるだけ、当たり障りないように聞く。そうすると紫さんは幻想郷に居た時のような余裕のある表情では無く、ものすごい警戒している様子で私を見る。

「……今は、戻らないわ」

戻れないじゃなくて、戻らないですか……はいはい、ならそれで良いですよ。

「じゃあとりあえず、佐天さんの家でも来ませんか……なんて」
紫さんは、コクリと頷いた。結局戻る。

まあどういうわけか、この余裕の無い紫さんは一体どうしたって言うんだろう。

なんか私にとっては凄いコレジャナイ感が……でもこの様子だと「妖怪賢者」にすら予想外の事態に今現在陥っていると考えても良いんだろうと思った。それにしても結局連れて帰ってきてしまったけれど、この状態じゃ八方塞がりだ。

なんてことを考えていたら、先に口を開いたのは紫さんだった。

「佐天涙子」

テールを挟んで正面にいる紫さんが私を見る。

「前に会った時はチルノの手前だからあまり言わなかったけれど、貴女はアレイスター・クロウリーのスパイでは無いかしら？」

「……あれいすたー？」

なにそれ、新しい星の名前？ 軌道エレベーターがなんか発見した

？

「では、ローラースチュアートとは？」

「もう知らないことばかりなんですけれど……」

「現在の幻想郷の状況は貴女となんら関係無いと考えて良いのかしら？」

そう言って立ち上がる紫さん、私も紫さんをなだめるために立ち上がる。

「いやいや落ち着いてくださいよ、私は幻想郷のことはなににも——
——ッ!？」

私の腕が紫さんの腕に掴まれたと思った瞬間景色がグルッと周り、背中に痛みが奔った。そしてすぐに私の上には紫さんが乗り、首を掴まれる。力はまだ籠っていないから苦しきはないけれど、正直圧倒的な能力の差を感じた。いや、不意打ちでなければ直撃も無かったかもしれないけれど、さすがに齢数万年クラスの大妖怪としか言いようがない。

「本当のことを言いなさい、幻想郷にここ数年近く誰も来ることも出ることもできなかつたにも関わらず貴女だけが来れた……それを偶然と言いたい張るつもり？」

「ちよ、それと私になんの関係が？」

「関係が無いと、なんでもない『学生』がただ偶然、幻想入りしたとでも言うつもり？ そりや普段なら気にも留めなかつたかもしれないけれど、アイツらが関わっているかもしれない幻想郷の隔離状態で、貴女だけが幻想入りできるっていうのはおかしいんじゃないかしら？」

「知らん、そんなものは私の管轄外だ。と佐天さんは言いたいところですけど？」

私の首を掴む手に、少しばかり力が加わる。

「なるほど、さすが大妖怪ですね」

「軽口を叩いている余裕がまだあるのね」

「いえ、焦っていますよこれでも……殺されたくありませんし」

本気で一応言っているのだけれど、軽口っぽくなるのは私があまり情けない部分を表に出したくないだけだ。レベル0にだってプライドぐらいある。

「……ずいぶん強くなっているようだけれど、妖怪に勝つなんてことを考えないことね」

「わかってますよ。でも私本当に何もッ……あッ……」

首を掴む手に力が込められ、私の呼吸を困難にする。

「幻想郷に、なにをしようと言うの？」

「ぐっ……うッ……！」

締め上げられる首。私は首をしめる紫さんの腕を掴むけれど、こうなってしまうては力を込めることもできずに、あとは死ぬのを待つだけになってしまう。

「ふっ……けほっ！ ぐほっ！ はあっ……はあっ……」

「深呼吸をして肺に空気を送り込む。」

「死ぬかと思つた！」

死ぬかと思つた！

「貴女が言わないなら……どうしようもないわ、殺すのも面倒なことになるし」

「げほっ、ほんと勘弁してくださいよ、知らないんだから」

「信じるか信じないかはこれから決めるわ」

前に会った時は、もうちよつとだけ友好的だったんだけどなあ。

「そもそも私が落ちた場所が貴女の家のレストランだっていうのもなにか腑に落ちないのよね」

「そんなこと言われたってしょうがないじゃないですか」

「まあいずれわかるわね」

少し、余裕が出てきたって考えて良いのかな？　なんだかさつきよりも紫さんの態度が柔らかい。

「いざなにか問題が起きたら全部佐天涙子のせいにするから」

「それはちよつと勘弁してほしいですね」

「それが嫌なら……食事を用意するのね」

……つまり、食事が欲しいと？　お腹が減っていると？　なるほど、なるほど！

では、とりあえずそろそろ買い物に行きたいのでついでに外食でもしましょうか、なあって思う佐天さんだけれどここで問題が一つ浮上するわけですよ。

「その、服はどうしましょうか？」

「このままでも 私は」構わないわ」

コスプレで出歩くのはあまりにも目立つわけで、この前すれ違った巫女さんしかり人の目を集めるのは確かだろうし、だからこそできればこの姿の紫さんとはなるべく歩きたくないわけで、そうなる私を選択肢は一つしかない。

今月はあんまりお金使っていないし余裕もある。あるけれども……。

「わかりました、買いに行きましょうー！」

私はお財布との相談をした結果、了承することにした。

まあ、この服装のまま服屋まで行って色々を整えよう。この際コスプレと一緒に居ると思われようと構いやしない、幻想郷に戻るまでの間ぐらい私がかししよう！　後々に仲良くなるためにこのぐ

らいなんでもない、うん！

私は紫さんに提案をして共に服やへと行くことになった。

結果、紫さんってすごい。スタイルすごい。羨ましくないとさえ
ば完全に嘘になりますよ。

下着も服も三着づつほどと靴を買って私の財布は寂しくなって、挙
句に敗北感までガツツリと与えられた。ああ、不幸……か？

最初の服装で服屋に行くまでと行った時はすごい視線が痛かった
けれども今はそうでもなくなっている。だけれど視線が集まるのは
当然、紫さんがあまりにも様になっているからだろう。

白いタートルネックのノースリーブシャツに、ロングスカート、
ブーツにとそれだけ見れば普通なのだが紫さんが着るだけでだいぶ
違う。金色の髪はただでさえ目立つのにさらに綺麗な顔立ちをして
る。

「さて、どうするのこれから？」

私は残りの服と先ほど着ていた服の入った紙袋を持ってここらで
良さげな店を考えてみた。そして考えられる店はやっぱりファミレ
スだろうと思ひ紫さんを連れてファミレスへと入って二人と言って
から席に着く。

荷物を隣の席に置いて深い溜息をつく、私はすぐに紫さんの方を
見てみる。

「へえ、少し来ない間においしそうなもの沢山増えてるわね！」

なんだか、普通に楽しそうだし、大人っぽい雰囲気してる紫さん
のこういう姿は少しびっくり。私は適当に日替わりメニューかなん
かにしとこうかなあ、なんて思っていたら店員さんが御冷とおしぼり
を持ってきてくれて……。

「メニューお決まりでしたらお伺いします」

「とりあえずドリンクバー二つと日替わり一つで……紫さんどうしま
す？」

「名前で呼ばないで」

そう言われて私は少しばかり沈黙する。自分で呼べって言ったの

に……ほら店員さんも苦笑いしてるし。

「……八雲さんはどうします?」

「私はこのチーズinハンバーグセットにするわ」

「かしこまりました、ドリンクバーのグラスの方あちらへございますので」

まったく、なんで私にこんなに厳しいのかなあ、まあ理由を聞けば納得しなくてもないけど、やっぱり免罪なのでそんなに厳しくしなくてもねえ。そう言えばドリンクバー知らないよね、紫さんは……。

ということでもドリンクバーまでご案内、荷物はとりあえず置いて行っても平気だよね、近いし。

「じゃあ八雲さん、ドリンクバー取りに行きましようか」

「ん?」

キョトン、という様子で私の方を見る紫さん……可愛いじゃないですか。

「お店なのに取りに行かせるの?」

「飲み放題なので、代わりに取りに行けっただけです」

「飲み放題……少し良いわね」

あんまり飲むと水っ腹になりますけどね。と言う言葉をなんとか飲み込んで二人で取りに行くことにした。先に私が氷を入れてから飲み物を入れると、紫さんは興味津々という様子で飲み物を見て、私と同じようにボタンを押すが出てきた瞬間、ビクツとなり一度止まる。

いやいや、幻想郷の方が不思議一杯ですから。

「い、今のは科学側の進歩に少し感心しただけよ」

うわあ、可愛い。

私と紫さんは席に戻って飲み物を飲みながらメニューが来るのを待つ。お昼御飯はここで片すにしても、晩御飯は買わなきゃならないだろうし……一度帰って買いに行った方が良いのかと思わないでもないんだよね。幻想郷にもいつになったら帰れるかわらないしねえ。

まずは、こっち側の常識を教えるべきでしょう。

「じゃあ帰りに晩御飯買いに行きましようか」

「あら佐天、まだお昼御飯なのに晩御飯の話とは、太りましてよ？」
「ゆか、八雲さんのためなんですからそんなこと言わないでください」
「……信用ならないわね」
もう……不幸だ！

食事を終えたその後、少しばかりファミレスに残ってから、また服とかアクセを見て、最後にスーパーによって買い物をして帰った。

例にもれず紫さんが少しばかりキョロキョロと面白そうにしていたけれど、確か数年間幻想郷からこつちにも来れないって言ってたからそれまではこつちに來てたりもしてたんだろうけれど、数年つていうのは世間を変えるのは十分すぎる。だからきつと目新しい物が多くて楽しいんだろう。

ほんと、私知ってる紫さんとはあまりにも違う。

「あ、歩き疲れたわ……」

だいぶ歩きましたもんね、というより大妖怪こと紫さんが疲れるとは意外。

「あつ、歳ですか？」

「殺すわよ？」

「ごめんなさい。」

「普段飛んではかりだから仕方ないわ」

それは仕方なくないような気がします、まあ普段からしつかり運動しとくにこしたことはありませんよってことですかね、私は買ってきた食材を冷蔵庫に入れていく。一方紫さんと言えば冷蔵庫はなんら珍しくも無いからか、特に気にするでもなく居間に行ってしまった。

私も居間へと行くと……テレビ見てるし。

「ずいぶん綺麗に映るようになってるのね、今のテレビって」

「そうですね、ゆ……八雲さんが楽しいかどうかはわかりませんが」

「まあね、でもテレビってこう見てるだけで楽しいものよ」

テレビが無い生活をしているとそういう風に思えますか、とりあえず私は晩御飯を作ることにした。

何を作るか考えた結果、紫さんの普段食べてそうなものにしようと思いい、刺身をすることにした。焼き魚よりは夏っぽいし……色々買ってきたからそれを薄く切らないとね。

正直魚丸々一匹解体も可能だけど……紅魔館で取った杵柄、使う機会ない気がするけど。

晩御飯を作って、私はテレビをずっと見ている紫さんの前に食事を用意する。

大皿に盛った刺身を真ん中に置いて、御飯と小皿とお客様用の箸を置いて醤油とわさびを持ってくると、ようやく一休みできるようになり紫さんの向かいでなく、四角いテーブルで言う隣の辺に座る。

そして紫さんは私が持ってきた食事を見てから、私を見た。

「……毒とか入れても無駄よ？」

「はあ、入れませんよ。いただきます」

私を警戒しているのかしていないのか、なんだか思ってたよりも可愛い人のようだ。

先に毒見でもして差し上げましょうか！

「ん、おいし」

私は食事を始めることにした。紫さんは私を見てから両手を合わせて『いただきます』と言って食事を始めた、なんだ妙に可愛いぞ。小悪魔さんほどじゃないけど。

まあその後も妙に素直だったりそうでも無かったりする紫さん。お風呂にも入って私は布団を敷いて床で寝る。もちろん紫さんがベッドだけれど別にそこに文句を言うつもりはないし、正直これに關してはどっちでも良い。紫さんは『寝込みを襲うなんてことをしても無駄よ』と言っていたけどその手の趣味もないし安心してほしい所である。

まあ結局、平和と言えるだろう一日が終わって『翌朝、目が覚めたら全部夢でした！』なんてオチが用意されていたとしたら私の財布と紫さんのにもハッピーなのだけれど、それは初っ端から微塵も無いと言うことを思わされる。

ゆさゆさと体を揺らされる感覚に、私は眼を覚ます。

「ん？」

真上を向いて寝ているはずの私なのだけれど、部屋が明るいだけでなく、私の視界に映るのは電気ではない。そこにはドえらい美人が居た、もちろん紫さん。

「お腹が減ったわ」

おおう、どこぞのシスターを思い出しましたよ紫さん。

うん、不幸じゃ……ない？ いや、不幸だ？

正直、どっちでも良い。けどドタバタした日常は勘弁ください。

40、トラブル・マイライフ

朝っぱらから、私は美人のために御飯を作ると言う大役を仰せつかって……つてなんだろうこのテンション、朝だから？

ともかく、私こと佐天涙子は現在同居人こと八雲紫さんに朝さつそく起こされて、朝食を作って食べて、食べ終える。今その段階だ。

今日はやることもないから、あとはどうするかなあ。

テレビを見ながら、お茶を飲む私と紫さん。紫さんは昨日買った部屋着、タンクトップのシャツとハーフパンツだけ、私が男だったら垂涎ものですよ。

「ああ、そう言えば八雲さん」

「なにかしら？」

「……あく、いや、なんでもありません」

——ローラーレスチユアートって名前を聞かれたことを思い出して、ついでに言うところローラーレスチユアートとて言う名前にも聞き覚えがあったんだけどそれを言うときまた「不幸」なことになりそうなので、言わなくてもいいや。

紫さんはジト目で私を見てくるけど、完全に怪しんでるんだろうと思います。ハイ。

まあ私が幻想郷の異変の犯人っていう証拠があっても、犯人じゃないって証拠が無いんだから仕方ないよねえ。

「ところでちょっと疑問なんですけど、吸血鬼や妖怪ってこっちの世界じゃどういう扱いなんです？」

私がふと、気になることを聞いてみた。すると紫さんは私を一目見てから少し考えるそぶりをしてから話し出す。

「こっちの世界がどうかは興味も無いから調べもしないけれど、私が知っている『あの男』なら間違いなく私たちの存在を無いものとして扱っているでしょうから……たぶん若い魔術師たちにとってはお伽話やらの世界の生き物の話よ。だからこそ、貴女その左目と左腕はどこぞの計画にとつてもイレギュラーだったりするんじゃないかしら？」

そこまで話して、紫さんは止まり私の方を先ほどと違う顔で見る。私は正直「あの男」と言うのが誰かもわからないまま話を聞いていたけれど、紫さんは何に引つかかったのか私を良くわからない目で見ている。

どうしたんだらう？

「解せないわね、貴女が——」

紫さんが何かを言おうとした時に、インターホンが鳴った。

私はすぐに立ち上がって玄関へと向かいドアを開ける。

「どなたで——」

「佐天さん、私ですよ」

「どしたの初春？」

メールも電話も無しに家に来るとは珍しいと、正直驚いた。

「電話はしたんですよ？」

「あれ、ごめん気づかなかったや」

「こんにちは佐天さん」

「ごきげんよう」

そして初春の後ろに出てくる御坂さんと白井さん、これはこれは大所帯でも……じゃなくて！

この状況は不味いんじゃないだろうか、私は内心で少しばかり焦っている。

ただでさえ最近はお白井さんから『たらし』だのなんだのと言われてるんだから、これで私の家にあんな恰好した女の人がいたらこれはこれは不味いことになるんじゃないでしょうか？

「どうしました佐天さん？」

「いや、そのね……ちよっと待っていてくれる？」

「はい、構いませんけど」

私はすぐにドアを閉めて居間へと向かい、紫さんの方を見る。

「出かけてきます」

「ええ、そう……」

怪しんでるなあ、いや怪しまれるか、そりやそうだよな。

やっぱ紫さんは私にこのまま気を許すわけには行かないんだらう

などは思う。状況証拠つてもものがあるし、私が紫さんの警戒するほどの相手の手下だったらそう簡単に手の内を見せるとも思えないだろうし、やっぱり怪しまれるのは当然か……よし！

「八雲さん、一緒に行きましよう」

「は？ 何考えてるのよ」

「ただ私と八雲さんはあくまで親戚、ということなら……」

私の提案に、少しばかり考えるような顔をする紫さん。

「わかったわ、つまり私は貴女の親戚をやれと言うことね」

「はい、監視ついでにこの学園都市のことを調べられればいいんじゃないですか？」

「……そうね、わかったわ」

紫さんは立ち上がると、テレビを消して着替えを始めた。同性の前だから気にしないのはわかります、わかりますけど……さすがにその凶悪ボディを見せつけられる私の身にもなってください。

着替えを終えた紫さんが準備完了という状態で、ブロンドの髪を軽く払う。親戚で通じるかなあ？

とりあえず私は紫さんを連れて家を出る。

「お待たせしましたー」

私と、その後ろから紫さんが出てくると三人が同時に『うおう！』と声を上げる。

「こちら、私の遠い親戚の八雲紫さんです」

「しばらくこの子の家に泊まることになったのだけれど、よろしくね」

そう言う紫さんだけれど、私の友達と言うこともあって少しだけ警戒気味だ。私ほどじゃない、あまり怪しんでいないようにも思える。

「よろしくお願ひしますの」

「よ、よろしくお願ひします」

「よろしく……お願ひします」

白井さん、初春、御坂さんの三人が挨拶を返すと、紫さんは笑顔を浮かべて頷く。私の対応とは大違いじゃないですか、やだー！

まあ仕方ない……けど、紫さんともう少し仲良くしたいな、なんて思うわけですよ佐天さんも。

「で、今日は学園都市をもつと案内したいんですけど、三人なら私より色々知ってそうじゃないですか？」

裏道なら負けませんが。

「ああ、じゃあ今日は八雲さんに学園都市を案内するってわけね」

御坂さんがそう言うので私は頷いた。

「よし、なら行くわよ！」

「もうお姉様だったら、そんなにハシヤイで……」

「じゃあ行きましようか佐天さん、八雲さん！」

三人がこんな感じでほんと助かったよ。

私は家の鍵を閉めてから、御坂さんを先頭に白井さん、初春、紫さんと並ぶ最後尾を付いていく。

基本四人なのに珍しく五人になっている私たち、少しばかりいつもと違う、変わった日が楽しめそうでわくわくしてくる半分、怖さ半分。

「そう言えば八雲さんっていくつなんですか？」

「17歳よ」

——!?

八雲紫さんじゆうななさいの変、私の中でそう名づけられた事案は呆気なく片付いてしまった。案外信じられるらしい、御坂さんにはとても同い年だと思えない知り合いがいるらしい。白井さんと初春は^{ジャッジメント}風紀委員の事件でずいぶん老け……げふんげふん、大人っぽい学生を見るらしいし。

ていうか今思えば小萌先生も大概だよ、実年齢いくつよ。……いや、逆に怖いから聞くのはやめよう。

「へえ成層圏外までエレベーターね」

「はい、エンデュミオンって言うんですけど、学園都市じゃないと絶対作れないとまで言われた速度でできたんです！」

今は紫さんと初春が話をしているけれど、軌道エレベーターの話をしている。好きだよねえ初春はこの手の話、やっぱり科学側としては正しいよね……私は魔術側なのかな？ いやでも、科学側とも言えるはず……私はどっち側に扱われるんだろう。

そもそも紫さんがどっち側かも私にはわからないし……。
そんな時、白井さんがふと口に出す。

「そう言えば、八雲さんはどちらからこちらに？」

「……長野よ」

あれ悩んだな、たぶん……。

私は紫さんの隣に行つて軽く顔を寄せて聞いてみる。

「なんで長野なんですか？」

「……海が無いから」

おお、もしかして海嫌い……？

とりあえず、私たちはいつものファミレスに入ることになり、五人で座る。もちろん私は紫さんの隣で、私の隣に初春。紫さんの隣はさらに御坂さんが座りその隣に白井さん。

一人増えるだけでずいぶん新鮮な感じがする。まあ誰も嫌な顔をしていないあたり本当に嬉しいね。みんな優しい。

ドリンクバーを頼むと初春と白井さんが飲み物を組みに行つてくれ、残つたのは御坂さんと紫さんと私。

「そう言えば、能力レベルっていうの、貴方たちはいくつなの？」

紫さんは興味本位でそう聞いてたんだろう、丁度白井さんと初春も帰ってきた。

「私がレベル1で、白井さんがレベル4ですよ」

「そして！　そして我らがお姉様が学園都市に僅か7人の一人！　レベル5の一超電磁砲（レールガン）ですよお！」

「ちよつ！　抱き着くな馬鹿！」

白井さんがいつも通り御坂さんに抱き着く。紫さんは御坂さんを見て少しばかり顔をしかめたのは、なんでだろう？

私みたいに疑うべき証拠が、あるのかな？

学園都市から私に来ていたことを警戒していたぐらいだし、学園都市トップとなるとやっぱり敵を警戒しているんだろう……。

「八雲さんはどうして学園都市に来たんですか？」

「ちよつとした観光よ、学校も休みだし」

——17歳設定、続いてたんですか。

「今の時期は夏休みですもんね」

初春がそう言つて頷くと、少し紫さんは不思議そうにした。

「その割にはこの子以外は制服、なのね」

私を指差して言う紫さん。

「わたくしと初春はこの学園都市の治安を守る風紀委員ジャッジメントの役職についていまして、その仕事の際は基本的に制服ですの、そしてわたくしとお姉様は休日だろうと制服着用が義務付けられている常盤台中学に所属していますので、制服なのですわ」

「なんだか堅そうね」

「そりやそうですよ八雲さん！　なんたつて常盤台は学園都市女子生徒の憧れ、超お嬢様学校！」

初春のお嬢様への憧れが久しぶりに炸裂、紫さんは御坂さんと白井さんを見て『お嬢様？』なんて感じの顔をしてる。わかります、はいわかりますともその気持ち。

「佐天さん、タイが曲がっていてよ？」

「何言つてんの？」

「ひどい！　ノってくださいいよ！」

嫌ですよ、佐天さんはお嬢様なんて興味無いです。どっちかという使える側に居る方が性に合ってる感じだしねえ、すっかりメイドが板に着いちやつて……。

私普通のシャツだしタイも無いし！

「そう言えば能力者狩り、まだ頻発してるらしいですよ」

「ん、能力者狩り？」

「佐天さんと違い、無能力をひがんで能力者を無差別に襲う事案が発生していますの……見ていると佐天さんってほんとでできた方だと思いますわ」

あはは、そんなに褒めても何も出ませんよ？

というより、ビッグスパイダーがつぶれてもやっぱり能力者狩りは止まないか、これは厄介極まりないなあ。能力者狩りを全部終わらせるためにはやっぱりあの『音』の発生源をつぶすしかないだろうし……あれ、あんな特殊な音をスキルアウトたちはなんで持つてるんだ

ろう？

誰かが、能力者狩りを促してる？

「でも佐天さん、私たちの仕事に首を突っ込むのはいかがかと思いますわよ」

「うっ」

痛い所を突かれたなあ、今余計なことに首突っ込もうと考えてたし……。

でも、能力者狩りに関しては私が絶対関わると決めだし、白井さんと初春には悪いけどね。

「まあそれを言えばお姉様もですけど」

「うっ」

私と同じような反応をする御坂さん。

「御坂さんと佐天さん、固法先輩からも二人が出張らないようにって言われてますから！ 特に佐天さんですよ。問題があったらレベル5の御坂さんは大目に見てもらえますけど……」

「な、なんかごめん佐天さん」

「いやいや、なんで謝るんですか！ しょうがないですよ、私ももつと頑張ってレベル上げないと！」

その方が色々な問題に顔を突っ込みやすいんだよねえ。それにもつと強くなれるかもしれないし！

「色々大変なのね」

「まあ、色々な異変に首突っ込んでますからね」

落書き事件しかり、レベルアップしかり、永夜異変しかり、能力者狩りしかり。まあこういうことに顔を突っ込むのが私らしいといつか、私たりえると言うか……まあヒーロー見習いですからね。

そんなことを考えていると、私の電話が鳴った。表示されるのは小萌先生の名前。

「もしもし、どうしました？」

『佐天ちゃん、黄泉川先生が仕事でたった今呼び出されました』

「……はあ」

どういうことだろう？

『近場で銀行強盗が起きて、車でそのまま逃走していったらしいんです。』

「はい、それは大変です」

『佐天ちゃんはずぐ巻き込まれますからねえ、気を付けてください』
「テメエら大人しくしてろ！」

「遅いです」

『まあ気の付けようがないですからねえ』

「はい、とりあえずヤバそうなので切ります」

小萌先生からの『はいはい』という声を聞くと、たぶん信頼されてるんだと思う。うん、思おう！

人数は五人。

「何事ですよ!?!」

「強盗だそうです」

「え、なんでこんなファミレスに!?!」

こんなって……いやまあ、なんでここに来たんだろう。だって車があるならそのまま逃げた方が楽だと思うし、だけどそこまで馬鹿じゃないはずだし……。

「いたぞー!」

なっ、なんで強盗が私たちの方向いてんの!?!

「お姉様!」

白井さんが鉄矢を取り出した瞬間、強盗が音楽プレイヤーをポケットから取り出して再生ボタンを押す。瞬間、例の能力者狩りのスキルアウトたちが使っていた能力者を無力化する音楽が流れる。店内でも何人もの人が頭を押さええて蹲ったりする。

「ぐうあつー!」

「お、お姉様っ……!」

「な、なんですかこの音はッ」

御坂さん、白井さん、初春の三人が苦しそうに頭を押さえられるけれど私と紫さんにはまったく効かない。店内にはほかに効かない人たちもいるけれど、銃を持っている大男五人に抵抗しようと思う人たちは居ないに決まってる。

なら、動くべきは私だ。男たちが私たちを見ているからこそ、私が動けば四人に危険がおよぶ。

「私が伏せろと言った瞬間、伏せてください」

「ぐっ、ええっ?」

なにを言っているわからないと言う様子の御坂さん、白井さんは少し怒ったような顔をしているけれどこれが一番だつてわかつてる。

「伏せろおおオッ!」

私の指示と同時に背後で音がした。ちゃんと伏せているようではない!により!

周囲のお客さんたちもワンテンポ遅れて伏せ、男たちは私がいきなり叫んだことに動揺したのか一瞬躊躇した後にトリガーに指をかける。最初にかけてないつてことは、素人!

私はすぐにテーブルを踏み台にして天井近くまで跳ぶと同時に手に持っていたナイフを出して——投げる!

「なっ、ぐあっ!?!」

一人の腕を掠り“傷をつける”ナイフ。そりやいつもの魔法でコーティングされたナイフじゃなくてお店のナイフなんだから、基本的に危険ではないし店のナイフっていうのは刺さりはしないけれど、掠ればそれなりに切れる。そしてどうせなら!

ほかのテーブルに着地すると同時に、ナイフやらフォークやらが入っている小さなかごを踏んで中身を宙へと放り出す。

目の前まで飛んできたナイフとフォークを両手に持って、すぐにそれを投げる。

「があっ!?!」

「うあっ!」

トリガーを引こうとして二人の指にナイフを掠らせフォークを突き刺す。それだけで十分時間稼ぎになるから。

「次いッ!」

テーブルの上っていうのはさすがに危ない。残り二人が私に銃口を向けた瞬間、私はテーブルの上からすかさず降りて物陰へと入る。

銃声と共に銃弾がぶつかる音が響く。

「うひゃく、どうしよ」

思わず苦笑。私は左手を見る。

「……やる？」

出し惜しみをしてみんなに被害を出すわけにはいかない。でも……。

「あら、中学生一人にご熱心ね？」

この声っ、紫さん!? なるほど!

私はすぐにジャケットの中からナイフを六本出して両手の指の間に挟んで、物陰から飛び出す。

強盗は紫さんの方を見て銃を構えている——ん? なんだろうこの違和感……でも、今はそれを考えてる場合じゃない!

すぐに両手を振るいナイフ六本を強盗二人の体に突き刺す。それでも魔法のコーティングを得ているナイフで傷つくことは無く、男たちは悶えるだけ。

「このっー」

私はすぐに走って一人の鳩尾に掌底を打ち込んで、少し跳んで後ろの強盗の延髄に回し蹴り。ナイフとフォークを食らった三人がまだダウンしてるわけも無く私にまた銃を向けるけれど……そんな速度なら私の方が早い!

ジャケットから大型のサバイバルナイフを出して咲夜さんに教えてもらった通り、流れるように斬る!

「うああっ!?!」

一人目っ!

私に向けられた銃口を上に向けてあげて天井に撃たせてから、喉元を掻き切る! 痛みだけ、だけれど喉元に切られるような痛みを与えられれば十分なダメージ!

これで二人目ッ!

そして三人目の方を見てみれば、すでに私に銃口を向けていた。

「ッー」

死ぬかと思った。正直、ヤバかった。けれど突如どこからか飛んできたドリンクバーのグラスが強盗の頭に直撃し、トリガーが引かれ銃

弾は私の頬を掠る。

「ラァッ！」

右足を軸に回転してからの蹴り。

強盗の顎を横から打つ。白目を向いて倒れる最後の一人を見届け
てから、私は悶える強盗たちの傍にある銃とナイフを全部拾う。

ナイフはジャケットに入れて、銃はテーブルの上にまとめて置く。
最後に音楽プレーヤーを手に取って、音楽を消した。

「もう出てきて平気ですよ」

そう言うと、御坂さんと白井さんと初春はフラフラしながらソファ
に座る。まったくもって厄介なことに巻き込まれたなあなんて……。

あの音楽があればさすがに白井さんも出張れないか。

それにしても私たちの座っていたテーブルの上のグラスが一つ足
りないんだけれど……紫さんのが無いのかな？

「ありがとうございます、助かりましたよ」

「なぜだか私に殺気が向いている気がするね、利用させてもらったわ
いやはや、ほんと助かった。

ほかの三人はまだ頭が良く働かないようで……あの音楽そんなに
ヤバいんだ。

「ああ、申し訳ありませんの佐天さん……ジャッジメント風紀委員として情けなくあ
りますわ」

「いえいえ、困った時は助け合いでしょ」

「ふふっ、おっしゃる通りですの」

笑う白井さん、今回は怒られなさそう。

「ああああっあ！」

「うわっ、どうしたの初春！」

「さささ、佐天さんの顔にっ！ 佐天さんの顔に傷がッ！ 許しませ
んよお！」

おお、私のためにわざわざ怒ってくれるなんて、良い友達を持っ
たもんだよ。

私は何度か頷いて考えてみる。

——今回のこの強盗たちは、本当にただの銀行強盗なのか……。

銀行強盗というのが建前で、本当はここが目的だったとか……？

「いや、無いか」

馬鹿馬鹿しいことを考えたもんだなあ、とか思いながら私はとりあえずアンチスキルの人が来る前にこの場から撤退しようと思った——
——んだけれどもアンチスキルの人たちがぞろぞろと入って来て伸びてる犯人をすぐに確保する。

まだ大丈夫、逃げられると思って私はそつと裏口へ回ろうと席を離れるんだけど——。

「サテエンツ！」

「こ、この声は……」

私が声のする方を見れば、笑顔で私を見ている黄泉川先生がいた。
もうこのパターン飽きたよっ……。佐天さんは心底疲れてるんですよ。

「私と私以外のアンチスキル、誰に事情聴取されたい？」

「……黄泉川先生が良いです！」

私のジャケットの中のナイフを見ている黄泉川先生。私は頷かざるをえなかった。

まあ、私がナイフとかを持ってても唯一理解してくれる人でしょうからねえ……。やば、紫さんどうしよ。

相変わらず事件あり、学園都市は今日も佐天さんを飽きさせませんよ、ホント……。

——不幸だ！

41、乱雑解放へポルターガイスト

あれから、一日。

私と紫さんと御坂さんと白井さんの四人で道を歩いていた。

その理由というのが、今日は私たち柵川中学の転校生が正式に編入する日であり、寮で同室になる初春が初めて会う日、つまりは私の新しい友達候補……落ち着かない！

朝っぱらから紫さんにも『やけにそわそわしてない？』なんて言われちゃうし！

「佐天さん、やけにそわそわしてませんか？」

「そ、そうですか!？」

「朝からよ」

紫さん、余計なことは言わないでおいて！

「佐天さーん!」

私を呼ぶ声が聞こえて、正面の方を見ると、初春の住んでいる寮の前に初春と女の子が一人。

なるほど、あの子が例の転校生……悪い子じゃ無いっぽいけど、眼帯の下の眼はもっと仲良くなってから見せよう、うん！

それから、私たちは上へと登ってマンションの廊下で止まる。

私たちの方を向いた初春が隣の子に手を向ける

「春上衿衣えりいさんです」

次に初春が手を向けるのは私たちの方。

「それで、こちらが常盤台高校の白井黒子さん、そして先輩の御坂美琴さん、それから私たちと同じクラスになる佐天涙子さん、とその親戚でこちらにしばらくいるらしい八雲紫さん」

「よろしくー」

とりあえず第一印象が大事だと、私は笑顔で挨拶をする……まあ、そんなことはともかく。

「なにこれ？」

私たちの目の前、つまり初春の部屋の前に大量につまれた段ボール

の山……初春日く、春上さんを駅まで迎えに行ってる時に引越し屋さん到着したって連絡が来て、というこらしい。

なんて雑な仕事してんのよ！ 部屋にも入れないっての！

「引越し屋ももうちよつと考えればいいのにね！」

「御坂さんに全面同意ですが、とりあえずどうするかですねー」

「……スキマ、使えるかしら」

「いやダメですよ」

「わかつてるわよ」

ていうか使えたらとつくに帰ってるでしょう！

なんて私が思っていたら、白井さんが『仕方ありませんわね』という一言と共に段ボール一塊を部屋の中へとテレポーターさせた。さすがレベル4のテレポーターとしか言いようがないわ、こりゃ。

学園都市でもテレポーターは少ないらしいからね、ほんと羨ましい能力だなー。

それから私たちは部屋の中に入って大量に積まれた段ボールを見上げる。

「はいはいーちやつちやと片付けちやおう！」

御坂さんが年上っぽいこと言ってる!? なんて驚愕しながらもとりあえず私たちはやることをやることにした。

この紅魔館メイド、佐天涙子さんの実力発揮と言ったところでしよう！

紫さんがメチャメチャ面倒そうな顔をしてるけど、まあこの状況で手伝わないなんてこともないだろうし、まあ七割は私が片付けてみますよ。

そして、それからあまり時間も経たず、部屋の中は整理され、平べったくなった段ボールが部屋の隅に積まれる。

「さて、こんなもんかね！」

「さすが佐天さん！」

「あら、さすがメイド」

「あらやだ八雲さん、佐天さんは普通の中学生でしょう」

フフフツ、と笑う白井さん。

——いやいや紫さんも余計なこと言わないで下さいよ、危ない！紫さんの方を見たら楽しそうに笑っているので、たぶん私が焦るのが楽しいんでしょう、はい、佐天さんはメイドですからね。

なんて思っていると、春上さんが私たちに軽くお辞儀をする。

「みなさんありがとうございます！良かったですなの！」

「それより、思ったより早く終わったしどこか遊びに行こうか！」

「賛成賛成！」

初春が嬉しそうに言うけれど、白井さんが訝しげな表情で初春のこ
とを見た。

あちやあ、こりやなんかあるなあ、なんて思っていると……。

「初春と私はこれから合同会議」

絶望的な表情になる初春。

「合同って？」

「ああ！」

いや、なんの同意ですか御坂さん。

「ジャツジメントとアンチスキルのですわ。なんでも、ここのところ起きてる地震に関する話とか」

「地震で会議い？」

まったくの同意ですよ御坂さん。

「あーそうでしたー」

目が死んでいる初春の頭をワシヤワシヤつと撫でる。

「じゃあ、御坂さんとあたしと紫さんと、四人で行こうか！」

「え、私も行くの？」

「せっかくですし八雲さんもどうです？」

「……そうね、行こうかしら」

御坂さんに言われて紫さんがうなづくことにより、決定かな？

「ずるいですよー」

「終わったら合流すればいいじゃん、ねえ春上さん？」

私が話かけると、どうしようという表情になる春上さん、まだまだ慣れてないって感じだねー、昔の初春を思い出すっていうかなんてい

うか……幻想郷でも無かったパターンの子だなあ。

いや、ていうか幻想郷の人たちって人見知りって概念があるんだろうか？

春上さんを安心させようと初春が春上さんの方を向。

「大丈夫ですよ！佐天さんとはもかく御坂さんと八雲さんは良い人ですから！私も終わったらすぐ行きますし……」

あんたねえ、と言ってから私は親友との固い絆が薄れてきているんじゃないかと思うわけで、今度またスカートめくりという思いやりを見せてやろうと心に決める。

「佐天さん、冗談でも春上さんのスカートをめくったりしないでくださいいねー！」

「え、なんであたしがそんなことするの？」

そんなことは初春とチルノぐらいにしかしないし……？

「……えー」

その後、初春たちと別れた私たちだけ……。

「もうだめ……私帰るわ」

「えっ!？」

「えー八雲さん帰っちゃうんですか？」

「ごめんね、その子もまた今度ね」

「は、はいなの！」

紫さんは結局帰ってしまい、どこに行くか行き先を決めるといふことで私の提案により私たちはさらに移動、辿り着いたのはいつぞやとどうか、約二週間前に御坂さんたちとはじめて来た公園。

いや、広場っていう方が正しいのかもしれないけど、そこでとりあえずクレープを買って三人で座って食べる。

「まあお近づきの印と言えばここかなって、アハハ」

「そう言えば佐天さんたちと初めて来たのもここだったわよね！」

そうそう、あの頃は私がレベル5の御坂美琴さんと仲良くなれるなんて思いもしなかったけどねえ。

私は御坂さんと話して、反対側に座っている春上さんの方を向く、

おいしそうに頬張っているけれど、一応聞いておこう。

「美味しい?」

「んぐっ……うん!」

「口のまわりすべいことになってるよ?」

私はとりあえずそれをポケットティッシュでぬぐってあげた。

「それにしても、黒子達も大変ね。なんで地震なんかで風紀委員とア
ジャッジメント

ンチスキルが合同会議なんてするんだろ、事件とかならいざ知れず」

「本当ですねえ……都市伝説とか調べてみますか」

「やめときなさいよ、どうせ根も葉もない噂ばかりでしょうし」

「その根も葉もないのが見たいんじゃないですか」

「なんでこれがわからないかな」

「私にはわかんないわ」

「あれ、声に出てました?」

「ぼっちり」

それから、初春たちと合流してゲーセンに行きって感じて……まあいつもと変わらないような違うような?」

まあなにが違うかって聞かれたら明らかに初春のテンションと体力なんだけどね、ありえないでしょ、誰かを連れまわしてゲーセン内のゲームをめぐる初春。

そして、それを遠巻きに眺める私と御坂さんと白井さん。

「初春ったら張り切っちゃって」

「お姉さまもずいぶんと」

御坂さんが大量のコインが入った小さなバケツを持っているのを見て、コインゲームやりこんでる人だなあと正直びっくり。

「あれ、このコインって……?」

「うえっ!」

これ凶星だわ、コインたちよ、南無三。

まあその後もモグラ叩きのモグラを可哀そうなので叩けないという春上さん独特の価値観に若干とまどいもしたけれど、とりあえずプ

リクラを取って一旦休憩することとなった。

自動販売機でジュースを買う私と御坂さんと白井さんの三人とは、少し離れてベンチに座りながらメールアドレスを交換している二人。「なんとというか、不思議な子ですわね?」

「そう?可愛いじゃない」

「うくん、なんだか昔の初春思い出しちゃった……」

私がそういうと、二人が反応してこちらを見る。

「昔?」

「ああいや、入学したての頃に——」

「あれ春上さん、危ない!」

突然歩き出した春上さんが、ガラスに気づかずぶつかって尻もちをつく。

そこまで痛そうなお音はしなかったし平気だとは思うけど……。

「どうしたの?」

「うう、あれ……」

春上さんが指さしたのは、ガラスの向こう側の壁に貼ってあるチラシだった。

「花火大会のポスター? ……あ、そういえば今日だっけ?」

「ねえ、みんなで行こっか!」

「良いですわね!」

なんかテンション上がって楽しそうなので放っておくことにする。

とりあえず、私は初春と春上さんの方を見ると、二人とも笑いあっている、行くってことでしょう!

さて、佐天さんは紫さんを誘うとしますか。

そしてみんなですぐに自宅へと帰って浴衣で集合ってことになったんだけど、紫さんの説得はなんだかんだで上手くいった。というより花火に興味があるようで行くつもりだったらしい。

とりあえず浴衣に着替えた紫さんは、すごく綺麗でした……小学生並みの感想とか言わない。

それから初春からの救援要請があって、すぐにそっちへと行くと浴

衣に遊ばれてる二人がいて、とりあえず春上さんの着付けを終えてから次に、私は初春の方の着付けをする。

「はあくこんなことなら、最初から佐天さんに頼めば良かったです」
ため息交じりにそういう初春を見て私はクスツと笑いをこぼしてしまおう。

「でも、初春頑張ってるじゃん」

「今度は私が力になる番ですから」

「ほら、私が風紀委員ジャッジメントの試験に中々合格できなくて、そのせいで他のことにも自信が持てなくなつて……」

懐かしい話をする初春、まあ今さつき私も思い出したんだけどさ。

「あの頃の初春って見てて放つとけない感じだったもんね」

「そんな私を、佐天さんたちはいつも励ましてくれたり、相談に乗ったりしてくれたりじゃないですか」

「ええ、そうだったっけ？」

ちよつと気恥ずかしいから、ごまかしてみる。

「はい、そのおかげで私、ちゃんと合格できたんですよ？」

まあそれは初春の実力だとは思うけど、私が何かをできたっていうんならそれはそれで嬉しいかな。

「だから今度は、私が春上さんの力になれたら良いなって……あつ」

そこに私たち以外がいるのに気付いて、気恥ずかしく思ったのか顔を赤くする初春。

「その、私だけじゃ頼りないでしょうけど」

「ううん、初春さんがルームメイトで本当によかったの、便りにしてるの」

「……はい」

嬉しそうに頷く初春。

「まったく、いつの間にか立派になっちゃって！姉さん嬉しい！」

「むう、私の方が誕生日早いのに！」

「そこはそれー！」

私がそう言うと、初春がまた拗ねるけどとりあえず着付けを終えるまでは私の方が優勢よー！

なんだか、春上さんと紫さんが話をして、笑ってるのが見えるけどどうしたんだろう？

そして空も暗くなった頃に、土手で落ち合う私たち四人と御坂さんと白井さん。

お互い浴衣姿の初お披露目ってことで、色々と褒めあつてから、出店を回る。

やっぱ祭りって言ったたらこれだよー！

「んーおいし」

「おいしいの、そっちも食べたいの」

「じゃあ一口どうぞ」

「ありがとうなのー」

「まったく、落ち着きを持ちなさい」

紫さん、たこ焼きとお好み焼きとフランクフルトと唐揚げと綿あめを持つてる貴女が言っても説得力は見込めませんよ、うん、可愛いけれど……ギャツプ萌え？

白井さんと御坂さんも苦笑いしてるし、まあ紫さんは気にせず綿あめをもふもふと食べてるみたいで安心って感じだね。

「先進救助隊、MARですかー」

「それにしても、あんな警備下で花火見物なんて風情もへつたくれもありませんの……すばらくないですわ」

なんですか突然のその単語は、まあとりあえずここは私が……。

「とっておきの場所がありますよ」

「ご招待しましょう！」

そして、土手からそこそこ離れた高台で私たちは花火を見ることになりましたとき。

ネットで書いてあった穴場だから間違いないとは言い切れなかったけど、人もちらほらぐらいでほとんど居ないから丁度良かったー。

「佐天さん、すばらですよー！」

だからなんですかそれは、ともかく音も大きく響くし花火も全体が

見れる。

良い場所だなーって思いながらも、横の紫さんを見てみる。穏やかな表情で笑ってるから、きつと楽しんでくれてはいるんだろう。

これで私も安心ですよ。

「ふふっ」

「ん、どうしたの春上さん？」

「思い出してたの、私にも昔、初春さんと佐天さんみたいなの……」

なんだか、春上さんの表情が変わって踵を返すと歩きだした。

「春上さん？」

歩いて行ってしまう春上さんを追いかけることにした初春に、着いて行く私。

御坂さんたちからも離れて、初春たちからも離れた私と紫さんの二人。

突然、紫さんが私の袖を引いた。

「ゆか、八雲さん？」

「貴女のことを、信用してしまってる。きつとなにも知らない貴女は信用して良いんでしょうね、でも……私はどうすれば良いかわからないっ、私の大事な、愛した幻想郷が今どうなってるのかっ……私はスキマを開いてこちら側に無理やり来た結果、今の現状に至った……なら、貴女はなに!?!」

どうしたっていうんだろう？

「ごめんなさい、こんな時に……でも花火を見て、屋台を見て楽しいって、こうしていたいって思ってしまう私がいるわ……だから、そんなことを思ってしまったから、だから貴女が何かなのか知りたい。どうしてなんでもなく幻想郷に来ることができるのか、なんでもなくこちらとあちらで過ごしていけるのかっ」

「……紫さん、貴女は混乱してるんです。数万年も生きて貴女がいつぶりに体験した自分を襲う未知のなにかに、だから一旦落ち着きましよう、ね?！」

幻想郷を、あの場所を、神々や妖怪や妖精が愛したたった一つ残された場所を愛する紫さん、その愛がどれほど大きいものかなんてわか

らないし、どれだけ紫さんにとって大事なものかはわからないけれど、とりあえず私にできるのは紫さんを安心させてやれることだけだろうって思っ、そつと紫さんの手を取る。

紫さんは三分もしないうちに落ち着いた。

「…………ごめんなさい、らしくなかつたわ」

「別に、ほら紫さんのそういうところ見えて嬉しいと言いますかなんと言いますか…………なんか女の子って感じてましたよ」

グツ！ つと音を立てる勢いで行ってみたけれど、紫さんは怒ったのかそつぽを向いた。

基本的に余裕がある紫さんにしては珍しい拗ね方だなー、なんて思っていたら、突如辺りが振動を始める。

「地震!？」

「いえ、この現象は…………ポルターガイスト!」

凄まじい揺れに私と紫さんが足がおぼつかなくなる。

「紫さんあぶないー!」

倒れてくる街灯を避けるために私は紫さんを抱いて跳んだ。

なんとか避けたけれど、頭を強く打ったせいで…………正直、かなり痛む

「痛つゝ」

「ちよつと、怪我してるわよ」

「あはは、大した傷じゃありませんから、ていうか揺れおさまりましたね。初春たちのところに行きましょう!」

私はハンカチで額あたりから出る血を拭って紫さんと走り出す。

「初春…………つて?」

初春と春上さんに倒れてきそうになっている街灯を押さえているのは、大きな人型兵器…………?

そして顔部分が透けると、中に入って動かしているのが女性だということに気づいて、いつの間にか来ていた白井さんが驚く。いや、反応からして中の乗っている人を知っているのかな?

なるほど、とりあえずポルターガイスト…………魔術師の仕業じゃないことだけを願うとしよ…………あれ?

「佐天さん！」

御坂さんの叫ぶ声が聞こえるけど、私は膝をついてなんとか地面と勢いをつけたキスを防ぐ。

それにしても、私の頭からボタボタと流れてくる血、これはさっきの傷が思いのほか深かったってことなのかなあ……まあ地面があちらこちら崩れてたし、尖ってた場所にぶつけでもしたのかな？

紫さんもなんか私に呼びかけてくれてるし、いやあこんな美人相手になんて佐天さん、女冥利に尽きますわ、ハハハ。

まあ、あのお医者さんが治してくれるでしょ……なあんてことを言ってみたり、佐天さんはするのですた

42, Voice へ声

私が起きた時は、色々と騒動もおさまったらしく……っというか外というかベンチというか、私の後頭部の柔らかな感触は間違いなく太ももというやつであり、私の視界の先に紫さんの顔があるということはこの太ももは紫さんのものだろう。

起きた私を見て、少しだけ微笑んでくれる紫さんを見ると、信用してくれたのかなーなんて思っただけで起き上がる。

「ありがとうございます」

「別に構わないよ……借りがあるもの」

紫さんが少し顔を赤くしながらそういうので、私はとりあえず紫さんの良心に甘えることとして頭を押さえると、額に包帯が巻かれているのがわかってさらに言えば両目が見えることもわかる。

眼帯を私に渡してくれる紫さん、それを受け取ってから眼帯を付けて、すぐに周囲を確認。

御坂さんと白井さんがこちらへ歩いてくるので驚いた表情をしている。

「佐天さん貴女!?!」

「あ、春上さんと初春は!?!」

「なっ、佐天さん、自分の心配をしてくださいますし!」

「そんなものはどうでも良いから!」

「あっち」

紫さんが指差す方向を見て、初春が救急車の前にいるのがわかった。

「私、病院まで付き合ってください!」

「待ちなさい私も行くわよ」

私たち二人が初春の方へと行くことにすれば、白井さんが私の腕を掴む。

「佐天さん!」

「ほら、寮監さんが怒りますよ?」

「むう」

頬を膨らます白井さんに『ごめんなさい』と言ってから私は紫さんと共に救急車の方に行き、初春と合流する。

そりゃ初春は第一声に『佐天さん、死んだんじゃ!』とか言うものだから、私はとりあえず『トリツクだよ』と答えてから救急車に乗ることにした。

眠っているというか気絶しているような春上さんを見て、私はそつとその頬を撫でてみる。

少し、冷たい……。

その後は、病院で春上さんと私の頭の怪我を含めて救命救急24時ことリアルゲコ太のお医者さんに診てもらった。

結果は大したことはなく、私の場合は頭を揺さぶられた時に脳震盪状態だったらしくそれで無理して歩いた結果あんなったらしい。

春上さんの症状については良くわからなかったらしいけど、その後はタクシーで初春の寮に春上さんを送った。

で、近くのスーパーで春上さんにお土産としてスイカを一玉買って、部屋につくなり春上さんは着替えてからすぐに寝て、私は紫さんと初春とで一休み。

「二人とも、ごめんなさい」

「別にあんたのせいじゃないんだし、あんたのルームメイトは私の大事な友達候補だからね」

「……なんだか今日は、佐天さんにお世話になりっぱなしでした」

「いつもでしよ〜?」

むう、と頬を膨らませる初春。なんだか白井さんを彷彿させる。

「でも春上さん、ビックリだね。地震のこと全部覚えてないなんて」

「ええ、病院の先生が仰ってた通り軽いショック状態なんだと思いますけど……」

私はその時、紫さんが目を細めたのを見逃さなかった。

それから、私と紫さんは帰るために部屋から出る。

紫さんは相変わらずの祭りで買った大荷物を持つてる……全部食べ物だけだ。

「とんだ花火大会になっちゃったけど、みんな無事でよかったね。じゃ、しっかり春上さんの面倒見るんだゾ！」

「任せといてください」

自信満々と言いたげな初春を見て、私は少し口元が綻ぶ。

「あ、八雲さん、佐天さん……ありがとうございました」

私と紫さんは笑って頷くと、帰路を行くことにした。

その後は、あまりお金を使いたく無い佐天さんはタクシーではなく歩きで帰ることにするんだけどね。

特になにかあるわけでもなく、リング飴を舐めながら歩く紫さんと、私は歩いて帰宅する。

「ああ、疲れた〜」

「怪我してるんだから、気をつけなさい」

「了解です」

とりあえず、私は起き上がって、着替えることにした。

すぐに着替えた私は紫さんが持って帰ってきた大量の食料の中から私のぶんのやきそばを出して割り箸を割ってすすする。

やっぱり屋台の味っていうのは良いなあ!!

決してすごくおいしいわけでも無いのだけれど、それでも屋台独特の味は嫌いじゃない。

「ん、おいしいわね」

紫さんもやきそばをすすするけれど、その横にはあと広島風お好み焼きと普通のお好み焼きとたこ焼きと唐揚げとじゃがバターとがある。

どれだけ食べる気なんでしょうなんていうことは聞かない。

まあとりあえず、今日はこれで平和におしまいということ……。

「そう言えば佐天、あの春上って子のことだけど」

——と、いうわけにはいかないうようです。

「春上さんがどうしたんですか？」

「あの子、たぶんあの地震と何か関係があるわよ……勘だけど」

「勘で変なこと言わないでくださいよ」

「そう、貴女も気になってるように思えたけど……?」

凶星ですよ、そうです気になってます。

不可思議な挙動を春上さんが見せてから起きたポルターガイストは、春上さんの周辺でしか起きていない。

それに、昼間に調べてみた都市伝説で第九学区での地震の回数多きは半端じゃなかったと書いてあったし、前に春上さんが住んでいた場所は第九学区、これを偶然と片付けられるほどの要素を私は持っていない。

でも、なんで春上さんを中心に起きるんだろう？

よし、こういう時こそ固法先輩に頼ろう！

ということ、翌日なわけですよ！

紫さんは家にこもることにしたらしいので、とりあえずここに来た。

そうです、ジャッツジメント風紀委員177支部ですよ。もちろん、それは固法先輩に会いに来たわけで……まあ初春をからかったりするなんていう目的もあるんだけどねー。

いや、ドアを開くと同時に私を見つけてなんだか嫌そうな顔をする白井さん。

「酷いですねー白井さん」

「おほほ佐天さん、貴女怪我人のくせになにをしようとしてやがりますのでしょうか？」

「いやあ、色々とお役に立てたらと」

「心配する方の身にもなってくださいる？」

「あはは、白井さんみたいな人に心配されるなんて私も幸せだなー」

軽く、白井さんをあしらってみる。

苦笑する御坂さんに気づいて私が『どうも』と言うと御坂さんは片手をあげて返してくれた。

ともかく、白井さんはいまだに怒っているようだけれど、まあまあ。

「ところで、固法先輩は？」

「現在、寝ていますわ」

「なんでまた」

「まあ色々あったのですわ、色々……」

どこかを見る白井さんを見る限り理由の一旦が白井さんにあるのは明らかだ。

たとえばだけれど、昨日電話している最中にポルターガイスト的なことが起きて連絡を返せなかったとかねえ。

まあなにはともあれ固法先輩が寝ているなら話は早い。

「白井さん、なにか情報掴んだんでしょ〜?」

「……教えませんかよ?」

「御坂さんばかりズルいです、私も同じ部外者なのに」

「そ、その言い方こそズルいではありませんこと?」

「いえいえ、これが正しいんだと私は思いますよ?」

「ほら、ゲロつちまった方が良いぜ〜?」

「ああもうわかりましたわよ!」

あきらめたという風な白井さんに、私は笑って『ありがとうございます』と言う。

それから白井さんが説明してくれたのは固法先輩が昨晚見つけたポルターガイスト事件とAIM拡散力場との関係。

そもそも、この事件のポルターガイストの正体はRSPK症候群というものらしく、それはトラウマやストレスにより心理的に不安定となった子供が引き起こすと言われてる超常現象。能力者が一時的に制御を失い、自分の能力を無自覚に暴走させる状態や現象を言うらしい、ちなみに 個々の現象は様々と……。

通常は同時多発を起こすようなことはないんだけど、AIM拡散力場に「人為的な干渉」があった場合は起こる確率もある……。

「なるほど、AIM拡散力場に人為的な……」

木山先生が思い浮かぶなあ、元気にしてるかな……今度会いに行ってみよう。

それよりも現状だ。

「で、白井さんは春上さんに疑惑を持つてると」

「あはは、そんなことあるわけないのに、黒子つたらねえ!」

「しよ、職業病ですよ」

——いや、それはたぶん正解だ。

「ここまでの統計をソフトを使ってPCでまとめたのを端末に移したんですけど……19学区がポルターガイスト事件の多さで言うところトツトツプだったんです」

「で、それがどうしたの……」

「なるほど、春上さんが前までいた場所が……第19学区ですわ」

きな臭くなってきましたね、これは……。

「さ、佐天さんまで疑ってるの!? 春上さんは初春さんの友達で、あんなにおとなしい子なんだよ!?!」

まあ、そこなんだよね……でも、紫さんが怪しいと言っていた以上、ちゃんと清算するまで私としては納得がいかないというものでして、いやはや佐天さんもすっかり疑い深くなったというか、なんというか……。

ああ、こういう時は『白黒つけたい』と表現するのが正解かあ。

「ごめん、もうちょつと考えさせて」

悩んでいる様子の御坂さん、確かに昨日遊んだ春上さんのデータをハッキングする役割は御坂さんなわけだから私が何を言うこともできなない。

白井さんが首を横に振るのを見て、私は頷いて立ち上がることにした。

そうしてから、固法先輩がソファから起き上がったのが見える。

「あら、佐天さんどうしたの?」

「いえいえ、ごみ箱の何リットルもあるムサシノ牛乳にドン引きしてるだけです」

「あ、あはは〜」

固法先輩って良く食べて良く飲んで良く寝て……結果がああ胸か!?

「よし佐天さん、やりましょ!」

「ん、良いんですか?」

思ったより早い、早すぎる。

「ええ、はつきりさせましょう」

やっぱりやきもきするのはゴメンって性格ですか、うん、そういう

素直なのが一番ですよ。人気も出ますよ！
霊夢さんみたいにひねくれちゃダメですからね！

私たちはパソコンを前に三人で画面を見る。

御坂さんがハックしたそのデータの中から春上さんを見つけて、すぐに表示した。

やっぱりこういうのは気が引けるって言っている御坂さんだけど、白井さんがすぐに『白黒つけますの』という言葉で後押しをする。

表示されたデータを白井さんが読み上げていく。

「えっと、能力は精神感応テレパシーですわね」

「でもレベル2ってことは、まだほとんど実用の域に無い。良かった！ 春上さんはポルターガイストとは関係なし、やっぱり私たちの取り越し苦労だったんだ！」

「御坂さんっ！」

押し殺した声で私は画面を指差す。

画面に映し出された文字に記されたものは、私たちに真実を告げていた。

——特定波長下においては、例外的にレベル以上の能力を發揮する場合がある。

「これって……」

クソツ、最悪だっ！

「少し、考えましようか」

「そうですね……白井さん、買い物お願いできますか？」

「佐天さん、なでナチュラルに私をパシろうと？」

「いえ、固法先輩がメモを取ってるので」

私の眼が正しければ色々メニューを書いている。

「OH……」

じゃ、よろしく！

固法先輩がレシートの裏に書いたメニューを見て頷くと、それを白井さんに渡す。

「あの、固法先輩、わたくしは」

「昨晚」

「行つてまいります！」

すぐに消える白井さん、まあ五分もせずには帰ってくるだろうし今は良いとしましょう。

「そう言えば初春来ませんね？」

「佐天さん、初春さん今日は非番よ？」

「えっ、聞いてない」

「春上さんと出かけたのかしらね？」

寂しいので電話してみることにした。

すぐに電話に出た初春は、息が荒くなにかよからぬことをしているのではないかと疑いたくもなる。

「今どこ？」

『今は自然公園ですっ！』

「春上さんと二人で？」

『ひいつ、は、はいっ！』

「ずるーい、なんで誘つてくれなかったのよ、大体非番だつて聞いてないしー。」

『ふいつ、す、すいません！ たまにはマイナス、はあっイオンをつ、吸うのも良いかなつて、ひいぜえっ！』

……なんかあつたなあ、女の子が息荒くするやつ、坂道上つて。

「ていうか吸いすぎじゃない？ 息、荒いよ？」

『そんなことっ、ぜえはあつ、ないです、よっ！』

「まあ良いや、またねー」

とりあえず電話を切ることにした。

「遊びに来たのにフラれちゃったあ」

「ここは遊びに来る場所じゃないし……っっていうかそれが目的だったのね、先輩寂しいなー」

「ああいや、固法先輩にももちろん会いたかつたな……なんて？」

「あらほんと!？」

嬉しそうにする固法先輩を見ると、まあそれでも良いかなーなんて……。

「なにを口説いてますの佐天さん？」

さすが白井さん、早い！

「口説いてませんよ」

「いえ、どつからどう見ても……いえ、なんでもないですよ、とりあえず頼まれたものと私たちの分の飲み物ですわ」

「どうもです」

私は缶ジュースを受け取ってプルタブを空けると一口飲んでから御坂さんと白井さんと軽く雑談。

まあなんの他愛もない女子中学生らしい話なわけで、あれがあれでおいしいとか、ひとついはじめ一一一の話とかあとは都市伝説の話をしてみたりなわけですよ。

まあそうして駄弁りながら、今後のことを私を含めて三人と考えている。

春上さんのこと、とかだ……そんな時。

「第二十一学区、自然公園……で、大規模なポルターガイスト発生!？」

「ッ、自然公園って、初春たちが居る場所じゃないですか！」

クソッ、こんなことになるなんてっ！

とりあえず、その後は病院に被害者は運ばれたって話を聞いて初春が運ばれた病院に私たちは向かうことにした。

病院につくと沢山の負傷者たちの中に初春は居て、比較的怪我もしてなさそうで安心しながら私たちは近づくと、初春も私たちに気づいて立ち上がった。

「大丈夫、怪我はそれだけ？」

「はい、膝を擦りむいただけです」

私たちは安心して一息つく。

「良かったあ」

「心配したんですのよ、まったく」

「それにしても、二回もポルターガイストに会うなんて思いませんでしたよ」

そこで私は気づく。

「春上さんは、一緒じゃないの?」

「先に搬送されたんでたぶんどこかに……大丈夫怪我はありません、ただ気を失っちゃって」

御坂さんと白井さんが、なにか疑ってる顔をしてる。

「でも怪我なくて良かったね」

「初春——」

白井さんがなにを言おうとしているのかなんて、わかりきったことだった。

だからこそ私はその言葉を遮るように言葉を口に出す。

「あのさ、ポルターガイストの直前に春上さんになにかなかった? 異変っていうか、ちよつと変わったこととかさ」

「え?」

「つまりはこの間の花火大会の時みたいな、なにか変わった挙動が無かったかって」

「佐天さ——」

「どうかな、初春?」

私を止めようとする白井さんだけれど、ここは私の役目つてものでしよ。

関わったんだからこれぐらいさせてもらわないとねー。

「あの、一体なんの」

「調べたら、春上さんはレベル2でもちよつと変わったテレパスなんだよね。もしあの時と同じなんだかおかしな挙動が見られるなら——」

「なんで、なんでそんなこと調べたんですか……?」

「“なんで”って、もちろんそれは当然のことだよ……」

私のはつきり言うと、初春は私のことをいつもと違う視線で見る。

スカートめくりをした時よりも、よっぽど怒っているというか、不快感を抱いているというか……。

「まさか佐天さん、春上さんのこと疑ってるんですか?」

「そういうことじゃないんだけどね」

「じゃあ、どういふことですか? 酷いです佐天さん……春上さんは

転校してきたばかりで、不安で、私たちを頼りにしてて……それなのにッ！」

私に今にも掴みかかりそうな初春。

「ちよつと落ち着こうよ、ね!?!」

意外にも、初春を止めたのは御坂さんだった。

「そ、そうですね初春、佐天さんは別に——」

「テレパスは、AIM拡散力場の干渉者になる場合が無くはないわ」

振り返ったそこにいたのは、昨日のMARの女の人だった。

「テレステイナーナさん?」

白井さんの知り合いらしいけれど、まあ風紀委員と共同で事件捜査をしてるんだから当然と言えば当然なんだろうけどね。

なんだか、部下らしい人に指示してるから偉い人なんだろうな、とは思うね。

「でも、それには少なくともレベル4以上の実力が必要だし、よほど希少な能力と言わざるをえない……レベル2にその可能性はほとんど無いと思うけど?」

安心したように息をつく初春。

「念のためちゃんと検査した方が良いのかもね、お友達の名前?」

「春上衿衣さんです」

白井さんが答えるより早く、私が答える。

「ツ佐天さん!」

怒ってるけどこれに関してはしようがないね、いやまあ、キツいけど……。

「被災者を一人、本部の研究所に送る。表に車を一台回して」

「あの!」

「潔白を証明するためだと思いなさい。大丈夫、ウチには専門のスタッフが揃ってるから、それと……病院はお静かに」

最後に音符でも付きそうな感じで言うテレステイナーナさんに初春はうつむく。

まあ研究所に行くという方針なようで私たちも車に乗せてもらわなければならないけど、もちろん初春は私の隣に座ることなんてもちろん無く、

私の隣には白井さんが座っていた。

仕方ないねー。

「佐天さん、貴女はっ」

「ん？」

「私が言うのと、初春となにかあるとわかってましたわね？」

そりや初春のことはわかってますとも、春上さんのことを調べたってことは間違いなく疑ってるってことですからね、初春もそりや怒りますよ。

ただ現状況を鑑みても明らかに溝ができるとしたら私と初春との間が理想的だった。

「貴女はっ」

「白井さん、大きな声は出さないでください？」

「佐天さん……もお、本当に困った方なんですから」

ため息をつきながらそういう白井さんに小さく『ごめんなさい』と耳打ちしてから私はいつも通りふるまう。

しかたがないってことだつて割り切るしかないんだし……。

まあ、初春と私ならすぐに仲直り……いやあ、今回は難しいかもなあ。

なにはともあれ、春上さんのことを白黒はつきりつけないとね！

43、神ならぬ身にて

あれから私たちは春上さんが検査を受けている研究所へとやってきた。

私が差し入れたジュースにも手を付けることがないあたり、初春ったら相当怒ってるんだろうなと思う。

結構、メンタルにダメージを受けるけど今更そんなこと言っても仕方ないよねえ。

テレステイナーさんから『春上さんの検査中』という話を受けると共に、私たち四人は大きな部屋へと連れてこられた。

ソファに座る白井さんと初春をよそに、私と御坂さんがかざってある人形やらを見る。

「なんか、研究所つぽくないですね……って」

御坂さんは人形に心を躍らせてるみたいだけど、まあ良いでしよう。

とりあえず目的は話を聞くことだからね。

「女がてらに災害救助なんてやっている、こういう純粋なものが好きって意外に思われるのよねー」

……アイエエ!?

「テレステイナーさんの趣味ですか!?!」

「そっ」

ニコツつと笑って言うテレステイナーさんに驚きながらも、私は笑顔でうなづくことにした。

驚きはするけど悪い趣味ってわけじゃないしね……少なからずレミリア様よりは全然良いです、はい。

とりあえず、御坂さんもソファに座って、私は立って話を聞くことにした。

白井さんが立とうと言うけれど、初春の隣つてのも初春が今は嫌そうなんだよね……さすが、頑固というかなんとというか、ともかく私は立って話を聞くことにして、テレステイナーさんのことを見る。

「さて、改めまして、先進救助隊付属研究所長のテレステイナーで

す」

ん？

「所長!？」

驚いた声を上げる御坂さん。

「そう言えば白井さん以外は名前は聞いてなかったわね」

ニコツと笑うテレスティーナさんに、御坂さんがまず口を開いた。

「あつ、御坂美琴です」

「もしかして常盤台の!? こんなところであのレールガンに会えるなんて、光栄だわ」

「あ、いえ」

そろそろ慣れましょうよ御坂さん、それなりの人なんですからあ。

次にとりあえず私が自己紹介することにした。

「佐天涙子です、柵川中学つてとこなんですけど」

「へえ、御坂さんのお友達つてことは貴女も相当な能力者なのかしら?」

「いえ、私はレベル0ですよ」

「そうなの、私てつきり……ごめんなさい」

いや、謝られる方が私的にはって感じなんですけど……まあ良いか。

「よろしくお願いします」

軽く礼をすると、ちよつと驚いた表情をした後にテレスティーナさんも笑顔で軽く会釈。

そして最後に初春なのだけれど……。

ジャックジメント
「風紀委員177支部の初春飾利です!」

「あら、じゃあ白井さんと一緒ね」

「あの、春上さんは干渉者じゃ、犯人じゃないですよね!？」
がつつき過ぎだつて初春。

「試してみる?」

「へ?」

「貴女、好きな色は?」

「……しいて言えば黄色ですけど」

「手を出して」

テレスティーナさんはポケットから丸いチョコがたくさん入っている筒を出して、数度振る。

初春が手を出すと、テレスティーナさんが一つ初春の手にチョコを落とす。

その色は黄色。

「あら、幸先良いわね」

……は？

私たちはテレスティーナさんと共に研究所の部屋へとやってきた。ガラスの向こうに見える春上さんに、初春が名前を呼ぶけど……まあ、聞こえないよね。

テレスティーナさんが結果を確認しているけれど、初春はそんなのを待つのがさそわそわしている。

「安心して、彼女は干渉者じゃないわ」

そんな言葉に安心するみんな、もちろん私もだけどね。

「確かに彼女はレベル2のテレパス、しかも受信専門ね、発信はできない」

「でもバンクに登録されたデータでは特定波長下においてはレベル以上の能力を——」

「佐天さん、まだそんなことを！」

私に怒っている初春だけれど、白井さんが気になってそうだし……今回はこの佐天さんがこうする必要があるってもんですよ。

「調べてみる限り、どうやら相手が限られるということみたいねその相手だけは、距離や障害物の有無に関わらず、確実に捉えることができる。どちらにせよ彼女にAIM拡散力場への干渉なんて不可能」

「ほら！ほらあ！」

「初春、別に佐天さんは」

「じゃあ、誰が干渉者なんだろう？」

そう、それだよ。

気づけば、春上さんは先に病室へ行ったらしく、私たちは揃って春

上さんがいる病室へと向かった。

それにしてもなんだか、違和感を感じるんだよね……。

私たちが病室へと行くと、春上さんが居た。

寝かけていたであろう春上さんが起きると、初春がすぐに声をかける。

「私、また……」

「大丈夫ですよ、なにも心配しなくていいですから」

春上さんが胸元を気にしてから、驚いた表情をした。

「はい、大事なものなんですよね？」

初春が春上さんに渡したそれは、写真を入れるシャトルのようなものだ。っていうかシャトルかな、あれは？

「うん、友達との思い出なの」

「友達って探しているって？」

御坂さんと初春がいる側の反対に私と白井さんが居て、ベッドには春上さんで、その上の春上さんがそのシャトルを抱きながら微笑む。

優しそうに、大事な何かを思うように……それを見てるとそろそろ私もしっかりしないとな。

「声が聞こえるの」

「声？」

「うん」

テレパスか……。

「たまにだけど、でもそれを聞いてるとぼおつとしちやつて……」

「じゃあ、あの時もですか？」

「中になにか入ってるんですか？」

初春の質問に、春上さんがうなずいてシャトルを開ける。

みんなでそれを覗き込むと、私と御坂さんの二人だけが理解して顔をしかめることになった。

でも黙っていることにする。

「枝先絆理ちゃんって言うの」

「その子っ、あの時の……」

ええ、言っちゃいます？

「絆理ちゃんを知ってるの？」

まあ、ここは御坂さんだけ知っているということ……。

「あのね、私もね……置き去りなの」
チャイルドエラー

寂しそうに、春上さんは笑った。

「私と絆理ちゃんは同じチャイルドエラーの施設に居たの……私、人見知りで友達もいなくて……でも、絆理ちゃんとだけは仲良くなれたの。精神感応テレパシーでお話ししてくれてたの、けど、別の施設に移されて……それつきり」

それからあそこに移されたとしたら、もう救いようの無い話だ。

「でも、最近になって聞こえるの……」
「助けて」
「って」
「だって……でも、どこにいるのか、どうしてそんなに苦しいのか、わからないの……助けてあげたいのに、私……なにもできないの……」
「大丈夫ですよ！」

涙ぐむ春上さんに、初春が言う。

「お友達はきつと見つかります。いえ、私が見つけてみせます！ なんてったって、風紀委員ジャッジメントですから！」

「初春さんっ……」

すでに泣いている春上さんに笑顔で頷く。

さすが初春だね。

そう、それでいいよ……。

「ですから、安心してください」

笑みを浮かべる初春に、安心してている春上さん。

「初春さん、ありがとうなの」

「検査で疲れてませんか？ 少し休んだ方が……」

「大丈夫なの」

それから数分間、二人は仲睦まじく話していたけど、私は部屋の外に聞き耳を立てることにした。

先に出ていた二人がテレステイナーさんを話をしている。

「木原、まさか木原幻生？」

確か、木原って言えば木山先生の記憶で出てたおじいさんだよ

……私、良く覚えてた！

テレステイナーナさんの話を聞けば、木原幻生というおじいさんはずいぶんその手の人たちには有名で、相当なマッドサイエンティストだったらしい。

どうやらその実験が原因にあるなら、その被害者が鑑賞者である可能性があるっていうのがテレステイナーナさんの見解。

「どういうことですか？」

「その子たちが暴走能力者になってるってこと」

「え、でもあの子たちは今でも眠り続けてるって……」

「意識が無いまま能力が暴走しているとしたら？」

そんなこと、あるんですか……？」

「意図的な干渉ではなく、無意識のうちにポルターガイストを起こしている……」

「可能性はあるわ、その子たちは今どうしているの？」

「事件後アンチスキルが搜索したんですけど、発見には至っていませんの」

なるほどねえ。

「じゃあ探し出すのが先決ね……今日のラツキーカラーはピンク」

なんかじゃらじゃら音してるけど、これさっきのチョコ？」

「幸先良いわね」

またですかあ……」

帰りの電車内で、みんなで座りながら木山先生の話を御坂さんがしていく。

それについて黙って聞いている初春だけれど、私は言うしかないでしょう。

「初春、木山先生の生徒たちのこと調べてくれる？」

「佐天さん……次は春上さんの友達を疑うんですか……？」

私は顔には決して出さないけれど、私と同じく春上さんに原因の一端があると思っていた白井さんが顔をしかめた。

「初春、あんたいい加減にしなよ！」

つい、大きな声を出しちゃってもんで……まったく冷静さが足りないなんて、私はおとなしく座って黙っていることにした。

これに関しては初春が自分の意思で調べてもらわないといけなしき……。

はあ、まだまだだなあ。

そして夜、晩御飯を作って私は紫さんと食べる。

なんだか引きずつちやつててどうしようもないんだよなあ。

「どうかしたの?」

「いやー初春とちよつと喧嘩みたいな感じに」

「貴女たちが?」

ちよつと驚いた様子の紫さんだけれど、数日しか見てない紫さんでもわかるぐらい私と初春は友達をやつてたんだろなあとは思う。

それにしても、今回ばかりは私が悪いからなあ……でも白井さんと初春が喧嘩するよりはマシかな。

私自身間違つたことをしてるつもりは無いんだけど、それでも友達としてはって感じだよねえ。

「……そういうこともあるわよ、友達なんだから」

紫さん?

「なによ、意外そうな顔して……私だってそういうこともあるもの、それに貴女がそんな顔してるのはあまり好きじゃないし」

デレた!?

「いつもの能天気な顔の方が良いわ」

「そうですかあ」

ダメだったみたいです、なんとか心を開いてくれればなあとは思ってますけど……。

まあ、ともかく仲直りが先決だよねえ。

「ありがとうございます、八雲さん」

「……紫で、良いわよ別に」

フイツ、とよそを向く紫さん、不覚にもこの佐天さんとはときめきかけた。

いやはや、なんと言えば良いんでしょうねえ……。
一応自分に私はノンケだと言いつけろとしよう、うん！

翌日、私は風紀委員^{ジャッジメント}177支部の前に来てから、やはり帰ることにした。

さすがにこの状況で顔を出せるほど私も厚顔無恥じゃないし、初春とは顔を合わせ辛いつてもんだし。

でもそんなときに御坂さんと遭遇して、私たち二人は公園のベンチへと移動して飲み物を飲む。

「顔、出し辛くて……」

「そうだね、私たちギクシヤクしちやってるもんね。枝先さん、見つけないとね……春上さんのためにも、初春さんのためにも……私たちのためにも」

ニコツと笑って言う御坂さんを見ると、適わないなと思う。

御坂さんに電話がかかってきて、すぐに私たちは場所を移動することになった。

いつものカフェに移動することになったちやって、とりあえず冷たいジェラードの気飲みは良くないって私は頭のキーンを味わいながら思った。

それから、私たちが向かった先で待っていたテレステイナーさん。その人にとんでもないことを聞かされた。

御坂さんが勢いよくテーブルを叩き大きな声を出す。

「木山春生が保釈!?!」

「ええ、例の実験に関して話を聞こうと拘置所に行ったの……そしたら……」

「あれだけのことをやっておいて、保釈が認められるんですか!?!」
「そうみたいね」

「なんだ、なにが起きてる? とにかく私は何をすればいい? 一つ、木山先生へとメールを差し出す。」

とりあえずそれだけでも二人と別れた後にやっておく必要がある。

それと、何かを探し出さなきゃいけない。

木山先生が釈放へと至る理由……。

「子供たちへと辿る糸が切れたわね」

いや、まだだ……。

「木山先生は子供たちを助けるためにあの事件を起こしたのに……利用なんて……」

「おかしくないでしょう、学生の能力への憧れさえも利用したような女よ?」

それはおかしい、だからこそありえないと私は思った。

だって学生たちのその憧れさえも利用せざるをえないほど子供たちを思っているのに、なんの理由があって助けたい子供たちを利用してポルターガイストなんて起こす?

だからこそ私は、テレステイナーさんのすべてを信用することはないと思った。

この人は、木山先生を知ってるわけじゃない、すべてを信用することとはできない。

「ごめんなさい、私は仕事に戻るわ」

「お時間おかけして申し訳ありません、吉報を待っています」

「ええ、えつと……」

「佐天涙子です」

「ああ、佐天さん、それに御坂さん」

テレステイナーさんが去ってから、私も御坂さんと別れることになった。

夕方に、私はとあるマンションの前に立っている。

待ち人ありつてところですかね、まあその待っていた人もたった今来たわけなんです……。

銀髪をなびかせながらシスター服で走ってくる少女を私は受け止める。

「るいこ〜!」

「はいインデックス、久しぶりー」

「最近、るいこの家に行けてないんだよ！」

「ごめんね、とりあえず……久しぶりです上条さん」

私はインデックスより遅れてやってきた高校生に挨拶をした。

「久しぶりだな佐天さん！」

うん、久しぶりだった。

「インデックスの時はありがとうな」

「いえ、それほどでも」

そういえば事件のことはある程度教えてもらったんだっけ？

まあなにはともあれ今日は小萌先生の家に呼ばれているから、三人で向かった。

こうしていると前を思い出すなあ、一度も三人でこんな風に歩けたことは無かったけど……それでも思い出すのはきつとこうして歩くのを夢見てたからだ。

三人で楽しく歩く、それが一番なんだけれど……やっぱり昔の上条さんと今の上条さんは違うって思ってしまう。

そこももちろん前みたいに引きずってはいないつもりなんだけれど、それは感じる。

「小萌先生〜」

「はいはい、いらっしやいです」

アパートの一室から出てきた小萌先生は、笑顔で私たちを迎えてくれた。

今日はお食事会だからね、しょうがないよねー。

「あ、インデックス俺のぶんが！」

「とーまが食べないのかと思っただよ！」

「食うに決まってるだろ！」

「あはは、上条さん早く食べないと」

「佐天さん早いな!?!」

「慣れが必要ですよ上条ちゃーん」

そんな言い合いをしている間に、上条さんのコロッケがまた無くなる。

「ああもう、不幸だー！」

なんか懐かしいなー。

ホクホクした気分のまま私はホクホクのコロッケを食べる。

なんだか紫さんには申し訳ないなー、晩御飯は作ってきたけどなんか、悪いなって。

そのうち上条さんやインデックスにも紫さんを紹介したいなーなんて……。

結局、その後私がまた軽く食事を作って上条さんとインデックスと小萌先生に振る舞った。

さすがに修行されつくしたこの身が編み出す食事はみんなの舌にも十分合ったらしい。

その後、余った分をパックに詰めて上条さんは持って帰るという話で、私たちは小萌先生の家から出た。

「送ってかなくても平気か？」

「大丈夫ですよ、相変わらず上条さんは優しいですねー」

「とーまは病み上がりなんだから自分の心配するんだよー！」

「そんな上条さんに噛みついてくるのは誰ですかねえ？」

なんだかそんなノリに私はお腹を抱えて笑ってしまう。

こうしているとにも問題なんて抱えていないかのように思ってしまうのは、なんでだろう……。

私は上条さんたちと別れると自宅へ向かう。

「さて、帰って紫さんと軽く話して……ん？」

ポケットの電話が鳴ったことに気づいて、私は舌打ちをした。

メールの差出人は木山先生……そして内容は……。

『助けて』

ただ、その一言だけだった。

その後すぐに追加のメールが来て、指定された病院へと入ると、同じく指定された部屋へと走って入った。

そこは大きな部屋で、なにかが“あった”ということだけがわかる。

なにかしらの機械があつたはずなのにそれが無い。

そして壁に背中をつけて三角座りしているのは木山先生だった。

「木山先生……」

私は近づいてから腰を下ろして木山先生の顔を覗き込む。

「私はっ……私はあっ……」

木山先生が私の胸に飛び込み、私は地面に座り込んでしまうけれど、それでも私の胸で泣いている木山先生を払いのけるようなことは私にはできない。

ちよつと離れたところから私たちを見ているカエル顔のお医者さんは、残念そうに眼を伏せてから別の部屋へと行ってしまった。まったく、どういうことなんだろうか……？

それから、泣き止んだ木山先生は、私の胸の中で話をはじめた。

こと の 始 ま り は 木 原 幻 生、 彼 が 『神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの』というものを生み出そうとしたことが始まり、そして彼が見つけた『能力体結晶』というもの、それを投与する実験体として木山先生の生徒さんたちが選ばれ、数年の時を眠り続けたまま生きている。

カエル顔のお医者さんは、子供たちを延命させていたそうだ、医者として……保釈された理由もお医者さんの口添えらしい。

目覚めさせる直前まで、木山先生は辿り着いた。

それでもまだ彼女と子供たちは救われることはなく、木山幻生のさらなる改造により能力体結晶は子供たちを眠りながら暴走能力者へと仕立てあげ、子供たちを起こすことは可能なのに完全に起こせばポルターガイストを引き起こすような体質へとしてした。

プログラムを作成しているにも関わらず、必要な『ファーストサンプル』と呼ばれる最初の実験者の能力体結晶が見つからない。

それさえ見つかればすべてうまくいくはずなのに……。

そしてそれを見つけようと研究所に行ったとき。

「御坂さんと会ったあつ!？」

「ああ、そして私と共に彼女はここに来た……彼女は私に『ファーストサンプルが見つからなかったら?』と聞いた、しかし私は、諦めるわけにはいかなかったツ!」

ええ、だと思えます。そうでなければ木山先生がレベルアップ事件を起こした理由がありません。

覚醒させて大規模ポルターガイストが起ころうとも、木山先生は助けなかった……。

そんな時、テレスティーナさんがやってきたらしい。

彼女は引き渡しを求めて、木山先生は断った。

それでも、テレスティーナさんは子供たちを起こせると自信を持って言ったらしい。

木山先生がテレスティーナさんを止めようとしたとき、そんな木山先生を止めたのは御坂さんだったらしい。

うん、それが正解なんだよ……御坂さんなら、それが正解なんだけど……。

私は、木山先生に協力しただろう。

御坂さんが、春上さんが枝先さんの声を聞いた話をしてから、木山先生は諦めてしまったらしい。

「私はっ、あの子たちを救いたくてっ、救えるのは私だけだっって言っても……レールガンは、彼女は救えてないって、そうなんだっ、私はなにも救えてないっ」

泣いている木山先生、私も結局は上条さんを救えなかった側の人間だからこそ、私は木山先生に共感した。

そんな木山先生をギュッと抱きしめて私はその頭を撫でることしかできない。

そして、結局テレスティーナさんによって子供たちは運び出されてしまった。

私に、今の木山先生のなんの力になれる？ 何を助けられる？ 木山先生は私に『助けて』と言ったんだ。

きっと私を巻き込ませないようにと、連絡を私にしなかったはずの木山先生が、私に助けを求めた。

そのぐらい、木山先生は参っているんだ。

私になにができる？

いや、きつとなにもできない……木山先生になにかしてあげられる

のは現状、テレスティーナさんだけだ。

だからこそ私ができるのは、木山さんを抱きしめてあげること、ぐ
らいなんだ。

44、今、なにが見えていますか？

木山先生が泣き疲れて寝てから私は帰ることにして、家に着いた時はもう12時を超えそうな時間だった。

紫さんからは匂いがかがれて『なんだか女の匂いがするわね？』と言われたけれど、まあなあなあにして済ました……どうしたんだろう？

まあそれは良いとしても、とりあえず紫さんと一緒に寝たという衝撃の展開。

いや、寝たと言っても起きたら紫さんがベッドから落ちたのか私の布団に居たってだけなんだけどね、アハハ。

昼前に私は、ジャッジメント風紀委員177支部へと向かうことにした。

初春はすでに春上さんへと枝先絆理ちゃんのことを伝えに行つたらしく、すでに居なかつたけれど私は上機嫌だ。

子供たちを起こせるところで子供たちをさらわれた木山先生、けれどももしかしたらテレスティーナさんとMARの力を使えばファーストサンプルは見つかるかもしれないし、助けることもできるかもしれない。

昨晚、私は『可能ならば、プログラムのデータをMARへと持つて行って力を貸すっていうのもありなんじゃないですか？』とは助言した……それをするかはわからないけれど、そうすればさらに子供たちが起きるのも早くなるはずだ。

正直、私は現在舞い上がっている。

悲しんでいる木山先生だけれど、もしかしたら喜ぶ結果になるかもしれない。

「お茶どうぞ♪」

「あら佐天さん、ご機嫌ね？」

「そりゃそうですよ、ポルターガイスト事件解決までの糸口が見えてきたわけですから！ しかも木山先生も喜べるハッピーエンドが！

これでみんなで遊びに行けますよ♪」

「そうね、最近貴方たち変だったけど……元通りって感じ？」

いたずらっぽく私を見て言う固法先輩。

「あはは、お騒がせしました、初春にはしつかり謝っておきます」

「佐天さん、貴女はもお」

「お説教は聞きませーん、はい白井さん」

「ん、ありがとうございますの……相変わらずおいしい」

「ちやんと茶葉で淹れてますからねー」

「経費で落とした甲斐があるわー」

固法先輩の言葉に、私も白井さんも御坂さんも笑う。

そんな時だった、私に電話がかかってきたのは……。

「あれ、木山先生からだ」

「えっ!?!」

全員が声を揃えて言ったことにより、私は驚きながら電話の通話ボタンを押す。

『佐天くんっ、奴は……テレスティーナはっ、私たちを騙していたっ』

「ど、どういうことですか!」

『これ以上は、彼女に聞いてくれ』

「ちよっ、木山さん!」

「どうしましたの?」

「白井さん、初春をつ!」

私はこれ以上ないぐらいに焦っていた。

まさか、そんなっ……こんなことって!

それから、白井さんと御坂さんと、紫さんにも協力してもらって、初春を探し出してもらい、見つけた初春を私たちは177支部へと連れてくると集合する。

泣いている初春を座らせて話を聞くことにすると、初春は泣きながらも説明をしていく。

初春が木山先生を説得して資料をMARに持って行ってくれた。

正直、私にとってはとっても嬉しいことだった、けれどっ……。

「テレスティーナ・木原、本当にそう言ったんですの?」

初春は泣きながら頷く。

喧嘩中だったけれど、それを意識できないぐらいに狼狽している初春は私が背中を撫でているのを気にしない。

「それで、木山先生は!？」

「わ、わがりませんっ……」

両手で顔を覆いながら言う初春に、私はどうしていいかわからなかった。

抱きしめるのが正解なのか、ここでなにをするのが正解なのか……今の私と初春の状況でなにをしてあげるのが正解なのか?。

「落ち着いて初春、大丈夫だから……ね?」

そう言うが、落ち着くことは無い。

「あったわ! テレスティーナ・木原・ライフライン……木原幻生の血縁、孫!？」

「なんですって!？」

「この間の木原幻生の論文から、当時の職員データを探ったわ」

「ということはテレスティーナは幻生の研究助手をしていたと?」

「そういうことになるわね、ちよつと待つて……はあつ!？」

驚く固法先輩、そつちも見に行きたいが私は初春から離れることなんて、できない!。

「テレスティーナが能力体結晶実験の最初の被験者!？」

「な、なんてゲスなんですか木原幻生つてのはアツ!」

そう叫ぶと、隣の初春が顔を上げて再び勢いよく泣き出す。

「ど、どうしようっ、わだしっ、ううっあっ……」

「な、泣かないの初春!」

「だつてえっ、はるうえさんっ、えださきさんたちがあつ……」

白井さんがゆつくりと私たちの方に歩いてくる。

初春が白井さんの方を顔を上げて向いた瞬間、白井さんは私が止めるより早く初春の頬を打った。

「えっ……?」

「いつまでそうやって泣いているつもりですか?」

「しらいさん?」

泣いていた初春も驚きで止まったらしい。

「白井さん！」

「佐天さんはまた自分一人で悪者になるつもりでしょうけどそうはいきませんわよっ」

「え、佐天さん……？」

「いや初春、これはっ」

「初春、佐天さんが言っていたことの九分九厘は私が思っていたことです、佐天さんは勘が良いから私と初春の、ジャッジメント風紀委員二人の関係がぎくしゃくすることを恐れて、私の代わりにすべて言いましたの……でもここからは私の、私自身の言葉ですわ……早く、いつもの、ジャッジメント風紀委員の初春飾利に戻ってくださいまし」

声を押し殺したように言う白井さんに、初春は表情を変えて白井さんの横を通り固法先輩の方へと行く。

固法先輩に交代してもらい、初春はいつもの初春へと戻りPCの操作を固法先輩より凄まじいスピードでこなしていく。

そちらに集中している初春にはわからないだろうけれど、初春の頬を打った右手をギュツと押さえている白井さんの前に立ち、私はその頭を軽く撫でる。

「なんですの?」

「まあまあ」

「あれ、御坂さんは?」

「……ッ、まさかっ!」

「白井さんと初春と固法先輩はそのまま続けてください、紫さんもそのままで！ 私は私でやることがあるので失礼しますよ!」

すぐに私は走り出して177支部を飛び出す。

ああもう御坂さん、世話かけさせないでくださいよおおおッ!

本当に一人でなんでも抱え込む人ですね!

ただ走る、走って走って、走り続けてついていたのは先日訪れたMARの施設。

そして見たのは、ひどいありさまのその場所と、倒れた御坂さんとパワードスーツらしきものを装備した……。

「テレスティーナ・木原アアアアアッ!!」

私が叫ぶと、前に見た表情とは全く違う、イラついたような表情をしたテレスティーナだった。

響く音は間違いなくキャパシテイダウンだ。

それで理解できる、なにもかも、こいつがやったこと……キャパシテイダウンを使い、スキルアウトの人たちを利用した。

——そして、御坂さんをこんな風にして木山先生や初春を裏切ったこいつを、私は……私はアッ!!

「殺すッ!」

「アアッ!? ふぎけたこと言っつてんじゃねえぞレベル0のクソガキィ!」

走りながら私は眼帯を外してポケットに入れると、左腕に意識を集中させる。

「妖魔結界、血呪封印、解除」

押し殺すように言いながら、私はテレスティーナへと走る。

笑っているテレスティーナは私の攻撃を受ける気だろうけど、そんなパワードスーツでッ!

「龍——解放」

私は「こちら」ではじめて妖怪の力を使った。

気を左の拳へと集めて、私は思い切りテレスティーナの胴体を殴る。

「ハアアッ!」

パワードスーツを纏ったテレスティーナが少しばかり吹き飛ばす。

「づあぁっ!」

だけれど、これだけで終わらせる気はない……私はテレスティーナを許す気なんて毛頭無いんだから!

走り出した私を見て、テレスティーナは手に持ったグレネードを打つけれど、私は妖怪の血を解放することで上がった身体能力で避ける。

避ける必要もないのは、たぶんだけど調性が甘かったんだろう。

「おっ!」

テレスティーナの声に一体のパワードスーツが現れるけれど、そんなのが今の私の相手になるか！

私は力一杯に地を蹴り跳ぶと、パワードスーツの横腹を蹴って倒す。

「テメエっ、レベル0じゃねえのかよー！」

「レベル0でも、色々あったのよー！」

私が気を体中に回してから再びテレスティーナへと走り、むき出しの頭部を狙って蹴りをくりだす。

だけれど、私はこの時、完全に油断していた。

「効くなあ?」

「ッ!」

テレスティーナはロッドにて私の蹴りを受け止める。

けれど、そんなロッドで！

「電撃って奴だよ、テメエみてえなレベル0には丁度良いしなあ」

瞬間、そのロッドから電撃が流れて私を地面へと落とす。

「がっ……うあっ……」

「おいおいどうしちゃった、佐天すあくん?」

優勢になったテレスティーナ……完全にしてやられた。

「私っ、はあ」

「おいおい立てるのかよお、じゃあもう一発!」

勢いよく振り下ろされるロッドだけれど、私には当たらない!

「あ、どこ行った?」

「ここだあつー!」

跳んだ私に気づかなかったテレスティーナの前に着地した私は左腕に精一杯の力を込める。

この一撃、殺す! ……待て、殺す? 私は、殺そうとしてる……

目の前の人間を?

「がっ」

拳は真っ直ぐテレスティーナの顔面に直撃したけれど、その一撃はテレスティーナを壊すことは無い。

明らかかな力不足は……私の封印が再び発動したことを意味する。

なんで、殺すことを恐れたから？

「なんで、こんなタイミングで……がはあっ!？」

テレステイーナに殴り飛ばされた私は吹き飛んでから地面を転がった。

これっ、キツいつ……。

「テメエ、やってくれたじゃねえか、良いなア……新しいおもちゃにしてやるよ」

どこかへと連絡するテレステイーナ。

私は意識を保ちながらも、体に異常がないかを冷静に判断する。

近づいてくるのは量産型のパワードスーツ、それでも今の私に勝つことはできないだろうから、なんとか立ち上がると御坂さんの方へと急いで、気絶している御坂さんをなんとか運ぼうとした。

それでも、パワードスーツの方がよほど早い。

「ご、めんっ……御坂さんっ、木山先生っ」

「お待ちなさい!」

そんな時、凜とした声が響く。

「その方をこの私、婚后光子の知人だと知っていたの無礼ですか？」

救世主^{ヒールロー}は遅れて来るって言いますよね、そんな感じかな？

ともかく、私が助かったと思うまでそれほど時間はかからなかった。

それにしても、封印が再開するまでの時間が短すぎると思うんだよねえ……。

それからは婚后さんがパワードスーツと研究者を倒して、私に手を貸してくれて二人で撤退。

病院へと行き、カエル顔のお医者さんに治療を任せて私も応急処置をしてもらったというわけだ。

あの人に任せれば大概の怪我もなんとかなる、よって私もすぐに動けるようになって御坂さんの病室で、寝ている御坂さんのベッドの近くで椅子に座る。

「お姉さまー!」

「御坂さん！」

そんな大声を出して、入ってきたのは白井さんと初春の二人だった。

「なっ、佐天さんも怪我してるじゃないですかあ！」

「なにをしていますのっ！」

「いやあ、御坂さんを助けるときにちよつと」

頭の傷が開いたらしく相変わらず額に包帯を巻くことになった挙句、ところどころ包帯が巻いてある私に大声で迫る二人。

まあしようがないんだけど、病院ではお静かにね？

だけれど、遅れて入ってきた紫さんを見て、正直私もすっかり治療してもらえば良かったかなと思う。

「紫さん……」

「心配っ、させるんじゃないわよっ」

明らかに怒っている紫さんを見て、私は頭を押さえた。

相変わらず、他人に心配ばかりかけてしまう……。

「御坂さん!?!」

「お姉さま！」

そんなときに御坂さんが目を覚ました。

「私、一体……?」

「佐天さんと婚后光子が、助けたと聞きましたわ」

「そう、佐天さんと婚后さんが……佐天さんその怪我っ」

「いや、大丈夫ですから」

それほど痛みもないのは確かだし、一番キツかったのはスタンロッドの方だったしねえ。

「ッ、あの女っ！」

御坂さんは突然動き出して立ち上がったが、白井さんに抑えられる。

「どいて黒子、こんなところで呑気に寝てる場合じゃない……! 早く、春上さんたちを助けないとっ！」

「ですからそれはっ」

「私が勝手に研究所に忍び込んで頭に来て、せつかく見つけた子供た

ちを……テレスティーナにつ」

罪悪感と後悔に苛まれている御坂さん、私だってそれを言えば同じだ。

木山先生に『MARに行け』と言ったのは私で、それを後押しした初春。

私にだって責任の一旦は間違いなくある。

「すべての責任は私にあるの……だから、私があの子を止める。どきなさい黒子」

白井さんを押して行こうとする御坂さん。

初春も、白井さんも同じような顔をしていることで気づいた。

気づけば……私は、御坂さんの前に立っていた。

「佐天、さん……？」

「御坂さんの眼には今、なにが見えていますか？」

私の片目でも見えるみんなが、御坂さんには見えてない。

「なにつて、佐天さんだけ……っ」

気づいたようで、御坂さんは表情を変えた。

振り返って白井さんと初春を見る御坂さんの表情を想像するのはたやすい。

「私……ごめん、私、見えなくなってた……また、みんなに迷惑かけて」

「迷惑上等です」

「え？」

「友達なんだから迷惑ぐらいかけて当然です、心配するぐらいなら一緒に苦労したいです、それが……友達だと思っんですよ」

私は、小悪魔さんに言われたことを思い出して言う。

頼られるということが、どれだけ大事かわかっている、わかっているつもりだけれど私も今回は失敗した部分がある。

だからこそ御坂さんにそう言っ……。

「そうですね、私たちもいるんですから！」

「はいですの」

「……うん、ありがとう」

御坂さんが俯いてそういう。

これで一件落着かな、と思っているとそんな時、紫さんが私の肩をたたく。

「謝りなさい、初春に」

「へっ?」

「当然でしょう、ひどいこと言ったんでしょ?」

「ちよ、八雲さん! 悪いのは私で!」

初春がそういうけれど、そうだなとは思う。

「ごめんね、初春」

「へ、い、いえ私こそ佐天さんに嫌な態度取って!」

「他には、誰か何か言うことあるんじゃない?」

なんか年上っぽく仕切ってる紫さんに全員たじたじながらも、って感じた。

白井さんも初春を叩いたことを謝って、色々といざこざを解決させたって感じ……なんだけど。

「私には、なにかありませんの?」

婚后さんの言葉に、御坂さんが笑みを浮かべる。

「ありがとう、婚后さん」

「べべべっ、別に構いませんけどー!」

なんか面倒くさい人だなあ、おもしろいけど。

とりあえず全員話がまとまったところで動き始めることにした。

まずはアンチスキルへの援護要請だ。

177支部に全員で戻って初春はテレステイナーのことを調べ、白井さんはアンチスキルとの通信をしている。

固法先輩と紫さんはどこに行ったのか、ともかく御坂さんは今のうちに体力を回復してもらってるし……。

「だから、テレステイナー・木原が違法な行為をしていることは明らか!」

『あいつの組織が怪しいのはこっちもわかってるじゃん!』

「お願いします黄泉川先生!」

『お前相変わらずどんな事件にもいるのな!』

「限界を超えるんでしょ！ 子供たちが危険なんですよ！」

『たくつ、待ってる！』

それから十分もしないで、アンチスキルから監視衛星のデータが届いた。

御坂さんがいつも通りの服装へと着替え、白井さんを含めた私たち三人はモニターを見る。

「MARのトレーラーは都市高速の五号線、18学区第三インターチェンジを通過したところですよ！ 五号線って確か17学区につながる道路よね」

「17学区？」

「どうしてあんなところに……」

「木原幻生が所有していた、私設の研究所があります」
なるほどね……。

ん、このトレーラーの後ろに走ってるの？

「ちよつと初春、後ろの青いスポーツカー拡大できる？」

「え、はい……」

拡大されたそれを見て、私は片手で頭を押さえた。

……木山先生ったら。

「たく、一人で行っちゃうなんて、背負い込んでるんじゃないわよ！」

「お姉さま、それは突っ込み待ちで？」

「案外似たものどうしなんじゃないですか？」

「佐天さんが言いますの!？」

「で、わらひはなにをふればいいんれふろ？」

なぜだかおにぎりを食べながらやってきた婚后さん。

「まだいたんですの？」

「んっ!？」

喉におにぎりをつまらせる婚后さんに、エプロンをかけた固法先輩が近づいて飲み物を渡す……ってテーブルの上に沢山のおにぎりと味噌汁。

ついでに言うと紫さんもエプロンをつけていて、手伝ってくれたんですねー。

「腹が減っては戦はできぬ、しっかりと食べなさい！」

「はい！」

全員で返事をして食事を食べる。

私も同じく食事をしながら味噌汁を持ってきてくれた紫さんを見て、自然と口元が綻ぶ。

「似合いますね、可愛いですよ」

「なにをつ……」

そっぽを向かれた……あれ、ダメだった？

さて、なにはともあれ時は目の前まで迫ってるわけで、全員が決戦へ向かう準備をする。

固法先輩が赤い革ジャンを着て、私は相棒こと金属バットを振るい、御坂さんがコインを軽く弾く。

「さて、行きますか！」

御坂さんの一言で、私たちは頷いた。

45、守護の力へゲートガーディアン

一通り連絡は済んだ、私は初春と一緒に固法先輩のバイクの後ろに座っている。

高速道路を走る私たちの視界の先にはMARRのトレーラーがあつて、その後ろには木山先生の車が見えた。

トレーラーが開いて、大量のパワードスーツが見えた瞬間、上空から白井さんのテレポートで現れた御坂さんが電撃の衝撃でトレーラー二つを横転させる。

車が止まってその中から木山先生が出てくる。

「木山先生、この車はおとりです！」

「子供たちは乗ってないですよ！」

「なんだと……って君たちはなにを！」

私は急いで車のドアを開けると、乗り込み、私の上にさらに初春が乗った。

「せまっ、初春重っ！」

「乗ってください、私がナビしますから！」

「先生急いで、子供たちを助けるんでしょっ！」

木山先生が車に乗り込んでから私もドアをしめて、すぐに木山先生はアクセル全開で車を走らせる。

すさまじいGが掛かるも、今はそんなことを考えているような時間は無い！

走っているとすぐに後ろから御坂さんを乗せた固法先輩の運転するバイクが追い付いてくる。

道はすでにわかっているんだから、あとは行くだけ……っ！

「さっきの部隊が出発したすぐあと、民間を装った輸送車が二台、MAR本部から出て行ったのが、アンチスキルの監視衛星で目撃されました！」

「そちらが本物……私はまんまとダミーを掴まされたというわけかっ！」

「急ぎましょう、そいつらもう目的地についてるみたいなんですよ」

顔をしかめながらも木山先生は高速道路の標識を見る。

「場所は！」

「23学区にある今は使われていない通信システム研究所！」

すぐにギアを操作して、木山先生は道を変えた。

車に何か衝撃が走るのと同時に、大きな声がスピーカーを通して聞こえて、振り向けば車の後ろには巨大なロボットのようがある。

その苛立っているような声ですぐにわかった。

「あの女かつ！」

窓をバシバシと叩くような音が聞こえて、窓の方を見ればそこには御坂さんの顔、ああ電磁の力ではりついてるのかと想像するに時間は足りない。

とりあえず会話のために窓を開ける。

「もつとスピード出して！」

「言われなくてもやっている！」

こういう時、能力者が実に羨ましくなるよまつたく！

「ごめん、私、間違ってた……」

御坂さんが自分の非を認めて謝るのを見ると、紫さんがみんなに謝らせたのも大事だったんだなと思う。

「……立場が違えば、私も同じことをしていたさ」

そういう木山先生に、御坂さんは笑みを浮かべて窓から顔を離す。

たぶん、ここからは御坂さんの戦いだ。

私の出る幕はないけれど、それで十分……私が出張るべきじゃない

！
「失敗の埋め合わせは、ここで……するからアツ！」

御坂さんの戦闘がはじまったんだろう、私はここで待つことだけ

だ。

今するのはそれだけで良い。

「次の分岐を右に……通信ッ!？」

「私の方は電話かつ！」

電話をすぐにとって通話ボタンを押す。

白井さんの耳に着けるやつ羨ましいなー！

「姉御さん！」

『今、お前の要望通りアンチスキルの援護してやってるけど、本当に借り返せよ！』

「了解ですよ！」

『佐天！スキルアウトが援護に来てるけど、お前の知り合いか！良い友達じゃん！』

「そりやどうも！」

『佐天！』

『佐天！』

姉御さんと黄泉川先生のダブルで呼ばれる。

「なんですかあ、お説教は受けますからあ！」

『お前はレベル0だけど、それ以外にも沢山のものを持つてる！』

『それこそ、レベル5にすら匹敵するかもしれないものを、沢山持つてるじゃん！』

『だから、今はすることがなくても待て！』

『お前の強さをあたしたちは知ってるじゃん！』

まったく、みんな……こういう時に私のこと褒めてくれちゃって……もちろんですよ、頑張りますよ！

「はい！」

「アンチスキルにスキルアウト、どうしてっ」

『良いから、とつと子供たちのところに行くじゃん！』

『幻想御手作って、あたしたちをあんなにしてくれたテメエのためじゃねえ、ダチとの義理のためにやってんだよ！』

「行きましよう木山先生！」

「みんなが、味方です！」

「……ああ！」

さらにスピードを上げる車だけれど、テレスティーナが私たちを追うスピードも上がる。

車でテレスティーナの攻撃を回避するけれど、御坂さんが私たち側のフロントガラスにもたれかかっている、疲労は明らかだ。

『いい加減諦めろ！テメエらがどんなにあがこうと、ガキ共を助けることなんざできっこねえんだからよお！』

諦めるなんて、するわけない！

「それでも、あがき続けると誓ったんだ、私は……！教師が生徒をあきらめるなんてできないあい！」

木山先生の叫びに、御坂さんは笑みを浮かべて車の上に再び戻る。テレステイナーのロボのアームがアンカーで飛んできて、御坂さんはそれを跳んで受け止めるようにしてアームと一緒に車の前方へと飛ぶ。

アームを止めたと同時に破壊したところで私たちは御坂さんを追い抜いた。

後ろを見れば、御坂さんが着地していてどこからか現れた白井さんが先ほどのロボのアームを御坂さんの前にテレポトさせる。

「これが私の、全力ツ……ダアアアアツ！」

拳と共にいつものレールガンをそのアームで撃ち、テレステイナーのロボを破壊した。

大穴が空き、煙を上げるロボ。

木山先生が車を止めたので、私たちは車から出て、御坂さんと白井さんに声をかける。

「二人とも大丈夫ですか!?!」

「怪我は……してますよね」

私は致命傷にならなさそうだと判断して安心する。

「君たちのおかげで助かった……ありがとう」

「待って、それは子供たちを助けた後で、ね？」

「……ああ」

そして私たちは木山先生の車で二十三学区の通信システム研究所へと向かう。

表にいた大量のワードスーツ部隊は御坂さんが電撃で倒して、つまりは中の人たちももれなくダウンだろうなあと思う。

管制室にて私は金属バットを置いて一息つく。

御坂さんや白井さんみたいに疲れてはいないけど、まだ傷は響く。子供たちが居る場所を初春が探している。

「まったく、お姉さまが一人残らずお片付けになるから……」

「なっ、さつきは中に誰も居ないなんて思いもしなかったんだからー！」
まったく、もお……。

「あつた、今この施設で、一カ所だけ消費電力が桁違いな場所、最下層ブロックの……」

私たちはすぐに最下層ブロックへと移動した。

大きなその場所に入るなり、春上さんが眠っているポッドを見つけ、初春が駆け寄り何度も叫ぶ。そこからさらに階段を下りた所に子供たちが眠っているポッドがある。

ポッドの中の春上さんが起きると、涙ぐみながら初春が笑った。

「えっと、ここのシステムは……？」

「たぶんこころへんにあると思うよ、そんな遠距離からこの部屋の操作するなんてこともないだろうし」

私は部屋中を見渡すけれど、なんだかごちゃごちゃした機械ばかりでわけがわからなくなる。

「待ってる、今助けて……え？」

「これってー！」

木山先生と私が同時に妙な音に気づく。

その後に、私と木山先生以外のみんなが頭を押さえて苦しみます。

幾度となく聞いたこの音は間違いなく……。

「このっ……クソガキ共があっ……」

声の方を向くと、そこにはテレステイナが居た。

パワードスーツを着たテレステイナは右手に持った銀色の長いなにかで御坂さんと白井さんを殴り飛ばす。

「白井さん、御坂さん！」

「貴様あああっ！」

「木山先生待って！」

すぐに木山先生も蹴り飛ばされる。

「ヒャーハハハハッ、ヒャハハハッ！ 舐めたマネしてくれやがってえ……」

こんなのどうすればっ、私は……。

膝について頭を押さえる初春は私に逃げてと小声で言うが、ダメだ。

そんなことできるはずがない。

「らあああっ！」

私は、実はという痛む体を押しして走る。

だけれど肝心なスピードがそんな体で出るわけもなく、銀色のその鈍器で吹き飛ばされて地面を転がることになった。

最悪の展開だ、こんなことならさっさと管制室に行っておくのが正解だっ！

「……たく、良いもの見せてやろうってのになあ……能力体結晶の管制って言うなあ」

「なんでよ、あんただって犠牲者じゃない……」

御坂さんがそう言いながら、立ち上がった。

「おじいさんの実験台になって、能力を暴走させられて、なのにつ——」

「犠牲なんかじゃねえよ。権利を得たのさ、私から生まれた、この種を開かせて……」

テレスティーナが見せてきたそれは、赤い結晶。

「それは、ファーストサンプル！」

「あれがっ!？」

それをなんとしても、手に入れなくてはならない。

「レベル6を生み出す権利をなあ！」

「レベル、6……?？」

「そうだあ、こいつはこれから学園都市初のレベル6になる……」

春上さんが……?？」

「このガキ共の力を使ってなあ！」

私たちは、愕然とした。

「特定波長下におけるレベルを超えた受信能力……こいつの能力は能

力体結晶と共振するのに実に都合が良い、高位のテレパスは希少だからなあ」

「なぜ、なぜまたこの子たちなんだっ……どうしてこの子たちばかり苦しめるんだアツ！」

「なあに、ちよつくらこいつらの『頭の中の現実』って奴を拝借するだけだ」

それって……。

「『自分だけの現実』……」

「ふん、呼び方なんてどうでも良い。ようはその、脳内活動を司る神経伝達物質……とりわけ、眠れる暴走能力者のそれを採取し、ファーストサンプルと融合させる。それによって能力体結晶は抑止力を獲得、完全なものとなるのさ、あのジジイはそのことに気づかず、ひたすらこいつのマイナーチェンジに気を取られてたようだがなあ……さて、あとはこいつをお」

「やめなさい！」

御坂さんが止めようと大声を出す。

「そんなことをしてっ、もしこの子たちが暴走状態のまま覚醒したらっ！」

「学園都市は空前のポルターガイストにみまわれる……上等じゃねえか！」

え？

「『神ならぬ身にて天上の意思に辿り着く者』……そのための学園都市だろア！」

御坂さんが殴り飛ばされる。

「レベル6さえ誕生すれば、こんな街用済みだろうがよお！」

立ち上がる初春。

「キャパシティ・ダウンですね！ 御坂さんの言っていた能力者だけを封じるといっ！」

「ああ、なんだ突然!? この施設中のスピーカーをぶっ壊して止めるかあ？」

本当に、初春はどうしたんだろう、私は混乱した。

「いえ、これならっ、私たちが先ほどまでいた中央管制室で止められるはずです、ぐうっ！」

「でも、テメエら一匹たりとも逃すわけねえだろっ！」

初春が殴られて吹き飛ぶ。

「テレスティーナアアッ！」

「うあああっ！」

叫ぶ私と、走り出す木山先生だけれど、すぐに蹴り飛ばされて床を転がる木山先生。

「手エ、焼かせんなよお」

「木山先生！」

初春が叫ぶけれど、すぐに頭を押さえる。

「テメエはそこでおとなしくしてろ」

私はっ、こんな時につ……。

「そっういやレールガン、お前おもしろいこと言ってたなあ、スキルアウトがモルモットじゃねえ？　そうだ、スキルアウトだけがモルモットじゃねえ、アンチスキルも、ガキ共も、大人も、お前ら全員がモルモットだ！　学園都市はモルモットの飼育場、テメエらガキは一人残らず家畜なんだよお！」

「御坂さん！」

叫ぶ初春。

！
こんな時に私が倒れているわけには、いかないでしょうがあああっ

「テレスティーナアアッ！」

「うるせえぞレベル0のクソガキイ！」

「はあっ、はあっ……モルモットだろうがなんだろうが、そんなこと、知ったことじゃないッ！」

それでもっ！　私を送り出してくれた人たちを、信じてくれた人たちをッ！

「アンチスキルを！　スキルアウトを！　友達をつ、馬鹿にするなアッ！」

立ち上がった私は、左腕に意識を集中させた。

「妖魔結界、血呪封印、解除……っ」

ふらつくけれど、今にも倒れてしまいそうだけれど、私はっ、みんなを守りたい！

だから力を貸してください、美鈴さん……私に、みんなを守る力をッ！

「〃龍〃——解放……！」

つぶやくように、誰にも聞こえないようにそう言う体から力があふれるのがわかる。

怪我が回復していくのもわかる、派手な外傷がなければそれがバレることもない……けれど、もうバレるバレないもどうでも良い、私が今するべきことはこれを隠すことじゃない！

——みんなを守ることだ！

「邪魔だあっ！」

眼帯を外すと同時に放って、走る。

昼間とは比べ物にならないほどのスピードが出ている自覚がある。

「んのクソガキい！」

私を殴ろうとするテレスティーナの拳に、私は拳で合い打つ。

二つの拳がぶつかるが、相殺！

「どうなってる！」

「私の友達に、これ以上手をださせない！」

胴体に勢い良く蹴りを入れると、ふらつくテレスティーナ。

私は追撃のためにさらに地面を蹴って跳ぶと同時にその拳をテレスティーナの頬へと放つ。

ファーストサンプルは木山先生の方に飛ばせたけど、まだ、倒すには威力が足りない！

「私の友達を、これ以上傷つけさせない！」

「うるせえレベル0！」

「レベル0がなんだ！」

テレスティーナが銀色の鈍器を離して拳を振るってくるが、無駄だ。

確かに格闘の基礎はしっかりしているが所詮はその程度、私の師匠

はもつとすごい。

パスワードスーツさえなければ速攻で片はついていただろうけれど、私は全力で目の前の敵を片付けることだけを考える。

振るわれる腕を受け流し、攻撃をくわえてそのパスワードスーツの出力を落とす！

「なんなんだ、なんなんだテメエは！」

「私は佐天涙子だ！ レベル0で！ 中学一年生で！ それでいて！」

紅魔館のメイドで、家族で！

「ここにいるみんなの友達で、そしてえっ！」

両足を地面にしっかりとつけて、拳を放ちパスワードスーツごとテレステイーナを3メートルほど吹き飛ばす。

「最高の仲間を、持ってる……っ！」

「なに言ってるんだテメエは、そこに倒れてる使えてねえ奴なんか……それにそんな拳じゃあたしは一生倒せねえぞお！」

確かにその通りだ……。

施設のスピーカーがハウリングを起こした。

「ああ、なんだ？」

『そうね、 “涙子” 一人の力でその機械を破壊するのは無理だわ』

「なんだと、まだいたのか!？」

「いや、来たんだ……」

私は龍の力の封印が再び施されたのを感じて後ろに倒れそうになるが、そこを御坂さんが支えてくれた。

自分も痛むくせに、と思っていたら木山先生が次に来て私に肩を貸してくれて後ろに下がらせてくれる。

御坂さんはしっかりと私の前に立ち、いつぞやのような表情でテレステイーナを睨む。

『さつき一応そっちに行ったんだけど、初春が色々教えてくれたじゃない?』

「なっ、さつきのー！」

『さて、この学園都市が滅びようがどうしようが私の知ったところ

じゃないのよね正直』

「ああッ!？」

『でもねっ、私の……と、友達に手えを出すんじゃないわよッ!』

何かを振りかぶり音が聞こえ、直後にキャパシテイダウンの音は止まった。

「なあっ!」

私たちの、勝ちだ……ッ!

「クッハハ、もおいしい……テメエらこの施設ごと、まとめて吹っ飛ばしてやんよお!」

テレスティーナの持つ銀色の鈍器が変形して砲身が姿を見せる。

「こいつぁ、御坂美琴の能力を解決して作ったもんだ、テメエのレールガンよりも強力になあ!」

「……たく、モルモットだ家畜だのつて、どんだけ自分を憐れんたらそこまで逆恨みできんのよ」

御坂さんが静かにコインを出す。

「エレクトロマスターレベル5ウ、テメエなんぞこの街じやただのデータあ! ヒッハハッ、そうだ! 減らず口を叩くデータだあ!」

「学園都市は、私たちが私たちでいられる、最っ高の場所なの……私一人じゃできないことも、みんなと一緒にならやりとげられる……それが……」

「テメエらは人間じゃねえ、ただのサンプルだあ、それが学園都市!」

「私の! 私だけのッ!!」

——現実ッ!

放たれるレールガン同士はぶつかりあう、けれどっ、私が与えたダメージだって、役には立つってもんよ。

御坂さんのレールガンはテレスティーナのレールガンに競り勝ち、テレスティーナを吹き飛ばしパワードスーツを破壊した……。

やっぱり御坂さんにはかなわなないなあって思うよ、ホントさ。

それから五分もしない内に、キャパシテイダウンを私の相棒と共に壊してくれた紫さんがやってきた。

すでに木山先生や御坂さんや初春や春上さんが下にいて、色々しているのを見ながら待っていると紫さんがやってきて私に駆け寄ってくる。

私を見てから、安心したように息をついてくれるのを、素直に私は喜んだ。

「ふう」

「大丈夫?」

私は壁に寄りかかって座っている状態だったけれど、紫さんに手を貸してもらい立ち上がる。

「お疲れ様ですの……助かりましたわ、八雲さん」

「別に構わないわよ」

白井さんが礼を言うのと、紫さんはそう言っただけでほほ笑んで一緒に下に降りた。

木山先生の教え子たちがポツドの中で寝ている。

私は木山先生のすぐ後ろに行く。

「これで、プログラムは完成だ……」

あとはエンターキーを押すだけ、それでもあの実験のことを思い出すのか指は震えていた。

だからこそ、私は後ろから木山先生の肩にそつと手を置く。

「大丈夫なの」

春上さんの方を向く木山先生。

「絆理ちゃんが、先生のこと……信じてるって」

「木山先生、みんなを助けてあげましょう、教師なんですよ?」

「……あぁっ」

そして、木山先生はエンターキーを押した。

それから木山先生は走って枝先絆理ちゃんの顔を見に行く……眠っている生徒たち全員を見まわしてから再び絆理ちゃんの方に目をやると、そつと、その瞼が開く。

数年ぶりの再開。

「先生、どうして……目の下に隈があるの?」

その言葉を聞いて、木山先生は涙を流した。

「色々、忙しくてね……」

それを筆頭に他の生徒たちも起きて、木山先生は涙を流しながら生徒たちに目を配る。

脱力感もあって、全身の力が抜けそうになるけれど……まあ、なんとか感じてだ。

みんながみんな、もちろん紫さんも、笑みを浮かべた。

「今度こそ、言わせてくれ……」

私たちを見て、木山先生は言う。

「……ありがとう」

御坂さんもみんなも、少し恥ずかしそうにしながらも、笑顔で頷いた。

私は紫さんに肩を貸してもらっている状態からすぐに自分で立つて背を伸ばす。

「あー、お腹空いた!」

「空気を読みなさい、涙子」

「超動きましたよ私!」

胸を張って言う、初春が握りこぶしを作った……どうしたんだろ？

「あつ、そう言えば佐天さん、貴女またなにかしましたね、なにをやったんですの!?!」

「あ、白井さん落ち着いて!」

「無理ですわ!」

「もお、良いところなんですからあ!」

「それはそれ、これはこれですの!」

私はとりあえず、白井さんから逃げることにした。

お互い怪我人なんだし、それに木山先生の生徒さんたちの前なんですよお!?

「今回こそ逃がしませんわよ、佐天さん!」

「ああもう!」

——不幸だあ!

46、吸血殺し〈デーパーブラッド〉

事件のことと次第は片付いて、カエル顔のお医者さんのスーパー医療ですっかり怪我也治してもらった私は、紫さんと一緒に帰り道を歩いていた。

途中、近道をしようという話になって公園と突っ切ろうと私たち二人は公園の中を歩いていると、ブランコに乗った二人組を見つける。

大の男二人がブランコに乗ってるなんてあきらかにやばい光景だけど、その二人を見て私は納得してしまった。

「ああ……」

「知り合いなの？」

「まあ、はい」

「個性的ね」

紫さんが言ってもなあ……まあなにはともあれ私は二人のそばに行つて、うつろな目をしている「上条さん」と「ステイル」に声をかけることにした。

「君がいるということは、日本に違い無いみたいだね」

「は、なに言ってるの？」

「いや、佐天さん俺たちもなにがなんだか……」

え、どういうこと？　もしかして私にはとても話せないようなことを男二人でやっていた？　なにそれゾツとする。

まあおふざけはこのへんにしても、この二人が揃ってる事件で魔術師関連の何かがあったのは間違いないんだろうなあとは思うけど……。

私ですね、テレスティーナ倒したばっかですよ？

「なにか重要なことを忘れてるような……まあ忘れるのだからその程度ということだろう、違うかい？」

「そうなのか？」

「いや、絶対違うでしょう」

頭を押さえていた上条さんが、立ち上がる。

「お前の疑問をさっすり解消させてやる」

「東洋のまじないは神裂の専門なんだ、彼女に聞くよ」

「あら、私も東洋の魔術なら多少心得がありますよ?」

そんな時そういったのは紫さん、ステイルが訝しげな表情で紫さんを見た。

「誰だその女は」

「そんなことは良いから、目をつむって舌を出せ、べーって」

「ん……べー」

ステイルがやるとシユールだな、紫さんもちよつと引いてるし。すると突如上条さんが走り出して、腕を振りかぶる。

「よくも人様をおとりにして逃げやがったな、拳!」

上条さんのアツパーがステイルに直撃し、ステイルは吹っ飛んだ。

いやあ、気持ちの良いパンチだね!

「痛うつ……」

顎を押さえながら起き上ったステイルがぼつの悪そうな顔で上条さんを見るあたり、なにかしたのはステイルなんだろうなあと思う。

ともかくだ、私はこの状況に説明を求めた。

なにがあつたか教えてくれと言ったら、ステイルは私も一度誘いに来たのだと言う。それはそれでいやだな。

「まあなんと言うか、吸血殺しなんてものが絡んだりしていてね」

「へえ……そりや物騒なことだ」

私は苦笑いしかできなかつたが、紫さんはおかしそうに笑ってる。

「ともかく、今は行こうぜ! 姫神を助けないといけねえ!」

「また女ですか上条さん」

「涙子が言ってもね」

「へ、なんで?」

まあともかく、私たちは四人で件の黒幕である錬金術師なんてものを相手にするためにそいつの本拠地である三沢塾という巨大なビルの前までやってきた。

だけれど、そのビルの前に立つのは大勢の甲冑を装備した騎士たち。

上条さんは知っているらしく、ステイル曰く『13騎士団の生き残り』

り』らしいけれどさっぱりだ。

「グレゴリオの聖歌隊ね」

紫さんの言葉に、上条さんが反応した。

「でもそれって大人数が必要なんじゃ？」

「今頃バチカンの大聖堂あたりで3333人の修道士が祈りを捧げてるでしょうね……少し身構えていた方が良いわ」

「はあ？」

「彼女の言うとおりだ、まったく佐天涙子の知り合いというからなにかと思えばなんでそんな知識を持っているのか」

「ステイルのくせに偉そうに」

「なんで君、ボクだとちよつと強気なのかな？」

とりあえず、赤く輝く騎士たちの剣を見て身構えた。

なにかの管楽器の音色が聞こえて、輝きがさらに増し、上空には暗雲が立ち込める。

ステイル曰く今から始まるのは『爆撃』それを思えばこの事件は私が疲れることなく終わるのかと期待しないでもないのだけれど、中にはどうやら上条さんが助きたい相手がいるようだ。

それに、無関係の生徒たちも……。

「来るわよー」

紫さんの言葉と同時に巨大な雷がビルに直撃、それと共にビルは徐々に崩壊を始める。

だけど、それは突如巻き戻されたかのように元の通りへと戻った。

割れたガラスも、傾いたビルまでもが元へと戻っていく。

「黄金練成、あれがボクらの敵、アウレオルス・イザードの本当の力

……」

「黄金練成……ですって？」

紫さんがつぶやいた瞬間、すぐ近くで猫の鳴き声があった。

そちらを見ると、そこには見覚えのある白いボールがあり、中から子猫が一匹出てくる。

上条さんがその猫を『スフィンクス』と呼び、すぐに持ち上げる。ネーミングセンス的にインデックスがつけたとみた。

「まさか、これ……インデックスの?」

上条さんがビルを見上げる。

なるほど、そういうことですか……これは厄介なことになってきたなあ。

ついてないなあ。

ビルの中を歩く私たち四人。

どうやらステイルは私たちの行き先である錬金術師、アウレオルス・イザードが居る場所はすでに掴んでいるらしい、記憶を消される前にだいぶ探検したとか言ってるけど結局上条さんが居なかったら全部ばあだったわけだから、今回ばかりは二人のファインプレーだ。

ともかく、これで時間の無駄遣いはなさそうだ。

「それにしても、言葉一つでなんでもどうにでもできちまう奴からどうやって姫神をつ……それにインデックスの奴も来てるみたいだし……」

「借りにあの子が来ていたとしても、ボくらみたいにいきなり危害を加えられることはない……待てよ」

立ち止まるステイルに、ぶつかる上条さんと私。

「なんだよ!」

「なるほど、そういうことかっ」

苛立ってるのか、ステイルは地面に煙草を投げ捨てた。

「三年も潜伏していれば、世情にも疎くなるということだ……:~:というよりもだね」

「ん、話は聞いているよ?」

「なるほど、インデックスと上条当麻については良くわかったわ」

「勝手にペラペラと喋らないでくれるかな、一応重要機密と言っても良いぐらいのことなんだよ?」

「あら、でも話を聞いている限りではそれを決定するのは涙子と、上条当麻でなくって?」

紫さんの言葉に片手で頭を押さえるステイルは、しょうがないというような表情で再び歩きます。

なにはともあれ、紫さんの先に話してくれた黄金練成アルスIIマグナについてのことが正しいのだとしたら、この戦いは私たちの勝利の確率がないわけじゃない。

とりあえず、なにもかもは向こうに着いてからだ！

私たち四人はアウレオルス・イザードがいると思われる部屋の前へとやってきた。

扉は開きっぱなしでその中にいる緑色の髪をオールバックにしてるのがアウレオルス・イザードなんだろうと思う。そして黒髪の巫女さんが姫神さんと……いやはや、どこかで見たことあるよね。

私は紫さんに前にすれ違って近づいたら激痛に見舞われたという話をする。

「たぶん、吸血殺ディーアブラッドという能力に、吸血鬼の血が暴れたんじゃないかしら？」

「なるほど」

ぼそぼそと話していると、アウレオルス・イザードが私たちを見る。だがアウレオルス・イザードは私たちを見てる中、その机の上に横になってるインデックスを見て上条さんが今にも飛び出そうとする。

それを止めて、ステイルはアウレオルス・イザードに言う。

「残念ながら君は目的を成し遂げられない」

「ふん、今更ながら我が真意に気づいたか……ならばその大成を前に、己が無力を嘆き、嫉妬に身を焦がすが良い」

「どういうこと？」

「上手くいくなら焦がし甲斐もあるんだけどねえ……くりかえすが、君に彼女を救うことはできない。インデックスを救うことはね」

インデックスを救うって……なにが？

「貴様はしくじったというだけのことだ、だが私は……私はこの子を……」

アウレオルス・イザードは眠っているインデックスを見て、優しく笑みを浮かべる。

「十万三千冊もの魔導書を一身に背負い、決してその呪縛から逃れる

こののできぬ少女……にも関わらず、その運命を受け入れてなお、己が不幸より他人の幸福のために……」

インデックスを知っていた、どういうこと？

「そう、彼もインデックスのパートナーだったのさ、今年は君……いや君たち、去年はボク、そして三年前はこのアウレオルス・イザードというわけだ」

だったら、なんでインデックスを攫って？

愛しさ余って殺したいなんてわけじゃないよね、なんか重福が思い浮かんだんだけど……。

ともかく、目の前のアウレオルス・イザードがインデックスを愛したロリコンの一人ってことは間違いない。

「これまで禁書目録は、一年ごとに記憶を消さねば生きていけなかった……これは必定であり、人の身には抗えぬ宿命……しかし！」

アウレオルス・イザードがこちらを見る。

何かに感づいたのか紫さんがあきれたような表情をした。

「逆に言えば人なれぬ身を使えば済む」

「吸血鬼とは無限の命を持つ者、無限の記憶を人と同じ脳に蓄え続ける者……あるのだよ吸血鬼には！ どれだけの記憶を取り入れても、決して自我を失わぬ術が！」

いや、無いから、ていうか記憶のしすぎでどうにかなるとか無いから。

もしかしたらあるのか？ いやないと思うけど……。

「ないわよ」

紫さんが私にボソツと言う。まあつまりはこういうことだろうけど、今会話に突っ込む勇気は無いので黙っていることにする。

それにしても、吸血鬼と会いたいからこそその吸血殺ディープレッドしていることか、理解できた。

ステイルがタバコをくわえる、早く言ってあげなよ。

「なるほど、吸血鬼からその方法を教えてもらおうってわけか……念のため聞くけど、その方法が人の身には無効だとしたら？」

「当然、禁書目録を人の身から外すまで……」

なっ!?

「インデックスを吸血鬼にしようってわけ!？」

私は気づいたら言っていた。

「必然、それでも禁書目録は救われることに違いは無い、貴様にもそれはわかるはずだ。この子の最後を見たであろう貴様には！あの時、この子は告げたのだ。忘れたくないと、胸に抱えた思い出を消したく無いと！指一本動かせぬ体で、この子は笑いながら告げたのだッ！」

感情を昂らせて叫ぶアウレオルス・イザードを見ると、なんだか悲しい気分にもなる。

ずっとこの人は戦っていた、すべてを犠牲にしても、インデックスを救う術を見つけると……だから私も憎み切れない、木山先生と同じだ。この人はただ一人を救うために走り続けている。

そのために超能力者たちを操って魔術を使わせ、姫神さんを利用するだけ利用したことは別だけど……。

「どうあっても自分の考えは曲げない、か……だったら、ほら言っちゃれよ今代のパートナー二人、致命的な欠陥を抱えた目の前の錬金術師に……」

二人って、まああれか、ステイルと神裂さんみたいなものか……。

とりあえず今回は上条さんに任せるとしよう。

「お前、一体いつの話をしてるんだよ?」

「……なに?」

「そういうことさ、インデックスはすでに救われてるんだ……ここにいる上条当麻と佐天涙子によってね」

私ってなんにもしてない気がするけどなー。

「君にはできなかつたことを、こいつらはもう成し遂げてしまったんだよ、ローマ正教を裏切り、三年間も地下にこもっていた君には知る由もなかつただろうけどね」

「そんな、ありえん、人の身で……魔術師でもなければ、錬金術師でもない者に……一体なにができるというのだ!」

「ごもつとも、でも私は純粋な人間じゃないんだよね。今微妙なライ

ンだけど？」

「必要悪ネセサリウスの教会とイギリス清教の沽券イマジンブレイカーに関わるから他言は控えたいんだけど……上条当麻の右腕は幻想殺しイマジンブレイカーと言って人の身に余る能力の持ち主なんだよ。だが気にするな、インデックスは今のパートナーたちと居てとても、幸せそうだよ」

ステイルが笑みを浮かべて言う。

ふらつくアウレオルス・イザード、だけど良かった良かった、この事件はこれで終了だね。

めでたしめでたしだ。

「とーま……」

突然、寝ているインデックスが寝言を言いだした。

「るいこお……」

「インデックス！」

私たち二人が同時にその名前を呼ぶ。

なんだかんだ言って上条さんにインデックスを託したつもりでも、インデックスは寝言で私の名前を呼んでくれるぐらい好いてくれていたみたいだ。

なんだか感慨深い気分になって、ジーンとしていると、再びインデックスは私たちの名前を呼ぶ。

「とーま、るいこ……お腹減った」

上条さんがこけて、私は笑わざるをえなかった。

お腹を鳴らしたインデックスが寝返りを打って、楽しそうな表情をしている。

「りんご……りんごお……」

ステイルと紫さんはクスクスと肩を揺らして笑っていて、私と上条さんも顔を見合わせて笑ってしまう。

すると同調したのかアウレオルス・イザードも笑い出す。

でも少しばかり雰囲気の違い私たちが笑いを止めると、アウレオルス・イザードは私たち鬼の形相で見る。

「倒れ伏せ、侵入者共！」

私たちはその男の言うとおりに、倒れ伏す。

紫さんもステイルも上条さんも私も、全員が床にはりつけられたように動けなくなる。

——ていうかなんでこんなこと、終わってるのに！

「我が想いを踏みにじり、嘲笑い……」

ポケットから金属の針を出し、首に突き刺した。

なにをしているかはわからない。

「貴様らの死を持って贖ってもらおう！」

瞬間、私たちの前に両手を広げて立つ巫女さんこと姫神さん。

上条さんは『やめろ』と言うけれど、姫神さんが動くことは決してない。

「私、わかるよ。貴方の気持ち」

「そいつはっ……もうっ」

アウレオルス・イザードがポケットから針を出したことで、私も気づいた。

この錬金術師はインデックスを助けるといふ願呪いいに憑かれていたけど、すでにその願呪いいはこの錬金術師を変えている。

たった今、それを気づけるだけの要素は見つかった。

だからこそ私は全力で腕を伸ばして上条さんの腕を掴むと、すぐに体が動けるようになり、次は上条さんの腕を上条さんに触れさせる。

——これでお互い動けるようになった！

「本当は、本当の貴女は！」

「姫神さん、その男はもう貴女の利用価値を無くしてる！ 上条さん！」

「おう！」

上条さんが姫神さんの肩を抱くと同時に、アウレオルス・イザードが言う。

「死ね」

だが、姫神さんはそのままだ。

死なない姫神さん、それに驚愕するアウレオルス・イザード。

「なに、我が黄金錬成アルス・マグナを打ち消した？ その右手、聖域の秘術でも内包するか!？」

「どう、して？」

姫神さんが聞くと、アウレオルス・イザードは笑う。

「油然、約束は守る……貴様を呪われた血の運命から救うという約束！」

「ごちやごちやうつせえ、んなことはもうどうでも良いんだよ……良
いぜ、テメエがなんでも思い通りにできるつてなら、まずはそのふざ
けた幻想をぶち殺す！」

盛大に啖呵を切る上条さん、だけれど申し訳ないなあ。

「ここは、私がやりますから上条さんは姫神さんに触れていてくださ
い」

「え、佐天さん、俺今」

「良いですから、ね？」

「で、でも佐天さんが危険で」

それ以上の言葉を、私は聞く気なんて無い。

私は今、異常に頭に来ているのだ。なんでこんな男と木山先生を一
緒だと思っただのか、違う全然違う。

木山先生は精一杯に犠牲を無くそうと頑張っていた、頑張っていた
からこそ苦悩していた、でもこの男は犠牲をなんとも思わず……逆上
し、自らの仲間を……姫神さんを殺そうとした。

アウレオルス・イザードは明らかに私を馬鹿にした表情をしている
……。

「ねえアウレオルス・イザード、吸血鬼を見たことある？」

「見たことは無い、知ってはいる、その存在もな」

「吸血鬼は私たちと変わらない、違うことと言えばその若き、幼き容姿
をいつまでも保っていることぐらい……」

「なにを言う？」

私は笑みを浮かべたまま、錬金術師を見る。

「吸血鬼って言うのは頭を打たれても死ななければ失った体の一部を
再生すらさせられる……いくら日に燃やされようが再生もする……」

「不快、貴様の言動に疑問を抱く」

「でしようねえ」

左目を隠す眼帯を外す。

「この紅い眼が、見えますか?」

「ツ……なにが言いたい?」

私はアウレオルス・イザードに聞こえないようにぼそぼそとつぶやく

——妖魔結界、血呪封印、解除。

「〃鬼〃——解放……!」

本日三回目なんて、実に多様すぎだなあ、これ咲夜さんに知られたらめちやめちや怒られるんだろうなあ。

なんて思いながらも私は軽くなる体に快樂すら覚える。

甘い匂いは、しない……なら平気だ。

「貴様つ、何者!」

「私ですか……吸血鬼ですよ?」

笑みを浮かべて言うと、アウレオルス・イザードは驚愕に表情を歪めた。

針を首に刺すと、すぐに冷静な表情になり針を投げ捨てる。

私は今できる全力を持って未来を見た。

「銃をこの手に、弾丸は魔弾、用途は射出、数は一つで十二分ですか」

「銃をこの手に、弾丸は魔弾、用途は射出、数は一つで十二分……!?!」

私が同時に言った言葉は一期一句間違いない、いや同時というよりは私の方が少し早かった。

未来を見て、音を聞いた、それだけ。

——ただ、やけに疲れるつ。

「なっ!」

「なにを驚いているんです、私は吸血鬼ですよ?」

笑って言うと、アウレオルス・イザードは少しばかり後ずさる。

「人間の動体視力を超える速度で、射出せよ!」

銃を撃つが、当たるわけがない。すでに私にはどこに撃つか見えて
いるのだから……。

アウレオルス・イザードがもし『必ず当たる』とでも言っていれば
当たったんだろうけどねえ?

「なっ！」

「吸血鬼っていうのは、貴方の常識じゃ計り知れない存在だ、そう……貴方には私に勝てるビジョンが見えているの？」

「ツッ!?」

「ほら、言葉のままに現実を変えるなんて嘘っぱち、私のこの紅い眼には見えてる……貴方のその力は全部自分が信じるからこそできること、ほら、自分で信じてみてよ……吸血鬼を殺せるって」

私はこれまでにないような笑みを浮かべて一步一步、彼に近づく。

「ほら、してみなよ……貴方ならできるよね？」

そこで私は気づく。

「上条さん、姫神さんから手を離して平気ですよ」

「で、でも佐天さん……佐天さんはそのきゅ、吸血鬼なん、だろ？」

「平気よ上条当麻、涙子の言うことを聞きなさい」

「あ、ああ」

上条さんが手を離しても、私には何も無い。

「フフ……ハハハハハッ！」

私は笑ってアウレオルス・イザードを見る。

種は簡単、私はもう吸血鬼じゃない。

「な、なぜ吸血殺しが、血を吸いたくならない！」

「簡単なことだよ、私には聞かない……あんなの効くのは雑魚だよ、ほら……私を殺すにはその力を使うしかないよねえ、アルス・マグナ黄金練成をお！」

「さ、先の手順を量産、十の機銃にて同時射出！」

すべての弾丸は私に当たるが、私に痛みを与えない。

だって、信じてないもの、私を殺せるって……。

「痛くもかゆくもないけど……っ？」

「ひいっ！」

針を出そうとするが、動揺しきっているのか針をばらまき、かき集める。

「それがなきや、ハイにもなれないよねえ……雑音だらけの世界で、自分の思い通りにもできないよねえ？」

「ひっひいっ……あああっ！ 来るな、来るなあああっ！」

走って、私たちから遠ざかろうとする。

「きゅ、吸血鬼！　これが吸血鬼だということのかっ！」

「そうだよ、そして貴方の力はもう、なんの役にも立たないよ、ほら」
私が指差した方向には、地面に倒れ伏すことなく立っている紫さんとステイル。

「ひいっ!?　やめろ、考えるなっ、私の力を持つてすればこんな奴らにっ！」

「言葉のままに世界を歪める？　詭弁も良いところだ……お前の能力は違う、考えたことを現実にしちゃう能力、なんだからねえ？」

「こ、これがっ……ほ、本物の、吸血鬼っ!？」

私は、錬金術師に手を伸ばした。

「ううああああああっ!!？」

翌日、私は公園でステイルと話をしていた。

つまりは昨日の説明、もちろん紫さんもついてきたけど問題もないでしょう。

ステイル曰く、アウレオルス・イザードはすべての記憶を無くしていたそうだ……理由はと言えば、おそらく彼が最後に『自分は何も知らない』と思い込んだことにあるということ。

顔を変えて野に放ったって、大丈夫なのかな？

「まああなたにはともあれ、三沢塾は閉鎖、君にも礼を言いたいんだがなんだか馬鹿馬鹿しいんだよね、君がやったことはその眼を見せて吸血鬼を語り、アウレオルスを自滅させただけだからねえ」

「んなこと言ったってあの状況じゃあれが打開策でしょ、あたしだっでびくびくしながらやってたんだから」

「でも、先読みだけがわからない」

それに関してはわからなくても困る。

ある意味これは、能力として扱われるのかなあ？

「あはは、あれはちよっとした頭の回転ですよ」

「ふうん……」

「なるほどね、おっとそろそろ時間だ失礼するよ」

ステイルは踵を返してその場から去る。

すると、タイミングよく現れるのはインデックスと上条さんと姫神さんの三人。

私と紫さんが軽く手を振ると、インデックスが走って私に抱きついてくる。

「るいこー！」

「はいはい」

「ご飯食べよー！」

「おい」

軽く突っ込みにデコピンを入れると、額を押さえるインデックス。

上条さんと姫神さんの二人に笑いかけると、姫神さんは少しばかりばつの悪そうな顔をした。

わかってるのかな、私が混血だってこと……いや、わからないか？

「とりあえず、こっちが姫神秋沙あいさだよ」

「まあ、昨日ぶりですね」

「改めて、よろしく」

「はい」

握手をするけれど、何もない……？

頭痛とかすると思ってたんだけどなあ。

「あいさの能力は歩く教会の一部で封印してるからもう大丈夫なんだよー！」

「うん、ありがとうインデックス……貴女、佐天も」

「いえ全然大丈夫ですよ、まあこれからよろしくお願いしますってことで」

「うん、よろしく」

姫神さんがそう言って笑ってくれる。

とりあえずお互い手を離して食事に行こうということになった。

上条さんと私の割り勘にするのが妥当だろうけれど、いやそれにしても……。

「これとこれとこれ」

「あとこれも食べたいわね」

「良いセンスなんだよゆかり！」

「あら褒めてもなにも出ないわよ」

二人して色々と頼んでいく。

いやあ、良く食べますね紫さん、お祭りの時にご祭りでしたけどー

！ ハハハハッ！

私と同じく瞳に光が無くなった上条さんと顔を合わせて、私たちは頷いた。

これで良いんだけど、良いんだけども！

「不幸だあ！」

「不幸だあ！」

第五章 とある科学の表裏

◇プロフィール

- ・ 名前：佐天^{さてん}涙子^{なみこ}
- ・ 種族：人間
- ・ 所属1：柵川中学一年
- ・ 所属2：紅魔館従者
- ・ 所属3：人里の先生
- ・ 身長：162cm
- ・ 体重：48kg
- ・ スリーサイズ：82・60・82

・ 武器

特製ジャケット

バタフライナイフ×12（魔法で加工されている）

サバイバルナイフ×2（魔法で加工されている）

金属バット（相棒）

拳（ぶつけあえばわかりあえる）

・ 鬼の力

数秒先の未来を見ることができるとはなるが、その眼に見えるのは未来とも言い切れない

・ 龍の力

気と妖力を操れるようになり身体能力が格段に向上する

鬼よりも伸びしろがある

・ 容姿

当初は黒髪の子セミロングだったものの現在は若干伸びており、白梅の花を模した髪飾りをつけている

左目には常に眼帯をしていて、眼帯を外すと紅の眼が現れる
動きやすさを考慮してスカートは最近めつきり着ないらしい

・ 詳細（学園都市）

レベル5第三位超電磁砲とは友人関係
風紀委員に太いパイプを持っているようである

アンチスキルとは顔見知り

無能力武装集団とも交流がある

上条当麻と共に今代の禁書目録のパートナーとして認知されている

上記、イマジンプレイカー幻想殺しを持つ上条当麻とは相棒とも言える仲間

上条当麻が記憶喪失だと知っている数少ない人間の一人

・詳細（幻想郷）

今現在は幻想郷の妖怪賢者、八雲紫と暮らしている

氷の妖精チルノとは親友であり元同居人

鈴仙・優曇華院・イナバとはすつかり意気投合、友人と呼べる関係

紅魔館従者で異変にも出向いたこともある故に各勢力から一目置かれてる

人里で臨時教師を受け持っていて、生徒からの人気も高いよう

・詳細（裏）

左眼がレミリア・スカーレットのものを移植

左腕が紅美鈴のものを移植

当初はまだ両者の所有物として貸してもらっている状態だったが、すでに佐天涙子のものとなっている

血の力は、博麗霊夢の力により封印状態であり、妖怪の血が混ざっているわけではない

眼の力『鬼』と腕の力『龍』のどちらかを解放することによりどちらかの強力な力を得ることができるといえる

しかし解放を使いすぎれば徐々に血が混ざり半妖へと変化してしまふ

なんらかの能力をまだ隠している

・主人公たちとの関係

あの冷徹で鬼で動く悪夢で最強である楽園の素敵な巫女こと博麗霊夢すら友人と言える関係

霧雨魔理沙とは会うことも多いようで、悪友とも呼べる

十六夜咲夜からは妹のように思われていて、やけに心配している

魂魄妖夢は一度手合せしてみたいと思っている

上条当麻は記憶が無くなっているが、すっかり意気投合したようで仲はすっかり良いが記憶が無くなる前までのように恋愛感情は持っていない

御坂美琴は当初こそ友達の友達の友達ではあったが最近放っておけない友人とお互いが思っているほどである

47、落としもの

まあ姫神さんと改めましての自己紹介して、紫さんとインデックスに食事と財布の中身を食られた私と上条さんは、頭を抱えていた。

ちなみに現在上条さんの家なのだけれど、すっかり食べ疲れたのか眠っているインデックス。

紫さんは姫神さんと二人でテレビゲームをしている。

問題はそちらではないのだ、その二人は楽しそうなので放っておくとしても私と上条さんの家計のエンゲル指数がどんどん上がっていくことは問題だ。

うちは金髪アンテナ騎士王でも飼っているのかと……いやそんなことはない、なぜ私たちはこうなったか……。

まさか紫さんがあんなに食えるとは思わなかっただけに佐天さんは焦っているわけですよ。

一番困っているのは上条さんだろうけど、いつもインデックスの面倒を見てるんだし……。

「よし佐天さん、マネーカードを集めよう」

「マネーカードって？」

「ああ！」

いや、そんな流れを作ってる場合ではないですよ。

「いや、青ピと土御門……俺の友達から聞いたんだけど最近人気のない場所とか監視カメラの死角になる場所とかにばら撒かれてるらしいんだよ、現金が入ったカード」

「なんかきな臭いですねー、ていうかスキルアウトの縄張りに入って事件なんてこともあるでしょう」

「まああるんだけど……安くても20000円、高いと50000円なんていう大金も入ってるらしいぞ！」

「行きますか！」

これから紫さんに毎日をお腹いっぱいに過ごしてもらうためならその程度の労力はおしみませんとも。

私たちはこうして立ち上がった。

お互いの利害の一致……なのだが。

「涙子、勘違いしているようだから言っておくけど、今日はたまたまよ？　いつもはあんなに食べないんだからね？　知ってるでしょうけど」

——いや、もともと紫さんは結構食べますよねえ？

と、思いながらも私は頷いて、考える。

「ちよっ、佐天さん！　同志じゃないのかよ！」

「まあそうなんだけど、ちよっとなんと引つかかるんですよねえ」

とりあえず私はベッドに腰掛ける。

「マネーカード拾ったらあげますから」

「助かる！　……って俺、中学生に恵んでもらってるんじゃないか？」

「まあ私たちがインデックスのパートナーなわけですしね？」

そう言うってから私は、寝ているインデックスの頬を撫でた。

くすぐったそうにするインデックスを見てみると、自然と笑みが零れてくるのは、あの上条さんが必至で守ろうとしたこの子が今こうして幸せそうにいるからだ。

別に今の上条さんが嫌いなわけではない、優しいところや芯はまったく変わっていないからね。

とりあえずそうしていると、紫さんが突如ホットパンツから出てる私の足をつねった。

「痛い、なんでっ!？」

「別に」

フィツ、とよそをむいてしまった紫さんに私は本当にどうしたのだろうと思つてインデックスの頬から手を離そうとしたその時。

「あむっ！」

ガブリ——と音がした。

「痛い痛い痛い！」

「大丈夫か佐天さん！」

「この顎強い！　顎が強い！」

インデックスに噛みつかれている手が抜けるのは、それから三分ほどしてからで、その時には私の手は涎まみれで歯型がガッツリついて

いた。

なんでここまで不幸なのか！

私はとりあえず、お手洗いを借りながらそう思った。

それから私は紫さんを上条さんの家に残して移動をする。

まあ姫神さんと楽しそうにゲームやってたし良いでしょう、とりあえず私はいつも通りの動きやすい服装で軽く小走りをして病院へとやってきた。

早い話がお見舞いって奴ですよ、とりあえず目的の病室を聞いてそこへと向かう。

ノックをすると『どうぞ』という声が聞こえて、私は部屋へと入る「邪魔しまーす」

「佐天さんなのー」

中にいたのは春上さんで、それに枝先紿理ちゃんも一緒にいた。

ベッドで寝ている枝先さんと、椅子に座っている春上さん。

「どうも、昨日ぶり」

「うん、えつとき、佐天さん？」

「それで良いよ」

遠慮がちに呼ぶ枝先さんに私は笑顔で答える。

「じゃあ佐天さん……ありがとう」

笑顔で行ってくれる枝先さんから、感謝しているという気概があふれ出てるのを感じた。

そういう笑顔や言葉を見たり聞いたりすると、私たちがしたことは無駄じゃなかったんだなって本当にうれしく思う。

幻想郷で異変を解決した後の宴会とは、また別の喜びを感じる。

なにかを達成するということの最大の喜びはここだ……誰かのためになって、誰かを助けることができるから、そのためなら私は自分の身すらおしむ必要はないって、そう思う。

「佐天さんかつこよかったの」

「私も見えたかったなあ」

「無能力者として頑張りましたよ佐天さんは、あの勇士に惚れても良

いんですよー」

私はふぎけながらそう言っ胸を張る。

下手に謙遜してもあまり場が盛り上がると思えないししようがないね。

そして私はそこで数十分話をしてから、病院を出た。

枝先さんと春上さんの元気な顔が見れば佐天さんは満足ですよっと。

それから私は帰ろうと足を進めているとふと目に留まることがあった。

一人、女の子……って言ってもたぶん私より年上の高校生ぐらいの人が薄暗い路地裏へと歩いて行ったのが見えて、私はなんとなく着いて行くことにする。

気配を消しながら、私は青い制服を着た女の人を追いながら、そつと携帯で写真を撮った。

それから、すぐに初春に写真をつけてメールを送る。

間もなく帰ってきたメール。

『その制服は長点上機学園のもですね。ていうかなにやってんですか?』

そんなメールが返ってくるがとりあえず『なんとなく可愛い制服だと思っただけ』とだけ答えておいた。

なるほど、名前ぐらいは聞くよね長点上機学園……学園都市でも五本の指に入る名門校で能力至上主義で風紀委員ジャッジメントにすら在校生の能力を公表しないいけすかないとこ……。

でもあの人には高位の能力者特有の空気を感じない気がする。

私があるままその生徒をつけていると、路地裏につまれた酒瓶の下になにかを置いて、そのまま去っていく。

「なんだろう?」

私は軽く駆けて素早くそれを取る。

それは茶色い封筒で、その中身を見れば入っていたのは……。

「マネーカード?」

なるほど、上条さんの言っていたマネーカードっていうのはこれの

ことか、なら話は早い。

私はその人を追いかけることにした。

気配を消しながら、かと言って距離を空け過ぎず詰め過ぎず、とりあえず私なりに全力をもつてしてその人を付けていくと、ついたのは廃ビル。

高位の能力者であればどうなるかわからないと、若干なりとも覚悟をしてその人をつけていく。

階段を上った先にいたのは青い髪、さきほどの女の人だった。

「なるほど、ここが根城というわけですか」

私がそういうと、ゆったりと女の人は振り返り、私を視界に入れる。年齢は上条さんよりも上の17か18歳くらいだとは思いうけれど、幻想郷のことを思い出すとわけがわからなくなってくる。

とりあえず私は戦う気がないことをアピールして両手を一度上げて、すぐにポケットから先ほどのマネーカードを取り出す。

「これ、貴女が配っているものですよね？」

「……まさか着けられていたなんて思わなかったわ」

「巷で噂になっているみたいですよ……これ、どうしたんですか？」

私がそう言っても女性は答えない。

「なら質問を変えましょう、どうしてマネーカードを人通りの少ない場所や監視カメラの死角などに隠さなければならなかったのか？」

「学園都市の思い通りにならないよう、死角をなくす必要があった」
女性がぼそりとつぶやいた言葉を、私は完全に聞き取ることはできなかった。

なんだか疲れてそうなその表情を見ると木山先生を思い出すけれど、連想ゲームのようにアウレオルスを思い出して一概に信用することはできないという判断に落ち着く。

なにはともあれ……。

「とりあえず、詳しい話をお聞かせ願いますか？」

「それは無理よ」

「力づくというのは、わたくしの性分ではありません……」

礼儀を正してそういうけれど、女性はなにも答えない。

「それは無理ね」

「……能力者ですか？それでも私が貴女を倒すことぐらい」

「なぜなら、私の能力は寿命中断^{クリティカル because}……接触した相手は、一度触れてしまえばどこへ逃げようと必ず命を絶つ事が出来るわ」

—— なっ、なにそのチート能力ッ！

心の中で動揺して、心臓がバクバク動くけれど私はあくまでも外見で冷静さを保つ。

ここで油断を生むようでは目の前の相手には一瞬で殺されかねない、なら私はどうすれば良い？

「さあ、始まりよ」

女性が部屋の電気を落とし、部屋を真っ暗にする。

こうなってしまうっては仕方ないだろうと、私は眼帯を外す。

別に「鬼」を解放する必要はなく、これだけで眼帯に隠れていた方の眼は良く周囲が見える。

海賊が眼帯をつけている理由はこれだよ、暗い場所で良く見えるように……まあそんなことはどうでも良いか。

「っ!？」

私の紅い片目を見たせいか、動揺した姿が見えた。

走ったのか私の目の前にいる女性の手は私の首を掴もうとしてた……だけどころはいかない。

私はすぐにその手を首を横にして避けると、バクテンして背後に下がり内ポケットからナイフを一本出して構えた。

そして紅い眼にてようやくその種を理解する。

「なるほど、種は見破れましたよ」

私はナイフをくるくると回してから内ポケットにしまった。

諦めたような表情をした女性はゆっくりと歩いて電気をつける。

「まさか、見破られるとは思わなかったわ」

「あれですか、麻酔とかがついてるんですか？」

「ええ、麻酔針……好きにしない、なにが聞きたいの？」

そんな言葉に、私はいくつか候補を思い浮かべる。

「ともかく、目的はなんですか？」

「学園都市に死角をなくすこと……監視カメラや人の眼の死角を無くす」

「それによって得られる利益は？」

「……」

「突然だんまりですね」

「見逃してはくれないかしら？」

この状況でも冷静でいる目の前の女性に、私はどうしていいかわからないものの仕方がないとため息をつく。

とりあえずこの人を信用するに足る情報がない。

私はレミリア様みたいにながっつり未来が見えるわけでもないから……。

「私は佐天涙子です」

「布東砥信よ」

お互いが自己紹介してから、無言……。

話題の一つでも振ってくれればいいのにと思いながら、私は口を開く。

「見逃す件については私はただの一般人なのでどうこう言う立場でないのはわかってるんですけど……スキルアウトにそのせいで絡まれる人もいるんですよ？」

「わかったわ、貴女のような物好きがないとも言えないものね、あと二日もしたらやめるわ」

「悠長な、そのあいだにスキルアウトの縄張りに入った一般人は」

まあ確かに、全員が全員悪い人たちではないんだけど……。

「危ないものは危ないですよ」

「……わかったわ、明日には撤退するから……何も見なかったことにしてくれないかしら？」

「冷静ですね、劣勢なのに」

「yes……貴女は私に危害を加える様子はないもの」

お見通しってわけかあ、佐天さんも生憎か弱そうな女性を殴り倒せるほどじゃないんですよ。

「わかりました、降参するのはこっちになるとは」

両手を上げて参ったというポーズを見せてから、眼帯を付け直す。特にそれから私が何かを話すわけでもなく、布束さんが何かを話すわけでもなく、私はその流れのまま建物を出た。

あまりに淡泊だけれど、あの人とはまた出会うことがある気がする。

しようがないし、買い物でもして帰るかなあ。

買い物をして帰ると、もう紫さんは帰ってきていてテレビを見ている。

私が『ただいま』と言うと紫さんは微笑みながら『おかえり』と返してくれた。

とりあえず食事を作ることにし、私はエプロンをつけて髪を束ねてからまな板を出す。

「ふふ〜ん♪」

鼻唄を奏でながら料理をする私の横に、突然紫さんが現れた。

「どうしました?」

「いいえ、なんだかその姿も見慣れたわ」

クスクスと笑って言う紫さん。

そんな風に言われると、私も同じように笑ってしまうのは仕方ないと思うんだよね、最初来たときはあんな敵意のこもった眼で見られてたのに今じゃこんなに仲が良いんだもんね。

だからこそ、私はこの現状をとて嬉しく思えたし楽しく思える。

上条さんたちがいて、御坂さんたちがいて、紫さんがいて初春がいるこの学園都市……。

学園都市の裏側に触れた私だけれど……こんな平和な学園都市が、私は好き。

そんな学園都市を、きつとこれからも好きになって行くんだなって……。



「――次実験を開始します……準備はよろしいですか？」

「ああ、夜中にこんなのと二人だつてのになア、サービスの一つもねエのかア？」

「言葉の意味を理解しかねます。お茶でも淹れましょうか？ とミサ

――」

「ああ〜めんどくせエ……冗談もきかねえよなあ心も無い人形じや……さつことはじめようぜエ！」

「はい、絶対能力進化計画を再開します。とミサカは省略した上で対象である一方通行アクセラレーターに同意を求めます」

「能書き垂れてる暇があんならさつことはじめようぜエ、俺が最強になるための計画をよオ！ あはぎやはッ！」

白髪の青年は笑い声を上げながら、その紅の瞳で対象を見据えた――。

48、佐天病

彼女、佐天涙子の朝は早い。

理由はと言えば、同居人である彼女に朝御飯を作ることと家事を済ましてしまいたいからだろう。

そもそも彼女は数か月前まではここまで生活習慣が良かったとは言えないが、こうなった理由は幻想郷で数ヶ月を過ごしたということがあつたらかだ。

だからこそ、現在のこの体に染みついた生活習慣。

そして一方の自由な女こと、八雲紫は佐天涙子が食事を作る匂いで目を覚ます。

シャツとホットパンツという実に据え膳な様子でベッドから起き上がり背を伸ばして欠伸をすると、立ち上がって匂いの元であるキッチンへと向かった。

そこにいるのはもちろん佐天涙子であり、幻想郷と違いメイド服なんてあるわけもないので彼女は「戦闘に適した私服」の上からエプロンを付け、髪をポニーテールにし食事を作っている。

振り向いた涙子は紫の方を見ると、笑顔を浮かべた。

「おはようございます、紫さん」

ニコツ、と音が付きそうな笑みに紫もそつと笑みを浮かべる。わけがない、彼女は眠気眼のまま目をこすり一言『おはよう』と言ってから洗面所へと向かった。

一方の涙子とは言えば今巷で人気のアリサやらひとついで一め一やらの曲を口遊みながら料理を作るのだ。

今はもう問題もない、平和な日常が始まるのだから涙子のテンションも理解できるだろう。

朝食を食べながら、もうすっかり二人にも慣れた部屋のテレビを見る涙子と紫の二人。

軽い雑談をしながら食事を続けていると、ふと紫が思い出したように言う。

「そう言えば、今度また姫神秋沙が貴女に会いたいわって言ってたわよ」
「もうお礼はしてもらったんですけどね」

「貴女が吸血鬼だと見抜いているのかもしれないわね、まだ混血とも言えないほどののに」

「見抜かれて、ですかあ……あ、でも混血とも言えないってことはもうちょっと大丈夫ってことですね」

そんな涙子の言葉に、八雲紫は深いため息をついた。

紅魔館のメンツの苦勞がわかったということ半分、どっちにしろ言っても聞かないだろうと諦めたことの二つが要因である。

だが紫とて彼女がただ無駄に力を使う人間でないことはここ数日ですっかりわかっていいるのだ。

だけれどそれでも、彼女はあまりにも他人を助けようとしすぎるからこそ、紫は佐天涙子という少女の身を案じていた。

「混血になってからじゃ、遅いのよ?」

「わかってます……この力は、私だけの力でも無いんですから」

そういう問題じゃない、ただ混血になってしまえば悲しむ人間がいるということと、なによりも自分が最も不幸になるということを忘れるなど紫は言いたかった。

それでもそこでそれを言ってもしようがないと思っただからこそ、紫はもう黙った。

自分の不幸なんて元々天秤にかけないような少女なのだから、言っても仕方がないだろう。

呆れながらも、紫はそんな佐天涙子を素直に嬉しく思い笑みを浮かべた。

「まったく、貴女はしょうがないわね」

「……」

「ん、どうしたの?」

黙って自分を見る涙子に疑問を覚えた紫がそう聞いて小首をかしげた。

「いえ、やっぱり紫さんってそうやって笑うと可愛いなって」

そう言って笑う涙子。

紫がその後、真っ赤になつて狼狽しながら御飯をかきこみ喉に御飯をつまらせて一悶着、なんてこともあつたが気にすることはないだろう。

平凡な日常の一コマである。

その後、佐天涙子は一人で道を歩いていた。

どちらにしろ暇なのだからしようがないというものである。

だからこそ道を歩いていると、ふと見知った顔を見つけた。

「あれ、確か……」

「あら、貴女は……」

こうして佐天涙子と婚后光子は数度目かの邂逅を果たしたわけだが……。

「どうも、婚后さん」

「あら、ぶこ丁寧にお久しぶりですわ佐天さん」

あの死線を潜り抜けるのに必要な戦力であつた婚后光子。

友人である御坂美琴の友人であり、あの事件の重要人物の一人である佐天涙子。

お互い、印象はしつかり残っているし涙子に関しては婚后光子に借りすらあるのだが……それでもお互いが喋つたことは少なくともお互いそこまで一緒に居たわけでもない。

だからこそ友達の友達、いや共通の友達を抜かせばお互いは顔見知り程度の相手。

「佐天さんは、どうしましたの？」

意外にも、その沈黙を破つたのは婚后光子だった。

だからこそ涙子も安心してその意思に応える。

「私は暇で暇で仕方がないので少しばかり散歩を、婚后さんは？」

「私も暇でして少しばかりペットのエカテリーナちゃんのエサを……まあそれは後でも良いんですが、そうですね！ 佐天さん、せっかくここで会つたのも何かのご縁、是非私とお茶でもいかがですか？」

——え、新手のナンパですか？

なんてことを涙子が言えるわけもなく、というより思つたものす

ぐにそれは無いと自分で判断した。

冷静に状況を推測すると婚后光子という人物を知るには良い機会であると涙子はその提案に頷く。

「そうですか！なら、行きましよう！」

ビシイッ！ つと音が鳴りそうなほどの勢いで持っていた扇子で道の先を指す婚后光子に、再度涙子は頷いた。

若干引き気味だがそんなことはないだろう。

ただ、なんとなくだが婚后光子という少女と白井黒子という少女が相容れぬ理由が理解できた涙子だった。

結局やってきたのはいつもの喫茶店であり、知り合いとの遭遇もありえるので若干微妙な気持ちになる涙子。

なんだかテンション高めめの婚后光子と二人、で席に座っている涙子。

とりあえずなにかしら話をしようと思ったが、それより行動が早いのが婚后光子だった。

「改めまして、婚后光子ですわ」

知ってる。そう思った涙子だったが顔に出さずに……。

「佐天涙子です、そう言えば二年生ですよね」

「その通り、御坂さんとはお友達ですわ！貴女もそうですわよね？」

「はい、御坂さんには色々と良くしてもらって……」

「御坂さんのお友達であれば私、貴女と仲良くなれる気がしますわー！」
笑いながらそういう婚后光子を見て、涙子は自分が押されていることに気づく。

会話で主導権を握れていないというのは不思議なことにはずいぶん久しいことに感じられた。

「あはは、そうですね。私も婚后さんみたいな人、好きですよ」

驚いたような顔をする光子だが、すぐに表情に笑みを浮かべる。

「改めてあの時は協力ありがとうございました」ペコリ

「お友達を助けるためなら当然でしたわ！そうですわ、明日湾内さんと泡浮さん、いえ私の友達二人とプールに行く約束だったので佐

天さんもいかがですか？」

「へ、私ですか？」

「ええ、もちろん御坂さんたちも誘って、きっと大人数の方が楽しいですわよ！」

渾身のドヤ顔をかましながら言う婚后光子。

それにしてもだ、なぜこんな展開になったのかが涙子にとっては疑問なところである。

友達の友達であった婚后光子が、よもやここまでグイグイ来る人物だと見抜けなかったのは自分の眼がまだ甘いことだと理解して頷く。嫌ではないし、別に不快でもないのだからこれ以上考えるのは不毛だろうと思ひ涙子は笑みを浮かべる。

「じゃあ折角ですし、今からみんなを誘いましょうか」

「良いですわね、では私は湾内さんと泡浮さんを紹介するために電話をしますわー！」

「私は御坂さんたちに連絡入れますね！」

二人で笑いあつてから、二人して全員に『総員集合』の号令をかけた。

そしてその場に集まった面子全員が素っ頓狂な顔をしたことは言うまでもないだろう。

涙子知らない泡浮万彬と湾内絹保はともかくとして、一緒にやってきた御坂美琴と白井黒子と初春飾利は心底驚いた表情をしている。

それもそうだろう、最近まで顔も名前も知らずに特に話すこともなかった二人が一緒に居て一緒にそれぞれの友人に集合をかけたのだ。

「な、なんで婚后光子と佐天さんが一緒にいますの？」

「どういうことですか佐天さん！」

「あら御坂さん、ごきげんよう」

「一緒だなんていいタイミングでしたわね」

「湾内さんと泡浮さんこんにちは、ごめんなさい、色々あつちに聞きたいことがあつて」

「あれ、なんで私サイド妙に微妙な雰囲気なんでしょうね？」

「さあ？」

ともかく、全員が大人数が座れる用の席へと移動することとなった。

計七人という大パーティーなのだが、些か佐天涙子への視線は痛いものとなっている。

視線の内容とは『今度はなにに首突っ込んだ？』ということだが、美琴も黒子も飾利も心配してのことだと信じたい。

「湾内さん、泡浮さん、彼女は私の新しいお友達である佐天涙子さんですわ」

「まあ、それはそれは……常盤台付属中等部一年、湾内絹保です」

「同じく、泡浮万彬です」

「これはぐい丁寧に、柵川中学一年の佐天涙子です」

三人で自己紹介を済ますと軽くお辞儀をする。

様子を見るに初春たち三人は面識があるのだろうと理解して、涙子は現状を説明することとした。

些か三人の視線がおかしいので若干ながら動揺しながらも、集まった面々に光子との話の内容を言う。

「……ということ、明日プールでもいかがって婚后さんが」

話を終えると、飾利と美琴と黒子の三人が納得したのか数度頷く。

「でも、出会ってわずかでそこまでの仲になるとは……」

黒子が怪訝な顔をして涙子に言う、隣にいる飾利と美琴は苦笑するのみだ。

そんな面々に対して当然というような表情の光子が

「まあ佐天さんとは命を賭して何かをやりとげた仲でもありますし、お互い気も合いますし」

「ねー?」

「ねー?」

涙子と光子の二人が顔を見合わせてそう言う。

黒子と飾利の二人はまたか、と言う表情でため息をつくのだった。

佐天涙子という少女がどれだけ友達作りが得意か知っていたが、ここまでだったとはと心底驚いたというかなんというか、なんとも言え

ない二人。

そしてこの二人は知らない、佐天涙子の友達にはまだ妖怪やら巫女やら魔法使いやら吸血鬼やらがいるということ……。

その後、初春が風紀委員ジャッジメントの仕事があるということで、涙子は面々と別れて別の場所に行くことにした。

美琴と黒子がどこかに行くらしいが涙子は断って現在、ここにやってきていた。

病院のような通路を歩いて、涙子は目の前を歩く黄泉川に案内されてその部屋に入る。

「じゃ、待ってるから好きに話してくると良いじゃん」

「どうもありがとうございます」

笑みを浮かべて言う涙子に、黄泉川は同じく笑みを浮かべて涙子の頭を軽く撫でた。

教師と生徒というよりは、なんともはや近所のお姉ちゃんの子供のような扱いだがお互い気にするでもなくそのまま、涙子は部屋へと入る。

部屋に入ると相手は驚いた様子で涙子を見た。

「どうも、木山先生」

笑みを浮かべてそう言うと、反対に木山春生も笑みを浮かべて『こんにちは』と挨拶を返す。

「枝先さん、昨日会いに行ったら元気そうでしたよ」

「そうか、それは良かった。心配だったからな……彼女、春上衿衣はどうだ？」

「春上さんは外傷も無かったので検査が終わってもう初春と同じ部屋で」

「なるほど、そうなると一人暮らしは君だけだな」

「あれ、言ってませんでしたっけ、私今は紫さんと一緒なんですよ」

涙子がそう言った瞬間、場の温度が数度下がった気がしたが気のせいだと信じる。

「あのグラマラスな女性か？」

「そうですそうです、しっかり紹介しとけばよかったですねー」
苦笑する涙子に、春生はと言えばなんだか無表情に近いような表情。

なんだかわからないが危機感を本能で感じ取った涙子は少しばかり肝を冷やす。

「やはり君も大きな胸にそそられるか」

哀愁を漂わせてそう言う春生に、涙子は心臓が飛び出るかと思うほど驚く。

「いやいやいや、私女ですよ！大きな胸にそそられるってなんですか！」

「君はそっちの気があるのかと——」

「ありませんよお!？」

——いや、無い。無いはず。無いでいてほしい。

何度か心の中でそう思っただけで自分に言い聞かせる涙子だが、周囲から見れば彼女が「そうでない」ということの方が『無い』と思うだろう。フラグやらの乱立っぷりを見れば現在の佐天涙子は女性から受けている好意の方が間違いない。

幻想郷の「普通の魔法使い」から言わせれば『佐天病』である。

ちなみに佐天病末期者は重福省帆あたりだろう。感染者は数えていたらキリがない。

ともかく、旧上条当麻も感染者の一人だったのは言うまでもないだろう。

そして結局、佐天涙子は悶々とした気分のまま答えを出すことはできなかった。

「今回の件、本当にありがとう……君が居てくれなかったなら私もっと苦しい思いをしていたと思う」

「……いえ、乗り越えられたのはみんなが居たからで、私の力なんて微々たるものなんですよ」

「その微々たる力がなにかを変える力がある、私はそう信じてるよ」

微笑する春生に、嬉しそうに涙子は笑って返した。

それからあまり実の無い話を女二人でしてから、涙子は帰路へとつ

く。

黄泉川愛歩に『あまり余計なことに首突っ込んで怪我すんなよ』との達しを受けはしたが、彼女自身も涙子には無駄だろうとわかっていた。

だからこそ、言っておくことに意味がある。

彼女だって涙子と関わってしまったているのだから、心配もするのだ。

そしてその後、涙子はどこに来たかというところ。

「お邪魔しまーす」

「お邪魔するわね」

「いらっしやいなものー」

初春&春上宅にお邪魔していた。

理由はと言えば、初春が今日は風紀委員ジャッジメントで帰れないかもしれないということだ。

ならば仕方ないと、涙子は紫も連れて食事をごちそうするためこの家へと訪れた。

笑顔で迎え入れてくれた衿衣に笑顔で返すと、涙子は買ってきた食材で料理を作ることにする。

本来の涙子の料理テクニクと紅魔館で鍛えられた料理の腕により今の涙子の料理は店で出せるレベルのものとなっているが、それを知るのの一部の人間のみだ。

そして衿衣もその一人となり、目を輝かせて、どこぞのレベル5のように目に星を浮かべながら食事をとるのだった。

結局、御飯もすむとテレビを見ながら雑談するぐらいの三人。

「そう言えば明日のプール楽しみなのー」

「初春からメールもらった?」

「うん!」

「楽しみだねー」

——何かを忘れている。佐天涙子はそれに気づくまでに数秒の時間を要した。

そしてさらにその内容に気づくまでに数十秒、気付いた時には紫が

なんとも哀愁漂う表情をしている。

衿衣は『なにがあつたの?』と言わんばかりの表情だが、涙子は内心非常に焦り、それは冷や汗という形で誰にでもわかるようになった。

「紫さん、その誘おうと思つてたんですよ?」

「良いわよ、どうせ私はおばさんだもの」

「そんなことないですつて可愛いですよ、可愛い女の子ですよ!」

本当に思っていることを言っているだけだ。

だが紫はそれでも拗ねた。あの妖怪賢者と呼ばれた女が、まるで少女のように拗ねた。

ある意味、というより普通に結構な大事件なのだが佐天涙子という少女はまるでそれを理解せずにとだただ、友達を慰めるように紫のそばに行く。

それにどういふことか気づいた衿衣は、どこから得た知識なのかそれを涙子の耳元で教えた。

「え、それは……」

「やってみるの!」

満面の笑みで押し切られた涙子は、ダメだろうという気持ちで実行することにした。

「紫さん」

涙子は三角座りしている紫を後ろからギュツ、と抱きしめる。

「~~~~ツ!!?」

驚いて声も出せなくなる紫だが、涙子は顔が見えないので続けることとした。

「紫さんの水着姿、見てみたいな」

囁くように、甘い声で言った。

春上衿衣が一体どこでこんな知識を身に着けたのかは誰にもわからない。いや、わかるとしたら少女マンガが大量に置いてある本棚の持ち主ぐらいだろう。

だからこそ、衿衣はそれを見たことを涙子に実行させ、涙子はそれを実行した。

本来ならば男が女にやるであろう行為を、そんな風にしてしまった故に、そんな色恋沙汰など経験したことのない妖怪賢者はまるで少女のように顔を真っ赤にして、照れ隠しなのかなんなのか涙子の顎を拳で打った。

「おおー！」

その綺麗なフォームに感嘆の声をあげる衿衣。

床に倒れた涙子。

顔を真っ赤にしてその熱を押しさえるために洗面所に行った紫。

なにはともあれ今回ばかりは同情もされるであろう彼女、佐天涙子は思う。

——不幸、だ……。

49、平和な日々

翌日、今年オープンしたということでも人にぎわうレジャー施設へとやってきた佐天たち。

もちろん昨日話した『プール』がメインのため、更衣室から出てくる涙子と紫の二人。

なぜ二人だけかというところ、この施設に入っている店で水着を買ったからだ。

紫と涙子の二人分、思ったより痛い出費だが目を輝かせてる隣の紫を見れば別に良いと思った。

二人ともビキニだが涙子の方はというとパレオがついたものだ。

周囲からの視線を感じるのやはり紫がいるからだろうと考える涙子だが、彼女の鍛え鮮鋭されながらも女性らしさを帯びた体も十分注目の的となっている。

まあそれに気づかないのが涙子らしいのだが……紫自分は赤いビキニを不思議そうに見ている、それに気づいた涙子がどうしたのかと思う。

「いやね、たしかに水着もプールも知識にはあったのだけれど自分が着たりするのは別で……おかしなところないかしら？　というよりトップスって言うのかしら、これ後ろリングだけってだいたい露出度高いわね」

自宅に居る時はいつもラフな格好じゃないかと思うが、水着はやはりそれよりも露出度が高いし沢山の人に見られるからか、少し恥ずかしそうだ。

トップス正面の間、胸の間にあるリングに指を突っ込んで引っぱりたいというセクハラカマックスの願望を押さえながら涙子は笑う。

「似合ってますし、紫さんはスタイル抜群なんですから自信もってくださいよ」

「そ、そうかしら……？」

恥ずかしそうにしている紫の手を持つと、涙子はとりあえずいつものメンツと合流することにした。

少し歩けばいつものメンバー＋婚后光子たちは見つかるわけで、涙子は軽く手を上げて全員に笑顔を浮かべる。

紫がとっさに手を振り払ったが涙子は気にしない。

「お待たせしましたー」

「良くつてよ！それにしても八雲さんもお久しぶりですわね！」

「まあ、あれから数日だけれど、今日はありがとう」

婚后光子と紫が軽く挨拶を交わす。

紫と初対面である泡浮万彬と湾内絹保の二人が軽く挨拶を交わして婚后光子が紫と隣に並ぶ。

「さ、さすが佐天さんのお友達ですわね！」

紫のプロポーションに動揺する光子、そしてキョトンとする紫を驚愕した表情で見る涙子以外の面々。

そしてそんな中、最初に口を開いたのは絹保だった。

「いいな」

バツ、と絹保の方を見る面々。

ともかく「やくもゆかりさんじゆうななさい」の凄まじいプロポーションに気後れしながらも涙子はパレオを外して流れるプールへと入ろうとしたが、美琴が驚いたような表情で涙子を見る。

その眼になんらかの違和感を感じた涙子が体を両手で押さえた。

「さ、佐天さんは一体どんな生活を!？」

「え?」

「牛乳はやっぱり!？」

「ムサシノ牛乳ですよねー」

初春と美琴と黒子が顔を合わせて『それかあ!』と言っているが涙子にはわけがわからなかった。

仕方がないので、三人を放って涙子は紫の浮き輪に掴まることにした……浮き輪をしている理由は楽だからとかそういうことではない、ただ金槌なのだ。

まあなにはともあれ、今は平和な日々が愛おしい。

「佐天さん、初春さんたちはどうしたの?」

先ほどからあまり喋っていない春上衿衣がそう言うが、涙子は浮き

輪にしがみついて流されながら言う。

「さあー紫さんのプロポーションにあこがれたとか？」

「貴女も大概よね」

「へ？」

「なんでも……」

紫が浮き輪にはまりながらそう言うので、涙子は不思議そうな表情で衿衣の方を見る。

衿衣の方はと言うと、意味が分かったのか苦笑しながら涙子を見るのみ。

わけがわからない涙子は流れるプールとは別の場所でボールで遊んでいる光子と美琴と初春を見て、ふと疑問を浮かべた。

「あれ、白井さんは？」

「ここですよ」

「いつの間にも！」

気づけば近くを流れている黒子に驚く。

真つ先に美琴の方に行くと思っていたからだ。

「あれ、どうしたんです？」

「私もたまには愛に生きるのではなく、友愛に生きたいと思うことがありますよ」

「なんだか不気味に笑う白井黒子を白い目で見る涙子と紫の二人。

「な、なんですその眼は？」

「い、良いと思うの」

「春上さんの白い眼も意外と効きますのよ？」

「まあ、なにはともあれなんて水着着て来てんですか白井さん？」

「マイクロビキニと呼ばれる水着を着ている黒子に、涙子が問う。

「あら、佐天さんのような方こそ胸を張って着るべきでなくって？」

「嫌ですよ恥ずかしい」

「す、ストレートに来ますのね」

「さすがに胸に来たのか黒子がダメージを受けたような表情をする。

「お姉さまを悩殺、と思ったのですけれどお姉さまは佐天さんの胸ばかり」

「はあ、私の胸なんか見るわけないでしょう、白井さんと違って御坂さんは普通の人ですし」

「ど、毒舌ね」

「なんだか最近、涙子も黒子の扱いになれてきたのかこんな感じであつた。」

そんな涙子にも普通についてきている黒子も黒子なのだが、それにしても涙子の体系は黒子や衿衣と同級生と言うにはかけ離れている。

近くにいる紫のせいで見劣りはするが、正直数か月前までランドセルを背負っていたとは思えない。

「佐天さん、スライダー行きますわよ!」

「お、名指しですか」

「では私たちも」

「行きますよ」

光子の声に答えてそちらに行く涙子。

そしてそんな光子と涙子に合流して行く万彬と絹保の二人。

残されたのは流れる紫と衿衣と黒子の三人、そこで飾利と美琴の二人も合流する。

「もう仲良くなるなんて、さすが涙子ね」

「いやもう、ホントその一言」

「佐天さんったらすぐ女の子に手を出すんですから」

「その言い方は語弊を生むのー」

だが、否定できないと五人揃って頷いた。

「だって八雲さんもだいぶ佐天さんに甘くなってますし、向ける視線も優しいですよね」

「なっ! そんなわけないわよ!」

紫がそう言うのが泳げないので浮き輪から出ることもなく文句を言うのみだ。

いや、実際そうだと第三者の眼から見えてわかるのだから紫の涙子への心の許し方は尋常じゃないのだろう。

正直、紫も幻想郷の心配事さえなかったら当分涙子の家においても良いと思えるぐらいなのだが……。

「さすが佐天さんよね」

「相手が社会人でも容赦なしに落としますからね」

「私はお姉さま一筋でしてよー!」

「鬱陶しい!」

「ふふふっ、プールなら電撃は——へぶっ!」

「拳は使えるのよ!」

プールに浮かぶ黒子を放って、紫たちは流れる。

「そういえば佐天さんはずっと片目を閉じているけど大丈夫なのかしら?」

「慣れっていうかあの子、集中すれば両目閉じててもなんとかなるわよ」

「なにそれすごい」

さらっと言った紫の冗談だったのだが、美琴が疑問を持たずに信じてしまうあたり大概だなと思うのだった。

その後も珍しく、涙子も年頃の少女らしくプールで遊び時間を過ぎす。

まあ多少トラブルもあったが……。

「だから、やめろって言うてんでしょうが黒子おお!」

鈍い音と共に飛んだ黒子が涙子のビキニをついつい剥ぎ取るような形になり地面に落ち、起き上がる。

「あ、あのですね佐天さんこれは……」

「きやああああっ!」

「おぶうっ!」

初めて涙子の拳を腹に受けた黒子は、この攻撃を受けることもあるスキルアウトや犯罪者を若干だが、ほんの少しだが、同情した。

それほどの威力の拳を受けた後、黒子が紫や初春に酷い扱いを受けたりもしたがそれも楽しい思い出である。

ともかく、涙子は久しぶりにおもいつきりはしやいで遊んで、気持ちのいい疲れに身を委ねていた。

夕方、みんなと別れて紫と二人で歩く涙子。

そんなとき突然、紫が涙子の腕を引いた。

驚きながらも、涙子はとりあえず理由を聞くこととする。

「どうしました？」

「あのね、あの花火を見た場所に行かない？」

「ん、お任せあれ」

紫と共に、涙子は家とは違う方向へと歩いていく。

目的地は言うまでもなく、件の花火を見たあの高台である。

この時間帯だと学園都市を飛ぶ飛行船が見やすいだろうと涙子は想像して、喜ぶ紫の顔を楽しみにした。

そしてそこへと着くと、やはり紫は嬉しそうに飛行船を見る。

自分たちの住む学区だけでも一望できる丘、見晴らしは最高に良い涙子としても恋人なんてできたら来たい場所の一つ。

ちなみに涙子の中での恋人は男をイメージしている。決して彼女ではない、彼氏である。

そこらへんは涙子のために覚えておいてほしい。

「ねえ涙子、今日はすごく楽しかったわ」

「そうですねー友達も増えたでしょ？」

「そうね、向こうじゃ友達らしい友達なんて少なかったから、ここじゃ新鮮よねー」

幻想郷の賢者として君臨していた彼女と友達になろうなどという者は、そういないだろう。

当然と言えば当然なのだからしかたがないのだが、理屈では割り切れないところが紫にもあるから、だからこそ彼女は純粋な友達というものをやけにうれしく思う。

この世界では彼女の肩書など一部にしか意味をなさない。

ただふつうでいられる。

「でも私は、幻想郷が大事なのよ」

振り返って笑う紫に、若干ながらも見惚れる涙子。

「だから、もう帰らないと……」

「そんな突然ッ!？」

「突然つてことはないでしょう、境界を操るだけの力は戻ったわ……この世界と幻想郷と、その間にある結界もなんとかするだけの力がね」

なにを言っているのか、涙子にはわからなかった。

だけれど感覚的になんとなく言いたいことがわからないでもない。

きつと、涙子もわかっている。

「ありがとう、楽しかったわ」

「私も楽しかったです」

笑顔に向けてくる紫の背後に開く『スキマ』は、いつも見ていた色とわずかに違う気がするがそれがこちらと向こうを渡るときの何かの違いなのだろうと納得した。

ともかくだ、涙子も笑顔で送り出さなければいけないと笑顔を浮かべる。

そんな涙子の笑顔を見て紫は頷く。

「貴女の笑顔、好きよ」

「私も紫さんの笑顔は好きですよ」

「ま、また貴女はそうやって反撃するっ」

「反撃？」

わけがわからないという涙子だが、紫は夕日のせいかな僅かに赤くなった表情のままスキマへと入った。

「またね、涙子！」

「はい、また会いましょう紫さん」

お互いが笑顔を浮かべたまま、スキマが閉じる。

周囲に人々がいることなく、その場で一人でいて少しばかり……ではなくだいぶ寂しくなる涙子はどうしようかとベンチに座った。

もう、家に帰っても誰もいないだろう。

別れる時はもっと感動的になると思っていたから、少し呆気なかったなと涙子は苦笑する。

——さ、もう少ししたら帰ろうかな。

その後、もう少ししてから帰ることにした。

涙子が自分の住んでるアパート型の寮の階段を上がっていくと、自分の部屋の前に誰かがいるのがわかる。

いや、誰かというのも涙子の視力からしたらわかっているのだが、正直驚いていて半信半疑だからこそ誰かなのだ。

そして近づくと、本当に思っていた人物がそこにはいた。

「姫神さん……?」

「ん、待ってた」

そこにいたのは姫神秋沙。つい最近、涙子が紫や当麻、スタイルと協力して助けた少女だ。

確かに紫からも『近々会いたいと言っていた』的な話は聞いたけれど、どうにも突然というか、涙子にとってはタイミングが良すぎた。

正直、一人でいるのはさびしかったから良い。

「佐天さん、誰ですかその人?」

「ひいつ!」

背後からの声らしくない声を上げて秋沙の方まで下がる涙子。

そこに立っていたのは重福省帆。

そして丁度階段を駆け上ってきたのは姉御と呼ばれる女子高生だった。

実は名前をもう知っている涙子だが、姉御と呼ばれるような女性なんて彼女ぐらいだろうから姉御としか呼ばない。

「なんだよ、久しぶりに会いに来たらまた女連れかよ!」

「どどど、どうしたんですか!」

「前に借りは返せって言っただろ、晩飯一緒しようと思っただけ……まあ二人きりのつもりだったけど」

「え、なんだって? もう一回!」

巷で噂の難聴系主人公、とかではない。

あえて聞いたのだが、姉御が顔を真っ赤にしてプルプル震えだしたのでそれ以降は聞くのをやめておくことにした。

まあ涙子としてもそんな嗜虐趣味はないというものである。

だが問題としては言葉が聞こえておりながらも、姉御の真意までを

理解できていないところだった。

「でも食材足りませんね」

「でも鍋の食材大量購入してきたから心配いらねえよ」

「なんで真夏に鍋!？」

「タイムセールの子ラシみて買ってきたからな」

そういつて笑う姉御。

思ったよりも家庭的な一面を垣間見て若干見直しながらも涙子は、結構周囲のレベルが高いことに気づきながらドアを開けることにした。

だが困った、秋沙の話聞くことはできないだろうと思いつながらも三人を引き連れて中へと入る。

人当りが良いというか、人を引つ張っていく姉御がいるせいか秋沙の方もつつがなく自己紹介を終えたようだ。

自称魔法少女は完全にネタだと思われているようだが、ある意味安心した。

冷房をつけて、涙子は鍋を用意するとテーブルの上へと置く。

お椀やらを用意してミニコンロの火をつけると出来上がるのを待つ。

「いやあ、久しぶりの鍋だ!」

「楽しみです、姉御さんもありがとうございます」

「お肉楽しみ」

「良いつてことよ!」

姉御は笑って楽しそうに待つ。

仲良さげな三人を見て笑みを浮かべる涙子を見て、三人も笑う。

それに少し驚いて『どうした?』という表情を浮かべた涙子。

「いや、元気なさそうだったからさ」

「そうですね、やっぱり元気な佐天さんが私たちも好きです」

「うん、あまり出会ってから時間は経ってないけど、元気そうな姿が一番……」

三者三様言葉は違えど、三人とも涙子を案じていたのは確かなようで、涙子は嬉しくなった。

確かに紫が帰れたといううれしさもあつたが、なによりも紫がいなくなつた寂しきは大きい。

だからこそ、こうして騒がしいのが嬉しかった。

「みんな、ありがとう！」

今度は三者三様違う反応、というわけでもなく全員が涙子から顔を逸らす。

「ええっ!?! 私なんかしましたあツ!?!」

そういうが、誰も反応をしてくれないので涙子はついついため息をついた。

不幸、ではないのだがなんとも言えない感覚に陥りながら鍋を開いて中の様子を見る。

しっかりとできているのを確認してそれぞれのお椀に入れたころには、三人も復活済みであつた。

「さて、食べましょうか」

四人で手を合わせて同じ言葉を口に出した。

少なからず、涙子は現在不幸ではないだろう。

向こうに行けば、また紫とも会える。

それを楽しみにして、涙子は笑う。

——平和な日々が、続きますように！

50、これがナンパというものですか

八月十五日。

あれから四日経って、今日も今日とて猛暑日。

汗を掻いて、それがまたシャツをベトベトにして気持ち悪さ、不快さを倍増させていく、そんな日の夕方は少しばかり涼しくなり、心地いい風を浴びながら歩くのは佐天涙子。

昼間はセブンスミスに、初春飾利、御坂美琴、白井黒子、春上衿衣の四人と共に行った。

美琴がやけにテンションが高かったが、それでも悪いことがあったわけじゃないなら良いし、なにより暑さもすっかり吹き飛んでいたらよかったと言える。

だが体だけはどうにもならず、結局みんなと別れた後にはベトベトになったシャツに不快感を感じながら歩くしかない。

まあ、汗を掻いた一番の原因は彼女が薄いとはいえジャケットを羽織っているからだろう。

ナイフがたくさん入ったジャケット、見つければ一発アウト。

「さて、どうしようかな……」

額の汗をぬぐって、上条当麻のところに遊びに行くのもありかなとも思う。

上条当麻とインデックスの二人とは一昨日に食事をしたが、インデックスの代金を割勘してとりあえずダメージをお互いで半減させたがそれでも痛い出費だった。

たまにはそうして当麻に協力しなければ、彼のサイフポイントはもれなくゼロになるだろう。

一応、自分だってインデックスのパートナーなのだから……。

「あれ、御坂さん……？」

ふと涙子の視界に入った茶髪の少女、その少女が常盤台の制服を着ているのを確認してから少しばかり走って追い付くとその肩を軽く叩いた。

「？」

「どうも、御坂さん……ん？」

涙子にはその少女がなぜだか、御坂美琴とは違う人物に見える。姿形は同じであり、服装も同じだ。

頭につけているゴーグル以外ならば見かけは一切変わらない。

「御坂さん、じゃないですよね……？」

「私はミサカですと、ミサカは疑問を浮かべながら答えます」

目の前の人物はミサカ。

それを聞いて、涙子はなんとなく察した。

「御坂美琴さんの妹さんですか？」

笑顔を浮かべながらそう聞くと、ミサカと名乗った少女が少し迷った表情をした後、頷く。

「はい、私はお姉さまの妹です」

「お姉さまってことは御坂さんの妹かあ」

涙子は脳内にて『きつと双子の妹なのだろう』と結論を出す。

「じゃあ私より年上ですね」

「それはありません、とミサカは実年齢を隠しながら答えます」

「え、じゃあ双子とかでは無いんですかあ……じゃあタメ口で良いかな？」

「別に構いません、とミサカは寛容な器を見せつけ答えます」

愉快な人だな、と涙子は判断した。

「そう言えば、名前は？」

「ミサカの名前はミサカですと、ミサカは問いに答えます」

御坂ミサカ。

おもしろい名前だなあと、失礼ながら涙子は思う。

だけれどこれをいじるのもなんだか気が引けるので、涙子はとりあえずどんな会話をしようかと考える。

だが、どうにも上手い言葉が出てこないの、涙子はとりあえず笑みを浮かべてみた。

「一緒にお茶でもどうかな？」

そう行つて笑うと、ミサカは黙って涙子を見た後に、口を開く。

「これがナンパというものですか、と軟派な少女をミサカは珍妙なも

のを見るような目でマジマジと見ます」

「長くてひどい！ ていうかナンパもしてませんし私は軟派じゃありません！」

「突然お茶を誘っておいで？」

ミサカの言葉に返す言葉も無くなった涙子だが、そこでふと気づいた。

女の子同士でナンパとか言うのかと……。

「女の子同士だし、知り合いの妹さんだから別に不思議ないよ!？」

「まあなんとなく言ってみただけでここまで引つ掛かるとは思ってもみませんでした、とミサカは嘲笑します」

完全に馬鹿にされたと気づくのに時間はいらなかった。

圧倒的敗北感に膝をつきそうになる涙子。ちなみに心は完全に膝をついていたが、それはともかくとしてもとりあえず仕切りなおすために頬を一度叩く。

そしてふと気づいたことが一つ、ということ、で紅魔館にいた頃を思い出しながらミサカの片手を取り笑う。

「申し遅れました、私は佐天涙子と言います……一緒にお茶でもいいかですかお嬢さん？」

これをほぼ素でやるのが佐天涙子である。

無表情のままのミサカが少し呆けた顔をするも、すぐに元に戻った。

涙子も「少し」キザツたらしかったかな、と思いながらいつもの雰囲気に戻す。

「では、行きましょう、と……」

「涙子で良いですよ」

「佐天からのご馳走を楽しみにミサカはついていく決意をします」

「あえて佐天って呼ばれた！ ていうか私奢るの前提なの、なのですか、なんですかの三段活用！」

涙子は大声でツツコミを入れるのだが、ミサカは気にしていない様子で涙子の腕を掴み歩きだすのだった。

ちなみにミサカが歩き出したのは逆方向ですぐに涙子がミサカの

腕を掴んで歩くことになる。

来たのは、涙子の家近くの小さな喫茶店。

紅茶を二つとチーズケーキを一つ、イチゴパフェと一つ頼んで、優雅な曲が流れる静かな店内にいるまた静かな二人。

客も決して少なくはないし話し声もするが、学生たちがしよつちゅう集まるファミレスなどよりはよほど静かである。

たまにはこういう雰囲気も良いだろうと思っていると、ミサカが自分のことを見てきていることが気になった。

「どうしたの？」

「いえ、佐天は眼を怪我でもされているのですかとミサカは率直に聞きます」

「ああこれですか……まあいろいろありまして」

笑う涙子に、首をかしげるミサカ。

まあ正直、涙子も突然の変化や異様な物を見る目で見られたくないだけであり、ここに来るまでミサカの人と成りはしつかり見たので別に構わないかなと眼帯を外す。

その内側で閉じられた目をそっと開くと、一紅色ヘスカーレットの瞳を晒した。

少しばかり目を見開いたミサカに、涙子は苦笑で返す。

「こんな感じなので、あまり人に見せたくなくて」

「綺麗な目を、どうして隠すのですかとミサカは素直な感想を述べます」

「ははは、まあ色々あったんですよ」

恥ずかしそうに頬を掻いてから、もう一度眼帯を付け直す涙子。

そうするとタイミングよく運ばれてくるお互いの注文したメニュー。

涙子の前にはストレートティーとチーズケーキでミサカの前にはミルクティー、そしてイチゴパフェである。

メニューが運ばれてくると、なんだかミサカが目を輝かせているように見えた。

「どうもです 姉御さん」

「な、なんでまた来てるんだよ、一昨日来んなっただろ……っ」
白と黒の可愛い制服を着用している姉御と呼ばれる女子高生に笑いかける涙子。

顔を赤くした姉御はそれほど短くもないはずのスカートの丈を下に伸ばそうとしながら言う。

曰く、バイクが早く欲しいから頑張つて貯めているそうだ。

「似合ってるんだから普段もそういう可愛い恰好すれば良いじゃないですか、スケバンスタイルやめて」

「なっ、馬鹿にすんな！」

「してませんよ、ただ姉御さん可愛いんだから」

「う、うるせえばか！」

そそくさとホールから出て行ってしまった姉御を見て『もったいない』とため息をつく涙子。

ふと視線が気になってそちらを見るとイチゴパフェを備え付けられた長いスプーンで食べながら、ミサカが涙子を凝視していた。

どうしたんだろうと目を合わせたまま紅茶を一口飲む。

「貴女のような人を唐変木と言うんですね、とミサカは珍妙に観察します」

「突然!? ちょっとわけわかんないから！」

「いえいえ、ここはミサカは黙っていた方がよさそうなので黙ってパフェを食べながらそちらのチーズケーキというものをチラチラと見ます」

露骨な視線と露骨なねだりに涙子はため息をついて笑うとフォークでチーズケーキを一口サイズ取る。

そして下に手を添えながらもミサカの前へとそのフォークを持って行った。

顔の前にチーズケーキを持ってこられたミサカは首をかしげる。

「どうぞ、ほらあーん」

「あーん」

ミサカの口にチーズケーキを入れると、ミサカは頷く。

「これがあーんの味ですか」

「いや、チーズケーキの味だから」

「ですがこれは本来、親しい男女がやるものだ」とミサカは学習しています」

「別に友達でもやるよ。その知識与えた人はどんな初心な……間違いなく彼氏いない歴〃年齢だね、まあ私もだけど」

そう言つて笑うと涙子はチーズケーキを自分で食べる。

紅茶と良く合うなと思いつつも自然と頬が上がっていくのがわかつた。

おいしいものを食べれば当然そうなるだろうと頷いてからミサカを見ると、再びイチゴパフェを頬張っている。

「あと、あちらの店員が佐天のことを睨んでいるように思えます」

「姉御さんなんで睨んでんの!?!」

驚く涙子だが、目があったとたん姉御は涙子を見るのをやめて店の裏にまた引つ込んでしまった。

あれで良いのだろうかバイト。と思いつつもとりあえず涙子は再び一口食べて紅茶を一口飲む。

実に美味であると、自分もチーズケーキを作ってみようと思った。

「おいしい?」

「はい、とミサカは初めて味わうパフェの味に胸を踊らせます」

「とても踊ってる表情じゃないけど」

苦笑してそういった。

その後も、涙子はチーズケーキを食べながらミサカと雑談したりし、ティータイムを楽しんだ。

それから数十分後、涙子とミサカは暗くなってきた道で分かれることとなった。

「それじゃあね、ミサカ……ちゃん?」

「ミサカで結構ですよ」

「どうにも慣れないんだよねえ、御坂さんを御坂さんって呼んでるし」

「難しそうな表情をする涙子が、なにかを思いついたのか手のひらを拳でポンツと叩く。」

頭の上に電球が浮かんだようにも見えないでもない。

「じゃあミーちゃん！」

「センスの欠片もねえな、とミサカは期待外れを通り越して呆れ果てます」

「ひどくない!?!」

ミサカの馬鹿にするような笑い＋容赦ない言葉に涙子は崩れ落ちそうになりながらもしつかりとツツコミを入れた。

だがミサカは馬鹿にするような笑いをやめると、両手を胸に当てる。

「でも、はじめていただいたあだ名というものを、ミサカはせつかなので使わせてあげようと寛大な心で受け入れます」

なんだか、激しくない美琴のようなものと涙子は思った。

素直ではないのは確かだが、それでも素直なところもある。

そんな可愛らしい“友人の妹”ではなく“自分の友達”の手を取って握手を軽く交わして話す。

「それじゃまた会ったら一緒にお茶しようね、ミーちゃん！」

「はい、それではまた機会がありましたらと次回の食べものを期待しながらミサカは佐天に手を振ります」

「はいはい、またね！」

手を振りながら涙子はその場を去ると、ミサカは振り返って片手を胸に当てながら口を開く。

「ミサカ10031号はこれより、第一次外部研修を終えて帰還します」

そして、ミサカはどこかへと歩いていくのだった。

一方、ミサカと別れた佐天涙子は近場の自宅へと帰ってくると、テレビを見ながら携帯端末から御坂美琴にメールを送ることにした。

内容はと言えば『今日、御坂美琴の妹に会った』ということである。

それ以外はないが、このメールを送った後に帰ってきたことで話を膨らませればいいだろうと涙子はスタンド式の充電器に端末を置く。

なんだかんだで楽しかったなと思いつつ、涙子は背を伸ばして

ベッドに横になりながらテレビを見る。

「ネットマでもやろっかなー」

すぐに上体を起こすと、涙子はネットを起動するのだった。

それからしばらくして、10時を過ぎる少し前に白井黒子から電話がかかる。

こんな夜遅くにどうしたのだろうと思ってその電話に出ると、向こうからは静かに黒子が安堵のため息をつくのがわかった。

そんなにこの時間に自分が電話に出たのを安心されるようなほど普段の行いが悪いだろうかとも思うが、最近の行動を考えると心配されても仕方ないかなと思わないでもない。

『夜分遅くに申し訳ありませんの』

「別に良いですよ……それにしてもどうしたんです？」

『いえ、お姉さまがしばらく前に出かけまして……』

疑問に思うのと同時に、涙子は眼を細めた。

「御坂さんが？」

『ええ、そうですよ、まだお戻りになられなくて、もしかして佐天さんのところかなー……なんて』

パソコンのマウスから手を放して、背もたれに体重をかける。

声音などはあくまで変えずにいつも通りを意識しながらも、新手の事件かと疑う。

「うちには来てませんよ？ 初春のことか電話しました？」

『その初春からあって——』

「ん？」

『ああいえ……っそうですよ、佐天さんのところでもないとなると』

心底不安なのか、少し怯えているというか上ずっているというか、そんないつもと違う黒子の声。

せめて気を紛らわそうかと涙子は名案を思い付いた。

美琴がどこかに行ってしまったということの推測。

「白井さん、これは私の推測ですけど……もしかして御坂さん、男の——」

『そんなことあるわけありませんのッ!!』

携帯端末越しに怒鳴られて、涙子は急いで端末から耳を遠ざける。それでもなお聞こえる声に涙子は片目をつむって苦笑した。

『なあんでお姉さまがそんなはしたない! 佐天さん見損ないましたわ! お姉さまはわたくしの、わたくしだけのキーッ!』

「冗談ですよ! 冗談!」

だが、そう言ったとたん電話が切れてしまう。

何度か涙子が名前を呼ぶが返事は聞こえてこないし、端末からは通話が切れているという証にツーツーと音が聞こえてくる。

涙子は立ち上がると、着替えてから眼帯をつけてジャケットを羽織った。

「なんだかなあ、もお!」

夏休み中によかったと思いつながら涙子は外へと飛び出した。

結局、美琴が見つかることはなく深夜1時を過ぎた頃に涙子は自宅へと戻る。

眠気眼をこすりながら鍵を閉めるとジャケットをかけて眼帯を外し、カーペットの上へと寝転がった。

黙ったまま天井を見つめ数分、起き上がると洗面所へと向かい鏡で自分の顔を見る。

「この目と、この腕……私はその気になれば人間をやめることもできる」

けれど、それで悲しむ人間が山ほどいるのを知っているし、妹紅のように周囲に取り残されるのは怖い。

初春飾利や春上衿衣、白井黒子や美琴、それに木山春生や姉御や重福省帆たち……上条当麻やインデックス、浜面仕上に姫神秋沙。

そんなこの世界の友達たちが年を置いても、自分はただ変わらないうちにありその最後を見ることもかなわぬまま世界から弾かれ生きていく。

ようやく、最近になってその怖さが理解できた。

だからこそ、紫たちも『迂闊に使うな』と言っていた意味がわかる。「でも、その約束守れるかなあ」

できる限りは使わないつもりだが、自分にできるだろうか？

人を守るためにこそ使うべき力を自分は正しく、適材適所無駄なく使うことができるだろうか？

そんな自問自答をくりかえしながらベッドに横になっている内、彼女は眠ってしまっていた。

起きると時刻は朝の六時半であり、涙子は黒子へと電話をする。

もう少し待つはめになるかと思いきやすぐに反応はあり通話へと切り替わった。

『ああ、佐天さん』

「御坂さんは？」

『昨晚戻られました』

探してしまったが、見つからないはずだと頷く。

「大丈夫でしたか？」

『ええ、ご心配おかけしましたの』

「ところで男の——」

『だから、それは違うと言っていますでしょう？』

なんだか優しい声音に、安心したのだろうと察して涙子も安心する。

それから数度言葉のやりとりをしてから電話を切ると涙子はベッドの上で背中を伸ばして端末を見た。

御坂からのメールが6時頃に入っており、その内容を見る。

『妹のことは気にしないで忘れて』

たったそれだけの言葉なのだが、たったそれだけの言葉だからこそ、涙子は疑問に思った。

隠していたならもつと反応しても良い。だが隠していないのなら『忘れて』という言葉が出てくるとは思えない。

だからこそ、涙子はそれを深く聞かないにしろ調べてみようと思った。

人のプライベートなことだとはわかっているのだが、妙な悪寒が涙子を行動させるのだ。

結果、その日にいつもの五人で集まれば美琴は妙なテンションで自分たちにファミレスのメニューを奢った。

曰く、昨晩は突然星が見たくなるような感傷的な気分に浸って星を見に行ったそうだが、信用するべき要素は何一つ無いなと思ひ涙子は黒子に視界を移す。

目が合うと少し驚いたような表情をしてから目を逸らした。

——間違いなく、なにかあったはずだ。

「そういえば御坂さん、昨日のコードのこと何かわかりました？」

「えっ、ああそれは……うん」

うつむくと、美琴の様子が変わった。

「わかってるから……私、みんなのこと見えてるから……」

そういう美琴を見て、涙子は追及をやめて腕をバツと上げる。

「ゲーセン行きましょう！ パンチングマシンで今日は新記録出せる気がします！」

そんな涙子に続いて、飾利や衿衣も同意してまたプリクラが撮りたいなどの話を始めた。

美琴がそんな様子に驚いて顔を上げると涙子は笑顔を向ける。

無言だがしつかり意図は伝わったようで、美琴は頷いた。

「だけど、本当に困ったら相談してくださいね……友達なんですから！」

そう言うと、美琴は笑顔を浮かべる。

なんだかんだで、奢ってもらった食事を済まして、五人そろって店を出ていき道を歩く。

そして歩きながらも、たまに後ろに視線を移すと美琴は思いつめたような表情をしている。

——佐天さんはまた、首を突っ込んでしましうかね！

心の中で苦笑しながら、涙子はこれからのことを考えるのだった。

51、毒舌シスターと噛み付きシスター

あれから二日、私こと佐天涙子は白井さんの様子がおかしいのが気になって……いや、実際に様子がおかしいのは御坂さんの方なんだけれど、ともかくそのせいもあつて様子がおかしい白井さんと一緒に四葉のクローバーを探した。

いやいや、別に私がおかしいわけじゃなくて、四葉のクローバーを探すことになったのはいろんな理由があるわけです。

まあその理由はと言えば白井さんがパトロール中に見つけた小学生が友達のために『ソロ目のマネーカード』という希少な物をプレゼントしたということ、曰く幸せになれるだとか……。

いや、それはともかくとして白井さんはその子のために色々としたというのが「顔に出ていた」ので、初春と共に協力して私は鼻を利かせてマネーカード探しをしていたんだけど、すぐに固法先輩が四葉のクローバーを探すという妙案を出したというわけだ。

結局、その後みんな四葉のクローバーを探したというわけだ……。

現在は小学生のみのりちゃん、固法先輩と初春の三人と別れて私と白井さんは二人で歩いていた。

「ふう、少しすつきりしましたわ」

「なら良かったです。私も白井さんが元気ないといやですからねー」

「あらそれは嬉しいこと言つて下さいますのね」

ニコツと笑う白井さん、やっぱり元気になったという言葉は本当のようだ。

「佐天さんは、私のこと心配してくださるのは結構なのですけれどご自愛もしていただかないと困りますわよ」

「あ、あはは……」

さすがに耳が痛い。

初春をはじめとして御坂さんや白井さんにも結構迷惑をかけている自覚はあるしねえ。

とりあえず軽く謝ると白井さんはため息をついて笑う。

お互い、そこで分かれて違う道に行く。

とりあえず私が歩いてみると、道の端に影が見えた。

私を『見つけた』という目で見てるのはその顔に出ている。

壁に隠れているつもりならばずいぶんとお粗末な隠れ方だとは思
うけれど、まあ見つけれられるつもりで隠れているんだろう。

うん、さもなくばちよつとおつむが残念な子になつちやうもんねー
と佐天さんは近づいていく。

「なにやってんのミーちゃん？」

「見つかってしまいましたと、ミサカは佐天の空気の読めなさにかっ
かりします」

「ひどいー… ていうか、どうしたの？」

ミーちゃんは少しだけ黙ると、視線を動かす。

私がミーちゃんの視線の先を見ると、そこには前に行った喫茶店が
あった。

ああ、そういうこと……。



ということで結果、佐天涙子とミサカ10031号とミーちゃん
は今日もケーキ屋へとやってきた。

佐天涙子はその番号の意味を知らなければ番号自体も知らない。
まあ知ったからと言って涙子がどうするというわけでもないのだが、
とりあえずミサカとミーちゃんと一緒にこの前と同じようなメ
ニューを頼んで座って待つ涙子。

どうやら今日は姉御はいないようだと思っていると、奥から頼んだ
紅茶二つとパフェとショートケーキを持ってきたのは姉御だった。

少し怒ったような表情をして、姉御は注文されたメニューを置く。
「また来やがって」

ミサカの前にミルクティーとパフェを置き、涙子の前にストレート
ティーとショートケーキを置く。

すると姉御はその席の三つ目の席に座った。

無言の涙子は、そつと窓の外に顔を向けて頭を抱える。

「ど、どうしました？」

「ちよつとぐらい、ダメかよ?」

「違いますけど……」

そう答えた涙子は心底、姉御が『ダメ』とは思っていない。

だがそれでも、なんとなくだが嫌な予感がするのだ。理解できてはいないが、どこか第六感がいけないと警告音を鳴らしていた。

理由はわからないのだが、なんとなくダメな気がするのだ。

「あのさ、黄泉川の姐さんに色々聞いたけど……お前つて頭おかしいんじゃないの?」

「なんでですか!?!」

「いや、前の事件の話とか聞いたんだけどお前つて別に自分になんの得も無いのにあんなことしたんだろ?」

そういわれるが、涙子としては不思議でならなかった。

「そんなことないですよ?」

「はあ?」

「私が、みんなを助けたいって思ったんです。これじゃおかしいですか?」

「でもほとんど知らない奴らだったんだよな、出会って一週間も経ってないような奴とか」

心底不思議そうに言う姉御だが、確かにその通りだと周囲は理解するだろう。

出会って数日の少女のために、そこまでするなんていうことは通常であれば「ありえない」ことだ。

だけれどそれをやってのけるのが佐天涙子であり、この学園都市には同じような人間がさらにいる。

「あたしにはまるでわかんねえよ」

「でも、姉御さんはそんな私を助けてくれたじゃないですか、うれしかったです」

ニツと爽やかに笑う涙子。

そんな涙子を見てから、姉御は顔を赤くして慌てて立ち上がった。

「も、もう仕事に戻る！」

さつきと裏へと引っ込んでしまった姉御を見て、涙子は『可愛いな』と笑う。

からかったつもりでもないが、涙子は彼女が『褒められて照れた』と思っ込んでいる。

だがどうして姉御が引っ込んだかぐらいは、ミサカでもわかった。

「佐天は一度脳を開いてもらった方が良いんじゃないでしょうかと、ミサカは佐天の頭を心配します」

「ひどい！」

これは酷いと、涙子はため息をつきながら紅茶を飲む。

だがしかし涙子としてはそういうられる理由もわからなければ、言われる言われもない。

自分はただ友達と親しく話していただけだ。

まあ直球に言えば姉御は佐天涙子の「強さ」と「漢気」に惚れたのだ。

だが、それでも佐天涙子という少女はノーマルであり、同性を好きになるような特殊な性癖を持つてゐるわけもない。

だからこそ、相手が顔を赤くしようとも気づくことはなく、相手をソツチの世界に引き込むくせに自分はソツチの気が一ミリたりともない非常にたちが悪い存在になっている。

つまり、姉御やら重福省帆やら木山春生は非常に残念な相手に惚れたということだろう。

佐天涙子は、そんな姉御やらのことを気にする様子もなく紅茶を一口優雅に飲む。

そしてティーカップを置くと一息ついて茜色の空に視線を向けた。

「それにしても、いろんな事件に首突っ込んだなあ」

「先ほど言っていたような事件にですか、とミサカは興味津々で聞いてみます」

「まあ色々ありすぎて……」

——というより、話せない話が多いんだよねえ。

「とりあえずさつき言っていた事件とか、ほかにもシスター助けたり」

「どっかから変な電波でも受信しましたか？」

「だから毒舌!? いや、マジな話なんだって、ちよつと強いまあ能力者がいてそいつらと戦ったりしたんだよ」

「そのシスターさんも、あまり会ったことがない相手だったんですか？」

「そうだね、むしろ出会って一目でそんなことになってき、今じゃすっかり仲良しだけどね」

笑う涙子を見て、ミサカは一つ頷くといつの間にやら最後の一口のパフェを口に放り込み、食すと紅茶を飲む。

少しばかり、雰囲気が変わった気がした涙子だが、そこでミサカがあまりに無表情なのが気になってきた。

どうすればもつと感情をガンガンあらわすようになるだろうと思いなながらも、紅茶を飲み干す。

それから、涙子とミサカはまた昨日と同じような場所で分かれることにする。

「では、これで」

「うん、気を付けてねミーちゃん」

「了解です。とミサカは相変わらずセンスのねえあだ名だなオタンコナス、と思いつながら別れを告げます」

「オタンコナス!？」

レッツ貢献的な罵倒を受けた涙子はさっさと踵を返して帰路を行うミサカに驚愕した。

よもや、ここまで毒舌な人間を相手にしたのは初めてだと思いつながら、まあ避けられもしないあたりあれはあれで本気で嫌っているわけではないのだろうと思う。

いや、思わないと案外くじけそうなので思うことにする。

とりあえずは帰る道を行こうと歩き出すと、正面から見知った白い何かが走ってくるのがわかった。

「るいこー!」

「イン……インポッシブル!」

「インデックスなんだよ！ わざと間違えるのはひどいんだよー！」
そう言いながらインデックスが頭にかじりつく。

痛みに声を上げる涙子だが、すぐにインデックスは彼女の保護者が外す。

「助かりました上条さん」

「いやいや、佐天さんも悪いことするなあなかなか」

「からかってやらないと割にありません、私たちのお財布的な意味で」
「納得」

深々と頷く上条当麻。

「なんで二人して私を見るのかな、しかもなんとも言えない目で」

そりやそうだろうと思いつながら、二人共何も言わないのは別にその程度の迷惑なら良いかなと思っっている証拠だ。じやなきやインデックスを命がけで助けようなんて絶対に思わなかっただろう。

だが一つだけ文句はある。自分たちにインデックスを任せているイギリス正教が世話代の一つもよこさないことだ。

せめて少しぐらいくれても良いじゃないかと思わないでもないが、神裂もすつかり姿を見せない。

「とりあえずるいこも一緒に晩御飯食べるんだよー！」

「……素材は？」

「今から買うところなんだよ佐天さん」

「……割勘で」

「助かる佐天さんー！」

ちなみに上条当麻、いつもならというより涙子以外の少女相手であれば割勘なんてしてもらうことはまず無いのだろうし、金を出させたりもさせないのだろう。

けれどインデックスのパートナー同士として、というより学園都市の中じやトップクラスに気を許している涙子だからこそ払ってもらうことに申し訳なさを感じながらも頼む。

ある意味では頼れる存在というところだろう。

涙子は涙子で、頼られることにはうれしさを感ずるし、紫もいなくなつたので余裕はある。そういう意味では紫が出て行ったのが悪い

ことだけじゃなかったと言えるだろう。

まあなにはともあれ、三人並んで晩御飯を買いに行くのだった。

——そして静かに、彼女の運命の日は近づく。

52、アイテム

そして、翌日。

私、佐天涙子は不良さながら、夜中に散歩することとした。

この無遅刻で無欠席の皆勤賞で、授業中は模範生とも言える私が……いや、裏道とおつて絡まれたり都市伝説ハンターとして名を馳せておきながら何言ってるんだって話なんですけどね、はい。

まあともかく、私がこうして夜中に外に出た理由は白井さんの杞憂である御坂さんの問題を解決するためだ。

なにかを探しているのか、何かをしているのか、まあどちらにしろ見ているだけで良いならそれでいいけれど、最悪は介入の事態も考え、特性ジャケットの内ポケット以外にも、足につけたポーチなんかにナイフを入れて、いつもより多めの装備をしていく。

さて、問題としてはまず御坂さんを探すところからはじめなきゃいけないわけだけど……そこは私の情報網にさえ引つかかれば……。

さっそく電話来たし。

「もしもし、浜面さんですか?」

『例のお前から探してくれて頼まれた超電磁砲^{レールガン}だけどよ、なんかどっかの研究所に入っっていったらしいぞ』

「研究所、ですか?」

テレステイーナをふと思いついて、首を横に振る。

あいつは捕まったし、それに関連していた施設はそれなりに調査されただろうし、ならなんで今更研究所なんかに着があるのか?」

それはたぶん、新しい事件があるんだろう。

前も木山先生と御坂さんは研究所で遭遇したりもあったらしいし……。

『ああ、とりあえずうちの奴が場所送ってくれたから今から送る』

「ありがとうございます。この借りはそのうち返しますんで」

『期待しないで待ってるよ、てかなんでお前みたいな中坊の頼みを……』

「いざとなったら助けますから!」

『ガキが良く言うぜ』

笑って言う浜面さんの声に、笑って返すと電話を切る。

数分もせずに私の携帯端末にメールが送られてきて、場所を確認すれば私の今いる場所からそれほど離れていない場所だった。

走れば五分というところ……私は走ってその研究所へと向かう。

研究所という時点で御坂さんの目標である何かは団体であることは間違いない。

敵なのか、それとも別の何かなのか……そもそも御坂さんがどうして夜な夜なそこへ向かう必要があるのか、私は考えながらも気がまったくない研究所の外堀を上って中に入る。

これで御坂さんが入って来てなかったら無駄足だなど思いながら、まったく人がいないことを外から確認してから正規のルートで研究所へと入る。

それにしても大きい研究所、中は冷たい鉄でできていて、そんな通路を通って私は大きく開けた場所へと出た。

開けたといってもいろんな機材があるのだけれど、私はそれよりこの現状に口がふさがらなくなっている。

「な、なんじやこりやああつ!?!」

中は火の手が上がっているところや、なにかが爆発した後なんて場所もある。

間違いなくここで戦闘があったのは間違いないだろう。

爆発の後やら周囲を見てわかることは敵は爆弾使いで、白い導火線を使っている。爆弾はそこらに落ちているボロボロの人形なんだとも思う。

御坂さんがやられるなんてことはまずないと言っていいだろうけれど、とりあえず私は走って爆発の後を追う。

間違いなくこの先に御坂さんはいるだろう。そして敵もいる。走っていると、崩れた階段が見えた。

地面に刺さっている鉄骨を見てから、壁を蹴って鉄骨の先に立つ。そこから跳んで次に大きい鉄骨に飛び移るとその要領で階段の上へ

と登って次の階層へとたどり着く。

「なんだ、通路あつたんじゃん」

横の通路を見て小さな声でつぶやいた。

私はゆっくりと大きな部屋の内部を除くと、そこには金髪の少女と御坂さんを視界に映す。

「結局、追いつめてたと思つてた方が追いつめられてたつてよくあるわけ、足元見てみなさいよ」

金髪の少女がそう言うのを聞いて、私は御坂さんの足元を見る。

そこには先ほどの導火線らしきものが張り巡らされていて、私の予想通りそれは導火線と見て間違いないのだろうけれど、ただ周囲に爆弾が無いのが気になった。

御坂さんの真上の柱が導火線を使つて切られるのを見て、そういう使い方もあるのかと楽観的に見るも、一秒もすればその楽観的な考えと黙つてみていようという考えが遮られる。

「ッ！」

柱の中から出てきた大量の爆弾らしき人形。

私はそこから跳び出して足に付けたポーチからナイフを取り出して投擲する。私が投擲したナイフは真つ直ぐ人形を串刺しにして、少女の方へと落ちる。

突然の攻撃に驚愕した表情で私の方を見る金髪の少女と御坂さん。

「なっ、なんでこんなところに!?!」

「心配してきてみればなんですか、これっ！」

私は御坂さんの隣に立って金髪の少女の方を見ながら、足のポーチからナイフを取り出す。

だけれど投擲した本数のせいでもう両手に挟んだ六本がポーチの中の最後、結局追加武装も意味をなさなかったわけだけれど、一体どんな能力を持った相手なんだろう？

場合によっては、私の生死が関わってくる。

「二人とか聞いてないつてわけよ！ 終わったあ、もう終わったああああつ！」

「へ？」

突然大声を上げて頭を抱え、うずくまる金髪の少女。

あつけない幕切れだなあなんて思いながらも私が武装を解除しようとしたその時――。

「……なーんつってー!」

少女が手元に何らかのツールを持って振るう。

そのツールが白い導火線に触れた瞬間、火花を散らして導火線は床を焼き切り私たちの方へと奔る。

私がつりこぼした人形は、ない!

けれど私が動揺している隙に蹴られた人形がこちらへと転がって来ていた。

「話し合いなんて考えちゃダメね、やっぱ」

ひどく冷たい御坂さんの声が聞こえてきた途端、私たちのいる地面が持ち上がる。

十中八九御坂さんの力だろうけれど、周囲が金属という状況が御坂さんにとっていかに有利かわかるってわけですよ。

ともかく、出てきちゃったからには私はどうするかと考えるわけ。

「ていうかなんでこんなところにいんのよ!」

「それはごっちのセリフですよ、みんなに散々心配かけて――つてそれは良いですけど、ともかく御坂さんはどういうつもりで研究所に入ってきたり?」

「……それは、言えない」

御坂さんが少しうつむいてそう言う。

深く聞こうにも、あまりこうして話している暇も無いだろう。

そして、御坂さんが私たちに対してひどいことをするなんて想像もできないし、あの正義感が強い御坂さんが間違ったことをするとも思えなかった。

だから今回は、事情は聞かないでおこう。

あの日、御坂さんは『みんなのことが見えている』と言った。

確かにそれを意識して見えているにも関わらず私たちに協力の要請もできずに私たちに頼ることもできなかつたということだ。

つまり、これは私たちじゃとてもじゃないけど対処できないと思っ
た。

なら今は何も聞かないでおく……もちろん後で色々聞くけど、今は
聞かない。

「それに、敵もいるしなあ……こうなったら付き合わせてくださいよ
！」

「もお！ 行くわよ！」

「了解！」

ちやつかり、御坂さんとうこうして組んで戦うのは初めてじゃないか
なーと思う。

幻想猛獣との戦いじゃまるで役に立たなかったし作戦らしい作戦
も立てられなかった。

テレスティーナの時は私と御坂さんが順番で戦ったような感じだ
し、やっぱこうしていると御坂さんに頼られるぐらいにはなったのか
なって、ちよつとは嬉しくなる。

ともかく、私は御坂さんと走って持ち上げた床を足場に跳ぶ。御坂
さんより素早く、私は少女の前に着地した。

「呑気に話なんかしてるから、私に準備させちゃうのよね！」

少女がスカートを叩くと、中から手榴弾のようなものが落ちる。

「ッ！」

私は右手のナイフ三本を投擲してその手榴弾に当てて自分から遠
ざけた——けど、次瞬間、輝きと共に激しい音がして私と御坂さん
の視覚と聴覚を一時的に奪う。

——スタン・グレネード!?

けれど、それは判断ミス。私にしろ御坂さんにしろこれに対する対
抗策は持っている。

まともな手榴弾だったら私を負傷させられたらどうけれど……。

私は眼帯を外してポケットに入れると、健在なその紅い目で少女を
視界にとらえる。

「ッ!?!」

少女が手投げミサイルで私たちを狙ったのはわかったけれど、真っ

直ぐじゃなくて囲むように向かってくるミサイルなら私は少女に向かつて真つ直ぐ走ることで回避できた。

背後で爆発が起きてバランスを崩しそうになるけれどそれを加速に使って走る。

なにかを言っているけれど、どうせ『見殺し!?!』とかだろう。

私はこれでも御坂さんの戦いを間近で見してきたし、それなりに御坂さんの力を知っているつもりだ。

ジャケットからサバイバルナイフを右手に取ると少女に向かつてそれを振るう。

「わわっ!?!」

横に避けた少女が私からさらに距離を取る。

「でも、あのエレクトロマスターは倒したし結局ギャラは私のものつてわけ……よ?」

私の隣に、御坂さんが降り立つ。

「エレクトロマスターについてよく勉強してるみたいだけど、私ぐらいになると電磁波で空間把握ができるのよ」

やっぱすっげー。

なんて思いながら、私は御坂さんへの憧れは無いことはないけれどもここまですりたいとも思っていないと頷く。

これほどの力、突然手に入れたら私はそれを正しく使いこなせる自信がない。

だから、最近レベル5という人間がどれだけすごいかわかる。

「おっと、下手に動かない方が良いわよ。もうそろそろ目も見えてきたし、まあなんにせよこの距離なら電撃の方が早い」

御坂さんの言うとおりに、私の右目も光を取り戻してきたというか平常になってきた。

私もすっかりと見えるようになって、少女が振り返って涙目で私たちを見る。

「今更泣き落としをしようだったってそうはいかな——」

「ミジィ……」

——へ？

私と御坂さんが間拔けな声を出して固まる。

突然何語わからない言葉を話出す少女を前に私と御坂さんは固まってしまい、私は言語つたって英語の日常会話がなんとか話せるぐらいなので御坂さんに助けを求める視線を送ってみただけ御坂さんも少女の言葉はわかっていないようで混乱していた。

——あれ、でもさつき日本語で……？

「んな言語、ねえっつーの！」

突如、少女が投げたなんらかのビン。

御坂さんがそれを迎撃するように雷を放つと、ビンが大きな爆発を起こして中の白いなにかがあふれ出す。

ビンの破片がこちらに飛んでくることは無かったけれどなかなか爆発は大きい

「なにこれ、白い粉、煙、スモーク？」

周囲に白い煙が広がり、そこらじゅうから白い煙が部屋へと入ってくる。

なんらかの細工がしてあるのだろうと思いつつ周囲を見るけれどそれらしい様子もなく、少女は私たちから少し遠ざかってパイプにつながれたバルブを操作していた。

「学園都市特性の気体爆薬、イグニス……吸っても害は無いけれどさつきのビンであるの威力、いわばこの部屋は、巨大な爆弾つてわけよ」
爆薬がそこらじゅうにある状態、つまり少しの火花や火種が命取りになる。

「もし電気なんて出したらどうなるか、じゃあゆつくりやらせてもらおうかな！」

少女が突如飛び出して私の隣の御坂さんを蹴り飛ばす。

手元のナイフを振るおうと思ったが、私の思考で状況を考えて止まる。

「ナイフが壁やあたしのアクセサリにぶつかったりしたら、結局みんなおしまいってわけよ！」

私は少女の攻撃をなんとか避けながらナイフをジャケットにしま

う。

見やすい攻撃だけれど摩擦を出さないように気を付けて回避している、どうにも動きがにぶる。

踏込での摩擦なんかをまったく恐れていない動き。

「自殺志願者を見るような目ね、こっちは暗部で仕事してんの、死ぬのが怖くてやってられるかってのよ!」

蹴りが入って吹き飛ぶ私はすぐに受け身を取って体勢を整える。

そんな私へと駆け寄る御坂さん。

「たぶん、ここは私じゃどうしようもない……」

珍しく気弱な御坂さんに、私は疑問を覚えた。

「信じてるわよ」

不敵に笑う御坂さんに、私は苦笑で返す以外に選択肢が思い浮かばなかった。

しようがないよね、信じられちゃったら、任せられちゃったら、本気でやらないと失礼ってもんだよ。

だから私は、ゆつくりと拳を構えた。

「信じられましたよ」

「ナイフも使えないでどうすんの、結局あたしの一人勝ちってわけよね!」

「どうでしょうか?」

私は放たれる蹴りを受け流して拳を振るう。

腹部に当たる寸前で少女は地面を蹴って無理な体勢で後ろに下がる。

下がると同時に体勢を崩したところを、私は距離をつめて蹴りを打つ。両手で防ぐ少女だけれど、私の蹴りの方が威力は高く背後に下がることになった。

今度は少女の方が、私を自殺志願者を見るような目で見てくる。

「今の動きは貴女がやった動きと変わらない……だから、これじゃ爆発はしない」

「な、あたしの動きを全部見切って、コピーして攻撃って人間業!?!」

「まあ、師匠が優秀だったもんで」

私は不敵に笑って今度はこちらが攻勢とばかりに連続攻撃をしかけた。

けれどさすがに直撃するわけでもなく攻撃は防御されてばかり……でも、避けられているわけじゃないってわけだ！

連続攻撃をガードしていく少女、まあ私より年上な感じするけどね。

「シュッ！」

「うわわっ！」

私の蹴りを避ける少女、一瞬できた隙を見て私は跳んでから少女の背後に回り込んでナイフを取り出してから少女の首元に背後から突き付ける。

これで、決まったも当然だね。

御坂さんに笑いかけると、御坂さんも笑って私たちに近づいてくる。

すると、少女が笑った。

「ハハッ、こうしていると感慨深いものが無い？」

「ん、どういうことですか？」

私の質問に、少女が顔を私の方に少し向けて笑う。

「あたしは結局、あんたたちに『殺される』ために生まれてきたわけよね」

「ッ！」

私と御坂さんが、隠すこともできず動揺を見せてしまう。

それをしつかりとわかってか、少女は私の腕を掴んでから私を投げ飛ばす。

その気になれば手元のナイフで彼女を『殺す』ことも可能だったけれど、私はそれができなかった。

こんなことなら魔法コーティング済みのナイフを、持って来れば良かったなあと思う。

私が背負い投げされて、そのまま正面の御坂さんにぶつかって二人で倒れると、少女のスカートから勢いのまま飛び出る先ほどの火をつけるツール。

それが地面にぶつかる瞬間、私は『死ぬのかなあ』なんて達観して思ってしまった。

走馬灯は見えないで、そのままツールは地面にぶつかって導火線に火をつける。

ついた火は少女の方へと走ったが少女は飛び跳ねると転がって頭を壁にぶつけた。

「痛〜！ あやうく自分の下半身吹き飛ばすところだったわけよ！」

その言葉を聞いて、私と御坂さんは笑いながら立ち上がる。

「ああ〜結局、なんだかくだらなハツタリに引つかかっていたみたいよ私たち？」

「ですねー、結局ですか？」

「あはは、伝染っちゃったのかしら？」

笑う私と御坂さんに合わせて、少女も笑う。

そこで少しだけ間が空いて、御坂さんが電撃を少女に食らわせた。

そしてしびれている少女に手を向けて、御坂さんは冷たい表情と冷たい目で少女のことを見下ろす。

「で、計画について知っている情報、洗いざらいはきなさい？」

「計画？」

「佐天さんは知らなくていいことだから」

—— なっ!?!

「またですか御坂さん！」

「今回はそういうことじゃないの！ ともかく、今回は……」

苦々しい表情をする御坂さんに、私はどんな言葉をかけて良いのかもわからないでいた。

「計画を主導している面子は？ あんたを雇ったのは？」

顔を逸らす少女に、御坂さんは手を伸ばして白井さんにやるのとは程が違うほどの電撃を放つ。

その電撃が少女の目の前の地面を焦がすがそれにしても、レベル5とはここまでですさまじいのかと感動すら覚える。

—— 正直、レベル5を相手にするとか絶対にごめんだね！

「黒焦げになりたくなかったら、3秒以内に答えなさい……3」

少女が涙目で何かを訴えようとしているに気づいてそれに疑問を覚えた。

言おうとしている様子なのになんで言えないんだろうかと、その手の魔術にでもかかっているのかと……だけどたぶん違う。

「2……」

この子がこうなっている理由はほかのあるはずだ。いま現在離せない理由、すなわち口が動かない？

いや、口は動いているから舌……電撃？

「1」

「ちよ、ストップです御坂さん！」

私がストップをかけるとため息をつく。

「仲間は売れないってわけね、まあそういうの嫌いじゃないけ——」

なんか勘違いをしている私より電撃について詳しいはずのエレクトロマスターさんが何かを話そうとした瞬間、なんらかの気配がして私は御坂さんと共にその場から飛び退く。

私たちと、少女を別れさせる緑色の光^{ビーム}。

着地した私たちはビームの着弾点から起こる爆発に少し驚きながらも飛んできた方向を見る。

「あんま静かだから、てつきりやられちゃったと思ったけど？」

そこには、20代ぐらいのお姉さんが立っていた。

ゆるふわカールのおしゃれな女の人は、今さっき極太ビームを放った本人のようには思えないけど、それはともかくとして今のが能力だったらかなり洒落にならない。

嬉しそうにしている少女を見れば、その女の人が少女の仲間であることは間違いなく、女の人の背後にいる黒髪ショートでジャージを着ている女の人も仲間だろう。

ビームを撃つたであろう女性が好戦的な笑みを浮かべる。

「危機一髪だったみたいねえ——フレンダ？」

53、無能力と第四位

御坂さんを追つてとある研究所へとやってきた私、佐天涙子。

そして御坂さんと戦っていた金髪の少女との戦いに乱入して、二人でその少女に圧勝したかと思われた瞬間、私たちの前に新たに現れたのは二人の女性だった。

茶髪の女性は笑いながら、私たちを視界に入れる。

金髪の少女が嬉しそうにしている表情を見れば、現状でその女性が少女の味方だということは簡単にわかった。

だからこそ、この状況で私たちはどういう選択肢を取るのか……。なんて考えている内に、御坂さんが近くの鉄の塊を電撃を使って飛ばす。

まあしようがないね、なんだか知らないけど御坂さんはこの事件にかかわってる敵すべてに異常なまでの憎しみを向けているようだから……。だったら私は、とりあえずサポートをしよう。

どこかの誰かが『あくまでも自分の仕事をこなす』なら私は『友達のためなら犯罪も犯す』とでもしましょうか……。いや、時と場合にもよるか、それでも御坂さんがやろうとしていることが、支えるべきだと思えるなら私は名誉なんて捨てても良いと思っている。

だけれど、投げられた鉄の塊は女性の前で消滅した。

そう、消滅。

「さて、どんな能力なんだか」

ため息をついて私は周囲を確認する。

出口はやっぱりない。女性にフレンドと呼ばれた先ほどの少女が閉めきっていたし当然だとは思うけど、出口なんてその気になれば作ってもらえるしー。

女性は余裕のある表情で笑う。

「で、あんたたちが噂のインベーターね」

——私までセットにされちゃったかー。

女性が笑いながら、両腕に緑色の光を宿し、それを撃ち放つ。

私と御坂さんは驚きながらもその攻撃を避ける。

御坂さんは電気を使つて壁に張り付き、私は跳んで壁に隠れて顔を少しだけ出す。

——なに!? 新手のゲッタービームかなにか!? ゲッター線がやばい! それともコジマですか!?

御坂さんが、壁に張り付いたまま電撃で今の攻撃によって生まれた残骸を飛ばすけれど、女性の目の前でまた消滅する。

ならば数だと、御坂さんはさらに多くの残骸を飛ばした。

女性は手を動かして緑色の光で円を作るとそれにぶつかつた残骸が消滅。

「なるほど、さすがに……」

つぶやいて能力を見極めようと思う私だけれど、どうにもつかめない。

「なるほど、器用なマネするわね。壁に張り付いて逃げようとするなんて……まるで蜘蛛みたい」

じゃあ私はバツタですかね、嫌だなーそのあだ名。

まあ私の方は眼中にないようなのでおとなしくしてるに限るね、ははっ。

女性は笑うと、背後にいる黒髪の女性になにかタブレット的なものを渡した。

この状況でそんなものを渡すつてことは、それが普通のものじゃないのは確かなわけで、つまり私は今すぐ逃げ出したいわけですよ。

「ごめん、助けてあげられないかもー!」

「重々承知ですよー!」

——てかなんであたしもこんなところ来ちゃつたかなあ。まさかこんなに激しいことになるとは……。

そして戦闘は始まる。

壁を走る御坂さんをビームで打つ女性だけれど、それらを避けながら御坂さんは女性に電撃を放つ。

その電撃を女性がビームを撃つ緑色の球で逸らす。

「なるほど、電撃は曲げられて鉄ぐらいなら消滅させられる……これ

「私じゃ無理そうかなあ」

苦笑しながら、私は御坂さんと女性の戦闘を見ている。

すると、物陰に隠れていた黒髪の女性が物陰から出て頭上を跳ぶ御坂さんの方を向いた。

目を見開いているその女性を見れば、なにかヤバいことになるってのは間違いないだろうとは思う。

御坂さんが壁の機器に触れてそれを爆破して煙を起す。

良い目くらましにはなるだろうと、私は走って御坂さんへと近づく。

御坂さんはすでに電撃で壁に穴を開いており、二人でその穴から飛び出すと道を走る。

「佐天さん、これはマズイ！」

「わかります！ ああもうこれじゃ事情も聞けないよお、御坂さん一旦わかれますよう。合流地点とかありますか!？」

「走っていけばそれなりに大きいところにつけるとは思うんだけどお……とりあえず逃げるか広い場所に行くかね！」

「了解です、とりあえずご武運を！」

「てか佐天さんはなるべく逃げてよね！」

私と御坂さんが立ち止まってそういうと、なんだか嫌な予感があった。

理由なんてないけれど、私は御坂さんと共に倒れこむ。

直後、私たちの頭の位置に先ほどの女性のビームが通った。

「なんで、ランダム迂回して移動してるの!?!」

「透視か何かかもしれせん！」

直後、御坂さんが私の腰に腕を回すと電気を使って壁へと引き寄せらる。

二人で壁についた瞬間、寝ていた場所にビームが突き刺さった。

「いやあ、冗談キツイですね、あの能力と透視は……」

「とりあえず、えっと……着いてきて！」

「了解です！」

ビームの嵐もとりあえず止んだのもう一度の攻撃が来るまで私

たちは走りだす。

二人で走っていても、明らかに速度であれば私の方が上で……なんて思ってもしかたないってわけよ、結局……ああ、感染ってるし！
とりあえず走っていると、御坂さんが眼を鋭くした。

「くるー！」

「ええいー！」

私が転がって地面に這いつくばって、御坂さんが電気で天井にはりつくとき私たちの間にビームが通る。

すぐにビームの第二射がきかぬことを思うと、とてもじゃないけれどじつとはしていられないと走り出す私と御坂さん。

「次を右ー！」

「はいー！」

私は右に曲がってその道を真っ直ぐ走る。

背後から、金髪の少女ことフレンドダがしかけた導火線が燃える音が出て振り返ると、御坂さんが爆風で吹き飛ばされて私の横に転がってきた。

横を走る導火線の先、私たちの前には人形。

「ツー！」

私はさつき影でこそそこそと拾っていたナイフを投擲して人形を導火線の通り道から落とす。

導火線についた火が走っていくがこれで問題もない。

「佐天さんー！」

その声で私は御坂さんの手を思い切り引いて私の方に引き寄せる
と後ろに飛び退いて御坂さんが倒れていた場所に通るビームの被害を免れる。

間違いない、さつきから意識はしていたけどやっぱりそうだ。

「どういう能力かはわかりませんが、どうやら相手は御坂さんの位置しかわからないみたいですねー！」

「え、どうして?」

「さつきから攻撃は御坂さんにしかしていません、私は取るに足らないと思っっているのかなんなのか、まあともかく二手に分かれますか、

足を引つ張つてもしかたないですし」

御坂さんが悩むような表情をするが、もたもたしていてもしかたないし私は御坂さんの手を引いて走る。

「わかったわ佐天さん、ここより下の私の目的地手前に大きな部屋のようなものがあつたの、そこで落ち合いましょう。佐天さんのおかげでだいぶ疲労を少なくできた気もするし」

「そう言ってもらえて光栄ですよ。では、たぶん私の方が遅いのでー」
「ええ、じゃあまたー」

御坂さんはそういうと横の穴を上がっていく。

私じゃ降りたら落下して死亡って感じの場所だけれど、別れたことにこそ意味がある。

少しジツとしていてもビームが飛んでくることがないのがその証
拠だろう。

「さて、行きますか!」

私は足のポーチ二つを外すと地下に向けて走り出した。

そして結局、私が御坂さんと合流できたのは色々とはじまってから……まあつまり、合流地点に着いた途端ビームが私の方に飛んできたわけですよ。

なんとか避けたものの、流れ弾だったわけで戦闘中の御坂さんとビームの女の人はまったく私に気づくこともなく……つまり御坂さんは電波で周囲を警戒することもできないほどなのだろうと理解して、私は戦闘を見る。

私が参加しても足を引つ張らないかどうかなんだけれど、これならなんとかなるかもしれない。

「おおお待ちせしました御坂さん!」

「佐天さん!」

「あゝあゝ!?!」

ガラ悪! とか思いながら私は走っていく。

女の人が御坂さんにビームを放ち、御坂さんがなんとかと言った様子でそれを防ぐとすかさず私へとビームを放つ。

霊夢さんや魔理沙さん、さらに言えばフランまで相手にしてる私にとってその攻撃はかなり避けやすい類のものだ。

向かってくるビームの高さやらを確認して走りながら体勢を低くして避ける。

「なっ！」

驚く女性だけれど、すぐに第二、第三打を打ってきた。

けれど、私は軽く跳んでそれを空中で避けながらすぐに体勢を立て直す。

だけれど女性が笑った瞬間、私はさすがに走るのを止める。

——マズイ、なんだかわかんないけど！

瞬間、再びビームが放たれたのを私は体を逸らして避けた。

けれど先ほどまでと違ってビームが通りすぎた瞬間に消えることもなくそのまま私の方へと曲がるうとする。

「厄介な！」

私は内ポケットのナイフを一本だけ投げた。

そのナイフに驚いた女性が正面に御坂さんとの戦いでやったようなビームでの盾を出す。

そこが抜け穴、私を見失った瞬間に私は走る。

「ジャリが調子に乗ってんじゃねえぞ！」

そう叫びながら、女性がビームの盾を消す。

だけど目の前には私が映る。さすがに驚いたのか行動が遅れているのでその間にその腹部に肘を打ち込む。

中国拳法風な動きは太極拳のもの……まあつまりは美鈴さんから伝授してもらった技だ。

「ガアッ！」

だけれど、気絶させるまでにはいかなかった。

活歩にて一瞬で近づき肘で打つこの技は、妖怪の力を解放させなくても十分なダメージがあるはずだ。にも関わらず私の一撃で女性は倒れることはない。

つまり、生半可な鍛え方はしていないってことだ。

「んな攻撃で気絶するほど軟な鍛え方してねえんだよオ！」

女性は私に拳を振るってきた。

けれど、そんな直線的な攻撃で直撃を受けることもなく、私はその拳を腕でなんとか逸らす。

次に蹴りが飛んでくるので私はそれを受けるようにして同時に地を蹴り跳ねると女性から距離を取る。

そしてそこで、私は後悔した。

「なんで距離取ったかなあ」

緑色の光が女性の周囲に集まっていた瞬間、フレンドアの爆弾が女性の頭を打った。

女性が倒れたのを確認すると、私は御坂さんの方を見る。

御坂さんは笑みを浮かべて私に親指を立てた手を向けた。

「御坂さんらしからぬ攻撃ですねー」

私は笑いながら言って女性に近づき、気絶しているか確かめる。

間違いなく気絶しているので、私はそんな女性をそのままにして御坂さんの方へと向かう。

フラフラの御坂さんを見れば数日間と同じようなことを繰り返していたのは明白だった。

「大丈夫ですか?」

「うん、でもさすが佐天さんね……あの戦い方は私にはできないわ」

「あはは、されたら困ります」

せっかくの無能力者なりの戦い方なのね。

「とりあえず、私はこの人見てますんで目的をどうぞ」

「でも良いの佐天さん?」

「御坂さんは間違ったことしてないでしょう?」

そう聞くと、御坂さんは頷いて『ありがとう』と言うと走って去って行った。

私はとりあえず歩いたり走ったり跳ねたりしすぎていい加減疲れしてきたので座る。

どうせなら女の人を縛っておきたいんだけど、縛るものもないしね。

「さて、結局なんなんだろう(´▽｀)?」

「知りてえのはあたしの方だけどなあ？」

——ッ!!?

私は両手両足のバネを全力で使って跳ねる。

地面に足をついた瞬間、起き上がったいた女の人が緑色の光をうかばせているのを見て、全力で跳ぶ。

なんとか数発は避けて、地面に足を付けると走って女性から距離を取る。

同じ戦法が二度聞くとも思えないからこそ、私はもう逃げに徹することにした。

「もお！ なんなんですかあ！」

「人の腹蹴っておいて言えるセリフじゃねえだろうがこのガキイ！」

今からテメエにはやられた分一兆倍返ししてやんだからよオ！」

バシバシビームが飛んでくるけれど、私は壁際を走って時たま壁を蹴ったりしながら避ける。

そうしていると、私の視界に御坂さんが映った。

「な、もう起きたの!？」

「目的達成したなら逃げますよ御坂さん！」

私は滑り込んで御坂さんの足を払うとそのまま倒れた御坂さんと共にビームを避ける。

それと同時に私は御坂さんの足と首の後ろに腕を回してお姫様抱っこみたいにして立ち上がると壁を蹴って女の人の攻撃を避けた。

空中で避けようのない私にビームを飛ばそうとする女の人だけでなく、御坂さんの機転が働く。

御坂さんは電磁の力で自分を壁の方へと引き寄せて攻撃を避ける。

「このまま逃げますよ！」

「お願い佐天さん！」

私は走りながらどこへ行けばいいのかと考える。

「もお、勘弁してくださいよ！」

「ケツ巻くって逃げやがって、第三位の名が泣くぞオ！」

飛んでくるビームを御坂さんが電磁で私ごと引つ張り上げてパイプの上に誘導すると私が跳んで、二人でなんとか攻撃を回避し続ける

けど、あきらかにあちらの女の人の攻撃力がヤバい。

「佐天さん、お願い私の誘導通りの場所へ向かってくれる？」

「了解しました！」

このことを把握してであろう御坂さんにここはナビを任せることにした。

電磁を使つて私を引き上げると、着地すると同時に私は全速力で走る。

でも女の人は逃げる私たちを追いながらビームを放ってきた。

「おーおー本当に手詰まりか？ 蜘蛛とバツタじゃなくてゴキブリだったのかあ、テメエは!？」

口が悪い、悪すぎる！

「それならそれらしくビシツと……あ？」

突然、電話がかかってきたらしく女の人は電話を取るけど、片手間に私たちに攻撃をしかけてくる。

私たちはと言うともうだいぶ消耗している私と御坂さんの二人、正直避けるので精一杯で油断してる隙に倒すなんてこともできやしない。

なら、全力で逃げるのみ！

御坂さんの電磁でパイプの上に着地すると、すぐに全身のバネを使つて跳ぶ。

前方の壁がビームで爆破されたのを確認すると、そこから跳び出して大きく開いた場所に通った太いパイプを走る。

けれど、上空に投げられたシリコンは……？

「避けて佐天さん、拡散よ！」

「なる、ほどオ!!」

私は足場のパイプを蹴つて跳ぶと下にある鉄の橋に飛び降りる。

けど、そこは一本道だ。

飛び降りてきた女の人を見て、私はつい舌打ちをしてしまう。

「御坂さん、合図したら電気を」

私はボソッと作戦内容を耳元でつぶやくと同時にナイフを投げると同時に手すりを蹴つて女性の背後に跳ぶ。

さらに放たれるビームをなんとか体を逸らして避けるも、もうこれ以上ナイフを無駄にするのも経済的に無理。

投げたナイフも溶かされたし。

「パリイパリイパリイってか、笑わせんじやねえぞクソガキイ！」

女性が御坂さんにビームを放つと、御坂さんはそれを防ぐ。

私の方にもビームが飛んでくるけど私は防御手段なんてないから避けることしかできない。

「お子様の喧嘩程度でこの街の闇をどうにかできると思ってたのかアツ！」

この街の闇——浮かんでくるのはテレスティーナの顔だ。

「ほらほらほら、もつとあたしを楽しませてみせろ！」

「御坂さん！」

私が叫ぶと、御坂さんが笑みを浮かべて片手を下に向けて、電撃を放つ。

瞬間、鉄橋に張り巡らされたフレンドラのツールが火花を放って鉄橋を切り裂く。

それがどういうことを意味するか……早い話が、落とし穴つて奴だ。

「お子様の遊びも捨てたもんじやないでしょ、おばさん」

悪い顔してるなあ御坂さん……って私の目の前の足場が崩れるけど、やっぱり私も私で問題ありだね。

「佐天さん!?!」

落ちていく女の人を見て自然と体が動いて私は女の人腕を掴むとそのまま力任せに引張って抱き寄せる。

空中にて女の人を担ぎ、それで瓦礫を足場に跳ぼうと思ったけど思いのほかうまくいかずに。

「あちゃー」

「佐天さん捕まって！」

御坂さんがワイヤーを飛ばすけれど私の腕の中にいる女の人がそのワイヤーに向かってビームを放つ。

私の顔ごと焼き切るつもりだったのか、私は顔を逸らしてなければ

今頃現代アート風味の面白オブジェになっていたことでしょうか、はい。

まああなたにはともあれ、落ちるわけですよ。

「ふざけんな離せこのクソガキ！」

「ちよつ、空中で暴れ、やば！」

「チイッ！」

女性が床に向かって先ほどのビームを高出力で放ってなんとか落下速度をゆるめるも、地面へ落下することは変わらない。

背中に走った衝撃によつて呼吸が困難になりながらも、私はなんとか叫ぶ。

「御坂さん！私は平気なんでまた明日にでも！」

「佐天さん今そつちに！」

「大丈夫ですからお互い別々に逃げましょう！」

「わかったわ、出たら必ずメール頂戴ね！」

そういうと、上の方にいるであろう御坂さんが走る音が聞こえた。

「くそつ！逃がしたかつ！」

私の腕の中にいた女性が上体を起こして私に馬乗り状態になる。

こりや、今回こそは死んじやったかな？

なんて思いながら呼吸を整えていると、女性が舌打ちをした。

「テメエらは常盤台の学生だよな？」

私は違うけど、とりあえず同意して倒れたまま頷く。

「そもそもお前らはなにが目的で……？」

「し、知りませんよ……私だってあの人がなにしてるのか気になって来て、わけわかってないんですから」

「ああ？」

女の人の手が私の首を絞めようとする。

「パチこいてんじやねえぞガキ、テメエなんざ一瞬で焼き尽くすのもわけねえんだ」

「ツ……ほ、本当ですよ。私はあの人の事情を知りません」

女の人が私を見下ろす。正直すごい怖いけど、ここで怯えてもしょうがない。

「嘘じゃねえみてえだな……クハッ」

なぜか、笑いだす女の人。

「マジか、本気か、馬鹿だろ！ テメエ事情も知れないのにダチのためだからってんなことに付き合った挙句、アタシを助けて死ぬってか!?

アハハハハッ！」

なんか知らないけど楽しそうなので見逃してもらえるかな？

「死ね」

ですよねー。

私に放たれたビームを顔を逸らしてなんとか避ける。

「……これで、テメエは死んだんだ」

「へ?」

「癪に障るし、癪だけどテメエがあたしを助けようとしたダメージで死んだとか笑えねえからな……あの女ならともかく、テメエがだ！

このあたしに見舞ってくれたクソガキ！ レベル5でもねえのにこのあたしにチョコザイなことしやがって……あたしは今、みよーに気になってることがあるからそっちに行くけど……」

女の人の顔が近づいてきて、吐息も感じるような近さになる。

「次に仕事を邪魔しやがったら、ぶち殺すかな?」

「は、はい……」

私が頷くと、女の人はニコツと効果音がしそうなほどの笑みを浮かべて立ち上がると踵を返して私を踏み越えていく。

若干痛かったけど、そこまで後を引く痛みじゃないし大丈夫だとは思うんだよ。

まあ痛いけどね？

「じゃあね〜」

機嫌が良さげなような良さげじゃないような雰囲気のまま女性が去っていく。

そしてそんな女性の背後に一個だけ緑色の球体が——って!!?

「ぬおっ!」

私がなんとか体を転がらせてその攻撃を避けると、女性は私の方に顔を一度向けるとおかしそうに笑いながら去っていく。

ああもう体中が痛いのにいつ！

でも、助かったのは運が良かったとしか言いようがないよね、ほん
と。

とりあえず……。

「帰りますか……」

無事だった『頑丈さが売り』の携帯端末にて御坂さんに『無事に
帰った』とウソのメールを送って私は歩き出す。

ともかく、携帯端末だけじゃなく私も無事だったことに感謝して今
日は帰ろうと思う。

——あー、早く寝たい。

54、命をかけられますか？

あれから家に帰ってすぐにダウンして、起きた時には時刻はすでに昼過ぎで、私は体を伸ばしてボロボロになった服を脱いで洗濯機に入ると、すぐにシャワーだけを浴びて体を清める。

タンスに入っているきつちりと畳まれた服に袖を通して軽く整えると、いつものジャケットを着て外へと出かけることにした。

冷蔵庫の中も最近補充してないせいでスツカラカンともなれば今は御飯を作るのもダルいし外食しかない。

そう思いながら歩いていると御坂さんと上条さんの二人がいるのに気付いた。

あれ、もしかしてあの上条さんって御坂さんと初対面かな？

私は軽く駆けて二人の元へと行く。

「どうも、御坂さんと上条さん」

「あつ佐天さん」

「え、佐天さん？」

上条さんが先に気づいて私に片腕を上げる。

それに合わせて私も片手をあげて答えて、上条さんの一声で私に気づいた御坂さんは少し怒ったような表情をしてから、私のことを手で呼ぶ。

仕方がないのでベンチに座っている二人に近づくと、御坂さんが立ち上がったって私の頭を軽く小突く。

「あ痛！」

「もう、あんまり無茶しないでよ……」

心底心配したというのは、その雰囲気伝わってきたので私もさすがにそこでふざけられるほど神経は凶太くない。

「ごめん、御坂さん」

「はい、これでこの話はおしまい！　なんでこいつと顔見知りなのかとか聞きたいことも山ほどあるけど、とりあえず佐天さんも飲めば？」

「ありが……ってなんですかこの量の缶ジュースは」

「聞いてくれよ佐天さん、自販機を蹴つてこれを出したんですよ彼女！」

うわあ、なにやってんっすか御坂さん。妹さんに笑われますよ？
まああなたにもあれ、私も一つもらうことにした。

とりあえずヤシの木サイダーが妥当、今日はわけわかんない味にチャレンジする気分じゃないんでね。

「お姉さまー！」

「げっ」

つついそんな風に口に出してそつちを見ると、全力疾走してくるテレポーターが一人。

「自販機の警報を聞きつけて駆けつけてみればこんなところに——」

立ち止まった白井さんが、突如顔を押しえて苦しみだす。

まあ私にはなんとなくわかる気がした。ベンチに座る御坂さんと上条さんの前にたった今通りかかりましたっていう感じの私を見れば、この二人が先にいたことは明白。

ならば、おのずと白井さんの中にはいつぞや私が電話で言ったことが駆け巡っている。

うん、良いことした！

「そんなっ……！ まさかつ……！ほんとに……！ 殿方と逢瀬をおおお！」

「ちよつと待てえええッ！」

泣き出す白井さんにツッコむ御坂さん、やっぱこれを見ないと日常って感じしないな！。

なんて思っている突如、白井さんが消えて上条さんの前に現れるとその手を握って笑みを浮かべる。

私はてつきり白井さんは男性アレルギーなのかと思っていたけどそうでもないらしい。

「はじめまして殿方、わたくしお姉さまの露払いである唯一無二のパートナー白井黒子と申しますの、お姉さまのお知り合いのようですので社交辞令としてご挨拶して差し上げますの」

「は、はあ」

戸惑うよねそりや。

たぶん白井さんが現在上条さんを品定め中だろう、大体『パツとしない殿方ですわねえ、こんなのがお姉さまと……?』とか思っているに違いはない。

まあ大ちゃんぐらいクレイジーになると上条さんの頭がもうないとみたね。

明らかに動揺している上条さんを見て、白井さんが笑う。

「あらあら、この程度でドキマギしているようでは浮気性の危険がありますよー!」

白井さんが御坂さんにそういうと、御坂さんはおもしろいぐらい顔を真っ赤にする。

私は危険なおいがしてきたのでとりあえず白井さんから一步離れておく。

「あ、あなたはあ……このヘンテコが、私の彼氏に見えんのかあっ!」御坂さんの電撃が白井さんへと落ちようとするけれどすぐに上条さんの手を放してレポートした白井さん。

けれど白井さんは得意のレポートで近くの街頭の上に立つ。

「ですわよねえ、おかしいと思いましたの」

そう言つて笑う白井さんに怒鳴る御坂さん。

その間、白井さんとはとうと何か考え込むような表情で御坂さんと上条さんを見ている。たぶんだけど御坂さんのことを考えて今回は引くつもりなんだろう、なんだかんだでそこまでイツちやつてるんじゃないしねえ。

上条さんは人畜無害そうな感じしてるし、納得。

「ちよつと黒子聞いてんの!?!」

騒ぐ御坂さんを優しい表情で見る白井さん。

「しかたありません、今日のところは失礼いたしますが、くれぐれも過ちを犯されませんよう、お姉さま?」

「な、なに言つてんのよお!」

瞬間、白井さんはレポートでその場から消える。

「リアルでお姉さまなんて呼び方するんだな、さすが常盤台中学」

「あいつのは特別よ」

「確かに」

「え、そうなの？」

そう言つて御坂さんと二人で頷く。

一拍おいて、御坂さんが穏やかな表情を浮かべると背中を伸ばす。

「ああもう、ほんとなにしに来たんだか！」

「お姉さま？」

そんな声が聞こえると、御坂さんの様子が一転して変わる。

私も聞き覚えのあるそんな声に振り返つて『お姉さま』と言つた張本人を見た。

「またつ、て！ あれ、ビリビリがもう一人？」

「外見のことでしたら、遺伝子レベルで同質なので当然です。と、ミサカは答えます」

「え、遺伝子？」

「姉妹みたいですよ」

「ソックリだな！」

上条さんのツツコミに同意せざるを得ない。

いや似てるまでは良いんだけどなにも髪型まで同じにしなくても良いじゃないとは思うよね、ほんと。

「先ほど同質の力を確認して見に来たのですが、現場には壊れた自販機。大量のジュースを持つあなたたち」

え、私も入ってる？

「まさかお姉さまが窃盗の片棒をかつぐとは、私は佐天に対しての認識を改めます」

「私!? いや犯人この二人だから！」

「上条さんを売るんですか佐天さん！ つていうか主犯はお前のねえちゃん！ 俺は傍観者だぞ！」

上条さんが言い訳をする。かつ丼食べますか？

「ミサカの能力で自販機表面を計測した結果、最も新しい指紋は貴方でしたが」

じゃあやつぱり私容疑者じゃないじゃないですか、やだー!

「嘘、そんなことまでわかんのか?!」

「嘘です」

「嘘かよ?! お前の妹一体どういう教育受けてん……だ?」

御坂さんの様子が明らかに普通じゃない。

ゆっくり歩くと、御坂さんはミーちゃんの肩を掴む。

「あんた一体……ッ!」

そんな声に、私と上条さんが異変を感じて少しばかり驚く。

私たちに気づいてか、御坂さんは苦虫をかみつぶしたような表情のまま聞く。

「どうしてこんなところでブラブラしてんのよ?」

「研修中です」

瞬間、また御坂さんの雰囲気が変わる。

「研修って、ジャツジメント風紀委員にでも入ったのか?」

「ジャツジメント風紀委員? ああ、それよそれ……ちよつとこつち来て」

御坂さんがミーちゃんの腕を引く。

「しかし、御坂にも佐天のおごりで喫茶店に行くというスケジュールが」

「私もち!」

「さすが佐天さんだぜ」

「なにが!」

正直、上条さんがポケに回ると私のツツコミじやスピードが追いつきませんので勘弁してください。

「良いから! ……来なさい」

御坂さんの低い声に、連れて行かれるミーちゃん。

なんだか口を挟んではいけない雰囲気だったので私もそれ以上関わるのをあきらめて上条さんの座るベンチに腰掛ける。

でも、御坂さんがあそこまで……。

「複雑なご家庭……なのかな?」

「どうでしょうね、すくなくならず私たちレベルの複雑な状況も珍しいでしょうけど」

「あつはは……言えてる」

金銭的な意味で私と上条さんは同じく頭を抱えるのだった。

とりあえず上条さんとは別れて、私は昼御飯を食べに行こうと思っただけけれど、さまよっている内にミーちゃんを思い出す。

どうせお昼ご飯を食べるならミーちゃんと一緒に喫茶店とかに行こうかなと思いい、私は走って御坂さんが居た方向へと歩く。

少し歩くとミーちゃんは見つかり、近づいて肩を叩く。

「よっ、ミーちゃん！」

「……佐天ですか」

なんだか、落ち込んでる？

こうしてミーちゃんが感情剥き出しなんてこと、無かったように思えたけど、初めてみた。

「さ、行こうか！」

「？」

ミーちゃんが不思議そうな表情を浮かべるから、ついつい笑ってしまふ。

「どこに行くのですか、とミサカは佐天に警戒しながら聞きます」

「えー、ていうか喫茶店だよ、私のおごりで行くんでしょ？」

「良いのですか？」

少しだけ、意外そうな表情をするミーちゃんに私は頷く。

さすがに落ち込んでる子を放っておけるほど私も薄情じゃないし、さてさて行こうか！

それにしても、なんだか思ったより疲れてないなあ。

私はミーちゃんといつもの喫茶店に入った。

「また来たのかよ」

相変わらず可愛い制服を着た姉御さんが複雑そうな表情をしているけど、まあしょうがないね。

私とミーちゃんが席に座ると、見知った顔が少し離れた席に座っているのが見えた。

あれはたぶん、姉御さんの舎弟の人だね、うん。

とりあえず食べ物と飲み物を頼んでから、待つてみる。ミーちゃん

がさびしそうな表情をしてるから、そこから先を待つ。

話してくれるのを、待つしかないけど……どうしたもんかなあ。

「佐天」

「ん、どうしたの？」

「佐天の妄想を思い出しました」

「も、妄想って……」

本当のことなただけだなあ、シスター助けたのは事実だし……。

その事件に関しては魔術も関わってるし、詳しい話もできないから問題ありなただけどねえ。

「佐天は出会って間もない友人のために、本当に命をかけられますか？ とミサカは一応聞いておきます」

「ん、それが友達で私を頼ってくれてるなら、私が必要なら……私は死にももの狂いで頑張るよ」

「……そう、ですか」

——どうしたんだろう？

結局、ミーちゃんはなにがなんだか話すことなく、帰った。

私としても前よりミーちゃんが私相手に感情を出してくれるようになったのは良いんだけど、どうにもそれがマイナスすぎる。

私に対するマイナスじゃない、別のことに關してのマイナス感情。そんなことがわかるにも関わらず、私がミーちゃんに關われないのはなににも知らないからだ。

ミーちゃんの家も知らなければ、御坂さんとの事情も知らない、そもそもなんで頭にサーモゴーグルをつけてるのかもわからない。

「はあ、ダメだなあ……私まで落ち込んできた！」

「どうしたんですの？」

「ぬおっ、ししし、白井さん!?!」

あまりに驚いてキョドリまくってしまった私だけれども、すぐに冷静になる。

「どうなさいました？」

「私は見つけて声をかけただけです、佐天さんどうしましたの？」

「いや、別になんてことないんですけど……ああ、一つあることとすれば白井さんがなんであの時、上条さんを放っておいたのかななんて」
私がそういうと、白井さんから怒気のようなものがふつつつとわきあがるのを感じた。

あれ、これは地雷踏んじやいました？ 踏み抜いちゃいました？

「お姉さまだけでなく佐天さんもたぶらかそうなどと、あの類人猿許すまじー！」

「べ、別にそんな悪い人じゃないよ……なんて？」

そう言うと、御坂さんと上条さんを発見したときのように頭を押さえる白井さん。

私なんかしましたか？

「なんとということですよ、佐天さんはすでにあの類人猿に騙されてしまっているのですわっ！」

「フア!？」

「人畜無害そうな顔をしていながらなんと卑劣な！ 風紀委員として成敗！」

「暴れん坊ですか！」

「晴らせぬ恨み」

「仕事人!? らしいっちらしいけど！」

そういうと、白井さんが止まる。

突然の暴走の終了に私はなにがなんだかと困惑しながら白井さんを見た。

すると白井さんはなんだか笑っていて……。

「ええ、その方が佐天さんらしいですね」

「は……ああ、こりゃ一本取られましたね……」

白井さんの演技、正直マジすぎて焦りました。

「佐天さんには驚かされたりしてばかりですから、たまにはこうしてからかってみるのもおもしろいのです」

「ひどいですよ白井さん」

「でも落ち込んでる顔は、佐天さんには似合いませんから」

そつと微笑んでそういう白井さんを見れば、初春と親友である理由

もなんとなく見えてくる。

そんな優しい友達に、私はどうやって仕返ししようと考えてるもあまり出てこない。

出てくるってなくてもならないことばかりでどうにも白井さんのド肝を抜くようなのは出てこなかった。

「まあ、白井さんの良心はしっかり伝わりましたよ。それに白井さんも元気になったみたいで佐天さんは満足ですよ」

「なっ、気づいてましたの!?!」

お、意外と効いた。

「ていうか気づかわれてないと思いましたが、バレバレでしたよ白井さんが落ち込んでるのぐらい」

「ううー白井黒子一生の不覚ですわ!」

一生って、気が早いなあ。

「ハッ、そろそろ帰らなくては!」

「大変ですね、お嬢様は……死んでもゴメンです」

私は軽口をたたいてから踵を返して帰路へと足を進める。

そこでふと気づいて立ち止まり、私は体を横に向けて顔を白井さんの方へと向けた。

「ありがとうね、愛してるぞー黒子!」

瞬間、白井さんがポカンとした表情をする。

うん! 佐天さんとしてはその顔が見ただけで十分ですとも、ともかく今度ミーちゃんに会った時に色々聞かないとだなあ。

遠慮して事情を聞かないなんて私らしくないもんね、私らしく……ド派手に頭ツッコんでやろうじゃありませんか!

——明日にでも、会えればいいけど。

55、自分の意思

翌日、私は朝からミーちゃんを探していたものの、昼を過ぎても見つかることは無かった。

探している時に見つからないってパターン、物欲センサー働いちやつてんのかなあ。

やっぱり見つからないし、朝から走ってることもあり疲れた。

仕方がないので、遭遇率が高まるようにとミーちゃんと良く行く喫茶店に入り、カウンター席でアイスコーヒーを頼み、走ったせいで上がっている息を整える。

私に『命をかけられますか?』と聞いた意味の真意はわからないけれど、私を頼ろうとしてくれた。

——どうして私は昨日、それに気づかなかった……!

「あの、佐天さん?」

「え、あ……重福さん、どうしたんですか?」

「いえ、御坂美琴さんとここに入るのを数日前に見たので」

それって間違いなくミーちゃんだよな、ていうか見てたなら話しかけてくれて良かったのに。

「ん、今度は一緒に来ようよ、誘うから」

「そ、そうですか……!」

静かな声音だけれど嬉しそうにしている重福さん。

ともかく私としても色々と考えてみるけれど、ミーちゃんと重福さんって合うかなあ?

「そんな時はあたかも一緒なんだよなあ?」

「姉御さんも一緒に決まってるでしょ」

そう答えるとカウンターを挟んで向かいにいる姉御さんも嬉しそうに笑う。

そんな二人を見ているとこっちまで嬉しくなってくるってもんだよね。

私もそろそろ浜面さんに遠慮せずに前みたいにミーちゃんの搜索でも頼もうかな?

いや、もうちよつとしてからでも問題無いかな。

私は運ばれてきたアイスコーヒーを一气飲み。

「つてことで私はこれで失礼！　また今度連絡します！」

「あ、佐天さん……！」

「おい佐天！」

二人の私と別れるのを惜しむ声を聞きながら私は店を出る。

くうく私って愛されてる！

まあそんなことはともかくとして、と佐天は現状の目的を思い出しますつて感じ！

走つて走つて、そろそろ夕方と呼ぶにふさわしくない空模様になろうとした。

私が聞き込みをしながら走っていると、一人の男の人を見つける。

「すみません、常盤台中学の制服を着た茶色の短髪の子、見かけませんでした!？」

「あ、ああそれなら大きなギターケースを背負つてその路地裏に入つて行つたよ、男の人と」

「あ、ありがとうございます！」

ミーちゃんは世間知らずだからなにかの事件に巻き込まれているかもしれない！

それでなくともなにかあるかもしれないのに、私がこんなところでもたもたしているわけにもいかない。

早く、早くしなきゃ！

私は入り組んだ路地裏に足を踏み入れるのだった。

◆◆◆◆◆

路地裏を足音が響く。

佐天涙子がミーちゃんと呼ぶミサカこと10031号は走りながら白い髪の少年にマシンガンを撃つがそれはすべて少年に当たる紙一重で方向を変える。

なぜかはわからない、だが少年は笑いながらミサカを追いかけ歩く。

「反射?」

「普段はそう設定してあんだけどオ、それはオレの本質とはちよつと違エンだよなア」

瞬間、少年が横にあつたビンが入ったかごを蹴るとそのかごからビンがミサイルのように飛び出す。

そしてそれがミサカへと迫った瞬間、彼女の体が勢いよく横に転がる。

いや、正確には誰かに転がされたと言った方が正しいだろう。

そしてそのミサカと共に転がった者はすぐにミサカを立たせる。

ミサカは眼を見開いて驚愕を表情に表す。

「ぎ、てん?」

その視線の先にいるのは黒い長髪の少女。

「はい、佐天さんですともー!」

にこやかに笑うと、少女はすぐに表情を引き締めてミサカをかばうように前に立つ。

状況はまったくわかっていないであろう涙子は、それでもミサカの前に立って当然のように拳を構える。

少年が涙子とミサカの二人を見て立ち止まった。

「どうして、佐天……貴方は関係ないはずで——」

「関係ないわけではないでしょ! 友達が怪我をさせられそうになって、今さっきの攻撃が当たってたら死んでたかもしれない、そんなことは私が許さない!」

「あアン、愉快で楽しい青春は終わったんですかア?」

少年が後頭部を掻きながら聞く。

「見られちまったけど、こういう時は口封じが妥当だよなア」

そういう少年を見て、佐天涙子は舌打ちを打つ。

ミサカの手にある銃を見れば前までどういう状況だったかわかる。

だが少年は銃を持っている相手がいても、相手が二人になっても笑っていられる余裕があつた。

——能力者……？　ならなんでミーちゃんと、いやそもそもミーちゃんが銃を持って撃っている時点でおかしい。なら目の前の人は一体、喧嘩になったとか因縁をつけられたとかいう理由じゃないのはわかる。じゃあ……計画されている？　この人とミーちゃんが戦うことが？

「いくぜエ？」

「ツ！」

涙子がジャケットの内側のナイフを投げる。

少年の肩に当たると思った瞬間、そのナイフが一瞬で自分の方へと向き直つ直ぐと自身へと向かってくる。

だがそれをなんとか避けるとミサカの手を取り走り出す。

「たく、なんなのあの能力！」

「反射、のようだとミサカは情報提供をします」

「ありがと、なら逃げるのが正解かなあ」

「逃げるということは、できません」

——なら、倒すしかないか！

状況を理解しながらも、なんとしてもミサカを救い出すために涙子は足を止めてミサカの手から銃を奪い取る。

驚いているミサカだったが、それに構っている余裕もないので涙子はすぐに銃を構えた。

セーフティはすでに解除済み、ならあとはトリガーを引くだけだと少年に銃口を合わせる。

「あアン、学習能力がねエ中坊だなア」

「どうも！」

涙子は銃口を少年の足元に向けるとトリガーを引く。

銃弾が少年の足元にまき散らされ、目隠し程度の煙を上げる。

「逃げるよー！」

「そうはいかねエよなア？」

涙子が振り向いた瞬間、前から聞こえた声、すぐそちらに顔を向けると目の前に少年がいた。

とても運動ができるようには見えない、テレポーターかなにかかと

も思うが銃弾を反射する能力があるのにそれはない。

デュアルスキル
多重能力でもない、ならなんだろう？

目の前の少年を見上げている涙子の顔のすぐそばに顔を寄せて、少年は笑う。

「くひつ、俺の能力がなんだかわかんねエって顔してンなア」
「ッ！」

涙子がすぐに拳を握りしめるも、それよりも早く少年が涙子の腹に手を当てる方が早い。

瞬間、衝撃と共に後ろのミサカもろとも吹き飛び転がる涙子。

痛みに耐えながら起き上ってミサカも立たせる。

「正解はア、ベクトル操作……俺の触れたモノの運動量・熱量・光・電
気量とか、そのベクトル向を操作するってわけだ」

「んな、ズルじゃん」

悪態をつく涙子。

「ズルウ？ はアッ！ テメエ誰に向かってンなこと言っただア
……？」

少年が徐々に近づいてくるも、涙子もミサカの手を取って痛みを無視して逃げる。

「この学園都市第一位のレベル5、アクセラレータ一方通行に言っただんじやねエだろ
うなア？」

「い、ちい……？」

「よろしくウ、あはぎやはっ！」

角を曲がって一方通行の視界から外れたのを確認してさらに速度を上げる涙子。

だがそんな時、涙子はふいに体の力が抜けるのを感じ、次の瞬間には倒れこんでいた。

——な、にが？

なにもおかしいことはない。

二日前と先日の夜にかけてフレндаや麦野との戦いがあり、広い研究所内を走って拳句にレベル5との戦闘、緩和されているとはいえ十メートルを超える高さからの落下。

その後も帰って休むが翌日には寝た時間を考えればまったく吊り合っていない睡眠、今日はミサカを探すために走り続けた。

この状況で倒れてしまうのは、普通のことだった。

全身の力が抜けたがすぐに戻り、涙子は立ち上がるが瞬間、強い電撃が体を奔り痺れに体の言うことが聞かなくなる。

「なっ……に、をつ……」

電撃を打ったのはミサカであり、ミサカはそつとしゃがむと涙子を抱えて少し先へと走りそこでおろして、近くにあったブルーシートを寝かせた涙子の足元からかける。

痺れで体が動けないものの、涙子は気力と根性でなんとか腕を動かしてミサカの服を掴む。

首を左右に振って必至でアピールする。

「舌が動かないのは、ごめんなさいとミサカは素直に謝ります」

素直でなかったミサカが、素直になった。

「命をかけて守るといふ言葉に嘘は無かった。それはとてもうれしいことですとミサカは表現しがたい気持ちに戸惑っています」

——行くな！ 行くな！ 行かないで！ ミーちゃんツ!!

だがそれが言葉になることはない。痺れた舌がそれを許さない。

一方通行の足音はまだ遠いが確実に近づいてきているのは確かだ。

「佐天、貴女と過ごす時間はミサカにとつてかけがえのないものでした。もしこの単価18万円のタンパクと薬品だけの人形に心があるとすれば、それをくれたのは佐天です」

——やだ、そんなことは聞きたくない！ 聞いてないよ！

「だから最後に、ミサカはミサカの“心”に従って、巻き込んでしまった貴女を助けるために戦います」

涙子が涙を浮かべながら首を左右に振ろうとするが、ミサカはそんな涙子の目元の涙を親指で拭い、手をそつとブルーシートの中に入れる。

「では佐天、さようなら」

ブルーシートで佐天の体を完全に隠すと、ミサカは立ち上がって道に戻る。

視界の先にいるのは一方通行で、ミサカは銃を拾うとそれを撃つ。すぐに反射してきた弾丸がミサカの頭を掠りサーモゴーグルを弾き飛ばすが倒れることなく一方通行を見据える。

「あアン、お友達は逃げたんですかア!? 薄情だねエ、俺が慰めてやつても良いぜエ、あぎやははっ!」

笑う一方通行の言葉など届いていないという風に、ミサカはその表情を変えることなく銃を撃つ。

だがそれが当たるわけもなく、弾丸はミサカの右肩を撃ち抜く。

「ツああ!」

「人形のくせに一丁前に自棄にでもなってるのかア?」

銃を撃つことができないことを悟り、ミサカは銃を投げるがそれもバラバラに砕かれておしまい。

ミサカは走り出すと左足で一方通行を蹴ろうとするも、ぶつかった瞬間に足は曲がってはいけな方向に曲がる。

うつぶせに倒れこむミサカ。

近づいてくる死。

一方通行が真後ろにいるのは理解している。

「さて問題です、人間の血を逆流させたらどうなるでしょうかア?」

答えは破裂、血が逆流すれば弁につまって内側から破裂する。

血流が逆流するスピードにもよるが、死体は見れたものではないだろう。

この死は予定されていた。

ミサカという20000人の少女の中、10031号だけが、唯一、命令でも、使命でも、製造理由でもなんでも無く、ただ純粹に、彼女が自らの意思で向かっていく死だった。

ここまでのミサカの中、唯一死を恐れ、唯一生を望んだ少女。自らの右肩の風穴に突き入れられる指。

その痛覚は苦痛を伴い、彼女に最後の痛みを与える。

そして最後にミサカは、笑みを浮かべ『ありがとう』と呟いた。

その呟きは、9969人の少女たちの心にはしっかりと届いてい

た。

56、亡き者の意思

上条当麻は、路地裏に茫然と立っていた。

現状を頭で整理すれば、先ほどまで御坂美琴の妹であるミサカと共
にいて、猫を飼うための本を買うので自分は古本屋に入りミサカと猫
を外に置いてきたところまでは良い。

その後、店を出れば彼女はおらず、子猫を探し路地裏に来てみれば
そこにあつたのはミサカの死体だった。

体の一部が破裂して、血をまき散らした……彼女の死体。

だが、アンチスキルを呼んでもう一度ここに来てみれば、死体もな
ければ血の跡も無い。

アンチスキルは当麻の言うことを信じるわけもなく帰った。

目に焼き付いたあの光景を思い出しながら、その場所で上条当麻は
立ち尽くしていた。

「どう、なつてんだよ?」

そんな時、音がした。

「ッ!」

そちらを見るとそこには佐天涙子がおり、彼女は辛そうに壁に寄り
かかりながら歩いていた。

「佐天さん!」

当麻が猫を抱いたまま涙子に近寄りその体を支える。

うつむいているせいで顔は見えないが、何らかの感情を抑えるよう
な雰囲気かわずかに伝わってきた。

瞬間、背後の気配に当麻は振り返る。

「み、ミサカ?」

黒い寝袋を担いだミサカがそこには居た。

当麻に支えられていた涙子がバツ、と顔を上げてそちらを見る。

涙子とミサカの目が合うが、涙子は苦々しい表情で顔をうつむかせ
た。

「ミーちゃ……じゃ、ない……」

その呟きはミサカにも上条当麻にも聞こえることはない。

「申し訳ありません、作業を終えたらそちらに戻る予定だったので……とミサカははじめに謝罪しておきます」

「ちよつと待て！お前御坂妹で良いん、だよな？」

さきほど見た死体がミサカだったから、だろう。

当麻は馬鹿馬鹿しいというように笑う。

「あははは、ちくしょう一体なんだったんだよ……わりい、今の今までお前が死んじゃったんじゃないかと思ってたんだ。ハハツ、良かった」

「ミサカはちゃんと死亡しましたよ、とミサカは報告します」

だがその言葉を聞いた瞬間、佐天涙子は支えてくれていた手を振り払って壁に背をつく。

上条当麻はそんな涙子に何も言えないまま、ぎこちない表情でミサカを見る。

「お前、それ……なに抱えてんだ？」

「念のためパスの確認をします、とミサカは有言実行します。ZX C 741ASD852QWE963」と、ミサカは貴方を試します」

そんなミサカの言葉に、なにも理解できずに上条当麻は言葉に詰まった。

「今のパスをデコードできない時点で、貴方がたは本実験の関係者でないのですね。とミサカは確定付けます」

「お前、さつきから何言ってるんだ！ その寝袋に入ってるのはなんなんだ！」

シスターズ
「妹達ですよ、とミサカは答えます」

上条当麻と壁に背をついている佐天涙子がそちらを見ると、そこにはサーモゴーグルをかけたミサカが立っていた。

それも、一人じゃない。

「黒猫を置き去りにしたことについては」

「謝罪します」

「とミサカは告げます」

「ですが」

「このような争いに動物を巻き込む」

「というのは気が引けました」

「と、ミサカは弁解します」

「どうやら、本実験のせいではいらぬ」

「心配をかけてしまったようですね」

「とミサカは謝罪します」

「しかし心配なさらずとも」

「ここにいるミサカは」

「すべてミサカです」

大勢のミサカたち。

上条当麻は茫然とし、佐天涙子は相変わらず壁に寄りかかったままうつむいている。

「貴方が先ほどまで接していたミサカは、シリアルナンバー10032つまり、このミサカです」

黒猫の世話を上条当麻に頼み、昨日は一緒にジュースを持ったりもしてくれたミサカ。

上条当麻と接してきたミサカは黒い寝袋を持ったミサカだ。

「そして、今日死亡したのは10031……貴方が昨日、お姉さまと遭遇し……佐天と接していたミサカです。とミサカは説明します」

呆然とする当麻とは反対に、涙子は冷静でなく片手で頭を押さえる。

そして話は続いていく。

曰く『ミサカは電気を操る能力を応用し互いの脳波をリンクさせ記憶を共有している』ということは佐天涙子の言うところの『ミーちゃん』つまりは10031号の記憶は引き継がれる。

だがそういう問題ではなかった。

「お前たち、なんなんだ!?!」

当麻が混乱しながらも叫ぶ。

「学園都市に7人しかいないレベル5御坂美琴お姉さまの量産軍用モデルとして作られた体細胞クローン、シスターズですよ。とミサカは答えます」

壁に寄りかかっていた佐天涙子はずるずると地面に座り込む。

「御坂のクローン……これは、お前ら、なにを……？」

「ただの実験ですよ、とミサカは答えます」

「詳細は機密事項となつているため、お伝えできませんが」

「とにかくお伝えできません、とミサカは弁明します」

淡々と語られる。

「本実験に貴方たちを巻き込んでしまったことは、重ねて謝罪しましょう、とミサカは頭を下げます」

当麻の腕の中の猫が鳴く。

「では、猫をお願いします。それと……」

ミサカは涙子の方を見た。

「佐天涙子、貴方には大変申し訳ないことをしました……ミサカ10031号がしたことは気にせずに、このことは忘れてお過ごしください、とミサカは謝罪をして去ります」

軽く頭を下げると、ミサカたちは去っていく。

その路地裏はなにも無かったかのような状態へと変わる。

上条当麻はその場に膝を着き、状況を理解しようと頭をフル回転させていく。

唾然している当麻とは反対に、佐天涙子は立ち上がる。

「さ、佐天さん？」

「良いですから……すみません、一人にしてください」

佐天涙子は一人で歩き出す。

いつも通りの様子とはとても言えないが、それでもしつかりと両足で歩きながらも端末を操作してその画面を一目見た。

それは「彼女」が遺した『助けて』と言うカタチ。

自宅へと戻ると、ベッドに腰掛けて端末の画面を見る。

「ミーちゃん……」

彼女が最後に、端末に残したのはミサカたちが言っていた計画の全容であった。

それは彼女が遺した大事なものと、涙子はそれに目を向ける。

——絶対能力進化計画。

二万通りの戦場を用意し、二万体の『妹達』シスターズを殺害することで『絶対能力者』レベル6への進化シフトを達成する。

対象は学園都市第一位レベル5アクセラレータ一方通行。

そう、彼女が殺された理由はただ、その計画のため。

「狂ってる、テレスティーナも一方通行も、レベル6なんかのために、なんで人を平気で殺すのよっ……私の大事な、友達を奪って……ッ」
「まともじゃない。そう、まともじゃないのだ。」

「なんなの、学園都市じゃ、私がまともじゃないっての？ ならっ、だったら……私も、そっち側に行けばいいの……？」

「そう、大事なものを奪われるくらいなら、人の命を奪ってまで自身の欲望のためにかをする気が狂った者が相手なら、自分も気が狂えば良い。」

「殺すという行為に躊躇はあるし、学園都市にいらなくなるかもしれない、それでも自分はまともではいらなかった。」

「学園都市そのものが、ミサカたちの死を望んでいる。そしてミサカは殺された、もう10031人も……。」

——そんなことは、許されないッ!!

夜の操車場に、一方通行が現れる。

先に来ていたミサカ10032号。

二人が遭遇したことで、絶対能力進化計画の20000回の10032回目_{レベル6シフト}が開始される。

だがその瞬間、ミサカの隣に誰かが現れた。

「えっ？」

「悪いけど、あれと戦うのは私だよ」

「あアン？」

佐天涙子が、そこに現れる。

「貴女は佐天……」

「早く、逃げて……」

そういつた佐天涙子だが、ミサカは迷う表情すらしていない。

「いえ、実験は行います」

「ふざけんなー！」

そんなミサカに、涙子は叫ぶ。

驚くように目を見開くミサカだが、涙子はその両肩を掴んで叫ぶ。

「死ぬための実験、そんなのは許さない。ミーちゃんも許さないだから私にあのデータを託した！」

「10031号のしたことは忘れてくださいと」

「忘れられるわけないでしょ、あれは助けてって叫びなんだから、だから下がって！ 貴女たちをこれ以上殺させない、絶対にこんなバカみたいな計画は私が終了させる、だからお願い……」

叫ぶ涙子を見て、ミサカが迷うような表情を見せた。

人間らしい、いつ与えられたのかもしれないその感情は、間違いなく人間のものだ。

だからそれを見て涙子は笑みを浮かべると、その腹に拳を打つ。

「あつ……」

ズルつと体を倒すミサカを見て、佐天涙子はそんなミサカを寝かす。

「はア、実験になんねエぞおい……昼間の時も横槍いれやがってよオ」
「……そうだね、でも……もうこんな実験は中止にするつての、実験対象が死ぬんだからね」

前髪で涙子の表情は隠れている。

その内側は見えない、だがそんな佐天涙子を前にしても一方通行という男は後頭部を書いてダルそうにしているだけだ。

気迫だけで、雰囲気だけで勝てるなら誰も苦労しない。

だから一方通行は笑った。

「ぎやはっ……なに言ってるんだア、てめエ？」

「お前が死ぬって言ってんだよ、聞こえないのかこの三下アツ！」

佐天涙子が叫ぶと、不快感をあらわにして睨みつける一方通行。

「てめエ、誰に向かって言ってるんだ？」

「お前だつて言ってるじゃん、難聴レベル5の第一位の三下」

「……ッ、あはぎやはははアツははははア！ お前、おもしれエな？」

学園都市一位に睨まれていようが、今更怯える佐天涙子でもなかった。

目の前の人間を殺そうとしているのだから、そのぐらいで震えていられるような感情ではなかった。

だから今、佐天涙子の心はどこまでも憎しみに燃えていて、どこまでも冷静だった。

「なんで貴方は、あの子たちを殺せるの？」

「ああ？ 人形を壊すのに一々感情なんか入れられつかよ、まさかテメエ人形の敵討ちに来たなんて言うンじゃねエだろうなア。俺を倒して最強の座を奪おうなんて奴は山ほどいたけど、テメエみてエな奴は初めてかもな、あぎやはアツ！」

涙子が、拳を握りしめる。

「そういや、お前が逃げたあとどうやって人形をぶっ壊したのか教えてやろうかア……血流操作、はじめてやってみたがうまくいくもんだ、人間ってのはあんなにたくさん血が詰まってるんだな。ああ人間じゃなかったかア!？」

「その口二度と聞けなくしてやるよこの三下アアアツ!!」

走り出す涙子だが、一方通行が足で地面を蹴って砂利を飛ばそうとする。

だが瞬間、涙子はポケットの中にある何かの電源を入れた。

瞬間、不愉快なノイズが鳴り響く。

「がアツ！ ンだこの音はア!？」

頭を押さえる一方通行、だがそんな一方通行が気づいた瞬間、すでに佐天涙子は彼の目の前にいた。

そのスピードはそこらの運動部の人間よりもよほど早いと言えるだろう。

振りかぶられた拳は真っ直ぐに一方通行の頬にぶつかり、一方通行を殴り倒した。

倒れている一方通行、涙子は肩で息をしながら振りかぶった拳を見

る。

「キャパシティ、ダウン……」

かつてファミレスで強盗と遭遇した時に、その強盗が使っていた小さい端末のものだ。

それを持つて帰っていたものを、涙子は持つてきていた。

一方通行を殺すために……。

起き上がった一方通行が鼻を押さえてから自らの血を見る。

「な、なんだこりやアアアアツ！」

そして不快な音はなり続け、鼻血が出ていることより頭の痛みで我に返される一方通行。

だが涙子本人もわかっている。

この音に慣れられれば、レベル5ならば多少は能力を発動できるようになる。

「てめエウ、ア、ツ!？」

すぐにアツパーを打ち込んで一方通行へとダメージを与えていく。

「くだらないもんに手を出して！ ミーちゃんたちだつて一生懸命生きてたんだ！ なのにどうして、どうしてお前なんかのために死ななきゃならない！」

普段は決して使うことはないような言葉を放ちながら、佐天涙子は一方通行を殴る。

だが涙子は気づいていなかった、いつもより攻撃に力が入っていない。

連日の戦闘、そして精神的ダメージ、拳句にいま現在彼女自身気づいていない人を殺す覚悟をしたという精神的過負荷、それらが彼女の拳を重くし、さらに勢いすら失わされている。

普通なら倒れてもおかしくないような状況で、彼女が動いているのは……。

一方通行への憎しみと、ミサカへの気持ちだけだ。

倒れている一方通行の頭の中に、佐天涙子の言葉が入ってくる。

彼女たちは人形、そうでなければいけない。そう言っていた。その

はずだ、だから殺せた、殺した。

なのに、彼女たちは生きている？

いや、間違っているのは目の前の小娘だ。

目の前の女は妹達シスターズの制作過程を知らない。

妹達人形がどうやって生まれたかなんて知る由もないからそんなことが言える。

——ならなんであいつらをビビらせて嫌がらせようとした？
恐怖を与えようとした？

やめろ、考えるなと頭の中を切り替えて現実へと思考を戻す。

立っている佐天涙子は妙に息が上がっているのを感じながら、立ち上がった一方通行を見る。

すぐに涙子は走り出す。

一分一秒でも早く、目の前の男の息の根を止めなければもつと被害が出る。また殺される。

ミサカ10031号はそんなことを望んでいない。

あれを自身に託したのは、この計画を止めて欲しいからだ。

「お前はレベル0に殺される。レベル0に殺されて、それでこの実験は中止になるんだ！」

走り出した涙子はジャケットの内側からナイフを取り出す。

十分に弱らせた。

あとはこのナイフで一方通行を刺し殺すだけだ。

「お前は、生きてちゃいけないんだ！ 消えろおおお！」

だがそのナイフは一方通行に届くことはなく、左手で跳ね除けられる。

驚愕の表情を浮かべている間、佐天涙子はその光景をスローに感じて、状況を理解する。

格闘の素人とも言える一方通行に跳ね除けられた右手のナイフ。

筋肉もなさそうな一方通行の腕に、なんで自分の手が跳ね除けられた？

そもそも、どうして一方通行は自分の動きに反応できる？

理由は一つだった。体が限界をきたしているのだ。

「オラァ!!」

一方通行の右手が涙子の腹部にめり込む。

「ガッ!!?」

すでに夕方のミサカ10031号と逃げている最中に一度倒れているにも関わらず、それなのにまだ動いた。

それがどれだけの無茶なのか、佐天涙子は気づいていない。

ナイフを落として涙子はジャケットの中にナイフがあるのを思い出す。

冷静でない感情を持ちながら、なんとか現状を理解しようとした。

今の自分がナイフで一方通行を殺すことは不可能に近い、それ以前に頭痛がしているであろう一方通行にカウンターを受けたのだ。

それがどれだけ自分が弱っているかを感じさせた。

ならば今の攻撃手段は一つしかない。

「だああああっ!」

歯を食いしばって、佐天涙子は足を使って一方通行の脇腹を蹴り、その体を転がす。

起き上がった一方通行へと走る涙子だったが、一方通行の表情が先ほどと違うことに気づく。

瞬間、条件反射でなんとか止まる。

「あはぎゃはッ!」

一方通行が、地面を軽く蹴る。

瞬間、地面が大きく音を立って爆発したようになると砂利が涙子へと襲い掛かった。

なんとか両手でその砂利を防ごうとするがそれは涙子の体にぶつかりダメージを与える。

「ああああっ!」

地面を転がった涙子が、両手を地面につけて起き上がると、ポケットの中に手を入れてキャパシティダウンの音源であった端末を出す。

それはもう音を出さない。

涙子はそれを地面に叩きつけると、一方通行を睨む。

「ああ、なんだよ最弱……この学園都市じゃレベルがものを言うんだろ、レベルが高ければ良いんだろ！ テメエは底辺だ。生きてる価値がねエ？ 俺が生きてる価値がねエってんならてめエはなんなんですかア!!？」

「レベル、そんな……ことの、ため、につ……ミーちゃんはアツ！」
「も才良い……死ねよ、お前」

一方通行が貨物を載せているであろう車両を叩くと、その車両が空中へと上がり涙子へと向かって落ちる。

その車両が地面へとぶつかると共に爆音と共に砂煙が上がった。だがそれが晴れ、車両を避けた涙子が地面を転がっている。

「ツ……ハア、ハアツ！」

起き上がると、涙子は一方通行を睨んだ。頭から流れている血が彼女の顔を伝って地面に垂れていく。

数では圧倒的な回数 of 攻撃を受けたはずの一方通行の方がぴんぴんとしていた。

圧倒的攻撃力の差に、舌打ちを打つ。

「コンテナの中身は小麦粉みてエだな、今日は良い感じに無風状態だし、こりゃアひよつとすると危険かもしんねエなア？」

涙子は一方通行の言っている言葉の意味がわからなかった。

言葉の意味よりも、挑発するようである言葉づかいにも関わらずその眼が先ほどと同じようなものでないのが気になる。

だが瞬間、そんな思考は停止される。

「よオニ下ア……粉塵爆発って知ってつかア？」

跳ね上げられる車両の一台。

涙子が一方通行に背を向けて少しでも離れようと走り出すが、車両が落ちてくる速度の方がよほど早い。

落ちてきた車両は、他の車両とぶつかり火花を散らす。

瞬間、轟音と共に大爆発が起きて周囲が火に包まれる。

なんとか生きながらえた涙子だが、体への衝撃は——思ったほどでもなかった。

「ッ!!」

涙子は、ミサカ10032号に抱えられていた。

爆発でのダメージだけでいっても中々なもので、涙子も多少のダメージは受けたものの10032号のほうがよほど酷い。

致命傷ではないが、火傷も見られる。

「そんなっ、なんで!」

「……わかりま、せん……でも、こうしなければいけない気がした、んです」

ボロボロのミサカ10032号。

そんなミサカをそこにそつと寝かせたまま佐天涙子が立ち上がる。歩いてくる一方通行。

「こんの、クズがアアアアッ!」

殴り掛かる涙子が右腕を振るう。

だがその右手は一方通行に触れたと思った瞬間に逆側へと曲がった。

数歩下がる涙子が左手を振りかぶる。

「このおおあッ!!」

一方通行がつま先で地面を叩いた瞬間、地面がまた爆発を起こしたような衝撃波を生み、涙子が吹き飛んで車両に背中をぶつけ、顔から地面に倒れた。

「お、わらない……って、な、い……」

終わらせるわけにはいかない。

目の前の男をなんとかしなければ、いけなかった。

ミサカ10031号、『ミーちゃん』を死なせた自分を許せなかった。

「うま、かい……じゅ……か……」
「龍」、解放——ツ!!」

瞬間、涙子が立ち上がる。

「アアアアアアッ! あたしが守る、守って見せる! 誰もツ! 誰もオツ!」

瞬間——咆哮。

「誰も殺させない!」

走り出す佐天涙子。

一方通行は一步後ずさる。

「テメエ、なんなんだ、テメエはア！」

「私はお前が殺した10031号の、ミーちゃんの友達だア！」

走り出した涙子相手に、再び地面を叩き衝撃波を生み出す。

だが涙子はすぐに横に転がってそれを避けると、走り出して一方通行へと近づく。

先ほどよりも上がった身体能力、だが所詮は今の涙子であり、妖怪の力ほんの欠片”を使うのも短時間が限界だろう。

それをわかつているからそこ速攻で距離をつめる。

「アアアアアッッ！」

拳一発を、一方通行の腹に打ち込む。

ただの拳ではない。霊力を、弾幕を生成するときを使う人間誰しもが持っている力を弾にしてそれごと一方通行の腹部を殴ったのだ。

霊力は、彼の反射に対応していない。

その一撃は、その攻撃力は普段の佐天涙子の一発にすら劣るだろう。

弾幕の威力も高くなければ数も作れない佐天涙子、だがその一撃には佐天涙子のわずかな霊力が乗っている。

そしてこの世界で幻想郷側の異能を使うには消耗が激しい。紫を見て涙子は知っていた。

だから今のが佐天涙子が一方通行に攻撃を与えられる最後のチャンスだった。

限界は遠に來ていた。限界を振り切った一発は、一方通行を地面に転がらせる。だが、——それだけにすぎなかった。

切り札である妖魔結界も解除され、怪我に関しては少し回復した。先ほどよりも幾分かマシではある。

佐天涙子は片膝をつきながらも倒れるのをなんとか耐えた。

「力がある、理もルールも支配する……絶対的な力がア！」

一方通行が倒れたまま腕を空へと向ける。

瞬間、突如暴風が吹き荒れた。

それは周囲の火すら消すほどの風。

「カキクカコカキクケコカキクケコ！」

瞬間、暴風が吹き荒れる。

一瞬とはいえ小規模の竜巻が発生し、すべてが巻き上げられる。

なんとか耐える佐天涙子は背後を見てミサカ10032号が無事なのを確認した。

「世界はこの手の中にある！」

立ち上がった一方通行。

「圧縮圧縮、空気を圧縮ウー！」

風を操りながら、一方通行は佐天涙子を視界に入れる。

「どうやって殴ったかなんか知らねエけど、立てよ最弱、膝なんかついてんじゃねエ！ テメエにはやられたぶんきっちり付き合ってもらわねエと、わりにわわねエんだからよオ!!」

涙子は上空を見て、一方通行が生み出した光を視界に入れる。

だがそれでも今はたった一步を踏み出すことすら辛い。

笑っている一方通行。

——こんなところであきらめるわけにはいかない！ なのに、私にはどうする術もないッ！

「ミーちゃん、私は必ずミーちゃんのためにもオー！」

そんな叫びは一方通行には聞こえていない。

「あはア、あはははア！ すげエ、自分の体のように、手足を動かすように！ 空間すべてを支配していく感覚ウー！ あぎやはあッ！

強エ相手とヤンのがレベルアップの近道ってのは、マジみてエだなア

！ えエ三下ア！」

楽しそうに叫ぶ一方通行は先ほどとはまったく違っていた。

佐天涙子はなにもできずにその場に片足をついているのみであり、ナイフを投げたところで跳ね返されるのがオチだ。

どうしようもない。

「感謝をこめてエ、お前を跡形もなくウ……あア？」

空を見上げる一方通行。

彼が風を使って形成していたプラズマはその形を徐々に崩していく。

「なにが起こつてんだ、プラズマが拡散していく？ 俺の計算に狂いはねエ、大体これはどう考えたつて自然の風じゃねエぞ！ 一体なんだこの風はア、風力操作か……風車が逆回転？」

一方通行が見ている方向に、涙子も目を向ける。

確かに風車が逆回転していた。

「待て、聞いたことがあんど。発電モーターつてのは、特殊な電磁波を浴びせると回転するつて……俺の計算式を乱すように計算されたこの風車は……」

何かに気づいた一方通行、そしてそれと同時に涙子もそれに気づいた。

夕方に聞いた言葉にミサカたちは脳波の電波でやりとりをし、記憶を共有できると言い、つまりは見たものを、見ていることをそのまま他の者たちに伝えることが可能ということ。

涙子の視線の先のミサカは無表情だが、なにかを感じた。

「なんだよ、こいつア！」

そして、涙子は立ち上がる。

——生きようとしているミーちゃん、妹達は生きようとする意

思がある！

「一方通行……お前が、その意思を殺そうと言うなら！」

拳を握りしめた。

——まずはその意思を守り抜く！

57, Dear My Friend

学園都市最上位⁵である一方通行^{アクセラレータ}と学園都市最下位⁰の佐天涙子。

膝を着いている佐天涙子は、もう立ち上がるのだけでも、それだけでも限界だった。

なんとか立ち上がって、先ほど一方通行に打ち付けておかしな方向を向いた腕を動かそうとする。

一時とはいえ「龍」の解放により怪我は回復した場所もあるが、それでも彼女の体力は底をついていて、腕の中までは治っていないだろう。

——妹^{シスターズ}達の幻想^{意思}を守る。

そう宣言した涙子。上空のプラズマは妹達がなんとかしている……それにも関わらず自分がただ立っているわけにはいかないと動こうとした瞬間、一方通行が苛立つような表情を見せた。

マズいと思った。

本能的に、一方通行を放置しておいてはマズイと思いながら涙子は立ち上がり、走り出す。

「あはア、まだ動けんのかよオー！」

一方通行が足で地面を蹴り、再び衝撃を起こして涙子を吹き飛ばす。

地面を転がる涙子が両手を使って無様に起き上がろうとするのを見ながら、アクセラレーターが隣のコンテナを軽く叩く。

打ちあがったコンテナが、ミサカ10032号めがけて飛ぶ。

間違いなく直撃コース、さらにミサカは動けるような怪我ではない。

「ミーちゃっ」

——また、助けられない？

そう思った瞬間、そのコンテナへと奔る閃光。

見慣れたその攻撃はコンテナをへこませ、吹き飛ばして涙子の上を超えて転がる。

そしてミサカの前に立ちふさがるのは、佐天涙子の友達だった。

「させないわ!」

ミサカの前に立つのは——御坂美琴。

「み、さか……さん?」

「ごめん、そしてありがとう……佐天さん」

優しいな笑みを浮かべた美琴は、すぐに一方通行を睨みつける。

強風の中、二人の超能力者が睨み合う。

「理解できねエな。そこに転がってる三下も、お前も、なんで人形を庇う?」

鬱陶しそうな表情をしながらも、一方通行の表情に変化が生まれ
た。

「そいつはお前の出来損ないの乱造品だア、そいつをこの世で一番疎ましく思ってるのは、お前だろうがよオ、自分と同じ顔をしているのが壊されるのが気に食わねエのか……だが、そんな理由で命張るわけねエよなア……くひっ!」

一方通行が、笑みを浮かべた。

「自分より先にレベル6が生まれるのが許せねエのか? それとも、こんな実験を作っちゃまったことへの、罪滅ぼしかア?」

「……絶対なんかへの興味も、こんなことで罪を償えるとも考えてるわけでもない……妹だから」

ミサカ10032号の表情が、驚いたような表情を浮かべる。

「この子たちは、私の妹だから! ただそれだけよ……!」

そう言って御坂美琴は強い表情を浮かべる。

「ごめん、今更そんな資格の無いことはわかってる……でも、今だけはこの場に立つことを許してくれる?」

少しだけうつむいて、美琴は笑みを浮かべる。

「は……い」

震えるような声でそう言うミサカ。

「もう、一人も死なせない!」

こんな絶望的な状況で、笑みを浮かべて美琴は言う。

だからこそ、佐天涙子は寝ているわけにはいかなかった。

苛立つような表情を浮かべる一方通行。

「なアにかと思えば、仲よく姉妹ごっこかよ」

「黙っててよッ！」

立ち上がった佐天涙子が大声を上げる。

「んだ、テメエは……もう限界だろオ、フラフラじゃねエか……俺がしつかり逝かせてやるつてのに、お前マゾですかア？」

ふらつく涙子は、なんとか両足で踏ん張って立つ。

立つ以外をすればもうダメかもしれない。

先ほどのダメージは内臓へしつかりとダメージを与えていたよう
で口から血が流れるし、頭からもボタボタと血が流れていた。

ポトツと落ちたのは涙子の眼帯だ。

「……もう誰も、死なせないって言ったでしよ！ 無能力者無視して
超能力者なんかと戦おうとしてんじゃねえぞこの三下あ！」

どこぞの聖人やレベル5に影響されたのか、男っぽい口調で叫ぶ。

一方通行は笑みを浮かべると足を踏みしめて、飛び出す。

「最ツ高にイー！ おもっしれエぞオオオ!!」

涙子の危険に、美琴がせめてなにかできるようと超電磁砲を撃つ
ためにコインを取り出すが、落とす。

そして一方通行が涙子の前へと迫り腕を突き出した瞬間、前に現れ
た影が一方通行の手を「その右手」で殴る。

一方通行の指が逆方向を向き、折れた。

「がアッ!!」

痛みの中、一方通行の視線に映るのは、今現れたはずなのにボロボ
ロである黒髪の少年。

その少年こと上条当麻は、後ろに下がる一方通行の腕をなんとか掴
む。

瞬間、佐天涙子が一步を踏み出した。

「歯ア食いしぼりなよ最強……私の拳は、ちよつとだけ響くから
さあッ！」

佐天涙子が叫び、飛び出すと同時にその顔に拳を打ち込む。

体はボロボロで、体力はもう無い、だがその一撃はこの戦いで放つ
たどんな拳よりも強く、一方通行に響く。

その一撃を、受けた一方通行が吹き飛び、地に倒れる。すでに一方通行の意識は刈り取られていた。

——実験は間違いなく、終了へと追い込まれるだろう。

「ツ……ハアツ、ハアツ」

「大丈夫か佐天さん!？」

上条当麻に支えられる涙子だが、そんな当麻を押しつけて最後の力で歩きます。

もう少し、もう少しだと一步一步を十秒近くかけて踏み出し、ジャケツトの内側からナイフを取り出し、逆手で持つ。

そんな涙子を見て、その涙子の肩を当麻が掴む。

「待て佐天さん! もうそいつは!」

「離して! アイツは、アイツだけは殺す!」

「なっ!」

驚愕しながらも、当麻は涙子を止めようとするが、それでも涙子はどこから来るのか力一杯に当麻を振り払って歩く。

「佐天さん、そんな奴のために貴女が人殺しになること!」

「ある! 御坂さんにはできない、妹達にもさせられない、ならここで、私がツ! 私が殺す! 私が殺してやる! あんな奴は、生きてちゃだめなんだ!」

前に立つ御坂も押しつけて一步一步歩きます涙子。

「ダメよ佐天さん!」

「殺すのは、間違ってるぞ佐天さん!」

「うるさいうるさいうるさいうるさい!! 私の、大事な友達が殺されて、それで黙ってるって、言うんですか!」

涙を流しながら叫ぶ涙子を見て、美琴も当麻も、何も言うことができなかつた。

最初から涙子はここに居て、自分たちが来るまでの間ずっと一方通行と戦っていたのを知ったのは、妹達の一人が来てくれたからだ。

妹達の一人が『佐天涙子が10032号を助けるために一方通行と交戦中』という内容を聞いてから、当麻はすぐに走り出し、美琴はミサカ10032号のネコをそのミサカに預けて当麻より出発は遅い

ながらも、電磁を使って早くここに到着した。

だがそれでも、一方通行を追い込んだのは、彼女だ。

それも、明確な殺意をもって戦っていた。

御坂美琴には、それだけの覚悟は無かった。

だから美琴は力をゆるめてしまう。

だがそれでも、そんな涙子を止められる者が一人だけいた。

「やめて、ください」

涙子の正面から、涙子を抱きしめるようにして涙子を止めるのは、ミサカ。

「もう、良いんです……10031号も、貴女が人を殺すのは、許さないと……ミサカは自分の願いも含めて佐天にお願いします」

瞬間、涙子の全身の力が抜ける。

一瞬で意識が飛んだ涙子は何も考えられないまま、その場に倒れた。

佐天涙子が目を覚ますと、見慣れた天井が視界に映った。

夜だということはわかるし、首から下に麻酔がかけられているのもわかる。

自身のベッドの横にミサカが座っているのも、わかる。

「……ミーちゃん」

「私は、ミサカ10032号ですよ」

「……うん、知ってる」

笑う涙子が気づく。

自身の手はミサカ10032号の手を握っていることに……。

「ちなみに、佐天が寝ている間に『ミーちゃん』と呼んで私の方へ手を伸ばしてきたんですよと、ミサカは懇切丁寧に説明します」

——そんなに、引きずってるんだ私。

いざそう思うと確かにひきずるとも思う。

好きだった。友達として、これから仲良くしていけると思っていた。

なのに、守ろうとしたあの少女は逆に自分のために死へと赴くこととなり、自身は平然と生きている。

「私は、償えたかな？」

「貴女が償うことなど、なにもありません……10031号は、貴女を好意的に思っていました」

「……本当に？」

そう聞く涙子に、ミサカは無表情ながら頷く。

「はい、最後の瞬間まで彼女は、そう思っていました」

「……そっか」

嬉しそうに笑う佐天涙子は、安心したように枕に頭を預ける。

「今度さ、クレープでも買いに行こうよ」

「そのことについてですが、私はまだ貴女と同じ場所に立つことはできません」

涙子の表情が変わった。

目を細めて、再び動こうとする。

「まだ、あんな実験がっ」

「いえ、そうではなくて実験は一方通行の敗北と共に中止に向かうことが決定したようです、とミサカは懇切丁寧に説明します」

「じゃあ、なんで？」

「ミサカが言っているのは、ミサカの体のことです」

ミサカの体に、なにかがあるのだろうかと疑問を浮かべる。

恐れながらもミサカの話の答えを待つ。

「もともとミサカの体はお姉さまの体細胞クローンであり、さまざまな薬品を合成し、成長を促進してつくられました。そしてただでさえ短命のクローン細胞がさらに短命になっているわけです。と言ってわかりますか、とミサカは聞いてみます」

「まあ、なんとなく……」

「だから、一時的に研究施設でお世話になって、個体の調整が必要なのです。急速な成長をするホルモンバランスを整え、細胞核の分裂する速度を調整することによって、ある程度の寿命を回復させることが可能です。とミサカは本日二回目の説明します」

二回目というのも、説明した相手が誰なのかも……なんとなくわかった涙子。

ミサカが立ちあがるのを見て、去るのだと分かった涙子は一言。

「上条さんに、惚れた？」

笑いながら言うのと、ミサカは心なしか顔を赤くして涙子の方を向く。

「ノーコメントです。とミサカは黙秘権を行使します」

「そっか、わかったよ」

ミサカはそのまま歩いて病室のドアを開く。

「またね」

だがそこで立ち止まるミサカ。

「はい、また」

病室のドアが閉じられ、ただ一人残る涙子。

実験が終わったなら自身がこうしてボロボロになったことも、自身の財布が軽くなるのも、悪くないと思える。

ただ一つ『ミーちゃん』のことが心残り、それだけだ。

涙子はここ数日の疲れをとるために、眼を瞑って眠りにつくのだった。

そして次の朝、涙子の病室は思ったより騒がしくなった。

やって来たのは御坂美琴と初春飾利と白井黒子と固法美偉だけ、なものにも関わらず騒がしくなったのは、白井黒子の雷が涙子に直撃したからだろう。

黒子はテレポーターでありエレクトロマスターではない、それでも雷は落ちるのだ。

「佐天さん！ 貴女はどうしてそういつつもいつつも怪我ばかりなさるのですか!?! 心配するこちらの身にもなってくださいる!!?!」

「白井さん、病院！ 病院ですからー！」

涙子の肩を掴んで大激怒する黒子をなだめようとする涙子だが、そんな言うことを聞く白井黒子ではない。

「貴女はいつつも私や初春にまで黙って無茶して怪我ばかりで、拳句に聞くなとおっしゃりやがりますのよ!？」

「ご、ごめん!・勘弁してくださいよ!・!」

勘弁しないであろう黒子にそういう涙子だった。

だが、白井黒子は突然大人しくなると、涙子の肩を掴んだままうつむく。

「……本当に、佐天さんまで、心配させないでくださいまし」

震える声でそういう黒子に、申し訳なさそうな気持ちを隠せずに苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべる涙子は、飾利と美偉を見る。

親友である初春飾利は、涙子を心配していたのか泣きそうな表情で頷き、美偉も安心したような表情を浮かべた。御坂美琴はと言うと、色々と申し訳なさそうな表情をする。

涙子は黒子の頭を軽く撫でた。

「ごめんなさい」

「わかれば、良いんですの!」

ふんつ、とそっぽを向く黒子。

「初春もごめんね?」

「本当ですよ、怪我したって聞いてダツシユで来たんですから!」

「ごめん」

苦笑して固法美偉の方を向く。

「佐天さん、私だって心配してるのよ?」

「すみません、それと……」

一息吸う涙子。

「ありがとう、みんな」

そういうと、涙子の前にいる四人がそろって笑顔を浮かべた。

ミサカもそうだったけれど、自分を心配してくれる友達はたくさんいるんだということを自覚すると、涙子はなんだか胸が熱くなる。

もしかしたらここに彼女がいたかもしれないと思うと、心が強く締め付けられていく。

「佐天さん?」

初春飾利の言葉に、涙子がそちらを向く。

なんかおかしいな感覚がすると思いながらそちらを見ると、飾利は涙子へと近づいて抱きしめる。

なにが、どうなっているのかわからなかったが、四人が自分を心配しているというのは、良くわかった。

「無理に強くなろうとしなくていいんです、無理しなくていいんです……佐天さんは強いつてみんなわかってます？」

——初春、なに言ってるの？

「だから、泣いて良いんです……佐天さんが泣いて少しでも楽になるなら、それでいいんです」

涙子はそう言われてようやく、自身が泣いていることに気づいた。

自身が救えなかった命、そして救えた命。どうしても少し早く気付けなかったと、なんであの時に力を持っていなかったのかと、胸を締め付けられる思いがどんどん増していき、嗚咽が漏れる。

涙がボタボタと落ちていくのを理解して、涙子は初春の背中に手を回してぎゅつと力を入れ——泣く。

「あたしはっ……あたしはあッ……あつ、たし、はっ……うああ——っ!!」

大声で泣く。

ただ、後悔だけじゃない。だがそれでも、後悔がないわけじゃなく、その後悔は大きなものだ。

佐天涙子の苦しくてどうしようもない気持ちを、完全に消すことはできない。

けれど、涙子の「友達」はそんな気持ちを少しだけ、軽くしてくれた。

だから、佐天涙子は泣きながらも思う。

——ミーちゃん、私の友達でいてくれて、ありがとう。

自分のことを愛してくれたであろうその友人を、佐天涙子は忘れることはない。

彼女はそう、断言できるだろう。

第六章 新たな一歩の裏表

58, 踏み出す一歩と戻る日常

佐天涙子が一通り泣いた後、全員帰って行った。

揃ってニヤニヤしていたのが涙子としても苦い思い出になりそうなのだが、この際仕方あるまい。

あまり他人の前で泣くと言うのは慣れない。いや慣れても嫌だが、佐天涙子は静かに溜息をついた。

なにはともあれ、実験が中止になったのだから結果オーライと行けば良いが……。

なんて思っていると、病室の扉が開く。

「佐天！」

血相かいた顔で病室に入ってきたのはすっかりお馴染みのメンバーになってしまった姉御だった。

本名不詳……いや教えても涙子は『姉御さん』としか呼ばないので意味が無い。

もう先方も諦めている節があるのだろう。

「どうしました？」

「どうしたって、心配してきたんだらうがっ！」

「……ありがとうございます」

「……べ、別にダチのためなら普通だしっ」

顔を赤くしながら言う彼女を見て涙子は嬉しそうに頬を緩める。

友達というものの大事さが、今なら前よりも強く深くわかつている涙子。

少し感傷に浸ろうなどと思っていると再び扉が開き、現れるのは……。

「御坂さん……いや、御坂さん？ いや……御坂さん？」

「いや、三回も言わないでいいから」

「本物だ」

「偽物って逆になんだよ」

とりあえず、姉御と呼ばれる彼女からの言葉に頷く涙子。
まず質問すべきはなぜ御坂美琴が二度目の訪問に来たかだ。

「いや、なんていうか……どうしたんですか？」

「まあそのちよつとした相談にね」

「相談？」

現れた御坂美琴の言葉に首をかしげる涙子と、ついでに姉御
美琴が気恥ずかしそうにしながらも頷く。

ちなみに涙子の交友関係として「姉御のようなタイプ」がいるこ
とは知っているので今更だ。

「クツキーとか、作りたいんだけど……佐天さんに教えて欲しくて」

「……寮で白井さんとか」

「いやいやいや、人目につきたくないっていうかあ……」

その言葉で一人、思い出す人間がいた。

彼女の知り合いで彼女がクツキーを渡しそうな相手。

ちなみに一方通行アクセラレータと戦っていたせいでロボロボな涙子の隣の病室
で、同じくレベル5と戦い、いや一方的にレベル5の攻撃を食らいボ
ロボロの青年がいるが……。

「……なるほど」

ニヤリと笑みを浮かべて言う涙子に、御坂美琴は真っ赤になる。

大体察しがついている涙子の顔を見て、彼女も察したと言うことだ
ろう。

「べべべ、別にアイツに上げるためじゃー！」

「上条さん？」

「ななな、なんでアイツの名前が出てくるのよ！」

——可愛いなあ。びりびりしてて怖いけど。

「とりあえず、クツキーを渡したいから手伝えと……この私に？」

「あ……」

「そう、見ての通り右腕は使うなって言われてるんですけどお」

「……ど、どうしよ？」

「姉御さんそう言えば喫茶店でバイトしてましたよね」

そこで白羽の矢が立ったのが彼女、つまりは姉御と呼ばれる少女

だった。

放置されていた彼女は突現、名前が、いや名前じゃないが呼ばれて驚きつつも、首をかしげる。

美琴も首をかしげた。

「……クッキー作るの手伝ってあげてください」

「私がレベル5に物教えるとか冗談だろ？」

「私が教えようとしてるんですけど」

無言の姉御と涙子と美琴。

そんな中、美琴が涙子と姉御の二人を交互に見ているが、最初に折れるのは姉御だった。

頭をぼさぼさと搔いてから、気恥ずかしそうに、頷く。

「良いけど、さ」

その返答を聞くなり嬉しそうな顔をする美琴。

涙子も満足そうにうなずいて左手を伸ばし、荷物の中から自宅の鍵を取り出した。

そしてそれをそつと、姉御の方へと向ける。

「へ？」

「私の家の鍵です。必要なものは全部あるんで……見つけられなかったらメールください」

「つ、つつつ、つまりお前は、あ、あ、あたしに鍵つ、鍵をつ！」

「はい、姉御さんなら」

ニコツと音を付けたくなるような笑みを言う涙子。

そんな涙子を見て顔を真っ赤にして姉御は鍵を受け取る。

震えながら姉御は踵を返しゆっくり歩く。一步一步踏みしめるように歩きつつ、扉に手をかけた。

「ま、また来る！」

「待ってます……まあすぐに退院したいんですけど」

「そ、それじゃあな！ 行くぞ超電磁砲!!」

勢いよく走っていく姉御を見つつ手を振る涙子。

今更走るなどか言っても無駄だろう。

残された涙子と美琴。

「佐天さんって……」

「ん？」

「大概、罪な女よね」

「……ん？」

美琴は部屋を出ていく。

まるでわけがわからない。などと思っていると入れ違いになるように扉が開いて入ってくる。

誰かと思えばシスターであり、怒ったような心配したような表情を浮かべるシスター。

顔をしかめる涙子。

眼を逸らすも、良い言い訳も思いつくわけがない。

「るいこおおお！」

「噛んだら顎行くからね！」

「むうううう！」

「その……ご、ごめん？」

「凄い心配したんだよ！　っていかとーまより怪我が酷いんだよ！」

「まあそこはね」

それは一方通行と戦って無事である方がむしろ怖いというものである。

左足は疲労骨折もしてるし、内蔵も傷ついてあばらなども逝っており、挙句右腕は一回逆方向を向いた。

一度、超短時間とはいえ「龍」を解放したことによりわずかに回復はしたが重傷なことに変わりない。

かの医者から言わせれば「成長期にしてはあまりに頑丈」とのことだ。

「……ごめんねインデックス」

「とーまとるいこの傍にいたら……」

「うん……」

「お腹が減るんだよ」

「もう帰りなよ」

「酷いんだよ!」

次の瞬間、インデックスが涙子へと飛びかかり、その頭を容赦なく顎で万力する。

もれなく、病院に佐天涙子の叫び声が響くことになるがまあそれも“日常”であると言えるだろう。

これからも続いていく“彼女のいない日常”だ。

◆◆◆◆◆

翌日の夕方、もう退院するという連絡を仲間内にした。

ジャツジメント風紀委員の仕事がある初春飾に変わり御坂美琴がやってきた。

気まずそうな美琴、両手を後ろに隠していることが気になるが、それよりも聞き込みだ。

ニヤニヤしている涙子に、顔をしかめる美琴。

「どうです、渡せました?」

「えっ、あーそのこと、なんだけど」

「……?」

「その、渡せなかった……ていうか、まあお礼にと思ってたんだけど!」

「ああもう面倒だなあ、私が渡してきてあげましようか!」

「や、ベベベ、別に問題無いのよそもそも渡せなくたって!」

というより、涙子自身渡して来ようと言ったものの美琴が行かなくては意味が無い。

彼女が上条当麻という人物にどういう感情を抱いているかはいまいちわからないが、おそらく遅かれ早かれそれは恋心に変わる気がする。

だからこそ思っただが、顔を赤くしている。

それは昨日と同じなのだが雰囲気明らかに違う。

「この前に会いました?」

「まあ、ここに来る前にばったり」

「あの人もう退院したんですか!」

「佐天さんが言えることでもない気が……」
「もつとも。」

「むう……ていうか昨日作ったんですよね？」

「き、昨日あのあと渡すつてのも、ね？」

「ヘタレめ」

「なっ！ ……そ、そう言えば黒子もそろそろ来ると思うわよ！」

「なんでワントンポ遅れて……ああ、御坂さんのDV」

「そんなんじゃないから」

「まあお姉さまのドメステイックヴァイオレンスなら」

「ぬわっ!？」

いつものまにやら来ていた白井黒子に驚く美琴。

少し前の会話は聞いていないだろうと、涙子としても安心した。

御坂美琴が手作りクッキーを上条当麻に渡そうと知った暁には

……怖い、色々と……。

「その、佐天さん……退院祝い。これあげる」

「……もらっておきます。ありがたく」

ある意味ではお古的な感じだが、もらっておくことにした。

今後の課題になるだろう。

「ハアッ!？」

「どうしたんですか白井さん」

「お姉さまよもや……佐天さんんんんツツツ!!？」

「あ、違いますから」

「違うから黒子、佐天さんに迷惑かけんじゃないわよ」

「冷たい！」

とりあえず歩き出す。

私は松葉杖を突きながら歩く涙子に合わせて横を歩く美琴と黒子。

飾利が居ないのが唯一、足りない感じだがそこに関しては仕方がない。
い。

学園都市の『表』の治安を守る大事な仕事だ。

「にしても、松葉杖って面倒ー」

「肩、お貸ししましょうか？」

「大丈夫大丈夫、優しいなあ白井さんは」

「別に前みたいにな、黒子」でもよろしくってよ？」

「自然と、白井さん」って言っちゃうんですよねえ」

「え、なにになにいつの間二人で仲良くなってるの？」

その言葉に、黒子が『しまった！』という表情をした。

涙子は笑いながら経緯を説明しようとするもそれにストップをかけるのが白井黒子。

しかも勘違いした方向に……。

「決してお姉さまから浮気したとかそういうのではありませんわ！

お姉さま一筋！ 黒子嘘つかない！」

「佐天さん、黒子もらってあげてくれない？」

「いや、佐天さんはなんでも受け入れないんですよ。残酷ですから」

「え、私押し付け合われてますの？ え？」



その後、常盤台の二人と別れて涙子はアパートへと戻ってきた。

そう言えば鍵を受け取ってないなと思っていたが、ドアノブを引けばドアは開いている。

さらにそのまま家に入って居間につくとそこは――。

「あれ、姉御さん以外に……姫神さん」

「おかえり佐天！ 晩飯作っておいたぞ！」

「おかえり佐天。私も手伝った」

「……う、うん」

戦場だった。

なんか空気が淀んでるな。程度の認識である佐天涙子だが二人にとっては戦争。

来れなかった一人こと「重福省帆」は今頃どうしているのだろうか……。

それはともかく、戦場の雰囲気は涙子が帰ってきたことによりわずかながら緩和を見せる。

「姉御さんと姫神さんが料理作ってくれるなんて……っというか誰かに料理作ってもらえるのが嬉しいんですけど、ありがとうございます！」

笑みを浮かべた涙子に、二人が頷く。

「ま、佐天が元気になったならなんでも……じゃなくて！ ほい、鍵」

「あ、はい……ありがとうございます」

「気にすんな……」

「涙子。怪我したって聞いたけど元気そうで……良かった」

「姫神さんにもご心配かけたみたいで、まあまだボロボロですけど」

確かにいまだにボロボロだが、日常生活の支障も重大なものでもない。

今は用意してもらった食事を左手で食べる。

そして食事中に、涙子がふと思いついたものを取り出してテーブルに置く。

「ん、それ」

「ああ、御坂さんからもらったクッキーです。食後に食べようかなって」

「超電磁砲^{レールガン}んんっ！ お前もかあああっ！」

「ライバル。出現……！」

「え、なんの話？」

この勘違いによりちよつとした事件が起こるがそれはまた別の話である。

それでもなんんだか、涙子は笑う。状況がわからないがわからないなりに……楽しかった。

こうして笑える涙子。こうして笑っている涙子。

それを見て二人も安心したように笑みを浮かべる。

きつと「ここに居たはずの友達」も、その笑顔を見れば、きつと……「笑う」だろう。

59、勉強会

退院した日の夜。

彼女、佐天涙子の元に届いたメール。

それを頭を押さえつつ読むとOKの返事をあっさりと御坂美琴と白井黒子に返す。

返ってきた文面から嬉しさの伝わるメールに苦笑しつつも、少しばかり動かしにくい体を動かした。

準備らしい準備はそれほどする必要はないだろう。

翌日の勉強会には支障はないだろう。

とりあえず土鍋を持っている友達がいればはずだから連絡してもらおうと涙子は携帯端末にて連絡を入れる。

本気で黒子の持っているようなインカム型の端末を買おうかと思っただけだ。

「見に行ってみるかな……」



翌日——つまりは勉強会（仮）が行われる日、佐天涙子は両足で歩く。

回復力が異常と言われるが上条当麻ならそのぐらいやってみせるだろう。

そして佐天涙子もまた同じく……。

友達から受け取った土鍋の入った紙袋を片手に歩く涙子。

土鍋まで求めているわけではないだろうけれど、どうせやるならしっかりとやりたい

普通に歩いて数分だろうけれど、いつもより歩みが遅いのは仕方がないことだ。

さんさんと降り注ぐ日光、額の汗を拭くと涙子は近くのファミレスへと入った。

エアコンで調整された涼しい空気を浴びながら店に入ると、すでに

他の客が案内されようとしている。

少し混雑しているなど思いつつ案内されようとしている客と眼が合い、固まった。

目の前の二人組も固まっている。

——まさか、ここを戦場にはしないよね……？

すると、金髪の少女と長身の女性の二人の内、金髪の少女が涙子を指差して大声を上げる。

「な、なあんでえっ!？」

「うっさいわねフレンダ！」

「いやまあ、気持ちはわかるけど……」

「お知り合いでしたらご一緒にしますか？」

「いや、私たちは、いやいやその……ご迷惑に」

「しばらく待つことになりましたが……」

「あ……」

涙子が困ったようにチラツと女性の方を見る。

金髪ことフレンダが『ムムム』と威嚇してくるが後頭部を搔きつつ麦野を見た。

すると溜息をついて、フレンダの頭を掴む。

「ふえ？」

「行くわよフレンダ……あとお、佐天？」

——うわー。名前覚えられてるよお。

「あはは、ありがとうございますう」

とりあえず、涙子は二人について行って席へと座る。

なにがなんだか、フレンダには睨まれ女性の方にはただ見られていた。

睨まれているように見えるが元々目つきが悪いだけだ。

「えっと」

ピツと音が鳴って店員がやってくる。

「ドリンクバー三つ」

「かしこまりました。ドリンクバーあちらでお取りください」

そのまま店員が去っていくと、涙子は話すタイミングを失ったこと

に気づく。

どこから話しをしようかと悩んでいるとさらに彼女が口を開いた。
フレンダの方を見つつかだ。

「フレンダ、あたしはいつもの……佐天は？」

「え、それじゃ紅茶」

「え、私!？」

「良いから行って来いフレンダ」

「はい！」

フレンダが飲み物を汲みに行くのを見て、涙子は苦笑する。

とりあえず次こそ何かを言おうと思っていると先に話を始めるのは彼女の方だった。

眼を細めて、ひじをテーブルに置いて顎をつく。

「あたしは麦野……麦野沈利、第四位だ」

「え、はい……第四位……ええー、第四位かあ、御坂さん無しだったらマジで死んでた」

「あんま驚かないんだな」

「まあ」

「お・ま・た・せ・ええー!」

そう言つて大声で飲み物三つを持ってきたフレンダ。

笑う涙子と、苛立つような表情の彼女。

「うっせえんだよフレンダ!」

「ひうつ! お、おこらないでよ麦野おっ」

「まあまあ、ありがとうフレンダ」

「うん!」

涙子のお礼に嬉しそうに頷くフレンダ。

一体どういう環境でいたら飲み物持ってきてお礼を言ったらこんな嬉しそうな笑顔で頷くようになるのだろうか。

悲しい思いになりながらも、涙子は頷く。優しくしてあげようと、頷く。

「つてなに呼び捨てに……調子乗ってるってわけよ!」

「違うって……えつと、どこから」

「まったく、レベル5となんか知らない能力者相手に私良くやったよね麦野！」

プリンプリン怒りながら腕を組みつつ涙子の隣に座るフレンド。

不機嫌そうな「麦野」が怖いのだろう。

「はあ？ こいつレベル0だぞ」

「あ、やっぱ知ってます？」

「……えええええつ!? レベル0!? け、結局どこの組織のもん!？」

腕を構えるフレンドだが涙子は笑う。

「いえ、普通の中学生」

「嘘つけえ！」

「いや嘘じゃなさそうだけど……てか話が進まねえんだよ黙ってるフレンドッ！」

「ひううっ！」

「もお、可哀想じゃないですかそんなにガン飛ばさないであげてくださいー！」

「テメエも甘やかすんじゃないやねえよっ……たく」

舌打ちをする麦野、フレンドの方を見ると涙子に感涙していた。

本当にかわいそうな人だと同情しつつ、持ってきてもらった紅茶を飲む。

とりあえず言うことを、思い出せない。

「なんの話してましたっけ？」

「ああ、第四位って知って驚かないんだなって話だ」

「ていうかその怪我なんなわけ？ 麦野相手にして生きてた奴の怪我

じゃないと思うわけよ」

「あはは、先一昨日に第一位とドンパチやったもんで」

そんな言葉に、唾然とする麦野とフレンドの二人。

怒ったような麦野の表情しか見ていない涙子的には新鮮なものが見れたなと思う。

だが、フレンドが先に言葉を発する。

「なんで生きてんの!？」

「いや、ほぼ死んでるようなもんですよ怪我を考えれば……それに私一人の力とは言えませんし」

「いやそれでもよー!」

「くっあつはははははっ……おもしれえじゃねえか佐天っ!」

「麦野さんのお気に召したようであればなにによりですけど」

「楽しそうに笑う麦野、一応声を押さえているのは店に迷惑がかからないようにだろう。」

一方のフレンドは笑うわけでもなく啞然として涙子を指差していた。

むかつくのでその手を払う。

「あーおもしれえ、あれか、絶対能力進化計画………だろ?」

「はい、それを止めるために………まあ結果的にはオーライですけど」

「最高じゃねえか、お前………あー気に入った」

「麦野が!」

「お前はあたしをなんだと思ってるんだ。ケータイ出せケータイ」

「良いですけどなんで?」

出した携帯、麦野は涙子の隣のフレンドをどけてそこに座ると番号を登録。

電話をかけてすぐに切ると、満足そうに頷く。

「なにが楽しいのかと思いつつ、涙子はボロボロの自分の身体を見る。」

「なーんかおもしろいことあったら呼ばせてもらうにやーん」

「……いやいやいや」

「いやって拒否権はねえんだぞ涙子お?」

「待つて待つて、フレンドがいるじゃないですか! 友達大事!」

「佐天っ!」

なぜか感動しているフレンド。

「フレンドだけじゃおもしろくないこともあるしなあ」

「麦野お」

「そーいやフルネーム教えてなかったか………第四位原子崩しの麦野沈利、登録しとけよ?」

「……まあ、交友関係が増えるのは良いんですけど」

「交友って感じじゃないわけよ」

「それは確かに」

「新しいおもちゃゲットつてなあ」

「楽しそうなので変なことは言わない。」

「触らぬ神に祟りなし。とりあえずフレндаと目を合わせるがなんだかさつきと違う。」

「視線の種類が、違う……。」

「——いや、仲間じゃないから。ああでも……。」

「フレндаも交換しよっか」

「結局、佐天もこの私の魅力にメロメロになったってわけよ！」

「じゃあいいや」

「うそうそするするしよー！」

◇◇◇◇◇

それから30分もしないうちに、涙子はファミレスを出て自宅へと向かうことにした。

初春飾利が先に着いてしまったとの連絡も来ている。

戻ると、飾利が扉の前で待っており、片手を上げると困ったように溜息をついた。

「佐天さん、怪我してるのに出歩かないでくださいよ！」

「悪いね初春、鍋パーティーと言われれば土鍋欲しいじゃん？」

「土鍋!?!」

「つてことで、ここにある」

「本格的ですね……まあ良いですけど、お持ちしますよ」

「玄関前だよ?。」

「まあそうですね」

とりあえず土鍋を渡して、涙子は鍵を開く。

家に入ると暑いと思いつつ中に入り、エアコンをつける。

冷気に息をつきつつ、床に座り込む涙子。

「あー、疲れたー！」

「佐天さんは……でもま、私が準備しますか！」

「ありがと初春ーさすが私の嫁ー」

「嫁は佐天さんですよ」

「いや、そこはツツコミ入れてよ」

とりあえず、今やるべきことは一通り終わったと思いたいところであるが……。

やはり飾利だけにやらせるわけにもいかないともう一度立ち上がる。

台所に行くのと棚の上にあるカセットコンロを出した。

「あれ、佐天さん身長伸びました？」

「……そうかな？」

「そうですよ」

あまり実感はないが、そうなのだろう。

幻想郷で数ヶ月過ごしたりもあるのだ、それも当然、成長が止まるわけでもない。

ここ最近の密度を考えると、幻想郷に暫く行っていないように感じる。

久しぶりに主であるレミリア。

先輩である咲夜や美鈴。

友人であるフランや先生であるパチュリー。

そして天使の小悪魔も気になる。

紫も帰って永夜異変を終えた後どうしているか気になるし、あちらに行きたい気持ちもあった。

「んー」

「悩み事ですか？」

「まあ、ちよつとね」

「佐天さんは全然相談してくれませんかからね……正直、御坂さんもですけど抱え込んじゃうのは佐天さんも一緒じゃないですか」

「あはは、痛いところつくなあ……いやね、家にいつ帰ろうかなーって」
嘘は言っていない。

OK、セーフ、問題無い。

「……ああ、そういうことですか、いつでも良いんじゃないですか？」
「えー初春が寂しがつてくれなくてかなしーぞーお姉さんはー！」

そう言つて抱き着くと、初春飾利が顔を赤くして涙子の顔を押し、
対して本気で抱き着いているわけでもないものであつさりと押し返
される涙子。

だが本気でいつ行けるのかわからないと不安になる。この先ずつ
といけないかもしれないし、行けても数年後だったら？

——ああもう、変なこと考えるのはやめやめ！

「そういえば春上さんは？」

「あ、よ、用事があるようでしたら来らるって」

「そっか……じゃあとりあえず、準備準備！」

それからしばらくして、美琴と黒子がやってきた。

なぜだか黒子がボロボロだがそこを察することぐらいはできる。
むしろあんまり聞きたくない。

真つ黒の黒子と美琴を居間に案内すると、土鍋を出す。

「じゃーんー！」

「おぉー土鍋だあー！」

眼を輝かせて喜ぶ美琴。

「友達から借りて来ました！ だしの用意もばっちりですよ！」
そう言つて涙子が昆布を出す。

「こんな真夏に鍋パーティーするのって私たちぐらいよね！」

「お姉さま、鍋パーティーではなくてあくまでも勉強会ですわよ？」

「あ、そっかそっか」

呆れたように言う黒子に、美琴は苦笑する。

二人は「勉強会」で来ているのだから当然、そう言うことになつ
た。

勉強なんてするわけがないが、そもそも勉強する必要が無いぐらい優
秀な面々だ。

初春飾利が先ほど涙子と洗い直した器を持ってくる。

「でも暑い時に暑いものを食べるのは体に良いですからね」

「みなさんどんな具材を持ってきたんですの？」

その言葉と共に動き出す美琴。

後ろのバックを漁って買って来たものを出す……が。

「えっと良くわかんなかったんだけど……お肉売り場の人がおすすめだっというからとりあえず買って来た」

とかなんとか言って取り出したのは木箱。

涙子は少しだけ眼がくすむ、圧倒的な戦力差。絶対的壁、うらやましい。凄まじくうらやましい。

これがレベルの差かとちよつと落ち込みそうになるも、その木箱を見て涎が出てくる。

「は、箱の中から牛肉がつっ！」

「すっごい霜降りですう！」

「え、おかしかった？」

「いやあ、初めて見たんで……はっ」

とりあえず食べるのは後で、すぐに食べれるのだ。

そう思いながら、とりあえず落ち着く。

止まれ涎。

「初春はなに持ってきた？」

「わ、私は野菜を一杯買ってきました。夏野菜を中心に」

「ヘルシーな感じだね」

涙子は場所提供、一応だし提供。

美琴も野菜を買ってきていなかったので嬉しそうだ。

うんうんと満足しつつ、涙子が黒子の方を見れば、謎のガッツポーズをしていた。

——こわい。

「乙女は食事にも美を追い求めるもの！ この分では私の用意した食材が脚光を浴びてしまいそうですの！」

「じゃあ出さないで良いです」

「佐天さん冷たあっ!?」

「あと贖罪してください、色々」

「色々ってなんですかのお!？」

とりあえずいじったので満足する涙子。

ちよつと楽しくなってきた。

「で、なんですか?」

「ぐぬぬ……ま、まあ良いですわ。オッホン!」

咳払いをして、黒子が話を始める。

「最初は迷いましたわ、ペットショップで丸々太ったねずみを手にした時はどうなることかと……」

ドン引きする面々、なにを買って来たのかと心配になっていく。

まあ場合によっては入れなければ良いのだが、とりあえず答えを待つ。

そしてその高そうな紙袋を持ち上げた。

「でもおっ! その直後ひらめいたんですの! これぞお姉さまにふさわしい食材と!」

「あんた何買って来たのよ!」

「白井さん、闇鍋じゃないんですよ!」

「その食材とはアツ! ていやっ!」ダンツ

「……すっぽん?」

黒子以外の三人の声が一つになった。

おかれたパックにはすっぽんの文字、そして甲羅と内蔵らしきものとその他もろもろ。

まあ確かに美容には間違いなく良いのだろう。

ちなみに幻想郷でも食べたことはあった。

「プルップルのカラーゲンはお姉さまの瑞々しい肌をより美しく磨き上げるに違いありませんの!」

まあ調理の仕方もわかる。というよりそれをそのまま鍋に入れることができる。

さばくことまで見てやった涙子にとってはどうということはない。のだが……まだ黒子はなにかをやっている。

「そしてこれッ!」

「な、なに?」

用意されたのはグラスに入った赤い液体。

「すっぽんの生き血ですよ！」

「いっ!?!」

「りんごジュースで割って飲みやすくなっておりますのよ♪ さグ
イツと一息に！」

相変わらず二人の空間を作っている。

涙子はこんぶを鍋に入れて飾利へと話かけることにした。

「私飲んだことあるけどおいしいですよ。私の場合もジュースで割つ
て」

「へえ、こんな身近に食べたことある人いてびっくりです」

「これを飲めば精力ギンギン！ いえ、元気一杯間違いないですわ♪」

声にならない声を上げて顔をしかめる美琴。

涙子の肩を初春飾利が掴む。

「どうだったんですか？」

「ま、まあそんなことも、あつた気があ……」

「ぬっはあっ！」

顔を赤くしながらそう言う涙子を見て、倒れる初春飾利。

少し不気味に思いながらも、涙子は初春飾利の方から眼を逸らし
た。

ツインテールをによるよる動かしつつ、黒子が美琴へと近づいて
いく。

「体がカッカして眠れなくなる可能性が無きにしも非ずですがっ、そ
んな時は私が添い寝および、あい」

瞬間、涙子が黒子の頭を掴みグイッと回す。

ゴキツと音がして黒子が倒れる。

見事にすっぽんの血の入ったグラスは真っ直ぐテーブルに置かれ
た。

「さて、どんどん入れましょう♪」

「佐天さん最近白井さん相手に容赦ないですね」

「素敵だわ佐天さん！」

そして、数十分後。

沢山食べつつもまだまだ食材はある。間違いなく太るルートだが動けばどうということはない。

そうしているとインターホンが鳴る。

春上衿衣が遅れて参戦。

「送れてごめんなのー」

「待ってたよー食べながらー!」

「先生にちよつと相談があったの」

「食材沢山とつちやいますよ!」

飾利がどんどんと食材を器に入れていく。

「んー……春上さんは何か買ってきてくれた?」

「うどんを買って来たの」

「おお、しめにぴったりだね!」

概ね全員の食材はバラバラになり、丁度良いといった具合だ。

なにはともあれ『勉強会』は大成功と言えるだろう。

怪我もこれで早く治ってくれば言うことなんて何もない。

「さあ、どンドン食材入れちゃいましょー! 食べるぞおー!」

問題はやはり……体重およびウエストである。

60、別れと出会い

——寮。

「学園都市研究発表会い？」

8月26日の夜、上条当麻は自宅にて聞き覚えのない名前を口にす
る。

正面でご飯を食べている居インデックス候はともかく、四角いテーブルの横の
面にいる佐天涙子が口にした言葉を復唱する形となった。

そもそも、なぜ彼女がここにいるのかだがそれは前の妹たちシスターズの件で
の礼も兼ねて、上条当麻が久しぶりに佐天涙子にご飯をご馳走すると
言ったからだ。

だが礼をされる覚えもないので涙子は材料を持って逆に御飯を
作ってみた。

まあ当麻が用意した食材と涙子の用意した食材を合わせて作らな
いと話ながら食事なんてできたものではないのだが……。

ともかく、話の最中に涙子から出た言葉がそれだ。

「知らなかったでしょう？ 略して学会」

「上条さんが通ってるような平々凡々な学校では聞かない名前ですよ
佐天さん」

「私もまったくで」

肩をすくめる涙子、満腹になったシスターは放置しておく。

「頭が良い人たちの発表会、毎年やってるらしいですよ」

「うっそだあ」

「いやいやマジで」

「……本当につ!？」

「私とまったく同じ反応しないでください」

食事を続ける涙子。上条当麻は思い出そうとするが、思い出せるわ
けがないだろう。

まるで縁がないしそもそも華やかでもなんでもないと聞いた。

涙子自身も今日の枝先料理へのお見舞いでも無ければそれを知る
ことは無かつただろう。

「で、その警備が大変って話でして」

初春飾利と一緒に暮らしている春上衿衣の引越しの話などがあつたが当麻にする話でもない。

故にそう言うのと、上条当麻が頷く。

だが妙に、眼が泳いでいた。ここに来てから、時たまそうなる。

それを理解していた佐天涙子はご飯を食べ終えて茶碗と箸を置くと正座したままずっと当麻の眼を見た。

それに気づいて眼を合わせるも、やはり逸らす。

「なにか言うことが？」

「うっ」

「当麻がね、明日から外に連れてつてくれるの！」

「……駆け落ち？」

「なんでそうなる!？」

涙子の言葉に当麻が乗り出してまで突っ込む。

笑う涙子、だが理由が思い当たらない。

実家に帰りでもするのだろうか？

「理由は？」

「なんか上層部の方がゴタゴタして出て行った方が良いつて小萌先生が」

「……理由はなんですかね、あの計画のせいだったらどちらかという
と危ないのはこの佐天さんの方なんだけど」

「さあ？」

考えても答えはでない。

ならば仕方ないと、とりあえず頷く涙子。

インデックスは楽しみという様子だ。別に二人が出かけることに
意義を唱えるつもりもない。

とりあえず咳払いをして、当麻の顔をしっかりと見た。

「……変なことするのは仕方ないかもしれませんが」

「しねえよ！ 佐天さんは俺をケダモノかなんかだと思ってるんです
かあっ!!？」

「ちよつと」

「思ってるのかよ!？」

「ま、ここで一緒に暮らしててなんもないんだから平気でしようけど」
「じゃあ今のやりとりはなんの必要があったんですかね佐天さん？」

「茶目っ気ですよ、女の子なんだから多少はね？」

笑って言う涙子をジト目でにらむ当麻。

涙子が食器を持って立ち上がると、インデックスの方を見る。

ギロつと音がしそうな視線に、インデックスがビクツと跳ねた。

「食べたらしっかり流しにもっていく」

「でも当麻がやってく」

「インデックスく？」

トーンの低い声に、インデックスは顔をしかめる。こうなってはやらない選択肢はないし、あつたとしても選んだらろくなことになるらしい。

当麻ほど女性に対して優しくない涙子のことだ、ゲンコツぐらいはするだろう。

それでもインデックスは涙子のことを好いているのは確かなのだが……例えるなら良い姉と言ったところだろうか。

「うっ、わかつたんだよ。るいこは怖いんだよ」

「しっかりそういうところしてもらわないと、居候してるんだから多少はね？」

「うー」

「食後のデザートがあるんだけどなあ」

「皿洗いもやるよー」

「佐天さんさすがっす」

まるで舎弟のようにそう言う当麻を見て、涙子はため息。

それに上条当麻は驚きつつ『なにかおかしいなと言った？』という表情。

涙子は額に手を当てつつ、口を開く。

「上条さんは甘いんですよ。厳しすぎてもダメですけどしっかり怒るところは怒ることー」

「一応怒ってはいるんだけど」

「でもインデックスに押し負けてるんだからダメですって」

「勉強になるよ母さん」

「よろしい父さん！」

「イチャつくならよそでやってほしいんだよ」

皿洗いをしながらインデックスはつぶやいた。

とりあえず翌日行くらしいが見送りはできないので『行つてらっしゃい』とは言った涙子。

また事件に巻き込まれる気もするが、しないと信じつつ心の中で敬礼はしておいた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

翌日。

佐天涙子はいつもの仲間たち、つまりは初春飾利、白井黒子、御坂美琴と共にいる。

そして目の前には柵川中学の制服を着た枝先絆理と、春上衿衣。恥ずかしそうにしている絆理だがむしろ高得点。

「どう、かな？」

「凄く似合ってます！」

「良いよ！ 佐天さんセクハラしたくなる！」

「気を付けて枝先さん、この子はタラシよ」

「御坂さんも遠慮なくなってきましたね」

「お姉さまをこないともたやすく、佐天さん、恐ろしい子……！」

なぜだか目の前でコントを見せられて困惑する絆理だが衿衣は苦笑するのみ。

とりあえず御坂たちにとっての認識では佐天涙子は女タラシであることに間違いはない。

中学生から大人まで幅広い。

「あ、でも佐天さんもちよくちよくお見舞い来てくれてありがとう」

「早いですの佐天さん！」

「手当たりしだいね」

「凄い言われよう、凄い言われよう」

「大事なので二回言いましたね」

黒子と美琴の強烈な誤解を解こうとするもどうしようもないことを察する。

とりあえず咳払い、涙子は当初の話に戻そうとした。

ハツとした飾利。

「そういえば二人がこの前病院に残ってたのはこういうことだったんですね」

「うん、みんなに早く見て欲しくて」

「ほらお姉さま」

黒子が耳打ちすると、美琴が一步前に出て後ろに隠していた手を前に出す。

その手には花束。

小さいながらも、綺麗なその花束をそつと受け渡す。

「枝先さん、退院おめでとう」

続いて三人も『おめでとう』と声をかける。

当初は涙子がやる予定でもあったのだが、なにを心配したのか黒子が美琴にしたのだ。

曰く『これ以上は死人が出る戦争になりますわ』とのこと。

「じゃ、さつそく行きますか!」

「え、どこに?」

「退院のお祝いなの!」

「ケーキの美味しいお店を予約してあるんです!」

そんな話をしていると、黒子に電話がかかってくる。

いつもの小さい端末で会話をしている黒子の方に聞き耳を立てれば相手が固法美偉だとわかった。

ともなれば要件は一つだろう。

「え、信号トラブル?」

そう言いつつ、黒子が美琴の方を見ればどれだけ安心と信頼のエレクトロマスターなのかわかる。

すかさず美琴が『なにもやってないわよ』と言うも、涙子は少し心

配。

まあともかく、ジャッジメント風紀委員の出番であるのは確かなのだろう。横にいた初春飾利が腕章をつける。

「了解しましたの」

そう言つて通話を切つた黒子。

美琴が驚いたような表情を浮かべる。

「えっ、初春さんも行っちゃうの？」

「そりやまあ」

当然ということだろう。

涙子はとりあえず黒子の方を見るが、首を横に振る。

さすがに信号トラブルともなれば涙子では的確な指示などできないし、慣れてない。

だが黒子も涙子の意図を汲み取っているし、気持ちと同じだ。

「せっかくの枝先さんの退院ですし、ここは私だけでも」

「なに言ってるんですか私だって風紀委員です！先に初めてください、終わつたらすぐに駆けつけます」

そう、飾利は衿衣の眼を見て言う。

「行つてらっしゃいな」

「お仕事頑張つて！」

その言葉に返事を返すと飾利の手を黒子を取り、そのままテレポーターで消える。

黒子の能力を知らなかった絆理が驚くが、テレポーター自体数が少ないのだし見ることができるともかなり貴重だと言えるだろう。

そりや驚きもする。

涙子と美琴が顔を合わせて笑みを浮かべて頷いた。

「それじゃ、とりあえず行こっか」

少しして、喫茶店のソファ席にて面々がいた。

涙子と美琴、テーブルを挟んで向かいには絆理と衿衣。

そしてテーブルの上にはメッセージの乗ったケーキ。

「まあ予定はちよつと狂つちやつたけど改めて……」

「退院おめでとう！」

三人で言うのと、さつそく涙子がケーキを切り分ける。

六等分したケーキを一人一つずつ分けた。

絆理がまず一口。

「ん〜おいひ〜」

「でしょ！ 初春がお祝いやるなら絶対ここだつて予約からケーキの手配まで全部やっちゃったんだよ！」

「本当に初春さんって凄いよね。退院前もね、引っ越しの手配や編入の手続きを手伝ってくれたり……ね？」

「うん！」

絆理に衿衣が頷く。

知らないところでそんなことがあったなんてと、美琴と涙子は顔を合わせて苦笑した。

時期は考えなくても妹達シスターズのことでごたごたしていた時だろう。力になれなくて申し訳なくも、思う。

涙子は頷いた。

「へえ、そうだったんだ」

「やっぱり、風紀委員になる人って凄いなだねえ」

「そんなに喜んでもらえたら初春さんも選んだ甲斐があったわね」

「ホントホント！ 初春も花が高いよこりや！」

衿衣は微笑しつつ、一言そえて席を立つ。

お手洗いだらうと思いつつ、涙子も美琴の方を見てからお手洗いへと向かう。

個室に入ると携帯端末を開いた。当麻からのメールが入っており内容を見れば……。

「……」

無事、学園都市から出れたとのことだ。インデックスも一緒に……。

だが彼が上層部がゴタゴタして学園都市を追い出されたというのはいまいち納得もいかない。

今回の実験のことならば送られるべきは自分だったはずだ。妙に

無理矢理感が強い気もしていた。

だが、これ以上は突っ込んでも仕方ない。

とりあえず今はそんなことより、枝先絆理の退院というめでたいことを祝う時だ。

個室から出ると、手を洗う衿衣の後姿が見えた。

ポケットからハンカチと共に出てくる鍵。

「新しい部屋の鍵？」

そう聞くと、一瞬だけ驚いたような表情をするも、頷く。

「ずいぶん張り切ってたんだね、初春」

「あたしの時も、そうだったの」

「春上さんが引越してきた時……ああ、そうそう、あの時もすっごい張り切ってたっけ」

笑いながら言う涙子だが、衿衣が歩き出すのを待つ。

言いたいこともあるだろう。自分に吐き出せることなら吐き出してほしい。

だが真に彼女がそれを言うのも伝えるのも、初春飾利だ。

「一人で不安だったけど、初春さんがいてくれて……だから、今度は私が頑張る番なの」

衿衣が涙子の方を向く。

「初春さんがしてくれたいみたいに、あたしが絆理ちゃんにしてあげるの」

「……そっか」

そう言ってから涙子が笑う。

「でも初春みたいに空回りしないでね？」

「もお」

「あはは……初春、早く来ないかなあ？」

「きつと、今も一生懸命お仕事してるの」

「似合わないヘルメットかぶって、交通整理とかやってるのかな……こんな時ぐらい手を抜けばいいのに」

「それができないのが初春さんなの」

「……だね」



すっかり、夕方だった。

枝先絆理はすでに病院によるとのことと帰ってしまった。

帰る時も、枝先絆理は風紀委員の仕事だからしようがないと言っていた。その言葉に嘘偽りはみられなかったが、だが……。

佐天涙子としては……。

「遅い」

「遅すぎよね、電話してみる?」

「そうですね……」

チラツと衿衣の方を見れば、外を見ている。

「しよう……しちやいましょう!」

「お待ちせえつ」

端末にて飾利に連絡をしようとしたら、電話がつながる前に彼女の声が聞こえた。

入口とは別方向から聞こえた声に驚きつつも、涙子は黒子のテレポートであると悟る。

急いでいたのはその声からわかった。

「しましたあ」

「ですの」

「今の可愛いぞ白井さん」

「かわっ!」

赤くなる黒子がおもしろいのでそのまま放置。

嬉しそうな美琴とそれ以上に嬉しそうな衿衣。

苦笑する初春と顔を赤くしている黒子。

「もう、初春遅いぞ、枝先さん病院寄るからって先に帰っちゃったよ?」

「え……ええっ! そうなんですか!? すず、すいません……」

「大丈夫なの、ケーキ美味しかったって」

すかさず衿衣がフオローを入れる。

生真面目な初春は申し訳なさそうな表情をしながらも、ハツとする
と手に持った箱を差し出す。

お土産か何かだろうか……。

「あのこれ、枝先さんと食べてください」

「え？」

箱を開けると……。

「たいやきっ？」

美琴と涙子の声が重なった。

黒子がぼこすか叩いてくるが涙子は適当に受け流す。

すぐに止まったが、黒子はまだ涙子をジト目でにらむ。

苦笑しつつ、涙子は初春の方を見る。『ケーキの後にたいやきかい

初春や』とは言わないのは何かしらの意味があると思ったから。

黒子も肩をすくめて、美琴もフオーしようとする。

だが初春は間違っていないという表情で、そして、衿衣が口を開く。

「あの時のたいやきなの……これ、私が凄く不安だった時、初春さんが
買って来てくれたの……」

——なるほど、思い出。

涙子は心の中で納得する。大事なものだ。忘れえぬために必要な
もの、思い出……。

佐天涙子にとっても……現代の最新の粋を結集した学園都市と忘
れられた者達の郷の狭間で揺れる佐天涙子にとってもそれがいかに
必要で大事なものかわかる。

だからこそ、黙った。

衿衣の流れる涙を拭うのは、自分ではない。

「とっってもおいしいの……」

「ええっ、ちよ、ちよっと春上さんっ！」

「ダメなのっ、今日は泣かないつもりだったのに……！」

「あ、あの……」

「私っ」

初春が止まる。

「頑張るからっ、初春さんみたい……絆理ちゃんのために頑張るか

らっ」

肩を震わせて言う衿衣。

涙子は静かに笑みを浮かべて見守る。隣の黒子と御坂も、同じように自分たちが口をはさむ場面ではないと察して、今は黙った。

衿衣に合わせるように、飾利は腰を落とす。

「大丈夫ですよ、春上さんなら……きつと、大丈夫です……」

「初春さんっ……」

顔を上げる衿衣。直後、飾利へと抱き着いて大声を上げて泣きだす。

さすがに我慢の限界なのだろう、初春の声も先ほどから掠れている。

「は、春上さんっそんな……大袈裟ですよっ……」

そう言いつつも、飾利も衿衣に抱き着いて嗚咽を上げた。

仕方がない。そういうこともあるだろう。

会おうと思えばいつでも会えるが、離れ離れになることには変わらない。

今は、泣かせてあげるべきだろう。

涙子と黒子と美琴は、笑みを浮かべて頷いた。

その後、衿衣とも別れて四人が道を歩く。

彼女には彼女の役割もある。

別れる時は二人共笑顔だったし、良いことだ。

「私、春上さんの力になれたでしょうか？」

「……なあに言ってるの、なれたに決まってんじゃん！」

初春の背中を叩く。

最後にどこぞのアンチスキルの顔が出てきたのは気のせいだと涙子は心の中で頷いた。

背中を押さえる初春。力の加減をミスったかと思う涙子だが……。

「痛ったあ、佐天さん脳みそおっぱいと筋肉になってるんですからやめてくださいよお」

「うおっ、効くぜ初春っ」

「初春さんは、枝先さんの力にもなれたと思う」
そんな言葉に、嬉しそうに笑う初春。

そしてそんな風に言った美琴の隣の白井黒子が頬を赤らめている。
察しの良い涙子でも、長年の付き合いの美琴と初春でも理解でき
た。

「そう、そしてお姉さまは、黒子のっ……力につ！」

美琴を掴もうとして避けられそのまま地面に転倒。

放置する三人。すぐに起き上がるだろう。

「さあ、帰ろう帰ろう！」

「あ、そうだ！ この先に近道あるんですよー！」

涙子の言葉に、三人が怪訝な表情を浮かべた。

公園内を歩く四人。

不安そうにしている美琴をはじめとした二人。

そもそも涙子の近道と言う言葉に不穏な雰囲気を感じてしまう。

「ここを抜けたらすぐ大通りですよ」

「にしてもほんと良く知ってるわね」

「まあ昔とった杵柄と言いますか」

「昔って佐天さん学園都市来て数ヶ月でしょう？」

「そうだった」

間に幻想郷を挟んだりしているので忘れがちだった。

というより密度が濃い。濃すぎるのだ。

まあ考えていても埒があかない。とりあえずと思いつつ階段を降
りようとすると美琴がなにかを見つける。

「あれって……」

「ん？」

四人が同じ方向を見る。

大きな花壇があり、その中央に異色。

黒と金。

涙子は呟く。

「女の子……？」

61、フエブリ

久しぶりにトラブルの予感をヒシヒシと感じていた。

日にちにすれば「あの事件」からそれほど経っていないが、ゆつくりできる日が間にあったということは確かで、今までのスケジュールからすればゆつくりできた方だろう。

ともかく、眠っていた少女をベンチに移動させて体を揺らしてすぐに起こすと、服などに汚れもないことを確認して「下劣」なことが起きたと可能性は低いことに安堵する。

そして、涙子はしっかりと少女を見てゴクリを息を飲んだ。

黒と白のゴシックロリータ。流れるような金髪。棒付きのキャンディを口にくわえている。

「……あざと」

「佐天さん！ わかりますわ！」

「おいこら」

同意する黒子。美琴がジト目で二人を見るが初春も頷いた。

そして美琴を除いた三人が少女を見て深く頷く。

「萌え萌えですね」

「いやほんと、いたずらされなくて良かったですね」

「いやあ、最近は歪んだ性癖をおもちの方も少なくはないですから」

「白井さん、ツツコミ待ちですか？」

三人だけで話がどんどん進んでいく……ダメな方向に。

美琴の額からバリバリと電気が出始めたのに気付いて涙子と初春がすばやく真面目な表情に戻ると、その二人を見てから黒子もハツとして少女の方をキリツとした表情で見た。

涙子はそつとしゃがんで

「私はね、涙子って言うの。あなたは？ お名前言える？」

ニコっと笑顔を向けて言う。

すると少女はくわえていた飴の棒を手で掴んで口から離す。

「フエブリ」

「お〜」

三人が歓声を上げる。

「フェブリちゃんか〜。じゃあフェブリちゃん、なにか知ってることあったら教えてくれないかな？」

「みさかみこと？」

「へ？」

全員が素っ頓狂な声を上げる。

さすがの涙子もこれは予想外というか、その名前のせいで余計にきな臭くなってきたことを感じた。

よくわからない少女が唯一知っていたことが「超能力者⁵」で目の前に現在いる御坂美琴だということ、あきらかに偶然とは言い切れないだろう。

「あたし？」

「……じ、実は知り合いだったりしません？」

「なんで願望なんですか？」

トラブルがゴメンだから、とは口が裂けても言えない。

「心当たりはないけど……」

「親戚とか従妹とか？」

「腹違いの妹がいらしたりは？」

「ないわよまったく」

黒子の言葉に苦笑する美琴の心情を察して涙子は苦笑を浮かべた。

「いやもう一杯一杯で」

「ちよ、佐天さん！」

「おっと」

ついつい口を滑らした涙子だが気にしている者もない。

ホツとする美琴と涙子。そしてハツとする黒子。

「ハッ！ ままままさかお姉さま自身の子供!?! なんということですよの私というものがありませんが」

そこで美琴のチョップが炸裂する。わりと力強めで。

そのチョップを受けた黒子が痛そうにしているが、見ないふりをしておく。

「あたしが御坂美琴よ。どうして私のこと知ってるのかな？」

涙子を見習ってしやがみ込んで目線を合わせて、聞く……のだが。フェブリはベンチを降りると美琴から離れて涙子へとかけよりその後ろに移動。

隠れるように美琴を見る。

「むう……」

挙句、睨まれる。

美琴の後ろで笑う黒子、初春が納得したようにうなづく。

「やっぱり子供にはわかっちゃうんでしょかね。誰が安全で誰が危険かって」

「ええ……!」

シヨックを受けた顔をしてから、美琴は笑う。

フフフと笑いつつ、ポケットから何かを取り出す。

「私にはこれがある!」

「指人形?」

「ジューズの景品ですわ。当たるのに何本飲むのに付き合わされたことか……」

「律儀に飲むんだから偉いですね二人共」

そんなことを言っていると、美琴は指人形の中にヘアピンを仕込む。

なるほど、と思っていると美琴は手の平をフェブリの顔の前に出して、その手の平に乗せたゲコ太を動かす。正確には中に仕込んだヘアピンを動かす。

起き上がったゲコ太がくるくると回転しつつ、起き上がった。

フェブリは目を輝かせてそれを見つめる

「あく御坂さん、それやるとですね……」

なんとなく先の展開を理解するが……。

「やあ、僕ゲコ太!」

「おお」

まるで声優のように声を変える美琴に感嘆の声を上げる涙子。

「僕、教えて欲しいことがあるん」

瞬間、バツと音がしそうな速度で手が出た。無論、フェブリのだ。

そして美琴が啞然としている間にフェブリはそのままゲコ太を持って離れていく。

「……あああ!!? 封入確率24分の1! 私のピンクゲコ太がああ!!」

「もう、指人形の一つや二つではしたなく叫ばないでくださいませ」

溜息をつきつつ、黒子は瞬間移動テレポートを使用。

その場から消えて一瞬でフェブリを連れて戻ってくる。

不思議そうにするフェブリの前で美琴は笑みを浮かべた。

「こーらフェブリちゃん、勝手に持つて行っちゃダメで」

「またも美琴が言葉を言い終えるより先に動き出す。」

そして向かう場所は……。

「あらら」

「すっかり安全地帯扱いですわね」

初春と黒子が笑う。

フェブリは涙子のズボンを掴みつつ足の裏に隠れた。

苦笑する涙子だが、美琴は愕然とするのみ。彼女を哀れに思いつ

つ、涙子はフェブリの方を見る。

「ねえ、そのゲコ太のお人形は『美琴お姉さん』の」

「美琴って呼んだ!? ねえ今!」

そしてまた、涙子の台詞も途中で間に挟まれる。

しかも件の本人である御坂美琴に、だ。

確かに名前呼びなんてしたことはないけれど状況を見る、とジト目

で見ると美琴は気まずそうに視線を逸らした。

「お姉さままで誑しこむ気ですの!?! ねえ佐天さん!?!」

「おい白井、黙ってて」

「えええ」

涙子からの扱いの差に愕然とする黒子。

ともかく、涙子はフェブリの方を見て指人形を返してやれと言おう

とした……。

そう、したのだが。

「うう〜」

瞳をウルウルさせながら、涙子を見上げるフェブリ。
あまりの眩しさに顔をしかめつつ、美琴の方を見る。

「み、御坂さん……」

「ううっ……」

落ち込む美琴、そして黒子はため息をつく。

その後、美偉に『迷子・行方不明者』についての情報を黒子が求めて連絡をつけた。

確認後に折り返しの電話をしてみると言つて十数分ほどしてから電話がかかってきた時には、すでにフェブリは涙子の背中で寝息を立てている。

そして美偉からの連絡でも『その情報も無ければアンチスキルも時間的に担当者とは連絡がつかない』という情報もたらされたわけだが……。

状況が状況だと、涙子は頷く。

「じゃあ今日は私が預かりますよ。ほらもう寝ちやつてるし……弟たちの世話で子供の扱いは慣れてますから」

「弟たち、ですか？ 佐天さんって二人姉弟じゃ」

「あ、ああ、ほら弟の友達とかさ、ね！」

とてもじゃないが寺子屋の教師をやっている子供の扱いは慣れてますとは言えない。

まあフェブリほどの子供ではないのだが、やんちゃ坊主の相手をしてきたから問題もないだろうとの考えだ。

携帯端末から美偉の声が聞こえる。

『それじゃあ申し訳ないんだけど、一晩だけお願いできる？』

「お任せあれ！」

と言つてから、一つ思いつく。

「あ、でもやつぱうち狭いし一人だと大変かもしれないなあ……つてことで初春、協力してくんない？」

「あ、はい！」

笑みを浮かべる初春。

なぜ初春を誘ったから察して、美琴と黒子は優しげに笑みを浮かべた。

そして同時に、黒子は思う。

「これで八雲さんがまだいたならもれなく修羅場でしたわね！」

「え、ああ……確かに」

二人は苦笑して肩をすくめた。

そして初春と涙子の二人が部屋へと入る。

一瞬だけ寂しそうな笑みを浮かべる初春を見つつ、涙子は苦笑を浮かべた。

初春がハツとしてから空いている二段ベッドの下段に布団をしくと涙子はフェブリを腰掛けさせる。その過程で目を覚ましたのか、フェブリがゆっくりと目を開いた。

目が合うと、涙子は笑みを浮かべる。

「おはよう」

「……ペロペロ」

「佐天さんを見て開幕ペロペロ!? この幼女!？」

「初春?」

「ハツ、す、すみません!」

「まったく……てかペロペロってこれ?」

そつと飴を出すと、フェブリが両手でその飴を持って口に入れた。すぐさま笑顔になるフェブリを見て苦笑する涙子。

そうしていると、誰かのお腹が鳴る音がした。

「……ご飯食べる?」

「私じゃありませんよ佐天さん!」

「わかってるって、ほらフェブリ、御飯にしよっか」

「ん?」

良くわかっているフェブリを見て首をかしげる涙子と初春。

そしてその直後、もう一度お腹が鳴る音がして、それは間違いなくフェブリであるとわかると、二人して笑みを浮かべた。

とりあえずフェブリをベッドからおろして「美琴お姉さんからも

らった”ゲコ太人形で遊ばせておくと、涙子と初春が頷く。

「さて、やりますか!」

「佐天さんのお手並み拝見ですね!」

「ほう、本業にそれを言うとは」

「本業?」

「なんでもない」

口を滑らせたと思いつつ苦笑する涙子。

フェブリが飽きるまでに食事を作ろうと、涙子は頷く。

幸い食材もたんまりと買ってきたしなにを作るでも問題はないだろう。

「さて、達人技をご覧にいれましょうか!」

「おぉー!」

だが少しばかり気になることがないわけでもない。

やはり未だに引つかかる部分が多い。

美琴の名前を知っていたことではない。美琴の名前しか知らないことだ。

つい最近、絶対能力進化計画があつたし”御坂美琴”に関連したことは機敏にもなる。

学園都市の闇。それに呑まれ食われることの恐怖を、思い出す。

それは木山春生のことだつたりテレスティーナだつたり前回の一方通行だつたり……。

涙子は少しばかりそれらを思い出しつつ、素早く調理を済ましていく。

——さて、どうしたもんかな。

62、感染拡大

涙子と初春飾利の二人が料理を済ませます。

プレートに盛りられた料理は、フェブリも食べやすいように小さくまとめている。

ハンバーグも一口サイズに済まして、パスタなども入れた。

そして三人で卓を囲むと、涙子と初春の二人は同時に口を開く。

「いただきますー！」

二人でそう宣言するも、フェブリは不思議そうにしていた。

初めてのものを目にするような顔で匂いをかぐ。

「どうしたの？ ハンバーグだよ？」

「子供はハンバーグ好きだって言ったの佐天さんですよ？」

「いや、子供は好きでしょ」

チルノもハンバーグが好きだった。

他にもレミリアやらも……そこでふと思う。

「500歳は子供だった？」

「なに言ってるんですか？」

「あ、ううん、ほらフェブリ」

そう言っただけで自分のフォークでハンバーグを一つとるとフェブリの前へと差し出す。

「あーん」

「あーん、むぐっ……んんん!!？」

ハンバーグを食べたフェブリが目キラキラさせて喜ぶ。

そんなフェブリを見え笑みを浮かべる涙子。

おいしいか聞くと深く頷いて自分でもフォークを持って食事を始める。楽しそうに食事をするフェブリを見て、涙子と初春は顔を合わせて頷くと手を出して二人でハイタッチ。

その後、涙子はフェブリと初春と共に風呂へと入る。

湯船に浸かる初春が、フェブリが美琴から「もらった」指人形で遊ぶ姿をほほえましそうに見ているが、ふとシャワーを浴びる涙子の方

を見て目を細めた。

どこか憂いを帯びた瞳で見つめつつ、そつと手を伸ばして涙子の背中に触れる。

「ひゃあつ!? な、なにすんの初春!」

「あ」

自分でもなにかしようと思つて触つたわけではないので、初春は苦笑を浮かべた。

フェブリは素つ頓狂な声を上げる涙子の方を見るが、少しばかり赤い顔で涙子は笑顔を浮かべてフェブリの頭をなでる。くすぐつたそうにするフェブリはすぐにゲコ太の人形で遊び始めるが、涙子はジト目で初春を見るのみ。

それにもやはり苦笑で返す初春。公衆の面前でスカートをめくられることに比べれば大したことは無い……今回に限つては下手すれば本気で「狙いに来てる」と思われても文句は言えないが……。

「なんていうか、良く見ればありますね……傷」

「まあ、良く見なきゃわからないだけマシだつて」

笑つて言う涙子に初春は言葉をかけることをためらつた。

なにをしているのか、聞けない。聞きたい気持ちはある。だが彼女はそれでも言うことはないだろう。だからこそ自分を頼つて、自分に打ち明けてくれる。そんな時を待つのみだ。

奇しくも、親友である白井黒子が御坂美琴に抱いている感情に似たような感情を覚えて、同じ立場にいた。

慕う故に、親しいが故に、相手が自分を想つて何も言わないのだと気づく。

「ていうか学園都市の子供ならフェブリも能力者?」

「どうでしょう、無能力者だつて決して少なくないでしょうし……子供は演算やら自分パーソナルリアリテイだけの現実の形成も中学生や高校生ほど上手くないと聞きますよ?」

そう言つてフェブリの方を見るが、フェブリは首をかしげる。

「そつかそつか」

「だから佐天さんもまだまだ望みはありますよ?」

「だから別に良いって、あつたら良いなくぐらいだから」

「それはまた……良いのか悪いのかわからない心境の変化ですね」

苦笑しながら言う初春に、涙子も苦笑を返す。それに関しては同意なのだが、実際が変わってしまったのも事実だったからだ。

前は「自分もレベル5になりたい」という気持ちもあつたのだがここ一月ほどでずいぶんその考えも改めさせられた。

自分の憧れで友である「超電磁砲」御坂美琴。

一方、自分の友の仇である「学園都市最強」一方通行。

かたや自分の遺伝子を勝手に使われクローンを量産され、その命を弄ばれたレベル5。

かたや自分が最強になるためにクローンを殺し続ける実験を提案され、実行したレベル5。

佐天の中ではその公式しかできていないからこそ、そういう考えに至る。

いや、その公式以外が出てきたとしても……「最強」の真実に至つたとしても現在の佐天涙子は「力が欲しい」と思つたところで「超能力者」になりたいなど微塵にも思わないだろう。

風呂を出てから、涙子はフェブリと共にベッドで横になっていた。

絵本を読んでいたのだが、現在の涙子はウトウトとしておりハツとしてフェブリを見た時には既に眠っている。ゲコ太とアメを握って眠っているフェブリにほほえましそうに笑みを浮かべると、そつとアメを手を取った。

そうしていると、座っていた初春が軽く笑みを浮かべる。

「少し変わった子ですよね」

「うん、でも可愛いね」

そう言つて軽く頭を撫でる涙子を見て、初春が頷く。

「佐天さんって良いお嫁さんになりそうですね」

「え、そうかなあ、褒めても何も出ないぞ〜?」

「むしろ私が嫁に欲しいです」

「え〜」

そう言つて笑う二人。

お茶を汲んでくると言つて立ち上がった初春、そんな後ろ姿を見て微笑んだ涙子が手に持つていたアメを見る。フェブリが起きて開口一番にアメが欲しいと言つた。

それほどおいしいアメなのかと思いつつ、一舐め。

「……っ!!?」

——そして、翌日。

ジャツジメント
風紀委員第一七七支部。

固法美偉が佐天から差し出されたアメを受け取り、一口舐める。無論そのアメはフェブリが、涙子も舐めた例のアメである。

故に、佐天涙子にはわかつている。その味が……。

「うっ……確かにこれは」

「ねっ！… 凄いでしょ!」

一舐めしただけでそれなのだ。後ろでダウンしている黒子と美琴はどうしたのか考えるまでもない。

嬉しそうに笑う涙子を、後ろで睨む初春。

「酷いんですよ佐天さんったら！ 昨日、私にはすごくおいしいっていつて舐めさせたんですから!」

「あはは、ごめんごめん！ まあまあ、初春だけじゃなくて来る時に会った重福さんにもやったじゃん」

「あの人、佐天さんの舐めた後だって聞いてくわえこんだじゃないですか！ マズイって言つても結果は同じでしたよ!」

「まさかあ、おいしいって言つたからだってばあ」

「私は佐天さんが心配です!」

そう言つて怒る初春に小首をかしげて笑う涙子。

固法は苦笑しつつ、肩をすくめて黒子と美琴を見る。固法に見られた二人も呆れたように笑うのみだ。

涙子という者がどういう人物か良く知っているからのことだが……。

固法はそつとフェブリに笑みを向ける。

「おいしい?」

「うん!」

ニコっと笑みを浮かべるフェブリの隣に移動してくる美琴。

「良かったね〜フェブリちゃん!」

「……」

無言のまま、フェブリは涙子の背後へと隠れる。

苦笑する涙子、美琴はシヨックを隠せないという様子で肩を落とした。

その後、フェブリが遊び疲れて眠るとタオルケットをかけて面々はPCの前に立つ。

初春が操作するPCにはフェブリの顔写真と、行方不明者についての情報が並べられていた。

それらのリストに一切、フェブリの情報はない。

「やはりデータはありませんね……こちらからも失踪人や迷子についての情報を上げられるデータベースに上げてますけどまったくです」

「となるとこの子は、チャイルドエラー置き去りなのかもしれませんわね」

「……そっか」

自分はまだ良い。一人でも生きていくだけの力もある。

だがフェブリのような一般常識がしつかりと身に付く前の子供がこの学園都市へと放置されたと思うと、ゾツとした。あんな場所で眠っていたフェブリ……自分たちが見つけなければどうなっていたかわからない。

顔をしかめつつそんなことを考えていると、扉が開く。

「こんにちはなのー!」

「春上さん!」

「引越したか色々と片付いたから挨拶にきたの!」

やってきた春上へとこれまでの話をする初春。

嬉しそうに話をする彼女を見て、涙子もまた嬉しそうに笑みを浮かべた。

すべて話を終えると、春上は少しばかり眉をひそめてフェブリの方へと向く。

「あの子が、置き去りなの……?」
チャイルドエラー

「色々手を尽くしてるんですけど、身元が分からなくて……」

「今は施設の人たちが来るのを待つしかない感じなの」

春上の疑問に初春と固法が答える。

そんな返答を聞いて、やはり表情を暗くする春上。

それも仕方がないだろう。

「良い施設に行けると良いの……」

「施設の良し悪しってあるの?」

「色々大変だって……」

「ほら御坂さん、枝先さんのとことか」

「え……あ、ああ、そうだった」

涙子の言葉に、顔をしかめる美琴。

彼女たちがあんなことになったのは、すなわち施設のせいだった。

シャワーは一週間に一度、拳句モルモットにされて意識不明、子供

の時の大事な数年をふいにされるといふ悲劇に見舞われた。

故に、涙子は目を細める。そこでふと、思い浮かぶ。

「なんか、知り合いにいないんですか?」

「え?」

「ほら、良い施設を知ってる人とか」

「ううくん」

涙子の言葉に全員が難しい顔をした。

ランキングとかがあれば便利なのだろうと思いつつも、無いことは

わかる涙子は静かに息を吐く。

ともなれば、聞き込みやらだろう。

(金髪幼女に優しい無能力武装集団の大男とかいないのかな……いや、ないか)

「そういえば寮監が……そういう施設の話をしていたような……」

「マジですか!?!」

涙子の言葉に、寮監のことを口にした黒子が頷く。

「まあ確認はしてみますの」

「お願いします!」

「お願いします!」

ということでも黒子が電話を掛ける。
すぐに寮監に伝わったようで、話がとんとん拍子で伝わって行っ
た。

涙子は静かに話の結果を待っていると度電話が切れたのか黒子が
涙子の方を見る。

「先方に確認中ですよ」

「そっかあ……」

「佐天さん、そんな心配なさらなくても良いと思いますわよ……寮監
は信用できる方ですよ」

「そう、ですよ……」

信用していないわけではないが、心配で仕方ない。

すぐに連絡が帰ってきたのか、黒子は次にスピーカーをONにして
会話を開始する。

それで寮監の声も涙子たちに届く。

『先方に確認してみたところ問題は無いそうだが……最低でも手続き
などで五日はかかるそうだ』

「そのぐらいなら私が面倒見ます!」

「私もサポートします!」

涙子の言葉に、初春も続く。

それに続いて美琴と黒子も顔を見合わせて頷いた。

「私も!」

「わたくしも佐天さんのサポートぐらいいたしますわ」

『そうか、なら先方にもそう伝えておく』

会話が終わって、黒子が通話を切る。

それと同時にタイミングよくフェブリが目を覚まして体を起こし
た。

それに気づいて、涙子が近づく。

(なんとなくフランに似てるなあ……いや、あそこまで色々すごい
はないけどさ)

「ねえフェブリ」

「ん?」

「しばらく私たちと一緒にいるの、良い？」

「涙子と？」

「そう、あとみんなもね！」

そんな言葉に、眠気眼のままフェブリはゆっくりと顔を動かす。

「ういはーも？」

「はい！」

初春。

「くろこも？」

「ええ！」

黒子。

「……みいも？」

「もちろんよフェブリちゃん！」

美琴
一つ飛ばして固法。

嬉しそうに笑うフェブリをよそに、沈む美琴を横に苦笑する黒子と固法の二人。

初春がふと、思い出す。

「五日かあ、それなら学級会の日までは一緒に居られますね！」

「あら、そういえばそろそろ会場警備の打ち合わせの時間じゃありません？」

そんな言葉を聞いて、涙子はフェブリの方を見る。

首をかしげるフェブリの前に、涙子は会場の場所を目に留まる場所に置いてあった資料に視線を移す。

「ん、せっかくだし一緒に行こうかな」

「さ、佐天さんがいくなら私も！」

バツと手を上げる美琴。おそらくフェブリと仲良くなりたいたいのだろうとわかって、涙子はくすつと笑みを浮かべた。

涙子としては、フェブリを電車に乗せてあげたいなということで行くことにしたのだが、美琴とフェブリが仲良くなるに越したことはないだろう。

「結局みんなで行くことになりそうですね」

そう言う初春に、涙子は笑みを浮かべて頷く。

ということで一七七支部から全員が出る。

春上のみ別の用事があるということ別れることとなった。

固法が笑みを浮かべる。

「それじゃあ、またいつでも遊びに来てね」

「はい！ 今度は絆理ちゃんも一緒に！」

「二人で一緒に遊びに来てね！」

ニツと笑う涙子に、頬を僅かに赤らめた春上が嬉しそうに笑う。

「うんっ！」

満面の笑みを浮かべる春上。

涙子の隣の黒子が軽く肘で涙子をつく。

驚きながらもチラツとそつちを見る。

「佐天さん、ちよつとおいたがすぎますの」

「え、なんのことですか」

「この人は本当に……」

溜息をつく黒子。

だが、そちらを見ることも無く春上はフェブリの方を向いた。

「さよならなの、フェブリちゃん」

「さよならえりい！」

春上まで名前で呼ばれたことで、美琴は露骨にシヨックを表情に出す。

それを知ってか知らずか、春上は笑顔を向けたまま去っていく。

道を曲がって見えなくなると、涙子の片手をフェブリが掴む。

「ん、行こうかフェブリ」

「うんっ♪」

「じゃあ反対側は私が繋ぐわね」

「キャンディ持てなくなっちゃうんで無理ですよ」

そんな涙子の言葉に、固法がハツとして顔をしかめた。

そもそも両側から手をつなぐなんて宇宙人を捕獲した時か親子ぐらいだ。

顔をしかめた固法を見て『そんなにフェブリと手を繋ぎたかったの

か』と苦笑する涙子。

「代わりましょうか？」

「そういうことじゃないのよ、佐天さん……」

「え？」

なにを言いたいのかいまいちわからない涙子が首をかしげる。

そんな涙子を見て、黒子は深い深いため息をついた。

「本当に佐天さんはポンコツですよ」

「ひびく！」